

2017 年度

年次報告書

アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

2019 (平成 31) 年 3 月

まえがき

2017(平成 29)年度は、国立大学法人にとって第 3 期中期目標期間の 2 年目にあたり、アジア・アフリカ言語文化研究所も、共同利用・共同研究拠点(以下、拠点と略)制度の下、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」としての第 2 期 2 年目に突入した。

本研究所は、拠点としての目的を「今日、人類の 7 割を超える人びと(世界総人口約 66 億人のうち 48 億人以上)が暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語文化のあり方を研究し、中長期的には、21 世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与する一方、この地域の多様な言語文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求すること」と位置づけ、目的達成のために、以下の 3 つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進している。

- 1) 臨地研究(フィールドサイエンス)に基づく国際的研究拠点としての共同研究プロジェクトの実施
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂及び研究成果の発信
- 3) 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

文部科学省による第 2 期の拠点認定は、拠点第 1 期 6 年の活動を総括する期末評価を通じて行われたが、本研究所は 2013 年度に実施された中間評価に続いて、2015 年度に行われた期末評価でも、総合評価 A(拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される)を得ることができた。しかしながら、期末評価には同時に、「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討するとともに、研究所全体としての特徴を明確にすることが期待される」との助言が付されていたばかりか、中間評価結果のフォローアップ状況についても、「具体的な改善措置が取られている点は一定の評価が出来るが、応募件数が大きく伸びているとは言い難く、引き続き、更なる質の向上に努めることが望まれる」という厳しい評価が下された。これを受けて当研究所は、2018 年度当初に実施される拠点第 2 期の中間評価に向け、国際共同研究の成果増大、共同利用・共同研究課題の応募数拡大、研究成果のさらなる質の向上に取り組む一方、研究所全体としての特徴を明確にすべく、2016 年度当初から所内プロジェクト研究部と基幹研究の編成を一新し、新たに全所プロジェクトを発足させるに至っている。とはいえ、拠点の様々な活動の中で最も重要な活動が、公募に基づいて審査・採択される共同利用・共同研究課題であることは言を俟たない。2017 年度に本研究所は、新規採択分と継続分を合わせて、共同利用・共同研究課題 28 件を実施した。

一方、本研究所では、共同利用・共同研究拠点の中間評価と同じ 2013 年度に、拠点機能以外の研究所活動全体について所外の有識者による外部評価を実施し、その結果を踏まえて、研究所の共同利用性の拡大や、共同研究の質の向上に取り組んでいる。

このように本研究所は、所外・学外の研究者コミュニティによる助言や指摘を真摯に受け止め、研究活動の改善に不断に取り組んでいるものの、全国共同利用研究所時代と比べると、拠点制度の導入によって競争的性格が強まったことは明らかなうえ、2018 年度に実施される拠点第 2 期の中間評価では、これまでの絶対評価に代わって、S=20%、A=50%、B・C=30%を目安にした相対評価が導入されることになっており、共同利用・共同研究拠点間の競争は否応なく激化せざるを得ない。加えて、国立大学や拠点を取り巻く環境は、拠点の第 1 期中間評価や研究所の外部評価が進行する前後から急激な変化を見せてきた。文部科学

省は、第 3 期中期目標期間中もイノベーションを生み出す大学改革やグローバル人材の育成を重視して、大学内の資源配分の見直しや組織再編、年俸制や混合給与の導入といった人事給与システムの改革を求めており、国立大学法人東京外国語大学に附置されている本研究所も、大学内の他の部局と同様、国立大学改革への対応を迫られるようになっている。資源の限られた小規模大学の附置研という条件下で、このように困難な状況に立ち向かい、研究の継続性や高度化を担保していくためには、今後、これまで以上に所員の努力が求められることだろう。

この年次報告書は、国立大学に附置される共同利用・共同研究拠点として、107 に及ぶ共同利用・共同研究拠点(平成 30 年 4 月 1 日現在。ネットワーク型 5 拠点を含む)の中での競争を経ながら、共同研究を中心とした研究所のさらなる発展を目指すべく、2017 年度の本研究所の成果について自己点検を行なうものである。

飯塚 正人

2018 年 8 月 31 日

目次

まえがき	i
I 報告編	1
I-1 研究計画と点検評価体制	2
I-1.1 年度計画と達成状況の総括	2
I-1.1.1 年次報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」	2
I-1.1.2 年度計画と達成状況の総括	2
I-1.2 点検評価体制	4
I-1.2.1 概要	4
I-1.2.2 本研究所の諸般の活動に関する諮問と評価	5
I-1.2.3 共同利用・共同研究課題に関する評価	5
I-1.2.4 個人研究に関する評価	6
I-1.2.5 経年教授に対する評価	7
I-2 研究活動	7
I-2.1 概要	7
I-2.2 基幹研究	9
I-2.2.1 概要	9
I-2.2.2 多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築	11
I-2.2.3 アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロマクロ系の連関2—	13
I-2.2.4 中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景	14
I-2.3 共同利用・共同研究課題	16
I-2.3.1 概要と外部評価	16
I-2.3.2 共同利用・共同研究課題	17
I-2.3.3 共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)	50
I-2.4 センター	52
I-2.4.1 情報資源利用研究センター	52
I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センター	53
I-2.5 既形成研究拠点	55
I-2.5.1 アジア書字コーパス拠点(GICAS)	55
I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点	55
I-2.6 所員の個人別研究活動	56
I-2.6.1 概要	56
I-2.6.2 所員の研究業績一覧	56
I-2.6.3 受賞	122
I-2.6.4 人事評価	122

I-2.7 外部資金による研究活動.....	123
I-2.7.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」...	123
I-2.7.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」.....	123
I-2.7.3 科学研究費等によるその他の研究活動.....	125
I-2.7.4 寄付金.....	125
I-2.7.5 受託研究・受託事業.....	125
I-3 組織運営.....	126
I-3.1 センター.....	126
I-3.1.1 情報資源利用研究センター.....	126
I-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター.....	126
I-3.2 外部委員会.....	127
I-3.2.1 運営委員会.....	127
I-3.2.2 共同研究専門委員会.....	127
I-3.2.3 研修専門委員会.....	128
I-3.2.4 海外調査専門委員会.....	128
I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会.....	130
I-3.2.6 フィールドネット運営委員会.....	131
I-3.2.7 編集専門委員会.....	131
I-3.2.8 国際諮問委員会.....	131
I-3.2.9 海外拠点専門委員会.....	131
I-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会.....	132
I-3.3 内部委員会等.....	132
I-3.3.1 企画運営委員会.....	132
I-3.3.2 研究戦略策定委員会.....	132
I-3.3.3 文献資料(図書)担当.....	133
I-3.3.4 国際交流担当.....	133
I-3.3.5 出版担当.....	134
I-3.3.6 基礎データ担当.....	135
I-3.3.7 広報企画担当.....	135
I-4 研究者コミュニティと一般社会に開かれたプラットフォームの構築.....	137
I-4.1 若手研究者養成プログラム.....	137
I-4.1.1 言語研修の実施.....	137
I-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ.....	137
I-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー.....	138
I-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー.....	138
I-4.1.5 大学院教育の現在.....	139
I-4.1.6 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員.....	139
I-4.2 国内連携研究活動.....	140

I-4.2.1	地域研究コンソーシアム.....	140
I-4.2.2	国内研究者受け入れ(フェロー等).....	140
I-4.2.3	海外調査専門委員会の活動.....	145
I-4.2.4	フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の活動.....	145
I-4.2.5	フィールドネット運営委員会の活動.....	145
I-4.2.6	四大学連合文化講演会.....	145
I-4.3	国際連携研究活動.....	146
I-4.3.1	国際シンポジウム・ワークショップ・セミナー等.....	146
I-4.3.2	海外研究拠点.....	146
I-4.3.3	外国人研究員招聘.....	146
I-4.3.4	外国からの研究者受け入れ(フェロー等).....	147
I-4.3.5	海外学術機関との研究協力協定.....	148
I-4.3.6	研究未開発言語文化の調査事業.....	149
I-4.3.7	その他外部資金による国際連携研究.....	149
I-4.4	研究成果の国内外への公開.....	150
I-4.4.1	AA 研フォーラムの実施.....	150
I-4.4.2	公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣.....	150
I-4.4.3	出版および広報.....	150
I-4.4.4	収集資料等の展示・公開.....	151
I-5	成果と課題.....	151
I-5.1	2017年度の成果.....	151
I-5.2	課題と展望.....	153
II	資料編.....	156
II-1	年表.....	157
II-2	予算・組織・機構.....	160
II-2.1	研究所の予算.....	160
II-2.1.1	2017年度予算.....	160
II-2.1.2	運営費交付金(2017年度).....	160
II-2.1.3	科学研究費補助金.....	161
II-2.1.4	受託研究・受託事業等.....	162
II-2.1.5	寄付金等.....	162
II-2.2	外部委員リスト.....	163
II-2.2.1	運営委員会.....	163
II-2.2.2	共同研究専門委員会.....	163
II-2.2.3	研修専門委員会.....	164
II-2.2.4	海外調査専門委員会.....	164
II-2.2.5	フィールドサイエンス・コロキウム運営委員.....	165
II-2.2.6	フィールドネット運営委員会.....	165
II-2.2.7	編集専門委員会.....	166

II-2.2.8 国際諮問委員会	166
II-2.2.9 海外拠点専門委員会	167
II-2.2.10 中東研究日本センター諮問委員会	167
II-2.3 内部委員会・業務担当	168
II-2.3.1 内部委員一覧	168
II-2.3.2 各種業務分担 任期: 2017.4.1～2018.3.31 (1 ヶ年)	168
II-2.3.3 全学委員一覧	169
II-3 研究活動の詳細	171
II-3.1 センター	171
II-3.1.1 情報資源利用研究センター	171
II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター	175
II-3.2 共同利用・共同研究課題	177
II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況	177
II-3.2.2 共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)実施状況	264
II-3.3 外部資金による研究の詳細	265
II-3.3.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」..	265
II-3.3.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」.....	278
II-3.3.3 科学研究費等によるその他の研究活動	279
II-4 研究者コミュニティと一般社会に開かれた研究プラットフォームの構築	297
II-4.1 若手研究者養成プログラム	297
II-4.1.1 言語研修の実施状況	297
II-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ実施状況	298
II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況	299
II-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー実施状況	303
II-4.1.5 大学院教育の現在	303
II-4.1.6 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員	304
II-4.2 国内連携研究活動	306
II-4.2.1 地域研究コンソーシアム	306
II-4.2.2 国内研究者の受け入れ(フェロー等)	307
フェロー	307
ジュニア・フェロー	313
II-4.2.3 海外学術調査総括班の活動	320
II-4.2.4 四大学連合附置研究所長懇談会	320
II-4.2.5 シンポジウム等	321
II-4.3 国際連携研究活動	341
II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧	341
II-4.3.2 外国人研究員招聘	369
II-4.3.3 外国からの研究者受け入れ(フェロー等)	369

II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業.....	371
II-4.4 研究成果と資料の公開.....	371
II-4.4.1 出版.....	371
II-4.4.2 オンライン研究資源構築・公開状況一覧.....	374
II-4.4.3 公開講座の実施, 外部公開講座への講師派遣.....	381
II-4.5 公共的利用.....	388
II-4.5.1 共同利用スペース等の稼働状況.....	388
II-4.5.2 文献資料室の利用状況.....	394

I 報告編

I-1 研究計画と点検評価体制

I-1.1 年度計画と達成状況の総括

I-1.1.1 年次報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」

アジア・アフリカ言語文化研究所(AA 研)は、文部科学大臣に認定された言語学・文化人類学・地域研究分野の共同利用・共同研究拠点として、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を行い、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識枠組み提供のための基盤形成に寄与することを目的としている。

この目的を達成するために、

1. 臨地研究に基づく国際的研究拠点として共同研究プロジェクトを推進すること
2. アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源拠点及び研究成果の発信拠点としての活動を進めること

3. 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じての後継者養成を行うこと

【以上、国立大学法人東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所規程より】

を重点的活動目標としている。

この理念に沿って研究活動をいっそう充実させるため、本研究所では全国共同利用研究所時代の 1996 年度(平成 8 年度)以来、自己点検評価や第三者評価に基づいて、自己点検評価報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」を刊行してきた。本報告書は、2017 年度における本研究所の研究体制と、それによって達成された研究および実施された活動の全体を報告するものである。

本報告書は「I 報告編」と「II 資料編」の 2 部からなり、「I 報告編」は、諸種の研究(基幹研究、両センター、共同利用・共同研究課題、既形成拠点、個人研究など)と諸種の活動(所内組織運営および共同利用・共同研究拠点としての教育・情報発信・資料構築及び公開・研究連携事業など)の概要を報告し、現状分析と今後の課題の概括を添える。「II 資料編」は、「I 報告編」において概括されている諸研究と諸活動の詳細を報告する。

I-1.1.2 年度計画と達成状況の総括

本研究所における 2017 年度の研究活動は、2016 年度に文部科学省が概算要求の仕組みを大きく変更したことから、前年度に引き続き厳しい財源難に見舞われたにもかかわらず、所員と共同研究員の多方面にわたる努力によって計画どおり進捗し、本報告書に報告するとおり、充実した成果を挙げた。本年度の研究・運営計画は十分に達成されたと言える。以下は、文部科学省に提出した「共同利用・共同研究拠点 平成 29 年度実施計画書」に記載した年度計画とその達成状況の概要である。【2017 年度の成果の概括は、[I-5.1 2017 年度の成果](#)の項を参照】

共同利用・共同研究拠点としての年度計画

1. 2015 年度および 2016 年度からの継続共同研究課題 17 件と、公募および前年度中に共同研究専門

委員会による審査を経て採択された共同利用・共同研究課題 11 件、合わせて 28 件を招聘外国人研究員 5 名とともに実施する。これらの課題への参加を見込まれる関連研究者数は全体で延べ 432 名である。また、新たな試みとして、共同研究専門委員会による審査を経て採択された外国人客員共同研究型の共同利用・共同研究課題を 4 件実施する。

2. 海外学術調査フォーラムを 7 月 1 日に開催するほか、海外での臨地調査に関わる手法を実践的・理論的に開発することを目的とするフィールドサイエンス・コロキウム事業の研究会を随時開催、さらに分野を越えた研究者の協力・連携関係に資するフィールドネット関連事業を行う。
3. 共同利用・共同研究課題に対する若手研究者の積極的な参加を広く募る一方、夏にハンガリー語、ジャワ語の言語研修、9 月に短期言語研修〔特別企画〕史料講読研修「中国古代文書簡牘」と中東☆イスラーム教育セミナー、12 月に中東☆イスラーム研究セミナー、1 月にオスマン文書セミナーを開催する。
4. 必要な研究資料を適宜収集・整備する。
5. 研究成果 10 点程度を刊行するとともに、関連データおよび過去の共同研究プロジェクト刊行物の電子化と公開の準備を進める。また、広報誌『FIELDPLUS(フィールドプラス)』を企画・編集して刊行する一方、研究成果を紹介する資料展示を実施し、オンラインでも公開する。
6. 所外の研究者・有識者が過半数を占める運営委員会を年 2 回、共同研究専門委員会を年 1 回、海外調査専門委員会も年 2 回以上開催し、特に 10 月の共同研究専門委員会では、2018 年度から発足させる新規課題の審査を行う。

達成状況

1. 2015 年度および 2016 年度からの継続共同研究課題 17 件と、公募および前年度の共同研究専門委員会による審査を経て採択された共同利用・共同研究課題 11 件、合わせて 28 件を外国人研究員 3 名(昨年度からの継続)、特別招へい教授 2 名(同左)とともに実施した。また、新たな試みとして、共同研究専門委員会による審査を経て採択された外国人客員共同研究型の国際共同利用・共同研究課題を 4 件、外国人研究員 4 名とともに実施した。
2. 海外学術調査フォーラムを 7 月 1 日に開催したほか、フィールドサイエンス・コロキウム・ワークショップを 2 回開催した(「リスク・ハザード・レジリエンス」「フィールドワークをフィールドワークする」)。さらに、分野を越えた研究者の協力・連携関係に資するフィールドネット・ラウンジ企画を公募し、「草の根から地域住民が生み出す「食」と「農」の空間 ― どうやって見つけ、調べるか?」を採択して実施した。
3. 共同利用・共同研究課題に若手研究者を積極的に参加させるべく、これまでの短期共同研究員制度を見直して、新たに短期滞在型の共同利用・共同研究課題を公募する一方、夏にハンガリー語とジャワ語の言語研修、9 月に短期言語研修〔特別企画〕史料講読研修「中国古代文書簡牘」および中東☆イスラーム教育セミナー、12 月には中東☆イスラーム研究セミナー、1 月にもオスマン文書セミナーを開催した。
4. 年間 1 千万円程度の予算を配分して、必要な研究資料を適宜収集・整備した。
5. 研究成果 20 点、電子出版物 8 点を刊行するとともに、関連データおよび過去の共同研究プロジェクト刊行物の電子化と公開の準備を進めた。また、広報誌『FIELDPLUS(フィールドプラス)』18 号、19 号を刊行する一方、研究成果を紹介する企画展「1970 年代までの伝統的狩猟採集生活を送るブッシュマン」「プレザンス・アフリケーヌ展: 超域的黒人文化運動をめぐるイメージの軌跡」「アフリカ絵本展」「エクソダスー地中海を渡る脱出ー」を実施した。

6. 所外の研究者・有識者が過半数を占める運営委員会を年 2 回, 共同研究専門委員会を年 1 回, 海外調査専門委員会も年 2 回開催し, 特に 10 月 21 日開催の共同研究専門委員会では, 2018 年度から発足させる新規課題の審査を行って, 新規に 7 件を採択した。

I-1.2 点検評価体制

I-1.2.1 概要

本研究所の研究の一層の充実を目指して, 国立大学法人化後の第一期中期計画(2004~2009 年度)に盛り込まれた方針, すなわち「所内に評価制度を設け, 研究成果の評価基準を策定し, 定期的に業績の評価を行う」に従い, 2003 年(平成 15 年)に教授会決定された自己評価書の作成手順および研究業績評価指針は次のとおりである。

1. 研究所の基幹研究プロジェクトをはじめ, 研究及び研究関連業務全般にわたる年度目標とその達成状況を評価し, 成果の概要及び一覧を付して年度ごとの自己評価書を作成・公開する。
2. 業績評価基準を設ける。
 - 1) 評価結果は, 人事に適切に反映されるように努める。
 - 2) 実績が研究資源配分などに反映される制度を検討する。
 - 3) 多様な研究活動の必要性に相応した柔軟で効果的な勤務形態を可能にする。
3. 中期計画に従い, 人事評価基準を, 次の三項目に大別する。
 - 1) 学術的な個人業績に関するもの
 - 2) 学術的な共同研究に関わるもの
 - 3) AA 研の活動及びその成果普及に関わるもの

本研究所における研究活動自己評価は, 2010 年度に本研究所が全国共同利用研究所から新設の「共同利用・共同研究拠点」に移行した後も, 1 年間はこの指針に従い, 共同研究(4 つの基幹研究, 情報資源利用研究センター, フィールドサイエンス研究企画センター, 2 つの既形成拠点, 共同研究課題/共同研究プロジェクト等とその関連業務)と, その基盤をなす個人研究という 2 種の研究活動について, 前者に関しては外部からの評価を受け, 後者に関しては自己申告する体制をとった。すなわち, (1) 学外委員を中心とする運営委員会, 専門委員会等による助言や評価と, (2) 年度当初に所員が個別に提出した研究活動計画の翌年度当初における達成度自己申告, という 2 種の評価体制である。このうち, (2) に関しては, 本研究所の共同利用・共同研究機能をより重視するという観点から, 2010 年度をもって自己評価書への掲載をとりやめ, 各年度の所員の研究業績一覧だけを記載することとした。また, 2013 年度に自己評価書の名称も「年次報告書」に改めた。

なお, 一部の例外を除いて委員の過半数を学外有識者が占める専門委員会等による助言と評価は, (1) 所の研究活動及び関連業務全般に関しては「運営委員会」(2) 共同利用・共同研究課題に関しては「共同研究専門委員会」, (3) その他の研究活動及び関連業務に関しては「研修専門委員会」「海外調査専門委員会」「編集専門委員会」「国際諮問委員会」「海外拠点専門委員会」「中東研究日本センター諮問委員会」がそれぞれ実施している。【所外委員を含む各委員会の詳細は [I-3.2 外部委員会](#) の項を参照】

年度計画の提出は, 基幹研究, 両センター, 既形成拠点, 共同利用・共同研究課題, 所員個人の各レベ

ルに義務づけられている。ただし公募による共同利用・共同研究課題は、例年 10～11 月頃に開催される審査会を経て採択されることから、審査にあたった共同研究専門委員会の評価を考慮し、場合によっては必要な修正を施した上で確定されている。

このように本研究所の自己評価体制は、一方では、所の活動全般(「運営委員会」)、主要な研究活動(「共同研究専門委員会」)、主要な業務(「研修専門委員会」「海外調査専門委員会」「編集専門委員会」「国際諮問委員会」「海外拠点専門委員会」「中東研究日本センター諮問委員会」)について外部からの評価・助言を受け、また他方では、所内諸組織の各レベルについて個別に研究活動計画の達成度を申告するという、種々の角度から幾重にも点検・評価する仕組みとなっている。

外部の意見を取り入れた自己点検・評価作業の集成として毎年作成される本報告書は、過年度をふり返り、新年度の研究の活性化と組織の柔軟性を保障する上で重要な役割を果たしている。すなわち、本報告書により、AA 研における種々のレベルの研究の全体像を所内外の研究者が共有し、所の将来を展望するための確たる基盤を形成しようとするものである。

I-1.2.2 本研究所の諸般の活動に関する諮問と評価

共同利用・共同研究拠点である本研究所のあり方全般について学外の研究者・有識者から助言と評価を得るために、運営委員会が設置されている。【詳細は [I-3.2.1 運営委員会](#)の項を参照】

また、研究者コミュニティの意向を反映した共同利用・共同研究のあり方を維持するために、所外の研究者を加えたいくつかの委員会が設置されている。

なかでも共同研究専門委員会は、公募による共同利用・共同研究課題の質の向上を図るため、すべての共同利用・共同研究課題の審査と評価に当たっている。また、旧海外学術調査総括班の活動や、言語研修、編纂・出版事業の運営に学外からの意見を生かすため、海外調査専門委員会、研修専門委員会、編集専門委員会がそれぞれ設置されている。【詳細は [I-3.2.2 共同研究専門委員会](#)、[I-3.2.3 研修専門委員会](#)、[I-3.2.4 海外調査専門委員会](#)、[I-3.2.7 編集専門委員会](#)の項を参照】

さらに 2010 年度からは、国際的な「共同利用・共同研究拠点」としての一層の発展を目指し、国際諮問委員会と海外拠点専門委員会が設置された。後者は、バイルート海外拠点の運営のために 2007 年以来設置されてきた中東研究日本センター専門委員会を発展させたもので、コタキナバル・リエゾンオフィスの運営、さらには中東☆イスラーム研究/教育セミナーについても、併せて助言と評価の対象としている。バイルート海外拠点の運営についてはほかに、現地の有識者による中東研究日本センター諮問委員会も設置されている。【詳細は [I-3.2.8 国際諮問委員会](#)、[I-3.2.9 海外拠点専門委員会](#)、[I-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会](#)の項を参照】

I-1.2.3 共同利用・共同研究課題に関する評価

本研究所の理念に沿って、2017 年度には公募による共同利用・共同研究課題 27 件(うち 15 件が所外代表)が組織され、活発な共同研究事業が展開された。

人文社会系で初の全国共同利用研究所として設置されて以来、本研究所の活動の根幹を成してきた共同研究プロジェクトに対する評価は 2004 年度から試験的に開始され、2005 年度には評価を担当する「共同

利用委員会」が設置されて、2006年度より同委員会による評価が完全実施されてきた。その結果、全国共同利用研究所における最重要事業のひとつであった共同研究プロジェクトは格段に充実してきたと言える。こうした評価体制は、2010年度にAA研が「共同利用・共同研究拠点」に移行した後も基本的に変更されることはなく、新設の共同研究専門委員会が年度末に共同利用・共同研究課題の実績報告を受けて、書面審査を実施し、助言と評価を与えている。【詳細は [I-2.3 共同利用・共同研究課題](#)の項を参照】

一方、「共同利用・共同研究拠点」制度が、「募集による共同利用・共同研究の実施」と、「採択にあたって学外委員が半数を占める審査委員会の審査」を義務づけていることに鑑み、2017年度も共同利用・共同研究の新規課題を公募し、過半数を学外委員が占める共同研究専門委員会による審査を経て、応募のあった10件のうち7件（うち3件が所外代表）を採択した。なお、審査に関しては、2010年度の共同研究専門委員会による指摘を受けて改善を図った結果、2011年度以降は次の4項目について審査し、5段階で評価を行っている。

- 研究の背景: 研究目的が明確で、本研究所の共同利用・共同研究拠点としての目的に合致しているかどうか。研究の意義、特に課題として展開することの意義が明確かどうか。
- 期待される研究成果: 期待される研究成果が明確、具体的で、我が国の言語学・文化人類学・歴史学・地域研究とその関連諸分野の発展に貢献できるかどうか。
- 研究の実実施計画: 計画、方法が十分に練られ、かつ研究組織、研究者の構成が妥当なものかどうか。公開計画が実現性の高いものかどうか。
- 全体評価

2016度から募集を開始した共同利用・共同研究課題(外国人客員型)については、公募に対し3件の応募があり、過半数を学外委員が占める共同研究専門委員会による審査を経て、3件を採択した。また、今年度から募集を開始した共同利用・共同研究課題(短期滞在型)についても、同じく共同研究専門委員会による審査を経て、3件の応募があり全てを採択した。

I-1.2.4 個人研究に関する評価

本研究所ではこれまで、「個人別達成度自己評価」という形で、所員が実施する共同研究と個人研究の両面を含む研究活動を、個人別に評価する方式を採ってきた。これは、各所員が年度当初に基幹研究、両センター、既形成拠点、公募による共同研究課題／共同研究プロジェクト等の共同研究ならびに個人研究の両研究活動に関する研究活動計画を提出し、翌年度初頭にそれがどこまで達成できたかを個別に自己申告するものである。

しかしながら、本研究所が共同利用・共同研究拠点に認定されたのみならず、基幹研究や既形成拠点、さらには2つのセンターによる事業が展開されるに至った現在、これらの研究活動は当然、各個人の研究業績にも反映されることになる。換言するならば、共同研究、基幹研究、2つのセンターによる事業とかかわりを持たない「個人研究」は存在する余地がないと言えるだろう。したがって、2011年度からは共同研究と個人研究を別個のものにとらえる前提に立脚していた「個人別達成度自己評価」の自己評価書への記載を取りやめ、各所員の研究業績を列挙して、公開する形に変更した。【詳細は [I-2.6.2 所員の研究業績一覧](#)の項を参照】

I-1.2.5 経年教授に対する評価

2005年度より、AA研の教授職に一定年限在職し、かつ定年まで実施年を含め3年以上の残余年がある教授について、当該在職期間中の研究業績の評価を外部研究者に委託して実施している。

1. 研究方法の独創性: 従来の研究に比して方法論的に新しい点、優れている点
2. 研究成果: 研究がもたらした新しい視野
3. 学界への貢献: 研究の学界に対するインパクト・後続研究に対する先駆的役割・研究者交流に対する貢献等
4. 総合評価

3名の外部研究者が、上記に示した4項目を総合的に評価し、4段階(特に優れている・優れている・やや劣る・極めて劣る)の何れかに位置づける方法で行われる。本年度は該当者がなく、実施しなかった。

I-2 研究活動

I-2.1 概要

本研究所は、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を目的とする大学間の共同利用研究所として1964年に設置された。基本的に言語学、文化人類学、歴史学、地域研究の各分野の研究者から構成されている。2014年に創立50周年を迎えたが、過去半世紀以上にわたって、国内外の共同研究や海外学術調査の組織化、研究資料の蓄積と公開、言語研修、辞典編纂などを通じて、この分野の研究推進に主導的な役割を果たしてきた。

2010年度から新たな共同利用・共同研究拠点(以下、拠点と略)制度の下で、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」(研究分野としては言語学、文化人類学、地域研究)としてのスタートを切るにあたり、本研究所は、拠点としての中長期的な目標を「今日、人類の7割を超える人びと(世界総人口約66億人のうち48億人以上)が暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語・文化のあり方を研究し、中長期的には、21世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与する一方、この地域の多様な言語・文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求すること」と位置づけ、目標達成のために以下の3つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進していくことを活動の中心に据えた。

- 1) 臨地研究(フィールドサイエンス)に基づく国際的研究拠点としての共同研究プロジェクトの実施
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂及び研究成果の発信
- 3) 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

このような研究活動・研究事業を強力に推進するため、本研究所は2008年度以来所内及び運営諮問委員会(当時)において継続的な検討を行ったすえ、文部科学省の国立大学評価委員会からも高い評価を受けていた研究ユニットをより重点化する形で、2010年度に4つの基幹研究(「言語ダイナミクス科学研究」「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」)を発足させた。これらの基幹研究は、本研究所が重視する研究

領域を明示するとともに、共同利用・共同研究課題とも連動しながら、拠点としての活動を一層深化・充実させる機能を期待されていた。

さらに 2016 年度には、共同利用・共同研究拠点第 2 期の開始に合わせて、2004 年度以来 12 年ぶりにプロジェクト研究部をディシプリン別の 3 研究ユニット(言語学, 文化人類学, 地域研究・歴史学)に再編する一方、基幹研究も「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究」「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」の 3 つに組み替え、新たなスタートを切ることとなった。これと並行して、従前から設置されている 2 つのセンター(情報資源利用研究センター及びフィールドサイエンス研究企画センター)、また対外的に形成されてきた 2 つの研究拠点、すなわちアジア書字コーパス拠点(GICAS)及び中東イスラーム研究拠点も既形成拠点としての研究活動を継続している。所員の多くは基幹研究、既形成拠点またはセンターに所属し、共同利用・共同研究拠点にふさわしい国内外の研究者との密接な協力に基づく共同研究活動を推進している。

こうした体制の下で、2017 年度に本研究所が遂行した具体的な研究活動は次の通りである。

1. 特別経費「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究」に基づき、2015 年度・2016 年度発足の継続共同利用・共同研究課題 17 件と、公募および昨秋の共同研究専門委員会による審査を経て採択された共同利用・共同研究課題 11 件、合わせて 28 件を外国人研究員 3 名(2016 年度からの継続)および特別招へい教授 2 名(同左)とともに実施した。また、新たな試みとして、共同研究専門委員会による審査を経て採択された外国人客員共同研究型の国際共同利用・共同研究課題を 4 件、外国人研究員 4 名とともに実施した
2. 急速に複雑化・深刻化するアジア・アフリカの現代的諸問題に対応するため、本研究所がこれまで研究分野別に進めてきた研究を有機的に関連させて質的に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した問題解決のための研究体制を構築すべく、2016 年度に特別経費を得て発足させた全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」の構成主体となっている 3 つの基幹研究の合同研究集会を開催し、現代的諸問題研究の飛躍的發展を図った。これと並行して 3 つの基幹研究、すなわち「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究」「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」が活動を行い、それぞれ国際シンポジウム、公開研究会、公開セミナー、ワークショップなどを組織した。【詳細は [II-3.3.1 アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築](#)の項を参照】
3. 設立 20 周年を迎えた資源利用研究センターでは、研究資源の構築と発信を通じた共同利用を進めるため、国内外の研究者が利用可能な電子辞書の充実(モンゴル語, チュルク諸語など)などに努める一方、国内外の関連研究者の参加を得て、設立 20 周年記念のワークショップ、セミナー、シンポジウムを開催した。【詳細は [II-3.1.1 情報資源利用研究センター](#)の項を参照】
4. フィールドサイエンス研究企画センターでは、当該分野の新たな研究手法の開発を目指す「フィールドサイエンス・コロキウム」および領域横断的な研究の可能性を発掘する「フィールドネット」の両事業を推進した。【詳細は [II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター](#)の項を参照】
5. 海外研究拠点(バイルートの中東研究日本センターおよびコタキナバル・リエゾンオフィス)を維持・運営し、共同研究、国際ワークショップ、講演会を実施した。【詳細は [II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター](#)の項を参照】

6. アジア・アフリカ地域における現地調査研究やその他の専門的業務に役立たせることを目的に、東京会場においてハンガリー語、ジャワ語の言語研修を実施し、あわせて教材の開発と公開を行った。また、特別企画として大学セミナーハウスにおいて短期言語研修(史料購読研修)「中国古代文書簡牘」を実施した。
7. 次世代研究者養成事業として「中東☆イスラーム研究セミナー」、「中東☆イスラーム教育セミナー」、「文化／社会人類学セミナー」などを引き続き実施した。
8. 基盤 B 以上の科学研究費補助金による基礎的研究 20 件をはじめ、外部資金を導入した各種研究プロジェクトを実施した。
9. 中東イスラーム研究拠点(既形成拠点)が大学共同利用機関法人人間文化研究機構(NIHU)のネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」(中心テーマ「地球規模の変動下における中東の人間と文化—多元的価値共創社会をめざして」)の副中心拠点として、「人間の移動・交流によるネットワークの構築と国家・社会・宗教の変容」という担当テーマの下、中心拠点である国立民族学博物館を始めとする全国の4機関と連携しながら、中東・イスラーム研究の発展に尽力した。【詳細は [I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点](#)の項を参照】

I-2.2 基幹研究

I-2.2.1 概要

本研究所において、多くの所員がそれぞれ一つの共同研究プロジェクトの主査となることは、研究の多様性という点では評価できるものの、研究所が組織全体としてどのような研究を目指し、何を達成しているのかが見えにくい。

こうした意見は 1990 年代に入ってから、研究所の内外で再三表明されてきた。すなわち、研究所として重点をおくべきテーマをより明確にすべきではないかという指摘である。当時「重点共同研究プロジェクト」というカテゴリーを設定したのは、そうした問題提起への主体的な回答に他ならない。その後、必ずしも議論が深まったとは言えなかったものの、2004 年度に国立大学の法人化を迎えるに至り、本研究所は 1 プロジェクト研究部(言語動態、情報資源戦略、コーパス、文化動態、政治文化)の 5 研究ユニットから構成)、2 センター(情報資源利用研究センターとフィールドサイエンス研究企画センター)体制の下で、第 1 期中期目標期間に臨むこととなった。このうちプロジェクト研究部内の 5 つのユニットは、機械的に所員を分類するのではなく、なんらかのテーマの下に、実質的な所員同士の共同研究がなされることを目指して設置された。

このプロジェクト研究部に関しては、本研究所が共同利用・共同研究拠点に移行し、かつ第 2 期中期目標期間に突入した 2010 年 11 月 5 日付で、文部科学省の国立大学法人評価委員会から、柔軟な研究実施体制の整備の具体的取組例として、「プロジェクト研究部の中に設置した複数の研究ユニットを通じて、『小規模コーパスデータ分析のためのツール開発』『心身論』『異文化交渉がつくる歴史認識』『言語の構造的多様性と言語理論』等の機動的な研究プロジェクトを実施している【東京外国語大学】」との評価を得たものの、同時に問題点も存在していた。

まず、研究所としての重点研究領域が明示されなかったことは、研究所を代表する事業と個人研究との間の線引きや、研究事業・プロジェクト間における優先順位の設定を困難なものにした。次に、1 プロジェクト研

究部・2 センター体制の下では人員の流動性を確保することも極めて困難であった。言うまでもなく、一定期間ごとに所員をユニットやセンター間で異動させても、所全体としての研究が活性化するわけではない。このような状況の中、2010年度からの共同利用・共同研究拠点制度の導入や第2期中期目標期間開始を前にして、本研究所所長(当時)は所員の活力源としての各自の研究テーマを尊重するとともに、研究所として重点をおく領域を明確にすることの重要性を提起した(2009年4月の教授会)。

その後、本研究所が2009年6月25日付で共同利用・共同研究拠点として認定された際に、期せずして「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という拠点認定審議における意見が合わせて通達された。本研究所執行部はこの意見を真摯に受け止めるとともに、重点研究領域を明確にするプロセスの加速が必要であると考え、将来計画検討委員会(当時)とともに具体策の検討を重ねた。

その結果、所内で重点となる研究領域(テーマ)を立て、所員がその研究領域(テーマ)について研究を推進することが提起され、重点となる研究領域は「基幹研究」という名称をもって呼ぶことが定められた。そして基幹研究は、共同利用・共同研究課題と有機的に連動することによって、本研究所が主導し、外部の研究者コミュニティとともに行う重点研究を明示するものとして位置づけられることとなった。2010年度からの基幹研究発足を目指し、2010年1月から2月にかけて所員のイニシアチブにより、共同利用・共同研究拠点としての分野に応じて3件から4件の基幹研究を採択するという方針の下、「言語ダイナミクス科学」(言語学)、「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」(人類学)、「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」(歴史・地域)「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」(歴史・地域)の4件が基幹研究として採択された。基幹研究は、発足から3年目の中間評価を経たうえで継続が認められるほか、予算の配分、新規採用人事に関しても重視されることになった。本研究所における基幹研究の3年に及ぶ活動は、2012年11月7日に公表された「国立大学法人・大学共同利用機関法人の改革推進状況」において、国立大学法人評価委員会から、共同利用・共同研究に関する「特色ある取組例」として取り上げられ、「アジア・アフリカ言語文化研究所では、中期的研究戦略の共同研究軸である4つの『基幹研究』へ予算を優先的に配分するとともに、公募による共同研究課題計22件(継続分を含む)を実施している。【東京外国語大学】」と評価されるに至った。なお、人文社会系の国立大学附置研究所の中で取り上げられたのは本研究所の事例のみであったことを付言しておく。

2012年度にはさらに、前述の方針に従って、外部評価委員会による基幹研究の中間評価が実施された(2012年12月8日)。外部評価委員会委員は、佐藤源之(東北大学東北アジア研究センター・電波応用工学)、関本照夫(国立民族学博物館・人類学)、堤研二(大阪大学大学院文学研究科・人文地理学)、長野泰彦(総合研究大学院大学副学長・言語学)、林佳世子(東京外国語大学総合国際学研究院・歴史学)の5氏に委嘱し、①研究の実施計画、②研究活動・成果の公開、③今後3年間(2013年度～2015年度)の活動計画について、各基幹研究代表から提出された書類と当日のプレゼンテーションに基づき、個々の基幹研究に対する評価を行っていただいた。その結果、4つの基幹研究はいずれも2013年度以降2015年度までの活動継続が認められた。

2013年度以降は、中間評価におけるコメントを踏まえ、それぞれの基幹研究が研究内容の充実を図る一方、研究活動や成果が所外からよりいっそうアクセスしやすくなるよう、研究所ホームページの一部改修を行った。さらに4つの基幹研究は、2014年に本研究所が創立50周年を記念して開催したシンポジウムでも、現在の所の研究を代表する形で研究報告を行い、最終年度となった2015年度もそれぞれに活発な研究活動を展開した。

2010年度から2015年度にかけて活動した4つの基幹研究はこうして大きな成果を挙げたものの、第3期中期目標期間の始まった2016年度には、2004年度以来12年ぶりに改編されたプロジェクト研究部の分野別研究ユニットを代表する形で、新たに「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(言語学)、「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究」(文化人類学)、「中東・イスラム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(地域研究・歴史学)の3つの基幹研究が活動を始めた。3つの基幹研究はそれぞれ、国内外の研究機関や現地コミュニティと連携して研究活動を進める一方、特別経費による全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」(2016～2021年度)にも取り組んでいる。この全所プロジェクトは、アジア・アフリカ地域の直面する現代的諸問題の解決に向けて、緊急解決すべき問題が等しく「少数派／弱者の危機」という側面を持つことから、3分野の基幹研究が有機的に連携し、合同研究集会を実施して、現代的諸問題研究の飛躍的發展を図るもので、文字どおり第3期中期目標期間の研究所の顔となることが期待されている。

I-2.2.2 多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築

代表者: 中山俊秀

関連所員: 呉人徳司, 澤田英夫, 星泉, 渡辺己, 塩原朝子, 品川大輔, 山越康裕, 児倉徳和

ウェブサイト: <https://lingdy.aa-ken.jp/>

研究の概要

本基幹研究は、アジア・アフリカ地域を中心に、研究機関だけでなく現地の少数言語・方言コミュニティとも連携することで、コミュニティが言語・文化の多様性を保持するために、自ら言語記録活動に関与し、その活動を通じて諸研究機関のさらなる研究の進展を促す循環型の言語研究体制を構築することを目的としている。また、言語資源をもとにした共同研究活動などを通じて、AA研がこれまで培ってきた研究実績を日本社会に還元することをめざしている。

具体的には、以下の諸事業を統合的に実施することにより、調和のとれた多言語・多文化共生社会の実現を支援する:

- ・ 言語の記録・保存に関する共同研究
- ・ 言語記録活動に従事する次世代の研究者・現地コミュニティ人材の育成
- ・ 循環型の言語研究体制を支える技術開発
- ・ 言語資源の効果的な蓄積・利用のためのネットワーク構築
- ・ 現地コミュニティに向けたアウトリーチ
- ・ 循環型の言語研究体制モデルの普及と成果発信

関連プロジェクト

- ・ AA研共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」
- ・ AA研共同利用・共同研究課題「人間一家畜一環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」
- ・ AA研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点から見た琉球諸語のケースマーケティング」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」

研究計画

2017年度は以下の活動を計画していた。

アジア・アフリカ地域を中心に、各地の研究機関だけでなく現地の少数言語・方言コミュニティとも連携することで、コミュニティが言語・文化の多様性を保持するために、自ら言語記録活動に関与し、その活動を通じて諸研究機関のさらなる研究の進展を促す循環型の言語研究体制を構築する。また、言語資源をもとにした共同研究活動などを通じて、AA 研がこれまで培ってきた研究実績を日本社会に還元する。具体的には、以下の諸事業を統合的に実施することにより、調和のとれた多言語・多文化共生社会の実現を支援する。

- a. 言語の記録・保存に関する共同研究
- b. 言語記録活動に従事する次世代の研究者・現地コミュニティ人材の育成
- c. 循環型の言語研究体制を支える技術開発
- d. 言語資源の効果的な蓄積・利用のためのネットワーク構築
- e. 現地コミュニティに向けたアウトリーチ
- f. 循環型の言語研究体制モデルの普及と成果発信

活動の展開にあたっては、共同利用・共同研究拠点としての使命を果たすため、研究集会を通じた共同研究の推進と先導のみならず、資料の電子化、研究手法開発、研究者養成、コミュニティーアウトリーチなどの社会還元などの広がり強く意識した。

研究成果(2017年度)

本年度は以下の活動を軸に、共同利用・共同研究事業を活発に展開し、計画は十分に達成された。

研究面では、共同利用・共同研究課題を今年度新たに4件発足させ計10件の共同研究プロジェクトを組織し、危機言語及び言語多様性に関する学術研究ネットワークを拡充させた。研究集会(国際3回、国内27回)を通じて言語の構造的多様性と研究未開発言語の記録・再活性化に関する研究を多面的に推進した。また、研究資料の電子化を通じて少数言語の記録・記述研究を進めた。加えて、言語記述・言語ドキュメンテーション・言語類型論などの研究の数少ない投稿雑誌として『アジア・アフリカの言語と言語学』(AALL)の企画編集を行い、関連研究成果の公開・共同利用に寄与した。

理論的問題の議論、研究手法開発を目的とした海外研究機関との連携による国際ワークショップ3回(海外での開催)及び国内ワークショップ2回などを提供し、研究者コミュニティー内の研究の活性化および若手研究者の研究力向上に寄与した。また、共同研究企画運営インターンシップを通じた若手養成事業も計画通り進行した。

社会還元面でも、現地コミュニティなどを対象としたアウトリーチ活動(インドネシアやロシア)、海外研究機

関との共同出版など国際的事業を活発化させるとともに、国内向けにも公開映画上映会・講演会・企画展示などを開催した。また、危機言語研究およびアーカイブ構築に向けた研究、技術インフラの整備などにより研究成果共有・研究交流ネットワークの形成を進めた。

また、インドネシア、中国、ロシア、イギリス、オーストラリア、カナダ、マレーシア、タイ、韓国などの研究機関を訪問し、連携事業をより活発化すべく研究交流関係の構築を行った。

以上のように、本事業の活動は当初の目的を十分に達成し、昨年度構築した事業基盤を効果的に拡充することができた。

I-2.2.3 アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究

—人類学におけるミクローマクロ系の連関2

代表者: 西井凉子

関連所員: 河合香吏, 栗原浩英, 高島淳, 床呂郁哉, 深澤秀夫, 外川昌彦, 佐久間寛, 吉田ゆか子

ウェブサイト: <http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/>

研究の概要

人類学はある時期まで、小規模社会でのフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、国内外において、「上位」の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、イスラーム文化圏、中華文化圏、インド洋海域世界といったトランスナショナルな社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティブでの研究の必要性および関心が高まってきた。

他方、その対極にむかう方向性として、個々人の身体性を分析・考察の起点とした間身体的実践、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフォーダンス、社会空間など、ミクロ・パースペクティブによる問題系も同時に浮上しつつある。これらをめぐる国内外の研究動向をまえに、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく個々の調査研究をこえた次元での新たな概念化と理論化の試みである。本研究は、その点で先導的な役割をになうことを目標とする。

本年度は昨年度に引き続き、ミクローマクロ系の連関をめぐる人類学的考察にとっての今日的な諸主題が、フィールドで感知される人びとの情動と、当の情動のもとで流動的に編成される社会的なものとの、交叉の様態に関する共同研究からさらに焦点化して、「リスク・ハザード」に対処する人類の知の検証とそれが切り開く可能性にむけたテーマで研究を推進した。また、顔と身体表現をめぐって、ある社会・文化における在来のコミュニケーションのありようを理解するとともに、異文化が相互に行き交う場での個々の「顔」と「身体」の交錯を実証的に探ることから、トランスカルチャー状況下における新たな顔身体学を構築することを目標に研究を進めてきた。

本年度は、具体的には国際ワークショップや公開セミナー、合評会、および公開シンポジウム等を通じて共同研究をすすめた。人間の生活が不確実性や偶然性のただなかで営まれていることを今ほど痛切に感じることはない状況のもとで、アジア・アフリカにおける「在来知」の個別事例を、人類学の現場＝フィールドから個別性を越えた普遍的視野において探究することが、本基幹研究のさらなる先導的課題であることを再確認した。

関連プロジェクト

- AA 研共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」
- AA 研共同利用・共同研究課題「東・東南アジアの越境する子どもたち」
- AA 研共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究(4)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「『もの』の人類学的研究(3) (「わざ」の人類学的研究—技術, 身体, 環境)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「『プレゼンズ・アフリケヌ』研究—新たな政治=文化学のために」

2017年度の主な研究活動

本年度の主な研究活動は以下の通りである。

- ウェブサイトを構築した: <https://jodo17.wixsite.com/main>
- ウェブサイトを更新した: <http://www.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/>
- 国際ワークショップ 1 回, 英語による講演会 3 回, 公開シンポジウム 7 回(うち国際シンポジウム 5 回), 公開展示会 1 回, 公開合評会 3 回, 公開コロキウム 2 回, 領域会議 1 回, 英語での公開研究会 1 回, 非公開研究会 6 回を開催した。
- 若手育成の研究セミナーを日本文化人類学会との共催により開催した。【I-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナーを参照】
- 2017 年 8 月の国際シンポジウムの報告書 Symposium international ART ET AFFECT ENAFRIQUE, 12 月の公開シンポジウムの報告書『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築(第 2 回)』の計 2 冊を刊行した。

I-2.2.4 中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景

代表者: 黒木英充

関連所員: 飯塚正人, 小田淳一, 苅谷康太, 近藤信彰, 高松洋一, 床呂郁哉, 錦田愛子, 野田仁

ウェブサイト: <http://meis2.aacore.jp/?lang=ja>

研究の概要

本基幹研究は, 中東から東南アジアまでを含めたイスラーム圏において観察される人間移動と, 諸宗教宗派・民族の織りなす社会関係とを連関させて「多であること」の問題性を追究する。多元的社会の生成過程とイスラーム的ネットワーク拡張の動態, 移民・難民の政治社会空間に対する影響, 個人・集団のアイデンティティ戦略と政治思想の連関などの問題に取り組む。

本基幹研究は, 2005(平成 17)～2009(平成 21)年度「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の発展系である。バイルート, コタキナバル両海外拠点を管轄するフィールドサイエンス研究企画センターや, MEIS (Middle East and Islamic Studies)「中東イスラーム研究拠点」と連携しながら, バイルート拠点において共同

利用・共同研究課題を国際的規模で推進する。また中東☆イスラーム研究／教育セミナー，バイルート若手研究者報告会や歴史文書セミナーなどを通じて次世代研究者の育成に当たる。さらに歴史的画像資料などの修復やデジタル化，それを使った研究成果の社会還元を積極的に行う予定である。

関連プロジェクト

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題(JaCMES 実施分)「Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies(中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究)」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題(KKLO 実施分)「Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究)(第3期)」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為(第二期)」

研究計画

具体的な研究推進，次世代研究者育成，研究成果の社会還元の活動は以下を予定していた。

1. 共同利用・共同研究課題をバイルート JaCMES, コタキナバル KKLO にて国際共同研究として実施する。
2. 中東☆イスラーム研究／教育セミナーにより次世代研究者の育成に資する。
3. オスマン文書セミナーにより当該地域の歴史研究者の養成に資する。
4. 中東都市多層ベースマップシステムの充実を図る。
5. 本研究活動の全体をウェブサイト上で公開する。
6. JaCMES, コタキナバル・リエゾンオフィスにおいてラウンドテーブル型研究会や講演会を開催し，現地研究者との研究交流，研究活動の現地社会還元を図る。

研究成果(2017 年度)

具体的な研究推進，次世代研究者育成，研究成果の社会還元の活動は以下の通りである。

1. 海外拠点実施分の共同利用・共同研究課題「Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies(中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究)」は，本年度第1回(通算第3回)研究会をバイルートの中東研究日本センター(JaCMES)にて2017年9月7・8日に，本年度第2回(通算第4回)研究会をバイルートのサンジョゼフ大学にて同大学との共催で2018年3月16・17日に実施した。2回の研究会を通じてレバノンの共同研究員と共に，参集者全員が英語による研究報告・コメントを行い，2018年度の研究成果取りまとめに向けた深い討議を行った。一方で，第2回の研究会はサンジョゼフ大学を中心としたレバノンの研究者コミュニティに対して研究成果の還元とともに研究交流の機会を提供することとなった。
2. 海外拠点実施分の共同利用・共同研究課題「Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究)(第2期)」は，第2回研究会を2017年9月24日に Hotel Meridien Kota Kinabalu にて開催した。
3. 共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」は，第1回研究会を2017年11月25日に AA 研にて開催した。
4. 共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為(第二期)」は，通算第3回研究会を2018年2月17日に AA 研にて開催した。

5. 次世代研究者養成のために、2017年9月14～17日に16名の受講生(別に2名のオブザーバ参加学生あり)を対象に「中東☆イスラーム教育セミナー」を、12月16～17日に4名の受講生を対象に「中東☆イスラーム研究セミナー」を、いずれもAA研にて実施した。
6. 現地研究者との研究交流を目的としたラウンドテーブル(JaCMES Round Table “Imagining Resecularization in Iran and Turkey: A Comparative-Historical and Theoretical Inquiry”)をJaCMESにて2017年11月27日に実施し、日本・トルコ・イギリス・オーストラリアから6名のパネリストを中心とした討議を行った。(新学術領域研究「グローバル関係学」との共催。)
7. 2018年1月20・21日にAA研にて「オスマン文書セミナー」を開催し、延べ35名の受講生を対象にオスマン帝国史を中心とした歴史研究者の養成に貢献した。
8. 中東都市多層ベースマップシステムについて公開画像ページを新設するなど、さらなる充実を期した。
9. 本研究活動の全体を俯瞰できるウェブサイトを維持・発展させ、研究成果の公開に資した。
10. 2018年3月29日にAA研にて、中東・イスラームに係るAA研受入れの学振特別研究員2名の研究成果報告の研究会を開催した。

I-2.3 共同利用・共同研究課題

I-2.3.1 概要と外部評価

本研究所は、文部科学大臣によって言語学、文化人類学、地域研究分野の共同利用・共同研究拠点に認定された「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」であり、公募による共同利用・共同研究課題は、共同利用・共同研究拠点としての本研究所が最も重視する事業であることから、公募によらずに実施してきた従来の共同研究プロジェクトとは区別して、「課題」という新たな名称を採用している。共同利用・共同研究拠点の認定制度は、国公私立大学を通じて研究者が共同で研究を行う体制を整え、わが国全体の学術研究をさらに発展させる目的で、2008年に文部科学省が創設したもので、大学に附置された研究施設のうち「全国の関連研究者に利用させることにより、わが国の学術研究の発展に特に資する」と認められたものだけが共同利用・共同研究拠点に認定された。

このようにして認定された共同利用・共同研究拠点に対し、文部科学省は「募集による共同利用・共同研究の実施」と「採択にあたって学外委員が半数以上を占める審査委員会の審査」を義務づけており、これに従って、本研究所では共同利用・共同研究拠点に移行する2010年度を前に、全国の関連研究者から新たに共同利用・共同研究課題を公募し、学外委員が過半数を占める審査委員会の厳正な審査を経て11件の共同利用・共同研究課題を採択した。続く2011年度にも同様の方式で6件、2012年度に8件、2013年度に10件、2014年度に8件、2015年度に10件、2016年度に10件の共同利用・共同研究課題を採択し、結果として2017年度には計27件の共同利用・共同研究課題を実施することとなった。ちなみに、これら課題に参画するメンバーの数は延べ1,313名、2017年度中に開催した課題研究会の総数は128回、共同研究の直接の成果として謝辞にその旨が記された研究業績総数は論文・図書を合わせて92点にのぼる。

共同利用・共同研究活動をより広い形態で展開するために、本年度から外国人客員研究員が本研究所に一定期間滞在して所員とともに共同研究プロジェクトを推進する「外国人客員型課題」、さらに2018年度に向けて個人研究者が本研究所に短期滞在して共同研究を行う「短期滞在型課題」をスタートさせている。

これら進行中の共同利用・共同研究課題に対する評価は、年度末に提出される「実施年次報告書」を共同研究専門委員会が書面審査する形で行われ、翌年度以降の研究の発展に寄与している。

他方で、本研究所は 2017 年度も共同利用・共同研究の新規課題を公募し、共同研究専門委員会による審査を経て、応募のあった 10 件のうち 7 件を採択した。これにより、2018 年度には計 27 件の共同利用・共同研究課題を実施することになった。なお、公募による共同利用・共同研究課題の審査にあたっては 2010 年度の共同研究専門委員会による指摘を受け、従来の 5 項目の審査基準を 3 項目（「研究の背景」「期待される研究成果」「研究の実施計画」）に整理したうえ、それに基づいて各共同利用・共同研究課題に対する点数評価を行った。「外国人客員共同研究型課題」については、4 件の応募があり全てを採択した。また、「短期滞在型課題」についても、3 件の応募があり全てを採択した。

【本年度の各共同利用・共同研究課題の成果の概要等については、[I-2.3.2 共同利用・共同研究課題](#)の項を、研究会実施状況及び研究業績一覧については、[II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況](#)の項をそれぞれ参照】

I-2.3.2 共同利用・共同研究課題

アジア地理言語学研究

研究代表者名： 遠藤 光暁 参加者： 所員 2 共同研究員 18

研究期間： 2015(平成 27)年度～2017(平成 29)年度

研究計画

今年度第 1 回は「声調・アクセント」をテーマとし、国立国語研究所で開催予定の第 16 回方言学方法論国際会議の直前のタイミングで研究集会を行う。このテーマは本プロジェクトの 3 年間を通してハイライトとなるものであり、国内外の研究者に公開する。また「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」のプロジェクトとも連携して、アフリカにおける声調・アクセントの言語地図に関する発表も含み、またスラブ語やメキシコの声調言語の地理言語学的発表も依頼済で、世界的な眺望を得ることを期している。第 2 回は「雨が降る」をテーマとする。2016 年度の研究会の三つのテーマについての報告書である *Studies in Asian Geolinguistics* (以下, SAG) の 4, 5, 6 巻を AA 研の電子出版物として刊行する。また 5 月にインドネシアのパダンで予定されている第 24 回東南アジア言語学会のワークショップとして「地理言語学と東南アジア諸語研究」をこのプロジェクトのメンバーにより組織し、その *Proceedings* をモノグラフとして電子出版物として刊行する。間に合えば 2017 年度の研究集会の成果も SAG の 7, 8 巻として刊行する。またこのプロジェクトのメンバーが自分の地域に関して言語地図集を作成したものについてやはり電子出版物としてモノグラフを刊行したい。2018 年 1 月から 3 月までは研究集会はないが、それまでに作成した 8 種の地図・解説を 2018 年度に正式出版できるように修正し、形式・内容を統一する。

研究実績の概要(2017 年度)

第 1 回研究会では「声調とアクセント」をテーマとしてアジア諸語族・言語における状況を検討した。中国

語・ミャオヤオ語・タイカダイ語およびチベットビルマ語・オーストロアジア語の一部などのアジア東南部諸語では声調が存在し、それを取り巻く諸言語ではアクセントが対立しているかまたは単一アクセントとなっているのが大勢であるが、ピッチの高低や強弱のみならず **phonation type** や母音の長短が重要な役割を担っていることも多く、その複雑な様相のアジア全域におけるかなり詳しいタイプ分けと地理分布が明らかとなった。今回は地点数が最も多く、3~4000 地点に達しているかと思われ、当初目標としたアジア全域で 1000 地点というのを大幅に上回った。アフリカやメキシコの声調についても紹介してもらった。第 2 回研究会では「雨が降る」のアジアにおけるタイプ分けと地理分布を検討した。to rain という 1 単語で表わすタイプ、雨+降るという名詞+動詞に分けるタイプ(語順が逆のこともある)、「天」などの要素が必要なタイプなどが各語族内で認められ、平行した変化をたどっている可能性が具体的に跡付けられた。

終了報告

初年度の 2015 年度は「太陽・イネ・乳」につきそれぞれ一回ずつ研究会を開催し、アジア全域における語形の地理分布とその特質について検討した。「太陽」については「おひさま」のように擬人化する地域が東南アジアや東アジアに連続して分布したり、「昼間+目」という構成で表現する地域がオーストロネシア・タイカダイ・オーストロアジアの諸語族を越えて隣接して分布する現象が詳しく跡付けられた。各語族内でのさまざまな語形の地理分布とその形成過程についても推定がなされた。イネ・乳についてはイネの栽培や牧畜業が盛んな地域ではイネとコメ、動物の乳と母乳などを細かく区別して表現するが、そうでない地域では同一語でそうした意味領域を兼ねて指すという傾向が著しいことがアジア全域諸言語の細かな検討の結果明らかとなった。第 2 年度は予算が削減されたため二回研究会を開催したのみだが、当初予定していた「風・鉄」を一回で扱い、もう一回で「名詞の数え方(類別詞の有無)」を扱った。「風」については語族を越えて類似の音形が見られることが知られていたが、一層詳しく扱った。「鉄」は紀元頃に発明されて、各地に新製品として名前とともに拡散したものと見られ、古い語形がかえって周辺地域に残っていることも確かめられた。「名詞の数え方」についてはアジア東部・東南部に類別詞を使う言語がまとまっており、アジア全域における様相を細かに跡付けた。最終年度は当初の計画のうち「子音の調音方法」は扱えなかったが、他の二つの項目は完遂した。当初アジア全域で 1000 地点の密度でまんべんなく言語地図を描くという目標を立てたが、実際には 2000 地点程度まで到達し、予期していたより遥かに豊かな成果を挙げた。

成果の公開状況、計画

各回の研究成果を Studies in Asian Geolinguistics という名のもとに英文で AA 研電子出版物として公開している。2018 年 1 月の時点では <https://publication.aa-ken.jp/> に 1, 2, 3 巻と Monograph-1 が既に公開されているが、4, 5, 6, 7 と Monograph-2 も年度末までには公開する予定である。

2018 年度にはやはり AA 研の電子刊行物として、2017 年度第 2 回の研究成果を SAG 8 巻として公開し、更にこの 3 年度において平行して行われてきた諸語族・言語の基礎語彙の地図集も公開する。鈴木博之氏のチベット語は既に編集の最終段階にあり、更に白井聡子氏の川西諸語、岩佐一枝氏の彝文字、深澤美香氏のアイヌ語なども進行中であり、また遠藤光暁の雲南諸言語に関するものも含まれる可能性もある。また本プロジェクトのメンバーが多く参加する第 4 回アジア地理言語学国際会議や中国語方言比較と地理研究フォーラム(中国語の予定)の会議論文集も電子刊行物の形で公開したい。また、このプロジェクトの延長線上にあるアジア地理言語学のテーマに関する他のモノグラフも電子刊行物として公開申請する可能性もある。

通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーキング

研究代表者名: 下地 理則 参加者: 所員 1 共同研究員 11

研究期間: 2015(平成27)年度～2017(平成29)年度

研究計画

本研究課題は、琉球諸方言のケースマーキングの類型化を行うことを目指している。前年度の目標は、①主語・目的語のハダカ標示(無助詞)を正面から扱うということと、②上記に関連し、主題や焦点などの取り立て性と格標示を切り離さずに統一的に考えるパラダイムを模索するということ、であった。これらを達成するため、共通の調査票の開発が2016年の大きな目標であり、それはおおむね達成した。

本年度は3回の研究会を予定している。第一回目の研究会では、①②を踏まえた各方言の格体系・情報構造体系の概要を報告しあう。夏休み中のフィールドワークで共同の調査票を埋めるようにし、第二回目、第三回目の研究会で、さらに報告を行う。第三回の研究会の最後の総括で、本研究の成果の書籍化に向けた話し合いを行う。

研究実績の概要(2017年度)

今年度、とりわけ焦点表示と格表示の関連について検討することができ、大きな進展があった。具体的には、琉球諸語に見られる焦点表示(いわゆる係り助詞による表示)にかんして、以下の事実が明らかになってきた。

(1) 北琉球では、焦点化が格表示に影響を与えるが、南琉球ではそうではない、という一般的な傾向がある。

(2) 北琉球の特に奄美諸方言に目立って見られる特徴として、元々の主格が **nu** の場合は、**ga** に交替するか、焦点助詞 **du** に置き換えられるが、元々の主格が **ga** の場合は、そのままであることがある。元々の主格が **ga** の場合に、焦点化によって **du** が後続するなど、なんらかの方法で焦点標示される場合、**nu** も必ず焦点表示される。このことから、主格 **ga** には、それ自体に焦点表示の機能がある可能性が示唆される。これは、九州方言の特徴にも重なる。

終了報告

琉球諸語のケースマーキングは、典型的に見て珍しい有標主格型(主語が有標、目的語が無標)や、有標主格・対格型(いずれも徹底して有標)が見られるとされてきた。本研究は、特に前者の型が琉球諸語のかなり広範な地域に見られる点に着目し、そもそも観察事実が有標主格と見なされるのかどうかを問い直すとともに、こうした珍しい型の存立基盤を探り、ケースマーキングの類型論に寄与することを目指してスタートした。

結果的に、類型論において珍しいとされる有標主格型が琉球諸語に見られるかという点について、疑義が呈される結果となった。すなわち、有標主格型の条件である「主語が徹底して有標」という点が満たされない言語がかなり多いことがわかった。とりわけ、自動詞主語が無標になる場合が多いことがわかった。与那国語などでは、自動詞主語のうち、動作主的なものは有標、そうでなければ無標になりやすい、という特徴があり、分裂自動詞型が成り立つことがわかったが、沖縄語や八重山語などでは、ここまで明確な分裂自動詞性はなく、自動詞主語のうち、発生・消滅を表す動詞の主語が無標になりやすいことがわかってきた。

本研究の後半は、なぜ、発生・消滅を表す動詞の主語が無標になるのか、という問題を集中的に議論した。

この議論は、これまでのケースマーキングの類型論でありあまり考えられなかった、情報構造の観点を取り入れることに繋がって行く。発生・消滅文の主語は、主題になりにくいことが語彙的に明らかであって、文自体が新規導入されやすい。日琉諸語では、主格が「主題ではないこと」を積極的に示す機能(脱主題化機能)を有する、という研究代表者の仮説を元に、発生・消滅文の主語は、脱主題化が不要であるために、主格がない無標主語が生じやすいのではないかと、との議論が展開された。

本研究では、南北琉球諸語の格体系の概要を記述することができた点で、記述的・類型的価値が高いが、その最大の成果は、上述のように、有標主格性の問題に正面から取り組み、その結果、格表示と情報構造表示を体系的に考えて行く必要があることを実証したことである。

成果の公開状況、計画

現在、成果を論集の形でまとめている段階であり、夏頃、オンラインで公開される。琉球諸語記述研究会が編集している『琉球諸語記述文法』(<https://sites.google.com/site/ryukyudocumentation/liu-qiu-zhu-yu-ji-shu-wen-fa> 現在 vol.4 まで刊行)の特集として公開される予定である。

また、本プロジェクトで作った格表示に関する調査票が、国立国語研究所の共同研究(木部暢子教授、「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」)で、全国諸方言の記述の共通フォーマットとして正式に採用されている。その調査票は、以下のページで公開されている(<https://www.mshimoji.com/grammarlist>)

上記の『琉球諸語記述文法』での公開の後、その原稿を英訳し、Language Science Press からの出版を考えている。そのための編集委員を。共同研究メンバーで立ち上げている(中川奈津子氏、新永悠人氏、麻生玲子氏)。

東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究

研究代表者名: Eric McCready 参加者: 所員 1 共同研究員 17

研究期間: 2015(平成 27)年度～2017(平成 29)年度

研究計画

本プロジェクトの目標は、形式意味論・語用論の道具立てを手がかりに、対象言語における談話小辞についての理解を深めることである。昨年度の研究会では、メンバーは多くの必要な道具立てについて知識を得るとともに、いくつかの対象言語における談話小辞の体系について情報を共有した。

本年度の研究会では、意味分析に必要な道具立ての検討を引き続き行うとともに、対象言語の小辞の体系についての経験的観察を進める。さらに、対象言語の言語事実を説明するためには既存の道具立てにどのような修正を加えたらいいのかについても議論を始める。年度末には、メンバーは各自の研究対象言語を分析するにあたって必要なすべての道具立てを身につけることが期待される。また、少なくともいくつかの言語については、実際の言語事実の形式的分析が遂行できるような段階に持っていく。具体的には、情報に関わる小辞の分析で有用な形式語用論の概念である「検討中の疑問(Questions Under Discussion)」やタイ語をはじめとする対象言語の小辞の体系についての研究発表を予定している。

研究実績の概要(2017 年度)

今年度は、本プロジェクトにおけるこれまでの研究を総括した。プロジェクトの最初の 2 年間は、まず、プロ

プロジェクトのメンバーに形式的な道具立てと言語現象について知ってもらい、そして2年目にはそれとメンバーによる具体的な言語現象や小辞の(形式的な)分析の組み合わせとなった。最終年度は、さらにそのような報告を行うとともに、個別の研究者の研究プロジェクトの研究進捗状況の報告も行った。

終了報告

本プロジェクトの目標は、アジアの諸言語における談話小辞に関心を持つ研究者の間での相互交流を活性化させ、かつ形式的なアプローチと記述的なアプローチをつなぐことであった。この目標を達成するために、本プロジェクトではプロジェクトのメンバーおよび関係する研究者による、形式意味論、動的意味論、話題となっている質問(Questions Under Discussion)、日本語、北京語、タイ語、シンガポール英語、タガログ語、マレー語についての研究発表を行った。形式言語学と記述言語学の研究者による生産的な対話を開始することができた。

成果の公開状況、計画

本プロジェクトの研究成果は、一般公開の研究会での発表や東京外国語大学で開催された第23回オーストロネシア形式言語学年次大会により、AA 研所員やその他一般の人々に公開してきた。本プロジェクトのメンバーはまた、国内外のさまざまな学会でも関連する研究を発表し、成果を出版している。

本プロジェクトの主要な研究成果として、Routledge 社から E. McCready, H. Nomoto and Y. Takubo(編) *Discourse Particles in Asian Languages* として、2冊の書籍を出版することになっている。2018年に、すべての章が提出され、査読、修正を経た後、2019年に出版の予定である。本プロジェクトのメンバーのほとんどが同書に参画するほか、談話小辞とアジアの諸言語の著名な学者にも執筆を依頼した。

「アルタイ型」言語に関する類型的研究

研究代表者名: 山越 康裕 参加者: 所員 4 共同研究員 14

研究期間: 2015(平成27)年度～2017(平成29)年度

研究計画

2015, 2016 年度に引き続き、年間通してある程度共通の形態・統語論に関するテーマを設定し、共同研究員が研究対象とする言語における形式と機能について確認する予定である。15年度および16年度はとくに動詞を中心とした屈折体系、とくに非定型動詞の機能やそれをとりまく節連結に焦点をあて、諸言語のふるまいについてそれぞれ報告を受けた。17年度も引き続きこのテーマを中心的に扱うことで、アルタイ型諸言語の特徴について議論を重ねる。このほか、当初計画にあった名詞をとりまく語形成の問題、つまり、厳密な意味での語形成に関与する非接尾辞的手法が非常に限定されている反面、音韻的には「句」に相当する、類義語や対義語の「並列」によって新たな概念をあらわす方法が発達しているという共通特徴についても可能な限り扱い、言語間の異同をひろく対照していくことを計画している。最終年度にあたるため、成果刊行についての打ち合わせもおこなっていく。

研究実績の概要(2017年度)

2017年度は、合計2回の研究会を開催した。過去2年間の研究会では動詞の屈折に関する諸言語のふるまいが議論の中心であり、本年度も引き続き動詞の屈折、とくに非定形の形式に関する報告が中心であっ

た。

2017年度第1回研究会は、若手研究者2名による報告がなされた。このうち共同研究員の鍛冶広真氏(東京大学)はエウエン語の形動詞 V-ci に関する報告であった。一般にアルタイ諸言語で「形動詞」とカテゴライズされる動詞の屈折形式は 1. 連体修飾用法, 2. 名詞的用法, 3. 述語的用法の三つの用法が観察され、とくに 1. 連体修飾用法が形動詞の第一義的な用法とされる。しかしエウエン語の形動詞に分類される V-ci には連体修飾用法が観察されないということが指摘された。もう一方の黒島規史氏(東京外国語大学)からは朝鮮語の連用節内のテンスについて情報提供していただいた。アルタイ諸語は従属節のテンスが主節のテンスを基準として決まる、いわゆる相対テンスをとる傾向がある。一方朝鮮語の連用節については、その独立度が高いほど相対テンスと解釈される傾向があるということが指摘された。

第2回研究会では3名の報告があった。このうち所員の児倉徳和氏・山越康裕両名の報告も動詞の非定形に関するものであった。児倉氏はツングース語族シベ語の、名詞化の機能をもつ接辞 -ngge に関する報告であった。この接辞は同じく名詞的機能をもつ他の形動詞とも異なる性格を有する。とくに形動詞との違いは談話に導入済みのできごとや人物を指示する(-ngge)か、否か(形動詞)で異なることが指摘された。山越氏はモンゴル語族全体の分詞(=形動詞)の主節述語用法の分布について報告し、北方に分布する言語ほど主節述語用法がさかんであることを示した。風間伸次郎氏(共同研究員・東京外国語大学)はアルタイ諸語の再帰代名詞のふるまいに関する報告をおこなった。

その他、成果刊行物に関する打ち合わせも研究会内でおこなった。

終了報告

本研究課題は3年間、計8回の研究会を開催し、アルタイ諸言語(ツングース語族、モンゴル語族、チュルク語族の諸言語)および、同じくアルタイ的な文法特徴を有する言語(ケチュア語、ブルジャスキー語)、また逆にそのような類型とは全く異なる言語(スライアモン語)も含め、数多くの言語の実例とその類型的特徴について活発に議論を交わすことができた。膠着的、Pro-drop、主要部後置、豊富な節連結と外からの観察では共通特徴を非常に多く有するいわゆる「アルタイ型」言語であるが、その根幹にあるのは語幹を先頭に接辞や接語が連なる連辞性にあるという予測が本研究課題の議論において出てきたのは一つの大きな成果といえる。またそのような共通特徴を多く有する反面、それぞれの言語の動詞や名詞といったカテゴリー内の統語的特徴は差異が大きく、類型的研究の難しさも同時に判明したといえる。

本研究課題はおもに国内の研究者によって構成されていた。いずれもそれぞれの研究対象言語の文法記述を継続的にこなっており、その成果をこの研究会を通じて報告し、議論を深めたことは参加した共同研究員のみならず、参加した所員にとっても非常に有意義なものであった。さらに共同研究員以外の若手研究者計3名を招いての報告も実施し、若手研究者の育成にも一定程度貢献を果たしたといえる。

しかしながら、基本的には国内の研究者による成果報告であり、国際的な発信には乏しかったのも事実である。この点を解消するため、共同研究の成果は期間終了後にオンライン・ジャーナル『アジア・アフリカの言語と言語学』(Asian and African Languages and Linguistics)の特集として英語論文をとりまとめ、公刊することをめざしている。それと同時に、一般への成果還元として『FIELDPLUS』での特集もおこなう予定である。

成果の公開状況、計画

プロジェクトページに研究会の内容を報告している。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp212>

2018 年度中にオンライン・ジャーナル『アジア・アフリカの言語と言語学』にて特集を組み、成果を英文で公開する。一般向けには『FIELDPLUS』での特集を予定している。

参照文法書研究

研究代表者名： 渡辺 己 参加者： 所員 4 共同研究員 15

研究期間： 2016(平成 28)年度～2017(平成 29)年度

研究計画

2 年目であり最終年度である今年度は、ここまでまだ発表をしていないメンバーによる発表を、3 回の研究会でおこなう。昨年度の研究会では、個別言語・語族の参照文法書に関する紹介、研究史、問題点などの他、参照文法書のあり方について、活発な議論ができた。今年度もそれを引き続きおこなう予定である。

最終的な成果として、メンバーそれぞれの発表を元にした報告書を作成する予定であり、今年度中にそれについての意見交換もおこなう。刊行は日本語でデジタル版のみを予定しており、来年度の刊行を目指す。

研究実績の概要(2017 年度)

最終年度であった本年度も、前年度に引き続き、参加者による発表をおこなった。研究会は 2 回おこない、1 回目(通算 4 回目)はいわゆるシナ・チベット・ビルマ系の言語の文法書について 3 名から発表があった。この他、AA 研に外国人研究員として在籍していた Tun Aung Kyaw 氏にも自らが母語のビルマ語の文法書記述に取り組んでいる話を報告してもらった。

第 2 回目(通算 5 回目)は 2 日間に渡り、6 名の発表をおこなった。北米・南米、パプア、朝鮮・韓国、ロシア(ウラル)およびオーストロネシアと、広範に渡る地域の話となった。いずれの回においても、それぞれの地域あるいは語族における文法書の問題点が報告された。

終了報告

2 年間という短期間の研究課題であったが、5 回の研究会をおこない、いずれも大変充実した内容だった。当然ながら、世界に 6 千数百はあるという言語のすべてをカバーすることも、世界中の地域をカバーすることも、この人数ではできないし、日本に研究者がほとんどいない語族・地域もある。それでも本課題では、広範な地域をカバーすることができたと考える。そして、各参加メンバーは、普段は特定の一言語のみを対象にしているひと、その言語の属する語族、あるいはより広範にその地域を報告対象としてもらったため、研究会における発表には多大な準備が必要であった。それにも関わらず、どのメンバーも中身の非常に濃い発表をおこなった。

一言語の文法書を書くというのは、言語学の中でも究極の研究であり、言語研究は結局それを目指すものであると考えられる。つまり、細かい言語現象を研究していても、それが文法全体でどう位置づけられるか、その現象の分析が全体に整合性をもたらすかが重要である。それをひとつにまとめ、参照文法書とするのは容易ではない。本課題を通して、古くから研究されてきた語族・地域でも、優れた文法書が揃っているのはそれほど多くなく、言語研究者にはまだまだ山のようにやるべき仕事があることが痛感された。

成果の公開状況、計画

成果としては公開しているものはないが、AA 研のウェブサイトには各研究会の報告書を掲載している。

2018 年度中に成果論集を取りまとめて刊行する予定である。紙媒体のものは作らず、デジタル版のみで、東京外国語大学の図書館レポジトリにて公開する予定である。

バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ 1)

研究代表者名: 阿部 優子 参加者: 所員 2 共同研究員 18

研究期間: 2016(平成 28)年度~2018(平成 30)年度

研究計画

2016 年度は、19 パラメーターに加え、新しく提案された 142 パラメーターについて、データを検証する国際ワークショップを開催したが、本年度中に、そのデータの具体性と信頼性を高め、公開可能な形式にすることを目指す。

また、本年度はメンバーの品川氏が連携先であるロンドン大学 SOAS に 6 ヶ月間、頭脳循環プロジェクトにて研究滞在するため、本プロジェクトとの連携をより一層高められる見込みである。6 月には米田氏と品川氏が同大にて研究発表を予定している。さらに、10 月からは同大の連携プロジェクトの主要メンバーである Hannah Gibson 氏が招聘研究者として大阪大学に滞在予定であり、Gibson 氏を中心にデータの整備を行う予定である。

研究会に関しては、これまでに提案された 142 のパラメーターのうち、名詞修飾に関する項目に焦点を当てて分析を深化させていくことで、バントゥ諸語全体を視野に入れた名詞修飾に関する現象の類型的多様性を提示することを目指す。新たなパラメーター設定および類型化の可能性をも視野に入れ、昨年度の国際ワークショップの成果を踏まえた発展的な研究会を 3 回開催する予定である。

研究実績の概要(2017 年度)

本年度は、AA 研にて研究会を 3 回実施した。また 9 月には、大阪大学にて、研究会欠席等により作業が遅れているメンバーおよび、今後、研究会に参加を希望するメンバーに向けて、フォローアップミーティングを行った。

第 1 回は、昨年度の進捗確認、今年度の計画について話し合い、続いてメンバーの品川氏より、6 月 9-10 日にロンドン大学 SOAS で開催された、当共同研究課題の連携プロジェクトの WS の参加報告があった。また、米田氏より「バントゥ諸語の名詞修飾節に見られるマイクロ・バリエーションー新たなパラメーターの提案ー」というテーマでマイクロ・バリエーションの事例報告があり、それをもとに、各参加者の興味のあるトピックなどを話し合う、ブレインストーミングを行い、その中から「完了、-ile」を次回研究会のトピックとした。

第 2 回は、古本氏がスワヒリ語 2 方言の「完了」と「完結」というテーマで事例報告を行い、また参加者の調査言語の「完了、-ile」に関わるデータを各自が発表した。また、ロンドン大学 SOAS の連携プロジェクトより、Gibson 氏を迎え、"The interaction between tense-aspect and information structure in Bantu" というテーマで話題提供してもらった。

第 3 回は、これまで言語データの報告ができていなかった、Lee 氏よりツォンガ語(S.53)のマイクロ・バリエーションの一部を発表し、データやパラメーターについて議論を行った。また、次年度にむけて成果物編集・出版に関する打ち合わせを行い、タイムスケジュール等を調整した。

本年度は、各参加者の研究言語のマイクロ・バリエーションのパラメーター、データの精緻化を図るとともに、

個別の3トピックについて議論することができた。また、10月よりロンドン大学 SOAS に品川氏が訪問研究者として滞在したり、ロンドン大学からは Gibson 氏を3ヶ月間大阪大学に招聘してもらい、研究会にも参加してもらうなど、活発な交流ができた。

成果の公開状況、計画

各言語データは、精緻化と統一が必要なため、公開していない。

次年度は、個別トピックとしては「完了、-ile と imbrication」に関する類型化を目指すこと、142 パラメーターのデータ集出版にむけての具体的な作業に入る。

アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究

研究代表者名： 梶 茂樹 参加者： 所員 2 共同研究員 15

研究期間： 2016(平成28)年度～2018(平成30)年度

研究計画

去年度に引き続き、共同研究員の研究している言語の声調・アクセント類型および、その文法的機能などについて検討を行う。類型については、1型、2型、多型など多くのパターンが検討できるよう期待する。文法的機能については、時制・アスペクト・ムードによる活用と声調との関係がアフリカ諸語においては重要であるが、それ以外にも、関係節と条件節の関係における声調の役割や、情報構造と声調の関係など、世界の言語研究においてほとんど行われていない分野についても研究を行う。

またアジア諸語との関係を含めて、アフリカ諸語のみならず、世界の声調・アクセント言語についても視野を広げた研究を行う。

研究会は2(可能ならば3)回行う予定である。場合によっては研究協力者に参加を求め、共同研究員でカバーできない言語についても検討できるよう配慮する。

研究実績の概要(2017年度)

ザンビアに話されるバンツュー系のランバ語であるが、現在調査を継続中であり、確定的ではないが、名詞(接頭辞+語幹からなる)については、接頭辞が高声調のものと低声調のものがあ、それぞれの場合について、語幹の各音節に高声調が来う。動詞は他の多くの言語同様、語根が高声調のものと低声調のものがある。しかし、この区別はいくつかの時制・アスペクト・ムードで失われつつある。

タンザニアのロンボ語(バンツュー系)の名詞声調パターンは、単独形では、1音節語で H と L, 2音節語で LH, HL, HH, H ↓ H, 3音節語で HL ↓ H, LHL, LH ↓ H1, LH ↓ H2, HLL, HL ↓ H, HHL, HH ↓ H, 4音節語では LLHL, LHLH, LHLL, HLHL のパターンがある。しかし接頭辞と語幹初頭の声調のポラリティー(逆性)や H の拡張、パターンの揺れなどを考慮すると、基底においては、語幹は HL, HH, LL, LH に集約できる。

タンザニアのボンデイ語(バンツュー系)では2音節名詞では、可能な組み合わせ HH, HL, LH, LL のうち現れるのは HL と LL のみ(ただ HL はさらに下位区分される可能性あり)、3音節名詞では LHL, 4音節名詞 LLHL のみのようである。この言語では、単独では *ʒaa*「お茶」、*m̄ti*「木」のように異なるパターンで現れても、後に形容詞がつくと *ʒaa ʒāngu*「私のお茶」、*mti wāngu*「私の木」のように区別がキャンセルされる。これはドメインの問題とも係わってくるが、スワヒリ語的性質であるのが興味を引く。

一般にバンツュー系の言語においては、動詞活用は(特に声調変化において)極めて複雑でかつ変化形

の数が多いが、詳しく見ると別のものとされている構文が同じであることがわかることがある。ウガンダのニョロ語では、目的語関係節構文と「～の時」を表す従属節構文がまったく同じであることが、53 ある時制・アスペクト・ムードにおける声調変化全体を通して明らかとなった。

成果の公開状況、計画

この研究プロジェクト専用のウェブ・サイトは持たないが、随時 AA 研の HP を利用して発信を行っている。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp219>

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/jrp/jrp219>

なお各自の論文など研究成果は随時、しかるべきところに発表している。

平成 30 年度は各言語の分析を継続すると同時に、プロジェクトの成果全体をまとめる方向で研究会を進める。

アジア文字研究基盤の構築 1: 文字学に関する用語・概念の研究

研究代表者名: 荒川 慎太郎 参加者: 所員 2 共同研究員 11

研究期間: 2017(平成 29)年度～2019(平成 31)年度

研究計画

本課題は、古代から現代までの、アジア地域の多種多様な文字体系を対象とし、言語学諸分野の中でも研究の遅れている「文字学・文字論」の研究を深化させることを目的とする。西夏文字、インド系文字、古代から現代までの漢字・疑似漢字、ヒエログリフなどの専門家が共同するのが特色であるものの、各自の専門とする文字の共通理解を図るのが必須である。

初年度はこうした基礎の構築を重点的に行う。3 回の研究会(一回に 4 人程度が担当)において、各共同研究員が自身の専門とする文字の解説を行い、他の研究者との討議を通じて、文字学一般の見地からの一般化・特殊化ができるかを考察する。例えば第 1 回研究会では、西夏文字・碑文ビルマ文字・南方漢字・甲骨文字をテーマに報告と討議を行う。

また本課題は、一般文字論、文字の字形そのものの多面的な研究のプラットフォームとなることも目指す。Web 上で閲覧・編集できる「文字学術語集」の作成を開始する。本年度はその項目の策定・フォーマットの検討から始める。

研究実績の概要(2017 年度)

本課題は、古代から現代までの、アジア地域の多種多様な文字体系を対象とし、言語学諸分野の中でも研究の遅れている「文字学・文字論」を深化させることを目的とする。西夏文字、インド系文字、漢字・疑似漢字、ヒエログリフなどの専門家が共同するのが特色である。様々な文字を扱うため、まずは各自の専門とする文字の共通理解を図るのが必須である。

初年度はこうした基礎の構築を重点的に行った。3 回の研究会(一回に 2～4 人が担当)において、各共同研究員が自身の専門とする文字の解説を行い、他の研究者との討議を通じて、文字学一般の見地からの一般化・特殊化ができるかを考察した。第 1 回研究会では、西夏文字・碑文ビルマ文字・南方漢字・甲骨文字を、第 2 回研究会では、古代エジプト聖刻文字・楔型文字・ブラーフミー文字・古平仮名を、第 3 回研究

会では、ロロ文字・チュノムをそれぞれテーマに報告と討議を行った。一般への成果還元として公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の文字学」も開催した。客員として滞在された孫伯君も発表を行い、共同研究の成果を示すことができた。

また本課題は、一般文字論、文字の字形そのものの多面的な研究のプラットフォームとなることも目指す。Web上で閲覧・編集できる「文字学術語集」の作成を開始する。本年度はその項目の策定・フォーマットの検討などを始めた。

成果の公開状況, 計画

検討中

南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション

研究代表者名: 中川 裕 参加者: 所員 1 共同研究員 7

研究期間: 2016(平成 28)年度～2018(平成 30)年度

研究計画

三つの下位プロジェクトを次の要領で進める。

(1) 『カラハリ動物誌』編纂(全員が担当)

執筆項目の分担確認ののち、メーリングリストで相互レビューしながら執筆を進める。哺乳類と鳥類の全項目について第1草稿を完成する(ルーティーンワーク的活動となる)。

(2) 語彙意味類型論的考察(中川・菅原・田中・大野が担当)

グイ・ガナ動植物範疇の分類についての論文執筆(中川・菅原・田中)。特に動物範疇間の枝分的階層構造と中間段階的結点を横断する変態プロセスによる類範疇との関係を総体として表示するモデルの提案に触れる考察。

特殊意味領域 (i.e. eat-drink verbs, temperature words) におけるグイ語の類型論的特徴の考察を論文として執筆(大野・中川)。

(3) カラハリ狩猟採集民写真展の開催(田中・高田・丸山・中川)

田中氏撮影による1970年代以前のグイ・ガナの狩猟採集遊動生活の写真の展示会を開催し、その機会を利用して研究成果の社会還元を試みる。

研究実績の概要(2017年度)

(1) 『グイ・ガナ動物事典』編纂

執筆項目、分担、共同編集作業の方法について討議し、決定した。Google documentによるオンライン編纂方法を採用し、主に哺乳類と鳥類の項目についての執筆・編集を進めた。

(2) 語彙意味類型論的考察

グイ・ガナの動植物範疇および特殊意味領域 (i.e. eat-drink verbs, temperature words) についての分類、類型論的考察を進めた。(1)と合わせた中間制作物・報告として複数の論文執筆・口頭発表を行った。

(3) 『田中二郎写真展: 一九七〇年代までの伝統的狩猟採集生活を送るブッシュマン』の開催

研究成果の社会還元のための一般向けイベントとして写真展・トークイベントを実施した。田中二郎・京都大学名誉教授撮影による1970年代までの伝統的生活を送るグイ・ガナの狩猟採集遊動生活の写真35枚

を展示した特別写真展を開催した。また、写真展開催中に同会場で撮影者による写真の解説などを含むトークイベントを行った(田中, 中川)。

成果の公開状況, 計画

『グイ・ガナ動物事典』を Google document 上で共有しながら, 共同編纂中である。その一部を来年度試験的に公開するための検討を始めた。

上記 (1)(2) に関する学術的成果の公表に加えて, 一般向け媒体での公開とイベント開催(上記 (3))を行った。

上記の通り『グイ・ガナ動物事典』のオンラインでの試験的公開についての検討をすでに始めている。公開のための具体的手法, 手続き, 問題点について討議・合意し, 公開を目指す。

マレー語方言の変異の研究

研究代表者名: 内海 敦子 参加者: 所員 1 共同研究員 10

研究期間: 2017(平成 29)年度～2019(平成 31)年度

研究計画

2017 年度の計画

2017 年度は変種の比較に関して以下の準備を行う。(1) データを収集する変種を確定し, それぞれの変種に関する文献を収集するとともに, 新規に現地調査が必要な場所に関する調査計画を立てる。(2) 各変種においてデータを収集する項目(パラメータ)を確定する。単語の意味に関しては内海が, 音声・音韻に関しては主に内海・稲垣・野元が, 形態統語的特徴・談話的特徴については主に三宅・長屋・塩原・野元が担当する。(3) 得られたデータを地図に標示し, 全世界の研究者と話者がアクセスしやすい方法を検討し作成を開始する。(4) 内海・三宅・塩原が 2016 年より調査を進めているマレー語変種間に見られる文法的態の選択に関する対照研究を継続し, 得られたデータに関する検討を共同で行う。(5) 海外の共同研究員との知識共有のため, 国際研究会を開催し問題点を議論する。

2017 年度の第 1 回研究会において, (1)(2) について議論し, 夏以降に各研究員が行う調査において, 対象となる項目を設定する。7 月～9 月の期間に各研究員それぞれが担当する変種について調査を進める。第 2 回研究会においては, 調査の結果を報告しあう。第 3 回研究会は海外の共同研究員と共に国際研究会を開催し, それまでの研究成果の共有とそれ以降の研究の方向性を確認する。

研究実績の概要(2017 年度)

本研究の目的はマレー語の地域変種の変異を調査しまとめることである。

2017 年度は変種の比較に関して以下の準備を行った。(1) データを収集する変種を確定した。カリマンタン島は Antonia Soriente 氏と稲垣和也氏, スンバワ島とヌサ・トゥンガラ諸島は塩原朝子氏, ジャワ島は降幡正志氏と三宅良美氏, スマトラ島は内海敦子とスリ・ブディ・レスタリ氏, スラウェシ島は内海敦子が担当することを決定した。それぞれの変種に関する文献を収集するとともに, 必要な現地調査を各自行った。(2) 各変種においてデータを収集する項目(パラメータ)を確定する。単語の意味に関しては内海が, 音声・音韻に関しては主に内海・稲垣・野元が, 形態統語的特徴・談話的特徴については主に三宅・長屋・塩原・野元が

担当した。(3) データを言語地図に表示する方法を共有した。(4) 内海・三宅・塩原が2016年より調査を進めているマレー語変種間に見られる文法的態の選択に関する対照研究を継続し、得られたデータに関する検討を共同で行った。(5) 海外の共同研究者との知識共有のため、国際研究会を開催し問題点を議論した。

成果の公開状況、計画

現在、オンライン地図ソフトを用いた言語地図を作製中である。2018年度中にマレー語の語彙を示した言語地図を公開する予定である。

チュルク諸語における膠着性の諸相 ―音韻・形態統語・意味の統合的研究―

研究代表者名： 佐藤 久美子 参加者： 所員 1 共同研究者 17

研究期間： 2017(平成29)年度～2019(平成31)年度

研究計画

1年目の本年度は、第一に、チュルク各言語における膠着性に関わる現象を広く共有することに重点を置く。年度内に3回の研究会を開き、共同研究者がこれまでに取り組んできた各言語の研究課題について発表し、当該の言語における音韻・形態統語・意味の基本的な構造と、当該の言語において膠着性が問題となる、具体的な現象を取り上げ、膠着性を論じる上での問題点を共有する。また、他の言語を専門とする共同研究者との議論により、他の言語で類似する現象があるか検討する。

このような研究会の開催を通して、共同研究者が各言語の詳細な記述を進めると同時に、言語間の対照を行うための基盤を作る。各言語の研究で個別に論じられていた問題を研究会で報告し、問題意識を共有することで、チュルク諸語全体で対照研究につなげるためのテーマの策定を行う。具体的には、収集されたデータをどのように整理していくべきか、そして、それらをどのような分析手法を用いるのが適切であるかを議論する。

研究実績の概要(2017年度)

初年度にあたる今年度は、3回の研究会を通じ、まず本課題で取り組む具体的なトピックと問題意識を共有し、ほぼ全ての共同研究者が共有されたトピックに基づき各自の専門とする言語についての報告を行った。

第1回、第2回の研究会では、プロジェクトの主査である佐藤がプロジェクトの趣旨の説明を行った。また、共同研究者が語アクセントや句・節・文のプロソディ、派生や形動詞・動名詞の形態統語的特徴、補助動詞の形態統語的・意味的特徴といった、本研究課題で問題とする音韻・形態統語・意味が複合した現象に関する話題提供を行った。そしてこれらの情報提供を通じ、本研究課題で取り組む具体的なトピックと問題の所在をメンバー内で共有した。

2018年3月に第3回研究会を兼ねて開催した国際シンポジウムでは、海外から招へいたチュルク諸語研究を代表する研究者の講演を通じ、これまでのチュルク諸語研究および最新の研究動向をメンバー内で把握した。さらに、プロジェクトのメンバーが第1回と第2回研究会で提供されたトピックに基づき各自が専門とする言語に関する研究報告を行い、海外からの招へい研究者も交えて討論を行った。

成果の公開状況、計画

今年度は初年度であることから、論文等の形式での成果公開は行うに至っていない。しかし、第3回研究

会を踏まえ、成果公開にあたり、シンポジウムで招へいした Lars Johanson, Eva Csato Johanson 教授から、チュルク諸語研究において著名な国際的学術誌、Turkic Languages での成果公開の提案を受けている。

次年度から、第 3 回研究会で行われた発表を論文化し、Turkic Languages 誌に投稿し、査読を受けることを予定している。現在、Turkic Languages 誌では特定の号に今回のシンポジウムに基づく特集を組むことは予定していないため、投稿は内部でのコメントを行い、完成した順に投稿し、複数の号にまたがった掲載を目指す。また、必要に応じ他の学術誌への投稿もメンバー内で相談し、相互に協力して論文の執筆と内部査読、投稿を行っていく。

文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性

研究代表者名: 中山 俊秀 参加者: 所員 3 共同研究員 16

研究期間: 2017(平成 29)年度～2019(平成 31)年度

研究計画

本研究では、一言語内に含まれる構造規則や文法パターンの多重性(多様な形式の併存)と分散性(局所的な分布)に焦点を当て、その実態の把握、バラツキの中の体系性の分析を行い、さらに複数の多様な規則を同時に内包する体系として文法を捉え直す方策を考察する。研究 1 年目である本年度は、まず、運用基盤言語学、相互行為言語学など言語使用・言語変化の実態と親和性の高い文法研究アプローチにおける先行研究を確認しつつ、なぜ文法の多様性に関心を持つのかという問題意識の明確化と共有をはかる。その上で、使用環境によって構造規則・パターンが異なる事例の研究を文法体系の中にある多様性の洗い出しとタイプ化を進める。

研究会は基本的に公開で行い、先行研究や事例研究報告に基づく議論、理論的問題を設定したオープンディスカッション、自然談話データに基づくオープンな討論などを組合せ、ディスカッションに重点を置く。研究会と平行して、関連論文を読み進め研究リソースとしてまとめるための公開読書会・勉強会を定期的で開催し、研究会における議論を深めると同時に共同研究活動への関心を広げる。研究会での議論、読書会・勉強会の報告は AA 研ウェブサイトの他に、プロジェクトサイトにおいても公開する。また、関連先行研究の紹介、論点のまとめなど、研究リソースをまとめ、公開する。

研究実績の概要(2017 年度)

本年度は、まず、用法基盤言語学、相互行為言語学など文法の多重性の研究の土台となる文法研究アプローチを確認しつつ、なぜ文法の多様性に関心を持つのかという問題意識の明確化と共有をはかるとともに、使用環境によって構造規則・パターンが異なる事例を持ち寄り文法多重性の現象面からの確認をした。

使用基盤モデルでは、文法に含まれるべき知識として、機械的組合わせ規則だけではなく、使用の中で定型化された構文に加え使用状況上の制約なども含まれるとされる。このモデルでは、「文法」に含まれる知識が限りなく広がってしまう危険性があるが、その境界を論理的に決める手がかりはあるか、という問題が重大な論点として浮かび上がった。そこで、年度後半では、「文法知識には何が含まれるのか」「文法知識はどのような性質を持つ体系なのか」という問いに焦点を当て議論を行った。

研究会は基本的に公開で行い、AI 研究や教育学などの異分野の研究者の参加もあり、広がりのあるディスカッションをすることができた。研究会と平行して、関連論文を読み進め研究リソースとしてまとめるための

公開読書会・勉強会も開催し、研究会で掘り下げきれなかった問題点について議論を深めることもできた。また、本プロジェクトの活動の一環として国内外の学会でのパネル、ワークショップの企画に参画し、研究成果を発表した。

成果の公開状況、計画

オンラインでは、AA 研ウェブサイトの他にプロジェクトサイトにおいて、研究会・読書会などの報告のみならず、研究過程で浮かび上がってきた論点や問題意識などを公開することを通して研究への関心を高めるように努めている。

AA 研サイト内プロジェクトページ <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp232>

プロジェクト活動サイト <https://sites.google.com/site/toshinaklab/coproj/prjmultig>

引き続き公開内容の充実化を図る。

青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～

研究代表者名： 星 泉 参加者： 所員 1 共同研究員 8

研究期間： 2017(平成 29)年度～2019(平成 31)年度

研究計画

2017 年度は、『牧畜語彙小辞典』評価版の検証作業を行う。共同研究員のいない分野については国内の専門研究者に照会し、チベット語部分については現地の共同研究員や専門家に照会してデータの正確性を高める。収集したデータに適切な解説テキストを加え、さらに写真・音声・動画・図版などの資料の付与を行い、辞典としての完成度を高める作業を行う。その作業のための研究会を科研費と組み合わせて年に数回実施する。また、不足のデータについては既に取得している科研費などを用いて現地に渡航し、追加調査を行う。チベット向けの『牧畜語彙小辞典』を現地で出版するため、現地の共同研究員とともに出版社との打ち合わせを開始する。同時にスマートフォンで利用可能な辞書アプリケーションのための準備を開始する。さらに、現地の教育実践者との協働により、本研究で作成した様々な資料をもとに教材作成に着手する。本共同研究と同様のテーマで科研費を申請する。

研究実績の概要(2017 年度)

本課題は、2014 年度から 3 年間にわたって実施した AA 研共同利用・共同研究課題「"人間一家畜一環境をめぐるマイクロ連環系の科学"の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」を発展的に継承する研究として、(1) 研究会の実施による新しい知見の集積、(2) 牧畜語彙集の精緻化、(3) 研究成果をもとにしたアウトリーチを中心に研究活動を展開した。

- (1) 3 回に分けて行なった研究会(うち 3 回目は公開ワークショップ)では、共同研究員として新しく迎えた歴史研究者による発表を含む、各分野の共同研究員・研究協力者の研究発表に基づき活発な議論を展開した。
- (2) 昨年度末に作成した牧畜語彙集の検証と加筆作業を行い、写真・図版・音声などの資料の付与も進

め、『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)を完成させた。現時点で収集した語彙は 3,980 項目、このうち日本語訳の付された 3,411 項目を、オンライン版、iOS 版、PDF 版の辞典として公開している(いずれもオープンアクセス)。多言語化も進め、英語訳つきが 2,240 項目、中国語訳つきが 898 項目である。これが今年度最大の成果である。

- (3) 研究成果をもとにしたアウトリーチとしては、本課題のメンバーで制作したドキュメンタリー映像『チベット牧畜民の一日』の解説付き上映を行なった他、本課題で主催した『チベット牧畜民の仕事展』(2016 年度) の巡回展およびトークイベントを吉祥寺、新宿、小諸の 3 箇所で開催し、好評を博した。

成果の公開状況、計画

2017 年度末に本課題のウェブサイト(<https://nomadic.aa-ken.jp/>)を刷新し、上述の『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)をオンライン版、iOS 版、PDF 版という 3 形態で公開した(いずれもオープンアクセス)。また、2018 年 3 月に刊行された『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』vol. 5 にて「牧畜民の社会進出」という小特集を組み、本課題から 3 名が寄稿し、現地の状況を詳細にレポートした。なお、各自の専門分野に基づく論文は、それぞれの媒体で積極的に発表している。

上述の辞典をさらに進化させ、オンライン版、iOS 版は随時更新し、PDF 版は正式な出版に向けて手続きを進める。さらに、牧畜文化に関して様々な角度から論考をまとめ、辞典を補う概説的な論集の出版準備を行う。

人類社会の進化史的基盤研究(4)

研究代表者名: 河合 香吏 参加者: 所員 3 共同研究員 19

研究期間: 2015(平成 27)年度～2017(平成 29)年度

研究計画

本共同研究課題は「人類社会の進化史的基盤研究」と題して、人類学(社会文化人類学および生態人類学)と霊長類学(霊長類生態学および霊長類社会学)の研究者を主たるメンバーとして、2005 年度以来、継続的に展開されてきた共同研究の第 4 期にあたるものである。第 1 期「集団」、第 2 期「制度」、第 3 期「他者」をテーマとしてきたが、今期は「生存・環境・極限」をテーマとして共同研究会活動を継続している。

初年度(2015 年度)に 3 回、次年度(2016 年度)に 2 回の研究会を開催し、それぞれ 4～5 人が発表した。また、研究会が 1 年度に上限 2 回の開催となったことに鑑み、2015 年度、2016 年度とも、日本霊長類学会大会において自由集會を組織し、本共同研究課題のメンバーを主たる発言者として、広い意味で「人類社会の進化史的基盤研究」に関連する発表と討論の機会を持った。

本年度は 3 年計画の最終年度にあたるため、これまでの成果を踏まえて引き続き個別研究をもとにさらなる議論を展開し、理論的な深化を目指すとともに、研究成果のまとめに向けて議論を収斂させていく。研究会は最低 2 回、1 回に 2 日間を費やし、各回 5 人が発表をする。3 回目の開催が可能になった場合には 2005 年度以来の一連の共同研究課題の総括の議論を行う。また、日本霊長類学会大会の自由集會や日本人類学会進化人類学分科会シンポジウム等における成果公開の企画も検討する。

研究実績の概要(2017 年度)

上記の通り、本年度は 3 回の共同研究会を実施した。第 1 回および第 2 回においては 4 名ずつメンバー

が個別の事例研究の報告を中心とした発表をし、全員で討論した。また、本年度は本共同研究課題 3 年計画の 3 年目、すなわち最終年度にあたるため、毎回、共同研究全体に関するまとめの時間をもったり、具体的に成果論集の刊行を前提としたミーティングの時間をもった。第 3 回研究会では 2 日間にわたり集中的に編集会議をおこなった。これらにより、本研究課題のテーマ「生存・環境・極限」に関する各メンバーの個別の研究の広がりや明確になるとともに相互の関係についての理解が深まり、共同研究全体のまとめに向けて問題点や展望がひらけてきた。本研究課題は「生存」「環境」「極限」という 3 つのテーマ(概念)を並列的に掲げて共同研究会活動を展開してきたが、最終的には「極限」を中心的なテーマとすることに議論が収斂されていった。すなわち、人間や霊長類がそれぞれの生息する環境(自然生態的環境であり、かつ社会文化的環境でもある)において、いかにして生存しているのかの具体相を比較検討するとともに、これを進化的な視点から追究することにより、その極限的な姿(様相)を明らかにすることが究極の課題として定位されていたのである。なお、各研究会における発表内容の詳細は AA 研および本研究課題の HP [<https://human4.aaken.jp>] に記しているのをご参照いただきたい。

終了報告

本共同研究課題は、「人類社会の進化的基盤研究」と題し、長期的な展望のもとに継続されてきた一連の共同研究プロジェクトの最終期に位置づけられるものであった。「集団」をテーマとした第 1 期(2005～2008 年度)、「制度」をテーマとした第 2 期(2009～2011 年度)、「他者」をテーマとした第 3 期(2012～2014 年度)に続き、今期は第 4 期(2015～2017 年度)であり、かつ最終期として、「生存・環境・極限」なるテーマを設定した。様々な「集団」をなし、様々な「制度」を備え、さまざまな「他者」とともに生きる霊長類と人類の社会の成り立ちとその進化的基盤について、これまでと同様に霊長類社会・生態学、生態人類学、社会文化人類学という 3 つの学問分野からアプローチした。

3 年の研究期間の間に 1 年目に 3 回、2 年目に 2 回、3 年目に 3 回合計 8 回の共同研究会を開催した。これらの研究会においては、メンバー各自による個別事例に基づく研究発表に加え、1 年目、2 年目ともに 1 回ずつブレインストーミングの場を設け、研究の進捗状況の確認およびその後の展望をするなどして、常に議論の位置づけ、方向性の確認をしながら研究活動を進めるように心がけた。また、3 年目は、本研究課題およびこれまでの 4 期にわたる共同研究の集大成としての成果の公開に向けて議論を収斂させ、集中的に、論文集『極限: 人類社会の進化』の編集会議の時間を持った。

このほか、成果の一部として、1 年目には日本霊長類学会大会において自由集会「サル屋とヒト屋の共同研究とは?: 「人類社会の進化的基盤研究」の試み」を、2 年目には同「人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐる」を組織し、また AA 研の基幹研究人類学班主催の公開シンポジウム『「他者」(河合香史編、京都大学学術出版会)をめぐる』と題する合評会シンポジウムを開催した。

成果の公開状況、計画

研究全体をまとめた出版物(紙媒体)による成果報告は 2017 年度には刊行していない。共同研究会の内容については、随時、その要旨を AA 研の HP に掲載するとともに、本研究課題独自の HP [<https://human4.aaken.jp>] に掲載してきた。また、研究成果の一部はメンバーが所属する国内学会(日本文化人類学会、日本霊長類学会大会等)において口頭発表をおこなった。

本共同研究課題の最終成果として、2019 年 5 月を目処に成果論文集を京都大学学術出版会より刊行予定であり、2018 年 3 月現在、各メンバーが個別に論文の執筆を開始するとともに、論文集の編集作業を進めている。本年度(2017 年度)に開催された 3 回の研究会では毎回成果出版に向けたまとめや編集会議とい

ったミーティングの時間を持った。さらに、2019年度の早い時期(6月ないし7月頃)に最終の編集会議を開催し(AA研の「成果取りまとめのための研究会」の経費に申請する予定である)、論集に所収される論文の相互読み合わせを実施することを予定している。この論文集については、さらに、刊行後、日本学術振興会科学研究費補助金・成果公開(学術図書)に応募し、英文に翻訳して出版することも検討している。

『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために

研究代表者名: 中村 隆之 参加者: 所員 1 共同研究員 8

研究期間: 2015(平成27)年度～2017(平成29)年度

研究計画

本共同研究は『プレザンス・アフリケーヌ』(以下、PAと略記)を資料対象にし、とりわけ「政治と文化」の主題が焦点化する第2期以降を扱いながら、当該雑誌の射程を総合的に検討する試みである。

最終年度に当たる2017年度は、8月22日から24日にかけてAA研にて開催予定の国際シンポジウム『プレザンス・アフリケーヌ』研究 超域的黒人文化運動の歴史、記憶、現在」を中心に計画される。まず第1回研究会では、本研究会に協力者として参加している崎山政毅氏(立命館大学)よりPAと国際社会主義運動との関わりについての報告をいただくとともに、国際シンポの準備について時間を割き、研究員間で協議する。国際シンポについては、昨年度より引き続き、AA研所員の佐久間寛氏、海外研究員アジェ・セレストン・ロモ・ミヤジオーム氏および本研究課題代表の中村を中心に進めてゆく。したがって第2回研究会は、国際シンポとして開催する予定である。可能であれば第3回研究会を開催し、国際シンポおよび3年間の本プロジェクトの総括および成果発信の仕方を検討するとともに、今後の研究会の発展的継続の可能性を討議する。

研究実績の概要(2017年度)

最終年度は通算3回の研究会を実施した。研究会の枠組みで実施した国際シンポジウムは本研究課題における集大成に位置付けられるため、ここでは国際シンポジウムにしばってその研究の概要を記す。

(1) 当該研究課題に関連する国際ネットワークの構築

国際シンポジウムの準備過程ならびにその実現において国際ネットワークの構築はきわめて重要な意味を有している。シンポジウムにはPAの現編集長ロミュアルド・フォンクア氏をはじめとする8カ国21名の研究者が参加した。このネットワークは本研究の継続課題においても活かされる。

(2) プラットフォームとしてのPA

シンポジウムの収穫は、PAがフランスや旧フランス領アフリカでどのように受容され、どのように捉えられているのかを認識することができたことにある。活動の拠点がフランスであるかアフリカであるかでPAをめぐる評価も、またPAが提起する問題の受け止め方も異なることが理解できた。これはPAが多様な思想的・政治的立場を内包するプラットフォームとして機能してきたという事実とも無縁でなく、それゆえにまだ解決されていない文化をめぐる問題(たとえば言語問題)を提起してきたPAの今日的意義も再認識することができた。

(3) 展示会の開催

国際シンポジウムに並行してパリのケ・ブランリー美術館で開催されたPAの展示会と同内容のものを2017年8月17日から31日にかけて開催した。本展示会はPAが成立するまでの歴史的経緯からPAの現在ま

での歩みを視覚資料およびパネルを通じて概観するものである。本展示と国際シンポジウムによって PA が雑誌であると同時に、出版社であり書店であることの重要性を改めて確認することができた。

終了報告

本プロジェクトは3年間で通算8回の研究会を行った。うち1回は国際シンポジウム(2017年8月22日～24日開催)である。本研究会は、1947年に刊行されたフランス語の黒人文化誌『プレザンス・アフリケーヌ』(PA)を対象とし、とりわけこの雑誌が再出発する1955年から60年(本研究ではこれを第2期PAと呼ぶ)、すなわちアフリカの脱植民地期に焦点を当てた研究を行ってきた。

1年目と2年目は、1955年にドゥペストルとセゼールの間で交わされた「国民詩」論争、1956年の黒人芸術家・作家会議における英語系知識人の役割、サンゴールおよびエメ・セゼールの詩をめぐる考察を通じて、第2期PAの問題関心を把握することができた。また、1947年の創刊号にアリウン・ジョップが寄せた論考の読解、PAが登場する歴史的背景をめぐる検討、PAの目録化の構想などの報告を通じて、PAが刊行される歴史的コンテキストや雑誌の射程が示された。

3年目は以上の蓄積を踏まえたうえで、本共同研究の到達点として、計3日間、21名の発表におよぶ大規模な国際シンポジウムを開催することができた。さらに同時期にPAをめぐる企画展を実施できたことも重要な成果となる。国際シンポジウムではプラットフォームとしてのPAの意義を再認識するとともに、シンポジウムを通じて豊かな国際ネットワークが形成された。また社会的発信にも注力し『図書新聞』と『ふらんす』で特集を組むことができた。

本共同研究は、PA上での国際シンポジウムの特集をはじめ、今後の研究成果が複数期待されるだけでなく、2018年度より開始される『『プレザンス・アフリケーヌ』研究(2) テキスト・思想・運動』によって発展的に継続する。この意味では本共同研究は新たな始まりでもあり、今後、国際ネットワークを活用しながらさらなる発展を目指すつもりである。

成果の公開状況、計画

本課題に参加する所員および研究員による最終年度の成果発表は、学術論文7件、口頭発表8件、図書2件、社会に向けた成果発表19件である。特に中村隆之、アリウン・ジョップ「ニヤーム・ングーラあるいは『プレザンス・アフリケーヌ』の存在理由」(翻訳と解説)および Sakuma, Yutaka, *Index de Présence Africaine par auteurs (1947–2016)*, *Présence Africaine*, 440 は本研究課題の直接的成果である。また国際シンポジウムに関連する成果発表として『図書新聞』での星埜、佐久間、中村による鼎談、『ふらんす』誌の特集号「アフリカの〈存在感〉」も特記したい。

今後の研究成果は以下2点を主に予定している。

- (1) 『プレザンス・アフリケーヌ』誌での特集(2018年度刊行予定、フランス語)
- (2) 国際シンポジウム「プレザンス・アフリケーヌ」の記録集(2018年度刊行予定、AA 研)

東・東南アジアの越境する子どもたち： トランスナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会

研究代表者名： 石井 香世子 参加者： 所員 2 共同研究員 8

研究期間: 2016(平成 28)年度～2018(平成 30)年度

研究計画

プロジェクト 2 年目となる 2017 年度は、以下の 3 段階で研究を深めるものとする。

(1) 本プロジェクトの掲げる 3 つの分析軸のうち、3 つ目の Transnational Class について当該分野の代表的な論客のうち、Child Migration in Asia の主題に近い人物 (Born out of Place を著わしている Nicole Constable 氏)を招いて、研究会とシンポジウムを実施する。これにより、プロジェクト研究メンバー間に、3 つの分析軸の定義と分析枠組みとしての利用可能性について、認識が共有されたものとする。

(2) 国際会議 (Child Migration in Asia 2017 年 11 月 25 日に実施予定、ただし AA 研の先生方のご都合がつかないため研究会にはならず)を実施し、研究会メンバーに加え広く内外からの発表者を招待し、議論を深める。Rhacel S. Parrenas 氏、Nicole Piper 氏を招聘し、議論の質を高める。

(3) 論文の内容を会議での発表へのコメントをもとに修正するのに加え、英語論文としての質を高めるため、国際会議のために各自が提出したフルペーパーをもとに、Academic Writing in English の講座を実施する。シンガポール大学出版会の客員編集員 Paul Kroatica 氏らのグループを招いて、指導を仰ぐ。

研究実績の概要(2017 年度)

共同利用・共同研究課題 3 年目となる本年度は、各人が総括的なフィールド調査を実施するのと並行して、研究課題の主たる理論枠組みとなるべき 3 つの概念のうち最後のひとつ (Transnational Class) について、シンポジウムを実施した。さらにそれら 3 つのシンポジウム内容を基にした共同研究課題の集大成としての国際会議を実施した。また、その合間にタイ・チェンマイ大学アジア研究所所長の特別講演会も実施した。

昨年度の第 1 回シンポジウム "Partial Citizenship" (2016 年 10 月 1 日)、第 2 回シンポジウム "Urban Borderlands" (2017 年 2 月 25 日)、本年度の第 3 回シンポジウム "Transnational Class" (2017 年 5 月 20 日) の 3 つは、それぞれの概念を提唱する主な論者をお招きした。それらを通じて、研究課題メンバーたちがフィールド調査結果を分析する際の主な理論枠組みについて理解を深めた。また、その 3 つの理論枠組みにてフィールド調査結果を分析して取り纏めた各人の最終論文発表の場として、国際会議 (2017 年 11 月 25 日) を実施した。最終国際会議では、共同研究メンバーのみでなく、当該分野をリードする依頼発表者、さらに公募に応じてくれた応募者から選抜した発表者も加え、4 セッション 12 名からなる議論の場を設定した。目下、これら発表の中から選抜した発表ペーパーを、会議の場での議論等をもとに加筆修正しての最終成果物を作成中である。

成果の公開状況、計画

本年度の成果の公開状況は、おもに国際シンポジウム・国際会議での発表を中心とした (特別講演 1, 基調講演 2, その他発表 14)。それらの発表を、2018 年度以降に出版物の形にすべく、目下準備・加筆修正中である。

下記共同研究課題ホームページにて成果公開中:

<https://childmigration.aa-ken.jp/>

上記国際会議以来、基調講演者 2 名のご尽力により、当該国際会議の発表ペーパーを選抜し、本共同研究の最終成果として特集号を組むべく準備を重ねてきた。その結果、Journal of Immigrant and Refugee Studies (Taylor and Francis, impact factor 0.68) から、Children of Migration in Asia (仮)と題した特集号が、2020 年度初頭に出版の内諾を得た。目下、この出版へ向けて加筆修正中である。

「わざ」の人類学的研究－技術，身体，環境（「もの」の人類学的研究（3））

研究代表者名： 床呂 郁哉 参加者： 所員 4 共同研究員 13

研究期間： 2017(平成 29)年度～2019(平成 31)年度

研究計画

2017 年度は初年度となるため、まず初回の研究会では、「わざ」（技術・技芸）の人類学的な研究に関する問題意識や、本研究課題の枠組みなどに関して知見をメンバー間で共有を図る。そしてメンバー全員によって各自の研究テーマ等に関するやや詳しい自己紹介と、共同研究の進め方に関する提案などを述べてもらった上で、今後の 3 年間の全体計画に関しての方向性を討議していく。そのうえで、第 1 回研究会の後半および第 2 回研究会の場において、メンバーの個別の事例報告と、質疑応答を通じて、以下の各項目に関して検討していく。(1) 世界各地における多様な「わざ」（技術・技芸）の人類学的研究の方法論的、理論的基盤：先行研究に関する研究史や先行する関連プロジェクトにおける知見等のレビューを実施し、研究計画全体への基礎とする。(2) アジア、アフリカなど各地の異なる生態的ないし社会・文化的環境に応じた「わざ」の多様性について人類学的な現地調査の知見に基づき比較検討する。

研究実績の概要（2017 年度）

第 1 回研究会では本研究課題「『わざ』の人類学的研究－技術，身体，環境」（略称「わざ研」）の初回の研究会であることに鑑み、まず代表者の床呂郁哉（AA 研）から本研究プロジェクトの趣旨説明と、参加者の自己紹介、さらに今後の共同研究の方針に関する全員による打ち合わせを実施した。その後、共同研究員である檜垣立哉（大阪大学）と黒田末寿（滋賀県立大学）による研究報告と質疑応答が実施された。初回の研究会において、本研究課題は、世界各地における「わざ」（広義の技術・技芸）に焦点を当て、それを新たな視点から人類学的に再検討することを目的としていくことが確認された。檜垣報告では G.ドゥルーズの哲学を踏まえて技術に関する哲学的研究の系譜に関する検討が行われた。黒田報告では日本における冶金・鍛冶に関する調査報告を下敷きに、非設計主義的な「もの」製作の技法に関しての検討がなされた。第 2 回研究会ではメンバーの金子守恵、祖田亮次、そしてゲストスピーカーの小松かおりの 3 人による研究報告と討議が行われた。このうち金子はアフリカにおける「ごみ」や広義の廃棄物に関する利用と処理の事例を通じて多元的技術観の検討を試みた。祖田は日本における治水・河川改修の事例を通じて近代技術とその在地性に関して報告を行った。小松はバナナの遺伝子組み換え技術の現状とそれが人類学的・思想的に孕む問題に関して報告を行った。

成果の公開状況、計画

本研究課題のメンバーは、個別に学会や論文等で本課題に関係した研究成果を発表しているのはもちろん、英文論集 *An Anthropology of Things* (Kyoto University Press and Trans Pacific Press:2018) などにおいても本研究課題の複数のメンバーが本課題の研究主題にも関係する成果の一部を公表している。また当該年度の各研究会の概要に関しては下記の HP で公開している。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp233>

前年度と同様にメンバー各自が学会や学会誌等で成果発表することはもちろん、引き続き各研究会後にはウェブサイト概要を公開・発信する。さらに最終年度の 2019 年度の課題終了後のできるだけ早い時期

に成果論集を出版することを予定している。

東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)—紛争と 共存のダイナミクス

研究代表者名: 富沢 寿勇 参加者: 所員 7 共同研究員 20

研究期間: 2017(平成 29)年度～2019(平成 31)年度

研究計画

本研究課題では、複数の分野(人類学, 歴史学, 政治学, 宗教学等)の研究者によって共同研究を進めていくことを目的としているが、初年度である 2017 年度には、まずメンバー全員によって各自の研究テーマや地域等の自己紹介を実施した上で、今後の共同研究の進め方について方向性を討議し検討する。初年度である 2017 年度は、年 3 回程度の研究会によって議論を深める予定である。このうち 9 月頃に実施の第 2 回研究会では、AA 研の海外拠点 KKLO(コタキナバル・リエゾンオフィス)でも研究会を実施するなど、AA 研の有する海外拠点のリソースを最大限に活用しながら本研究を進めていく。テーマとしては 2017 年度は特に、2014 年度～2016 年度の第二期の研究課題において実施した研究の成果を踏まえつつ、中東や南アジアなど域外における紛争状況を対象とする研究者の協力も得ながら、更に踏み込んだ比較研究を実施していく予定である。第 2 回以降の研究会では、東南アジアにおいてムスリムと非ムスリムを含む集団間での分極化が孕む紛争と平和共存の諸相を明らかにすると同時に、東南アジアのイスラーム圏をトランスナショナルな文脈において相互の比較や影響関係といった視点からも検討していく。総じて AA 研の海外拠点コタキナバル・リエゾンオフィスを中心としてこれまでに構築してきた東南アジアの研究者とのネットワークを活用しながら国際的な共同研究として実施していく。

研究実績の概要(2017 年度)

初年度の初回に当たる 2017 年 7 月 15 日(土)に開催された第 1 回研究会においては、代表の富沢による挨拶および副代表の床呂による趣旨説明に続いて、東南アジアと中東におけるムスリム社会をめぐる状況の比較という観点から 2 つの報告と質疑応答が行われた。まず一人目の床呂による報告では、2016 年に発足したフィリピンのドゥテルテ政権下におけるフィリピン南部のムスリム社会と紛争/和平プロセスをめぐる状況などに関する報告がなされた。二人目の錦田による報告では中東、とくにパレスチナとシリアをめぐる紛争と共存に関して特に難民に焦点を当てて報告が行われた。コタキナバルで 2017 年 9 月 24 日(日)に実施された第 2 回研究会(東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する国際ワークショップ)では外国人研究者らも交えた国際ワークショップとして実施した。具体的にはインドネシアから Ahmad Najib Burhani, マレーシアからは Shamsul A. B. によるそれぞれインドネシアとマレーシアにおけるイスラーム内の少数派集団であるアフマディヤとアル・アルカム(とそれをめぐるムスリム社会内での紛争・共存)に関連した報告と討議がなされたほか、日本人メンバーの西井からは南部タイにおける少数派ムスリムと多数派の仏教徒の関係に関して改宗や葬儀などに焦点を当てた報告と質疑が行われた。2017 年 12 月 17 日(日)に実施された当該年度第 3 回研究会では、メンバーの黒田がタイ・マレーシア国境地帯のムスリム社会における歴史意識などに関しての報告を実施したほか、ゲストスピーカーとして河野毅氏(東洋英和女学院)を招き、インドネシアのいわ

ゆるイスラーム穏健派と過激派の関係に関する報告と質疑応答がなされた。いずれの回においても、単に個別の地域のローカルな事例報告だけではなく東南アジア内での地域内での比較、さらには中東研究者も交えて、中東と東南アジアとの地域間の比較という視点からの分析と検討が行われ、ムスリム社会をめぐる各地の共通性と差異の双方に関しての知見を比較検討することができた点を本課題のユニークな成果として挙げるができる。

成果の公開状況, 計画

まず各研究会の内容等に関しては AA 研のホームページ(URL は下記参照)で公開しているほか、学会・研究会等でメンバーが個別に成果発表を実施した。これに加えて研究成果発信と社会還元のため、本研究課題副代表の床呂は、2017 年度におけるフィリピン南部でのムスリム社会に関連した紛争やテロ事件、とくにいわゆるマラウィ市占拠事件をめぐる現地邦字紙・邦人向け雑誌などに記事を公表したほか、フィリピンでは現地邦人向けの公開講演会(2017 年 9 月 2 日)を実施し現地在住の企業・大使館・JICA・メディア関係者等を含む参加者に対してフィリピンのイスラームやムスリム社会、ミンダナオ紛争をめぐる現状に関する成果公開をメンバーの森と共に実施した。このほか、メンバーの見市も 2018 年 3 月 17 日にインドネシアのジャカルタで実施された邦人向け公開講演会でインドネシアの政治とイスラームの関係に関する講演を行った。さらにメンバーの外川もダッカのテロ事件をめぐる公開ワークショップを実施し、その内容を冊子化して公表するなど、研究成果の一般向けの公開・発信などいわゆるアウトリーチ活動も積極的に実施した。(本課題ウェブサイトの URL: <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp236>)

上で記したように積極的な成果公開を既に実施していることに加えて、最終年度である 2019 年度の終了後のできるだけ早い時期に、英文の成果論集を取り纏めることを予定し、すでに準備作業の一部に着手している。

ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合

研究代表者名: 西井 涼子 参加者: 所員 5 共同研究員 12

研究期間: 2017(平成 29)年度～2019(平成 31)年度

研究計画

本研究課題において、具体的に検討すべきテーマは 2 点ある。

- (1) 身体としてその場に共在することの意義を再考し、ミクロな具体の細部にこだわる人類学の方法を中心としたこれまでのフィールド・サイエンスの手法の有効性を、異なる専門分野の知見から再検討する。
- (2) 生命、出来事の流れを捉えるにあたり、皮膚に覆われた個々の身体を主体として一つの単位とすることを前提とせず、それらが生成するプロセスを捉える方法論を検討する。その際、認知科学、科学哲学、現象学、霊長類学、アート技法の専門家である芸術家などの間でそれぞれのアプローチの違いを比較検討し、ダイナミズムとしての生をめぐる思考の新たな可能性を模索する。

【2017 年度】3 年目には上記のテーマを研究会全体として検討する期間とするため、はじめの 2 年間ですべてのメンバーの発表を一通り終えることをめざす。今年度は半数が発表できるように研究会を実施する。研究会においては、なるべく文化人類学とそれ以外の分野の研究者を組み合わせよう設定し、それぞれ

が上記の2点のテーマを念頭に各分野の理論的知見や研究成果を報告し、これに対してメンバー全員で議論を行う。

研究成果の公開については、各研究会を行うごとに AA 研ウェブサイト等において詳細に報告する。

研究実績の概要(2017年度)

本研究会では、人類学における「存在論的転回」以降、経験と記述をつなぐフィールドサイエンスとしての新たな方法論を追及する。それは、人類学のみならず、認知科学、哲学、芸術など様々な方法論を接合して「生きている現実」として把握しているもの、目に見え体験されるものの水面下での異質で複雑な内在的な力＝情動の流れの絡まり合いを「ダイナミズムとしての生」として捉えなおし、思考することを目的とする。今年度は、理論生命科学、科学哲学、現代哲学、文化人類学、霊長類学、精神医学の観点からの発表と討議により、参与と観察というパラドックスを含んだ人類学の方法に、観測者と自由意志の問題から意識構造へと議論を進める理論生命学や、被研究者と研究者の実存の関わる水準への関与を示し、フィールドワークや実践についての方法論的重層化、異分野との相互乗り入れの可能性を示そうとした哲学、アートやテクノロジーを人類学的思考の試金石としようとする試み、身体と情動に焦点化した生態学的、精神医学的な考察など、今度の本研究の展開に資する議論を行うことができた。

成果の公開状況、計画

研究成果の公開については、各研究会を行うごとに AA 研ウェブサイトにおいて詳細に報告している。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp234>

今後1年以内の成果公開は、研究会を行うごとに AA 研ウェブサイトにおいて詳細に報告するとともに、国際シンポジウムや国際ワークショップなどを通じて国際的にも成果を発信する。

中国雲南におけるテキスト研究の新展開

研究代表者名： 山田 敦士 参加者： 所員 2 共同研究員 18

研究期間： 2015(平成27)年度～2017(平成29)年度

研究計画

研究計画初年度目には、テキスト研究の射程について、その内容分析のみならず、テキストのもつ道具性やテキストを取り巻く社会的活動にまで広がらうとの認識を共有化した。研究計画2年度目は、テキストの動態的側面に対する研究の深化に努めた。音声の文字化といった「テキスト前」への視座、そのテキストをいかに保存し活用するかといった「テキスト後」に対する認識の共有化をおこなった。以上の研究射程およびプロセスの共有化を踏まえ、研究計画最終年度では、個別民族集団に対する研究の蓄積と周辺地域との比較対照による理論化に努める。

前年度に引き続き、歌など音声表現とテキストの関係を探るとともに、新たに政治や宗教とテキストの関係についても議論をおこなう予定である。これまでに取り上げなかった民族集団を題材に、多角的に議論を展開する。共同研究員だけでカバーしきれない領域については外部講師を招聘し、意見交換に努める(現在、2名に依頼中)。また、本年度は最終年度であるため、成果論集に関する討議を並行しておこなう。

研究会の開催は共同研究員がフィールドワークをおこなう時期の前後に開催することとし、研究会とフィールドでの知見の相互還元が可能なように配慮する。

研究成果の公開に関して、本年度は 8 冊程度のプロジェクト出版物が計画・準備されている。

研究実績の概要(2017 年度)

平成 29 年度は、個別民族集団の事例の共有を図りつつ、特に「テキストを作る」という局面に焦点をあてて、意味付けの異なるテキストの重層的な存在を議論した。事例としたのは、ミエン族の歌謡書、タイ族の宗教書、彝族の辞書、雲南省徳欽県のキリスト教布教史、ハニ族の医薬書である。

タイ北部のミエン族(中国のヤオ族の一部)は、中国からの南下という歴史的経緯から、漢字を文化的媒体として受け入れた。今日、ミエン族の一部は漢字を援用した複雑な表記法によって歌謡を記す。彝族とタイ族は、それぞれ固有の書承伝統をもつ集団である。前者では辞書の作成や継承、後者では宗教書の作成における具体的プロセスが示された。雲南西北部徳欽県の茨中天主堂には、パリミッション・シトー会の布教史を記した『茨中天主教簡史』が存在する。これは現地唯一の生存者である蕭傑一氏によって記された。以上は「ローカル」なテキスト活動であり、それぞれのテキストを作る動機は一樣ではない。しかし、いずれも少数あるいは一人の人間によるテキスト化行為が起因という共通点が見出せる。こうしてもたらされたテキストは、唯一無二のモノという側面が強い。

一方、ハニ族の医薬書は、公的機関の関与のもとに作成された。その内容はハニ族の実態からかけ離れている可能性が指摘される。近年、公的機関によって各民族の文化事象がテキスト化され、商業出版されるという同様の活動が盛んである。こうして公的に生み出されたテキストは、モノという意味が希薄であり、書承の動きもきわめて鈍い。

終了報告

本研究プロジェクトでは、テキストをモノの性質をもつものと認識し、生成から保存・廃棄に至るプロセスの中でそのあり様を考察してきた。共同研究員からの報告を中心に 7 回の研究会を開催し、主に以下 3 点について議論を深めてきた。

(1) テキストからみた雲南地域の再解釈

雲南省は多民族多文化で知られる。今日の各地域・各領域の書承文化のあり様の一端は、雲南地域が東南アジア大陸部と中華世界、チベット世界の歴史的・空間的重層性の上に描かれうることを示した。

(2) 事例研究の蓄積とテキスト研究論の構築

私たちの目にするテキストは、ある素材が何らかの要因で文字化され、それが人為的に保存・複製・配布・廃棄されてきたものである。雲南という特定地域の事例研究として、強い文字伝統をもつグループ、他民族の文字伝統を積極的に受け入れたグループ、政治的に文字が導入されたグループなど、様々なケースの様々な文脈にみられるテキスト事例の蓄積を図りつつ、テキスト研究の方法論に関する議論を深めた。

(3) 未開発テキストの解明・利用

雲南地域にはこれまで未解明であったテキストが数多く存在する。多分野で利用できるかたちで、こうしたテキストの資料化をすすめた。

本研究に関わる成果として、現在までに学術論文 38 編、口頭発表 54 題、資料集・報告 21 冊が公開されている。また、2017 年に香港でおこなわれた東アジア人類学会 (East Asian Anthropological Association) において分科会を主催し、本プロジェクトの意義と成果を公開した。

成果の公開状況、計画

研究課題に関わる成果として、学術論文 9 編、口頭発表 14 題、資料集・報告 9 冊が公開された。

このほか、6 冊程度の資料集をプロジェクト出版物として申請を予定し、成果論文集を 2019 年 2 月に出版

する予定である。

近世南アジアの文化と社会：文学・宗教テキストの通言語的比較分析

研究代表者名： 太田 信宏 参加者： 所員 4 共同研究員 13

研究期間： 2016(平成 28)年度～2018(平成 30)年度

研究計画

本研究課題は、近世期南アジアにおける思想・宗教、文学を中心とする文化を、歴史学を含む様々な分野を専門とし、異なる言語史料を利用できる研究者が協働して、言語や分野の枠を超えた比較と連関の視点から分析するが、本年度は思想・宗教の近世期における展開に主に着目する。ヒンドゥーとムスリムの聖者の伝記や宗教詩、さらには、教派・教団の教学書などに関する報告を共同研究員に求める。宗教・思想の展開を分析するにあたっては、(1) 近世期の政治的・社会的状況との関わり、(2) それぞれの教派・教団の歴史の中での位置付けに留意するだけでなく、(3) 他の教派・教団・宗教(例えば、ヒンドゥーにとってのイスラーム)との影響関係、さらには、インドの伝統的な文学論など狭義の宗教・思想とは異なる学的伝統との関連性などにも配慮する。様々な思想・宗教、学的伝統が併存する南アジアにおいて、近世期の社会経済的な変動のなかからどのような思想・宗教的な新展開がみられたのか、議論を深めたい。研究会の報告内容を逐次、AA 研ホームページにおいて公開する。

研究実績の概要(2017 年度)

本研究課題の 2 年目にあたる本年度は、近世南アジアにおける宗教・思想の展開に着目し、主に、聖者の伝記や、教学・思想書に関する諸報告が共同研究員によって行われた。マハーラーシュトラとカシュミールでそれぞれ活動した二つの異なる宗教集団の指導者についての伝記的文献に関連する 2 報告とその後の質疑応答からは、「伝記」、特に時代を隔てた後世に成立したものが描く宗教指導者像と、彼らの実際のあり方との間に小さくないズレが存在する可能性があらためて浮かび上がった。「伝記」が編纂された社会的文脈だけでなく、「伝記」が参照したであろう同時代の類似文献からの影響関係などにも配慮する必要が指摘された。また、そうしたズレそのものが、当該宗教集団と周囲の社会宗教状況の歴史の変容をさぐる手掛かりになりうることも提起された。18 世紀の思想家シャー・ワリーウッラーに関する報告に続く質疑応答では、思想の継承経路を分析する方法論について、報告者を中心に共同研究員がそれぞれの専門分野の知見をもとに議論を深めた。本年度の報告の多くは、イスラーム教／ペルシア語の文学・文化の伝播・受容という視点からも関連付けられる。ペルシア語語り物文学を代表するハムザ物語を取り上げた報告からは、こうした伝播・受容を論じるうえで、この物語が方法論的にも、また、題材としても、恰好の事例であることが認識された。

成果の公開状況、計画

研究会の報告内容を逐次、下記の AA 研ホームページにおいて公開している。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp226>

研究期間終了後は、概論と、研究会報告をもとにした各論からなる成果論集をできるだけ速やかに取りまとめ、刊行する予定である。

中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究

研究代表者名: 近藤 洋平 参加者: 所員 2 共同研究員 9

研究期間: 2016(平成 28)年度～2018(平成 30)年度

研究計画

前年度における共同研究者間の合意に従い、中東の少数派が有した「生き残り戦略」について、参加者各人が専門とする領域について考察を進める。9 月にはベイルートの中東研究日本センターにて研究会を開催し、共同研究員の一部がその成果を報告するとともに、残りの参加者も研究の進捗状況について簡単に報告する。

これまで研究会の開催においては、積極的な広報はおこなってこなかったが、本プロジェクトが有する学問上の意義は、我が国のみならずレバノンおよびその近隣国においても大きいとの認識を共同研究員は共有している。かかる理由から、今後は研究会の広報に力を入れるとともに、開催場をより大きなものにし、公開のセミナーとすることで、関心のある学生、研究者、一般の方が参加しやすいように努める。そしてその試みとして、2018 年 3 月に、ベイルートのサン・ジョセフ大学にて公開セミナーを開催し、現地に住む人々と本プロジェクトの研究成果を共有する。

研究実績の概要(2017 年度)

プロジェクトの 2 年目にあたる今年度は、昨年度に定めた共通テーマ「生き残り戦略」から、共同研究者が専門とする対象の動向を探った。ベイルートで 2 回行われた研究会のうち、2017 年 9 月の回では、19 世紀のオマーンにおける少数派の活動や同時代のシリアにおける通訳官職をめぐる人々の活動などが、「生き残り戦略」という観点から鮮明に浮かび上がった。またパレスティナ難民が有する、パレスティナ国家樹立やヨーロッパへの移住について興味深い研究成果を得ることができた。さらに特筆すべきは、ベイルートのサン・ジョセフ大学で開催された第 2 回の研究会である。「生き残り戦略」への視点も持ちつつ、中東の少数派について各共同研究者が報告した最新の研究成果は、同大学教職員や学生、さらにはレバノン国内外からの一般参加者の耳目を引きつけた。最新の研究成果を広く公開するという点において、同研究会は大成功を収め、それにより本プロジェクトの存在や方向性が極めて意義深いものでありまた正しいものであることが証明された。

成果の公開状況、計画

検討中

ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容 (2) ジャワのイスラーム化再考

研究代表者名: 菅原 由美 参加者: 所員 2 共同研究員 9

研究期間: 2016(平成 28)年度～2018(平成 30)年度

研究計画

今年度は、本共同課題と同じテーマの科研(代表菅原由美)の費用を用いて、9 月半ばに 2 週間ほど、国

内メンバー及び海外メンバー、合同でジャワ島北海岸を中心に、ジャワにイスラームを広めたとされる聖人の墓やモスクなど、イスラーム初期遺構・碑文および、聖人についての口承伝統調査を行うため、前半ではその調査のための、事前準備として、調査地や調査対象についての勉強会を行い、参加メンバー間での情報の共有と調査分担の確認を行い、夏のフィールド調査後、年度後半にその調査の結果について議論する研究会を公開で開催する。それを元に、来年度の国際会議での発表内容や出版準備について検討する。また、昨年度テキスト数を増やしたジャワ語コンコーダンスを利用して、どのような文献分析が可能か、今度どのような部分を改良し、補足すべきかを引き続き検討し、海外の利用者にも利用を呼びかけ、コンコーダンスの改善を続ける。

研究実績の概要(2017年度)

本研究課題の対象時期はジャワの宗教がヒンドゥー仏教からイスラームに変化していく16~19世紀であるが、特に16~17世紀は文字史料が少ないため、碑文や遺構などの史料との比較も行う予定を立てていた。そのため、本年度は、共同研究員全員で、8月末に、科研費基盤研究(B)「ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考」(研究代表者:菅原由美(大阪大学) #16H05662)の研究費で、ジャワのイスラーム遺構調査をおこない、その調査結果を研究会で検討することに時間を費やした。ジャワの北海岸に散在するワリ(聖者)たちの墓や14~18世紀のイスラーム遺構を見学し、写真撮影や史料の収集をおこなった。帰国後の研究会では、各地のイスラーム遺構の特徴や疑問点を整理し、南アジアや他のイスラーム諸国の遺構および墓でおこなわれている慣行について、違いを検討した。

さらに、来年度、本テーマの国際シンポジウムを開催する予定(会場:大阪大学)であるため、そのプログラムについて検討し、日本側の発表者の発表内容についても、概要を発表し、意見を交換した。これまで研究会の午前の部で行っていたマタラム王国王統記『ババッド・タナ・ジャウィ』(ジャワ文字、バライ・プスタカ版)序の講読会は完了した。解題を作成し、発表する予定である。

また、本研究課題と連携し、AA研言語研修として、8月にジャワ語研修を、11月にジャワ語フォローアップミーティングを行い、共同研究員が講師となり、ジャワ語とジャワ文字の基礎を参加者に教えた。

成果の公開状況、計画

・Javanese Documents Online (JVDO)の最新版が現在、公開中である。さらに、新しいテキストの掲載を進めている。<https://jvdo.aa-ken.jp/>

・本研究課題第1期におこなった第1回国際シンポジウムの論文集を Javanese Studies Series Vol.5 として出版した。

・ジャワ語教科書『平成29年度言語研修ジャワ語初級テキスト ジャワ語の基礎』がAA研のウェブで公開されている。<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/ilc-list/20172>

来年度行う第2回国際シンポジウムも、第1回目同様、Javanese studies series として論文集を出版する予定である。

アフリカ農業・農村社会史の再構築: 在来農業革命の視点から

研究代表者名: 鶴田 格 参加者: 所員 2 共同研究員 17

研究期間: 2016(平成28)年度~2018(平成30)年度

研究計画

研究会 2 年目となる今年は、第 1 回目の研究会において重要な食料資源でありアフリカ的な食を特徴づける「イモ類」に関する特集を組む。共同研究員の藤本武がエチオピア・東アフリカのイモ類について報告を行うほか、メンバー以外から西アフリカのヤムイモの研究者およびパプアニューギニアのイモ研究者を招聘し、イモ栽培・加工のアフリカ的特質についての議論を深める。第 2 回目の研究会においては、1 年目に十分に議論ができなかった農牧複合に関する特集を行いたい。代表者の鶴田格および共同研究員の杉村和彦がタンザニアの農牧民の事例を報告するほか、共同研究員の藤岡悠一郎がナミビアの事例について、同じく田中利和がエチオピアの事例について報告する予定である。第 3 回目の報告者はいまのところ未定であるが、個別的な事例報告とともに、最終年度である次年度の報告書出版へ向けての論点整理と執筆テーマならびに執筆陣の確定を行いたい。

研究実績の概要(2017 年度)

2017 年度の 3 回の研究会は各回の発表がなるべく統一のテーマに沿うように、またなるべくアフリカ以外の地域の報告をいれるように企画された。第 1 回は「イモ」という視点から、第 2 回は「農牧」という視点から、第 3 回は「農具ならびにその延長としての農業機械」という観点から、それぞれアフリカおよび他地域の農業・農村社会の比較をすることを試みた。アフリカ的な食を特徴づける「イモ類」に関しては、西アフリカの根菜農耕文化を支えるギニアヤムの栽培化と品種の多様化について、またエチオピア西南部の農耕民社会におけるイモ類(エンセーテ、タロイモなど)の利用について、集約化という方向だけでは理解できないアフリカ独自のイノベーションがあるということが議論された。農牧に関しては、半農半牧と有畜農業というこれまでの農牧複合二類型論に対し、「アフリカ型農牧複合」とでもいうべき、農と牧の生産面、消費面の双方において緩やかな結びつきがあるパターンが形成されつつあることが明らかになった。とりわけ消費面すなわち家族の再生産の側面において、アフリカ的な特徴があらわれる点が指摘された。また移動性の低下、現金経済の浸透、富の格差の拡大など、アフリカ農牧民が直面する現代的な課題についても論じられた。最後に農具については、アフリカではこれまで主要な耕作用農具として鋤が使われてきたが、近年犁やトラクターが普及しつつある現状について、近代ヨーロッパや日本におけるトラクター普及の歴史と比較しながら議論がなされた。アフリカのなかでは例外的に古代から犁耕作がなされてきたエチオピア中央高原では、耕牛、農具、犁手という基本的な三要素だけでなく、信仰や耕牛貸借制度など、さまざまな文化的・社会的制度が有機的に関連した「犁農耕文化複合」が存在し、日々直面する諸問題に住民が柔軟に対応できるしくみがあることが明らかになった。

成果の公開状況、計画

2017 年度中に開催した 3 回の研究会は公開とし、何名かの非メンバーが研究会に参加した。各研究会の概要については、その概要を AA 研の本共同利用・共同研究課題のウェブサイト(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp223>)で公開している。

本共同利用・共同研究課題の成果については、最終年度にあわせて成果出版物の刊行準備を進めることになった。

イスラームに基づく経済活動・行為(第二期)

研究代表者名: 福島 康博 参加者: 所員 2 共同研究員 13

研究期間: 2016(平成 28)年度～2018(平成 30)年度

研究計画

本研究課題は、イスラーム金融やハラール産業、ツーリズムなど近年注目を集めているイスラームに基づく産業とその商品・サービス、およびこれらに対するムスリムの生産や消費に着目し、人類学、地域研究、経営学、観光学など複数のディシプリン、および東・東南・南アジア、中東、北アフリカなど複数の地域を対象とする研究者による共同研究を通じて、これらの現象の現代的な意味を明らかにすることを目的とする。

2017年度は、前年度と同様、2回程度の研究会を公開方式で実施する。

具体的には、1回目の研究会では、サブ・テーマであるムスリム・フレンドリー・ツーリズムを、2回目の研究会では、同じくサブ・テーマの地域経済とイスラームの関係について、それぞれ取り上げる。

ムスリム・フレンドリー・ツアーとは、ムスリムがイスラーム諸国・非イスラーム諸国を問わず旅行する際、イスラームの日常規範に違反しないようアレンジされた旅行形態を指す。ここ数年、日本もインバウンド観光の一環として、積極的に推進されている。1回目の研究会ではこのテーマを取り上げることで、ムスリムの観光が経済に与える影響を検討する。

2回目の研究会では、いわゆるハラール産業のくくりではとらえられない、地域経済とイスラーム、ムスリムとの関係性に関する検討を行う。一般的にハラール産業といえば、イスラームの教義との結びつきが強い特定の商品・サービスを製造・販売する産業を指す。これに対して、ムスリムの日常的な生産、流通・分配、消費においても、イスラーム的な特徴を見出すことができる。これらの経済活動がマクロ経済に与える影響について、2回目の研究会で検討する。

両研究会での報告者については、基本的に共同研究員に依頼することとするが、研究会のテーマに応じてこれらの分野を専門とする共同研究員以外の国内研究者を招聘し、報告を依頼することもある。

研究実績の概要(2017年度)

本研究課題の2年間にあたる2017年度は、2回の研究会を公開方式で実施予定であった。しかしながら、共同研究員等のスケジュールの調整に手間取ってしまったため、研究会を1回、公開で開催するにとどまった。

本年度の研究会は、2018年2月17日(土)にAA研で行った。報告者は2名で、このうち第1報告者は、法政大学大学院国際文化研究科の大学院生である市岡卓氏(非共同研究員)による「シンガポールにおけるヒジャブに対する規制と差別」という題目による報告である。イスラームに基づく産業の典型例であるファッション産業、特にムスリム女性がイスラームの規定に基づいて着用するヒジャブについて注目し、シンガポールにおいて、彼女たちの振る舞いがもつ政治社会的意義を考察する発表を行った。

第2報告者は、本研究課題の共同研究員で立教大学観光学部の舩谷鋭氏による「マレーシア華人のイスラーム観:馬華文学作品紹介」という題目による報告である。マレーシア華人による華語による文学作品である馬華文学(Mahua Literature)は、中国本土の中国文学とも、マレーシアの公用語であるマレーシア語文学とも異なる、独自の主題やモチーフを扱う文学として歴史を重ねてきた。本報告は、イスラームを連邦の宗教とするマレーシアにあって、マイノリティである華人の文学作品の分析を通じて、マレーシア華人のマレー・ムスリム観を明らかにした。

両報告とも、島嶼部東南アジアにおけるイスラームに基づく経済活動・行為について、非ムスリムからどのように認識されているのか、というアプローチによる分析・報告である。ムスリムの外部からの視点の研究・報告を行ったことで、本研究テーマを多角的に分析することへの貢献となった。

成果の公開状況, 計画

上述の第1回研究会は、共同研究員のみを対象とせず、公開で実施した。2名の報告者による報告要旨についてはAAのウェブサイトを通じて公開されているところである。

2013年度から2015年度までの第1期および2016年から2018年度までの第2期活動において発表された各報告およびそれに基づいて報告者から提出されている論文を基に、成果論集として公表したい。可及的速やかに取りまとめた上で、出版社と交渉し形としたい。

エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集研究

研究代表者名: 石川 博樹 参加者: 所員 2 共同研究員 5

研究期間: 2017(平成29)年度～2018(平成30)年度

研究計画

本共同利用・共同研究課題の主たる目的は、1880年代後半にジンマ王国を訪れたフランス人旅行者ボレリが持ち帰ったイスラーム祈禱集(以下「ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集」)の内容を解明するとともに、その結果とジンマ王国を中心とするエチオピア南西部におけるイスラームに関する情報を組み合わせて検討することにより、本史料の史料的価値を明らかにすることである。

初年度の2017年度は、まず荻谷康太と馬場多聞が協力してジンマ王国伝来イスラーム祈禱集の内容解説を進め、その成果を逐次研究会で発表する。エチオピア南西部をフィールドとして文化人類学研究を行ってきた石原美奈子と吉田早悠里、エチオピア北部のキリスト教徒居住地域の歴史学研究を行ってきた石川博樹は、エチオピアにおけるイスラーム受容史、特にエチオピア南西部におけるイスラーム受容に関する調査・研究を進め、その成果を研究会で公表する。上記の研究活動において各参加者は、エチオピアの諸言語の研究を行っている若狭基道の助言を適宜得る。

以上の研究活動と並行して、本共同利用・共同研究課題の成果公開の一環として2017年度末から2018年度初めにかけてAA研資料展示室での開催するジンマ王国伝来イスラーム祈禱集の展示を主とする企画展示の準備を進める。

研究実績の概要(2017年度)

1880年代後半にジンマ王国を訪れたフランス人旅行者ボレリが持ち帰ったイスラーム祈禱集(以下「ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集」)の史料的価値の解明を主たる目的とする本共同利用・共同研究課題では、2017年度に2回の研究会を開催した。第1回研究会では、代表である石川が趣旨説明を行った後、ジンマを中心としてエチオピアのイスラームについて文化人類学研究を行っている石原がエチオピアにおけるイスラームの歴史についての解説を行った。これらをふまえて、参加者全員で研究期間内における研究計画と研究成果の公開計画に関する討議を行った。第2回研究では、荻谷がジンマ王国伝来イスラーム祈禱集の内容分析結果を報告し、本祈禱集に含まれる祈禱や著作物の内容、およびそれらが書写された年代について解説を行った。この報告を受けて参加者全員で討議を行い、本祈禱集が書写された地域に関する研究を進めることになった。その後、荻谷報告およびその後の討議の内容をふまえ、2018年4月下旬から5月中旬に開催するジンマ王国伝来イスラーム祈禱集の展示を主とする企画展示の構成および解説文案の検討を参加者全員で行った。

成果の公開状況, 計画

成果公開の1つとして企画展示の準備を進めているものの、2018年3月末時点で公開済みの成果はない。

2018年4月下旬から5月中旬にかけて、ジンマ王国伝来イスラーム祈祷集の展示を中心とする企画展示「祈りにつながるイスラーム: エチオピア西部の信仰とその歴史」展を開催する。またジンマ王国伝来イスラーム祈祷集の画像と史料解題で構成する出版物の刊行準備を進める。

簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)

研究代表者名: 陶安 あんど 参加者: 所員 1 共同研究員 12

研究期間: 2017(平成29)年度～2019(平成31)年度

研究計画

本年度の主要イベントは、2017年9月5日～10日に合宿形式で八王子セミナーハウスにて実施する史料講読研修「中国古代文書簡牘」である(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/silc2017>)。実施の前は講読テキストを構築し、終了後は、セミナーでの教育実践を踏まえ、共同して文書簡牘の概説書を執筆する予定である。

簡牘セミナーは、一般参加も認めつつ、主として大学院生と若手研究者に照準を合わせるが、専攻は一切問わず、中国史のほか、日本史や西洋史の研究者にも広く参加を呼び掛けている。授業は、概論・講読・演習という三つの形式に区分する。概論は専門外の参加者に配慮して、講義形式で簡牘や文書行政に関する基礎知識を教授する。講読は、様式論的特徴に基づいて文書の基本構造を理解し必要情報を読み取る、というスキルを習得することを目的として、講師指導で文書史料を講読する。演習では、受講生自身に白文史料の分類・集成をさせて、文書簡牘の様式論的特徴に関する知識の定着を図る。さらに、実際にノコギリやノミを手にして簡牘を製作する演習も設けて、様々な意味が込められている簡牘の形状に関する理解を深める。

また、セミナーの講読テキストの重要な供給源である里耶秦簡の訳注についても、先行研究課題に引き続き、通常事項を中心に完成に向けて努力する予定である。

研究実績の概要(2017年度)

本年度の最も重要な成果は、2017年9月5日～10日に合宿形式で八王子セミナーハウスにて実施した史料講読研修「中国古代文書簡牘」(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/silc2017>)の開催である。研修には定員12人に対して、9人の大学院生もしくはPDを含む受講者11人の参加を得た。授業は、講義・史料講読・演習という三つの形式で行った。講義では、簡牘学一般・文書行政・簡牘の諸形態等にわたり文書簡牘の古文書学的研究に関する基礎知識を教授した。史料講読では、代表的な文書簡牘史料群である西北漢簡と里耶秦簡とに分けて、講師の指導で文書史料を講読し、演習では、受講者が自ら簡牘史料を分類・集成することを通じて理解を深めた。日本における文書簡牘の研究は、古文書学的方法論に支えられ、世界的にみても卓越した成果を数多く生み出してきたが、史料の分散性などの故にやや敷居が高く、人的広

がりにも限界がある。そうした状況の中で、本研修は文書簡牘の古文書学的研究に関する基礎的知識を若手研究者に広める一助となったのではないかと考える。

成果の公開状況、計画

研修の教材としては、本研究課題および先行課題の「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革——中国古代簡牘の横断領域的研究(2)」の史料講読の成果に基づき、講義レジュメ・講読史料等の授業配布資料(A4用紙265頁)と、地図・文書様式・語彙・簡牘図版等、文書簡牘を解読するための基礎的情報を集めた参考資料集(A4用紙75頁)を編集した。まだ一般公開には至っていないが、本研究課題の目標である『文書簡牘概論』の共同執筆と出版に向けた第一歩である。

本研究課題における史料講読の部分的成果については、史料メモとしてHPで公開している(<http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note.html>)。

文書簡牘研修での経験を踏まえて、また新史料の講読を通じて、数年来培ってきた新しい簡牘学の基礎理論の有効性を実証しつつその理論化を図り、『中国簡牘学概論』を共同執筆・出版する予定である。

オスマン文書史料の基礎的研究

研究代表者名: 高松 洋一 参加者: 所員 3 共同研究員 12

研究期間: 2017(平成29)年度～2019(平成31)年度

研究計画

本年度は、共同利用・共同研究課題の初年度であるため、年に2回開催が予定されている研究会のうち7月開催の第1回目において、まずオスマン文書史料の類型全体像を俯瞰するような基調報告を、研究代表である高松が行ない、オスマン史および他地域の歴史の専門家からコメントをしてもらおう。また各オスマン史研究者には、自己の専門で取り扱う文書類型をごく簡単に紹介してもらおう。

この本年度第1回研究会で行われた議論を踏まえ、とくに取り上げるべきと考えられる文書類型を2つほど選択し、広く中堅・若手のオスマン史研究者、イスラーム史研究者を対象に1月にオスマン文書セミナーを開催して、解説・実例の講読を行なう。セミナーの講師は共同研究員が務める。

3月に第2回研究会を開催し、オスマン文書セミナーで明らかになった問題点を総括する一方、次年度に向けてセミナーで取り扱わなかった別個の文書類型に関し、共同研究員による報告を行なう。

研究実績の概要(2017年度)

第1回研究会では、「オスマン文書史料研究の現状と課題」という報告が行われ、電子化が進むオスマン文書史料の利用をめぐる動向が紹介された。2016年を最後に首相府オスマン文書館における史料の現物の閲覧が不可能になった反面、デジタル化により、短期間で大量の閲覧が可能になったこと、利用許可が下りづらく研究困難と言われたトプカプ宮殿博物館文書館の史料がオスマン文書館に移管され、閲覧が可能になったことの意義が指摘された。またオスマン文書史料研究の現状として、史料刊行事業が進む一方で、世界的に古文書学的研究が停滞していることを踏まえ、今後の研究の課題として、諸文書類型の様式と様式に関する正確な知見の蓄積、オスマン文書史料を他のイスラーム文書史料と通時的・共時的に比較・位置付けることの重要性が議論された。

第2回研究会では、財政に関する帳簿を取り上げ、帳簿とは何であるか、という問題を考察しつつ、帳簿

は官僚機構の中で単独に存在せず、引用と抜粋を通じ個々の文書と密接な関係をもっていたことも踏まえつつ、18世紀の様々な帳簿の実例の講読を行った。また合わせてオスマン朝の帳簿で専用される、点を打たない独特なアラビア文字のスィヤーカト書体について、判読のポイントの紹介を行った。このセミナーによって若手研究者を中心に、帳簿史料を使用した数量的な歴史研究の機運がわが国で高まっていくことが期待される。

成果の公開状況、計画

共同研究の初年度であり、今のところ成果は公開されていない。

最終年度終了後、3年間の研究成果を踏まえ、論集またはAA研ジャーナル『アジア・アフリカ言語文化研究』特集号のかたちで成果を公開する予定。

1-2.3.3 共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)

長沙馬王堆漢墓簡牘帛書字詞研究——以《相馬經》為中心

研究期間: 2017.11.1～2018.2.28

研究代表者名: 劉釗 受入所員: 陶安あんど

研究課題の目的・内容

長沙馬王堆漢墓簡牘帛書には、『周易』、『老子』、『相馬經』等五十余種の文献が含まれており、重要な学術的価値と文化的意義を有している。本共同研究の代表者が主任を務める復旦大学出土文献与古文字研究中心は、湖南省博物館、中華書局と共同で『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』を編纂出版した。この書によって馬王堆漢墓簡牘帛書が初めて全面的に公開され、帛書の綴合、釈文・注釈の作成において従来の研究を大きく上回る成果をあげた。

しかし『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』にはまだ改善の余地が多く残されている。本共同研究では、本書出版後の学界の研究成果を十分にとりいれ、本書の釈文と注釈の整理をあらためて行い、馬王堆簡帛文献研究をさらに前進させたいと考えている。

終了報告

本共同研究は、四か月とやや短いながらも、長沙馬王堆漢墓簡牘帛書の中から重点的に『相馬經』を取り上げ、釈文と注釈をあらためて整理しなおし、より正確な釈文と詳しい注釈を学界に提供することに努めた。受け入れ所員の陶安およびAA研共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」の共同研究員と積極的に連携を取り、その学際的な知見に基づき、従来に比べて釈文・注釈ともその質を一段と高めることができた。中でも、注釈の面では資料の収集範囲をこれまでよりも拡大して畜産学方面の知識にも注意を払い、さらに日本の各図書館に所蔵されている『相馬經』と関係する資料を検索し、それらを参照して『相馬經』の新たな釈文が作成できたことは、本共同研究の大きな成果と言えよう。

成果の公開状況、計画

本共同研究の成果は、研究報告の形で AA 研共同研究課題の研究会にフィードバックさせたほか、別紙の通り個別論文の形で部分的に公表した段階に止まっている。

今後は、引き続き個別論文や研究報告の形で部分的研究成果の公表と普及に努めつつ、『相馬経』の新釈文・注釈を、単著の形で纏めて公表して学界に提供する道を探る。

カラホト出土西夏文『三代属明言集』の研究

研究期間: 2017.12.1～2018.3.31

研究代表者名: 孫 伯君 受入所員: 荒川 慎太郎

研究課題の目的・内容

西夏文『三代属明言集』(日本では『三世属明言集』とも)は、カラ・ホト遺跡(中国内蒙古自治区)出土、ロシア東洋文献研究所(サンクト・ペテルブルグ)所蔵資料の西夏語詩歌集である。これまでに、ロシアのクチャーノフ教授、日本の西田龍雄教授、中国の史金波教授が、さまざまな角度から紹介・研究してきた。そして受入所員荒川慎太郎が「脚韻」の研究を行っている。

本資料は西夏時代に続く元代、白雲宗(派)と関係するものであり、西夏の代表的な遺跡カラ・ホト出土というものの、時代的には元の刊行物である可能性が高く、他に出土した印刷物についても元時代に成立したものがあつたことを傍証する。

荒川の協力も得て、期待される成果は次のとおりである。

- (1) 西夏文『三代属明言集』の研究・発表。中国密教史、西夏の教義研究に資する。
- (2) 元時代の西夏語と、西夏時代の西夏語の差異の検証(おそらく同質ではない)という言語学的研究。

終了報告

西夏文『三代属明言集』は西夏語詩歌集であり、その脚韻部分の音韻分析が西夏語音韻学の課題である。これまでに、受入所員荒川慎太郎が脚韻の韻母の手母音に関する研究を行っている。

本資料は時代的には元の刊行物である可能性が高く、他に出土した印刷物についても元時代に成立したものがあつたことを傍証する点について孫伯君が研究を続けた。

荒川の協力も得て、公開された成果は次のとおりである。

- (1) 中国密教史、西夏の教義研究に資する論文の執筆と刊行。
- (2) 元時代の西夏語と、西夏時代の西夏語の差異を検証する、言語学的な論文の執筆と刊行。
- (3) 研究成果の、一般への還元を目的とする公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の文字学」での発表。

短い滞在ではあつたが、日中の研究情報の交換、新事実の共有、今後の共同研究体制の構築などを行うことができた。

当初の予定には無かつたが、共同利用・共同研究課題『アジア文字研究基盤の構築1: 文字学に関する用語・概念の研究』との共同研究の実施、公開ワークショップにおける意見・情報交換も有意義なものとなつた。

成果の公開状況、計画

西夏文字に関して、一般公開のワークショップで発表を行った。

『三代属明言集』に関する論文を中国の雑誌などに発表する予定である。

1-2.4 センター

1-2.4.1 情報資源利用研究センター

年度計画

1. アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積, 加工, 公開, 活用に関する研究を行う。
2. IRC プロジェクトを通じて, アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化を行う。
3. IRC ウェブサイトの充実を図り, 情報資源の発信体制をより一層強化する。
4. 所内基幹研究班, 特別経費プロジェクト等との連携研究を実施する。
5. IRC ワークショップを開催し, 研究手法の普及, 発展を推進する。
6. 情報資源利用の新展開のため他の研究機関との連携, 共同研究を模索する。

実施状況

1. アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積, 加工, 公開, 活用に関する研究を IRC プロジェクトとして実施した。()内は代表者名である。

- 1) 中野暁雄著『ベルベル民族誌』のデジタル化と日本語訳の刊行(堀内里香)
 - 2) アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応付けと公開(奥田統己・山越康裕)
 - 3) モンゴル諸語対照基本語彙データベース(山越康裕)
 - 4) インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター: ヘロン語単語ウェブサイト構築(塩原朝子)
 - 5) 南アジア民俗写真データベース(外川昌彦)
 - 6) 故湯川恭敏所員の調査資料のデジタル化およびメタデータ公開(品川大輔)
 - 7) チュルク諸語対照基礎語彙(第4期)(児倉徳和)
 - 8) アラビア文字等紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラムの公開(高松洋一)
 - 9) オスマン演劇ポスター・音楽データベース(松本菜穂子)
 - 10) オスマン演劇ポスター画像公開(江川ひかり)
 - 11) Old Tibetan Documents Online(岩尾一史・星泉)
 - 12) Matsya プロジェクトマイクロフィルムデジタル化(小倉智史)
2. 上記のプロジェクトのうち, AA 研所蔵資料のデジタル化を行ったものとして 1) , 2) , 9) , 10) , 所外に所蔵されている資料のデジタル化を行ったものとして, 5) , 6) , 11) , 12) , AA 研所員が共同研究に基づき調査・収集した資料をデジタル化したものとして 3) , 4) , 7) がある。
3. 公開している情報資源の検索・閲覧・利用の利便性を向上させるために前年度全面リニューアルした IRC ウェブサイトを活用し, IRC プロジェクトの紹介や研究集会の広報など, 情報発信に努めた。実施したプロジェクトの成果はウェブサイトで公開済みである。
4. 所内基幹研究班, 特別経費プロジェクト等との連携研究に取り組んだ。実施した IRC プロジェクトのうち, 2) , 3) , 4) , 6) , 7) は基幹研究「言語ダイナミクス科学研究」との, 5) は基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」との,

- 8) は基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」との連携研究である。
5. IRC20 周年記念シンポジウムとして、IRC のこれまでの研究を回顧し、将来を展望するシンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て、活かす」(2017 年 12 月 9 日, AA 研(304))を実施するとともに、研究手法の普及・発展のため、以下の IRC ワークショップやセミナーを開催した。
- 1) IRC 設立 20 周年・ウィキペディア日本語版始動 15 周年記念ワークショップ「世界の知識を翻訳しよう」, 2017 年 10 月 28 日, 東京外国語大学附属図書館 4 階@ラボ, 講演者: 渡辺智暁(慶應義塾大学), 太田尚志, 松田朝彦(物質・材料研究機構), 北村紗衣(武蔵大学)
 - 2) IRC 設立 20 周年記念ワークショップ「アーカイブズ学の現状 ―研究資料の保全と利活用を目指して―」, 2017 年 11 月 7 日, AA 研(304), 講演者: 西村慎太郎(人間文化研究機構 国文学研究資料館)
 - 3) IRC 設立 20 周年記念国際ワークショップ「インド洋レユニオン島の音楽と民話」, 2017 年 11 月 17 日, AA 研(304), 講演者: 小田淳一(AA 研), イザベル・シヨン(語り手), ジャン＝ピエール・アカパンディエ(語り手・音楽家), 日本語通訳: 税所萌葉(レユニオン大学大学院博士課程)
 - 4) IRC 設立 20 周年記念国際ワークショップ「話芸の競演: インド洋レユニオン島の民話 VS 古典落語」, 2017 年 11 月 21 日, まめ蔵(吉祥寺), 講演者: 小田淳一(AA 研), イザベル・シヨン(語り手), ジャン＝ピエール・アカパンディエ(語り手・音楽家), 古今亭文菊, 日本語通訳: 税所萌葉(レユニオン大学大学院博士課程)
 - 5) IRC 設立 20 周年記念セミナー「人文情報学の現在」, 2018 年 2 月 15 日, AA 研(304), 講演者: 永崎研宣(人文情報学研究所), 北本朝展(人文学オープンデータ共同利用センター/国立情報学研究所)
 6. 情報資源利用の新展開のため他の研究機関との連携, 共同研究を模索した。特に, IRC プロジェクト 12 件中 10 件は所外の研究者との共同研究として実施されている。さらに, 上記ワークショップはいずれも他機関の研究者を招いて実施したもので, うち 1 件は情報資源利用の新展開を目指し, 人文情報学の専門家に講演を依頼して企画したものである。

I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センター

年度計画

1. 臨地調査の手法の実践的・理論的な洗練と、「フィールドサイエンス」という「現地学」の構築にむけた研究活動を推進する。
 2. 上記の目的のためにフィールドサイエンス・コロキウムを企画・実施する。
 3. フィールドサイエンスを専門とする異なる分野の研究者の連携を図るオンラインのフィールドネットの整備を進め, 分野を超えたフィールドサイエンス創成の方向性を模索する。
 4. 研究所の有する 2 つの海外研究拠点である中東研究日本センター(JaCMES: レバノン共和国ベイルート) 及びコタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO: マレーシア連邦・サバ州)の運営と整備を進める。
- なお, 各事業のおおまかなスケジュールは以下のとおり。

4～6 月

- ・第 1 回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会
- ・第 1 回フィールドサイエンス・コロキウム

7～9月

- ・第1回フィールドネット運営委員会
- ・KKLO「サバの少数言語に関するセミナー」

10～12月

- ・第2回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会
- ・第2回フィールドサイエンス・コロキウム
- ・JaCMES 若手研究報告会
- ・KKLO 第1回現地講演会
- ・フィールドネットワークショップ
- ・フィールドネット第1回公募制ラウンジ
- ・第2回フィールドネット運営委員会

1～3月

- ・第3回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会
- ・第3回フィールドサイエンス・コロキウム
- ・海外拠点専門委員会
- ・JaCMES 諮問委員会
- ・KKLO 第2回現地講演会
- ・フィールドネット第2回公募制ラウンジ

実施状況

2017年度のフィールドサイエンス研究企画センター(以下 FSC)は、近藤信彰(センター長)、太田信宏(副センター長)、床呂郁哉、外川昌彦、塩原朝子、錦田愛子、吉田ゆか子から構成された。

1. および 2. 臨地調査手法の洗練、フィールドサイエンスの構築、フィールドサイエンス・コロキウムの企画・実施

○ 2010年度発足の「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」の企画立案により、少人数で集中的に討議をおこなう公開研究会形式の「フィールドサイエンス・コロキウム」を2回開催した。

- ・「リスク・ハザード・レジリエンス(第1回)」(2017年10月27日(金)開催)
- ・「フィールドワークをフィールドワークする」(第2回)」(2018年2月16日(金)開催)

○ フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会を2回(10月27日(金)、2月16日(金))開催した。

○ マルタ難民報道写真家写真展「エクソダスー地中海を渡る脱出ー」(2018年1月30日(木)～3月11日(日))および関連講演会(3月7日(水)、3月9日(金))を開催した。

3. フィールドネットの整備と公募企画の開催

○ 文理各専門分野の研究者が情報を交換する組織として2008年度に設置したフィールドネットの機能を強化する目的で、2011年度に発足したフィールドネット運営委員会を通じ、フィールドネットの企画・運営体制の整備を継続した。

○ 利便性の向上をはかるためにウェブサイト画面の改良作業と整備を続行した他、新規企画としてフォトコンテストを企画し、そのための写真の募集を開始した。

○ 公募企画「フィールドネット・ラウンジ(公募形式)」1件を開催した。

・ワークショップ「「草の根から地域住民が生み出す「食」と「農」の空間ー どうやって見つけ、調べるか？」(2018年1月20日(土)開催)

○ フィールドネット運営委員会を1回(2018年3月30日(金))開催し、フィールドネットの今後の活動方針を策定した。

4. 海外研究拠点の運営と整備

II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター「3.現地研究拠点」を参照

I-2.5 既形成研究拠点

I-2.5.1 アジア書字コーパス拠点(GICAS)

代表: 荒川慎太郎 副代表: 澤田英夫

関連所員: 伊藤智ゆき, 小田淳一, 高島淳

年度計画

アジア諸文字情報資源の蓄積と公開(GICAS 図書資料・展示資料の整備と管理)

アジア諸文字情報資源に関連する研究成果の公開

実施状況

2017年度の年度計画に沿った活動成果は、以下のとおり。

1. アジア諸文字情報資源の蓄積と公開(GICAS 購入図書・展示会物品等の整理・管理)

○ プロジェクトスペース(207)に設置されている特別書架の貴重書の整理を行い、研究者の利用の便を図った。

○ GICAS 所蔵、アジアの各種文字のタイプライター展「アジア諸文字のタイプライター」(AA 研, 2015年10月26日～11月27日)で使用したタイプライターのうち、2016年度に清掃・整備が完了しなかったものを清掃・整備した。

2. アジア諸文字情報資源に関連する研究成果の公開

a) IRC のサーバを利用してモンゴル語全文検索に関して、昨年度の内容を修正・拡張し、公開した。

<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/20.html>

(解説用ページは <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/project.html>)

b) IRC のサーバを利用してヒンディー語とウルドゥー語の自動形態素解析ソフトを、昨年度の内容を修正・拡張し、公開した。

ヒンディー語用 (<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/08.html>)

ウルドゥー語用 (<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/09.html>)

I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点

代表: 近藤信彰 副代表: 高松洋一

関連所員: 飯塚正人, 錦田愛子, 野田仁

特任助教: 細田和江

年度計画

2005年度から5年間に渡って実施した「中東イスラーム研究教育プロジェクト」によって形成された研究拠点を、2016年度より、人間文化研究機構の「現代中東地域研究」推進事業の副中心拠点として、発展させる。

パレスチナ／イスラエル研究会、政治変動研究会、「移動・交流が創る中東・イスラーム圏」研究会を立ち上げ、国内研究会を開催するとともに、一般向けの大規模講演会、国際ワークショップ等を開催する。

実施状況

人間文化研究機構の「現代中東地域研究」推進事業の副中心拠点として、活動を行った。国内研究会を10回開催したほか、7月には、東京、大阪、京都、広島で、「パレスチナ占領50周年」連続国際シンポジウムを開催した。12月にはアメリカより、ハディース研究の権威 Jonathan Brown 氏を招聘し、京都と東京で国際ワークショップを開催した。2月にはヨーロッパの難民問題に関する国際ワークショップ、イラン最初の写真に関する国際ワークショップを開催し、3月には中国・新疆からトルコへの難民に関する国際ワークショップを東京と京都で開催した。Web ページやデータベースの整備も行った。

I-2.6 所員の個人別研究活動

I-2.6.1 概要

全国共同利用研究所としての本研究所の設立理念は、アジア・アフリカ地域の言語文化に関して、現地調査に基づく総合的あるいは個別の研究を遂行してその成果を公開すること、および国内外のそれらの研究の連携と活性化を図り、基礎資料の構築と公開に努めることにあり、2010年度に新設の共同利用・共同研究拠点に移行した後も、この基本理念は変わらない。

そうした理念に立って共同利用・共同研究拠点の任務を遂行するための研究活動は本年度、4つの基幹研究、2つのセンター(情報資源利用研究、フィールドサイエンス研究企画)、2つの既形成拠点およびそれらと密接に連携しつつ遂行される共同利用・共同研究課題(29件)を中心に実施された。所員がこれらの多様な共同研究活動に何らかの形で参画していることは言うまでもない。

本項目は、以上のような本研究所における共同研究活動が、所員個人のレベルにおける成果としてどのように反映されているのかを、本年度の所員ごとの研究業績を列挙する方式で示したものである。

I-2.6.2 所員の研究業績一覧

荒川 慎太郎(あらかわ しんたろう)

准教授, 言語学研究ユニット

研究主題:西夏語学, 西夏語文献学

業績

1. 著書(編著):『敦煌石窟多言語資料集成』(松井太・荒川慎太郎編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017.
2. 論文:「敦煌石窟西夏文題記銘文集成」『敦煌石窟多言語資料集成』(松井太・荒川慎太郎編), 241-333, 2017.7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 論文:「西夏語の双数接尾辞について」*Diversity and Dynamics of Eurasian Languages*, 69-83, 2018.3, ユーラシア言語研究コンソーシアム.(査読有)
4. 書評:“Translating Chinese tradition and teaching Tangut culture: manuscripts and printed books from Khara-khoto. Berlin & Boston, Walter de Gruyter, 2015”, *East Asian Publishing and Society* 7(1): 79-82, 2017.4, Brill.
5. 総説・解説:「日本国内各所に所蔵される『西夏國書字典音同』を巡って」『遼金西夏史研究会 News Letter』10: 29-33, 2018.3, 遼金西夏史研究会.
6. 口頭発表:「西夏文字一字形と構成の特徴」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「AA 研共同利用・研究課題「アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究」2017 年度第1回研究会」, 2017.6.3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
7. 口頭発表:「仏典を資料とした西夏語の文法研究」, チベット=ビルマ言語学研究会第42回会合, 2017.7.22, 大阪大学箕面キャンパスB棟1階プレゼンテーションルーム.
8. 口頭発表:「西夏文によるいわゆる十法界図」, 龍谷大学仏教文化研究会西域文化研究会 2017 年度第2回中央アジア科研全体研究会, 2017.7.23, 龍谷大学大宮キャンパス西翼大会議室.
9. 口頭発表:「西夏語とムニャ語の方向接辞:接辞の種類と接辞を含む例文」, 科研費(基盤B)研究会「「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相」2017 年度第1回研究会, 2017.11.19, 東京外国語大学本郷サテライト5階.
10. 口頭発表:大会ワークショップ「チベット・ビルマ諸語における「方向接辞」の諸相」, 日本言語学会第155回大会, 2017.11.26, 立命館大学衣笠キャンパス以学館3階4号室.
11. 口頭発表:「チベット・ビルマ系言語の各種文字」, AA 研共同利用・研究課題「アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究」2017 年度公開ワークショップ, 2018.2.17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 荒川 慎太郎

課題番号: 16H03414

課題名: 「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 白井聡子, 倉部慶太

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 佐藤 貴保 盛岡大学文学部 准教授

課題番号: 15K02906

課題名: 西夏王国の人名に関する研究—多民族国家における文化交流・融合の視点から—

研究種目: 基盤研究(C)

研究分担者: 荒川慎太郎

期間(年度): 2015(H27)~2017(H29)

科研費:

研究代表者: 松井 太 大阪大学大学院文学研究科 准教授

課題番号: 26300023

課題名: 多言語資料の比較分析による敦煌・トゥルファン文献研究の再構築と統合

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 岩本篤, 荒川慎太郎, 橘堂晃一, 佐藤貴保, 赤木崇敏, 岩尾一史, 山本明志, 坂尻彰宏

期間(年度): 2014(H26)~2017(H29)

所属学会(役職)

日本語学会

遼金西夏史研究会

飯塚 正人(いづか まさと)

教授, 地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: イスラーム学・中東地域研究

業績

1. 総説・解説: 「先行宗教・異教徒を取り込む「啓典の民」という考え方」『週刊エコノミスト』2017年5月2・9日合併, 2017.4, 毎日新聞出版.
2. 総説・解説: 「基本書を読む コーラン 断片的な神の命令の羅列 厳しい戒律と融通無碍な内容」『週刊エコノミスト』2017年5月2・9日合併, 2017.4, 毎日新聞出版.
3. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組監修): 「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2017.5.8.
4. 学外の社会活動(インターネット): 「どうしてイスラーム教はわかりにくいのか? 危険だと誤解を招く4つの理由 宗教学者・飯塚正人さん」(SEKAI), 2017.5.
5. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演: 有): 「ホウドウキョク×Flag7」(ホウドウキョク), 2017.6.12.
6. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組監修): 「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2017.6.17.

7. 学外の社会活動(講演会):「イスラム情勢」(於:警部任用科本課程第 49 期研修), 2017.6.21, 警察大学校.
8. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組監修):「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2017.7.1.
9. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組監修):「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2017.7.29.
10. 学外の社会活動(講演会):「イスラム世界を理解する」(於:第 52 回法務省入国管理局関係職員特別科(難民調査官)研修), 2017.7.7, 法務省法務総合研究所.
11. 学外の社会活動(講演会):「イスラーム教徒の考え方と思いを知るために」(於:東進ハイスクール「大学・学部研究会」), 2017.8.9, TKP ガーデンシティ品川.
12. 学外の社会活動(講演会):「イスラム情勢」(於:警部任用科本課程第 50 期研修), 2017.9.8, 警察大学校.
13. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組監修):「Mr.サンデー」(フジテレビ), 2017.9.24.
14. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組監修):「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2017.10.28.
15. 学外の社会活動(講演会):「世界を揺るがす中東の今」(於:茨城県民大学講座), 2017.10.13, 11.10, 12.8, 2018.1.12, 2.9, 茨城県県西生涯学習センター.
16. 学外の社会活動(講演会):「イスラム世界を理解する」(於:第 25 回法務省入国管理局関係職員高等科研修), 2017.11.27, 法務省法務総合研究所.
17. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組監修):「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2017.12.28.
18. 学外の社会活動(講演会):「イスラム情勢」(於:警部任用科本課程第 51 期研修), 2017.12.6, 警察大学校.
19. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組監修):「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2018.1.27.
20. 学外の社会活動(講演会):「イスラム世界を理解する」(於:第 15 回法務省入国管理局関係職員専攻科研修), 2018.2.1, 法務省法務総合研究所.
21. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組監修):「池上彰のニュース そうだったのか!!」(テレビ朝日), 2018.3.10.
22. 学外の社会活動(講演会):「イスラム情勢」(於:警部任用科本課程第 52 期研修), 2018.3.19, 警察大学校.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 桑原 尚子 早稲田大学比較法研究所 准教授

課題番号: 16H03538

研究課題名: イスラーム圏における法現象の分析枠組構築に関する学際的研究

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 飯塚正人, 佐藤やよひ, 大河内美紀, 青柳かおる, 吉川 孝, 辻上 奈美江

期間(年度): 2016(H27)~2018(H30)

外部団体委員

京都大学東南アジア地域研究研究所 地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点運営委員会 地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点運営委員会委員長

早稲田大学イスラーム地域研究機構 共同利用・共同研究拠点運営委員会 共同利用・共同研究拠点運営委員会委員

所属学会(役職)

地中海学会(常任委員、学会誌編集委員)

日本イスラム協会

日本オリエント学会

日本中東学会(評議員)

石川 博樹(いしかわ ひろき)

准教授, 地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: アフリカの歴史

業績

1. 論文: 「エチオピア正教会について」『東方キリスト教諸教会: 研究案内と基礎データ』(三代川寛子編), 148-153, 2017.8.31, 明石書店.
2. 論文: 「ソロモン朝エチオピア王国史研究とエチオピアのキリスト教」『東方キリスト教諸教会: 研究案内と基礎データ』(三代川寛子編), 154-160, 2017.8.31, 明石書店.
3. 総説・解説: 「アフリカ史から歴史と世界について考える」『Globe Voice』12, 7, 2017.10, 東京外国語大学.
4. 口頭発表: 「ポルトガル植民地期 PALOP における南米原産作物栽培: アンゴラとモザンビークを中心に」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20, 信州大学.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者 石川 博樹

課題番号: 15K02888

課題名: 植民地期 PALOP における主食作物栽培とその社会的影響に関する研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015(H27)~2017(H29)

所属学会(役職)

史学会

日本アフリカ学会(関東支部運営幹事)

日本ナイル・エチオピア学会(評議員, 運営幹事, 学会誌編集担当幹事)

日本オリエント学会

日本ポルトガル・ブラジル学会

キリシタン文化研究会

伊藤 智ゆき(いとう ちゆき)

准教授, 言語学研究ユニット

研究主題: 音韻論, 中期朝鮮語, 中国語中古音

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 伊藤 智ゆき

課題番号: 17K02675

研究課題名: 朝鮮語諸方言における複合語・派生語のアクセント研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2017(H29)~2019(H31)

科研費:

研究代表者: 伊藤 智ゆき

課題番号: 15KK0041

研究課題名: 韓国語慶尚道方言のアクセント研究(国際共同研究強化)

研究種目: 国際共同研究加速基金

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

所属学会(役職)

日本言語学会

朝鮮学会

日本音韻論学会(理事)

日本音声学会(編集委員)

日本音韻論学会

日本音声学会

太田 信宏(おおた のぶひろ)

准教授, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: インドの歴史

業績

1. 総説・解説: 「近世南インドの宮廷文学」『インド文化事典』(インド文化事典編集委員会), 124-125, 2018.1.26, 丸善出版.
2. 総説・解説: 「デリー・スルタン朝時代の南インドの情勢」『インド文化事典』(インド文化事典編集委員会), 252-253, 2018.1.26, 丸善出版.
3. 総説・解説: 「ムガル期の南インドの情勢」『インド文化事典』(インド文化事典編集委員会), 256-257, 2018.1.26, 丸善出版.
4. 口頭発表: 「ムガル朝と南インドの文化的接触について」, AA 研所内研究会「南アジアのフロンティアを再考する」, 2017.6.28, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 太田 信宏

課題番号: 16K03075

研究課題名: 植民地インドのマイスール藩王国における文芸と王権

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016(H28)~2019(H31)

科研費:

研究代表者: 水野 善文 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号: 16H03410

研究課題名: 南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 太田信宏, 藤井守男, 萩田博, 丹羽京子

期間(年度): 2016(H28)~2019(H31)

所属学会(役職)

日本南アジア学会(会計担当常務理事)

史学会

歴史科学協議会(『歴史評論』編集委員)

日本印度学仏教学会

インド考古研究会

小倉 智史(おぐら さとし)

助教, 情報資源利用研究センター

研究主題: 南アジア地域研究・歴史学

業績

1. 総説・解説: 「私蔵写本を求めて」『FIELDPLUS』19, 2018.1, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 20-21.
2. 口頭発表: “Indic Deities Translated by Means of the Oneness of Existence: in the Case of a Persian Translation of the Rājatarāṅgiṅīs”, Kenan Rifa'i Center for Sufi Studies, Kyoto University: The 1st International Symposium of Kenan Rifa'i Center for Sufi Studies: “Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies”, 2017.5.20–21, 京都大学稲盛財団記念館.
3. 口頭発表: 「『ラージャタランギニー』ペルシア語訳における翻訳ストラテジー」, AA 研フォーラム, 2017.6.15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 口頭発表: 「16 世紀カシミールのサンスクリット文献におけるモグール/ムガル」, AA 研所内研究会「南アジアのフロンティアを再考する」, 2017.6.28, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 口頭発表: “Kaśmīr and the Mongols: Who Invaded the Valley in 1320?”, Deutsche morgenländische Gesellschaft: 33. Deutscher Orientalistentag 2017, 2017.9.18–22, Friedrich-Schiller-Universität Jena.
6. 口頭発表: 「カシミール・リシ伝記群とその宗派性」, AA 研「共同利用・共同研究課題「近世南アジアの文化と社会: 文学・宗教テキストの通言語的比較分析」第 2 回研究会」, 2017.10.14, 東京外国語大学本郷サテライト 8 階.
7. 口頭発表(小倉智史): “Kālhaṇa's ‘Victory’ over Rashīd al-Dīn: Contesting Pre-Islamic Histories of Kashmir during the Jahāngīr Period”, International Workshop on Pre-Modern Kashmir 2018, 2018.3.5–6, 京都大学ユーラシア文化研究センター.
8. 口頭発表: “Political Legitimacies and Their Perceptions in the Multilingual Society of Sultanate and Early Mughal Kashmir”, Association for the Study of Persianate Societies: Eighth Biannual Convention of the Association for the Study of Persianate Societies, 2018.3.15–19, Ilia State University, Tbilisi, Georgia.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 川本 正知 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科特任教授

課題番号: 16H05681

研究課題名: ラシード・ウッディーン『歴史集成』写本のミニアチュールの総合的研究

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 大塚修, 杉山雅樹, 榎屋友子, 小倉智史, 松田孝一

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

所属学会(役職)

内陸アジア史学会

西南アジア研究会

日本イスラム協会

インド思想史学会

駿台史学会

The Association for the Study of Persianate Societies

Deutsche Morgenländische Gesellschaft

その他研究成果

名称: International Workshop on Pre-modern Kashmir 2018 のオーガナイザー

期間(年度): 2017

成果: 日本学術振興会特別研究員(九州大学)の斉藤茜氏と、2018年3月5・6日に京都大学ユーラシア文化研究センターで開催された、前近代カシミールを主題とする国際ワークショップをオーガナイズした。ワークショップではローマ大学サピエンツァの Raffaele Torella 教授など3名を海外から招聘し、総勢13名が前近代カシミールに関する最新の研究成果を報告した。

小田 淳一(おだ じゅんいち)

教授, 情報資源利用研究センター

研究主題: 計量文献学

業績

1. 口頭発表: “Autour des cinémas expérimentaux de Jun’ichi Okuyama”, L’équipe de recherche Esthétique, Pratique et Histoire des Arts (EPHA), Université Paris 8: Cinémas performatifs au Japon, 2018.3.13, Archives nationales (Paris).

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 小田 淳一

課題番号: 15K12831

課題名: 映像表現と古典的修辞技法との対応関係の情報学的分析

研究種目: 挑戦的萌芽研究

研究分担者: 石井満

期間(年度): 2015(H27)~2017(H29)

科研費:

研究代表者: 小田 淳一

課題番号: 16H05671

課題名: インド洋フランス語系クレオール民話の口演の研究

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 西尾 哲夫 国立民族学博物館グローバル現象研究部 教授

課題番号: 17H02330

課題名: シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 小田淳一, 岡本尚子

期間(年度): 2017(H29)~2021(H33)

所属学会(役職)

情報処理学会

計量国語学会

人工知能学会

苅谷 康太(かりや こうた)

准教授, 地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: 西アフリカ・イスラーム地域研究

業績

1. 論文:「初期ソコト・カリフ国における背教規定」『アジア・アフリカ言語文化研究』94, 137-177, 2017.9. (査読有)
2. 論文:「一七世紀の西アフリカにおける奴隷化の論理:アフマド・バーバー『階梯』の分析」『史林』101(1), 83-115, 2018.1. (査読有)
3. 論文:“A Revolt in the Early Sokoto Caliphate: Muḥammad Bello’s *Sard al-Kalām*”, *Journal of Asian and African Studies* 95, 221-303, 2018.3. (査読有)
4. 口頭発表:「17 世紀の西アフリカ・ムスリム社会における奴隷売買の基準:アフマド・バーバー『階梯』の分析」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20, 信州大学教育学部.
5. 口頭発表:「引用・解釈・操作:ムハンマド・アル=マギーリーとウスマーン・ブン・フーディーの知的連

関」, 国立民族学博物館・共同研究「個-世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」(代表: 齋藤剛・神戸大学准教授)2017年度第2回研究会, 2017.12.9, 国立民族学博物館.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 荻谷 康太

課題番号: 15K16578

課題名: 18-19世紀の西アフリカ・ハウサランドにおけるムスリムと非ムスリムの境界

研究種目: 若手研究(B)

期間(年度): 2015(H27)~2018(H30)

所属学会(役職)

日本アフリカ学会

日本イスラム協会(学会誌編集委員)

日本中東学会

その他研究成果

名称: 諸外国文字フォントの評価監修

期間(年度): 2017

河合 香吏(かわい かおり)

教授, 文化人類学研究ユニット

研究主題: 人類学, 東アフリカ牧畜民研究

業績

1. 著書(共編著): *An Anthropology of Things* (eds. by Ikuya Tokoro and Kaori Kawai), Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018, 406 pp.
2. 論文(共著): Ikuya Tokoro and Kaori Kawai. "Introduction: Why the Anthropology of Mono (Things)?" , *An Anthropology of Things* (eds. by Ikuya Tokoro and Kaori Kawai), 2018, Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, pp. 18-34.
3. 論文: "The Cicadas Drizzle of the Chamus", *An Anthropology of Things* (eds. by Ikuya Tokoro and Kaori Kawai), 2018, Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, pp.258-271.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者： 河合 香吏
課題番号： 15K03034
研究課題名： 共鳴する「五感」：東アフリカ牧畜民における知覚の共同性に関する人類学的研究
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)

科研費：
研究代表者： 西井 涼子
課題番号： 17H00948
課題名： 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開：危機を中心に
研究種目： 基盤研究(A)
研究分担者： 吉田ゆか子, 深澤秀夫, 箭内匡, 高木光太郎, 河合香吏, 佐久間寛
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

所属学会(役職)

日本文化人類学会
日本アフリカ学会
生態人類学会
日本ナイル・エチオピア学会(評議員)
日本霊長類学会

栗原 浩英(くりはら ひろひで)

教授, 地域研究・歴史学研究ユニット
研究主題: ベトナム現代史

業績

1. 論文: 「ベトナム・中国関係における『同志』性に関する考察—1950年代～60年代および1991年～現在(2017年)を中心に」, 『アジア太平洋討究』, 31, 47-60, 2018.3.
2. 口頭発表: 「ベトナムにおける国家建設」, 歴史国際共同研究会第3回全体会合, 2017.11.18, 日本国際問題研究所.
3. 口頭発表: 「ベトナムが直面する環境問題をめぐって」, 「北東アジアの環境問題の現在と将来」プロジェクト(島根県立大学)第3回研究会, 2018.1.20, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 講演: “Nhin lai chuyen di tham Trung Quoc va Lien Xo cua Chu tich Ho Chi Minh vao dau nam 1950”, Vietnam Japan University, 2017.12.16, VJU My Dinh Campus, Hanoi, Vietnam.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者： 栗原 浩英
課題番号： 15K01865
課題名： ベトナム・中国間境域における協力／対立と国家関係の連動性に関する研究
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

科研費：

研究代表者： 今井 昭夫 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
課題番号： 17H02229
課題名： 近現代ベトナムにおける中国プレゼンスの諸相－連環人文的ベトナム地域研究
研究種目： 基盤研究(B)
研究分担者： 今村宣勝, 栗原浩英, 村上雄太郎, 野平宗弘
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

外部団体委員

公益財団法人岡崎嘉平太国際奨学財団奨学生選考委員

所属学会(役職)

日本ベトナム研究者会議
東方学会
歴史科学協議会
東南アジア学会
アジア政経学会
歴史学研究会

呉人 徳司(くれびと とくす)

教授, 言語学研究ユニット
研究主題: 言語学, チュクチ語

業績

1. 著書(編著) : *Chukchi Animal Folk Tales with Grammatical Analysis* (ed. by Tokusu Kurebito), Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
2. 口頭発表: “On the Importance of Mongolian Dialects Research”, Foundation for Culture and Science of Mongolic Peoples: 5th International Conference ‘Past and Present of the Mongolic Peoples’, 2017.8.24-25, Ulaanbaatar, Mongolia.
3. 口頭発表: “On the Chukchi Traditional Word Play”, National Taitung University: 6th 3E International

Conference: Enjoyment, Elderly, Edutainment, 2017.10.21-22, Taitung, Taiwan .

4. 口頭発表:「チチハル市梅リスダグル区におけるダグル語の実態調査から見えること」, 科研費「中国黒龍江省における危機に瀕するダグル語の社会言語学的研究」第 6 回日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承 少数言語について考える」, 2017.11.25, 東京外国語大学本郷サテライト.
5. 口頭発表:「チュクチ語動詞における自他動詞の派生関係」, 東京外国語大学「第 24 回対照日本語部門研究会」, 2018.3.3, 東京外国語大学.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 呉人 徳司

課題番号: 15H05155

研究課題名: 北東ユーラシア諸言語の語形成に関する地域類型的研究

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 風間伸次郎, 江畑冬生

期間(年度): 2015(H27)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 包 聯群 大分大学経済学部 准教授

課題番号: 16K02686

研究課題名: 中国黒龍江省における危機に瀕するダグル語の社会言語学的研究

研究種目: 基盤研究(C)

研究分担者: 呉人徳司

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

外部団体委員

北海道立北方民族博物館 研究協力員

所属学会(役職)

日本語学会

国際モンゴル学会

日本北方学会

黒木 英充(くろき ひでみつ)

教授, 地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: 中東地域研究, 東アラブ近代史

業績

1. 論文: “Neither “Western” nor “Orthodox”: Establishing Greek Catholic Identity in the Ottoman Empire and Beyond”, *Religious Interactions in Europe and the Mediterranean World: Coexistence and Dialogue from the Twelfth to the Twentieth Centuries* (ed. by Katsumi Fukasawa, Benjamin J. Kaplan, and Pierre-Yves Beaurepaire), 287–298, 2017, London and New York: Routledge.
2. 論文: 「イスラームと地域論」『第4次 現代歴史学の成果と課題 2 世界史像の再構成』(歴史学研究会編) 2, 48–63, 2017.5, 續文堂出版.
3. 総説・解説: 「ダマスカスのウマイヤ・モスク」『FIELDPLUS』 19, 6–7, 2018.1, アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 総説・解説: 「日本におけるイスラームとの共生」『世界史のしおり』 73, 6–7, 2018.1, 帝国書院.
5. 総説・解説: 「座談会 中東の地殻変動をどう見るか」『世界』 905, 132–147, 2018.3, 岩波書店.
6. 総説・解説: 「はじめに」『日本中東学会設立の頃—30周年記念座談会(2014)の記録』, 2017.12, 5, 日本中東学会.
7. 司会: Open Symposium “Preserving Syrian Cultural Heritage and the Role of Japan,” シルクロードが結ぶ友情プロジェクト実行委員会・奈良県立橿原考古学研究所: シリア世界遺産の次世代への継承を目指して—パルミラ 奈良からのメッセージ, 2017.7.11, 奈良春日野国際フォーラム薨.
8. 口頭発表: “Aleppo in the Syrian History”, シルクロードが結ぶ友情プロジェクト実行委員会・奈良県立橿原考古学研究所: シリア世界遺産の次世代への継承を目指して—パルミラ 奈良からのメッセージ, 2017.7.13, 奈良春日野国際フォーラム薨.
9. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演: 有): 「米 シリア攻撃の波紋」(NHK 視点・論点), 2017.4.14.
10. 学外の社会活動(講演会): 「日本中東学会第23回公開講演会 中東の戦争と平和 ヒロシマから考える」(於: 日本中東学会), 2017.9.30.
11. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演: 有): 「先読み! 夕方ニュース 夕方ホットトーク 混迷する中東情勢 今後の展開を読む」(NHK ラジオ第1), 2017.11.1.
12. 学外の社会活動(新聞・雑誌): 「オピニオン 論点・エルサレム「首都認定」進むイスラエル強硬路線」(毎日新聞), 2017.12.7.
13. 学外の社会活動(テレビ・ラジオ番組・出演: 有): 「日曜討論 トランプ大統領エルサレムの思惑! 中東情勢の行方と日本!」(NHK テレビ総合日曜討論), 2017.12.17.
14. 学外の社会活動(講演会): 「シリア内戦と今後の中東」(於: 調布市北公民館 平和講演会), 2018.3.2.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 長澤 榮治 東京大学東洋文化研究所 教授

課題番号: 16H01899

研究課題名: イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究

研究種目： 基盤研究(A)

研究分担者： 黒木英充, 村上薫, 松永典子, 後藤絵美, 岩崎えり奈, 服部美奈, 岡真理, 白杵陽, 山岸智子, 嶺崎寛子

期間(年度)： 2016(H28)～2019(H31)

外部団体委員

北海道大学スラブ研究センター 運営委員

筑波大学北アフリカ研究センター 客員共同研究員

所属学会(役職)

日本オリエント学会

歴史学研究会

史学会

Middle East Studies Association

日本中東学会(会長)

児倉 徳和(こぐら のりかず)

助教, 言語学研究ユニット

研究主題: 記述言語学, シベ語(満洲語口語)

業績

1. 著書:『シベ語のモダリティの研究』, 勉誠出版, 2018.
2. 論文:「シベ語における「非現実」と知識管理」, 『東京大学言語学論集』, 39, 161–182, 2018.
3. 論文:「シベ語におけるテンスとモダリティ —特に「過去」のテンス性について—」, 『ユーラシア諸言語の多様性と動態—20号記念号— 追悼 庄垣内正弘先生』, 281–306, 2018.
4. 論文:“The Function of Particles =ni’ and da in Sibe: Focus and Nominal Reference”, *Proceedings of the 13th Seoul International Altaic Conference*, 151–168, 2017.
5. 口頭発表:「主題か? 焦点か?—シベ後の小辞 =ni’ と da の機能と情報構造」, 2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2018.3.29, 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館).
6. 口頭発表:「论锡伯语助动词 bi- 的视点转换功能」, 满族・锡伯族语言历史文化国际研讨会, 2018, 东北师范大学.
7. 口頭発表:「シベ語会話ブラッシュアップ」, 言語研修シベ語フォローアップミーティング/第7回シベ語研究会, 2018, 東京外国語大学本郷サテライト.
8. 口頭発表:「満語—錫伯語動詞形態結構的歴史發展」, 満語・錫伯語的語言與歴史:回顧與展望, 2018, 中央研究院歴史語言研究所

9. 口頭発表:「IRC プロジェクト事例紹介「チュルク諸語対照基礎語彙」, 情報資源利用研究センター (IRC) 設立 20 周年記念シンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て、活かす」, 2017, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
10. 口頭発表:「ケーススタディ①」, フィールド言語学ワークショップ:テクニカルワークショップ「フィールドノート(1):調査目的に応じたノートの工夫」, 2017, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
11. 口頭発表:「シベ語・満洲語の名詞化要素 ngge の機能変化」, AA 研共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」2017 年度第 2 回研究会, 2017, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
12. 口頭発表:「中国新疆ウイグル自治区におけるシベ語の保護・継承実態」, 第六回日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承—少数民族言語(ダグル語)を中心に」, 2017, 東京外国語大学本郷サテライト.
13. 口頭発表:“The Function of Particle da in Sibe; Focus and Nominal Reference”, The 13th Seoul International Altaistic Conference (SIAC), 2017, National University of Mongolia.
14. 口頭発表:「ASIAN LIBRARY CAFÉ: アジアの言語を語ろう」, ASIAN LIBRARY CAFÉ: 003 アジアの言語を語ろう, 2018, 伊藤国際学術研究センター 特別会議室.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 包 聯群 大分大学経済学部 准教授

課題番号: 17H04524

研究課題名: 消滅危機に瀕する満洲語の記録保護・教育と継承・再活性化への取り組み及び実態の解明

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 原聖, 児倉徳和

期間(年度): 2017(H29)~2021(H33)

科研費:

研究代表者: 久保 智之 九州大学人文科学研究院 教授

課題番号: 17H06182

研究課題名: 満洲語の歴史社会言語学的研究—言語学と歴史学からの解明—

研究種目: 挑戦的研究(開拓)

研究分担者: 承志, 児倉徳和

期間(年度): 2017(H29)~2021(H33)

科研費:

研究代表者 渡辺 己

課題番号: 16H05672

課題名: 語の統合度と文の相関関係に関する研究—形態法の異なる言語の比較対照をとおして

研究種目： 基盤研究(B)
研究分担者： 児倉徳和, 山越康裕, 沈力, 清澤香
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 風間 伸次郎 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
課題番号： 15H05153
研究課題名： アルタイ諸言語の語彙の総合的集成
研究種目： 基盤研究(B)
研究分担者： 児倉徳和, 山越康裕
期間(年度)： 2015(H27)～2019(H31)

所属学会(役職)

満族史研究会
日本言語学会
日本中国語学会

近藤 信彰(こんどう のぶあき)

教授, フィールドサイエンス研究企画センター
研究主題:イラン近代史

業績

1. 著書: *Islamic Law and Society in Iran: A Social History of Qajar Tehran*, Abingdon: Routledge, 2017.
2. 論文: “State and Shrine in Iran: Waqf Administration of the Shah ‘Abd al-‘Azim Shrine under the Qajars.” In Toru Miura ed. *Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norm and Practices in Religious and Familial Donations*, 3–25. Tokyo: Toyo Bunko, 2018.
3. 講演: “Islamic Law and Society in Iran: A Social History of Qajar Tehran.” Book Lunch, Royal Asiatic Society. London. 8th May, 2017.
4. 口頭発表: 「サファヴィー朝期イラン法廷制度再考」日本中東学会第 33 回年次大会 於:九州大学箱崎キャンパス 2017.5.14.
5. 講演: *Iranshenasi dar zhapon: Tahqiqat-e tarikh va jame`e-shenasi. Bozorgdasht-e shastmin salgard-e emza-ye movafeqatname-e farhangi beyn-e iran va zhapon: seminar-e takhassosi-e iranshenasi. Talar-e ferdowsi, Sefarat-e iran dar zhapon*, Tokyo. 2017.7.14.
6. 講演: “Islamic Law and Qajar Society.” Iranian Studies Initiative at NYU. Hagop Kebrokian Center for Near East Studies, New York University. 2017.12.7.
7. 口頭発表: “Persian Document Workshop.” Iranian Studies Initiative at NYU. Hagop Kebrokian Center

for Near East Studies, New York University. 2017.12.8.

8. 口頭発表:“The Early Qajar Form of Political Authority.” 8th Biennial Convention, The Association for the Study of Persianate Societies. Ilya State University, Tbilisi. 2018.3.16.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 近藤 信彰

課題番号: 15H01895

課題名: イスラーム国家の王権と正統性ー近世帝国を視座として

研究種目: 基盤研究(A)

研究分担者: 高松洋一, 秋葉淳, 小笠原弘幸, 二宮文子, 清水和裕, 真下裕之, 後藤裕加子

期間(年度): 2015(H27)~2019(H31)

科研費:

研究代表者: 三浦 徹

課題番号: 17H02381

課題名: 寄進とワクフの国際共同比較研究:アジアから

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 林佳世子, 磯貝健一, 大河原知樹, 大月康弘, 岸本美緒, 高橋一樹, 近藤信彰, 五十嵐大介

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

科研費:

研究代表者: 高松 洋一

課題番号: 17H02398

課題名: イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的的研究

研究分担者: 近藤信彰

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

科研費:

研究代表者: 大沼 保昭

課題番号: 17H06187

課題名: 世界遺産の法・政治・歴史・建築学の視点からの解明:新たな学際研究への挑戦

研究種目: 挑戦的研究(開拓)

研究分担者: 赤松加寿江, 伊藤毅, 稲葉信子, 金恵京, 西海真樹, 小野寺純子, 川村陶子, 近藤信彰

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

所属学会(役職)

日本中東学会(理事, 編集委員長)
西南アジア研究会
International Society for Iranian Studies
International Qajar Studies Association
Association for the Study of Persianate Societies
日本オリエント学会
メロポリタン史学会
史学会

佐久間 寛(さくま ゆたか)

助教, 文化人類学研究ユニット
研究主題: 人類学, アフリカ地域研究

業績

1. 編書(その他): *Rapport sur Symposium international Art et affect en Afrique* (ed. by Yutaka Sakuma), Tokyo: L'Institut de recherches sur les langues et les cultures d'Asie et d'Afrique, L'Université des langues étrangères de Tokyo, 2018.
2. 論文: “Who Owns This Land?: A Polyphonic Approach to the Agrarian Regime in Songhai Society (Western Niger)”, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 17(2), 5–23, 2017.4. (査読有)
3. 論文: “Surrogate of Fear: An Ethnographic Study of Hippopotamus Hunting in the River Niger”, 『アフリカ研究』91, 17–28, 2017.5. (査読有)
4. 論文: 「自由と負債: カール・ポランニー2.0の経済人類学」『哲学』140, 113–145, 2018.3. (査読有)
5. 総説・解説: 「鼎談 「文化」をどう政治的に考えるか: 国際シンポジウム『プレゼンス・アフリケーヌ』研究』(@東京外国語大学)を振り返る」『図書新聞』3326, 2017.11.
6. 総説・解説: 「亀裂の上に世界を作る 国際シンポジウム『プレゼンス・アフリケーヌ』研究」『ふらんす』92(12), 2017.11, 白水社.
7. 口頭発表: 「オーラルからモーラルへ: ニジェール西部の人と土地をめぐる社会関係」, 白山人類学研究会 2017 年度第 1 回定例研究会, 2017.4.17, 東洋大学.
8. 口頭発表: 「【フォーラム】アフリカ独立期における文化の政治: 『プレゼンス・アフリケーヌ』研究—趣旨説明—」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20–21, 信州大学教育学部.
9. 口頭発表: “Introduction: Art, affect et action”, Projet noyau par ILCAA “The Potential Value of Indigenous Knowledge in Managing Hazards in Asia and Africa: The Anthropological Explorations into the Linkage of Micro-Macro Perspectives 2”: Colloque internationale Art et affect en Afrique, 2017.8.19, Salle 301, L'Institut de recherches sur les langues et les cultures d'Asie et d'Afrique(ILCAA), Université des Langues Etrangères de Tokyo.
10. 口頭発表: 「戦場としての大河、劇場としての大河: J.ルーシュ「大河での戦い」をめぐる一注釈」, 日

本文化人類学会関東地区研究懇談会, 2017.9.23, 東京大学駒場キャンパス.

11. 口頭発表: “Bataille dans le fleuve, bataille en dehors du fleuve: Une étude ethnographique de la chasse à l’hippopotame sur le Niger”, l’Association d’ethnologie de Strasbourg: Conférence d’ethnologie, 2018.2.14, Université de Strasbourg.
12. 口頭発表: 「趣旨説明 文化誌研究から文化<資本>研究へ: P. カザノヴァ『世界文学空間』を手掛かりに」, AA 研共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究: あらたな政治=文化学のために」2017年度第3回研究会, 2018.3.12-13, 神戸大学.
13. 学外の社会活動(出前授業): 「国際文化論」(於: 東京工業大学), 2017.4.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 佐久間 寛

課題番号: 17K18480

課題名: 人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレザンス・アフリケーヌ』の複合的研究

研究種目: 挑戦的研究(萌芽)

研究分担者: 中村隆之

期間(年度): 2017(H29)~2019(H31)

科研費:

研究代表者: 佐久間 寛

課題番号: 15H05385

課題名: サハラ南縁地域をめぐるモラル・エコノミー論的土地制度研究を通じた所有概念の再構築

研究種目: 若手研究(A)

期間(年度): 2015(H27)~2017(H29)

科研費:

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H00948

課題名: 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開: 危機を中心に

研究種目: 基盤研究(A)

研究分担者: 吉田ゆか子, 深澤秀夫, 箭内匡, 高木光太郎, 河合香吏, 佐久間寛

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

科研費:

研究代表者: 星埜 守之

課題番号: 17H02328

課題名: 世界文化<資本>空間の史的編成をめぐる総合的研究: アフリカ・カリブの文学を中心に

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 真島一郎, 中村隆之, 吉田裕, 小川了, 久野量一, 森本庸介, 佐久間寛, 佐々木祐

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

所属学会(役職)

日本アフリカ学会

日本文化人類学会(関東地区研究懇談会運営委員、次世代育成セミナー実施運営委員)

生態人類学会

日本文化人類学会

日本フランス語フランス文学会

澤田 英夫(さわだ ひでお)

教授, 情報資源利用研究センター

研究主題:ビルマ系少数言語の記述, 東南アジア大陸部インド系文字の体系

業績

1. 論文:“The Phonology of Lhangsu, an Undescribed Northern-Burmish Language”, *Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL)* 『ユーラシア諸言語の多様性と動態』(20号記念号:追悼 庄垣内正弘先生)(大崎紀子・岸田泰浩・久保智之・菅原睦・林徹・藤代節編), 381-404, 2018.3, ユーラシア言語コンソーシアム.
2. 口頭発表:「ビルマ語群北部下位語群の未記述言語」, チベット=ビルマ言語学研究会第41回会合, 2017.4.22, 京都大学文学部.
3. 口頭発表:“Overview of Multi-verb Constructions of Standard Lhaovo”, School of languages and linguistics, Faculty of arts, the University of Melbourne: Linguistic Seminar, the University of Melbourne, 2017.8.9, The University of Melbourne.
4. 口頭発表:“Examining grammaticalization in Lhaovo”, School of Humanities, Nanyang Technological University: Workshop on Grammaticalization & Language Contact in Asia and Beyond, 2017.10.4-5, Nanyang Technological University, Singapore.
5. 口頭発表:“Northern Burmish languages and Burmese”, SOAS South Asia Institute: Workshop ‘Language in Early Burma’, 2017.10.10, SOAS, University of London.
6. 口頭発表:“Digitization of Inscription Texts”, 京都大学工学研究科先端イメージング工学研究室: Japan-Myanmar Collaboration on Preservation and Conservation of Cultural Heritages in Myanmar Symposium, 2017.11.20, Archeological Museum, Bagan, Myanmar.
7. 口頭発表:“Two Undescribed Dialects of Northern Burmish Sub-branch: Gyanno? and Tho?lhang”, Institute of Ethnology and Anthropology, Chinese Academy of Social Sciences: The 50th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2017.11.25-28, Fragrant Hill Hotel, Beijing.
8. 口頭発表:「ビルマ系言語の文字」, AA 研公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の文字学」, 2018.2.17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
9. 口頭発表:「ロンウォー語の親族名称」, ユーラシア言語コンソーシアム「ユーラシア言語コンソーシア

ム 2017 年度総会」, 2018.3.29, 京都大学ユーラシア文化研究センター.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 倉部慶太 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 ジュニア・フェロー

課題番号: 17H04523

研究課題名: ビルマの危機言語に関する緊急調査研究

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 新谷忠彦, 澤田英夫, 加藤昌彦, 大塚行誠

期間(年度): 2017(H29)~2019(H31)

科研費:

研究代表者: 藤代 節 神戸市看護大学看護学部 教授

課題番号: 16H03417

研究課題名: 「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語—言語接触と言語形成の類型を探る—

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 澤田英夫, 片山修, 岸田文隆, 岸田泰浩, 菅原睦, 早津恵美子

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

外部団体委員

慶應義塾大学言語文化研究所東南アジア諸言語研究会(兼任所員)

所属学会(役職)

日本言語学会(評議員)

椎野 若菜(しいの わかな)

准教授, 文化人類学研究ユニット

研究主題: 社会人類学, 東アフリカ民族誌

業績

1. 著書(編著): Wakana SHIINO, Soichiro SHIRAISHI, and Christine Mbabazi eds., *Diversification and Reorganization of 'Family' in Uganda and Kenya: A Cross-cultural analysis*, 2018.3.31, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
2. 著書(編著): 白石壮一郎・椎野若菜編『社会問題と出会う (FENICS 100 万人のフィールドワーカーシリーズ 7) 』, 2017, 6.30, (古今書院).
3. 著書(編著): 椎野若菜・福井幸太郎編『マスメディアとフィールドワーカー (FENICS 100 万人のフィー

- ルドワーカーシリーズ 6) 』,2017.8.15,(古今書院).
4. 論文: Wakana Shiino and Soichiro Shiraishi “Introduction”, Wakana SHIINO, Soichiro SHIRAISHI, and Christine Mbabazi eds. *Diversification and Reorganization of 'Family' in Uganda and Kenya: A Cross-cultural analysis*, xi-xiii, 2018.3.31, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
 5. 論文: The Daily Life of a ‘House Girl’ in a Nairobi ‘Family’”, Wakana SHIINO, Soichiro SHIRAISHI, and Christine Mbabazi eds., *Diversification and Reorganization of 'Family' in Uganda and Kenya: A Cross-cultural analysis*, 51-58, 2018.3.31, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
 6. 論文: 椎野若菜「ケニアにおける「妻相続」慣習の言説とフィールドで見る現実のはざままで」白石壮一郎・椎野若菜編『社会問題と出会う (FENICS 100 万人のフィールドワーカーシリーズ 7) 』78-97, 2017.6.30,(古今書院).
 7. 論文: 椎野若菜「イントロダクション」、「編集後記」椎野若菜・福井幸太郎編『マスメディアとフィールドワーカー (FENICS 100 万人のフィールドワーカーシリーズ 6) 』4-9,179-181,2017.8.15,(古今書院)
 8. 総説・解説: 椎野若菜「フィールドで出会う社会①: フィールドワーカーって」『しんぶん赤旗』2018.3.2.
 9. 総説・解説: 椎野若菜「フィールドで出会う社会②: 失敗から教わる発見が」『しんぶん赤旗』2018.3.9.
 10. 総説・解説: 椎野若菜「フィールドで出会う社会③: 正しい答えはある?」『しんぶん赤旗』2018.3.16.
 11. 総説・解説: 椎野若菜「フィールドで出会う社会④: 子持ちフィールドワーカー」『しんぶん赤旗』2018.3.23.
 12. 総説・解説: 椎野若菜「フィールドで出会う社会⑤: 異分野がつながる場を」『しんぶん赤旗』2018.3.30.
 13. 学外の社会活動(講演会): 「ベビーを連れてアフリカへ」, FENICS サロン@信州大学「フィールドワーカーとライブイベント: アフリカ編」, 2017.5.20, 信州大学(教育キャンパス)中校舎 M301 講義室.
 14. 学外の社会活動(講演会): (石井美保(京都大学)と共に)「子どもの成長とともに flexible にフィールドを変える?!」, フィールドワーカー (FENICS) サロン, 2017.5.27, 神戸大学鶴甲第 1 キャンパス E 棟 4F 国際文化科学研究科学術国際交流ルーム.
 15. 講演: 「世界の子育てから文化を考える—アフリカとアジアに焦点をあてて—第3弾 子連れフィールドワーカーが見た世界の子育て」【第 13 回 まちのカルチャーカフェ】 ,2017.6.18, NPO 法人東京学芸大こども未来研究所、シャトー小金井 Codolabo Studio.
 16. 口頭発表: 「子連れ国際学会、フィールドワーク: 子どもの成長にあわせて調査スタイルを変える」ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業(牽引型)、若手研究者キャリア形成支援, 「あなたもできる! 子連れフィールドワーク実践ノウハウ」, 2017.7.11., 東京外国語大学 研究講義棟1階 110 教室.
 17. 口頭発表: “House girl and ‘family’ in Nairobi”, JSPS Uganda-Japan Bilateral Joint Research Project, The Study meeting for JSPS Uganda-Japan Bilateral Joint Research Project: Diversification and Reorganization of ‘Family’ in Uganda, 2017.9.5, Venue: College of Humanities and Social Sciences, Makerere University, Kampala.
 18. 口頭発表: 「子連れフィールドワークの調査スタイル: 現地の幼稚園にいれてみる」, 「子育て、ライブイベントとフィールドワーク」北海道大学低温科学研究所、人材育成本部女性研究者支援室共同プログラム 2017.10.26, ,北海道大学低温科学研究所 講堂.
 19. 口頭発表: "'Family' Circumstances Supported by House Girl in Nairobi", International symposium

"Family Transformation in Rapidly Developing Asia-Africa Societies Faced with Economic Disparity, Urbanization and War", 2017.11.5, Venue: Room 304, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies (TUFS)

20. 講演「サルをみる、ヒトをみる〈ヒトとサル、親と子、そしてベッド〉」椎野若菜・座馬耕一郎(長野看護大学), エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ連続上映, 2017.12.3, ポレポレ東中野
21. 口頭発表: 「女性の人生選択の現実直面する: 東アフリカ・ケニア村落にて」, FENICS EVENT 「フィールドで／教室で社会問題と出会う」, 2017.12.09, 東中野 ポレポレ坐
22. 学外の社会活動(講演会): 「子育てフィールドワーカーのロールモデルを探る: 椎野の場合」, FENICS サロン「子育てフィールドワーカーのロールモデルを探る」, 2018.1.20, 京都大学 稲盛財団記念館 3階 318号室

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 椎野 若菜

課題番号: 17K02002

研究課題名: 東アフリカ都市におけるエリート・シングルとハウスガールの「同居家族」の研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2017(H29)～2019(H31)

科研費:

研究代表者: 杉田 映理 東洋大学国際学部 教授

課題番号: 16H06318

研究課題名: グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 新本万里子, 小國和子, 菅野美佐子, 佐藤峰, 椎野若菜

期間(年度): 2017(H29)～2019(H32)

科研費:

研究代表者: 松田 素二 京都大学文学研究科 教授

課題番号: 16H06318

研究課題名: 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服: 人類の未来を展望する総合的地域研究

研究種目: 基盤研究(S)

研究分担者: 椎野若菜, 品川大輔, 武内進一, 阿部利洋, 太田至, 大山修一, 落合雄彦, 平野美佐, 宮地歌織, 遠藤貢, 重田眞義, 高橋基樹, 竹村景, 永原陽子, 峯陽一, 目黒紀夫, 山越言, 山田肖子

期間(年度): 2016(H28)～2020(H32)

科研費:

研究代表者: 野口 靖 東京工芸大学芸術学部 准教授

課題番号: 16K13128
課題名: ケニア都市部における人々の移動史と居住環境に関する民族誌デジタルアーカイブ研究
研究種目: 挑戦的萌芽研究
研究分担者: 椎野若菜
期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

所属学会(役職)

日本文化人類学会(評議員)
日本アフリカ学会(評議員)
比較家族史学会(理事)
生態人類学会(理事)
比較家族史学会(理事)
ナイル・エチオピア学会(評議員)
東京都立大学社会人類学会

塩原 朝子(しおはら あさこ)

准教授, フィールドサイエンス研究企画センター
研究主題: 言語学, インドネシア諸言語の記述研究

業績

1. 論文: Asako Shiohara. A Progress Report on Sumbawa Annotated-spoken Corpus: Tentative Annotation Notes. *Asian and African Languages and Linguistics* 12, 75–97. 2018.3.
2. 口頭発表: Shiohara, Asako and Anthony Jukes. “Development of two definite marking strategies in Manado Malay, The Twenty-First International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL 21), Langkawi Research Center, 2017.5.4–6.
3. Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa and Asako Shiohara. Reclassifying the Leipzig Corpora Collection for Malay/Indonesian. The 21st International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL). マレーシア国民大学ランカウイ研究センター. 口頭発表, 審査あり. 2017.5.4–6.
4. 口頭発表: Arka, I Wayan and Asako Shiohara. “Plurality and comitative–inclusory constructions in the languages of Indonesia, Conference of the Association for Linguistic Typology, Australian National University, 2017.12.12–14.

競争的研究資金

科研費:
研究代表者: 塩原 朝子
課題番号: 15K02472

研究課題名: Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015(H27)~2019(H30)

所属学会(役職)

日本語学会

品川 大輔(しながわ だいすけ)

准教授, 情報資源利用研究センター

研究主題: バントゥ諸語, 記述言語学

業績

1. 口頭発表: 「シェンの二つの流動性」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20-21, 信州大学教育学部.
2. 口頭発表: 「スワヒリ語を基盤とする都市混合言語における新たな文法特徴の創出」, 日本語学会第 154 回学術大会, 2017.6.24-25, 首都大学東京.
3. 口頭発表: 「ロンボ語 (Bantu E623) の声調パターン試論」, AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」2017 年度第 1 回研究会, 2017.7.23, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 口頭発表: “Microparametrizing *ni* in Kilimanjaro Bantu: A Test Case from Uru (and Rombo)”, Leverhulme Project “Morphosyntactic Variation in Bantu: Typology, Contact and Change”: Project Meeting of “Morphosyntactic Variation in Bantu: Typology, Contact and Change”, 2017.10.25, SOAS, University of London.
5. 講演: “On Some Typological Characteristics and Their Group-Internal Variation in Kilimanjaro Bantu Languages”, Department of Linguistics, SOAS: Linguistics Departmental Seminar Series, SOAS, University of London, 2017.10.31, Brunei Gallery B102, SOAS.
6. 口頭発表: “Micro-typological Observation on Negation Marking Systems in Chaga”, Leverhulme project “Morphosyntactic Variation in Bantu: Typology, Contact and Change”: Morphosyntactic Variation in Bantu: Typology, Contact and Change Workshop at SOAS, 2018.3.27-28, SOAS, University of London.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 品川 大輔

課題番号: 16K02630

課題名: 言語ドキュメンテーションに基づくバントゥ諸語のマイクロな類型的多様性の探究

研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 松田 素二 京都大学文学研究科 教授

課題番号： 16H06318

研究課題名： 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究

研究種目： 基盤研究(S)

研究分担者： 椎野若菜, 品川大輔, 武内進一, 阿部利洋, 太田至, 大山修一, 落合雄彦, 平野美佐,
宮地歌織, 遠藤貢, 重田眞義, 高橋基樹, 竹村景, 永原陽子, 峯陽一, 目黒紀夫, 山越
言, 山田肖子

期間(年度)： 2016(H28)～2020(H32)

所属学会(役職)

日本アフリカ学会

日本語学会

芝野 耕司(しばの こうじ)

教授, 言語学研究ユニット

研究主題: マルチメディアデータベース, 多言語情報処理, コンピュータ支援言語学習(CALL)

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 芝野 耕司

課題番号： 26240051

課題名： 大規模会話コーパスに基づくラーニングマイニングの深化とテーラーメイド日本語教育

研究種目： 基盤研究(A)

研究分担者： 藤村知子, 大津友美, 佐野洋, 藤森弘子, 望月源, 鈴木美加

期間(年度)： 2014(H26)～2017(H29)

科研費：

研究代表者： 藤村 知子 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授

課題番号： 16H03432

課題名： 大規模字幕コーパスを利用した Can-do リスト対応型 eラーニング教材の研究

研究種目： 基盤研究(B)

研究分担者： 芝野耕司, 望月源, 佐野 洋, 藤森 弘子

期間(年度)： 2016(H28)～2019(H31)

科研費:

研究代表者: 望月 源 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授

課題番号: 15H02794

課題名: 大規模会話コーパスの FS2vec 処理による CEFR Can-do 言語教材の開発

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 芝野耕司, 佐野洋, 藤村知子

期間(年度): 2015(H27)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 中谷 英明 関西外国語大学外国語学部 教授

課題番号: 16K12544

課題名: インド古典のフレーズインデックス付き統合アーカイブ構築とフレーズ分析

研究種目: 挑戦的萌芽研究

研究分担者: 芝野耕司

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

外部団体委員

日本規格協会 情報分野規格の利用促進標準化調査研究委員会(本委員会・WG2)

所属学会(役職)

情報処理学会

計量国語学会

Linguistic Society of America (LSA)

American Association for Applied Linguistics (AAAL)

Association for Advancement of Computing in Education (AACE)

陶安 あんど(すえやす あんど)

准教授, 地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: 中国法制史と法社会学

業績

1. 論文:「里耶秦簡綴合商榷」『出土文献研究』16, 106-139, 2017.9.(査読有)
2. 総説・解説:「里耶秦簡 J1⑧1519 に関する覚書」『中国古代簡牘の横断領域的研究 HP』, 2018.2.
3. 口頭発表:「山東省博物館「里耶秦簡綴合商榷」, 国際シンポジウム「中国簡牘国際學術研討會」, 2017.9.25-27, 山東省博物館.

4. 口頭発表:「文書簡牘の様式論的特徴からみた所謂「記」の問題」, 出土資料学会 2017 年度第 2 回大会, 2017.12.3, 帝京大学八王子キャンパス.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 陶安 あんど

課題番号: 16H03487

研究課題名: 最新史料に見る秦・漢法制の変革と帝制中国の成立

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016(H28)~2020(H32)

所属学会(役職)

日本法制史学会

日本法社会学会

法史学研究会

東洋法制史研究会

中国史学会

東方学会

高島 淳(たかしま じゅん)

教授, 文化人類学研究ユニット

研究主題: 宗教学・インド宗教史(ヒンドゥー教), 言語情報処理

業績

1. 論文:「インドにおける終焉期の仏教—南インドを中心に—」『宗教研究』91-別冊, 307-308, 2018.3.
2. 口頭発表:「アッパヤ・ディークシタとシヴァ教」, 「南アジアにおける文化的接触のダイナミズム」研究会, 2017.6.28, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 口頭発表:「インドにおける終焉期の仏教—南インドを中心に—」, 日本宗教学会第 76 回学術大会, 2017.9.17-18, 東京大学.
4. 口頭発表:「カンナダ語・英語・日本語 3 言語電子辞書の構築について」, 情報資源利用研究センター (IRC) 「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て、活かす」, 2017.12.9, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 高島 淳

課題番号: 17K02215
課題名: インドにおける仏教の終焉の解明
研究種目: 基盤研究(C)
期間(年度): 2017(H29)～2019(H31)

科研費:

研究代表者: 森 雅秀 金沢大学人間科学系 教授
課題番号: 25257007
課題名: 国際標準となるチベット美術の情報プラットフォームの構築と公開
研究種目: 基盤研究(A)
研究分担者: 高島淳, 乾仁志, 高田良宏, 高本康子
期間(年度): 2013(H25)～2017(H29)

所属学会(役職)

日本宗教学会(評議員)
日本南アジア学会
「宗教と社会」学会

高松 洋一(たかまつ よういち)

准教授, 情報資源利用研究センター
研究主題: オスマン朝史, 古文書学, アーカイブズ学

業績

1. 論文: 「一八世紀オスマン帝国における紅海交易の一断面 —— 問答集『ジッダ港の統治の秩序のために準備された諸留意点』』『商業と異文化の接触: 中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開』(川分圭子・玉木俊明編), 714-749, 2017.7, 吉田書店.
2. 総説・解説: 「<辞典案内>トルコ語」『教養学部報』591, 2017.4, 東京大学教養学部・学部報委員会.
3. 総説・解説: 「フィールドワーカーのおみやげ」『FIELDPLUS』19, 2018.1, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 口頭発表: 「オスマン文書史料研究の現状と課題」, AA 研共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」2017 年度第 1 回研究会, 2017.11.25, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 口頭発表: 「アラビア文字紀年銘クロノグラム」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「情報資源利用研究センター (IRC) 創立 20 周年シンポジウム」, 2017.12.9, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 高松 洋一

課題番号: 17H02398

課題名: イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的研究

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 近藤信彰

期間(年度): 2017(H29)～2020(H32)

科研費:

研究代表者: 近藤 信彰

課題番号: 15H01895

課題名: イスラーム国家の王権と正統性ー近世帝国を視座として

研究種目: 基盤研究(A)

研究分担者: 高松洋一, 秋葉淳, 小笠原弘幸, 二宮文子, 清水和裕, 真下裕之, 後藤裕加子

期間(年度): 2015(H27)～2019(H31)

所属学会(役職)

日本オリエント学会

日本アーカイブズ学会

外川 昌彦(とがわ まさひこ)

准教授, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 南アジアの人類学, インド・バン格拉デシュ研究

業績

1. 著書(分担執筆):『バン格拉デシュを知るための66章・第3版』, 明石書店, 2017.
2. 論文: Living with Gandhi: Fujii Gurji and India-Japan Relations in the 1930s, *Proceedings: Buddhism in shaping India-Japan Relations*, India-Japan Bilateral Research Project (JSPS-ICHR, India), 23rd, December 2017, 52-68. (査読無)
3. 総説・解説: “Buddhist Revival Movements in Bengal by Dharmapala, Kripasharan Mahāsthavir, and the Japanese”, *Booklet of 8th Karmayogi Kripasaran Memorial Lecture Celebrating 125 year of a Golden Heritage*, 2017.8, Bengal Buddhist Association.
4. 総説・解説: “Revisiting Ethnographic Study on the Rural Society in Bengal”, *Panel Proceedings: Remembering Village after 50 Years: Reconsidering an Ethnography by the Late Professor Tadahiko Hara*, 2018.1, 5th International Congress of Bengal Studies.
5. 総説・解説: Swapna Bastobayita Hoye: Ekjan Babgali Muslim Sadhikar Bayan (ベンガル語),

Bhabnagar: International Journal of Bengal Studies, Vol.6; Number.7, Bhabnagar Foundation, Dhaka,
2017.6, 709-724.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 外川 昌彦

課題番号: 16K02602

課題名: 岡倉天心とタゴールの反響するアジアへのまなざしー植民地主義をめぐる日印の比較研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 山中 弘 筑波大学人文社会系 教授

課題名: ツーリズムにおける「スピリチュアル・マーケット」の展開の比較研究

課題番号: 16H03329

研究分担者: 外川昌彦, 岡本亮輔, 別所裕介, 安田慎, 鈴木涼太郎, 門田岳久

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 櫻井 義秀 北海道大学文学研究科 教授

課題名: アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究

課題番号: 16H05712

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 外川昌彦, 川田進, 矢野秀武, 藤野陽平, 高橋沙奈美, 滝澤克彦, 塚田穂高

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 中谷 哲弥 奈良県立大学 教授

課題番号: 15K01958

課題名: 南アジア地域の持続可能な観光とコミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する比較研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015(H27)~2017(H29)

外部団体委員

国際ベンガル学会(日本支部事務局長)

日本バンングラデシュ協会(理事)

所属学会(役職)

日本宗教学会(国際委員会委員, 評議員)

日本南アジア学会(理事)

日本文化人類学会

「宗教と社会」学会

床呂 郁哉(ところ いくや)

教授, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 東南アジア島嶼部の人類学

業績

1. 著書(共編著): *An Anthropology of Things* (ed. by Ikuya Tokoro and Kaori Kawai), Kyoto and Balwyn North Victoria: Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
2. 著書(共編著): *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia.* (ed. by Ikuya Tokoro and Hisao Tomizawa), Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
3. 著書(編著): 『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築(第2回)シンポジウム報告書』(床呂郁哉編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. (査読無)
4. 論文: “Mono Beyond Control: A New Perspective on Cultured Pearls”, *An Anthropology of Things*, 81–95, 2018.3, Kyoto and Balwyn North Victoria: Kyoto University Press & Trans Pacific Press. (査読有)
5. 論文: “Why the Anthropology of Mono (Things)?”, *An Anthropology of Things* (ed. by Ikuya Tokoro and Kaori Kawai), 18–34, 2018.3, Kyoto and Balwyn North Victoria: Kyoto University Press & Trans Pacific Press. (査読有)
6. 論文: “The Mindanao Conflict and Peace Process from the Aquino to the Duterte Presidency: A Perspective from the Sulu Moro Community.”, *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia* (ed. by Ikuya Tokoro and Hisao Tomizawa), 245–261, 2018.3, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. (査読有)
7. 論文(共著): Ikuya Tokoro and Hisao Tomizawa: “Introduction”, *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia* (ed. by Ikuya Tokoro and Hisao Tomizawa), 2018.3, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. (査読有)
8. 論文: 「ものの人類学」奥野克巳・石倉敏明(共編著)『Lexicon 現代人類学』116-119, 以文社. (査読無)
9. 論文: 「生命」奥野克巳・石倉敏明(共編著)『Lexicon 現代人類学』92-94, 以文社. (査読無)

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 床呂 郁哉

課題番号: 17H06341

研究課題名: 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究

研究種目: 新学術領域研究(研究領域提案型)

研究分担者: 吉田ゆか子, 塩谷もも, 田中みわ子, 西井涼子

期間(年度): 2017(H29)~2021(H33)

科研費:

研究代表者: 床呂 郁哉

課題番号: 25370936

研究課題名: スーラー海域世界を中心とする真珠のグローバリゼーションに関する文化人類学的研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2013(H25)~2017(H29)

科研費:

研究代表者: 石井 香世子 立教大学社会学部 准教授

課題番号: 16H02737

課題名: アジアの越境する子どもたちとトランスナショナル階層社会の出現に関する実証研究

研究種目: 基盤研究(A)

研究分担者: 床呂郁哉, 荻巣崇世, 酒井千絵, 陳天璽, 岩井美佐紀, 横田祥子, 工藤正子

期間(年度): 2016(H28)~2019(H31)

所属学会(役職)

日本文化人類学会

中山 俊秀(なかやま としひで)

教授, 情報資源利用研究センター

研究主題: ワカシュ語(北米北西海岸), 用法基盤言語学, 言語類型論, 言語人類学

業績

1. 論文: 「言語知識はどのような形をしているのか」『日本認知言語学会論文集』18: 5-34, 2017. (査読有)
2. 論文: “Polysynthesis in Nuuchahnulth, A Wakashan Language”, *The Oxford Handbook of Polysynthesis* (ed. by Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans), 603-622, 2017, Oxford: Oxford University Press.

3. 論文(共著:大野剛・中山俊秀):「文法システム再考:話しことばに基づく文法研究に向けて」『話しことばへのアプローチ:創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』(鈴木亮子・秦かおり・横森大輔編), 5-34, 2017.12, ひつじ書房.
4. 総説・解説:「もっと知りたい!世界のことば:ヌートカ語」『英語教育』66(10): 43, 2017.12, 大修館書店.
5. 総説・解説:「事例基盤モデル (Exemplar-based Model)」『話しことばへのアプローチ:創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』(鈴木亮子・秦かおり・横森大輔編), 35-38, 2017.12.
6. 口頭発表:“Fluctuating robustness of nominal phrases in Nuuchahnulth”, International Pragmatics Association: 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.20, Belfast, Northern Ireland.
7. 口頭発表:“Multiplicity in grammar: Modes, genres and speaker's knowledge”, International Pragmatics Association: 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.21, Belfast, Northern Ireland.
8. 口頭発表:“Systematicity in variation within a grammar: A look into 'broken' structure and 'deviant' semantics in Japanese conversation”, International Pragmatics Association: 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.21, Belfast, Northern Ireland.
9. 口頭発表:「言語知識はどのような形をしているのか」, 日本認知言語学会第18回全国大会, 2017.9.16-17, 大阪大学.
10. 口頭発表:「会話から見る文法体系の多重性:日本語の日常会話を例にして」, 第6回動的語用論研究会, 2017.10.1, 京都工芸繊維大学.
11. 口頭発表:「会話に見られる言語表現の文法的特異性」, 日本英語学会第35回大会, 2017.11.18-19, 東北大学.
12. 学外の社会活動(講演会):「コミュニケーションと仕事の仕方としての英語」(於:布池外語専門学校), 2017.4.
13. 学外の社会活動(出前授業):「「研究者」というキャリアとこれからのキャリア作り」(於:キャリアガイダンス), 2017.6.
14. 学外の社会活動(講演会):「世界のことばの多様性と北米先住民のことば」(於:東京都府中市教養セミナー・東京外国語大学連携講座), 2018.2.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 中山 俊秀

課題番号: 15K02473

研究課題名: ヌートカ語における統語構造の特性—節と節結合の連関の中で

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2015(H27)~2017(H29)

科研費:

研究代表者: 鈴木 亮子 慶應義塾大学経済学部 教授

課題番号: 17KT0061

研究課題名: 日常の相互行為における定型性:話し言葉を基盤とした言語構造モデルの構築

研究種目： 基盤研究(B)
研究分担者： 遠藤智子, 中山俊秀, 横森大輔, 土屋智行, 柴崎礼士郎
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

科研費：

研究代表者： 吉田 憲司 国立民族学博物館文化資源研究センター 教授
課題番号： 16H06281
研究課題名： 地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化
研究種目： 新学術領域研究(研究領域提案型)
研究分担者： 中山俊秀, 園田直子, 丸川雄三, 高野明彦, 西尾哲夫, 野林篤志, 飯田卓, 卯田宗平,
寺村裕史, 平?隆郎, 柳澤雅之
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 中山 久美子 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員
課題番号： 15K02509
研究課題名： ヌートカ語アハウザット方言の統合テキストデータベースの構築
研究種目： 基盤研究(C)
研究分担者： 中山俊秀
期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

所属学会(役職)

日本語学会
日本認知言語学会
アメリカ言語学会 (Linguistic Society of America)
アメリカ先住民諸語学会 (Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas)
言語類型論学会 (Association for Linguistic Typology)
国際語用論学会 (International Pragmatics Association)

西井 涼子(にしい りょうこ)

教授, 文化人類学研究ユニット
研究主題: 東南アジア大陸部の人類学

業績

1. 論文: “Was the Old Woman’s Death a Suicide? A Discussion on the Basis of Institutions”, *Institutions: The Evolution of Human Sociality* (ed. by Kawai Kaori), 2017.4, Kyoto and Balwyn North Victoria: Kyoto University Press & Trans Pacific Press.

2. 口頭発表:『『ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合』をはじめるとあたって』, AA 研共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」研究会, 2017.6.11, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 口頭発表:“Religious Experience and Religious Connectivity”, International Conference on Thai Studies: 13th International Conference on Thai Studies, 2017.7.15–18, Chiang Mai University, Chiang Mai Thailand.
4. 口頭発表:“Converts and death: Muslim-Buddhist relationships in a Southern Thai village”, AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラムと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」研究会, 2017.9.24, コタキナバル・マレーシア.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H00948

課題名: 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に

研究種目: 基盤研究(A)

研究分担者: 吉田ゆか子, 深澤秀夫, 箭内匡, 高木光太郎, 河合香吏, 佐久間寛

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

科研費:

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H01648

課題名: グローバル化における権力編成の変動と新たなコミュニティ運動—東南アジア大陸部から

研究種目: 基盤研究(A)

研究分担者: 田辺繁治, 久保忠行, 斎藤紋子, 古谷伸子, 中田友子, 高城玲, 土佐桂子, 阿部利洋

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

科研費:

研究代表者: 床呂 郁哉

課題番号: 17H06341

研究課題名: 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究

研究種目: 新学術領域研究(研究領域提案型)

研究分担者: 吉田ゆか子, 塩谷もも, 田中みわ子, 西井涼子

期間(年度): 2017(H29)~2021(H33)

所属学会(役職)

日本文化人類学会(第28期評議員選挙選挙管理委員長 2017年度)

東南アジア学会(「東南アジア学会賞」選考委員会委員)

Association for Asian Studies

錦田 愛子(にしきだ あいこ)

准教授, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 中東地域研究

業績

1. 論文:「なぜ中東から移民／難民が生まれるのか—シリア・イラク・パレスチナ難民をめぐる移動の変容と意識」, 『移民・ディアスポラ研究』, 6, 84–102, 2017.
2. 論文:「エルサレムでの衝突はどこまで広がるのか——パレスチナ・イスラエルで高まる緊張」, 『ニューズウィーク日本版』, 2017.7.23. (<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2017/07/post-8036.php>)
3. 論文:「ヨルダン王政の安定性——国王の権威を支える諸要素」, 『アラブ君主制国家の存立基盤』, 640, 131–147, 2017.
4. 「エルサレムをめぐるトランプ宣言の行方——意図せず招かれた中東の混乱」, 『ニューズウィーク日本版』, 2017.12.10. (<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2017/12/post-9087.php>)
5. 口頭発表:「グローバルな移民／難民とシティズンシップの再考可能性」, 新学術領域研究「グローバル関係学」2017年度第2回全体研究会, 東京外国語大学本郷サテライト, 2017.6.10.
6. 口頭発表:「パレスチナ・シリアをめぐる紛争と共存—— 難民受け入れ地域としての中東」, AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)——紛争と共存のダイナミクス」2017年度第1回研究会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディアセミナー室, 2017.7.15.
7. 口頭発表:“Syrian and Palestinian Diaspora: Their Experience and Consciousness of migration”, The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) Annual Conference 2017 ‘Continuity and Change: Diaspora, Religion, Kinship, Food, Art and Architecture’, Jagiellonian University, Krakow, Poland, 2017.8.11.
8. 口頭発表:“Surviving Strategy of the Palestinians in/out Lebanon”, AA 研共同利用・共同研究課題「中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究(Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies)」II Project meeting, JaCMES, Beirut, Lebanon, 2017.9.7.
9. 口頭発表:「ドイツ・ベルリン市内アラブ系移民／難民 2017年夏調査報告」, 科研費基盤 B「中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民／難民の移動に関する研究」(研究代表者: 錦田愛子)研究会, 東京大学駒場キャンパス 18号館, 2017.
10. 口頭発表:“Syrian refugees in Sweden Their struggle for adaptation”, International Symposium ‘The Global Refugee Crisis: Mobile people under state protection or exploitation’, 2018.1.5.
11. 口頭発表:「ヨーロッパをめざす中東難民—— レバノン・シリアのパレスチナ難民の足取りを追って」, 地域研究コンソーシアム研究交流会報告, 京都大学稲森財団記念館, 2018.
12. 口頭発表:“Conflict over the water resources in Palestine-Israel”, Policy Alternatives Research Institute 10th Year Anniversary Conference ‘Climate change impacts and pressure on human societies’, The

University of Tokyo, 2018.2.14.

13. 口頭発表: “Preference and Choice of Palestinians in Lebanon: As a part of Surviving Strategy”, AA 研 共同利用・共同研究課題「中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究 (Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies)」II Project meeting, St. Joseph University, Beirut, Lebanon, 2018.3.16.
14. 講演: 「エルサレム大使館移転問題とパレスチナ・イスラエル情勢」, 中東情勢研究会, 国際情勢研究所, 2017.
15. 講演: 「パレスチナの今を考える」, パレスチナカフェ 2017 in 小金井「パレスチナの今を映画とトークで」, 小金井市立貫井北センター, 2017.
16. 講演: 「中東からヨーロッパへ——移民／難民の現状」, 府中市「国際理解を深めるリレー講義～中東の現在～」, 府中市生涯学習センター講堂, 2018.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 錦田 愛子

課題番号: 17H04504

課題名: 中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民／難民の移動に関する研究

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 森井裕一, 高岡豊, 今井宏平

期間(年度): 2017(H29)～2019(H31)

研究代表者: 青山 弘之 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号: 15H03132

研究課題名: 「アラブの春」後の中東における非国家主体と政治構造

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 錦田愛子, 末近浩太, 山尾大

期間(年度): 2015(H27)～2017(H29)

外部団体委員

国立民族学博物館 共同研究員

野田 仁(のだ じん)

准教授, 地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: 中央アジア史, 露清関係史

業績

1. 論文：“Crossing the Border, Transformation of Belonging, and "International" Conflict Resolution between the Russian and Qing Empires”, *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations* (ed. by Takahiro Onuma, David Brophy, and Yasushi Shinmen), 59–77, 2018.3, Tokyo: The Toyo Bunko.
2. 総説・解説：「中央ユーラシア史研究の展開」『第4次 現代歴史学の成果と課題 第2巻 世界史像の再構成』, 2017.5, 續文堂出版.
3. 口頭発表：「越境牧民的帰属：在清朝与俄羅斯的外交談判上」,「清朝政治發展變遷研究」国際学術研討会, 2017.6.17, 中国復旦大学歴史地理研究中心.
4. 口頭発表：「カザフスタン史への東西からのアプローチ」,「2017 年度中東☆イスラーム教育セミナー (第13回)」, 2017.9.15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 口頭発表：“Kazakh migrants and the Soviet-Chinese relations during 1940s: as a background of the Xinjiang refugees towards Middle East”, 中東イスラーム研究拠点国際ワークショップ「中央アジアから中東への移民：1940–50年代の新疆難民の事例から」, 2018.3.3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 野田 仁

課題番号： 15K02914

課題名： 露清帝国の西方境界における紛争と秩序形成

研究種目： 基盤研究 (C)

期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 中見 立夫

課題番号： 16H03462

研究課題名： “帝国”周縁部における国勢調査・人口調査の比較研究

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 野田仁, 青木雅浩

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

所属学会(役職)

内陸アジア史学会

満族史研究会

日本中央アジア学会

Central Eurasian Studies Society

史学会

東洋史研究会

深澤 秀夫(ふかざわ ひでお)

教授, 文化人類学研究ユニット

研究主題: マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究

業績

1. 総説・解説: 「日本で作ろう! マダガスカル料理 32」『マダガスカル研究懇談会ニュースレター』 37, 2017.7, マダガスカル研究懇談会.
2. 総説・解説: 「マダガスカルのことわざいろいろ 18」『マダガスカル研究懇談会ニュースレター』 37, 2017.7, マダガスカル研究懇談会.
3. 総説・解説: 「日本で作ろう! マダガスカル料理 33」『マダガスカル研究懇談会ニュースレター』 38, 2018.2, マダガスカル研究懇談会.
4. 総説・解説: 「マダガスカルのことわざいろいろ 19」『マダガスカル研究懇談会ニュースレター』 38, 2018.2, マダガスカル研究懇談会.
5. 学外の社会活動(講演会): 「マダガスカル人はどのようにしてマダガスカル人となるのか? ー通過儀礼から見たマダガスカル人の一生ー」(於: 文化講演会), 2017.9.
6. 学外の社会活動(講演会): 「マダガスカルから見えてくるもの マダガスカルで考えたこと」(於: めぐろシティカレッジ), 2017.11.
7. 学外の社会活動(講演会): 「美味いぜ! マダガスカル料理 食事と料理を通して見るマダガスカルの人びとの生活と文化」(於: 文化講演会), 2018.2.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 西井 涼子

課題番号: 17H00948

課題名: 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開: 危機を中心に

研究種目: 基盤研究(A)

研究分担者: 吉田ゆか子, 深澤秀夫, 箭内匡, 高木光太郎, 河合香吏, 佐久間寛

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

所属学会(役職)

日本文化人類学会

星 泉(ほし いずみ)

教授, 情報資源利用研究センター

研究主題: チベット文化圏の言語学

業績

1. 著書(共編著:チベット文学研究会):『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA vol. 5』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018.3.
2. 論文:「チベット語の未完了継続相の助動詞句の歴史的推移 —古チベット語から現代チベット語まで—」『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』(岩尾一史・池田巧編), 357–380, 2018.3. (査読有)
3. 総説・解説:「翻訳者座談会」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 5, 9–17, 2018.3.
4. 総説・解説:「【翻訳】チベット文学ナイト「黒狐の夜」ツェラン・トンドゥブあいさつ」『チベット文学と映画制作の現在』 5, 19, 2018.3.
5. 総説・解説:「【文芸翻訳】お待ちしております」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 5, 43–48, 2018.3.
6. 総説・解説:「【文芸翻訳】西の空のひとつ星」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 5, 64–76, 2018.3.
7. 総説・解説:「【牧畜民の社会進出】木製電動攪乳機の開発—元牧畜民のローカル・イノベーション—」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 5, 139–146, 2018.3.
8. 総説・解説:「【研究を現地に還元する】チベット牧畜語彙の収集と辞典編纂」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 5, 2018.3.
9. 口頭発表:「チベット牧畜語彙の収集と辞典編纂の四年間」, 京都大学人文科学研究所共同研究班 A「チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究」「チベット牧畜語彙の収集と辞典編纂の四年間」, 2018.3.17, 京都大学人文科学研究所.
10. 口頭発表:「チベット語の未完了継続相の助動詞句の歴史的推移 —古チベット語から現代チベット語まで—」, 京都大学人文科学研究所共同研究班 A「チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究」, 2018.3.17, 京都大学人文科学研究所.
11. 口頭発表:「辞典紹介(iOS版・オンライン版・PDF版)とiOS版デモ」, 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版) リリース記念イベント, 2018.3.27, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
12. 口頭発表:“A Study on the Historical Transition of the Existential Auxiliary Verb Phrases in Written Tibetan”, 神戸市外国語大学: International Seminar on Tibetan Languages and Historical Documents, 2017.9.8, 大学共同利用施設 UNITY (神戸).
13. 講演:「ツェラン・トンドゥブ邦訳作品集『闘うチベット文学 黒狐の谷』をめぐる」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」ほか「チベット文学ナイト 黒狐の夜」, 2017.6.2, 神保町サロンド富山房 Folio.
14. 講演:「チベット文学に草原の香りを感じて」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」ほか「ヤクとミルクをめぐる冒険」, 2017.5.14, 吉祥寺キチム.
15. 講演:「東北チベットの暮らしとソントルジャの世界」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」ほか「『草原の河』公開記念 TUFU Cinema チベット映画特集 ～ソントルジャとの出会い～」, 2017.4.22, 東京外国語大学.
16. 講演:「チベット映画人のリーダー:ペマ・ツェテンとソントルジャ」, 東京外国語大学アジア・アフリカ

言語文化研究所 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」ほか『『草原の河』公開記念 TUFs Cinema チベット映画特集 ～ソントルジャとの出会い～』, 2017.4.15, 東京外国語大学.

17. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「【わたしの蔵書から】「世界の見立て方」をインストールする読書」(館報『日本近代文学館』282号), 2018.3.
18. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「【ながなんちゃ】ひり出せ糞!」(月刊みんぱく2月号), 2018.2.
19. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「この3冊 チベット」(毎日新聞), 2017.12.10.
20. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「チベット現代文学の誕生と発展」(東京新聞), 2017.5.16.
21. 学外の社会活動(新聞・雑誌):「背景解説/「草原の河」:馬に乗るなら今」(『草原の河』パンフレット), 2017.4.
22. 学外の社会活動(講演会):「チベットのことばと物語世界」(於:鶴見大学会館「チベットの文化に触れてみる」講演会), 2018.1.27.
23. 学外の社会活動(講演会):「チベット文化講座:映画から読み解くチベットの人びとの暮らしと信仰」(於:岐阜市文化センター ギフアジア映画祭), 2017.10.14.
24. 学外の社会活動(講演会・展示):「ヤクとミルクをめぐる冒険:「チベット牧畜民の一日」上映とトーク」(於:小諸エコビレッジ キキソ チベットまつり), 2017.10.13.
25. 学外の社会活動(講演会・展示):「ヤクとミルクをめぐる冒険:「チベット牧畜民の一日」上映とトーク」(於:曙橋タシデレ), 2017.6.17-18.
26. 学外の社会活動(講演会・展示):「ヤクとミルクをめぐる冒険:「チベット牧畜民の一日」上映とトーク」(於:吉祥寺キチム), 2017.5.13-14.
27. 学外の社会活動(インタビュー):「文法は生き物。変化し続ける 言葉のダイナミクスを解明する」(『未踏の領野に挑む、知の開拓者たち』43), 2017.12.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 星 泉

課題番号: 15H03203

課題名: チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 平田昌弘, 海老原志穂, 別所裕介

期間(年度): 2015(H27)~2017(H29)

所属学会(役職)

日本チベット学会(委員, 編集委員長)

その他研究成果

名称: チベット牧畜文化辞典(パイロット版)

期間(年度): 2018-

成果: 学際的な国際共同研究に基づき『チベット牧畜文化辞典』のパイロット版を公開。チベットの東北部、アムド地方ツェコ県メシユル(青海省黄南蔵族自治州沢庫県麦秀)の牧畜民の言語・文化に基づいて編纂された。オンライン版、PDF 版、iOS 版の 3 つの形態で利用できる。 <https://nomadic.aa-ken.jp/>

名称: チベット牧畜民の一日

期間: 2017-

成果: 東北チベット、アムド地方の牧畜民の一日を生業に着目して記録したドキュメンタリー映像。100 分。チベット語。日本語字幕版、英語字幕版を作成。

名称: Old Tibetan Documents Online

期間(年度): 2006-

成果: 古チベット語文献を KWIC 方式で検索することのできるデータベース。文献ごとにも検索でき、また全ての文献を串刺し検索することも可能。語彙の研究、言語学的研究、文献研究、そして辞書には掲載されていない語の意味を決定するのに有用な資源として活用が期待される。 <https://otdo.aa-ken.jp>

名称: 現代チベット語動詞辞典オンライン版

期間(年度): 2003-

成果: AA 研から 2003 年に刊行された『現代チベット語動詞辞典 (ラサ方言)』のオンライン版で、転写で検索することが可能。2017 年度に移転。 <https://star.aa-ken.jp/vdic>

峰岸 真琴(みねぎし まこと)

教授, 言語学研究ユニット

研究主題: タイ語学, 東南アジア諸言語, オーストロアジア語族

業績

1. 著書(分担執筆):『韓国語教育論講座 第3巻』(野間秀樹編)21-39. 704pp. くろしお出版, 2018.
2. 論文(共著:Bussaba Banchongmanee and Makoto Minegishi):“On Developing Thai Spoken Corpus for Analyzing Discourse Cohesion”, Proceeding of the National Conference “Humanities: Realities and Power of Dreams”, 334-354. 770pp. 2017. (査読有)
3. 口頭発表:「タイ語・カンボジア語の数詞句」, 言語の類型特徴をとらえるための対照研究会, 2017.8.12-13, 大阪府立大学.
4. 口頭発表:「タイ語の情報構造に関わる諸表現:「逸脱」による際立たせを巡って」, 東南アジア諸言語研究会, 2017.10.28, 慶應義塾大学言語文化研究所.
5. 学外の社会活動(その他):「NPO 地球ことば村」, 2003.4~現在.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 峰岸 真琴

課題番号: 17H02331

課題名: 形態統語論と音声学からみた東南アジア諸語における情報構造の類型論

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 長屋尚典, 鈴木玲子, 降幡正志, 上田広美, 岡野賢二, ホワンヒョンギン, 高橋康徳

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

科研費:

研究代表者: 益子 幸江

課題番号: 17K02676

課題名: 声調言語と非声調言語のリズムに関する研究

研究種目: 基盤研究(C)

研究分担者: 峰岸真琴, 鈴木玲子, 降幡正志

期間(年度): 2017(H29)~2019(H31)

所属学会(役職)

日本語学会

東南アジア学会

インド言語学会

その他研究成果

名称: 多言語フォントに関する受託研究 (モリサワ文研)

期間(年度): 2017

山越 康裕(やまこし やすひろ)

准教授, 言語学研究ユニット

研究主題: モンゴル諸語

業績

1. 論文: “Mongol Töröl Xelnüüdijn “Insubordination” (Gishüün bus Ögүүлber)”, *Mongol Sudlal ba Togtvortoj Xögzhil* (ed. by S. Chuluun), 289–292, 2017.
2. 論文: “Sentence-final Possessive Markers in Shinekhen Buryat”, *Proceedings of The 13th Seoul International Altaistic Conference: Contemporary outlooks on Altaic languages* (ed. by The Altaic Society of Korea), 33–52, 2017.7.(査読有)

3. 口頭発表:“Sentence-final Possessive Markers in Shinekhen Buryat”, The Altaic Society of Korea: 第13回ソウル国際アルタイ学会, 2017.7.14-15, National University of Mongolia, Ulaanbaatar.
4. 口頭発表:「モンゴル諸語における非定形動詞の用法の発達:日本語との若干の対照」, 国際日本研究センター対照日本語部門「『外国語と日本語との対照言語学的研究』第23回研究会」, 2017.12.9, 東京外国語大学.
5. 口頭発表:「話者コミュニティに何をどう還すか」, AA 研全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」第2回合同研究集会」, 2018.1.18, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 口頭発表:「研究の現地還元:アプリ開発 音声再生スマホアプリ “LingDyTalk”」, AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」/AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」共催『チベット牧畜文化辞典』パイロット版公開記念ワークショップ「『チベット牧畜文化辞典』の未来を語る」, 2018.3.28, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
7. 口頭発表:「モンゴル諸語における分詞の統語機能と文末標識」, 十六科研等合同研究会 2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2018.3.29, 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
8. 学外の社会活動(講演会):「中国東北部でことばを調べる—中国語以外のことば」(於:東京都府中市共用セミナー・東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」), 2018.2.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 山越 康裕

課題番号: 17K02714

研究課題名: シネヘン・ブリヤート語をはじめとしたモンゴル諸語の「文」の完結性に関する研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2017(H29)~2021(H33)

科研費:

研究代表者: 奥田 統己

課題番号: 17H02336

研究課題名: アイヌ語現地調査資料の整理・分析および研究者アーカイブズの構築

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 中川裕, 山越康裕

期間(年度): 2017(H29)~2021(H33)

科研費:

研究代表者: 風間 伸次郎 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号: 15H05153

研究課題名： アルタイ諸言語の語彙の総合的集成

研究種目： 基盤研究(B)

研究分担者： 山越康裕, 児倉徳和

期間(年度)： 2015(H27)～2019(H30)

科研費：

研究代表者： 渡辺 己

課題番号： 16H05672

研究課題名： 語の統合度と文の相関関係に関する研究—形態法の異なる言語の比較対照をとおして—

研究種目： 基盤研究(B)

研究分担者： 山越康裕, 児倉徳和, 沈力, 清澤香

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

所属学会(役職)

日本モンゴル学会

日本語学会(2017～ 大会運営委員)

その他研究成果

名称： 「アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開」

期間(年度)： 2014-

成果： AA 研所蔵故田村すゞ子氏採録音声資料のうち、話者もしくはそのご遺族からの公開許諾が得られたものを順次下記 URL にて日本語訳を付し、公開している。 <https://ainugo.aa-ken.jp/>

名称： iOS/Android 版音声再生アプリ「LingDyTalk」の開発

期間(年度)： 2017

成果： 数字認識機能を活用した音声再生アプリを iOS/Android 双方で開発し、既存音声スマートフォンやタブレットで再生できるようにした。詳細はリンク先のとおり： <https://lingdy.aa-ken.jp/publications/tools-and-archives/3980>

名称： モンゴル諸語対照基本語彙データベースの構築・公開

期間(年度)： 2017-

成果： モンゴル諸語(モンゴル語、ハムニガン・モンゴル語、シネヘン・ブリヤート語、モンゴル語ウールト方言、ダグール語、東郷語、土族語、保安語、東部裕固語)の基礎語彙一覧を下記ウェブページで公開し、検索機能を付してモンゴル諸語比較研究に供する。
<https://mongolicbv.aa-ken.jp/index.htm>

吉田 ゆか子(よしだ ゆかこ)

助教, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 文化人類学, インドネシアの芸能・宗教・仮面文化の研究

業績

1. 著書(分担執筆):『文明史のなかの文化遺産』(飯田卓編),臨川書店, 2017.
2. 著書(分担執筆): *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia.* (ed. by Ikuya Tokoro and Hisao Tomizawa), 2018, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
3. 論文: “Human and Non-human Agents in Topeng Dance Drama in Bali: A Non-anthropocentric Analysis”, *Proceedings of the 4th Symposium: The ICTM Study Group on Performing Arts of Southeast Asia* (ed. by Patricia Matusky, Wayland Quintero, Tan Sooi Beng, Jacqueline Pugh-Kitingan, and Desiree A. Quintero), 156–159, 2017. (査読有)
4. 口頭発表:「分科会 G_2 モノと演じる・モノと奏でる—マテリアリティの人類学と芸能研究の交差点」, 日本文化人類学会: 日本文化人類学会第51回研究大会, 2017.5.28, 神戸大学 鶴甲第一キャンパス.
5. 口頭発表: “Imperfect Bodies and Comedy in Balinese Theater”, ILCAA Core Research Program “The potential Value of Indigenous Knowledge in Managing Hazards in Asia and Africa: Anthropological Explorations Linking Micro-macro Perspectives 2” and Grants-in-Aid for Scientific Research (Principal Investigator: Ryoko Nishii (ILCAA) Research Project Number: 17H00948): Art and Disability: The Cases from Africa and Asia, 2017.6.25, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 口頭発表: “Laughing at Our Imperfect Body: Representations of Physical Impairments in the Balinese Masked Dance-Drama Topeng”, International Council for Traditional Music: The 44rd World Conference, International Council for Traditional Music, 2017.7.13, Irish World Academy of Music and Dance, University of Limerick.
7. 口頭発表: “Faces in Balinese Culture as Reflected in Masked Performance Topeng”, 第17回(2017年)国際理論心理学会, 2017.8.24, 立教大学.
8. 口頭発表: 「仮面と踊る—演者イ・クトゥット・コディ氏を迎えて」, 科研費(新学術領域)「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」「国際ワークショップ「トランスカルチャー状況下における顔・身体学」」, 2018.3.3, Swiss-Belresort Watu Jimbar, Bali, Indonesia.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 吉田 ゆか子

課題番号: 17K03277

課題名: ジャカルタにおけるバリ芸能の民族誌—宗教間・民族間の交渉と相互理解を焦点に

研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

科研費：

研究代表者： 西井 涼子

課題番号： 17H00948

課題名： 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開：危機を中心に

研究種目： 基盤研究(A)

研究分担者： 吉田ゆか子, 深澤秀夫, 箭内匡, 高木光太郎, 河合香吏, 佐久間寛

期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

科研費：

研究代表者： 床呂 郁哉

課題番号： 17H06341

研究課題名： 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究

研究種目： 新学術領域研究(研究領域提案型)

研究分担者： 吉田ゆか子, 塩谷もも, 田中みわ子, 西井涼子

期間(年度)： 2017(H29)～2021(H33)

所属学会(役職)

「宗教と社会」学会

日本文化人類学会

東方学会

国際伝統音楽評議会

障害学会

その他研究成果

名称： ビデオテーク番組『息づく仮面 バリ島の仮面舞踊劇トペンと音楽』

期間： 2017

成果： バリ島の舞踊家 2 名を迎え、日本人の舞踊家・演奏家と合同でおこなった研究公演とワークショップの記録。(番組番号 6057) 副教材として、解説文も公開。

<http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/museum/event/slp/pdf/20151205->

[06_kaisetu.pdf](http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/museum/event/slp/pdf/20151205-06_kaisetu.pdf)

渡邊 己(わたなべ おのれ)

教授, 言語学研究ユニット

研究主題: セイリッシュ語

業績

1. 著書(共著:Honoré Watanabe): *The Oxford Handbook of Polysynthesis* (ed. by Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans), Oxford: Oxford University Press, 2017.
2. 論文:“The Polysynthetic Nature of Salish”, *The Oxford Handbook of Polysynthesis* (ed. by Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans), 623–642, 2017.7, Oxford: Oxford University Press.
3. 口頭発表:「セイリッシュ語の文法書について」, AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第5回研究会, 2018.3.6-7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 渡辺 己

課題番号: 16H05672

研究課題名: 語の統合度と文の相関関係に関する研究—形態法の異なる言語の比較対照をとおして—

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 山越康裕, 児倉徳和, 沈力, 清澤香

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 渡辺 己

課題番号: 16K02660

課題名: スライアモン・セイリッシュ語の焦点構文に関する研究

研究種目: 基盤研究(C)

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

所属学会(役職)

日本語学会(評議員, 夏期講座委員)

The Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas

Linguistic Society of America

特任教員

細田 和江(ほそだ かずえ)

特任助教

研究主題:イスラエル文学・文化, イスラエル/パレスチナ地域研究

業績

1. 論文:"Japanese Reception of Literary Translation from the Middle East: Focus on Arabic and Hebrew Literature", *The 9th CISMOR Annual Conference on Jewish Studies*, 9, 131–151, 2018.3.
2. 論文:「ことば」で「たたかう」, 『FIELDPLUS』 18, 16–17, 2017.7.
3. 論文:「1967年の意味を問う「パレスチナ占領 50年」企画連続シンポジウム」, 『きざし』 2, 11, 2018.3.
4. 書評:細田和江「米ユダヤ人社会がイスラエル国家の際に果たした役割」:池田有日子『ユダヤ人問題からパレスチナ問題へ』, 『図書新聞』 3346(4/7), 5, 2018.4.7.
5. 口頭発表:"Using Spoken Arabic in Hebrew Prose", International Workshop「世界&区域文學的對話工作坊」, 2018.1.7, 台南成功大学.
6. 口頭発表:「食の宗教規定に関する比較研究 — アメリカとイスラエルにおけるコシェル(ユダヤ教の食物規定)「スシ」—」, アサヒグループ学術振興財団「アサヒグループ学術振興財団助成金受給者報告会」, 2017.10.10, アサヒグループ本社ビル.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 細田 和江

課題番号:

研究課題名: イスラエル/パレスチナにおけるアラブ性の探求—包括的な現代文化研究の基盤形成

研究種目: 研究活動スタート支援

期間(年度): 2016(H28)~2017(H29)

科研費:

研究代表者: 福嶋 伸洋

課題番号: 15H03200

研究課題名: ポスト世界文学に向けた比較詩学的共同研究の基盤構築

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 中村隆之, 中丸禎子, 鶴戸聡, 三枝大修, 細田和江, 奥彩子, 古川哲

期間(年度): 2015(H27)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 鶴戸 聡

課題番号: 26300021

研究課題名: アラブ=ベルベル文学の比較地域文化的研究体制の構築

研究種目: 基盤研究(B)

研究分担者: 二村淳子, 石川清子, 酒井佑輔, 青柳悦子, 武内句子, 細田和江, 柳谷あゆみ, 茨木博

史

期間(年度): 2014(H26)~2017(H29)

外国人研究員

ARKA, I Wayan アルカ, イ ワヤン

インドネシア共和国 Republic of Indonesia

滞在期間:2017.3.1~2017.6.30

研究主題:東部インドネシアのオーストロネシア諸語とパプア諸語

研究成果:

1. 論文:“Number and Plural Semantics: Empirical Evidence from Marori”, *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia*, 60, 89–106, 2016.3.(査読有)
2. 論文:“Information Structure in Sembiran Balinese”, *A Cross-linguistic Perspective on Information Structure in Austronesian Languages* (ed. by Sonja Riesberg, Asako Shiohara, and Atsuko Utsumi), 129–162, 2018.7.(査読有)
3. 口頭発表:“Plurality and Comitative–Inclusory Constructions in the Languages of Indonesia”, *The 12th Conference of the Association for Linguistic Typology*, 2017.12.12-14, Australian National University.

EWING Michael Carter ユーイング, マイケル カーター

アメリカ合衆国 United States of America

滞在期間:2017.11.1~2018.6.30

研究主題:Social Action and the Grammar(s) of Contemporary Indonesian

研究成果:

1. 著書:*Style and Intersubjectivity in Youth Interaction*, 2018, Berlin: De Gruyter.
2. 口頭発表:“Interpersonal and Expository Grammatical Organisation in Indonesian Conversation”, *International Workshop on Malay Linguistics*, 2017.12.19, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 講演:“Grammar in Conversation: Introduction to Interactional Linguistics with Special Attention to Examples from Indonesian”, *Workshop on Grammar in Conversation*, 2018.2.13, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 講演:Documenting and Analysing Austronesian and Papuan Languages, *LingDy Forum*, 2018.3.26, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

LOMO MYAZHIOM, Aggee Celestin ロモ ミヤジウム, アジェ ケレスタン

フランス共和国 French Republic

滞在期間:2017.3.1~2017.8.31

研究主題:アフリカの身体、西欧的視点:「ユーラフリカ」とパン・アフリカニズムの間の支配、抵抗、同一性

研究成果:

1. 論文:“Activités Physiques Adaptées et (APA), handicap et santé”, *Licence STAPS Tout en Un - 120 fiches de cours, 60 QCM et sujets de synthèse*, (ed. by Jean Slawinski, Nicolas Termoz, Pascal Charitas, Paul Fontayne et Olivier Le Noé, Paris, Dunod, 16 août 2017.), 444–447, 2017.8.(査読有)
2. 論文:“Incertitude diagnostique et stratégie décisionnelle en clinique”, *Revue du Rhumatisme*, Dec-17, 2017.6, 267–269.(査読有)
3. 口頭発表:“7th Art and Disability in Sub-Saharan Africa. Staging of Altered Bodies and Process of Normalization”, *International Symposium: Arts and Disability*, 2017.6.25, ILCAA.
4. 口頭発表:“Présence Africaine dans le contexte de la décolonisation”, *Séminaire du Projet Présence Africaine*, 2017.3.25, ILCAA.
5. 報道: Invité à l'émission télévisée « Vous et Nous », *Voice of America, Washington*, 2017.8.28.

RAHAYU, Yosephin Apriastuti ラハユ, ヨセフィン アプリアストウティ

インドネシア共和国 Republic of Indonesia

滞在期間:2016.10.1~2017.8.31

研究主題:ウッタラカンダ:ムラピ・ムルバブコレクション所蔵の古ジャワ語韻文

研究成果:

1. 著書:『ジャワ語の基礎』, 2018, 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所, iii+118pp.
2. 論文:“Number and Plural Semantics: Empirical Evidence from Marori”, *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia*, 60, 89–106, 2016.3.(査読有)
3. 論文:“Information Structure in Sembiran Balinese”, *A Cross-linguistic Perspective on Information Structure in Austronesian Languages* (ed. by Sonja Riesberg, Asako Shiohara, and Atsuko Utsumi), 129–162, 2018.7.(査読有)

RIESTER, Arndt リースター, アーント

ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany

滞在期間:2017.2.1~2017.5.31

研究主題:QUD(Question under Discussion)システムを用いた談話構造・情報構造に関するアノテーション
付与

研究成果：

1. 論文: Information Structure in Sumbawa: A QUD Analytistics, *A Cross-linguistic Perspective on Information Structure in Austronesian Languages* (ed. by Sonja Riesberg, Asako Shiohara, and Atsuko Utsumi), 2018. (査読有)
2. 口頭発表: “A QUD based analysis of non-at-issue content in corpus data”, *UiO-XPrag.de Workshop: Non-At-Issue Meaning and Information Structure*, 2017.5.9, University of Oslo.

孫 伯君 ソン ハクケン

中華人民共和国 People's Republic of China

滞在期間: 2017.12.1～2018.3.31

研究主題: カラホト出土西夏文『三代属明言集』の研究

研究成果：

1. 論文: 「藏传佛教“大手印”法在西夏的流传」, 『西夏学』2017年第1期, 141–152, 2017.12.
2. 論文: 「西夏语牙音和舌头音的腭化音变」, 『语言研究』2018年第1期, 124–126, 2018.
3. 論文: 「西夏文相马、医马法<育骏方>考释」, 『北方民族大学学报』2018年第2期, 11–20, 2018.
4. 口頭発表: 西夏文字, 公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の文字学」, 2018.2.17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

SUMITTRA, Suraratdecha スララッデチャ スミットラ

タイ王国 Kingdom of Thailand

滞在時間: 2018.1.1.～2018.7.15.

研究課題主題: 持続可能な言語・文化再生における言語ドキュメンテーションと若年層の参加に関する研究

Tun Aung Kyaw トウン アウン チョー

ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myanmar

滞在期間: 2016.9.1～2017.7.31

研究主題: 現代口語ビルマ語の新しい参照文法書の編集

研究成果：

1. 口頭発表: “Problems Arising from Compiling a New Reference Grammar of Modern Colloquial Burmese”, AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」2017年度第1回研究会, 2017.7.15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

特任研究員

青井 隼人（あおい はやと）

特任研究員

研究主題:琉球語学, 音声学, 音韻論

業績

1. 論文:「南琉球宮古多良間方言における2種類のアクセント型の中和」, 『国立国語研究所論集』 13, 1-23, 2017.7.(査読有)
2. 論文:「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇—複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述—」, 『国立国語研究所論集』 14, 1-27, 2018.1.(査読有)
3. 口頭発表:「声門化子音をめぐる3つの課題」, 沖縄言語研究センター定例研究会, 2017.6.17, 琉球大学.
4. 講演:「ん!?', ニホンゴ探検 2017「ことばのミニ講義」, 2017.7.15, 国立国語研究所.
5. 講演:「日本にもある知らない言語—琉球列島のことば—」, 東京都府中市教養セミナー・東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」, 2018.2.28, 府中市生涯学習センター.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 青井 隼人

期間(年度): 2017~2018

研究種目: 研究活動スタート支援

研究課題名: 声門化子音の音響特性の記述と音韻論的解釈:北琉球沖縄語伊江方言の事例研究

安達 真弓（あだち まゆみ）

特任研究員

研究主題:ベトナム語, 語用論

業績

1. 著書(共編著):『学校を通して見る移民コミュニティ—多言語使用と言語意識に関する報告—』(林徹・安達真弓・新井保裕編), 2018.3, 東京大学大学院人文社会系研究科言語学研究室, 111 pp.
2. 論文:“Attitudes toward Language Use among Vietnamese Residents in Kanagawa”, 『東京大学言語学論集』(林徹先生退職記念号) 39, 3-15, 2018.3.(査読有)
3. 口頭発表:“Stance-marking uses of sentence-final demonstratives in Vietnamese”, *15th International Pragmatics Conference*, 2017.7.17, Belfast Waterfront Centre.
4. 口頭発表:「在日ベトナム人児童の言語使用を取り巻く社会的要因」, 東京移民言語フォーラム第 19

回研究会, 2018.2.21, 東京大学.

岡田 一祐 (おかだ かずひろ)

特任研究員

研究主題: 日本語史, 文字史

業績

1. 論文: 「近代活字鑄造・販売業者における平仮名字体の用意」, 『語文論叢』 32, 23–56, 2017.7.
2. 口頭発表: Hentaigana charts in Meiji textbooks revisited: An analysis of hentaigana charts, European Association of Japanese Studies: EAJS2017, 2017.9.1, Universidade Nova de Lisboa.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 岡田 一祐

期間(年度): 2017~2019

研究種目: 若手研究(B)

研究課題名: 平仮名字体データベースと 19 世紀教科書平仮名字体コーパスの連携による平仮名史研究

小林 美紀 (こばやし みき)

特任研究員

研究主題: アイヌ語, 形態論

業績

1. 論文: 「名詞項の意味役割が交替するアイヌ語動詞」, 『ひろがる北方研究の地平線』(中川裕先生還暦記念論文集刊行委員会編), 19–27, 2017.6, サッポロ堂書店.

近藤 洋平 (こんどう ようへい)

特任研究員

研究主題: 宗教学, イスラム学, イバード派

業績

1. 論文: 「オマーン—「寛容」の精神のもとで暮らす」, 『FIELDPLUS』 19, 4–5, 2018.1.
2. 論文: 「オマーンとイスラーム: 初期イスラームへの貢献」, 『オマーンを知る 55 章』(松尾昌樹編), 80–83, 2018.2, 明石書店.
3. 論文: 「イバード派: その歴史と特徴」, 『オマーンを知る 55 章』(松尾昌樹編), 84–87, 2018.2, 明石書店.

4. 論文:「旅行家が見たオマーンの中世:中東の歴史世界のなかで」,『オマーンを知る 55 章』(松尾昌樹編), 88–91, 2018.2, 明石書店.
5. 論文:「オマーンにおける宗教:多宗教の共存をめざして」,『オマーンを知る 55 章』(松尾昌樹編), 200–203, 2018.2, 明石書店.
6. 論文:「オマーンの建築:建築からみる社会」,『オマーンを知る 55 章』(松尾昌樹編), 204–207, 2018.2, 明石書店.
7. 書評:松山洋平(著)『イスラーム神学』,『イスラム世界』 87, 41–49, 2017.
8. 口頭発表:“Migration, Scholarly Exchange and the Early Development of Ibādī Law in Oman”, The 8th Conference on Ibadi Studies: Local and Global Identities: Social Change and Diaspora in the Ibadi Communities, 2017.5.20, 東京大学.
9. 口頭発表:「宗教における教育と学習—イバード派イスラーム思想の事例から—」, 日本宗教学会「日本宗教学会第 76 回学術大会」, 2017.9.17, 東京大学.

高橋 洋成 (たかはし よな)

特任研究員

研究主題:ヘブライ語, セム諸語, アフロ・アジア諸語の言語学

中村 恭子 (なかむら きょうこ)

特任研究員

研究主題:美術(日本画)

業績

1. 論文:“Entanglement of ‘Art Coefficient’, or Creativity”, *Foundation of Science*. (査読有)
2. 論文:“Entangled Consciousness”, *Foundation of Science*. (査読有)
3. 口頭発表:“Entanglement of ‘Art Coefficient’, or Creativity”, Worlds of Entanglement, 2017.9.29–30, the Free University of Brussels, Belgium.
4. 口頭発表:“Entangled Consciousness”, Worlds of Entanglement, 2017.9.29–30, the Free University of Brussels, Belgium.
5. 口頭発表:「首を擡げるアルシブラ」, シヤルル・フーリエ研究集会, 2018.3.27-28, 一橋大学.

平田 秀 (ひらた しゅう)

特任研究員

研究主題:日本語の音声・音韻、日本語アクセント論

業績

1. 論文:「2010 年～2016 年の日本語歌謡曲における特殊モーラ」,『東京大学言語学論集』 38, 51–63,

2017.9.(査読有)

2. 口頭発表:「2015年・2016年の日本語歌謡曲における特殊モーラについて」, 日本言語学会第154回大会, 2017.6.24-25, 首都大学東京.
3. 口頭発表:「熊野灘沿岸地域諸方言における式の対立」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会/第13回音韻論フェスタ, 2018.3.5-6, 早稲田大学早稲田キャンパス.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 平田 秀

期間(年度): 2016~2017

研究種目: 研究活動スタート支援

研究課題名: 紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言のアクセント研究

研究機関研究員

池田 昭光(いけだ あきみつ)

研究機関研究員

研究主題: 人類学, 中東地域研究(特にレバノン)

業績

1. 著書:『流れをよそおう:レバノンにおける相互行為の人類学』, 2018.2, 春風社, 264 pp.
2. 口頭発表:「宗派主義的社会と相互行為:レバノンのフィールドワーク資料の例から」, 日本中東学会第33回年次大会, 2017.5.14, 九州大学.
3. 口頭発表:「宗派の外部:レバノンにおける相互行為を事例に」, 日本文化人類学会第51回研究大会, 2017.5.27, 神戸大学.
4. 口頭発表:“Sectarianism in the Field?: Reconsideration from an Ethnographic Perspective in Lebanon”, Kota Kinabalu Liaison Office - ILCAA, UMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Asia, 2018.2.5, University of Malaysia Sabah.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 池田 昭光

期間(年度): 2015~2018

研究種目: 若手研究(B)

研究課題名: レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者

科研費:

研究代表者： 池田 昭光
期間(年度)： 2017
研究種目： 研究成果公開促進費
研究課題名： 流れをよそおう—レバノンにおける相互行為の人類学

坪井 祐司 (つばい ゆうじ)

研究機関研究員

研究主題: マレーシアにおけるエスニシティ形成に関する近代史

業績

1. 著書(共編著): 『『カラム』の時代 IX: マレー・ムスリムの越境するネットワーク 2』(坪井祐司・山本博之編), 2018, 京都: 京都大学東南アジア地域研究研究所, 90 pp.
2. 論文: “Contestation of Visions for the Malayan Decolonisation in the Malay Media Space”, *The Malay World: Connecting the Past and the Present* (ed. by Santiago, F.A. and Alfonso, I.C.B), 1–15, 2017.9.
3. 論文: 「2 東南アジアにおける地域と国家の形成」「3 交易の時代と港市の繁栄(15～17世紀)」「4 近世国家群の展開と再編(18～19世紀)」, 『東南アジアの歴史』(古田元夫編), 21–77, 2018.3.
4. 論文: An Alternative Vision of Malayan Decolonisation from the Perspective of Muslim Intellectuals in Singapore, *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.2) : Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia* (ed. by Ikuya Tokoro and Hisao Tomizawa), 147–169, 2018.3.
5. 口頭発表: “Contestation of Visions for the Malayan Decolonisation in the Malay Media Space”, *4th International Conference of the International Council for Historical and Cultural Co-operation-Southeast Asia*, 2017.9.15, De La Salle University, Manila, the Philippines.
6. 講演: “Singapore as a Centre of the Malay Media Space during the Colonial Period”, National Library of Singapore, 2018.3.8, National Library of Singapore.

吉田 優貴 (よしだ ゆたか)

研究機関研究員

研究主題: 身体群の共振, 手話, ヴィジュアル・メソッド, ケニア

業績

1. 著書: 『いつも躍っている子供たち—聾、身体、ケニア』, 2018.2, 風響社, 356 pp.
2. 講演: 「聾者の手話会話、ダンスにおいて互いを〈見ない〉こと: ケニアの聾の子供を事例に」, 日本視覚学会 2018 年冬季大会企画シンポジウム「多文化をつなぐ顔と身体表現」, 2018.1.18, 工学院大学.
3. 口頭発表: 「一緒に躍るといふ経験: ケニアの聾の子供を事例に」, 科研費(新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現」)「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」(代表: 床呂郁哉、課題番号: 17H06341・基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザ

ードに対処する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるミクローマクロ系の連関 2—共催国際ワークショップ「トランスカルチャー状況下における顔・身体」, 2018.3.4, Swiss-Belresort Watu Jimbar, バリ・インドネシア.

日本学術振興会特別研究員

伊藤 雄馬(いとう ゆうま)

研究課題名: 少数言語ムラブリ語に起きた方言分岐の諸相の解明

受入期間: 2016.4.1～2019.3.31

受入教員: 峰岸 真琴

業績

1. 論文: 「TOEIC 学習のための授業内アクティビティの開発 (1) —Part1・2 を用いた文法指導—」, 『富山国際大学現代社会学部紀要』 10(1), 1–8, 2017.10. (査読有)
2. 論文: 「狩猟採集遊動生活から定住生活への移行期におけるムラブリ支援活動の評価」, 『富山国際大学現代社会学部紀要』 10(1), 25–32, 2017.10. (査読有)
3. 口頭発表: “Revisit on Austric Hypothesis and Beyond”, Meeting of NIG-Joint Research (no. 22A2017) “Study on Origin and Migration of the ‘Austric’ Peoples: Mainly on Mainland and Inland Southeast Asia, 2017.5.13, National Institute of Genetics, Mishima.
4. 口頭発表: “Thick Description in Linguistics”, Meeting of NIG-Joint Research (no. 22A2017) “Study on Origin and Migration of the ‘Austric’ Peoples: Mainly on Mainland and Inland Southeast Asia, 2017.5.13, National Institute of Genetics, Mishima..
5. 口頭発表: 「『黄色い葉の精霊』の『謎』—タイ北部・遊動狩猟採集民ムラブリの『起源』をめぐって—」, 第 51 回日本文化人類学会, 2017.5.28, 神戸大学.
6. 口頭発表: 「ムラブリ語の音節構造」, 言語記述研究会第 80 回例会, 2017.6.18, 京都大学.
7. 口頭発表: “Mlabri Dialect Lexicology, Center for Southeast Asian Studies”, International Seminar: Research in Northern Mon-Khmer Linguistics, 2017.8.19, Inamori Hall, Kyoto.
8. 口頭発表: 「ムラブリ語の音節とソノリティ階層」, 第 31 回日本音声学会全国大会, 2017.9.30, 東京大学.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 伊藤 雄馬

期間(年度): 2016～2018

研究種目: 特別研究員奨励費

研究課題名: 少数言語ムラブリ語に起きた方言分岐の諸相の解明

岩田 啓介(いわた けいすけ)

研究課題名: 清朝のアムド支配からみたチベット仏教世界再編

受入期間: 2017.4.1～2020.3.31

受入教員: 星 泉

業績

1. 論文: 「2016年の歴史学界—回顧と展望—(内陸アジア 2)」, 『史学雑誌』 126(5), 256–260, 2017.5.
2. 論文: 「青海ホシュート部のアムド・チベット人支配の確立と清朝」, 『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』(岩尾一史・池田巧編), 65–84, 2018.3. (査読有)
3. 口頭発表: 「清朝雍正乾隆年間青海蒙古牧地的画定和調整」, 清朝政治発展変遷研究国際学術研討会, 2017.6.18, 復旦大学歴史地理研究中心.
4. 口頭発表: “The Structure of the Qinghai Khoshut's Rule over the Tibetans”, The First International Symposium on Tibetan and Himalayan Studies, 2017.11.25, 陝西師範大学国外蔵学研究中心.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 岩田 啓介

期間(年度): 2017～2019

研究種目: 特別研究員奨励費

研究課題名: 清朝のアムド支配からみたチベット仏教世界再編

岩本 佳子(いわもと けいこ)

研究課題名: オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

受入期間: 2015.4.1～2018.3.31

受入教員: 高松 洋一

業績

1. 論文: 「「スルタン」から「パーディシヤー」へ: オスマン朝公文書における君主呼称の変遷をめぐり—考察」, 『イスラム世界』 88, 29–56, 2017.11. (査読有)
2. 口頭発表: 「参照資料としての租税台帳: オスマン朝行政における16世紀以降の租税台帳の活用に関する考察」, 日本中東学会第33回年次大会, 2017.5.14, 慶應義塾大学三田キャンパス.
3. 口頭発表: “From Tax-Exempt to Tax-Payer: Yörüks and Müsellems in the Post-Classical Ottoman Empire”, 14th International Congress of Ottoman Social and Economic History (ICOSEH), 2017.7.25, Sofia University, Sofia, Bulgaria.
4. 口頭発表: 「コメント2: オスマン朝史研究の視点から」, AA研共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」2017年度第1回研究会, 2017.11.25, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 口頭発表: 「アラビア文字紀年銘クロノグラム」, AA研情報資源利用研究センター (IRC) 創立20周

年シンポジウム, 2017.12.9, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

6. 口頭発表:「私の博士論文」, 平成 29 年度中東☆イスラーム研究セミナー, 2017.12.15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
7. 口頭発表:「『定住化』再考:近世オスマン朝における遊牧民と国家」, AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」研究員発表会, 2018.3.29, アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 岩本 佳子

期間(年度): 2015~2017

研究種目: 特別研究員奨励費

研究課題名: オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

科研費

研究代表者: 岩本 佳子

期間(年度): 2017~2019

研究種目: 若手研究(B)

研究課題名: オスマン朝とクルド、テュルク系遊牧民の交流と対立の史的研究

大竹 昌巳(おおたけ まさみ)

研究課題名: 契丹語文法の記述的研究

受入期間: 2017.4.1~2020.3.31

受入教員: 山越 康裕

業績

1. 論文: "Reconstructing the Khitan Vowel System and Vowel Spelling Rule through the Khitan Small Script", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 70(2), 189–206, 2017.6. (査読有)
2. 口頭発表: 「契丹文字—その解読のプロセス」, 京都大学言語学懇話会第 104 回例会, 2017.7.8, 京都大学.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 大竹 昌巳

期間(年度): 2017~2019

研究種目: 特別研究員奨励費

研究課題名: 契丹語文法の記述的研究

杉江 あい(すぎえ あい)

研究課題名: イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

受入期間: 2016.4.1～2019.3.31

受入教員: 外川 昌彦

業績

1. 著書(分担執筆): 『バングラデシュを知るための66章第3版』(大橋正明・村山真弓・安達淳哉・日下部尚徳編), 2017.12, 明石書店.
2. 論文: 「ムスリムの被差別集団から見たバングラデシュ農村のコミュニティー—タンガイル県南部の村を事例として」, 『人文地理』 69(2), 191–211, 2017.6. (査読有)
3. 論文: 「バングラデシュ村落社会におけるヒンドゥー・ムスリム間関係の変容—ショマージと青年組合の活動に着目して」, 『南アジア研究』 28, 1–27, 2017.12. (査読有)
4. 書評: 「書評『近現代の空間を読み解く』(ジョン・モリッシー、デヴィッド・ナリー、ウルフ・ストロメイヤー、イヴォンヌ・ウィーラン著、上杉和央監訳、古今書院)」, 『歴史地理学』 59(3), 19–23, 2017.9.
5. ポスター発表: 「イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動」, 海外学術調査フォーラム: 海外学術調査フェスタ, 2017.7.1, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 口頭発表: 「連帯経済 vs 新自由主義? —バングラデシュ農村におけるマイクロファイナンスを事例に」, FINDAS (NIHU 南アジア地域研究プロジェクト・東京外国語大学拠点) 若手セミナー, 2017.11.5, 東京外国語大学.
7. 口頭発表: 「バングラデシュ農村におけるジェンダー、身体、空間—当地に嫁いだムスリマとしての経験より」, 2017年人文地理学会大会, 2017.11.19, 明治大学.
8. 口頭発表: “Individualism in Rural Bangladesh: Towards a Comprehensive and Dynamic Understanding of Rural Society through Micro-level Studies”, The 5th International Congress of Bengal Studies, 2018.1.26, Jahangirnagar University.
9. 口頭発表: “Does Microfinance Work as a Tool for a Solidarity Economy or Neoliberalism?: Implications for Microfinance Operations in Bangladesh”, The 5th International Congress of Bengal Studies, 2018.1.26, Jahangirnagar University.
10. 講演: 「ロヒンギャ難民の現状と支援—私たちにできることとは」, ロヒンギャ難民問題講演会, 2018.3.4, カトリック膳棚教会.
11. 口頭発表: “Reconsidering socio-economic development in rural Bangladesh”, Bangladesh Study Group (KINDAS)-A special seminar with Prof. Willem van Schendel, 2018.3.21, Kyoto University.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 杉江 あい

期間(年度): 2016～2018

研究種目: 特別研究員奨励費

研究課題名: イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

高尾 賢一郎(たかお けんいちろう)

研究課題名: イスラームと社会統治に関する研究: ヒスバ制度を事例に

受入期間: 2016.4.1～2019.3.31

受入教員: 飯塚 正人

業績

1. 論文: 「サウジアラビアにおける宗教界の変遷と役割」, 『中東研究』 530, 58–69, 2017.9.
2. 論文: 「現代ムスリム社会の風紀取り締まり: 勸善懲悪と宗教警察」, 『宗教研究』(第 76 回学術大会紀要特集) 91, 275–276, 2018.3.
3. 論文: 「現代ムスリム社会における宗教警察: インドネシア・アチェ州の事例を中心に」, 『学習院女子大学紀要』 20, 63–77, 2018.3.
4. 口頭発表: “Sufism under Syrian Ba'th: Ahmad Kuftaru and His Tariqah”, The First International Symposium of Kenan Rifai Center for Sufi Studies, 2018.5.20–21, 京都大学.
5. 口頭発表: 「現代ムスリム社会における風紀取り締まり: ヒスバの実践を例に」, 上智大学イスラーム研究センター公共圏研究会, 2017.6.23, 上智大学.
6. 口頭発表: 「宗教警察とその風紀取り締まりをめぐる評価: サウジアラビアとインドネシアを事例に」, 早稲田大学イスラーム地域研究機構平成 29 年度公募研究「現代ムスリム社会における風紀・暴力・統治についての多角的分析」第 2 回研究会, 2017.7.22, 早稲田大学.
7. 口頭発表: “An Attempt to Portray Sharif in Wahhabi Society: Muhammad Alawi al-Maliki”, International Workshop: Producing Traditions, Knowledge and Identities: Muslim Intellectuals in the Contemporary World, 2017.7.29, 東京大学.
8. 口頭発表: “The Development of Ḥisba in Today's Muslim Society: “Religious Police” and their Scope of Operation”, *The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Annual Meeting of Commission on the Middle East*, 2017.8.10–12, Jagiellonian University, Krakow, Poland.
9. 口頭発表: 「現代シリアの聖者像: イスラーム法学者アフマド・クフターローを事例に」, 「現代アジアにおける聖者崇拜の諸相」2017 年度第 1 回研究会, 2017.9.9, 東洋大学.
10. 口頭発表: 「現代ムスリム社会の風紀取り締まり: 勸善懲悪と宗教警察」, 日本宗教学会第 76 回学術大会, 2017.9.15–17, 東京大学.
11. 口頭発表: “Exclusion of Sufism from Western Discourses on Islamophobia”, Sufism and Zen in the Modern Western World: Spiritual Marriage of East and West or Western Cultural Hegemony?, 2017.12.8–9, University of Glasgow, Scotland, UK.
12. 口頭発表: 「現代ムスリム社会における風紀・暴力・統治についての多角的分析」, 早稲田大学イスラーム地域研究機構公募研究合同成果報告会, 2018.1.27, 早稲田大学.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 高尾 賢一郎

期間(年度): 2016～2018

研究種目: 特別研究員奨励費

研究課題名： イスラームと社会統治に関する研究:ヒスバ制度を事例に

竹村 和朗(たけむら かずあき)

研究課題名：現代エジプトのワクフに関する人類学的研究

受入期間：2017.4.1～2020.3.31

受入教員：近藤 信彰

業績

1. 論文：“(Doctoral Theses in Middle Eastern Studies) An Ethnography of Desert Development in Contemporary Egypt: History, Law, and Social Relations in Badr District, Buhayra Governorate. Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo”, *Annals of Japan Association for Middle Eastern Studies*, 33(2), 97–102, 2018.1.(査読有)
2. 論文：「第2章 憲法：2014年憲法の制定過程と条文内容」, 『動乱後のエジプト：スィーサー体制の形成(2013～2015年)』(土屋一樹編), 19–37, 2018.3.
3. 論文：「第4章 司法：ムスリム同胞団関連事件に関する破棄院の判決から」, 『動乱後のエジプト：スィーサー体制の形成(2013～2015年)』(土屋一樹編), 53–67, 2018.3.
4. 論文：「第2章 家族ワクフをめぐる家族の争い：エジプト最高憲法裁判所の2008年違憲判決が示すこと」, 『「中東における家族の変容」研究会調査報告書』(村上薫編), 23–36, 2018.3.
5. 口頭発表：「ワクフは所有権か：古典学説と現代エジプト法制の比較検討から」, 日本中東学会第33回年次大会, 2017.5.14, 九州大学.
6. 口頭発表：「現代エジプトのワクフ法制における「家族」：フサイン・ジャーウィーシュの子孫によるワクフ訴訟に対する違憲判決から」, 科研費基盤研究 A「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的・総合的研究」公募研究会「イスラーム・中東における家族・親族の再考」研究会第5回集会, 2017.11.18, 東京大学.
7. 口頭発表：「趣旨説明とエジプト相続法の概要」, 科研費基盤研究 A「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的・総合的研究」公募研究会「イスラーム・中東における家族・親族の再考」研究会第6回集会, 2018.3.25, 東京大学.
8. 口頭発表：「現代ワクフ研究における司法について：『終了した家族ワクフ』をめぐる家族争議に関するエジプト最高憲法裁判所の判決から」, AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」研究員発表会, 2018.3.29, 東京外国語大学.
9. 講演：「現代エジプトにおける結婚の手続き」, KAFW アジア研究者ネットワーク・科研費基盤研究 A「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的・総合的研究」公開セミナー「イスラーム世界の結婚最前線」, 2017.10.22, 北九州男女共同参画センター.
10. 講演：「現代ワクフ研究の意義と可能性：ある家族ワクフ訴訟に関する最高憲法裁判所判決を事例に」, 2017年度第7回定例懇話会, 2018.2.8, 日本学術振興会カイロ研究連絡センター.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 竹村 和朗

期間(年度): 2017~2019

研究種目: 特別研究員奨励費

研究課題名: 現代エジプトのワクフに関する人類学的研究

受賞

日本中東学会第6回日本中東学会奨励賞(2017.5.13)

I-2.6.3 受賞

竹村和朗(日本学術振興会特別研究員/受入教員: 近藤信彰)

第6回日本中東学会奨励賞(2017年5月13日, 日本中東学会)

麻生玲子(ジュニア・フェロー/受入教員: 中山俊秀)

日本言語学会論文賞(2017年11月26日, 日本言語学会)

I-2.6.4 人事評価

国立大学法人東京外国語大学では、2006年度から(1)教員の教育研究活動の実態を把握し、本学における教育研究の質の向上を図る、(2)教員の潜在的可能性を掘り起こし、大学の価値と競争力を高める、(3)年功序列型の給与制度の弊害を正し、教育・研究・大学運営への参画など広い意味での大学業務への貢献を給与に適正に反映させる、といった目的で、年に一度「人事評価」を実施することになった。評価項目や方法などは部局の事情を考慮し、部局ごとに独自に作成することになった。

これを受けて本研究所では、人事評価の方針および評価項目案を決定した。基本方針の概略は以下の通りである。

- ・ 教育実績、研究業績、組織運営への参画と貢献、社会貢献・国際貢献、その他の5つの大項目を設定する。
- ・ 大項目それぞれに対し、研究所の活動を可能な限り網羅した小項目を定め、それにチェックボックスをつける。
- ・ このように設計されたチェックリストを電子情報化して所内からチェックを書き込むことができるようにし、所員は一定の期間内にチェックリストにアクセスし、当該年度の活動を自己申告する。
- ・ 「基本要件」を満たしたか否かの判断は「研究業績」と「組織運営への参画と貢献」の2つの大項目に含まれる小項目のみを対象とし、10以上のチェックがつけられれば満たしたものとする。
- ・ それ以外の3つの大項目に含まれた小項目へのチェックは、参考資料として活用する。

また、病気等による休職、長期研修、在外研究、長期にわたる海外での調査・研究などの特殊事情を抱える所員は、例外として個別に評価することも確認された。

2008年度には大学執行部から全学的に人事評価方式の再検討が求められたが、本研究所では自己評価委員会(当時)における審議の結果、従来の人事評価システムの内容ならびに運用には問題がなかったと判断した。その結果、2008年度以降2013年度まで、従来通りの方法で人事評価を行ってきた。しかしながら、2012年度に大学執行部が新たに全学的な人事評価実施規程案等の検討結果を示し、各部局においてそれぞれの特性を踏まえた評価方法の検討を行うように要請された。これを受けて、本研究所でも全学に

おける枠組みを踏まえ、上記評価項目、評価システムの見直しを行うこととなった。

2013 年度に入ると、新しい人事評価システムの導入に関する検討が全学的に本格化した。しかしながら、本研究所における人事評価の方針や、自己申告方式で評価を行う評価項目については、基本的に従前のそれらを基礎とすることで問題がないと判断されたため、大きな変更は加えられていない。とはいえ全学的には、自己申告以外に、部局長による総合評価についての基準がより明確化される方針が打ち出された。すなわち、教育業績、研究業績、大学運営組織への参画・貢献、社会貢献・国際貢献、その他、の 5 つの大項目について特に顕著な貢献があるかどうか、また、所員として、あるいは本学の教員として不適切な行為がなかったかどうか、所長が評価したうえで、学長が最終的に決定するという案が作成されたのである。このような新しい評価システム案は、全学的な協議の中で位置づけられ、2014 年度に細部の詰めを行った上で、運用されている。なお、運用開始以来 2017 年度に至るまで、本研究所の所員について、東京外国語大学の教員として不適切な行為があったと評価されたことは一度もない。

1-2.7 外部資金による研究活動

1-2.7.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」

本研究所は言語学、文化人類学、地域研究の 3 つの分野で共同利用・共同研究拠点に認定されているが、本事業では特別経費により、これまで研究分野毎に進めてきた現代的諸問題の研究を有機的に関連させて一気に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した、問題解決のための研究体制を構築する。具体的には、3 分野が緊急に解決すべきと考える問題が等しく「少数派／弱者の危機」という側面を持つことから、このテーマを始めとする異分野間連携の国内合同研究集会を実施して、研究の飛躍的發展を図る。そこで得られた研究成果は、3 分野の基幹研究がそれぞれ国内外の研究機関や現地コミュニティと連携して実施する国際共同事業「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究」に反映され、問題解決のための新たな国際連携研究体制の構築に資する一方、各事業の成果を異分野間の連携研究にフィードバックするサイクルを確立することで、持続的な現代諸問題研究の進化を図る。

2017 年度はこの新たな特別経費プロジェクトの 2 年目にあたり、3 分野がそれぞれ緊急に解決すべきと考える問題の国際共同研究に引き続き取り組む一方、各分野の取組に関する相互理解をさらに深めるべく、2018 年 1 月に国内合同研究集会 1 回を実施した。活動の詳細については [II-3.3.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」](#)

を参照のこと。

1-2.7.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危

機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

年度計画

学内と連携機関(名古屋大学)から4名の若手研究者を海外連携機関(メルボルン大学, ナンヤン工科大学 (NTU), ロンドン大学 SOAS)に派遣するとともに, 海外連携機関(オーストラリア国立大学, メルボルン大学, NTU, ロンドン大学 SOAS)から計6名の研究者を招聘し, 以下の事業を推進する。

- (1) データアーカイブ
- (2) 言語コーパス構築
- (3) 言語の通時的変化・分岐に関する研究
- (4) 言語コーパスを用いた理論的研究

実施状況

派遣と招聘を年度計画通り行い, 以下の事業活動を実現した。招聘した研究者が関わった研究会の情報については II-3.3.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」を参照のこと。

(1) データアーカイブ

一次データの公開: 日本側研究者が持つ危機言語・少数言語の一次データを広く利用可能な形でアーカイブした。具体的には10言語のデータを連携研究者 Thieberger 博士とのメタデータ等に関する協議を経てアーカイブ・公開した。この中にはメルボルンに長期派遣を受けた若手研究者倉部による, ミャンマーで話されている少数言語ジンポー語の1800余の民話からなるデータも含まれている。

(2) 言語コーパス構築: 危機言語・少数言語のコーパス整備に関して, メルボルン大学の Schnell 博士と共同研究を開始した。Schnell 博士との共同研究は各メンバーが一定量のデータ(1000 クローズ)のナラティブに現れる指示対象に対して, GRAID という手法(形式(名詞句・代名詞・ゼロ形など)と文法関係・人称・有生性に関するアノテーションをつける手法)で進めている。今年度は3人の研究者がコーパスをほぼ完成させた。

マレー語など比較的話者数が多い言語のコーパス構築・利用方法に関しては, NTU の Bond 博士, Kratochvil 博士との共同研究が順調に推移している。既に日本側ではマレー語・インドネシア語のコーパス検索システム MALINDO CONC を公開するとともに, 東京外国語大学が過去に受けた助成金の成果に基づく NTU との共同研究として, 日本語, ビルマ語, マレー語, インドネシア語, 英語のパラレルコーパス「東京外大アジア言語パラレルコーパス(TUFS Asian Language Parallel Corpus; TALPCo)」も構築した。このコーパスは, <https://github.com/matbahasa/TALPCo> で一般公開した。また,

コーパスの内容を国際共著論文として29年度中に国際学会で発表するとともに論文の形で公刊した。

(3) 言語の通時的変化に関する研究: チベット語・西夏語に関して SOAS との共同研究を行い, 連携研究者 Hill 博士(ロンドン大学 SOAS)の招聘, 担当研究者荒川の出張により, コーパスに基づくチベット・タングート系言語の分岐に関する共同研究を行った。荒川は『プリンストン大学所蔵西夏文妙法蓮華経』をほぼ完成させ, 来年度に刊行予定である。また, バントゥ諸語の分岐と通時的変化に関する SOAS との共同研究に関しては, 担当研究者品川の出張により, 昨年度議論したパラメータに基づき共同研究を実施した。

(4) 言語コーパスを用いた理論的研究: コーパスに基づく理論的研究は上記(1)(2)の研究の到達点に位置するものである。少数言語・危機言語に関しては Schnell 博士との共同研究により、三名の研究者が(2)で構築したアノテーションつきコーパスを構築する際のアノテーションノートと現段階での発見を論文の形で公開した。また、ANU の Nicholas Evans 教授と Danielle Barth 博士を招聘し、準パラレルコーパス SCOPIC に関するプロジェクトを開始した。

I-2.7.3 科学研究費等によるその他の研究活動

本年度は、次の 62 件の科学研究費補助金による研究活動を実施した。

研究種目	金額(単位: 円) / 件数
基盤研究 A (海外, 一般含む)	31,000,000 / 4 件
基盤研究 B (海外, 一般含む)	44,200,000 / 12 件
基盤研究 C	19,550,000 / 23 件
挑戦的萌芽研究	1,000,000 / 1 件
若手研究 A	1,900,000 / 1 件
若手研究 B	6,400,000 / 8 件
研究活動スタート支援	2,000,000 / 2 件
研究成果公開促進費	14,800,000 / 4 件
国際共同研究加速基金	20,700,000 / 2 件*
特別研究員奨励費	7,389,910 / 7 件
計	148,939,910 / 64 件

I-2.7.4 寄付金

今年度は該当なし

I-2.7.5 受託研究・受託事業

近藤 信彰

人間文化研究機構 【現代中東地域研究推進事業】人間の移動・交流によるネットワークの構築

金額 6,990,000 円(直接経費 6,990,000 円; 間接経費 0 円; 一般管理費 0 円)

椎野 若菜

日本学術振興会 【二国間交流事業】ウガンダにおける「家族」の多様化と再編力についての研究:
格差に対抗する潜在力分析

金額 2,383,680 円(直接経費 2,383,680 円; 間接経費 0 円; 一般管理費 0 円)

外川 昌彦

日本学術振興会 【二国間交流事業】ブッダガヤへの日本の巡礼者ーインドにおける仏教復興運動と日印交流

金額 960,000 円(直接経費 960,000 円;間接経費 0 円;一般管理費 0 円)

峰岸 真琴

モリサワ文研(株) 諸外国文字フォントの評価監修

金額 3,240,000 円(直接経費 2,462,400 円;間接経費 777,600 円;一般管理費 0 円)

I-3 組織運営

I-3.1 センター

I-3.1.1 情報資源利用研究センター

情報資源利用に関する研究を推進するために、IRC プロジェクトを組織し、本研究所が所蔵・収集しているアジア・アフリカの言語データ、言語文化に関する多様な研究資料の電子化と公開や、アジア・アフリカの言語文化に関する研究用データベース、電子辞書、映像資料体などの構築・公開・共同利用を進めるための連携活動などを進めた。同時に、IRC 設立 20 周年にあたり、記念のシンポジウムを開催し、これまでの研究成果を回顧するとともに、今後の新しい展開や IRC の果たすべき役割などについて所内外の研究者とともに議論を行った。

IRC 内の運営については、原則として毎月定例会議を開催し、予算執行状況の点検、IRC プロジェクトの進行状況の点検、事業改革や IRC ワークショップの開催計画などを主たる議題として討議を行なった。また、所内の情報体制の円滑化・充実のため、IRC の管理するサーバーの管理運営を行なった。また、IRC の活動と構築した情報資源を公開するためのウェブサイトの全面リニューアルを行ない、情報資源の検索・閲覧・利用の利便性を向上させた。

所内の情報システムの安定的な運用及び IRC 関連研究事業の推進のために、情報処理に関する専門知識を有した 2 名の特任研究員を、事務管理関係業務のために 1 名の業務補佐を雇用する体制を継続した。

I-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター

2017 年度は前年度同様、センター担当所員には臨地調査手法の洗練とフィールドサイエンスの構築、海外研究拠点の維持・運営多岐にわたるセンター業務を効率よく遂行した。また 2016 年度に引き続き、海外調査専門委員会のもとに設置した「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」(2010 年度設置)、「フィー

ルドネット運営委員会」(2011 年度設置)に、学内外の委員を委嘱して、コロキアムの企画・運営の円滑な遂行と、相互に研究情報を交換するフィールドネットの機能を強化するための企画・運営を諮問した。

I-3.2 外部委員会

I-3.2.1 運営委員会

本研究所には 2009 年度まで、所外の経験豊かな学識者による運営諮問委員会が設置されていた。運営諮問委員会は、所長からの諮問に応えることで、全国共同利用研究所としての AA 研の研究や運営のあり方に関する基本的・長期的な方向性を示してきた。しかしながら、共同利用・共同研究拠点への移行にともない、2010 年度からは学外委員が過半数を占める運営委員会を設置することとなり、運営諮問委員会は 2009 年度をもって活動を終了した。

2017 年度の運営委員会は学外委員 9 名を含んでおり、その多くは言語学、民族学、地域研究、歴史学の研究者で、本研究所が共同利用・共同研究拠点として認定されている学問分野の研究者コミュニティを代表する形で、さまざまなご意見を頂戴している。さらに社会的に開かれた研究所のあり方を検討するため、研究機構、研究所、センターなどの運営に携わっている研究者にもご参加いただいている。委員長は渡邊興亜名誉教授(総合研究大学院大学)、副委員長は西尾哲夫教授(人間文化機構国立民族学博物館)である。

2017 年度の運営委員会は 2 回開催された。第 1 回運営委員会(2017 年 11 月 29 日開催)では、AA 研の 20 年スパンの研究戦略について、AA 研所内での議論の中で示された論点を共有した上で、諮問し、研究者コミュニティの視点からの意見を得た。また、新たに創設される国際共同利用・共同研究拠点制度(仮称)への対応について諮問し、意見が交わされた。

第 2 回運営委員会(2018 年 2 月 23 日開催)においては、テニュアトラック制度に関する所内規定の改正、および、第 1 回委員会に引き続いて、AA 研の研究に関する将来戦略についての諮問がなされ、議論された。

【2017 年度の委員氏名等は、資料編 [II-2.2.1 運営委員会](#)の項を参照】

I-3.2.2 共同研究専門委員会

本研究所が共同利用・共同研究拠点に認定されたことにともない、2010 年度以降に発足した共同利用・共同研究課題はすべて、公募を経て新設の共同研究専門委員会が採否の審査を行うことになった。共同研究専門委員会の委員は、AA 研が共同利用・共同研究拠点として認定されている三分野(言語学・文化人類学・地域研究)の研究者コミュニティを代表する学外委員が過半数を占めている。2017 年度の共同利用・共同研究課題審査会は 10 月 21 日(土)に開催され、2018 年度発足分に応募のあった 10 件の共同利用・共同研究課題に関する審査が行われた。審査会には井上、窪田、倉沢、杉山、藤代、吉澤、米田(以上学外)、黒木、澤田、床呂(以上所内)の各委員が出席し、各共同利用・共同研究課題の応募書類と代表者によるプレゼンテーションをもとに審査にあたった。審査会終了後は所長、副所長、情報資源利用研究センター長も加わって共同研究専門委員会を開催し、応募のあった共同利用・共同研究課題に対する順位付けを行う一方、最終評価点を附して各課題代表者への審査結果通知を行うことを承認した。なお、共同利用・共同研究

課題の最終的な採否は、共同研究専門委員会の付した順位に従って、企画運営委員会が決定するが、来年度予算の如何にかかわらず 11 月下旬には各課題代表者に審査結果を通知することが認められた。最終的には応募のあった 10 件のうち 7 件が採択された(うち 3 件が所外代表)。

ほかにも共同研究専門委員会は、年度末に提出された実績報告書をもとに、本年度実施された共同研究課題 28 件の書面審査・評価を行い、共同研究の質の向上に寄与している。【委員氏名等は、資料編 [II-2.2.2 共同研究専門委員会](#)の項を参照】

I-3.2.3 研修専門委員会

2018 年度研修言語として土族語(大阪会場)・ヨルバ語、メエ語(エカリ語)(東京会場)の開講を決定した。また、2019 年度研修言語としてブリヤート語(東京会場)の開講を決定した。【委員氏名等は、資料編 [II-2.2.3 研修専門委員会](#)の項を参照】

I-3.2.4 海外調査専門委員会

1. 海外学術調査フォーラム(旧称: ~2004 年度「海外学術調査総括班研究連絡会」、~ 2010 年度「海外学術調査総括班フォーラム」)の企画・開催準備を案件として、海外調査専門委員会を 2017 年度中に 1 回(12 月)開催した。
2. 全体会議、地域別分科会および情報交換会からなる海外学術調査フォーラムを、7 月 1 日(土)に開催した。フォーラムでは、全国の科学研究代表者(新規・継続分)をまじえ、海外学術調査の研究ネットワークをめぐる活発な議論の場を提供した。また海外学術調査フェスタという文理融合型の共同研究についてのポスター発表の場を設けた。
3. 上記総括班フォーラムと同日開催で、「フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション—あつめる・はかる・かぞえる—」と題して、下記海外学術調査ワークショップを開催した。
 - 1) 関谷 雄一(東京大学大学院総合文化研究科/文化人類学)「福島原発事故被災当事者との協働研究—その創造性と課題—」
 - 2) 塩見 こずえ(国立極地研究所/動物行動学)「野生動物の動きをはかるバイオロギング」
4. 2017 年度後半以降は、次年度海外学術調査フォーラムの企画・開催に向けた準備作業に着手した。
5. フォーラム当日には、日本学術振興会研究事業部研究助成第一課長による AA 研所長、およびフォーラム関係者との意見交換の機会が設けられ、文部科学省で進められている科学研究費補助金事業の見直しによる、2017 年度の科研・基盤研究の「海外学術調査」枠の廃止と、国際共同研究強化(B)の創設への対応についての協議が行われた。

海外学術調査フォーラム

平成 29 年度フォーラムプログラム(敬称略)

日時: 2017 年 7 月 1 日(土)10:30-19:30

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

10:30-12:30 海外学術調査ワークショップ

会場: アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室(303)

「フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーションー あつめる・はかる・かぞえるー」

司会 外川 昌彦(AA研 海外学術調査フォーラム担当長)

挨拶 飯塚 正人(AA研 所長)

1 関谷雄一(東京大学大学院総合文化研究科/文化人類学)「福島原発事故被災当事者との協働研究
ーその創造性と課題ー」

2 塩見 こずえ(国立極地研究所/動物行動学)「野生動物の動きをはかるバイオロギング」

コメンテーター 床呂 郁哉(AA研)

12:30-12:35 海外学術調査フェスタ展示内容の案内

外川 昌彦(AA研 海外学術調査フォーラム担当長)

12:35-14:00 ----- 昼食・休憩 -----

12:35-17:30 1階大会議室にて海外学術調査フェスタ 開催

14:00-15:50 地域別分科会 会場: AA研 各会議室

I 大陸部東南アジア 会場: 3階セミナー室(301)

座長: 伊藤 元己(東京大学大学院総合文化研究科)

西井 涼子(AA研)

情報提供講師: 横山 智(名古屋大学大学院環境学研究科)

タイトル「過去70年のラオス農村の人口動態と生業」

書記: 塩原 朝子(AA研)

II 島嶼部東南アジア・太平洋 会場: 4階研修室(405)

座長: 岡本 正明(京都大学東南アジア地域研究研究所)

高樋 さち子(秋田大学教育文化学部)

情報提供講師: 石川 隆二(弘前大学農学生命科学部)

タイトル「熱帯島嶼地帯における植物調査と研究サンプルの輸入などの取り扱いについて」

書記: 吉田 ゆか子(AA研)

III 東アジア 会場: 3階小会議室(302)

座長: 窪田 順平(総合地球環境学研究所)

蓮井 和久(鹿児島大学)

情報提供講師: 北川 秀樹(龍谷大学政策学部)

タイトル「中国における環境研究ーフィールド調査, インタビュー, ワークショップー」

書記: 児倉 徳和(AA研)

IV 南アジア・西アジア・中央アジア・北アフリカ 会場: 3階MMセミナー室(306)

座長: 黒木 英充(AA研)

錦田 愛子(AA研)

情報提供講師: 高田 秀重(東京農工大学農学研究院)

タイトル「インド等の熱帯アジア地域の環境汚染調査: 尿尿汚染, 化学汚染, マイクロプラスチック」

書記: 高松 洋一(AA研)

V 北米・中南米 会場: 2階コモンルーム(203)

座長: 関 雄二(国立民族学博物館)

中山 俊秀(AA 研)

情報提供講師: 井上 幸孝(専修大学文学部)

タイトル「メキシコにおける歴史文書研究の現状」

書記: 伊藤 智ゆき(AA 研)

VI 極地・北ユーラシア・ヨーロッパ 会場: 8階企画作業室(805)

座長: 藤田 耕史(名古屋大学大学院環境学研究科)

本山 秀明(国立極地研究所)

情報提供講師: 礪波 亜希(筑波大学ビジネスサイエンス系)

タイトル「政策研究のためのフィールド調査: タイと極北(北欧)の経験から」

書記: 山越 康裕(AA 研)

VII サハラ以南アフリカ 会場: 3階マルチメディア会議室(304)

座長: 河合 香吏(AA 研)

椎野 若菜(AA 研)

情報提供講師: 金子 守恵(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

タイトル「エチオピアにおける調査状況と実践的地域研究の試み」

書記: 苅谷 康太(AA 研)

16:00~17:00 全体会議(事前申込制) 会場: AA 研 3階大会議室(303 室)

司会 外川 昌彦(AA 研 海外学術調査フォーラム担当長)

挨拶 近藤 信彰(AA 研 フィールドサイエンス研究企画センター長)

質問取りまとめ 深澤 秀夫(AA 研), 野田 仁(AA 研)

講師: 吉田 正男((独)日本学術振興会研究事業部研究助成第一課長)

「科学研究費の執行について」

17:30~19:30 情報交換会(事前申込制) 会場: 生協 1階ホールダイニング

司会 佐久間 寛(AA 研)

【委員氏名等は, 資料編 [II-2.2.4 海外調査専門委員会](#)の項を参照】

I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会

1. フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会を 2017年度中に2回(10月27日(金)・2月16日(金))実施し, 2017年度及び2018年度のフィールドサイエンス・コロキウム事業の運営に関わる企画・策定作業等を実施した。
2. 同運営委員会と同日開催でフィールドサイエンス・コロキウムの連続ワークショップを AA 研基幹研究人類学班「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」との共催により下記のように2回実施した。
 - 1) 「リスク・ハザード・レジリエンス」日時: 2017年10月27日(金)開催
 - 2) 「フィールドワークをフィールドワークする」日時: 2018年2月16日(金)開催

【委員氏名等は, 資料編 [II-2.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会](#)の項を参照】

I-3.2.6 フィールドネット運営委員会

1. フィールドネット運営委員会を 1 回(2018 年 3 月 30 日(金))開催し、フィールドネット事業の 2017 年度の活動を総括し、2018 年度以降の活動方針を策定した。
2. 公募企画「フィールドネット・ラウンジ」1 件を下記の通り開催した。
ワークショップ「草の根から地域住民が生み出す「食」と「農」の空間 ― どうやって見つけ、調べるか？」日時: 2018 年 1 月 20 日(土)開催

【委員氏名等は、資料編 [II-2.2.6 フィールドネット運営委員会](#)の項を参照】

I-3.2.7 編集専門委員会

2017 年 12 月 4 日(月曜日)に編集専門委員会を開催した。『アジア・アフリカ言語文化研究』の投稿論考に枚数制限を設けるべきかという点について、設けた方がよいが、具体的な数字については今後の検討課題とするとされた。なお 2017 年度においては予定どおり 94・95 号の 2 冊を発行した。

1. 2017 年 9 月 30 日発行『アジア・アフリカ言語文化研究』94 号では、国内外より総数 21 件(うち論文 20 件、資料 1 件、国内 14 件、海外 7 件)の投稿があり、審査の結果、論文 13 件、資料 2 件を掲載した。
2. 2018 年 3 月 31 日発行『アジア・アフリカ言語文化研究』95 号では、国内外より総数 16 件(うち論文 13 件、資料 3 件、国内 7 件、海外 9 件)の投稿があり、審査の結果、論文 4 件、資料 3 件を掲載した。

【委員氏名等は、資料編 [II-2.2.7 編集専門委員会](#)の項を参照】

I-3.2.8 国際諮問委員会

国際諮問委員会は、国際的な視点から共同利用・共同研究に関し、所長が必要と認める事項について所長の諮問に応じることを目的に、共同利用・共同研究拠点への移行に伴い 2010 年度より設置された。本委員会は本研究所の外国人研究員と所長・所員(国際交流担当)とで構成される。2017 年度も、必要に応じて所長が委員との個別懇談を行い、研究所の研究等について意見交換を行ったものの、緊急に諮問を必要とするような案件はなかったことから、本委員会は開催されなかった。【委員氏名等は、資料編 [II-2.2.8 国際諮問委員会](#)の項を参照】

I-3.2.9 海外拠点専門委員会

2018 年 3 月 30 日(金)に第 1 回専門委員会を開催した。JaCMES, KKLO 両拠点の 2017 年度の活動報告、2018 年度活動計画を報告するとともに、現地情勢の変化と拠点の役割・機能の位置づけなどについて専門委員から助言・意見を受けた。【委員氏名等は、資料編 [II-2.2.9 海外拠点専門委員会](#)の項を参照】

I-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会

2018年3月19日(月)に第1回中東研究日本センター(JaCMES)国際諮問委員会を JaCMES にて在レバノン 3 委員と黒木教授, 錦田センター長との計 5 人で開催した。【委員氏名等は, 資料編 [II-2.2.10 中東研究日本センター諮問委員会](#)の項を参照】

I-3.3 内部委員会等

I-3.3.1 企画運営委員会

企画運営委員会は原則として月に一度, 教授会に先立つ 1 週間前に開催され, 教授会に提出される諸々の案件に関し, 所内規程に基づき原案を審議するほか, 必要に応じて原案作成を行なう。委員会の構成メンバーは言語学, 歴史学, 民族学の 3 分野からの選出委員各 1 名, 情報資源利用研究センター長, フィールドサイエンス研究企画センター長, 研究戦略策定委員会委員長, 副所長および所長である。委員会の議長は所長が務める。

2017 年度も従来と同様, 適宜委員会のメーリングリストを通じた審議を行ったが, 企画運営委員会のこうした審議は, 教授会における論点の明確化と整理, さらに会議時間の短縮に大いに貢献している。また, 2009 年度からは 3 分野からの選出委員 3 名を共同利用委員会・共同研究専門委員会(2010 年度以降は共同研究専門委員会)の所内委員としている。さらに 2010 年度からは同じく選出委員 3 名を運営委員会の所内委員に充て, 企画運営委員会による研究所の重要事業への関与を強化している。こうした体制のもと, 2017 年度の企画運営委員会も本研究所の共同利用・共同研究拠点としての機能強化に向けて積極的に取り組んだ。

I-3.3.2 研究戦略策定委員会

自己評価委員会と将来計画検討委員会が改組され, 2015 年度より新たに研究戦略策定委員会が発足した。

1) 年次計画の策定

平成 30(2018)年度計画(素案)の策定を行った。

2) 年次報告書の作成

年度初めに, 2 センター, 各共同研究課題などが過年度の実績報告を提出し, 共同研究については外部委員会の評価を受け, 所内業務等については担当責任者が達成度を自己申告した内容に基づき, 過年度の年次報告書を作成した。

3) 経年教授業績の外部評価

2017 年度は, 経年教授業績の外部評価に該当する教授がいなかったため, これを実施しなかった。

4) 東京外国語大学点検・評価室への所員の研究・教育業績の報告

所員に大学情報データベースへの個人研究事業等の入力を要請し, 年次報告書作成のためのデータ

を収集するとともに、全学の教育研究活動に関するデータ収集に協力した。また全学点検・評価室の活動には太田信宏所員が室員として参加した。

5) 拡大研究戦略策定委員会の開催

2018 年度に実施される共同利用・共同研究拠点の中間評価を前に、共同利用・共同研究拠点に認定された 2010 年度以降の研究所の活動を長期的な視点で検証し、問題点を抽出する一方、第四期中期目標期間(2022 年度～2027 年度)を見据えて、今後 10 年の将来構想を描くため、広く所員の参加を求めて、10 月 5 日と 1 月 11 日の 2 回、拡大研究戦略策定委員会を開催した。その結果、今後の新規人事採用や基幹研究の交代も視野に入れつつ、新たな研究プロジェクトの種(シーズ)を作っていくことで合意し、2018 年 4 月に開催する次回の拡大研究戦略策定委員会に向けて、所員からシーズの提案を募集することにした。

I-3.3.3 文献資料(図書)担当

2017 年度の事業計画は以下のとおりだった。

1. 雑誌類の購入・整備(継続・新規)を行う。
2. 研究所として揃えるべき基本資料の充実をはかる。
3. 雑誌の整理作業を継続する。
4. カビ対策を含む、図書の適正な維持・管理を行う。
5. 修理製本対象文献の修理を行う。
6. マイクロフィルムの劣化対策を行う。

2017 年度に下記の事業を行った。

1. 雑誌類について、従来からの継続分の購入・整備を行った。
2. 貴重書、辞典類、参考図書を中心に基本資料を拡充した。
3. 雑誌の配架整理(製本を含む)を行った。
4. 除湿器の稼働、除湿剤の交換等により図書を適正に維持・管理した。
5. 修理製本対象文献の修理を行った。
6. マイクロ室所蔵マイクロフィルムを適宜チェックした。

I-3.3.4 国際交流担当

1. 2017 年度着任の外国人研究員の受入れにあたりガイダンス等を行った。
2. 2018 年度(2018 年 9 月以降)着任予定の外国人研究員の募集を行い、3 名を候補者として選考した。
この候補者 3 名は 2018 年 2 月 15 日開催の教授会において承認された。
3. AA 研フォーラムを企画・開催した。詳細は I-4.4.1 AA 研フォーラムの実施の項を参照。

I-3.3.5 出版担当

2017年度の活動計画

1. 下記の年3回、共同研究プロジェクト、ユニット研究、外国人研究員招請に基づく研究成果を募集し、紙媒体として印刷・刊行すると共に、電子的に複製・翻刻し保存する。
 - ・ 2017年4月末日：第1回原稿募集締め切り
 - ・ 2017年7月末日：第2回原稿募集締め切り
 - ・ 2017年10月末日：第3回原稿募集締め切り
2. AA研の出版物リストの更新と電子的公開の作業を進める。

2017年度の活動実績

1. 刊行物一覧については、資料編 [II-4.4.1 出版](#)の項を参照のこと。
資料編 II-4.4.1にあるように、共同研究プロジェクト、外国人研究員招請に基づく研究成果等、18点を刊行した。また既刊行物を電子的に複製し、保存・公開を進めた。
「AA研 出版物目録 2017」の刊行にあたって
「AA研 出版物目録」の紙媒体は「AA研要覧 2017」に挿入刊行するとともに、下記 URL にて公開した。
<http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/publ/ILCAApubl2017.pdf>
2. 既刊行物の電子的公開について
既に刊行された共同研究成果物等について、著作権者の許諾を得たものを、以下の URL にて公開した。<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/4>
3. 2017年度出版刊行ルールについて
AA研の予算による出版物に関する刊行手続は、「出版刊行ルール」(2016年度作成)に従っている。その主な内容は以下の通りである。
 - ・ 基礎語彙集は電子出版を原則とする。
 - ・ 基礎語彙集は一般公募とし、応募にあたっては、在職中の任期つきでない所員を通じて行う。
 - ・ 応募された原稿は二名以上の査読者によって査読し、出版の可否を判断する。
 - ・ 原稿は、東京外国語大学図書館成果公開コレクション(リポジトリ)を通して電子的に公開する。同時に紙媒体による出版を希望する場合、装丁は原則としてペーパーバックとする。
 - ・ 共同利用・共同研究課題出版物の刊行については、応募資格者を原則として常勤所員および任期つき所員としたが、離任した者も可能とする。
4. 電子出版について
既に本学リポジトリを通じて、新規刊行物および一部の既刊行物の電子的公開を行っている。2016年度からは言語研修のテキストも電子出版として公開している。
<https://publication.aa-ken.jp/>
電子書籍は、従来の出版と同様の水準の書籍としての品質を維持し、独自の ISBN の付与を行う。公開は当面 PDF 形式に限り、検索やテキストのコピーは自由な形式で公開している。AA研の出版物では多言語が用いられるものも多いため、Unicode に準拠した検索を最大限可能にするなど、ファイルの編集に工夫を重ねている。

なお、本学学術成果に関するオープンアクセス宣言(2016年2月)に従い、従来の「出版物の電子的複製・公衆送信に関する許諾」に代わり、クリエイティブ・コモンズのCC-BYライセンスを原則付与することとしている。なお、電子公開と著作権許諾に関する理解は、現状では国や地域で異なっており、公開された成果が不法にコピーされたりして悪用されることもありうる。このため、CC-BYライセンスの許諾範囲については、著作権者の意向を尊重して付与している。

I-3.3.6 基礎データ担当

2017年度の基礎データ担当の活動は下記の通りである。

要覧

1. 2017年度の要覧(和英対訳版)を編集, 刊行した。
2. 要覧付録の関連資料について, 日本語版及び英語版を編集, 刊行した。
3. 要覧付属の出版物目録について, 2017年度刊行分を中心に校正を行った。

ウェブサイト

4. 2017年度要覧の内容をウェブサイト(和文及び英文)にフィードバックする作業を行った。
5. ウェブサイトの更新に際して, 正確さを期すためにテストページを活用した。

年次報告書の編集

2016年度年次報告書の作成に際して協力をを行った。

I-3.3.7 広報企画担当

2017年度も昨年度同様, 広報活動のうち『FIELDPLUS』の企画・編集および企画展実施を広報企画担当が行った。

2017年度の事業の詳細は下記の通りである。

『FIELDPLUS』

AA 研の雑誌『FIELDPLUS』の企画・編集を行った。この雑誌は, 言語学, 人類学, 歴史学・地域研究を専門とする AA 研の所員や特任研究員, 研究機関研究員, 共同利用・共同研究課題をともに運営する共同研究員をはじめ, 各アカデミズムで活躍する新しい発想をもった研究者などを執筆陣に迎え, 研究の最前線を一般向けにわかりやすく伝えていこうという趣旨の雑誌である。所員 8 名を中心に構成される編集部が企画・編集を担当し, プロの編集者とグラフィックデザイナーと協力して誌面作りを行っている。2017年度は第 18 号(巻頭特集「カラハリ狩猟採集民の言語民族誌的な辞書を編む」), 第 19 号(巻頭特集「一なる神, 多様な社会一少数派から読み解く中東地域」)を制作した。

また, 第 18 号の巻頭特集に関連して, 責任編集者らによるトークイベントを以下のように実施した。

「沙漠の狩人の半世紀: ブッシュマンの伝統と変容」

出演: 中川裕(東京外国語大学), 田中二郎(京都大学名誉教授)

進行: 高松洋一(AA 研所員)

日時: 2017年7月15日(土)午後2時～5時
会場: 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) 3階大会議室
共催: 科研費基盤研究(B)「コエ・クワディ語族カラハリ・コエ語派の言語学的ドキュメンテーション」
(研究代表者: 中川 裕(東京外国語大学), 課題番号: 25300029), 科研費基盤研究(A)「稀少特徴と言語地域の音韻類型論: コイサン音韻論の貢献」(研究代表者: 中川裕(東京外国語大学), 課題番号: 16H01925)

企画展

AA研において行われているアジア・アフリカの言語と文化に関する研究の成果を広く一般に公開するために、以下の企画展を実施した。

田中二郎写真展「1970年代までの伝統的狩猟採集生活を送るブッシュマン」

会期: 2017年7月6日(木)～2017年7月28日(金)(午前11時より午後5時まで。7月9, 16, 17, 23日は休場)
会場: 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) 1階資料展示室
協力: AA研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」
共催: AA研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター, 科研費基盤研究(B)「コエ・クワディ語族カラハリ・コエ語派の言語学的ドキュメンテーション」(研究代表者: 中川 裕(東京外国語大学), 課題番号: 25300029), 科研費基盤研究(A)「稀少特徴と言語地域の音韻類型論: コイサン音韻論の貢献」(研究代表者: 中川裕(東京外国語大学), 課題番号: 16H01925)

特別展示「プレザンス・アフリケーヌ展: 超域的黒人文化運動をめぐるイメージの軌跡」

会期: 2017年8月17日(木)～8月31日(木)(午前10時より午後5時まで, 土日は休場)
会場: 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) 1階資料展示室
協力: AA研共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究—新たな政治=文化学のために」
共催: 科研費基盤研究(B)「世界文化(資本)空間の史的編成をめぐる総合的研究: アフリカ・カリブの文学を中心に」(研究代表者: 星埜守之(東京大学), 課題番号: 17H02328), 挑戦的研究(萌芽)「人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレザンス・アフリケーヌ』の複合的研究」(研究代表者: 佐久間寛(AA研), 課題番号: 17K18480), AA研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」

マルタ報道写真家写真展「エクソダス—地中海を渡る脱出—」

会期: 2018年1月30日(火)～2018年3月11日(日)(午前10時より午後5時まで, 3月11日を除き土日・祝祭日は休場)
会場: 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) 1階資料展示室
共催: フィールドサイエンス研究企画センター, 中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業), 科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)「ドイツのアラブ

I-4 研究者コミュニティと一般社会に開かれたプラットフォームの構築

I-4.1 若手研究者養成プログラム

I-4.1.1 言語研修の実施

【実施の詳細については、資料編 [II-4.1.1 言語研修の実施状況](#), [II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業](#)の項をそれぞれ参照】

言語研修は 1962 年から実施されてきた短期集中プログラムである。これまで実施した言語はのべ 137 言語、修了者数はのべ 1,259 人である。当研究所以外では扱うことのできない希少言語の運用能力・知識を身につける機会を提供することは、国内外に開かれた共同利用・共同研究拠点として行う研究者養成事業として意義あるものといえる。2017 年度は、ハンガリー語、ジャワ語(ともに東京会場)の講座を開講するとともに、短期言語研修特別企画として、史料講読研修「中国古代文書簡牘」を実施した。

研修担当では、過去の研修教材のウェブ上での公開も進めている。

I-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ

フィールド言語学ワークショップは、研究の進んでいない言語のドキュメンテーションと記述に必要なスキルを主として実習形式で学ぶ機会を提供するものである。次世代研究者育成の一環として、主に大学院生・ポスドクなどの若手研究者を対象に開催しており、日本の大学では、通常教えられていない内容を扱っているという点で、AA 研の重要な事業の一つであるといえる。

以下のワークショップを提供している。

1. 文法研究ワークショップ: フィールド調査で得る言語データに現れる、さまざまな文法事象に関して若手研究者が研究発表を行い議論を行うワークショップである。
2. テクニカル・ワークショップ: 若手研究者が、フィールドで得た言語データの管理や加工に関するスキルを実習形式で学ぶワークショップである。
3. 言語フィールド調査ワークショップ@宮古島: 言語ドキュメンテーション研究に関心のある若手研究者を対象に沖縄県宮古島市で開催する実地研修である。

I-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー

2005 年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA 研が推進してきた事業を、2010 年度より基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」が担うに当たり、「中東」と「イスラーム」とをより明確に区別すべく、「中東☆イスラーム研究セミナー」「同教育セミナー」と改称した。中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めようとしている若手研究者(大学院生以上)を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションのスキルを向上させることを目的としている。人文・社会科学分野が中心になるが、受講者の専門分野は特に限定していない。

中東☆イスラーム教育セミナーは大学院生を対象に、AA 研スタッフと招聘講師による講義、そして希望者による研究発表から構成されている。学部段階からこの研究領域に関心を持ち続けてきた院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームにそれほど深い知識を持たない院生も受け入れ、中東・イスラーム世界とさまざまな専門分野の基礎的な知識の提供、そして受講者の間の討論を通じた意見・知識の交換の場を作ることを目指している。年に 1 回の開催は従来通りである。

中東☆イスラーム研究セミナーは、それよりも一段高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期(博士課程)および博士論文の準備をしている若手研究者を対象にしている。ここでは講義は行わず、共同研究プロジェクト型の研究会形式を採用し、研究発表とそれに基づく質疑応答・討論に十分な時間を確保した機会を提供する。これを通して博士論文執筆のヒントを得たり、異なる研究分野や地域の研究者との意見交換から知識の幅を拡充したりすることが期待される。教育セミナーと同様、年に 1 回の開催である。

2017 年度においては、研究セミナーが 12 月 16～17 日に実施され、4 名の受講生が参加した。教育セミナーは 9 月 14～17 日に実施され、6 名の教員の報告と、16 名の受講者(さらに 2 名のオブザーバ参加学生)のうち 7 名の発表がなされた。詳細に関しては基幹研究「中東・イスラーム圏」のウェブサイトを参照していただきたい。そこには、受講生の感想・評価も掲載されている。なお、2006 年度より東京外国語大学大学院在学中の院生を対象に両セミナーを単位認定可能な科目として開放しているが、本年度は教育セミナー受講生の 3 名がこれに該当した。

また、これら「研究セミナー」「教育セミナー」とは別に、オスマン帝国史研究を専門とする若手研究者を中心とした研究者コミュニティに対する還元事業の一環として、2008 年度以来毎年 1 回 2 日間にわたってオスマン文書の解読・解説を行う実習型の「オスマン文書セミナー」を開催している。毎回高松洋一准教授が中心となって組織しているが、2017 年度は 2018 年 1 月 20・21 日に開催し、のべ 35 名の参加を得た。【日程や詳細については資料編 [II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況](#)の項を参照】

I-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー

2010 年度から始まった基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」における若手研究者育成事業として新たに文化／社会人類学研究セミナーを企画し、2011 年度から実施してきた。文化人類学／社会人類学／生態人類学を専門とする博士後期課程大学院生を主たる対象とし、博士論文を執筆するために必要な本研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げると共に、所属大学院とは異なる発表の場を提供することにより論文構想を具体化させることを目的としている。また、本研究セミナーは、受講

生が同じレベルの若手研究者の発表を聴き、第三のコメンテーターの役割を果たすことによる自らの論文執筆および研究の活性化、さらには所属大学院をこえた若手研究者同士の交流の機会の提供をも目指している。2015年度からは、日本文化人類学会の「次世代育成セミナー」との共催で実施している。2017年度は11月26日に開催された。所員による挨拶の後、若手支援ワークショップが開催された。若手研究者に役立つノウハウや情報の共有と意見交換を行うという目的の下、「論文投稿や博論出版等について」、「研究継続について(助成金や非常勤等の状況)」、「ライフイベントと研究のバランスについて」という3つのテーマごとにグループに分かれ、話題提供者(1~2名)と参加者のあいだで具体的かつ実践的な論議が交わされた。続いて、小田亮氏(首都大学東京)による趣旨説明を経て、学会員3名の発表に対し3名によるコメントが行われた。フロアからの質疑応答ののち、最後に所員と小田亮氏からの講評で締めくくった。参加者の合計は54名(うち外国人3名)であり、フロアからの質疑も活発に行われた。

I-4.1.5 大学院教育の現在

2008年度までは原則として東京外国語大学大学院の1研究科1専攻体制のもと、博士後期課程にのみAA研コースが学内措置として認められ、AA研所員はそのコース内で大学院教育に関与してきた。しかしながら、2009年度の東京外国語大学大学院重点化により、総合国際学研究科が発足し、2専攻(言語文化専攻・国際社会専攻)体制へと移行すると同時に、大学院博士後期課程を兼任するAA研所員はどちらかの専攻に所属することとなった。

この改組にともない、大学院博士後期課程を兼任するAA研所員は、院生を指導するほか、総合国際学研究科教授会に出席し、教務の一部に参加することとなったが、博士後期課程の在学者あるいは志願者で、AA研所員を主指導教員に希望する者はきわめて少ないのが現状である。AA研所員の大学院教育に対する関与のあり方としては、個別の院生指導を行うだけでなく、本学大学院の教育の在り方と併せて、AA研がこれまで実施してきた下記の若手研究者育成事業の総体として考えてきた。

- ・ 言語研修
- ・ フィールド言語学ワークショップ: 研修事業の一環として基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」が主催する文法研究ワークショップ、テクニカル・ワークショップ、言語フィールド調査ワークショップ@宮古島
- ・ 中東・イスラーム関連セミナー: 中東☆イスラーム研究セミナー、中東☆イスラーム教育セミナー、ペイルート若手研究者報告会、オスマン文書セミナーなど
- ・ 文化／社会人類学研究セミナー

さらに学内外の要請を受けて、平成28年度より本学大学院の博士前期課程にアジア・アフリカフィールドサイエンスプログラムを設けた。なお、本プログラムの内容を紹介するための学部生向けリレー講義「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス研究基礎」も平成28年度より開講している。

I-4.1.6 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員

研究機関研究員(旧称: 非常勤研究員)および特任研究員は、各自の研究テーマに沿った個人研究を

行うとともに、その専門分野に応じて、異なる所内組織の共同研究活動に配属され参加している。これらはAA研の若手研究者養成事業の重要な一部であり、両センターと文部科学省特別経費による「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」のほか、広報担当にも配置されてきた。2017年度は特任研究員4名、研究機関研究員3名の体制により、所内組織の多様な共同研究活動に参画させた。

また、2017年度には日本学術振興会特別研究員7名を受け入れた。【研究機関研究員、特任研究員、日本学術振興会特別研究員の業績については [I-2.6.2 所員の研究業績一覧の研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員の項](#)を参照】

I-4.2 国内連携研究活動

I-4.2.1 地域研究コンソーシアム

地域研究コンソーシアム(JCAS)は、世界諸地域の研究に関わる研究組織、教育組織、学会、さらには地域研究と密接に関わる民間組織などから成る、新しい型の組織連携で、多くの大学や研究機関などに散らばっていた地域研究の組織や研究者の団体をつなぎ、組織の枠を超えた情報交換や研究活動を進めるため、2004年4月に発足した。AA研は北海道大学スラブ研究センター(当時)、京都大学東南アジア研究所(当時)、国立民族学博物館地域研究企画交流センター(当時)とともに拠点組織として地域研究コンソーシアムの設立に貢献しただけでなく、2017年10月現在100の組織が加盟するに至った同コンソーシアムの幹事組織の一つであり、飯塚所長が理事を、石川・錦田の両所員が運営委員を務めて、組織運営の中心的役割を担っている。2017年度は理事会3回、運営委員会3回が開催され、地域研究コンソーシアムの発足以来事務局を担当してきた京都大学地域研究統合情報センター(旧国立民族学博物館地域研究企画交流センター)の東南アジア研究所との統合にともなう運営体制および活動内容の見直しを中心に議論を重ねた。その結果、2018年度以降の主要活動を、年次集会の開催・JCAS賞の審査および授与・オンラインジャーナル『地域研究』の刊行の3事業に絞ること、事務局を幹事組織が持ち回りすることなどを決定した。

I-4.2.2 国内研究者受け入れ(フェロー等)

共同利用・共同研究拠点としてのAA研は、フェロー制度をいっそう充実させて国内外の研究者に開かれた研究の場を提供すると共に、研究プロジェクトの推進を図る方針である。

2017年度は、下記の国内研究者をフェローとして15名、ジュニア・フェローとして18名受け入れた。

【詳細・業績は資料編 [II-4.2.2 国内研究者の受け入れ\(フェロー等\)](#)の項を参照】

フェロー

梅川 通久(うめかわ みちひさ)

研究主題: 定量的手法による東南アジア大陸部における社会的多階層構造の総合的分析法の確立

研究期間: 2015.9.1～2018.8.31

受入教員: 中山 俊秀

岡崎 彰(おかざき あきら)

研究主題: アフリカを中心とするポピュラー・アートの社会人類学的研究

研究期間: 2015.4.1～ 2018.3.31

受入教員: 深澤 秀夫

奥田 統己(おくだ おさみ)

研究主題: アイヌ語資料のアーカイブス化準備およびアイヌ語の記述的研究

研究期間: 2016.4.1～ 2019.3.31

受入教員: 山越 康裕

押川 文子(おしかわ ふみこ)

研究主題: 現代インドの社会変化

研究期間: 2015.4.1～2018.3.31

受入教員: 太田 信宏

川上 泰徳(かわかみ やすのり)

研究主題: ベイルートのパレスチナ難民の政治社会意識の変遷

研究期間: 2015.1.1～ 2017.12.31

受入教員: 飯塚 正人

木俣 美樹男(きまた みきお)

研究主題: 信仰環境とエコロジズムに関する比較研究

研究期間: 2014.4.1～ 2020.3.31

受入教員: 太田 信宏

古谷 伸子(こや のぶこ)

研究主題: タイにおける民間治療の社会的役割と潜在力に関する人類学的研究

研究期間: 2014.5.1～ 2020.4.30

受入教員: 西井 涼子

佐藤 久美子(さとう くみこ)

研究主題: トルコ語と日本語諸方言のイントネーション研究—意味論・統語論との相互作用の仕組みの解明に向けて

研究期間: 2016.4.1～ 2017.4.30

受入教員: 児倉 徳和

清水 昭俊(しみず あきとし)

研究主題: 戦時期・戦後期の日本の人類学(民族学・文化人類学)

研究期間: 2015.11.5～ 2018.11.4

受入教員: 西井 涼子

新谷 忠彦(しんたに ただひこ)

研究主題: 言語資料による大陸部東南アジアの歴史の解明

研究期間: 2016.4.1～ 2018.3.31

受入教員: 澤田 英夫

福島 康博(ふくしま やすひろ)

研究主題: イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究

研究期間: 2014.5.1～ 2020.4.30

受入教員: 床呂 郁哉

細谷 幸子(ほそや さちこ)

研究主題: イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶: 障害者の生きる権利をめぐる

研究期間: 2016. 4.1～ 2019.3.31

受入教員: 飯塚 正人

杜山那里・阿不都拉西木(でゆせんあいる あぶでいらしむ)

研究主題: カザフ・ハン国文書に関する研究

研究期間: 2016. 12.27～2017.12.27

受入教員: 野田 仁

中見 立夫(なかみ たつお)

研究主題: 清朝およびロシア帝国による内陸アジアにおける人口調査事業の研究

研究期間: 2017.4.1～2020.3.31

受入教員: 野田 仁

宮崎 恒二(みやざき こうじ)

研究主題: Javanese Recognition of Time and Space –An Analys of calendar and myth–

研究期間: 2017.4.1～2020.3.31

受入教員: 床呂 郁哉

ジュニア・フェロー

新谷 崇(あらや たかし)

研究主題: イタリア領東アフリカにおける植民地統治と宗教の問題 (1935～1941 年)

研究期間: 2015.4.1～2018.3.31

受入教員: 石川 博樹

池田 昭光(いけだ あきみつ)

研究主題: レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者
研究期間: 2016.4.1～2018.3.31
受入教員: 黒木 英充

海老原 志穂(えびはら しほ)
研究主題: 現代方言と文献を用いたチベット語の比較研究
研究期間: 2016.4.1～2018.3.31
受入教員: 星 泉

大島 一(おおしま はじめ)
研究主題: ハンガリー周辺地域のハンガリー語方言における言語接触
研究期間: 2015.4.1～2018.3.31
受入教員: 塩原 朝子

勝畑 冬実(かつはた ふゆみ)
研究主題: エジプト映画におけるイスラーム表象の変遷
研究期間: 2014.4.1～2018.3.31
受入教員: 飯塚 正人

小池 まり子(こいけ まりこ)
研究主題: 現代バリの社会・宗教改革運動—バリヒन्दゥー教徒の親族集団組織を事例として—
研究期間: 2016.4.1～2018.3.31
受入教員: 西井 涼子

四條 真也(しじょう まさや)
研究主題: 島嶼地域における伝統の再解釈—米国制度下のハワイにおける伝統的養取慣行に関する社会人類学的研究
研究期間: 2016.4.1～2018.3.31
受入教員: 深澤 秀夫

澁谷 俊樹(しぶや としき)
研究主題: ベンガルの民衆文化をめぐる地域研究
研究期間: 2016.4.1～2018.3.31
受入教員: 外川 昌彦

三代川 寛子(みよかわ ひろこ)
研究主題: 近代エジプトにおけるコプトのファラオ主義と人種主義
研究期間: 2017.4.1～2018.3.31
受入教員: 飯塚 正人

倉部 慶太(くらべ けいた)

研究主題: ジンポー語のアーカイビングとコーパス構築およびそれらを利用した研究

研究期間: 2017.4.1～2018.3.31

受入教員: 澤田 英夫

東風谷 太一(こちや たいち)

研究主題: 1840年代のバイエルン王国ミュンヘンで発生したビールをめぐる騒擾を都市の営業体制・権利概念・ビールと醸造業の視点から考察すること

研究期間: 2017.4.1～2018.3.31

受入教員: 佐久間 寛

生駒(集下)美樹(いこま(しゅうか) みき)

研究主題: 負債の民族誌—茶をめぐる生産者間の関係

研究期間: 2017.4.1～2018.3.31

受入教員: 西井 涼子

周 太 加(じゅくたるじゃ)

研究主題: 青海近代史

研究期間: 2015.4.1～2018.3.31

受入教員: 星 泉

加藤(山内)珠比(かとう(やまうち) たまひ)

研究主題: サブサハラアフリカの農業投入財補助金政策の歴史的変換—タンザニアを例に

研究期間: 2017.4.1～2018.3.31

受入教員: 石川 博樹

西川 和孝(にしかわ かずたか)

研究主題: 西南中国における漢族移民と経済活動の歴史について

研究期間: 2017.4.1～2018.3.31

受入教員: 澤田 英夫

小森 真樹(こもり まさき)

研究主題: 現代アメリカ合衆国における科学館の再定義: 博物館展覧会の利用実態の分析から

研究期間: 2017.4.1～2018.3.31

受入教員: 椎野 若菜

麻生 玲子(あそう れいこ)

研究主題: 琉球諸島八重山語波照間方言の記述研究: 大量のデータに対し情報技術を活用した新たな

言語研究手法の開発

研究期間: 2017.4.1～2018.3.31

受入教員: 中山 俊秀

烏云高娃(うゆんごわ)

研究主題: 近代内モンゴル知識人の文化活動

研究期間: 2016.4.1～2018.3.31

受入教員: 山越 康裕

I-4.2.3 海外調査専門委員会の活動

[I-3.2.4 海外調査専門委員会](#)の項を参照

I-4.2.4 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の活動

[I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会](#)の項を参照

I-4.2.5 フィールドネット運営委員会の活動

[I-3.2.6 フィールドネット運営委員会](#)の項を参照

I-4.2.6 四大学連合文化講演会

2017年11月24日(金)、第12回四大学連合文化講演会が「環境・社会・人間における『安全・安心』を探るー安全で安心の出来る社会～学術研究の最前線をやさしく解説する～」をテーマに、一橋講堂学術総合センターにて開催された。AA研は今回、世話役として同講演会の組織にあたった。

東京外国語大学からは、4月に開設されたばかりの現代アフリカ地域研究センターの武内進一センター長・教授が「現代アフリカの紛争と平和構築」と題した講演を行った。AA研所員以外の本学教員が四大学連合文化講演会の講演を担当したのは初めてである。

なお、本年度から講演会のための拠出金が各大学80万円に変更され、昨年までの予算額の半分になったため、日本経済新聞による広報も大幅な縮小を余儀なくされたが、結果として講演会には212名(申込数368名)の聴衆が集まり、好評のうちに幕を閉じた。2018年度は東京工業大学化学生命科学研究所が世話役となって、引き続き「安全と安心」をテーマに文化講演会を行う予定である。

I-4.3 国際連携研究活動

I-4.3.1 国際シンポジウム・ワークショップ・セミナー等

AA研は、国際的高水準にある所内共同研究の成果を国内外に発信し、海外の研究成果を迅速に取り入れ、あるいは重要な学術的課題や社会的要請の強いテーマに関する国際共同研究の場を創出することを目的として、海外の研究者を招聘する国際シンポジウム、ワークショップ、公開講演会等を積極的に開催している。2017年度においても、国際シンポジウム、国際ワークショップ、公開講演会のいずれも、著名な研究者の講演に多数の参加者を得て活発な討論を行った。【詳細は資料編 [II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧](#)の項を参照】

これら国際研究連携を目指す研究・教育活動の成果は、AA研の刊行している『アジア・アフリカ言語文化研究』や、プロジェクト出版物等の形で順次公刊している。

I-4.3.2 海外研究拠点

I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センターの項を参照

I-4.3.3 外国人研究員招聘

2017年4月から2018年3月までの期間、以下の4名を招聘した。【2017年度中に招聘期間を終えた外国人研究員の業績は [I-2.6.2 所員の研究業績一覧の外国人研究員の項](#)を参照】

スララッデチャ スミットラ SUMITTRA, Suraratdecha

タイ王国 Kingdom of Thailand

滞在時間: 2018(平成30)年1月1日～2018(平成30)7月15日

研究課題主題: 「持続可能な言語・文化再生における言語ドキュメンテーションと若年層の参加に関する研究」 Language documentation and youth participation in sustainable language and culture reclamation development

孫 伯君 SUN, Bojun

中華人民共和国 People's Republic of China

滞在期間: 2017(平成29)年12月1日～2018(平成30)年3月31日

研究課題主題: 「カラホト出土西夏文『三代属明言集』の研究」 Studies on the Tangut text of collection of explicit opinion belong to three generations excavated Khara-Khoto

劉 釗 LIU, Zhao

中華人民共和国 People's Republic of China

滞在期間: 2017(平成 29)年 11 月 1 日～2018(平成 30)年 2 月 28 日

研究課題主題: 「長沙馬王堆漢墓帛書字詞研究—『相馬経』を中心として」 Semantic approach on silk texts from the Han tomb of Mawangdui, Changsha, with an emphasis on the Xiangmajing,

ユーイング マイケル カーター EWING, Michael Carter

アメリカ合衆国 United States of America

滞在期間: 2017(平成 29)年 11 月 1 日～2018(平成 30)年 6 月 30 日

研究課題主題: 「現代インドネシア語における社会的社会的行為と文法の関係の研究」 Social action and the grammar(s) of contemporary Indonesian

I-4.3.4 外国からの研究者受け入れ(フェロー等)

2017 年度は次の外国研究者のうち, 1 名をフェローとして, また 2 名をジュニア・フェローとして受け入れた。【詳細は, 資料編 [II-4.3.3 外国研究者受け入れ\(フェロー等\)](#)を参照】

フェロー

デュセンアイルアブディラシム 杜山那里 阿不都拉西木

所属: 中国・中央民族大学哈薩(薩)克語(語)言文学系・准教授

研究主題: カザフ・ハン国文書に関する研究 Socialism in the Age of Empire: The Japanese Left and the Russian Revolution (1905–1925)

研究期間: 2016.12.27.～2017.12.27.

受入教員: 野田 仁

ジュニア・フェロー

烏雲高娃 Wuyungaowa

研究主題: 近代内モンゴル知識人の文化活動

研究期間: 2016.4.1.～2018.3.31.

受入教員: 山越 康裕

ジュクタルジャ 周 太加

研究主題: 青海近代史—アムドにおけるチベット人の文化活動を手掛かりとして

研究期間: 2015.4.1.～2018.3.31.

受入教員: 星 泉

共同利用・共同研究拠点としての AA 研は, 国際的な共同研究拠点として更なる充実を目指しており, 外国人フェロー, ジュニア・フェローや短期招聘研究者を通して, 国際共同研究をいっそう発展させてゆく必要がある。

その点において本年度は, おおむねその目的を達成したと考えられる。

I-4.3.5 海外学術機関との研究協力協定

オランダ王立言語・地理・民族学研究所 (KITLV) Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies

2014 年に AA 研との間で学術協力に関する協定を締結し、ジャワ文書研究等を中心とするインドネシア研究の共同研究を進めている。2017 年度には共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2):ジャワのイスラーム化再考」において KITLV 所属の Willem van der Molen 博士を共同研究員に迎え共同研究を行った。また、Willem van der Molen 博士は 2017 年度言語研修「古ジャワ語」フォローアップミーティングの講師も務めた。

アトマ・ジャヤ・インドネシア・カソリック大学 Atma Jaya Catholic University of Indonesia

共同編集による学術雑誌 NUSA の第 61, 62, 63 号を 2016 年 9 月付け、2017 年 3 月付けで刊行した。編集委員会は東京外国語大学(AA 研所員も含む)3 名, AA 研共同研究員 4 名, アトマ・ジャヤ・インドネシア・カソリック大学教員 4 名他からなる。また、インドネシアのヌサ・チュンダナ大学(クーパーン)で AA 研が主催した言語ドキュメンテーションに関する国際ワークショップ(2017/10/05(木)~2017/10/06(金))にアトマ・ジャヤ大学の教員 Yanti 氏を招聘し講師を依頼するなどして研究交流を行った。さらに、Yanti 博士を AA 研に2度招聘し、共同研究・研究発表を行った。

インドネシア科学院社会文化研究センター(PMB-LIPI) Pusat Penelitian Kemasyarakatan dan Kebudayaan

PMB-LIPI に所属する Katubi 研究員とインドネシアの少数言語の一つ Kui 語に関する共同研究を行った。

オーストリア科学アカデミー(AAS) Austrian Academy of Sciences

2006 年に刊行したジネンドラブッディの『プラマーナサムッチャヤティーカー』第一章の KWIC 索引の続編の作成に向けての検討などを行なった。

サバ開発研究所(IDS) Institute For Development Studies (SABAH)

サバ開発研究所 (IDS) との MoU に基づき設置されたコタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)の主催により日本人研究者による現地講演会 3 件, ならびに日本人とマレーシア人研究者らによる国際ワークショップ 1 件と交換講演会 1 件をコタキナバルで実施した。<http://www.ids.org.my/current/index.htm>

ゾンカ語発展委員会(DDC) the Dzongkha Development Commission

2013 年 8 月に DDC と AA 研との間で学術協力に関する申し合わせ覚書(MoU)を取り交わした。2017 年度には実質的な共同研究活動は実施されなかったが、ゾンカ語発展委員会が 2011 年に出版したゾンカ語・英語辞典をもとにした電子辞典を町田和彦所員が中心となって開発し、現在 IRC のサーバを利用して公開中である。<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2011/Dzongkha2011.htm>

中国チベット学研究センター(CTRC) China Tibetology Research Center

2017 年 10 月に CTRC と AA 研との間で学術協力に関する申し合わせ覚書(MoU)を取り交わした。この協定に基づき、CTRC 所属の研究者と AA 研所員および共同研究員との国際共同研究の計画を立案中である。

レバノン大学人文科学部第 1 部 (FHS-I-LU) Faculty of Human Sciences, Branch I, Lebanese University

同大学名誉教授 Massoud Daher 博士からは、JaCMES 諮問委員の一人として JaCMES の活動全般についての助言を受け、他の同大学教授らと交えた非公式の懇談会の場でも研究活動全般に関して情報と助言を受けた。

ベイルート・アメリカン大学 American University of Beirut (AUB)

同大学教授 Abdul-Rahim Abu-Husayn 教授には JaCMES 諮問委員を委嘱し、JaCMES の活動全般についての助言を受けた。また同大学の Maher Jarrar 教授、Ahmad Moussalli 教授、Pierre Mouganie 助教には、JaCMES 若手研究者報告会(2017年11月29日)にてコメンテーターの担当を依頼した。

ベイルート・オリエント研究所(ドイツ研究所) Orient Institut-Beirut

同研究所とフランス近東研究所 Institut Français du Proche-Orient 主催のオスマン文書研究サマースクール Summer School: Reading and Analyzing Ottoman Manuscript Sources(2017年8月27-30日)に岩本佳子、藻谷悠介の両名を派遣することにより後援した。

I-4.3.6 研究未開発言語文化の調査事業

アジア・アフリカを中心とした言語態、地域生成、文化の伝承と形成に関する基礎研究を推進する為に、研究者をアジア・アフリカの各地に派遣し、研究未開発言語文化の研究資源化を推進するとともに、現地研究機関との共同研究体制を整備することを目的とする事業であった「助手投入制度」を見直し、2005年度からそれを発展的に継承した事業である。派遣対象を助手(現助教)に限定せず、所員、研究機関研究員、共同研究員等へと拡大し、研究所の事業計画に基づき柔軟に対応できる態勢にして、2009年度には4名を海外調査に派遣した。2011年度からは「言語研修のための資料収集を目的とした派遣」と「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト」(2016年度からはその後継事業である基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」)の活動の一環としての共同利用・共同研究課題遂行を目的とした共同研究員の派遣の二者に特化して実施することになった。前者に関しては状況に応じて海外からの招へいも行うこととした。その変更に伴い、2017年度には「言語研修のための資料収集を目的とした招聘」に関して1名、基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」に関しては延べ12名の派遣を実施した。【派遣実施の詳細について「言語研修のための資料収集を目的とした派遣・招聘」は資料編 [II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業](#)、基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」に関する派遣については [II-3.3.1](#) の項を参照】

I-4.3.7 その他外部資金による国際連携研究

実施の詳細については [I-2.7.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」](#) および [I-2.7.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」](#) の項を参照

I-4.4 研究成果の国内外への公開

I-4.4.1 AA 研フォーラムの実施

本研究所では設立以来、所員および外国人客員研究員がそれぞれの研究成果を口頭で発表する「所内研究会」を開催してきた。その目的は、所員・客員研究員の個人研究に関する所内での相互理解を深め、新たな共同研究の芽を育てていくこと、また質疑応答を通じて研究の一層の深化・発展を図ることにあった。2003年度には研究所改革の一環として、名称を所内研究会から AA 研フォーラムに変更した。発表者を非常勤研究員、内地留学者、フェロー、短期訪問者などにも広げる一方、フォーラム自体を所外に開放し、公開性を高めて今日に至っている。また、2011年度からの新しい試みとして、複数の所員が最新の自身の研究成果および知見を他分野の研究者にもわかりやすい形で紹介する企画も行っている。本年度は所員 6 名、AA 研フェロー 1 名（言語研修の一環としてのフォーラムでの講演）、所外の研究者 3 名（言語研修の一環としてのフォーラムでの講演）で、計 6 回のフォーラムを開催した。【詳細は、資料編 [II-4.2.5 シンポジウム等](#)の項を参照。1月に開催した AA 研フォーラム・全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」に関しては同じく資料編 [II-3.3.1](#)を参照】

I-4.4.2 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣

グローバル化の進展やアジアの著しい経済成長、またアジア・アフリカにおける民族・宗教対立の深刻化など、社会環境や国際情勢の変化にともなって、本研究所の研究蓄積の公開に対して一般社会から寄せられる期待は、年々高まっている。このような期待に応えるために、2017年度も、学会、法務省や警察庁などの各種官公庁、府中市、調布市等の主催する公開セミナー、講演会、公開講座等に所員が出講し、さらに東京外国語大学連携講座、調布市内・近隣大学等公開講座にも所員が出講した。また、AA 研自ら主催したのもとして、各種の基幹研究公開講演、フィールドネット・ラウンジ、FIELDPLUS caféなどを開催した一方、東京四大学連合文化講演会「環境・社会・人間における『安全・安心』を探る ―安全で安心の出来る社会― ～学術研究の最前線をやさしく解説する～」(一橋講堂 2017年11月24日)を共催して、所員が講演を行った。【詳細は、[I-4.2.6 四大学連合文化講演会](#)および、資料編 [II-4.4.3 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣](#)の項を参照】

I-4.4.3 出版および広報

- ・ 出版については、[I-3.3.5 出版担当](#)を参照。
- ・ 広報については、[I-3.3.7 広報企画担当](#)を参照。

I-4.4.4 収集資料等の展示・公開

田中二郎写真展「1970年代までの伝統的狩猟採集生活を送るブッシュマン」

2017年7月6日(木)～7月28日(金)

http://www.aa.tufs.ac.jp/images/exhibition/aa_jirotanaka_poster1.pdf

http://www.aa.tufs.ac.jp/images/exhibition/aa_jirotanaka_poster.pdf

特別展示「プレザンス・アフリケーヌ展: 超域的黒人文化運動をめぐるイメージの軌跡」

2017年8月17日(木)～8月31日(木)

http://www.aa.tufs.ac.jp/images/exhibition/aa_presenceafricaine2017_leaflet.pdf

マルタ報道写真家写真展「エクソダスー地中海を渡る脱出ー」

2018年1月30日(火)～3月11日(日)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/images/exhibition/exodusA4omote2018.pdf>

上記については、[I-3.3.7 広報企画担当](#)を参照。

I-5 成果と課題

I-5.1 2017年度の成果

本研究所における本年度の主な成果は以下の通りである。

1. 本研究所では、研究所として重点をおく領域を明確にすることの重要性を幾度か議論してきたが、共同利用・共同研究拠点として認定された際に通達された「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という意見(2009年6月25日付)にも応えるべく、第2期中期目標期間の始まった2010年度に4つの基幹研究を発足させた(基幹研究の立ち上げに至る経緯の詳細については、I-2.2.1 概要の項を参照)。さらに、2016年度から始まった第3期中期目標期間を前に、所内の研究戦略策定委員会を中心に将来構想を練り直した結果、第3期中期目標期間の開始と同時に、プロジェクト研究部をこれまでの5研究ユニットから言語学、文化人類学、地域研究・歴史学の3研究ユニットに再編のうえ、基幹研究も各研究ユニットの重点研究テーマを明確にする形で「多言語多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(言語学)、「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究ー人類学におけるミクローマクロ系の連関2」(人類学)、「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」(歴史・地域)の3つに再編した。併せて2016年度には、急速に複雑化・深刻化するアジア・アフリカの現代的諸問題に対応するため、本研究所がこれまで研究分野別に進めてきた研究を有機的に関連させて質的に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した問題解決のための研究体制を構築すべく、特別経費による全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」を新たに始動。2017年度も順

調に、年度当初の計画に則った基幹研究事業、全所プロジェクト事業を展開した。

2. 本研究所の2つの海外研究拠点、中東研究日本センター(ベイルート)及びコタキナバル・リエゾンオフィスにおいて、臨地共同研究が順調に推進され、よりいっそう国際共同利用・共同研究機能が強化された。2014年6月にレバノンの隣国であるシリアからイラクにまたがる形で建国された、いわゆる「イスラム国」は2017年に入って急速に弱体化したものの、シリア内戦の行く末を含め、中東情勢が相変わらず予断を許さないなか、2017年度も特任研究員1名をベイルートに常駐させて、中東研究日本センターの管理・研究・調査に当たらせた。

3. 2016年度に新規採択された頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」が2年目を迎え、学内および連携機関の名古屋大学から4名の若手研究者を海外連携機関(メルボルン大学、ナンヤン工科大学(NTU)、ロンドン大学 SOAS)に派遣するとともに、海外連携機関(オーストラリア国立大学、メルボルン大学、NTU、ロンドン大学 SOAS)から6名の研究者を招聘して、(1)データアーカイブ、(2)言語コーパス構築、(3)言語の通時的变化・分岐に関する研究、(4)言語コーパスを用いた理論的研究を推進した。

4. 共同利用・共同研究課題28件が総計657名(延べ数)の共同研究員の参画を得て、活発に展開された。なお、本年度も研究所が著しい財源難を脱し得なかったことから、それぞれの共同利用・共同研究課題が研究会を開催するための旅費に上限を設けざるを得なかったが、所員・共同研究員の絶大な尽力・協力を得て、いずれの研究課題も計画どおり遂行された。また、旅費が年度途中で不足した4つの共同利用・共同研究課題については、秋の補正予算で要求額を100%追加配分している。

5. 2018年度から新規に開始する共同利用・共同研究課題の公募を行った。応募のあった共同利用・共同研究課題10件の研究代表が10月21日に開催された共同利用・共同研究課題審査会でプレゼンを行い、共同研究専門委員会による審査の結果、10件すべてが採択された。また、拠点期末評価におけるコメント、具体的には国際共同研究の成果増大と研究成果のさらなる質の向上を目指して、2016年度から新たに公募を開始した共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)にも3件、従来の短期共同研究員制度を改革して今年度から公募を始めた共同利用・共同研究課題(短期滞在型)にも3件の応募があり、共同研究専門委員会の審査を経て、それぞれすべてが採択された。ただし、共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)1件は2019年4月から実施するため、2018年度中に実施される新規採択課題は計15件となる。

6. これまでに対外的に形成されてきた二つの研究拠点、すなわちアジア書字コーパス拠点及び中東イスラーム研究拠点は既形成拠点として、それぞれの研究活動を継続している。特に中東イスラーム研究拠点は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構(NIHU)が2016年度以来取り組んでいるネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」(中心テーマ「地球規模の変動下における中東の人間と文化—多元的価値共創社会をめざして」)の副中心拠点として、「人間の移動・交流によるネットワークの構築と国家・社会・宗教の変容」という担当テーマの下、中心拠点である国立民族学博物館を始めとする全国の4機関と連携しながら、中東・イスラーム研究の発展に尽力した。

7. 言語研修事業など、運営費交付金に基づく研究・研修事業が順調に進められた。

8. 東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士前期課程の改組にともない、本研究所が2016年度から提供し始めた「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス・プログラム」を今年度も継続した。併せて、春学期に学部学生向けのイントロダクション「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス研究基礎」(リレー講義)も提供した。

I-5.2 課題と展望

本研究所は1964年の創設以来、アジア・アフリカの言語・文化・歴史を調査・研究する先端的な研究機関として、また人文・社会系では唯一の全国共同利用研究所として、揺らぐことのない一連の重要な研究活動を展開してきた。しかし、2009年度をもって全国共同利用制度が終わりを告げ、2010年度以降は本研究所も他の多数の共同利用・共同研究拠点との競争にさらされている。そのうえ、2013年11月には文部科学省から「国立大学改革プラン」が提示され、2016年度の第3期中期目標期間開始を前に、2013～2015年度が「改革加速期間」と位置付けられるなか、共同利用・共同研究体制についても、科学技術・学術審議会研究環境基盤部会が今後のあるべき姿を探り、改革に向けた体制の見直しを再検討した審議の報告書「共同利用・共同研究体制の強化に向けて」が2014年度末に公表された。

そこでは、「最先端の研究動向を踏まえる観点から、時限を設けて組織・体制の全面的見直しを検討すること」「IR(インスティテューショナル・リサーチ)機能の強化」「広報体制(専門部署の設置、人員の適切な配置)の整備を進めるとともに、自ら研究機関が情報発信を行う意義や目的を、研究機関の基本方針として明確に定めること」「体制整備に当たっては、研究成果を魅力的に、かつ等身大に発信するマネジメントができる人材を配置することや、各機関等の長が主導し組織としての広報体制を整備すること」「国際公募を実施し、待遇面等について柔軟な人事制度を整えることにより、国内外から卓越した研究者を集め、国際的な研究環境を目指すこと」「特に、海外の研究者向けの国際広報(報道発表や研究所の成果の英語での時宜に適った発信、海外の有力な学術誌等に対し研究成果をアピールできる人材の確保など)を充実させ、国際共同研究の萌芽を着実に育てること」「共同利用・共同研究体制を構成する人事制度(具体的には、内部昇格の制限、シニアポストへの任期制の導入、若手研究者確保に向けたテニュアトラック制度の導入、女性研究者支援のための育児施設の確保、外国人研究者に対するソフト面での支援充実、クロスアポイントメント制度の活用、寄付講座の導入など)を、オープンかつ各機関等の実態に適合した形で、自らルール化し、導入すること」等々、極めて広範な「改革」が求められており、財源の制約はあるにしても、本研究所としても可能なかぎり、こうした提言に対応して行かなくてはならない。

本研究所は、2015年度に実施された過去6年間の期末評価を経て、2016年度から始まる国立大学法人第3期も共同利用・共同研究拠点に認定されたが、その際に提出を求められた期末評価用調書では、「第3期中期目標期間に向けた評価」として、「拠点を置く大学(法人)の機能強化・特色化への関わり」を記載することが義務づけられており、本研究所も国際化や大学院教育、人材の流動化などの側面で東京外国語大学の機能強化・特色化への貢献を明白に求められるようになっている。これにより、大学の垣根を越えた共同利用・共同研究拠点としての本研究所の活動がいささかも揺らぐことはないものの、他方でそれらもまた共同利用・共同研究拠点の条件とされ始めた以上、本研究所も東京外国語大学の機能強化・特色化のために一定の貢献をしなくてはならない。2018年度に再び実施される共同利用・共同研究拠点の中間評価では、これまでの絶対評価に代わって、S=20%、A=50%、B・C=30%を目安にした相対評価が導入されることになっており、共同利用・共同研究拠点間の競争は否応なく激化せざるを得ないが、2018年3月に文部科学省から送付を受けた中間評価用調書でも、「拠点を置く大学(法人)の機能強化・特色化への関わり」の記載は引き続き求められており、この点は、国立大学法人第3期における本研究所の大きな課題となっている。

とはいえ、こうした外部環境の劇的な変化を別にしても、今日、本研究所はさらなる発展のために、真剣に検討すべきいくつかの課題を抱えている。

1. 本研究所では、基幹研究を立ち上げてから、それまで以上に新規採用にあたって、必要とする人材の

プロフィールについて所内での議論、合意を経て、優れた人材が確保されるように慎重に努力を積み重ねてきた。また、任期付きとなった助教職にはテニュアトラック制度を導入し、2009年度から実施するとともに、制度の改善にも努めている。しかしながら法人化以後、国立大学法人の人件費削減状況は年々厳しさを増していることから、人事採用が行われる機会は従前より減少しており、必要な人材の確保に関して所内合意を形成することも困難になりつつある。2013年度に大学執行部が人件費をポイントに換算して各部局に割り当てる制度を導入したことで、他部局との人件費の切り分けはクリアになり、研究所として長期的な人事配置方針を策定することが可能になった結果、2017年度も助教2名の新規採用人事を進めることができたものの、2018年の初頭には、大学財政が極めて深刻化する3年後を睨んで、大学当局が各部局に人件費ポイントの大幅な圧縮を要請。当研究所も2019年度からの3年間で教授2名分に相当する2000ポイントを削減されることになったため、今後はますます人事採用をめぐる難しい判断を迫られるようになるだろう。もちろん、本研究所にとって、いかなる状況にあっても優れた研究者の確保と研究環境の改善が極めて重要な課題であることに変わりはなく、少ない採用機会を有効に使って優秀な人材を確保するため、目先の利益の追求に走ることなく、より大局的な視点に立って所内合意を形成していくことがますます重要になる。このため、本研究所では2017年10月以来、所内の研究戦略策定委員会に全所員が参加する形の拡大研究戦略策定委員会において、今後10年単位の長期的な将来計画を検討し始めたが、この作業を通じて何より、研究所の長期的な人事配置方針に関する所内合意を形成しなくてはならない。

2. 国立大学法人の第1期中期目標期間および第2期中期目標期間における本研究所の財政基盤は、文部科学省の特別経費に依存するところが大きかった。第3期中期目標期間にあっても、この構図は基本的に変わりようがないものの、2018年度の特別経費(プロジェクト分)が突如すべての共同利用・共同研究拠点で一律、前年度比26%の削減を受けるなど、今後も予算の先細りが予想されることから、より明確かつ具体的な研究の方向性と重点領域を設定して、競争的経費の獲得に挑み続ける必要があるだろう。本研究所が附置されている東京外国語大学はもともと単独で生き残れるだけの財政基盤を欠いており、法人化以来すべての国立大学法人が毎年1%ずつ運営費交付金を削減される苦境のなか、本研究所の予算(法人化時)の6割を大学に移す/奪うことで、なんとか経営破綻を免れてきた。したがって、本研究所が東京外国語大学に財政支援を期待することは現実的でなく、これ以上大学に搾取されない努力は不可欠であるにしても、自らの苦境を脱するためには競争的経費を獲得し続けるしかないと思われる。

3. 本研究所が2009年6月25日付で「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として認定された際に通達された「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という、拠点認定の審議における意見を真摯に受け止めなければならない。2010年2月に本研究所が基幹研究を策定したことは、この意見に対する一つの回答であったが、本研究所は2015年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価結果でも、「今後は、研究所全体としての特徴を明確にすることが期待される」とのコメントを通達された。これを受けて本研究所では早速、所内の研究戦略策定委員会を中心に研究戦略を見直し、外から見て研究所の「顔」がわかるような研究体制を構築するための所内組織改編に取り組んだ結果、2016年度以降はプロジェクト研究部をこれまでの5研究ユニットから言語学、文化人類学、地域研究・歴史学の3研究ユニットに再編し、基幹研究も各研究ユニットの重点研究テーマを明らかにするような形で設定し直したが、研究所の組織・体制に関しては、今後も不断に見直す努力が不可欠である。

4. 研究所の直面している極めて厳しい予算状況を踏まえ、外国人研究員のあり方についても不断の見直しが必要となろう。2010年に共同利用・共同研究拠点に移行したのを機に、2011年度以降は採択済みの

共同利用・共同研究課題に貢献できる外国人研究員を公募する方針を採ってきたが、2015 年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価における「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討することが期待される」とのコメントを踏まえ、2016 年度には外国人研究員と共同利用・共同研究課題との関係を再検討して、新たに「共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)」の公募に踏み切ることとした。この方針転換が国際共同研究の研究成果増大に直結するかどうかは予断を許さないが、改革が実を結ぶことを期待したい。

5. 本研究所が「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として国際連携を推進するのは当然であり、2つの海外拠点(ベイルート、コタキナバル)の強化・発展はもとより、アジア・アフリカ地域の研究機関との交流、連携の模索や協力の可能性を常に追求してきてはいるものの、すでに述べたように、共同利用・共同研究拠点の期末評価結果では「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討する……ことが期待される」とのコメントを受けた。そうである以上、今後はこうした国際連携もまた、優れた研究成果につなげるべく、いっそう意識的な取組を推進しなくてはならない。2018 年度には文部科学省が新たに、国際的にも有用かつ質の高い研究資源等を最大限活用し、国際的な共同利用・共同研究を行う拠点を「国際共同利用・共同研究拠点」として認定して、重点支援する制度を導入することが決まっており、本研究所も認定申請する予定であるが、この申請準備などを通じて、本研究所の国際的なプレゼンスをいっそう向上させる戦略・構想を練り直すべきだろう。

6. 同じく 2015 年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価結果において、本研究所は 2013 年度に行われた中間評価結果のフォローアップ状況について「具体的な改善措置が取られている点は一定の評価が出来るが、応募件数が大きく伸びているとは言い難く、引き続き、更なる質の向上に努めることが望まれる」という厳しい評価を下された。本研究所では、この期末評価のコメントを踏まえて、共同研究課題の応募を増やすべく、制度の改編に取り組んだ結果、2016 年度には前年の 1.5 倍の応募を得ることができ、2017 年度も引き続き多くの応募を得ることができたが、今後も共同研究課題制度が研究者コミュニティのニーズをよりいっそう反映し得るような方策を検討し、共同研究が質量ともに充実していくように努める必要がある。

7. 2013 年度に研究所全体の活動を見直すべく実施した外部評価で指摘された「修士課程・博士課程を一貫した大学院教育の実施、研究所の特色を生かした、東京外国語大学の大学院教育への参加、あるいは AA 研でしか教育できない特徴を打ち出し、独自の「学位プログラム」の構築等、主体的関与の方策」を検討すべし、という提言を真摯に受け止め、今後の大学院教育との関わりを深化させて行く必要もある。本研究所はこれまでも、言語研修や中東☆イスラーム関係セミナーを学部・大学院科目として開講することで東京外国語大学の人材育成に貢献してきたが、2016 年度に実施された大学院前期課程の改組にあたっては、これまで博士後期課程にのみ関わってきた研究所が新たに「アジア・アフリカ・フィールドサイエンスプログラム」を提供して、東京外国語大学の人材育成に貢献することとなった。また、2018 年度に予定されている大学院博士後期課程の改組にあたっては、所員の有資格者全員が博士後期課程を担当することも決まっている。しかしながら、東京外国語大学大学院の枠内で AA 研が独自の修士課程・博士課程一貫コースや「学位プログラム」を持つことは事実上不可能なこともすでに明らかになっており、研究所の特色を生かした大学院教育を今後いかに展開して行くべきか、引き続き検討しなくてはならないだろう。

II 資料編

II-1 年表

- 1961年(昭和36年) 日本学術会議が本研究所を設置するよう勧告
- 1964年(昭和39年) 4月 東京外国語大学附置の共同利用研究所として発足
言語文化第一, インドシナ第一, アフリカ第一部門設置
- 1965年(昭和40年) インド第一部門設置
- 1966年(昭和41年) 東北アジア, アラビア部門設置
- 1967年(昭和42年) 4月 『通信』第1号発刊
2号館竣工(西側半分)AA研4, 5, 6階に入る
言語文化第二, インドネシア・オセアニア部門設置
共同研究プロジェクトを組織
研究未開発地域の言語文化修得のための助手等のアジア・アフリカへの派遣開始
この年から1973年まで「実験的言語研修」実施
『叢書』第1冊発行
- 1968年(昭和43年) 4月 2号館増築完成
中国第一部門設置
『アジア・アフリカ言語文化研究』(通称『ジャーナル』)発刊
AA研教授会規程制定(教授会正式発足)
- 1969年(昭和44年) インドシナ第二部門設置
- 1971年(昭和46年) トルコ・ウラル部門設置
- 1972年(昭和47年) イラン部門設置
- 1974年(昭和49年) 言語研修事業費が予算化, 東京会場で二言語開始
創立10周年記念式典, 講演会開催
- 1976年(昭和51年) 言語研修, 関西会場で1言語の研修開始
- 1978年(昭和53年) 1月 メインフレーム・コンピュータ(HITAC M-150)を導入
インド第二部門設置

- 1979年(昭和54年) 言語文化第三, 中国第二部門設置
公募による短期共同研究員受け入れ開始
- 1981年(昭和56年) 言語研修, この年以降 226 時間から 150 時間に変更
- 1982年(昭和57年) モンゴル・シベリア部門設置
- 1987年(昭和62年) アフリカ第二部門設置
- 1991年(平成3年) 4月 4 大部門制への改組
- 1992年(平成4年) 4月 大学院地域文化研究科博士後期課程設置, 所員 15 名が兼担
- 1993年(平成5年) UNIX ワークステーションのサブシステムをメインフレームに付加する形で導入
インターネットの利用開始
- 1994年(平成6年) 創立 30 周年記念式典, 講演会, シンポジウム, 公開セミナー開催
- 1995年(平成7年) 4月 「中核的研究機関支援プログラム」による卓越した研究拠点(COE)に指定
創立 30 周年記念公開講座開催
- 1997年(平成9年) 4月 情報資源利用研究センター, AA 研に付属する形で設置(教官, 客員教官
純増各 1 名, 教官振替増 4 名)
- 1998年(平成10年) 4月 情報資源利用研究センター運営費予算化
- 2000年(平成12年) 4月 事務一元化により事務部が廃止され, 事務局研究協力課が事務を担当
- 2001年(平成13年) 6月 中核的研究拠点形成(COE)プログラムとして「アジア書字コーパス拠点」が
認定(～2005 年度)
- 2002年(平成14年) 2月 西ヶ原から府中キャンパスへ移転
7月 科学研究費特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」(文化資源学)採択(～2006 年度)
- 2004年(平成16年) 4月 東京外国語大学, 国立大学法人になる
- 2005年(平成17年) 4月 複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置
4月 フィールドサイエンス研究企画センターを設置
4月 中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始(～2009 年度)
- 2006年(平成18年) 2月 中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設
10月 文部科学省委託研究・世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業「東南アジアのイスラーム」を開始(～2010 年度)

- 2007年(平成19年) 4月 副所長職を設置
- 2008年(平成20年) 3月 コタキナバル・リエゾンオフィスをマレーシア・サバ州のコタキナバルに開設
- 4月 文部科学省特別経費によるプロジェクト「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」を開始(～2012年度)
- 2009年(平成21年) 6月 共同利用・共同研究拠点として認定される(2010年4月から6年間)。2009年度をもってこれまで55年間続いた「全国共同利用」という制度が廃止される
- 2010年(平成22年) 4月 文部科学省により認定された共同利用・共同研究拠点(拠点名: アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究拠点)に移行
- 2012年(平成24年) 4月 国立大学附置研究所・センター長会議会長機関を担当(～2013年3月)
- 2013年(平成25年) 文部科学省特別経費により「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開: プロジェクト(LingDy2)」を開始
- 2014年(平成26年) 10月 創立50周年記念講演・シンポジウム・記念式典, 関連諸事業を実施
- 2016年(平成28年) 研究組織のうちプロジェクト研究部を3研究ユニット(言語学研究ユニット, 地域研究・歴史学研究ユニット, 文化人類学研究ユニット)に改編
- 全所プロジェクトとして特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」(2016—21年度)を開始
- 下記3基幹研究プロジェクトを開始
- ・基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3 Project)
 - ・基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」
 - ・基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」
- 『頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム』『危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築』採択(～2018年度)
- 「中東イスラーム研究拠点」にて人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」を開始

II-2 予算・組織・機構

II-2.1 研究所の予算

II-2.1.1 2017 年度予算

項目	金額(単位: 千円)	備考
運営費交付金	192,515	常勤職員人件費を除く
科学研究費補助金	148,940	間接経費を除く
受託研究・受託事業等	50,026	間接経費を除く
寄付金等	0	

II-2.1.2 運営費交付金(2017 年度)

2017(平成 29)年度 運営費交付金予算額(常勤職員人件費を除く)

区分	予算額 (千円)	
一般経費(研究費)	86,102	
特別経費	アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究	16,677
	アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築	66,191
学長裁量経費	23,545	
計	192,515	

2017(平成 29)年度 運営費交付金予算額配分状況

経費名	配分額(千円)	
個人研究費	9,130	
客員研究費	1,110	
基幹研究	多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築	*40,377
	同上(学長裁量経費)	3,713
	アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるミクロ・マクロ系の関連 2	*7,281
	同上(学長裁量経費)	1,769
	中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景	*18,533
同上(学長裁量経費)	4,843	

既形成拠点	アジア書字コーパス拠点(GICAS)	800
IRC 経費		11,500
FSC 経費		1,690
言語研修経費(学長裁量経費)		6,838
成果等刊行経費		*7,760
広報企画経費		4,800
基礎データ経費		1,500
共同利用・共同研究課題経費		*5,840
文献資料経費		10,000
共通経費		2,500
国際研究集会(学長裁量経費)		3,382
海外学術調査フォーラム経費		1,200
地域研究コンソーシアム		890
外部委員経費		*1,975
会議等経費		400
所長裁量経費		2,000
研究機関研究員／特任研究員人件費		*14,500
外国人研究員人件費(招へい・帰国旅費含む)		*18,705
派遣職員／非常勤職員経費		8,945
予備費		534
計		192,515

補足:「*」を付した項目は、その一部あるいはすべてを特別経費により実施する。

II-2.1.3 科学研究費補助金

以下の金額は、直接経費のみ(間接経費は除く)。

	研究種目	予算額(千円)
科学研究費補助金	基盤研究(A)(海外, 一般含む)(4件)	31,000
	基盤研究(B)(海外, 一般含む)(12件)	44,200
	基盤研究(C)(23件)	19,550
	挑戦的萌芽研究(1件)	1,000
	若手研究(A)(1件)	1,900
	若手研究(B)(8件)	6,400
	研究活動スタート支援(2件)	2,000
	研究成果公開促進費(4件)	14,800
	国際共同研究加速基金(2件)*	20,700

	特別研究員奨励費(7件)	7,390
	計 64 件	148,940

II-2.1.4 受託研究・受託事業等

以下の金額は、直接経費のみ(間接経費除く)。

代表者氏名	機関	研究テーマ	実施期間	受入金額(千円)
近藤信彰	人間文化研究機構	【現代中東地域研究推進事業】人間の移動・交流によるネットワークの構築	H28(2016).4.1 ～ H34(2022).3.31	6,990
椎野若菜	日本学術振興会	【二国間交流事業】ウガンダにおける「家族」の多様化と再編力についての研究：格差に対抗する潜在力分析	H28(2016).4.1 ～ H30(2018).3.31	2,384
外川昌彦	日本学術振興会	【二国間交流事業】ブッダガヤへの日本の巡礼者－インドにおける仏教復興運動と日印交流	H28(2016).9.1 ～ H30(2018).8.31	960
峰岸真琴	モリサワ文研(株)	諸外国文字フォントの評価監修		2,462
中山俊秀	日本学術振興会	頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」	H28(2016).10.1 ～ H31(2019).3.31	37,230
			計	50,026

II-2.1.5 寄付金等

今年度は該当なし。

II-2.2 外部委員リスト

II-2.2.1 運営委員会

任期:2017年4月1日～2019年3月31日

氏名	所属	職名
井野瀬久美恵	甲南大学文学部	教授
宇山 智彦	北海道大学スラブ研究センター	教授
梶 茂樹	京都産業大学	教授
小林 正人	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
佐藤 洋一郎	人間文化研究機構	理事
清水 展	京都大学	名誉教授
棚橋 訓	お茶の水女子大学教育学部	教授
西尾 哲夫	国立民族学博物館	教授
渡邊 興亜	総合研究大学院大学	名誉教授
飯塚 正人	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・所長
中山 俊秀	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・副所長
星 泉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・情報資源利用研究センター長
近藤 信彰	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・フィールドサイエンス研究企画センター長
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
澤田 英夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.2 共同研究専門委員会

(任期:2017年4月1日～2019年3月31日)

氏名	所属	職名
井上 優	麗澤大学外国語学部	教授
窪田 幸子	神戸大学大学院国際文化学研究所	教授
倉沢 愛子	慶應義塾大学	名誉教授
杉山 祐子	弘前大学人文学部	教授
藤代 節	神戸市看護大学看護学部	准教授
吉澤誠一郎	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
米田 信子	大阪大学大学院言語文化研究科	教授
飯塚 正人	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・所長
中山 俊秀	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・副所長

星 泉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・情報資源利用研究センター長
近藤 信彰	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・フィールドサイエンス研究企画センター長
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
澤田 英夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.3 研修専門委員会

(任期:2017年4月1日～2019年3月31日)

氏名	所属	職名
岸田 文隆	大阪大学大学院言語文化研究科	教授
久保 智之	九州大学大学院人文科学府	教授
小林 正人	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
南田 みどり	大阪大学	名誉教授
吉田 和彦	京都大学国際高等教育院	教授
呉人 徳司	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
塩原 朝子	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
芝野 耕司	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
椎野 若菜	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
児倉 徳和	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教

II-2.2.4 海外調査専門委員会

(任期:2017年4月1日～2019年3月31日)

氏名	所属	職名
伊藤 元己	東京大学大学院総合文化研究科	教授
梅崎 昌裕	東京大学大学院医学系研究科	准教授
岡本 正明	京都大学東南アジア地域研究研究所	教授
窪田 順平	総合地球環境学研究所研究部	教授
関 雄二	国立民族学博物館	教授
曾我 亨	弘前大学人文学部	教授
高樋 さち子	秋田大学教育文化学部	准教授
蓮井 和久	鹿児島大学	客員研究員
藤田 耕史	名古屋大学環境学研究科	准教授
本山 秀明	国立極地研究所	教授
呉人 徳司	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
佐久間 寛	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教

品川 大輔	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
外川 昌彦	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
野田 仁	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
深澤 秀夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員

(任期:2017年4月1日～2019年3月31日)

氏名	所属	職名
飯田 卓	国立民族学博物館	准教授
大村 敬一	大阪大学大学院言語文化研究科	准教授
川田 牧人	成城大学文芸学部	教授
木村 大治	京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科	教授
黒田 末寿	滋賀県立大学	名誉教授
湖中 真哉	静岡県立大学国際関係学部	教授
長沼 毅	広島大学大学院生物圏科学研究科	教授
野林 厚志	国立民族学博物館	教授
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
塩原 朝子	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
外川 昌彦	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授

II-2.2.6 フィールドネット運営委員会

(任期:2017年4月1日～2019年3月31日)

氏名	所属	職名
海老原 淳	国立科学博物館植物研究部	研究主幹
塩谷 哲史	筑波大学人文社会系	助教
竹ノ下 祐二	中部学院大学看護リハビリテーション学部	教授
川邊 優貴子	国立極地研究所	助教
津田 浩司	東京大学大学院総合文化研究科	准教授
長野 宇規	神戸大学大学院農学研究科	准教授
太田 信宏	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
吉田 ゆか子	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教

II-2.2.7 編集専門委員会

(任期:2017年4月1日～2019年3月31日)

区分	氏名	所属	職名
人類学	石川 登	京都大学東南アジア地域研究研究所	教授
言語学	岩田 礼	金沢大学大学院人間社会環境研究科	教授
歴史学	三浦 徹	お茶の水女子大学	理事・副学長
言語学	森口 恒一	静岡大学	名誉教授
歴史学	吉澤 誠一郎	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
人類学	和崎 春日	中部大学国際関係学部	教授
歴史学	苅谷 康太	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
言語学	澤田 英夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
歴史学	陶安 あんど	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
人類学	床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
人類学	西井 凉子	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
言語学	山越 康裕	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授

II-2.2.8 国際諮問委員会

(任期:2017年4月1日～2018年3月31日)

氏名	所属	職名
ARKA, I Wayan	School of Culture, History & Language, The Australian National University	Assoc.Prof
LIU, Zhao	Fudan University	Professor
LOMO MYAZHIOM, Aggée	University of Strasbourg	Assoc. Prof.
RAHAYU, Yosephin Apri-astuti	Wisma Bahasa, Yogyakarta	Lecturer
RIESTER, Arndt	Institute for Natural Language Processing, University of Stuttgart	Senior Researcher
SUN, Bojun	Institute of Ethnology and Anthropology, Chinese Academy of Social Sciences	Researcher
Tung Aung Kyaw	Department of Myanmar Languages and Literature,	Professor

Taungoo University

苅谷 康太	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教
栗原 浩英	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
渡辺 己	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.9 海外拠点専門委員会

(任期:2017年4月1日～2019年3月31日)

氏名	所属	職名
内堀 基光	放送大学教養学部	教授
大稔 哲也	早稲田大学文化構想学部	教授
奥田 敦	慶應義塾大学総合政策学部	教授
酒井 啓子	千葉大学法経学部	教授
長沢 栄治	東京大学東洋文化研究所	教授
保坂 修司	財団法人日本エネルギー経済研究所 中東研究センター	研究理事／副センター長
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
錦田 愛子	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
吉田ゆか子	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教

II-2.2.10 中東研究日本センター諮問委員会

(任期:2014年4月1日～2016年3月31日)

氏名	所属	職名
ABU-HUSAYN, Abdul-Rahim	Faculty of Arts and Sciences, American University of Beirut	Professor
AZAR, Pierre	Saint-Joseph University	Professor
DAHER, Massoud	Faculty of Literature and Human Sciences, Lebanese University	Professor
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.3 内部委員会・業務担当

II-2.3.1 内部委員一覧

企画運営委員会 2017.4.1 - 2019.3.31(2カ年)

(選出) 澤田英夫, 黒木英充, 床呂郁哉

(指定) 飯塚正人所長(委員長), 中山俊秀副所長, 星泉 IRC 長, 近藤信彰 FSC 長, 西井凉子研究戦略策定委員会委員長

研究戦略策定委員会 2017.4.1 - 2019.3.31(2カ年)

(選出) 西井凉子(委員長), 太田信宏, 高松洋一, 外川昌彦, 山越康裕, 渡辺己

(指定) 飯塚所長, 中山副所長, 星 IRC 長, 近藤 FSC 長

共同研究専門委員会 2017.4.1 - 2019.3.31(2カ年)

飯塚所長, 中山副所長, 星 IRC 長, 近藤 FSC 長, 澤田英夫, 黒木英充, 床呂郁哉

II-2.3.2 各種業務分担 任期: 2017.4.1~2018.3.31(1カ年)

文献資料(図書)担当

荒川慎太郎(担当長), 河合香吏, 小倉智史

国際交流担当

渡辺己(担当長), 栗原浩英, 黒木英充, 荻谷康太(フォーラム担当)

編集担当

西井凉子(担当長), 床呂郁哉, 陶安あんど, 荻谷康太, 澤田英夫, 山越康裕

出版担当

峰岸真琴(担当長), 高島淳, 陶安あんど

広報企画担当(『FIELDPLUS』, 広報物制作, 企画展担当)

太田信宏(担当長), 高松洋一(『FIELDPLUS』編集長), 星泉, 河合香吏, 伊藤智ゆき, 野田仁, 錦田愛子, 吉田ゆか子

基礎データ担当(要覧, ウェブサイト担当, 年次報告書)

小田淳一(担当長/Web 管理者), 澤田英夫(要覧・Web 担当長), 椎野若菜(要覧), 品川大輔(要覧), 山越康裕(年次報告書担当長), 栗原浩英(年次報告書), 伊藤智ゆき(年次報告書)

*ただし要覧とウェブサイトの改訂に関しては, 基礎データ担当全員でかかわることとする。

研修担当

塩原朝子(担当長), 芝野耕司, 呉人徳司, 椎野若菜, 児倉徳和

海外学術調査フォーラム担当

外川昌彦(担当長), 深澤秀夫, 床呂郁哉, 呉人徳司, 野田仁, 品川大輔, 佐久間寛

地域研究コンソーシアム担当

石川博樹(担当長), 錦田愛子

II-2.3.3 全学委員一覧

<全学委員会等>

会議・委員会等名	氏名	委員の別	任期
経営協議会	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
総合戦略会議	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
教育研究評議会	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
	中山俊秀	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
研究活動に関わる不正防止計画推進本部			
	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
情報公開・個人情報保護委員会	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
ハラスメント防止委員会	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
	塩原朝子	AA 研究所長の推薦による委員	2015.5.21-2017.5.20 2017.5.21-2019.5.20
ハラスメント相談員	山越康裕	AA 研究所長の推薦による委員	2017.5.21-2019.5.20
	西井涼子	AA 研究所長の推薦による委員	2017.5.21-2019.5.20
情報マネジメント委員会	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
	星 泉	委員(指名選任, IRC 長)	2017.4.1-2019.3.31
基金委員会	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
苦情処理委員会(苦情処理相談員)			
	高松洋一	AA 研究所長の推薦による委員	2017.4.1-2019.3.31
危機管理委員会	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
図書館委員会	荒川慎太郎	文献資料担当長を選任	2017.4.1-2019.3.31
文書館運営委員会	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1-2019.3.31
国際交流会館運営委員会	河合香吏	選出委員	2016.4.1-2018.3.31

	石川博樹	選出委員	2016.4.1–2018.3.31
保健管理センター運営委員会	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1–2019.3.31
	荒川慎太郎	AA 研所長の推薦による委員	2016.4.1–2017.3.31
建学 150 周年記念事業委員会	河合香吏	学長指名による委員	2017.4.1–2019.3.31

<全学本部>

名称	氏名	委員の別	任期
広報マネジメント・オフィス	太田信宏	オフィス長指名による委員	2017.4.1–2019.3.31
財務・施設マネジメント・オフィス	(施設有効活用 WG)		
	飯塚正人	役職指定委員	2017.4.1–2019.3.31
財務・施設マネジメント・オフィス	(環境向上 WG)		
	苅谷康太	オフィス長指名による委員	2017.4.1–2019.3.31
社会連携マネジメント・オフィス	栗原浩英	オフィス長指名による委員	2017.4.1–2019.3.31
全学点検・評価委員会	太田信宏	IR 委員会副委員長を指名選任	2017.4.1–2019.3.31
男女共同参画部会(人事マネジメント・オフィス)	椎野若菜		2017.4.1–2019.3.31

<その他>

名称	氏名	委員の別	任期
ハラスメント相談員	山越康裕	AA 研所長の推薦による委員	2015.5.21–2017.5.20 2017.5.21–2019.5.20
	西井凉子	AA 研所長の推薦による委員	2015.5.21–2017.5.20 2017.5.21–2019.5.20
研究科協議会	渡辺己		2017.4.1–2019.3.31

<研究アドミニストレーションに置くワーキング・グループ>

名称	氏名	任期
学内学会立ち上げ WG	飯塚正人	
オープンアクセス化 WG	飯塚正人 峰岸真琴	
知的財産 WG	山越康裕	2016 年度～

<教育アドミニストレーションに置くワーキング・グループ>

名称	氏名	任期
大学院改編 WG	中山俊秀	2016 年度～

II-3 研究活動の詳細

II-3.1 センター

II-3.1.1 情報資源利用研究センター

センター長: 星泉

副センター長: 澤田英夫

センター員: 小倉智史, 小田淳一, 高松洋一, 品川大輔, 中山俊秀

1. アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化の推進

本年度は以下のプロジェクトを支援し、アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化を引き続き推進した。

1) 「中野暁雄著『ベルベル民族誌』のデジタル化と日本語訳の刊行」

代表者: 堀内里香

プロジェクト参加者: 小田淳一, 堀内正樹

公開 URL: <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/90222>

コンテンツの主要言語: シルハ語, 日本語, 英語

内容の説明: 中野暁雄元所員が残した『ベルベル民族誌』全3巻 (Nakano, Aki'o: Ethnographical Texts in Moroccan Berber (Dialect of Anti-Atlas). Vol. 1, 1994, Vol. 2, 1995, Vol. 3, 1998) のオリジナルテキストをデジタル化し、併せて日本語訳を刊行した。

今年度の活動: 上記資料をデジタル化し、日本語訳を刊行した。尚、デジタル化の際に業者のミスが多く (フォントの選択や改行位置など)、web 上での公開にはしばらく時間を要する。

2) 「アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開」

代表者: 奥田統己, 山越康裕

プロジェクト参加者: 小林美紀, 深澤美香, 吉川佳見, 欠ヶ端和也, 阪口諒, 唐柏炎

公開 URL: <https://ainugo.aa-ken.jp>

コンテンツの主要言語: アイヌ語, 日本語

内容の説明: 田村すゞ子氏により採録されたアイヌ語資料のオンライン版である。対応する日本語訳が付されたアイヌ語 (カタカナ表記・ローマ字表記) を見ながら、ポーズによる切れ目ごとに音声を聞くことができる。

今年度の活動: 昨年度までに公開した資料 8 篇に加え、新たに 9 篇のテキストを追加した。昨年度のツールをベースに、今年度は検索機能を強化し、完全一致のみならず前方一致、後方一致等の部分一致でも検索できるよう構築した。公開までの具体的な作業は以下の通りである。1. 音声ファイルの 1 文ごとのタイムコード記録, 2. 文字化テキストの切り出しとタイム

コードの対応づけ, 3. ツール開発・サイト構築(外注), 4. データの流し込み, 5. 凡例, 注の作成および html ファイルの微修正。

3) 「モンゴル諸語対照基本語彙データベース」

代表者: 山越康裕

公開 URL: <https://mongolicbv.aa-ken.jp/index.htm>

コンテンツの主要言語: モンゴル諸語, 日本語, 英語, 中国語

内容の説明: モンゴル諸語間の基本語彙を対照するためのデータベース。

今年度の活動: 既刊資料に別個に収録されていた 9 言語の基本語彙を集成し, オンライン上で閲覧・検索できるよう整えた。具体的作業・手順は以下の通り。1. 公開許諾(東北大学名誉教授・栗林均先生および愛知県立大学教授・吉池孝一先生より) 2. 基本語彙の入力 3. CSV ファイルから json ファイルを生成するツールの開発(外注;別経費による) 4. ウェブサイトデザイン。

4) 「インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター: ヘロン語単語ウェブサイト構築」

代表者: 塩原朝子

プロジェクト参加者: Yanti, Dominikus Tauk, Andrias Susang

公開 URL: <http://helong-bolok.aa-ken.jp/helong-bolok.html>

コンテンツの主要言語: 英語, インドネシア語, ヘロン語

内容の説明: ヘロン語(ISO: heg)はインドネシア・ティモール島の東端及び対岸の Sumau 島で話されている言語の一つである(Balle, 2014)。系統的にはオーストロネシア語族・中部 Malayo-Polynesia グループに属している。このページではヘロン語の基礎語彙約 130 語を日本語訳・英語訳・インドネシア語の対応する単語とともに音声つきで公開している。

今年度の活動: 昨年度 LingDy 経費で収集したヘロン語の単語の録音データをインドネシアの協力者に依頼して加工した(単語の切り出し。謝金を支出)。その後, 業者に依頼し, 単語の表と切り出した音声ファイルをリンクする形で Web ページを作成した。

5) 「南アジア民俗写真データベース」

代表者: 外川昌彦

プロジェクト参加者: 粟屋利江, 太田信宏, 小西公大, 高島淳, 鈴木真弥, 澁谷俊

公開 URL: <https://southasianfolklore.aa-ken.jp/index.html>

コンテンツの主要言語: 日本語

内容の説明: 本プロジェクト(南アジア民俗写真データベース)は, 立教大学名誉教授・小西正捷(こにしまさとし)氏が撮影してこられた約 6000 点の南アジアの考古学, 文化人類学などに関わる写真資料を精査・編集し, 広く研究・教育, 社会貢献に資する画像資料の情報資源データベースとして公開するものである。人間文化研究機構「南アジア地域研究」東京外国語大学拠点南アジア研究センター(FINDAS)との共同プロジェクトとして実施された。

今年度の活動: まず, 申請者の方で, 約 6,000 点の写真基本情報(場所, 時代, 被写体情報など)を収集・整理(エクセル)した。その後, 写真情報に基づき, Web 公開用のデータベース製作を業者に依頼した。12 月末にデータベースが納品され, その後, 微細な修正を施してから AA 研のサーバにアップロード, 公開した。また, プロジェクトの開始にあたり, 2017 年

5月20日には、日本ベンガル・フォーラム、FINDASとの共催による記念シンポジウム「南アジア民俗写真アーカイブー小西正捷先生を囲んで」を開催し、4名の研究者と小西先生によるパネル・ディスカッションを行った。

6) 「故湯川恭敏所員の調査テープに残された言語データの電子化およびメタデータ公開」(新規プロジェクト)

代表者: 品川大輔

プロジェクト参加者: 塩原朝子, 角谷征昭

公開 URL: https://aflang-res.aa-ken.jp/?page_id=178

コンテンツの主要言語: 日本語, 英語

内容の説明: アジア・アフリカ言語文化研究所元所員、故湯川恭敏教授の業績とその基盤となった博士自身のフィールド調査によって得られた言語データに関するページ。2016年度の段階では業績リストと言語データのメタデータリストを掲載している。

今年度の活動: (音声資料のデジタル化等を行った)先行プロジェクトにおいてカバーしきれなかったフィールドノート等の紙媒体資料をすべてデジタル化することでアーカイブ化を完成させるとともに、公開されている研究論文とのリンク付けや研究業績の概説を含むメタデータの作成を行うことを目標とした。前者についてはすべての紙資料のデジタル化を完了し、後者については公開されている研究論文と資料との関連を示すメタデータ等を完成させた。

7) 「チュルク諸語対照基礎語彙(第4期)」

代表者: 児倉徳和

プロジェクト参加者: 風間伸次郎

公開 URL: <https://turkbv.aa-ken.jp/turkbv2017/>

コンテンツの主要言語: チュルク諸語, 日本語, 英語, 中国語

内容の説明: チュルク諸語の基礎語彙のデータベース。『アジア・アフリカ言語調査票 下』所収のA項目(200項目)の音声を聞くことができるほか、言語を特定しての検索も可能。

今年度の活動: 今年度はサイトを英語・中国語でも利用できるよう、多言語化を行った。またコンテンツとして新たに西部裕固語(1話者)とサラール語(1話者)を登録した。

8) 「アラビア文字等紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラムの公開」

代表者: 高松洋一

公開 URL: <http://coe.aa.tufs.ac.jp/abjad/JP/>

コンテンツの主要言語: 英語(計算ページ)・日本語(解説)

内容の説明: アラビア文字による紀年銘(クロノグラム)をウェブ上で計算するツールである。ウィンドウにアラビア文字の文字列を入力またはペーストしてボタンをクリックすると、各文字に割り当てられた数値を合計し、計算結果を数式で表示する。

今年度の活動: アラビア文字紀年銘を計算した得られた数値を、自動的にヒジュラ暦から西暦に換算し、別ウィンドウ内で表示できるようにした。

9) 「オスマン演劇ポスター・音楽データベース」

代表者: 松本菜穂子

公開 URL: <https://osmanlitiyatros-musik.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語: トルコ語

内容の説明: AA 研所蔵のオスマン演劇ポスター・プログラムに掲載されている音楽に関する情報を抽出して、昨年度に公開されたオスマン演劇ポスター・プログラムの画像データベースと連動した新たなデータベースを公開する。

今年度の活動: AA 研所蔵のオスマン演劇ポスター・プログラムに掲載されている音楽に関する情報を抽出してデータベース化し、ポスターの請求番号、初演の別、西暦による日付、劇場の位置、劇場名、劇団名、カテゴリー(音楽、舞踊の別)、音楽・舞踊のジャンル、国風/欧風の別、表演者、作曲家により、演目を検索できるようにした。

10) 「オスマン演劇ポスター画像公開」

代表者: 江川ひかり

公開 URL: <https://osmanlitiyatros.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語: トルコ語

内容の説明: AA 研所蔵のオスマン帝国末期の演劇ポスター・プログラム 170 点の画像を、劇団名、演目、上演年月日、劇場などの基本情報を含んだ「劇団別基本表」とともにデータベース化してウェブ上に公開する。

今年度の活動: 昨年度のプロジェクトの継続として、文字情報を訂正し、UI を見直し、英語ページを追加した。

11) 「Old Tibetan Documents Online」

代表者: 岩尾一史・星泉

公開 URL: <https://otdo.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語: チベット語, 英語

内容の説明: 古チベット語文献のテキストデータベースです。碑文史料と中央アジアの出土文書に書かれている古チベット文を収集してデータベース化しており、Key Word in Context による検索を行うことができます。また各文献の主要な研究の情報も提供している。

今年度の活動: 今年度はすでに構築済みである Old Tibetan Documents Online (以下, OTDO) のウェブサイト技術上の不備を解消するため、新たなサイトを至急構築することと、データの移動と検証作業を行うことを目的とした。当初の予定では <http://otdo.aa-ken.jp/> に新規サイトを構築することにしていましたが、検討を重ねた結果、星研究室で運用している <http://otdo.aa.tufs.ac.jp/> を <http://otdo.aa-ken.jp/> に移転するという形がよりふさわしいことが明らかになった。そこで 11 月に業者カワチェンに依頼し、1 月 31 日に新サーバの移動を終えることができた。それと並行して、テキストデータベースを mediawiki から pukiwiki へと移行する必要性が生じたので、その作業を大西(龍谷大学)に依頼し、12 月 1 日から 3 月 31 日までに 33 件のデータを移行することができた。

12) 「Matsya Project ヴィシュヌ教関連マイクロフィルムのデジタル化」

代表者: 小倉智史

プロジェクト参加者: 置田清和

公開 URL: <http://www.aa.tufs.ac.jp/~ogura/project/matsya/index.html>

コンテンツの主要言語:

内容の説明: インドの各写本図書館、寺院に収蔵されていたヴィシュヌ教関連作品 1,679 点の写本を、アメリカのスミソニアン博物館が Matsya Project という企画のもと 1980 年代にマイクロフィルム化した。マイクロフィルムの経年劣化によって利用できなくなることが心配されたため、この度写本の画像を jpg ファイル形式でデジタル化した。

今年度の活動: 今回の事業では、Matsya Project でマイクロフィルム化された全 1,679 作品のうち、Vrindavan Research Institute (ウッタール・プラデーシュ州)、Sanskrit College Melkote (カルナータカ州) 等に元の写本が保存されていた、223 作品を jpg 形式でデジタル化した。画像自体の公開にあたっては、元の写本を所蔵している機関から許諾を得る必要があるため、ひとまずはデジタル化した作品のタイトルを、次いでメタデータを公開することとした。

2. IRC 設立 20 周年記念シンポジウムの開催

2017 年 12 月 9 日、IRC 設立 20 周年記念のシンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て、活かす」を開催した。これまで IRC で実施されてきた数々プロジェクトの中から、人文知を資源化する側と、資源を活用する側の双方の観点から、所内外の研究者とともに人文知を資源化するプロセスや、資源の共有にまつわる様々な問題、またそれを活用することで生まれた研究について俎上に載せ、議論した。

3. IRC ワークショップの開催

IRC ワークショップは、所内外の主に若手研究者を対象に、蓄積した研究成果・手法を発信し、普及させることを目的とするもので、このワークショップによって発信される研究成果・手法に関心を持つ参加者自身の研究を促進し、そうした研究者を募って共同研究を組織し、ひいては、その研究成果を核とした研究分野の形成・発展を促すことが期待されている。2017 年度に開催したワークショップは以下の通り。

- 1) IRC 設立 20 周年・ウィキペディア日本語版始動 15 周年記念ワークショップ「世界の知識を翻訳しよう」, 2017 年 10 月 28 日, 東京外国語大学附属図書館 4 階@ラボ, 講演者: 渡辺智暁(慶應義塾大学), 太田尚志, 松田朝彦(物質・材料研究機構), 北村紗衣(武蔵大学)
- 2) IRC 設立 20 周年記念ワークショップ「アーカイブズ学の現状 ―研究資料の保全と利活用を目指して―」, 2017 年 11 月 7 日, AA 研マルチメディア会議室(304), 講演者: 西村慎太郎(人間文化研究機構 国文学研究資料館)
- 3) IRC 設立 20 周年記念ワークショップ「アーカイブズ学の現状 ―研究資料の保全と利活用を目指して―」, 2018 年 2 月 15 日, AA 研マルチメディア会議室(304), 講演者: 永崎研宣(人文情報学研究所), 北本朝展(人文学オープンデータ共同利用センター/国立情報学研究所)

II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター

センター長: 近藤信彰

副センター長: 太田信宏

コロキウム担当: 外川昌彦, 塩原朝子, 床呂郁哉

フィールドネット担当: 太田信宏, 吉田ゆか子

JacMES 担当: 錦田愛子

KKLO 担当: 床呂郁哉, 吉田ゆか子

1. 研究手法の開発

フィールドサイエンスの研究手法を開発し、洗練させるべく、公開研究会形式の「フィールドサイエンス・コロキウム」について、2010 年度組織面・制度面での整備を進めて海外調査専門委員会のもとに設置した「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」を中心に、コロキウムの企画・運営体制を強化した。2017 年 10 月 27 日(金)及び 2018 年 2 月 16 日(金)にそれぞれ「リスク・ハザード・レジリエンス」と「フィールドワークをフィールドワークする」と題したワークショップを基幹研究人類学班との共催で開催した。

2. 新たな研究ネットワークの形成

フィールドネットでは学術連携および交流を目的とするウェブ上における所属や研究分野を超えた交流の場を提供すると共に、公募の結果採択した「フィールドネット・ラウンジ」を次のように 1 回開催した。ワークショップ「草の根から地域住民が生み出す「食」と「農」の空間 — どうやって見つけ、調べるか?」(2018 年 1 月 20 日(土)開催)。

3. 現地研究拠点

本研究所では、アジア・アフリカをめぐる研究状況と学術的戦略構想に鑑み、ベイルート(レバノン)とコタキナバル(マレーシア)に研究拠点を設置して国際共同研究などの活動を続けている。ベイルートについては、レバノン政府の閣議決定による認可を得て 2006 年 2 月に正式に中東研究日本センター Japan Center for Middle Eastern Studies(略称 JaCMES)を発足させ、コタキナバルについても 2008 年 3 月にコタキナバル・リエゾンオフィス Kota Kinabalu Liaison Office(略称 KKLO)を設置して活動を開始した。現在はフィールドサイエンス研究企画センターが両拠点の維持・運営にあたっている。

中東研究日本センター(JaCMES)

- ・ 2017 年 8 月 27 日(日)―30 日(水)ベイルート・ドイツ東洋研究所において「オスマン文書研究サマースクール」を共催した。
- ・ 2017 年 9 月 7 日(木)JaCMES にて共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第 3 回研究会を実施した。
- ・ 2017 年 11 月 27 日(月)JaCMES にてラウンドテーブル Roundtable “Imagining Resecularization in Iran and Turkey: A Comparative-Historical and Theoretical Inquiry”を実施した。
- ・ 2017 年 11 月 29 日(水)JaCMES にて第 11 回若手研究者報告会を開催した。
- ・ 2018 年 3 月 16 日(金)―17 日(土)ベイルートの Saint Joseph University にて共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第 4 回研究会を実施した。

コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)

- ・ 2017 年 7 月 15 日(土)に AA 研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」の第 1 回研究会を開催した。
- ・ 2017 年 7 月 20 日(木)フィリピン南部情勢に関する実務者・専門家会合を JICA フィリピン事務所で開催した。

- ・ 2017年8月11日(金)–17日(木)マレーシア・コタキナバルにおいてサバにおける会話言語の研究に関するワークショップを開催した。
- ・ 2017年9月2日(土)邦人向け公開講演会「フィリピンのイスラームを知る—歴史的背景からミンダナオ紛争の現状, 生活文化まで」を JICA フィリピン事務所で開催した。
- ・ 2017年9月24日(日)にコタキナバル市内のホテル会場において, 共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第3期)」の第2回研究会を開催し, 日本側, ならびにマレーシア側から研究者などが参加した。
- ・ 2017年12月17日(日)に AA 研にて同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第3期)」の第3回研究会を開催した。
- ・ 2018年1月27日(土)にコタキナバル日本人学校において邦人向け講演会を開催し, 祖田亮二氏(大阪市立大学)がサワラク州の自然と災害に関する講演を行った。
- ・ 2018年2月5日(月)にコタキナバルのマレーシア・サバ大学(UMS)においてアジア・アフリカの文化と社会に関する現地講演会を開催した。日本から研究者2名, マレーシア側から1名の研究者が講演し, UMS の研究者や学生らも交えた質疑応答も行った。
- ・ 2017年3月17日(土)に国際交流基金ジャカルタ日本文化センター(インドネシア)において邦人向け講演会「現代インドネシアのイスラームを知る」を開催した。

II-3.2 共同利用・共同研究課題

II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況

アジア地理言語学研究

研究期間: 2015–2017 (代表: 遠藤光暁 / 所員 2, 共同研究員 18)

所員: 峰岸真琴, 呉人徳司

共同研究員: 遠藤光暁, 岩田礼, 植屋高史, 岸江信介, 倉部慶太, 近藤美佳, 清水政明, 白井聡子, 白石英才, 鈴木博之, 中井精一, 長渡陽一, 西本希呼, 深澤美香, 福嶋秩子, 松本亮, 八木堅二, Sirivilai TEERAROJANARAT

研究会等の内容

8月と12月に2回研究会を開催した。第1回は「声調とアクセント」をテーマとしてアジア諸語族・言語およびアフリカ・メキシコの声調言語に関して18の発表を行った。第2回は「雨が降る」をテーマとして13の発表を行った。詳しい発表者と題目については当研究課題ウェブページ(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp210>)に掲載されている。

研究成果一覧

[学術論文]計4件

1. Shirai, Satoko, "The Possibility of Borrowing Basic Pronouns in Minority Languages of the Western

- Sichuan Ethnic Corridor", *Tokyo University Linguistic Papers*. 39, 265–285, 2018. (査読有)
2. 鈴木博之「音変化のABA分布が語りうる言語史——チベット文化圏南東端のカムチベット語を例に」, 『言語記述論集』9, 43–64, 総合地球環境学研究所, 2017. (査読有)
 3. 鈴木博之「香格里拉藏語的r韻尾語音演變:r韻尾, 卷舌化元音, 輔音性元音」, 『東方語言學』17, 上海教育出版社, 印刷中. (査読有)
 4. 遠藤光暁「アジア地理言語学プロジェクト 2015–2017 概要」, 『方言の研究』4, ひつじ書房, 近刊. (査読有)

[口頭発表等]計6件

1. Endo, Mitsuaki, "Asian geolinguistics: So far, and beyond", The 27th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, 2017.5.11. Padang, Indonesia.
2. 遠藤光暁「山東方言単字調的時間系列語言地図」, 第四届地理言語学国際學術研討会, 2017.7.13. 中国上海・華東師範大学.
3. 遠藤光暁「声調演變の双向性——兼談声調の共時性質和年齡差異調查的重要性」, 南開語言學論壇, 2017.11.4. 中国天津・南開大学
4. Shirai, Satoko, "A geolinguistic approach to Tibeto-Burman vocabulary", The 27th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, 2017.5.11. Padang, Indonesia.
5. Shirai, Satoko, "Loans or cognates? Tibetan-like words in minority languages: A case study of basic pronouns in languages of Western Sichuan", International Seminar on Tibetan Languages and Historical Documents, 2017.9.8. Kobe University.
6. 白井聡子「川西民族走廊諸語における「太陽」と「雨」:地理言語学的観点から」, 2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2018.3.29. 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.

[図書]計5件

1. Saito, Yoshio and M. Endo (eds.), *Studies in Asian Geolinguistics, IV -wind-*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 32 pp.
2. Taguchi, Yoshihisa and M. Endo (eds.), *Studies in Asian Geolinguistics, V -iron-*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 27 pp.
3. Kurabe, Keita and M. Endo (eds.), *Studies in Asian Geolinguistics, VI -Means to count Nouns*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 59 pp.
4. Endo, Mitsuaki (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics, VII -Tone and Accent-*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 79 pp.
5. Suzuki, Hiroyuki and M. Endo (eds.), *Studies in Asian Geolinguistics, Monograph No. 2, Proceedings of the Workshop*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 79 pp.

通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング

研究期間: 2015–2017(代表: 下地 理則 /所員 1, 共同研究員 11)

所員: 中山俊秀

共同研究員: 青井隼人, 麻生玲子, 重野裕美, 白田理人, 當山奈那, 中川奈津子, 新永悠人, 原田

研究会等の内容

最終年度は, 沖縄津堅島方言, 八重山語黒島方言など, 共同研究メンバーの担当地域の報告を行って, 全てのメンバーの報告を終えるとともに, 共同研究メンバーではカバーしきれなかった奄美徳之島方言の発表を外部の研究者に依頼するなどすることで, 琉球諸語のケースマーケティングの概要が把握できた。さらに, これまでの研究により, 格標示と情報構造標示の関連を探ることが重要であるという方向性で一致していたので, 格標示と焦点標示の関連について, 研究報告を行った。

研究成果一覧

[学術論文]計2件

1. 原田走一郎「八重山語黒島方言の癖」『日本語学』Jan-37, 38-48, 明治書院, 2018.
2. Shimoji, Michinori, "Dialects", *Cambridge Handbook of Japanese Linguistics.*, 2018.

[図書]計2件

1. Shimoji, Michinori, *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*, Kyushu University Press, 2017. 461pp.
2. 下地理則『南琉球宮古語伊良部島方言』くろしお出版, 2018. 全 368 頁.

[社会に向けた成果発信]計1件

1. 下地理則「消えていくことば, 消えていく私たち」『春秋』590, 5-8, 春秋社, 2017.

東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究

研究期間: 2015-2017 (代表: Eric McCready / 所員 1, 共同研究員 17)

所員: 峰岸真琴

共同研究員: Eric MCCREADY, 伊藤さとみ, 大島義和, 高橋清子, 田窪行則, 長屋尚典, 野元裕樹, 原由理枝, 山田真寛, Christopher DAVIS, Christopher TANCREDI, Gregoire WINTERSTEIN, Hooi Ling SOH, Jozina VANDER KLOK, Magdalena KAUFMANN, Malte ZIMMERMANN, Stefan KAUFMANN

研究会等の内容

2017年度第1回研究会 2017年10月7日(土)13:00-18:00

1. Hiroki NOMOTO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies) and Asako SHIOHARA (ILCAA)
"On the non-additive uses of Malay additive particle pun"
2. Naonori NAGAYA (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies)
"Confirmational particles in Tagalog"
3. David Y. OSHIMA (ILCAA Joint Researcher, Nagoya University)
"On the no-da construction"
4. 全員での討論およびまとめ

研究成果一覧

[学術論文]計 19 件

1. Nomoto, Hiroki, "Sintaksis nominalisasi bahasa Melayu", *Aspek Teori Sintaksis Bahasa Melayu*, 71–117, Dewan Bahasa dan Pustaka, 2017.
2. Kartini Abd. Wahab and Hiroki Nomoto, "Konstruksi penaikan dan kawalan dalam bahasa Melayu", *Aspek Teori Sintaksis Bahasa Melayu*, 118–144, Dewan Bahasa dan Pustaka, 2017.
3. Hayashi, Midori and David Oshima, "Graded (metric) tenses in embedded clauses: The case of South Baffin Inuktitut", *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory* 27, 134–152, Linguistic Society of America, 2017. (査読有)
4. Oshima, David and Eric McCready, "Anaphoric demonstratives and mutual knowledge: The cases of Japanese and English", *Natural Language and Linguistic Theory*. 35(3), 801–837, 2017. (査読有)
5. 伊藤さとみ「疑問文中の語気助詞"呢"の機能: 疑問演算子か対照話題マーカーかをめぐって」, 『中国言語文化学研究』7, 2017.
6. 伊藤さとみ「談話機能から見る中国語における文末助詞 "吗" と "呢" の比較」, 『お茶の水女子大学中国文学会報』36, 2017. (査読有)
7. Hara, Yurie and Eric McCready, "Particles of (un)expectedness: Cantonese wo and lo", *New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI-isAI 2015 Workshops, LENLS, JURISIN, AAA, HAT-MASH, TS-DAA, ASD-HR, and SKL, Kanagawa, Japan, November 16-18, 2015, Revised Selected Papers*, 27–40, Springer International Publishing, 2017. (査読有)
8. Hara, Yurie, "Causality and evidentiality", *Proceedings of the Amsterdam Colloquium*, 295–304, 2017.
9. Hara, Yurie, Naho Orita and Hiromu Sakai, "Evidentials in causal premise semantics: A rating study", *Proceedings of LENLS 14*, 2017.
10. Soh, Hooi Ling, "Mandarin Chinese sentence final de as a marker of private evidence", *Proceedings of the Linguistic Society of America*. 3, 22:1–14, Linguistic Society of America, 2018.
11. Reese, Brian and Hooi Ling Soh, "Parenthetical I'm telling you as a marker of private evidence", *Proceedings of the Linguistic Society of America*. 3, 62:1–13, Linguistic Society of America, 2018.
12. 長屋尚典「タガログ語の幸福論」, 『東京外国語大学論集』94, 53–68, 東京外国語大学, 2017. (査読有)
13. 長屋尚典「タガログ語の所有と存在のあいだ」, 『東京大学言語学論集』39, 223–242, 東京大学出版会言語学研究室, 2018. (査読有)
14. McCready, Eric and Chris Davis, "An Invocational Theory of Slurs", *Proceedings of LENLS14*, 2017.
15. McCready, Eric and R. Henderson, "How Dogwhistles Work", *Proceedings of LENLS14*, 2017.
16. Kaufmann, Stefan, "The Limit Assumption", *Semantics and Pragmatics*. 10, 2017. (査読有)
17. Kaufmann, Stefan, "Towards a probabilistic analysis for conditionals and unconditionals", *New Frontiers in Artificial Intelligence*, 3–14, Springer International Publishing, 2017. (査読有)
18. Kaufmann, Stefan, "Probabilistic semantics and pragmatics for the language of uncertainty", *Soft Methods for Data Science*, 285–291, Springer International Publishing, 2017. (査読有)
19. Chen, Sihwei, Vera Hohaus, Rebecca Laturus, Meagan Louie, Lisa Matthewson, Hotze Rullmann, Ori Simchen, Claire K. Turner and Jozina Vander Klok, "Past possibility cross-linguistically: Evidence from

12 languages", *Modality across syntactic categories*, 235–287, Oxford University Press, 2017. (査読有)

[口頭発表等]計 30 件

1. Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa and Asako Shiohara, "Reclassifying the Leipzig Corpora Collection for Malay/Indonesian", The 21st International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL), 2017.5.4-6. マレーシア国民大学ランカウイ研究センター.
2. 野元裕樹・赤瀬川史朗・塩原朝子「類似言語におけるウェブコーパス整備:マレー語とインドネシア語の言語判定の事例」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24-25. 首都大学東京.
3. Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa and Asako Shiohara, "Identifikasi bahasa dalam pembinaan korpus web bahasa Melayu/Indonesia", The 4th Atma Jaya Conference on Corpus Studies (ConCorps 2017), 2017.7.21. インドネシア, アトマジヤ・カトリック大学.
4. Nomoto, Hiroki, "Variations in Austronesian bare passive agents", *Current Issues in Comparative Syntax: Past, Present, and Future*, 2018.3.1-2. シンガポール国立大学.
5. Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, David Moeljadi and Hideo Sawada, "TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo)", 言語処理学会第 24 回年次大会, 2018.3.12-16. 岡山コンベンションセンター.
6. Hayashi, Midori and David Y. Oshima, "Graded (metric) tenses in embedded clauses: The case of South Baffin Inuktitut", *Semantics and Linguistic Theory* 27, 2017.5.12-14. University of Maryland.
7. Oshima, David Y., "The prosody of positively biased negative polar interrogatives in Japanese: Post-focal reduction or deaccenting?", The 53rd Annual Meeting of Chicago Linguistic Society, 2017.5.25–27. University of Chicago.
8. Oshima, David Y., "Remarks on epistemically biased questions", The 31st Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation, 2017.11.16–18. University of the Philippines Cebu.
9. 高橋清子「タイ語小辞 *káo* の対話者志向の機能:会話コーパスの一分析」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24-25. 首都大学東京.
10. 伊藤さとみ「談話機能から見る中国語における文末助詞"吗"と"呢"の比較」, お茶の水女子大学中国文学会第 36 回大会, 2017.4.22. お茶の水女子大学.
11. 伊藤さとみ「疑問文中の語気助詞"呢"の機能:疑問演算子か対照話題マーカークをめぐって」, 大東文化大学中国言語文化学術シンポジウム, 2017.9.17. 大東文化大学.
12. Hara, Yurie, "Evidentials and Causal Relations: an experimental approach", The 2nd Asian Junior Linguistics conference, 2017.12.8-10. 国際基督教大学.
13. Hara, Yurie, "Topics are Conditionals", The 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL13), 2017.5.25–28. 国際基督教大学.
14. Hara, Yurie, "Causality and Evidentiality", 21st Amsterdam Colloquium, 2017.12.20–22. アムステルダム.
15. Hara, Yurie and Katsuhiko Sano, "Conditional Questions Revisited", *Inquisitiveness Below and Beyond the Sentence Boundary*, 2017.12.18-19. アムステルダム.
16. Hara, Yurie, Hiromu Sakai and Naho Orita, "Evidentials in Causal Premise Semantics: A Rating Study", *Logic and Engineering of Natural Language Semantics* 14 (LENLS 14), 2017.12.13-15. 筑波大学.
17. Hara, Yurie, "*Darou* as an entertain modal with a shiftable deictic agent: An inquisitive approach", The

- 25th Japanese/Korean Linguistics Conference, 2017.10.12-14. ハワイ大学.
18. 原由理枝・酒井弘・オリタナホ「証拠性 (Evidentiality) と因果関係の非対称性」, *Prosody and Grammar Festa 2*, 2018.2.17-18. 国立国語研究所.
 19. Hara, Yurie, Hiromu Sakai and Naho Orita, "Factors contributing to speakers' choice of evidential markers in Japanese: Causal judgement and direct witness", *Workshop on experimental studies on pragmatic inference*, 2017.7.21. 早稲田大学.
 20. Hara, Yurie, Hiromu Sakai and Naho Orita, "Japanese Evidentials and Rational Speech Act Model—a preliminary report", *Sapporo Semantics Workshop*, 2017.7.8. 北星学園大学.
 21. Soh, Hooi Ling, "Mandarin Chinese sentence final de as a marker of private evidence", *The 92nd Annual Meeting of the Linguistic Society of America*, 2018.1.5–8. Salt Lake City.
 22. Reese, Brian and Hooi Ling Soh, "Parenthetical I'm telling you as a marker of private evidence", *The 92nd Annual Meeting of the Linguistic Society of America*, 2018.1.5–8. Salt Lake City.
 23. Nagaya, Naonori and Florinda Palma Gil, "Teaching Filipino: The Case of Tokyo University of Foreign Studies", *Foreign Language Summit 2017*, 2017.10.18. フィリピン大学ディルマン校.
 24. Florinda Palma Gil and Naonori Nagaya, "CEFR-Based Can-Do Approach to Teaching Filipino as a Second Language", *Foreign Language Summit 2017*, 2017.10.18. フィリピン大学ディルマン校.
 25. Nagaya, Naonori, "Focus and prosody in Tagalog: An experimental study", *95 years of UP Linguistics*, 2017.8.24. フィリピン大学ディルマン校.
 26. McCready, Eric, G. Winterstein, R. Lai and Z. Luk, "A Corpus Based Analysis of the Gendered Use of Cantonese Sentence Final Particles", *22nd International Conference on Yue Dialects*, 2017.12.8. Education University of Hong Kong.
 27. McCready, Eric, G. Winterstein, R. Lai and Z. Luk, "Authority and Gendered Speech: Cantonese Particles and Sajiao", *CSSP*, 2017.11.24. University of Paris 7.
 28. McCready, Eric and Chris Davis, "An Invocational Theory of Slurs", *Logic and Engineering of Natural Language Semantics 14 (LENLS 14)*, 2017.12.13-15. 筑波大学.
 29. McCready, Eric and R. Henderson, "How Dogwhistles Work", *Logic and Engineering of Natural Language Semantics 14 (LENLS 14)*, 2017.12.13-15. 筑波大学.
 30. McCready, Eric, "Honorifics: Register and Invocation", *Workshop on Register*, 2017.8.29. ZAS Berlin.
- [社会に向けた成果発表]計2件
1. 野元裕樹「もっと知りたい！世界のことば:マレー語」, 『英語教育』9, 60, 大修館書店, 2017.
 2. 長屋尚典「もっと知りたい！世界のことば:タガログ語」, 『英語教育』1, 大修館書店 2018.
- [その他]計2件
1. Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, David Moeljadi, "TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo)", 日本語, ビルマ語, マレー語, インドネシア語, 英語の平行コーパス. <https://github.com/matbahasa/TALPCo>
 2. Nomoto, Hiroki, Hannah Choi, David Moeljadi and Francis Bond, "MALINDO Morph: Kamus morfologi untuk bahasa Melayu/Indonesia", マレー語・インドネシア語の形態情報辞書. https://github.com/matbahasa/MALINDO_Morph

「アルタイ型」言語に関する類型的研究

研究期間： 2015–2017（代表：山越康裕 / 所員 4，共同研究員 14）

所員： 山越康裕，呉人徳司，児倉徳和，渡辺己

共同研究員： 麻生玲子，梅谷博之，江畑冬生，蝦名大助，風間伸次郎，鍛冶広真，下地理則，松本亮，吉岡乾，吉村大樹，白尚燁，蔡熙鏡，Arzhaana SYURYUN, Gang JIN

研究会等の内容

2017年度第1回研究会(通算第7回目)

日時:2017年6月11日(日)10:30–15:30

場所:AA研マルチメディア会議室(304)

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

1. 鍛冶広真(AA研共同研究員, 東京大学)

「エウエン語の形動詞」

2. 黒島規史(東京外国語大学大学院生)

「朝鮮語における連用節内のテンスとモダリティ」

3. 全員

総合討論・成果に関して

2017年度第2回研究会(通算第8回目)

日時:2017年12月3日(日)10:00–16:00

場所:AA研マルチメディア会議室(304)

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

1. 風間伸次郎(AA研共同研究員, 東京外国語大学)

「アルタイ諸言語と朝鮮語, 日本語におけるいわゆる「再帰代名詞」の対照研究」

2. 山越康裕(AA研所員)

「モンゴル諸語における非定形動詞の定形用法」

3. 児倉徳和(AA研所員)

「シベ語・満洲語の名詞化要素 ngge の機能変化」

4. 全員

総合討論・成果に関して

研究成果一覧

[学術論文]計13件

1. 風間伸次郎「アルタイ諸言語と朝鮮語, 日本語におけるいわゆる「再帰代名詞」の対照研究」, 『北方言語研究』8, 1–36, 2018. (査読有)
2. 風間伸次郎「ことばの癖いろいろ ー日本語みたいな言語の癖ー」, 『日本語学』Jan-37, 4–13, 明治書院, 2018.
3. 白尚燁「地域言語学的観点から見たツングース諸語の補助動詞」, 『北方言語研究』8, 59–79, 2018. (査読有)
4. Watanabe, Honoré, "The polysynthetic nature of Salish", *The Oxford Handbook of Polysynthesis*, 623–

- 642, Oxford University Press, 2017. (査読有)
5. 蝦名大助「カムサ語の類別詞と名詞分類の概要」, 『東京大学言語学論集』39, 2018. (査読有)
 6. 江畑冬生「統語的要素を含む派生に見る語彙的緊密性 (lexical integrity) の問題」, 『東京大学言語学論集』39, 41–53, 2018.
 7. 江畑冬生「トゥバ語の再帰」, 『北方言語研究』8, 81–89, 2018. (査読有)
 8. 江畑冬生「表音文字の非表音性: サハ語と現代韓国語の対照を中心に」, 『言語の普遍性と個別性』9, 1–10, 2018. (査読有)
 9. Yamakoshi, Yasuhiro, "Sentence-final possessive markers in Shinekhen Buryat", *Proceedings of The 13th Seoul International Altaic Conference: Contemporary Outlooks on Altaic Languages*, 33–52, The Altaic Society of Korea, 2017.
 10. Yamakoshi, Yasuhiro, "Mongol torol xelnuudijn "insubordination" (gishuun bus oguulber)", *Mongol Sudlal ba Togtvortoj Xogzhil*, 289–292, International Association for Mongol Studies, 2017.
 11. 梅谷博之「モンゴル語の他動詞派生接辞 -GA が他動詞につく場合」, 『ユーラシア諸言語の多様性と動態—20 号記念号— (CSEL Series 20)』, 463–471, ユーラシア言語研究コンソーシアム, 2018. (査読有)
 12. 児倉徳和「シベ語におけるテンスとモダリティ —特に「過去」のテンス性について—」, 『ユーラシア諸言語の多様性と動態—20 号記念号— (CSEL Series 20)』, 281–306, ユーラシア言語研究コンソーシアム, 2018. (査読有)
 13. 児倉徳和「シベ語における「非現実」と知識管理」, 『東京大学言語学論集』39, 161–183, 2018.
- [口頭発表等]計 13 件
1. 白尚燁「地域言語学的観点から見た東ツングース諸語」, 第 32 回北方民族文化シンポジウム: 環北太平洋地域の伝統と文化 2 アムール下流域・沿海地方, 2017.10.8. オホーツク・文化交流センター.
 2. 江畑冬生「トゥバ語の再帰」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24. 首都大学東京.
 3. 江畑冬生「サハ語の連体修飾節—内容補充節での補文標識挿入に関する日本語との対照—」, *Prosody and Grammar Festa 2*, 2018.2.17. 国立国語研究所.
 4. 江畑冬生「トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dir の用法」, 2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2018.3.29. 京都大学ユーラシア文化研究センター.
 5. 山越康裕「モンゴル諸語における分詞の統語機能と文末標識」, 2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2018.3.29. 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
 6. 山越康裕・児倉徳和「研究の現地還元: アプリ開発 音声再生スマホアプリ "LingDyTalk"」, 『チベット牧畜文化辞典』パイロット版公開記念ワークショップ『「チベット牧畜文化辞典」の未来を語る』/「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容—ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて—」2017 年度第 3 回研究会 (通算第 3 回目), 2018.3.28. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 7. 山越康裕「話者コミュニティに何をどう還すか」, 全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」第 2 回合同研究集会, 2018.1.18. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 8. 山越康裕「モンゴル諸語における非定形動詞の用法の発達: 日本語との若干の対照」, 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 23 回研究会, 2017.12.9. 東京外国語大学.
 9. Yamakoshi, Yasuhiro, "Sentence-final possessive markers in Shinekhen Buryat", *The 13th Seoul*

- International Altaistic Conference, 2017.7.14. モンゴル国立大学.
10. Yoshioka, Noboru, "Echo-formation in Kati as a neighbouring language of Kalasha and Khovar", 33rd South Asian Languages Analysis Roundtable, 2017.5.15. Adam Mickiewicz University.
 11. 吉岡乾「ブルシヤスキー語スリナガル方言で再構成されだした名詞クラス」, 日本言語学会 第 155 回大会, 2017.11.25. 立命館大学.
 12. 吉岡乾「ブルシヤスキー語の名詞修飾表現」, Prosody and Grammar Festa 2, 2018.2.17. 国立国語研究所.
 13. Kogura, Norikazu, "The function of particles =ni' and da in Sibe: Focus and Nominal Reference", The 13th Seoul International Altaistic Conference., 2017.7.14. モンゴル国立大学
- [図書]計 1 件
1. 児倉徳和『シベ語のモダリティの研究』, 勉誠出版, 2018. 全 480 頁.
- [社会に向けた成果発表]計 2 件
1. 白尚燁「地域言語学的観点から見た東ツングース諸語」, 『北方民族文化シンポジウム報告』32, 41–48, 2018.
 2. 山越康裕「中国東北部でことばを調べる—中国語以外のことば」, 東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」
- [その他]計 2 件
1. 山越康裕「モンゴル諸語対照基本語彙データベース」, 既刊資料をもとに集成したモンゴル諸語の基本語彙データベース. <http://mongolicbv.aa-ken.jp/index.html>
 2. 山越康裕・児倉徳和「iOS/Android アプリ "LingDyTalk"」, 数字認識機能を用いた音声再生アプリ. <https://lingdy.aa-ken.jp/publications/tools-and-archives/3980>

参照文法書研究

研究期間: 2016–2017 (代表: 渡辺己 / 所員 4, 共同研究員 15)

所員: 渡辺己, 澤田英夫, 児倉徳和, 山越康裕

共同研究員: 阿部優子, 蝦名大助, 加藤重広, 川澄哲也, 黒木邦彦, 下地理則, 千田俊太郎, 仲尾周一郎, 長屋尚典, 新永悠人, 林範彦, 牧野友香, 松本亮, 吉岡乾, 米田信子

研究会等の内容

第 4 回研究会 2017-07-15(土)

13:00–13:10 1. はじめに

13:10–14:30 2. 川澄哲也(AA 研共同研究員, 松山大学):「中国語の参照文法書について」

14:40–16:00 3. 林範彦(AA 研共同研究員, 神戸市外国語大学):「中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」

16:10–16:40 4. Tun Aung Kyaw(AA 研客員教授): "Problems arising from compiling a new reference grammar of modern colloquial Burmese"

16:50–18:10 5. 澤田英夫(AA 研所員):「インドおよび周辺地域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」

18:10-18:30 全体討議および連絡事項等

第5回研究会 2018-03-06-07(火・水)

発表者: 仲尾, 蝦名, 千田, 長屋, 松本, 渡辺己

1日目

10:30-11:50 1. 仲尾周一郎(AA 研共同研究員, 大阪大学)「北東アフリカ非バントゥー系諸言語の文法」

11:50-12:50 休憩

12:50-14:10 2. 渡辺己(AA 研所員)「セイリッシュ語の文法書について」

14:20-15:40 3. 蝦名大助(AA 研共同研究員, 神戸山手大学)「南米先住民諸語の文法書」

15:50-17:10 4. 千田俊太郎(AA 研共同研究員, 京都大学)「パプア諸語の文法書について」, 「朝鮮語の文法書について」

17:10-18:00 全体討議

2日目

10:30-11:50 5. 松本亮(AA 研共同研究員, 京都外国語大学)「ロシア内ウラル諸語の文法書」

11:50-12:50 休憩

12:50-14:10 6. 長屋尚典(AA 研共同研究員, 東京外国語大学)「西オーストロネシア諸語の文法書」

14:10-15:00 総括

研究成果一覧

[学術論文]計16件

1. 加藤重広「日本語の構文推意:推意解釈から構文機能への拡張」, 『構文と意味の拡がり』, 119-140, くろしお出版, 2017.(査読有)
2. 加藤重広「日本語副助詞の統語語用論的分析」, 『日本語語用論フォーラム』2, 1-46, ひつじ書房, 2017.(査読有)
3. 加藤重広「北奥方言における行為要求表現」, 『北海道大学文学研究科紀要』151, 49-59, 北海道大学文学研究科, 2017.
4. 加藤重広「文脈の科学としての語用論 —演繹的文脈と線条性」, 『語用論研究』18, 78-101, 開拓社・日本語用論学会, 2017.
5. Watanabe, Honoré, "The polysynthetic nature of Salish", *The Oxford handbook of polysynthesis*, 623-642, Oxford University Press, 2017.(査読有)
6. Yamakoshi, Yasuhiro, "Sentence-final possessive markers in Shinekhen Buryat", *Proceedings of The 13th Seoul International Altaistic Conference: Contemporary Outlooks on Altaic Languages*, 33-52, The Altaic Society of Korea, 2017.
7. Yamakoshi, Yasuhiro, "Mongol torol xelnuudijn "insubordination" (gishuun bus oguulber)", *Mongol Sudlal ba Togtvortoj Xogzhil*, 289-292, International Association for Mongol Studies, 2017.
8. Hayashi, Norihiko, "A Sketch of the Buyuan Jino Case-Marking System", 『神戸外大論叢』68(2), 181-202, 神戸市外国語大学 研究会, 2018.3.(査読有)
9. Hayashi, Norihiko, "On the Buyuan Jino Noun Phrase Structure", *Tokyo University Linguistic Papers*, 39, 71-88, 東京大学人文社会系研究科言語学研究室, 2018.3.(査読有)
10. Shimoji, Michinori, "Dialects", *Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*, 87-113, Cambridge University Press, 2017.(査読有)

11. 千田俊太郎・金善美「朝鮮語の kesita 文: 實演提示機能を中心に」, 『ありあけ 熊本大学言語学論集』17, 1-26, 2018.
 12. Sawada, Hideo, "The Phonology of Lhangsu, an Undescribed Northern-Burmish Language", *Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL)* 『ユーラシア諸言語の多様性と動態』(20号記念号: 追悼 庄垣内正弘先生). 20, 381-404, ユーラシア言語コンソーシアム, 2018. (査読有)
 13. 児倉徳和「シベ語におけるテンスとモダリティ —特に「過去」のテンス性について—」, 『ユーラシア諸言語の多様性と動態』, 281-306, 2018. (査読有)
 14. 児倉徳和「シベ語における「非現実」と知識管理」, 『東京大学言語学論集』39, 161-183, 2018.
 15. 仲尾周一郎「ベニシヤングル・アラビア語に関する覚書」, *Studies in Ethiopian Languages* 6, 2017. (査読有)
 16. 蝦名大助「カムサ語の類別詞と名詞分類の概要」, 『東京大学言語学論集』39, 2018. (査読有)
- 〔口頭発表等〕計 20 件
1. 加藤重広「日本語の語用選好と統語特性」, 成蹊大学公開シンポジウム『語用論と認知言語学の接点を求めて』, 2017.8.29. 成蹊大学.
 2. 山越康裕「モンゴル諸語における分詞の統語機能と文末標識」, (十六科研等合同研究会)2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2018.3.29. 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
 3. 山越康裕・児倉徳和「研究の現地還元: アプリ開発 音声再生スマホアプリ "LingDyTalk"」, 『チベット牧畜文化辞典』パイロット版公開記念ワークショップ『「チベット牧畜文化辞典」の未来を語る』/「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」2017年度第3回研究会(通算第3回目), 2018.3.28. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 4. 山越康裕「話者コミュニティに何をどう還すか」, 全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」第2回合同研究集会, 2018.1.18. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 5. 山越康裕「モンゴル諸語における非定形動詞の用法の発達: 日本語との若干の対照」, 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第23回研究会, 2017.12.9. 東京外国語大学.
 6. Yamakoshi, Yasuhiro, "Sentence-final possessive markers in Shinekhen Buryat", The 13th Seoul International Altaistic Conference, 2017.7.14. モンゴル国立大学.
 7. 林範彦「チノ語悠楽方言の数量詞句の統語的機能と位置」, 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会第4回公開発表会兼「数詞句の構文的性格」を考える国際シンポジウム, 2017.4.16. 大阪府立大学 I-site なんば.
 8. 牧野友香「ランバ語の過去テンスに見る時間の区分」, 日本アフリカ学会第54回学術大会, 2017.5.20. 信州大学.
 9. 牧野友香「ランバ語の2種類の Anterior -li-VR-ile 形式と -aa-VR-a 形式」, 日本言語学会第154回大会, 2017.6.24. 首都大学東京.
 10. Makino, Yuka, "Past and Anterior in Lamba", 柴谷ゼミ(平成29年度 国際共同研究促進プログラム—準体法研究を中心とした機能文法理論の新展開—), 2017.7.7. 大阪大学.
 11. 阿部優子「ベンデ語の語学教材のマルチメディア版」, 情報資源利用研究センター (IRC) 設立20周年記念シンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て、活かす」(事例紹介ライトニ

- ングトーク), 2017.12.9. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
12. 阿部優子「場所を項とするスワヒリ語動詞」, *LingDy3* 第 12 回文法研究ワークショップ:「場所」を項とする動詞, 2018.1.25. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 13. Yoshioka, Noboru, "Echo-formation in Kati as a neighbouring language of Kalasha and Khowar", 33rd South Asian Languages Analysis Roundtable, 2017.5.15. Adam Mickiewicz University.
 14. 吉岡乾「ブルシヤスキー語スリナガル方言で再構成されだした名詞クラス」, 日本言語学会 第 155 回大会, 2017.11.25. 立命館大学.
 15. 吉岡乾「ブルシヤスキー語の名詞修飾表現」, *Prosody and Grammar Festa 2*, 2018.2.17. 国立国語研究所.
 16. 澤田英夫「ビルマ語群北部下位語群の未記述言語」, チベット=ビルマ言語学研究会第 41 回会合, 2017.4.22. 京都大学文学部.
 17. Sawada, Hideo, "Northern Burmish languages and Burmese", Workshop 'Language in Early Burma', 2017.10.10. SOAS, University of London.
 18. Sawada, Hideo, "Two Undescribed Dialects of Northern Burmish Sub-branch: Gyanno? and Tho?lhang", The 50th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2017.11.26. Fragrant Hill Hotel, Beijing.
 19. 澤田英夫「カチンの言語のフィールドワーク」, 言語処理学会第 24 回年次総会チュートリアル(フィールド言語学), 2018.3.12. 岡山コンベンションセンター.
 20. Kogura, Norikazu, 2017. "The function of particles =ni' and da in Sibe: Focus and nominal reference", The 13th Seoul International Altaic Conference., 2017.7.14. National University of Mongolia.

[図書]計 3 件

1. Shimoji, Michinori, *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*, Kyushu University Press, 2017. 437 pp.
2. 下地理則『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』, くろしお出版, 2018. 全 346 頁.
3. 児倉徳和『シベ語のモダリティの研究』, 勉誠出版, 2018. 全 480 頁.

[社会に向けた成果発表]計 3 件

1. 澤田英夫「ミャンマー・カチン州のことば」, 東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」, 2017.2.14. 府中市生涯学習センター.
2. 山越康裕「中国東北部でことばを調べる—中国語以外のことば」, 東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」, 2017.2.21. 府中市生涯学習センター.
3. 阿部優子「著者インタビュー「阿部優子さんのまき」」, 『子どもの本だより』11, 12 月号, 徳間書店 (URL: <http://www.tokuma.jp/kodomonohon/jinterviewinfo?tid=14722>)

[その他]計 3 件

1. 山越康裕「モンゴル諸語対照基本語彙データベース」, 既刊資料をもとに集成したモンゴル諸語の基本語彙データベース. <https://mongolicbv.aa-ken.jp/index.html>
2. 山越康裕・児倉徳和「iOS/Android アプリ "LingDyTalk"」, 数字認識機能を用いた音声再生アプリ. <https://lingdy.aa-ken.jp/publications/tools-and-archives/3980>
3. 阿部優子「産経児童出版文化賞・翻訳作品賞」, M.ミチエリンスカ(文), A.ミジエリンスカ and D.ミジエリンスキ(絵), 阿部優子(訳)『ややつ, ひらめいた! 奇想天外発明百科』徳間書店.

バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ 1)

研究期間: 2016–2018 (代表: 阿部優子 / 所員 2, 共同研究員 16)

所員: 渡辺己, 品川大輔

共同研究員: 阿部優子, 安部麻矢, 梶茂樹, 角谷征昭, 神谷俊郎, 小森淳子, 塩田勝彦, 古本真, 牧野友香, 森本雪子, 米田信子, 若狭基道, Koen BOSTON, Nancy C. KULA, Seunghun LEE, Lutz MARTEN

研究会等の内容

7月22日(土)

- 1) 阿部優子(AA 研共同研究員, 東京女子大学)「3月国際WSの報告と今年度の計画」
- 2) 品川大輔(AA 研所員)「ロンドン大学 SOAS バントゥ WS の報告」
- 3) 米田信子(AA 研共同研究員, 大阪大学)「バントゥ諸語の名詞修飾節に見られるマイクロ・バリエーション—新たなパラメターの提案—」
- 4) 全員「ディスカッション:各メンバーが追及するトピック(パラメータに基づく)に関する brain-storming と "matching"—今年度以降の研究アジェンダの設定—」

12月17日(土)

- 1) 古本真(AA 研共同研究員, 大阪大学/日本学術振興会)「「完了」と「完結」はどのように記述すべきか:スワヒリ語の二つの方言の記述から分かること」
- 2) Hannah Gibson(ロンドン大学 SOAS/大阪大学) "The interaction between tense-aspect and information structure in Bantu"
- 3) 全員「メンバーの調査言語における完了形データの類型に関する討論」

3月24日(土)

- 1) Seunghun Lee(AA 研共同研究員, 国際基督教大学)「ツォンガ語(S.53)のマイクロ・バリエーション(マスターストに基づいて)」
- 2) 全員「成果物編集・出版に関する打ち合わせ」

研究成果一覧

[学術論文]計9件

1. 小森淳子「ニジェール・コンゴ語族における動詞派生形と「受動文」」, 『言語文化研究』44, 33–53, 2018.. (査読有)
2. Yoneda, Nobuko, "Noun-modifying constructions in Swahili and Japanese", *Levels in Clause Linkage: A crosslinguistic survey*, 433–451, Mouton De Gruyter, 2018. (査読有)
3. Yoneda, Nobuko, "Herero", *Levels in Clause Linkage: A crosslinguistic survey*, 791–846, Mouton De Gruyter, 2018.
4. 米田信子「日本語の視点からアフリカ諸語を見る —日本語とバントゥ諸語の対照研究—」, 『適塾』50, 45–52, 2017. (査読有)
5. Kaji, Shigeki, On the Intransitive usage of transitive verbs in Tooro, a Bantu language of Western Uganda,

Journal of African Languages and Linguistics. 38(2), 187–222, 2017. (査読有)

6. Kaji, Shigeki, Do we need to postulate a different tone pattern for monosyllabic verbs in Nyoro?, 『京都産業大学論集 人文科学系列』 51, 1–17, 2018. (査読有)
7. Kaji, Shigeki, "From Nyoro to Tooro: Historical and Phonetic Accounts of Tone Merger", *Tonal Change and Neutralization*, 330–349, Mouton De Gruyter, 2018. (査読有)
8. 塩田勝彦「ヨルバのポピュラー音楽に見る文化の変容と伝統の再構築」, アフリカ文学研究会会報『MWENGE』44, 1–12, 2018. (査読有)
9. 若狭基道「アムハラ語とウォライタ語の普通名詞の対応」, 『東京大学言語学論集』39, 343–364, 2018. [口頭発表等]計 19 件
 1. 小森淳子「ニジェール・コンゴ諸言語の動詞の態 (Voice) に関する類型論的考察」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20. 信州大学教育学部.
 2. 牧野友香「ランバ語の過去テンスに見る時間の区分」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20. 信州大学.
 3. 牧野友香「ランバ語の 2 種類の Anterior –li-VR-ile 形式と-aa-VR-a 形式」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24. 首都大学東京.
 4. Makino, Yuka, "Past and Anterior in Lamba", 柴谷ゼミ (平成 29 年度 国際共同研究促進プログラム—準体法研究を中心とした機能文法理論の新展開—), 2017.7.7. 大阪大学.
 5. 米田信子「ガンダ語の多重目的語構文—3 つの目的語の現れ方—」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20. 信州大学.
 6. 米田信子「日本語の視点からアフリカ諸語を見る—日本語とバントゥ諸語の対照言語研究」, 洪庵忌, 2017.6.5. 適塾.
 7. 米田信子「3 スワヒリ語と民族語の言語接触による文法レベルの影響」(ワークショップ「スワヒリ語圏アフリカにおける多言語状況の実態—言語接触状況下での多様な言語現象から捉える—」), 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.23. 首都大学東京.
 8. 米田信子「スワヒリ語の名詞修飾節 —2 種類の「関係節」の比較から—」, Nominal Festival 3, 2017.7.8. 大阪大学豊中キャンパス.
 9. 阿部優子「ベンデ語の語学教材のマルチメディア版」, 情報資源利用研究センター (IRC) 設立 20 周年記念シンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て, 活かす」(事例紹介ライトニングトーク), 2017.12.9. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 10. 阿部優子「場所を項とするスワヒリ語動詞」, LingDy3 第 12 回文法研究ワークショップ: 「場所」を項とする動詞, 2018.1.25. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 11. 品川大輔「シェンの 2 つの流動性」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.05.20. 信州大学.
 12. 品川大輔「スワヒリ語を基盤とする都市混合言語における新たな文法特徴の創出」, 日本言語学会第 154 回学術大会, 2017.06.25. 首都大学東京.
 13. Shinagawa, Daisuke, "Microparametrizing ní in Kilimanjaro Bantu: A test case from Uru (and Rombo)", Project meeting of "Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, Contact and Change", 2017.10.25. SOAS, University of London.
 14. Shinagawa, Daisuke, "On some typological characteristics and their group-internal variation in Kilimanjaro Bantu languages", Linguistics departmental seminar series, SOAS, 2017.10.31. SOAS,

University of London.

15. Shinagawa, Daisuke, "Micro-typological observation on negation marking systems in Chaga", Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, contact and change, Workshop at SOAS, 2018.3.27. SOAS, University of London.
16. 梶茂樹「日本学術会議提言「ことばに対する能動的態度を育てる取り組みー初等中等教育における英語教育の発展のために」をめぐって」, 日本学術会議夏季部会, 2017.7.31. 島根大学.
17. 梶茂樹「無文字社会の文字的コミュニケーションーアフリカでの言語調査から」, 神戸外国語大学講演会, 2017.10.23. 神戸外国語大学.
18. 梶茂樹「無文字社会の文字的コミュニケーションーアフリカでの言語調査から」, 日本ことわざ文化学会, 2018.3.3. 立命館大学.
19. 塩田勝彦「ヨルバ・ポピュラー音楽の発展に見る民族的要素の変遷」, 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服, 言語・文学班第5回研究会, 2017.10.14. 京都大学稲盛財団記念館.

[図書]計1件

1. 若狭基道『ニューエクスプレス アムハラ語』, 白水社, 2018. 全150頁.

[社会に向けた成果発表]計2件

1. 阿部優子「著者インタビュー「阿部優子さんのまき」」, 『子どもの本だより』11, 12月号, 徳間書店 (URL: <http://www.tokuma.jp/kodomonohon/jinterviewinfo?tid=14722>)
2. 品川大輔「時を知らせるメロディーを聴く」, 『Globe Voice』12, 16-17, 2017.

アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究

研究期間: 2016-2018 (代表: 梶茂樹 / 所員 2, 共同研究員 15)

所員: 澤田英夫, 品川大輔

共同研究員: 安部麻矢, 阿部優子, 角谷征昭, 神谷俊郎, 河内一博, 古閑恭子, 小森淳子, 塩田勝彦, 高村美也子, 仲尾周一郎, 古本真, 牧野友香, 米田信子, 若狭基道

研究会等の内容

第一回研究会

日時: 2017年7月23日(日) 13:30-17:30

場所: AA 研小会議室(302)

1. 牧野友香(AA 研共同研究員, 大阪大学大学院生)

「ランバ語の名詞と動詞に見られる声調パターン」

2. 品川大輔(AA 研所員)

「ロンボ語(Bantu E623)の声調パターン試論」

第二回研究会

日時: 2017年12月23日(土) 13:30-18:00

場所: AA 研小会議室(302)

1. 高村美也子(AA 研共同研究員, 南山大学)

「ボンデイ語の名詞の声調・アクセントパターン」

2. 梶茂樹(AA 研共同研究員, 京都産業大学)

「ニョロ語動詞活用における5つの変化形—とくに声調変化による目的語関係節構文と条件節1形の同一性について」

研究成果一覧

[学術論文]計16件

1. Kaji, Shigeki, "On the Intransitive usage of transitive verbs in Tooro, a Bantu language of Western Uganda", *Journal of African Languages and Linguistics*. 38(2), 187–222, 2017. (査読有)
2. Kaji, Shigeki, "Do we need to postulate a different tone pattern for monosyllabic verbs in Nyoro?", 『京都産業大学論集 人文科学系列』51, 1–17, 2018. (査読有)
3. Kaji, Shigeki, "From Nyoro to Tooro: Historical and Phonetic Accounts of Tone Merger", *Tonal Change and Neutralization*, 330–349, Mouton De Gruyter, 2018. (査読有)
4. 仲尾周一郎「ベニシヤングル・アラビア語に関する覚書」, *Studies in Ethiopian Languages*, 6, 2017. (査読有)
5. 若狭基道「アムハラ語とウォライタ語の普通名詞の対応」, 『東京大学言語学論集』39, 343–364, 2018.
6. Kawachi, Kazuhiro, "Event integration patterns in Sidaama and Japanese", *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, 313–341, Mouton de Gruyter, 2018. (査読有)
7. Kawachi, Kazuhiro, "Kupsapiny", *Levels in Clause Linkage: a Crosslinguistic Survey*, 2018. 750–801, Mouton de Gruyter, 2018. (査読有)
8. Kawachi, Kazuhiro, "Sidaama", *Levels in Clause Linkage: a Crosslinguistic Survey*, 2018. 685–749, Mouton de Gruyter, 2018. (査読有)
9. 古本 真「スワヒリ語マクンドウチ方言の民話資料一編 —子供が鬼に連れ去られた話—」, 『スワヒリ&アフリカ研究』29, 2018.
10. 塩田勝彦「ヨルバのポピュラー音楽に見る文化の変容と伝統の再構築」, アフリカ文学研究会会報『MWENGE』44, 2018. (査読有)
11. 小森淳子「ニジェール・コンゴ語族における動詞派生形と「受動文」」, 『言語文化研究』44, 33–53, 2018. (査読有)
12. Yoneda, Nobuko, "Noun-modifying constructions in Swahili and Japanese", *Levels in Clause Linkage: A crosslinguistic survey*, 433–451, Mouton De Gruyter, 2018. (査読有)
13. Yoneda, Nobuko, "Herero", *Levels in Clause Linkage: A crosslinguistic survey*, 791–846, Mouton De Gruyter, 2018.
14. 米田信子「日本語の視点からアフリカ諸語を見る —日本語とバントゥ諸語の対照研究—」, 『適塾』50, 45–52, 2017. (査読有)
15. 高村美也子「AIDS 発症女子中学生とその家族の日々の記録」, 『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明』6, 85–92, 2018. (査読有)
16. 高村美也子「人は一人では生きてはいけない—タンザニア・ボンデイの人々の暮らし—」, 『ことわざ』8, 33–36, ことわざ学会, 2018.

[口頭発表等]計33件

1. 梶茂樹「日本学術会議提言「ことばに対する能動的態度を育てる取り組み—初等中等教育における英語教育の発展のために」をめぐって」, 日本学術会議夏季部会, 2017.7.31. 島根大学.

2. 梶茂樹「無文字社会の文字的コミュニケーション —アフリカでの言語調査から」, 神戸外国語大学講演会, 2017.10.23. 神戸外国語大学.
3. 梶茂樹「無文字社会の文字的コミュニケーション —アフリカでの言語調査から」, 日本ことわざ文化学会, 2018.3.3. 立命館大学.
4. Kawachi, Kazuhiro, "An experimental study on causative event descriptions across languages.", Linguistics colloquium (Public lecture), 2018.2.26. Department of Linguistics, Addis Ababa University, Ethiopia.
5. Kawachi, Kazuhiro, "Iconicity in language use", Linguistics colloquium, 2018.2.19. Department of English Literature and Linguistics, Qatar University, Doha, Qatar.
6. 河内一博「クプサビニ語(南ナイル, ウガンダ)のダイクシスの表現:ビデオ実験データの分析」, Prosody and Grammar Festa 2(対照言語学プロジェクト合同発表会), 2018.2.18. 国立国語研究所.
7. Kawachi, Kazuhiro, "Deictic directional suffix complex used for motion, associated motion, and aspect in Kupsapiny", Association for Linguistic Typology 12th Biennial Conference (ALT 12), 2017.12.13. Australian National University, Canberra, Australia.
8. Bellingham, Erika, Stephanie Evers, Kazuhiro Kawachi, Alice Mitchell, and Jürgen Bohnemeyer, "An experimental approach to the semantic typology of causative constructions", Association for Linguistic Typology 12th Biennial Conference (ALT 12), 2017.12.13. Australian National University, Canberra, Australia.
9. 河内一博「分裂構文と疑似分裂構文の区別と使用における前提:シダーマ語の事例からの考察」, 日本言語学会第 155 回大会, 2017.11.25. 立命館大学衣笠キャンパス.
10. Kawachi, Kazuhiro, Erika Bellingham, and Jürgen Bohnemeyer, "Different types of causality and clause linkage in English, Japanese, Sidaama, and Yucatec Maya", 日本認知言語学会第 18 回大会, 2017.9.25. 大阪大学豊中キャンパス.
11. Kawachi, Kazuhiro, and Erika Bellingham, "Japanese juncture-nexus types used for different causality types", 14th Biannual International Conference on Role and Reference Grammar Conference, 2017.8.1. 東京大学駒場キャンパス.
12. Bellingham, Erika, Jürgen Bohnemeyer, Sang Hee Park, Kazuhiro Kawachi, and Anastasia Stepanova, "Causality in discourse: crosslinguistic patterns", 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.18. Belfast Waterfront Center, Belfast, Northern Ireland.
13. 河内一博「シダーマ語の「言う」/「する」を使った表現の慣用化:脱イディオフォン化と語形成」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24. 首都大学東京.
14. 河内一博「通言語的に稀なシダーマ語の原因・理由構文」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20. 信州大学教育学部キャンパス.
15. 古本真「スワヒリ語マクンドゥチ方言における主題を標示する指示詞の縮約形」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24. 首都大学東京.
16. 古本真「スワヒリ語マクンドゥチ方言の記述から浮かび上がる*-mala「終わる」の文法化のプロセス」, 日本言語学会第 155 回大会, 2017.11.25. 立命館大学.
17. 古本真「スワヒリ語マクンドゥチ方言の名詞クラスを記述するための覚え書き」, 言語記述研究会第 80 回例会, 2017.6.18. 京都大学.

18. 品川大輔「シェンの2つの流動性」, 日本アフリカ学会第54回学術大会, 2017.05.20. 信州大学.
 19. 品川大輔「スワヒリ語を基盤とする都市混合言語における新たな文法特徴の創出」, 日本言語学会第154回学術大会, 2017.06.25. 首都大学東京.
 20. Shinagawa, Daisuke, "Microparametrizing *ni* in Kilimanjaro Bantu: A test case from Uru (and Rombo)", Project meeting of "Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, Contact and Change", 2017.10.25. SOAS, University of London.
 21. Shinagawa, Daisuke, "On some typological characteristics and their group-internal variation in Kilimanjaro Bantu languages", Linguistics departmental seminar series, SOAS, 2017.10.31. SOAS, University of London.
 22. 小森淳子「ニジェール・コンゴ諸言語の動詞の態 (Voice) に関する類型論的考察」, 日本アフリカ学会第54回学術大会, 2017.5.20. 信州大学教育学部.
 23. 阿部優子「ベンデ語の語学教材のマルチメディア版」, 情報資源利用研究センター (IRC) 設立20周年記念シンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て、活かす」(事例紹介ライトニングトーク), 2017.12.9. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 24. 阿部優子「場所を項とするスワヒリ語動詞」, LingDy3 第12回文法研究ワークショップ:「場所」を項とする動詞, 2018.1.25. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 25. 牧野友香「ランバ語の過去テンスに見る時間の区分」, 日本アフリカ学会第54回学術大会, 2017.5.20. 信州大学.
 26. 牧野友香「ランバ語の2種類の Anterior -li-VR-ile 形式と -aa-VR-a 形式」, 日本言語学会第154回大会, 2017.6.24. 首都大学東京.
 27. Makino, Yuka, "Past and Anterior in Lamba", 柴谷ゼミ (平成29年度 国際共同研究促進プログラム—準体法研究を中心とした機能文法理論の新展開—), 2017.7.7. 大阪大学.
 28. 米田信子「ガンダ語の多重目的語構文—3つの目的語の現れ方—」, 日本アフリカ学会第54回学術大会, 2017.5.20. 信州大学.
 29. 米田信子「日本語の視点からアフリカ諸語を見る—日本語とバントゥ諸語の対照言語研究」, 洪庵忌, 2017.6.5. 適塾.
 30. 米田信子「3 スワヒリ語と民族語の言語接触による文法レベルの影響」(ワークショップ「スワヒリ語圏アフリカにおける多言語状況の実態—言語接触状況下での多様な言語現象から捉える—」), 日本言語学会第154回大会, 2017.6.23. 首都大学東京.
 31. 米田信子「スワヒリ語の名詞修飾節—2種類の「関係節」の比較から—」, Nominal Festival 3, 2017.7.8. 大阪大学豊中キャンパス.
 32. 高村美也子「タンザニア・ボンデイ族の助け合い精神」, ことわざフォーラム 2017, 2018.11.25. 杏林大学 井の頭キャンパス
 33. 高村美也子「タンザニアの生活」, 第3回『世界—楽しいアフリカ講座』, 2017.10.28. JICA 中部なごや地球ひろば
- [図書]計1件
1. 若狭基道『ニューエクスプレス アムハラ語』, 白水社, 2018. 全150頁.
- [社会に向けた成果発表]計1件
2. 阿部優子「著者インタビュー「阿部優子さんのまき」」, 『子どもの本だより』11, 12月号, 徳間書店

(URL: <http://www.tokuma.jp/kodomonohon/jinterviewinfo?tid=14722>)

[その他]計1件

1. 阿部優子「産経児童出版文化賞・翻訳作品賞」, M.ミCHEルスカ(文), A.ミジェリンスカ and D.ミジェリンスキ(絵), 阿部優子(訳)『ややっ, ひらめいた! 奇想天外発明百科』徳間書店.
http://eventsankei.jp/child_award/index.html

南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション

研究期間: 2016–2018 (代表: 中川裕 / 所員 1, 共同研究員 7)

所員: 中山俊秀

共同研究員: 大野仁美, 菅原和孝, 高田明, 田中二郎, 丸山淳子, Christfried NAUMANN

研究会等の内容

第1回臨時研究集会(2017年5月20日, 於 信州大学教育学部)

中川裕「田中二郎ブッシュマン写真展(東京)と会期中『トークイベント』について」

中川裕・高田明・大野仁美「7月刊行『FIELDPLUS』巻頭特集:カラハリ隊の研究課題の記事について」

全員参加討議:今年度の現地調査スケジュール, 進展について

第2回臨時研究集会(2017年7月15日, 於 東京外国語大学413研究室)

全員参加討議「グイ・ガナ狩猟用具の保存と目録作成について」

全員参加討議「スマートフォンと実用的正書法」

2017年度第1回研究会(通算第2回目)(2017年11月10日, 於 津田塾大学千駄ヶ谷校舎)

中川裕「グイ語文法・語彙勉強会」

全員参加討議「言語民族誌的グイ・ガナ動物事典編纂ワークショップ」

研究成果一覧

[学術論文]計15件

1. 中川裕 "Haba lexical tonology", *Khoisan Languages and Linguistics*, 108–119, Rüdiger Köppe Verlag, 2017. (査読有)
2. Sugawara, Kazuyoshi, "A Theory of 'Animal Borders': Thoughts and Practices toward Non-human Animals among the G|ui Hunter-Gatherers", *Social Analysis*. 61 (2), 100–117, 2017. (査読有)
3. 菅原和孝「障がい者が描くこと・生きること——自閉症をもつ「ゆっくん」の絵画表現」, 『ナラティブとケア』9, 74–81, 2018.
4. 菅原和孝「狩猟採集民の手ぶり」, 『手の百科事典』, 490–494, 朝倉書店, 2017.
5. Takada, A., "Introduction to the supplementary issue "Reconstructing the paradigm of African Area Studies in a globalizing world"", *African Study Monographs, Supplementary Issue*. 54, 3–12, 2018.
6. Takada, A., "The Kyoto School of Ecological Anthropology: A Source of African Area Studies at Kyoto University", *African Study Monographs, Supplementary Issue*. 54, 41–55, 2018. (査読有)
7. Morelli, G. A., N. Quinn, N. Chaudhary, M. Vicedo, M. Rosabal-Coto, H. Keller, M. Murray, A. Gottlieb, G. Scheidecker, and A. Takada, "Ethical Challenges of Parenting Interventions in Low- to Middle-income Countries", *Ethical Journal of Cross-Cultural Psychology*. 49, 5–24, 2018. (査読有)

8. 三澤健宏・木村真希子・丸山淳子「国際関係学科における 2 年生セミナーの実践報告について」, 『津田塾大学紀要』特別号 II, 25–31, 2018.
9. Maruyama, Junko, "From "Displaced Peoples" to "Indigenous Peoples": Experiences of the !Xun and Khwe San in South Africa", *African Study Monographs, Supplementary Issue*. 54, 137–154, 2018. (査読有)
10. 丸山淳子「ボツワナ中西部における「ブッシュマン観光」の成立と展開: 観光と地域の社会関係のダイナミズム」, 『アフリカ研究』92, 2018. (査読有)
11. 丸山淳子・目黒紀夫「アフリカにおける「住民参加型観光」の再検討—地域社会の視点から—」, 『アフリカ研究』92, 2018.
12. 丸山淳子「南アフリカの先住民」が現れるまで: ポスト・アパルトヘイト時代のサンへの挑戦」, 『100 万人のフィールドワーカーシリーズ: 社会問題と出会う』, 132–149, 2017.
13. 丸山淳子「狩猟採集民の移動と定住化」, 『世界地誌シリーズ8アフリカ』, 78–79, 2017.
14. 丸山淳子・木村真希子・深山直子「いま, なぜ「先住民」か」, 『先住民からみる現代世界: わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』, 1–20, 昭和堂, 2018.
15. 丸山淳子「先住性と移動性の葛藤: ボツワナの狩猟採集民サンの遊動生活と土地権運動」, 『先住民からみる現代世界: わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』, 245–264, 昭和堂, 2018.

[口頭発表等]計 27 件

1. 中川裕「コイサン3語族を横断する音韻特徴: 遺伝子的距離との関係」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20. 信州大学教育学部.
2. 中川裕「クリック子音体系の言語獲得: ギイ語事例研究」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24. 首都大学東京.
3. 中川裕「ブッシュマンの道具を言語学的に見る」, FIELDPLUS トークイベント「砂漠の狩人の半世紀: ブッシュマンの伝統と変容」, 2017.7.15. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 中川裕・宇野園子「コイサン諸語における器質性構音障害の症例: 軽度舌小帯短縮症のギイ語話者によるクリック子音音素の発音」, 日本言語学会第 155 回大会, 2017.11.25. 立命館大学.
5. 田中二郎「アフリカの狩猟採集民ブッシュマンの生活と社会」, 共生社会システム学会 シンポジウム「共生社会と持続可能性」, 2017.9.2. 名古屋学院大学名古屋キャンパス.
6. 大野仁美「焦点表示と焦点関連構文: ギイ語の場合」, 日本言語学会第 155 回大会, 2017.11.25. 立命館大学.
7. 高田明「イントロダクション」, 第 6 回景観形成の自然誌コロキウム, 2018.3.5. 京都大学.
8. 高田明「養育者—子ども間相互行為研究への人類学的アプローチ: ナミビア北中部のクン・サンにおける睡眠, 授乳, ジムナスティックの分析から」, 子どものこころの分子統御機構研究センター平成 29 年度連続セミナー第 4 回, 2018.1.9. 大阪大学大学院連合小児発達学研究所.
9. 高田明「イントロダクション」, 第 9 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー, 2017.12.8. 京都大学
10. Takada, A., "Introduction to Voices for The Future: African Area Studies in a Globalizing World", International symposium "France-Japan Area Studies Forum", 2017.12.2. Kyoto University.
11. Takada, A., "The medium of instruction in north-central Namibia in colonial times", 7th African Forum: Grahamstown: 'African potentials' to develop alternative methods of addressing global issues, 2017.11.25. Rhodes University.

12. 高田明「文化を再生産する: ブッシュマンとフィールドワーカーの現場で何が起きているか」, トーク・イベント「アフリカ文化探検の 50 年から未来を展望する: 今, 世界が学べること」, 2017.11.19. 京都大学.
13. 高田明「言語人類学, エスノメソドロジー, 会話分析ーコミュニケーションの民族誌から相互行為の人類学へー」, 第 90 回日本社会学会大会: テーマセッション「エスノメソドロジーと会話分析の半世紀」, 2017.11.4. 東京大学本郷キャンパス.
14. 高田明「子育ての自然誌: ナミビア北中部のクン・サン(ブッシュマン)の事例から」, 大同生命地域研究賞第 11 回ミニフォーラム, 2017.10.25. 大同生命保険会社.
15. 高田明「イントロダクション」, 第 8 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー, 2017.10.13. 京都大学.
16. 高田明「子育ての自然誌: ナミビア北中部のクンにおける養育者ー子ども間相互行為の事例から」, 第 106 回日本小児科学会山形地方会, 2017.8.26. ホテルメトロポリタン山形.
17. Takada, A. and Y. Sugiyama, "The quest to re-establish a good life: Practices associated with the rituals of abnormal delivery and funerals among the G|ui and G||ana of Botswana", The 2017 Satterthwaite Colloquium on African Ritual and Religion: The Moral Imagination, 2017.7.23. Grasmere, U.K.
18. 高田明「音楽の起源再考: サンにおける乳児向け発話の事例分析から」, 日本赤ちゃん学会第 17 回学術集会: ラウンドテーブル 3「ヒトの音楽性に迫る: その起源と発達についての多角的検討」, 2017.7.7, 9. 久留米シティプラザ.
19. Takada, A., "Language Socialization among the San: Reconsidering Infant Directed Speech", Language Socialisation in trilingual communities in Africa and beyond: Brainstorming Workshop, 2017.6.10 . Centre for Linguistics, Leiden University.
20. Takada, A., "De-centering Europe: Not only from the South but also from the East and from the North", The GSSC conference "The Global South on the Move: Transforming Capitalism, knowledge and ecologies", 2017.6.7. The University of Cologne, Germany.
21. 高田明「ナミビア北中部における景観の変遷: クンとオバンボのコンタクトゾーンにおける地域史再考」, 日本文化人類学会第 51 回研究大会, 2017.5.27. 神戸大学.
22. 高田明「植民地期の南西アフリカ(現ナミビア)北中部における教育媒介言語」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.21 . 信州大学.
23. 丸山淳子「ボツワナにおける「ブッシュマン観光」の成立とその展開」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.21 . 信州大学.
24. 丸山淳子「先住民の法廷闘争と遊動生活: ボツワナのサンを事例に」, シンポジウム: 先住民族と法: ー文化人類学, 憲法学, 国際法学の立場からー, 2017.9.30. 中京大学.
25. Maruyama, Junko, "Divided Land, Shared Land: Recent Land Issues among the San Hunter-Gatherers in Central Kalahari", African Forum: African Potentials to Develop Alternative Methods of Addressing Global Issues, 2017.11.26. Rhodes University, South Africa.
26. Maruyama, Junko, "Nature conservation, land access and economic disparities among the San hunter-gathers in Southern Africa", France-Japan Area Studies Forum: Voices for the Future: African Area Studies in a Globalizing World, 2017.12.3. Kyoto University.
27. 丸山淳子「カラハリ砂漠の子育てに学ぶ」, よこはま国際フォーラム, 2018.2.4. JICA 横浜.

[図書]計6件

1. 田中二郎『アフリカ文化探検——半世紀の歴史から未来へ』, 京都大学学術出版会, 2017. 全 xix+754 頁.
2. Takada, A., *Co-operative Engagements in Intertwined Semiosis: Essays in Honour of Charles Goodwin*, The University of Tartu Press, 2018. 416 pp.
3. 高田明『狩猟採集民からみた地球環境史: 自然・隣人・文明との共生』, 東京大学出版会, 2017. 全 307 頁.
4. 高田明『子どもを産む・家族をつくる人類学: オールタナティブへの誘い』, 勉誠出版, 2017. 全 309 頁.
5. Takada, A., *The cultural nature of attachment: Contextualizing relationships and development. Struengmann Forum Reports, vol. 22, J. R. Lupp, series editor*, MIT Press, 2017. 429 pp.
6. 深山直子・丸山淳子・木村真希子(編)『先住民からみる現代世界: わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』, 昭和堂, 2018. 全頁.

[社会に向けた成果発表]計4件

1. 中川裕「カラハリ狩猟採集民の言語民族誌的な辞書を編む」(巻頭特集, 中川裕責任編集), 『FIELDPLUS』18, 2-11, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017.
2. 中川裕「カラハリ狩猟採集民の語彙研究から言語の普遍性と多様性の理解へ」, 『FIELDPLUS』18, 4-5, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017.
3. 中川裕「グイ・ガナ語の「食べる」と温度語彙」, 『FIELDPLUS』18, 6-7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017.
4. 大野仁美「オバサンの子どものなかに自分のキョウダイ? グイ語の親族名称体系」, 『FIELDPLUS』18, 8-9, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017.

[その他]計1件

1. 中川裕「『田中二郎写真展: 一九七〇年代までの伝統的狩猟採集生活を送るブッシュマン』」, 田中二郎・京都大学名誉教授が撮影した, 1970年代までの伝統的生活を送るカラハリ狩猟採集民の写真 35 枚を展示した特別写真展. 於: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1 階資料展示室, 2017年7月6日~7月28日

アジア文字研究基盤の構築1: 文字学に関する用語・概念の研究

研究期間: 2017-2019 (代表: 荒川 慎太郎 / 所員 2, 共同研究員 11)

所員: 荒川慎太郎, 澤田英夫

共同研究員: 大竹昌巳, 岡田一祐, 岡野賢二, 落合淳思, 黒澤直道, 笹原宏之, 清水政明, 永井正勝, 町田和彦, 森若葉, 吉川雅之

研究会等の内容

2017年度第1回研究会(2017/6/3-4)

荒川慎太郎「西夏文字一字形と構成の特徴」

岡野賢二「ビルマ語碑文文字一字形と構成の特徴」

吉川雅之「漢語派諸言語の書記言語化—字形と表記体系」

落合淳思「漢字の字形変化と抽象性」

2017年度第2回研究会(2017/10/7-8)

永井正勝「古代エジプト聖刻文字—字形と構成の特徴—」

森若葉「楔形文字—字形と構成の特徴」

町田和彦「ブラーフミー文字の謎」

岡田一祐「古平仮名の軌跡(900–1900)」

2017年度第3回研究会+公開ワークショップ(2018/2/17-18)

荒川慎太郎「チベット・ビルマ系言語の各種文字」(公開ワークショップ)

孫伯君「西夏文字」(公開ワークショップ)

黒澤直道「ナシ文字」(公開ワークショップ)

岩佐一枝「ロロ文字」(公開ワークショップ)

澤田英夫「ビルマ系言語の文字」(公開ワークショップ)

岩佐一枝「ロロ文字」(研究会)

清水政明「チュノム」(研究会)

研究成果一覧

[学術論文]計4件

1. 荒川慎太郎「西夏語の双数接尾辞について」, *Diversity and Dynamics of Eurasian Languages*, 69–84, ユーラシア言語研究コンソーシアム, 2018.(査読有)
2. 笹原宏之「上代の日本製漢字の製作と使用 —その前史と展開—」, 『口訣研究』39, 43–86, 2017.(査読有)
3. 清水政明「アジアのなかの漢字:字喃」, 『日本語ライブラリー 漢字』, 165–167, 朝倉書店, 2017.
4. 吉川雅之「アジアのなかの漢字:中国・台湾・香港・シンガポール」, 『日本語ライブラリー 漢字』, 143–154, 朝倉書店, 2017.

[口頭発表等]計3件

1. 黒澤直道「ナシ語の辞書・語彙集・用例集について」, 「中国雲南省大理白族の白文資料の基礎的研究—白文語彙・用例の収集と解読法の確立」2017年度第1回国内研究集会, 2017.7.16. 東海大学.
2. 大竹昌巳「契丹文字—その解読のプロセス」, 京都大学言語学懇話会第104回例会, 2017.7.8. 京都大学.
3. 吉川雅之「港臺本土語言書面化之對比」, The 22nd International Conference on Yue Dialects, 2018.12.8. 香港教育大学.

[図書]計1件

1. 沖森卓也・笹原宏之『日本語ライブラリー 漢字』, 朝倉書店, 2017. 全182頁.

マレー語方言の変異の研究

研究期間: 2017–2019 (代表: 内海 敦子 / 所員 1, 共同研究員 11)

所員： 塩原朝子

共同研究員： 内海敦子, 稲垣和也, スリ・ブディ・レストリ, 長屋尚典, 野元裕樹, 降幡正志, 三宅良美,
Karl Alexander ADELAAR, Antonia SORIENTE, Sonja RIESBERG, Yanti

研究会等の内容

2007年度第1回研究会(通算1回目)2017年4月23日(日)10:00-17:00

「研究の目的」, 「マレー語変種に関する術語の整理」内海敦子, 塩原朝子

「マレー語変異にかかわるパラメターの設定」「オンライン地図を用いた言語地図作成について」全員

「マナド・マレーの definite marker」塩原朝子

2017年度第2回研究会(通算第3回目)日時:2017年10月15日(日)13:00-17:00

「Lampung 調査報告」内海敦子, スリ・ブディ・レストリ「Belitung 調査報告」三宅良美「オンライン地図を用いた言語地図作成について」全員

2017年度第3回研究会(通算第3回目)国際ワークショップ "Varieties of Malayic Languages" 日時:2017年12月19日(火)~21日(木)言語:英語

"How to record (semi-)spontaneous utterance" 塩原朝子,

"Malayic Variety project: purposes and discussion on Questionnaires" 内海敦子,

"Langscape: Documentation applications of a language mapping tool and resource" Thomas J. Connors (University of Maryland),

"The Indonesian language of intercommunication in the province of Kaltara in Kalimantan" Antonia Soriente,

"A preliminary report on the structure of Pontianak Malay" 稲垣和也,

"Pun and discourse structure" 野元裕樹,

"Interpersonal and expository grammatical organisation in Indonesian conversation" Michael C. Ewing,

"The Emergence of Indonesian Electronic Communication as a Distinct Linguistic Variety" Thomas J. Connors,

"A preliminary report on Belitung Malay" 三宅良美,

"A general syntactic and phonological description of ablaut in some varieties of Sumatra Malayic" Yanti,

"Referential strategies in some Malay varieties" 塩原朝子

研究成果一覧

[学術論文]計6件

1. 内海敦子「談話におけるインドネシア語のヴォイス」, 『明星大学研究紀要—人文学部—日本文化学科』26, 67-80, 明星大学, 2018.
2. Nomoto, Hiroki, "Sintaksis nominalisasi bahasa Melayu", *Aspek Teori Sintaksis Bahasa Melayu*, 71-117, Dewan Bahasa dan Pustaka, 2017.
3. Kartini Abd. Wahab and Hiroki Nomoto, "Konstruksi penaikan dan kawalan dalam bahasa Melayu", *Aspek Teori Sintaksis Bahasa Melayu*, 118-144, Dewan Bahasa dan Pustaka, 2017.
4. Hayashi, Midori and David Oshima, "Graded (metric) tenses in embedded clauses: The case of South Baffin Inuktitut", *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory* 27, 134-152, Linguistic Society of America, 2017. (査読有)
5. 長屋尚典「タガログ語の幸福論」, 『東京外国語大学論集』94, 53-68, 東京外国語大学, 2017. (査読有)

有)

6. 長屋尚典「タガログ語の所有と存在のあいだ」, 『東京大学言語学論集』39, 223-242, 東京大学出版会言語学研究室, 2018. (査読有)

[口頭発表等]計 10 件

1. Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa and Asako Shiohara, "Reclassifying the Leipzig Corpora Collection for Malay/Indonesian", The 21st International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL), 2017.5.4-6. マレーシア国民大学ランカウイ研究センター.
2. 野元裕樹, 赤瀬川史朗, 塩原朝子「類似言語におけるウェブコーパス整備: マレー語とインドネシア語の言語判定の事例」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24-25. 首都大学東京.
3. Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa and Asako Shiohara, "Identifikasi bahasa dalam pembinaan korpus web bahasa Melayu/Indonesia", The 4th Atma Jaya Conference on Corpus Studies (ConCorps 2017), 2017.7.21. インドネシア, アトマジヤ・カトリック大学.
4. Nomoto, Hiroki, "Variations in Austronesian bare passive agents", Current Issues in Comparative Syntax: Past, Present, and Future, 2018.3.1-2. シンガポール国立大学.
5. Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, David Moeljadi and Hideo Sawada, "TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo)", 言語処理学会第 24 回年次大会, 2018.3.12-16. 岡山コンベンションセンター.
6. Hayashi, Midori and David Y. Oshima, "Graded (metric) tenses in embedded clauses: The case of South Baffin Inuktitut", Semantics and Linguistic Theory 27, 2917.5.12-14. University of Maryland.
7. Nagaya, Naonori and Florinda Palma Gil, "Teaching Filipino: The Case of Tokyo University of Foreign Studies", Foreign Language Summit 2017, 2017.10.18. フィリピン大学ディルマン校.
8. Florinda Palma Gil, Naonori Nagaya, "CEFR-Based Can-Do Approach to Teaching Filipino as a Second Language", Foreign Language Summit 2017, 2017.10.18. フィリピン大学ディルマン校.
9. Nagaya, Naonori, "Focus and prosody in Tagalog: An experimental study", 95 years of UP Linguistics, 2017.8.24. フィリピン大学ディルマン校.
10. Furihata, Masashi, "Analysis on Pitch Movement of Sentences with Topic Markers in Sundanese", The Sixth International Symposium on the Languages of Java (Isloj 6), 2017.5.18-19. Universitas Dian Nuswantoro, Semarang, Central Java, Indonesia.

[図書]計 1 件

1. 降幡正志, 原真由子『ニューエクスプレス インドネシア語』, 白水社, 2017. 全 150 頁.

[社会に向けた成果発表]計 4 件

1. Nomoto, Hiroki, Kanji Okano, David Moeljadi, TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo), (URL: <https://github.com/matbahasa/TALPCo>)
2. Nomoto, Hiroki, Hannah Choi, David Moeljadi and Francis Bond, MALINDO Morph: Kamus morfologi untuk bahasa Melayu/Indonesia, (URL: https://github.com/matbahasa/MALINDO_Morph)
3. 野元裕樹「もっと知りたい! 世界のことば: マレー語」, 『英語教育』9, 60, 大修館書店, 2017.
4. 長屋尚典「もっと知りたい! 世界のことば: タガログ語」, 『英語教育』1, 大修館書店, 2018.

チュルク諸語における膠着性の諸相 —音韻・形態統語・意味の統合的研究—

研究期間: 2017–2019 (代表: 佐藤久美子 / 所員 1, 共同研究員 17)

所員: 児倉徳和

共同研究員: 佐藤久美子, 青山和輝, 江畑冬生, 大崎紀子, 奥真裕, 栗林裕, 菅沼健太郎, 新田志穂, 林徹, 菱山湧人, 日高晋介, 吉村大樹, Jakshylyk AKMATALIEVA, Aydin Ozbek, Ayse Nur TEKMEN, Nazgul SHAMSHIEVA, Arzhaana SYURYUN

研究会等の内容

初年度は3回の研究会(うち1回は国際研究集会)を開催した。

第1回:2017年7月22日(土)14:00–18:00 於 AA 研マルチメディア会議室(304)

14:00–14:10 佐藤久美子(AA 研共同研究員, 国立国語研究所)

趣旨説明

14:10–15:20 江畑冬生(AA 研共同研究員, 新潟大学)

「サハ語・トゥバ語研究から見たチュルク諸語研究の諸問題」

15:30–16:40 日高晋介(AA 研共同研究員, 東京外国語大学大学院生)

「ウズベク語の形動詞・動名詞—一定動詞・副動詞と比較して」

16:50–18:00 佐藤久美子(AA 研共同研究員, 国立国語研究所)

「文頭・文末イントネーションの機能について—トルコ語と日本語の比較—」

第2回:2017年10月7日(日)14:00–18:00 於 AA 研大会議室(303)

14:00–15:10 菅沼健太郎(AA 研共同研究員, 九州大学)

「チュルク諸語の韻律類型論に関する予備的考察」

15:20–16:30 新田志穂(AA 研共同研究員)

「現代ウイグル語の形動詞 —音調的な特徴に着目して—」

16:40–17:50 大崎紀子(AA 研共同研究員, 京都大学)

「チュルク語補助動詞についての研究ノート」

17:50–18:00 佐藤久美子(AA 研共同研究員, 国立国語研究所)

「国際シンポジウムに向けての打ち合わせ」

※コメンテーター 久保智之(九州大学), 塚本秀樹(愛媛大学), 藤代節(神戸市看護大学)

第3回

国際シンポジウム "Current Topics in Turkic Linguistics"

日時:2018年3月3日(土)10:30–17:50, 2018年3月4日(日)10:40–17:30

場所:AA 研マルチメディア会議室(304)

使用言語:英語

10:30–10:40

はじめに

10:40–11:50 Lars JOHANSON (University of Mainz)

"A Half Century of Turkic Linguistics"

13:00–14:10 Elisabetta RAGAGNIN (Free University of Berlin)

"The Puzzling Uygur-Uriankhay of Northern Mongolia"

14:20–14:45 Arzhaana SYURYUN (AA 研共同研究員, Russian Academy of Sciences, Saint-Petersburg),
江畑冬生 (AA 研共同研究員, 新潟大学)

"The So-called Evidential Suffix -dir in Tyvan"

14:45–15:10 大崎紀子 (AA 研共同研究員, 京都大学), Jakshylyk AKMATALIEVA (AA 研共同研究員,
東京外国語大学)

"Volitionality and the Auxiliary Verbs in Kyrgyz: The Case of kör- and jiber-"

15:15–15:40 日高晋介 (AA 研共同研究員, 東京外国語大学大学院)

"The Syntactic Functions of Participles and Verbal Nouns in Uzbek: A Focus on the Attributive Function"

15:40–16:05 新田志穂 (AA 研共同研究員)

"Syntactic Structure and Prosody in Modern Uyghur"

16:05–16:30 菱山湧人 (AA 研共同研究員, 東京外国語大学大学院)

"On the Suffix -IEK in Tatar Noun Clauses"

16:40–17:50 林徹 (AA 研共同研究員, 東京大学)

"Ten Years in Kreuzberg: Change in Language Use and Awareness among Turkish-German Bilingual
Students"

18:00–20:00

情報交換会 (関係者のみ)

3月4日

10:40–11:50 A. Sumru ÖZSOY (Boğaziçi University)

"Specificity, Case and Reference in Turkish"

13:00–13:25 栗林裕 (AA 研共同研究員, 岡山大学)

"Topic and Related Constructions in Turkic"

13:25–13:50 Ayşe Nur TEKMEN (AA 研共同研究員, Ankara University)

"Focusing on Broad Tense "-Ar" in Turkish"

13:50–14:15 Aydın ÖZBEK (AA 研共同研究員, Çanakkale Onsekiz Mart University)

"Are We Witnessing Grammaticalization? —Perception of Turkish Native Speakers of et- or yap- Verbs in
Light Verb Constructions—"

14:20–14:45 青山和輝 (AA 研共同研究員, 東京大学大学院)

"Purposive Clauses and the Possibility Marker in Turkish"

14:45–15:10 菅沼健太郎 (AA 研共同研究員, 九州大学)

"The Morphological Approach for Phonological Differences in Turkish Vowel Harmony"

15:10–15:35 吉村大樹 (AA 研共同研究員, Ankara University)

"Morpho-syntactic Behaviour of the Azerbaijani Copular Clitic"

15:35–16:00 江畑冬生 (AA 研共同研究員, 新潟大学)

"From Turkic Locative to Sakha Partitive: A Contrasting Analysis with Tyvan, Tofa, Dolgan and Evenki"

16:10–17:20 Éva Á. CSATÓ JOHANSON (Uppsala University)

"Transeurasian Postverbal Constructions"

17:20–17:30

おわりに

研究成果一覧

[学術論文]計 13 件

1. 大崎紀子, シャミシエワ・ナズグリ「キルギス語の補助動詞 kal-の意味と本質ーアスペクトと共起制限をめぐる二つの疑問ー」, *Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative*, 20, 345–362, ユーラシア言語研究コンソーシアム, 2018.(査読有)
2. シャミシエワ・ナズグリ「日本語とキルギス語における「なる」文の諸用法」, 『間谷論集』12, 日本語日本文化教育研究会, 2018 年.(査読有)
3. Kuribayashi, Yuu, "Subject and Object and Topic in Turkish, Turkic and Japanese", *Prof. Dr. Talat Tekin Hatıra Kitabı*, 661–677, Uluslararası Türk Akademisi, 2017.
4. Kuribayashi, Yuu, "Verb-Verb compounding in Japanese and Turkish", *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, 227–246, Mouton de Gruyter, 2018.(査読有)
5. 栗林裕「トルコ語の数量詞遊離について」, *Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative*, 20, 307–320, ユーラシア言語研究コンソーシアム, 2018.(査読有)
6. 青山和輝「トルコ語目的節の多義についての一考察」, 『東京大学言語学論集』39, 383–390, 2018..
7. 江畑冬生「統語的要素を含む派生に見る語彙的緊密性 (lexical integrity) の問題」, 『東京大学言語学論集』39, 41–53, 2018.
8. 江畑冬生「トゥバ語の再帰」, 『北方言語研究』8, 81–89, 2018.(査読有)
9. 江畑冬生「表音文字の非表音性: サハ語と現代韓国語の対照を中心に」, 『言語の普遍性と個別性』9, 1–10, 2018.(査読有)
10. Hishiyama, Yuto, "Tatar teleneñ sıyfat fiğellärdä eş başqaruwçı sub'ektniñ belderelüwe", *VIII Meždunarodnoj naučno-praktičeskoj konferencii «Soxranenie i razbitie rodnix jazykov v uslovijax mnogonacional'nogo gosudarstva: problemy i perspektivy»*, 341–343, Izdatel'stvo "Kazanskij universitet", 2017.
11. Hishiyama, Yuto and Näbiullina Güzäl, "Tatar häm başqort tellärendä isemläşkän sıyfatlarını tartım belän törlänüw mäsläläse", *Meždunarodnoj naučno-praktičeskoj konferencii «Sovremennye problemy filologii i metodiki prepodavanija jazykov: voprosy i praktiki»*, 26–28, Izdatel'stvo Elabužskogo instituta Kazanskogo federal'nogo universiteta, 2017.
12. Hishiyama Yuto, "Tatar teleneñ quşma cömlälärendäge -lıq quşımçası", *IX Meždunarodnoj naučno-praktičeskoj konferencii «Tjurkskaja lingvokul'turologija: problemy i perspektivy»*, 228–231, Izdatel'stvo "Kazanskij universitet", 2017.
13. Suganuma, Kentaro, "Reinterpretation of the modern Uyghur umlaut", *Proceedings of the 13th Seoul International Altaistic Conference*, 613–625, The Altaic Society of Korea, 2017.(査読有)

[口頭発表等]計 16 件

1. シャミシエワ・ナズグリ「キルギス語における自動詞と他動詞についての一考察: 語彙的 vs. 文法的」, 2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2018.3.29. 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター (羽田記念館).
2. 栗林裕「トルコ語の数詞句」, 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会第 4 回公开发表会・兼「数詞句の構文的性格」を考える国際シンポジウム, 2017.4.16. 大阪府立大学

3. Kuribayashi, Yuu, "Topic marking in Iranian Turkic", The 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL), 2017.5.26. 国際基督教大学.
4. 栗林裕「バルト・スラヴ語世界におけるチュルク系少数言語—カライム語とガガウズ語—」, 日本スラヴ学研究会 2017 年度シンポジウム「バルト諸語とその隣人たち—民族と言語をめぐる諸相—」, 2017.6.17. 上智大学.
5. Kuribayashi, Yuu, "Karşılaştırmalı Dilbilim Bakış Açısıyla Türkçede Ol- Fiili", Uluslararası Türk Dili Konuşan Ülkeler Kurultayı, 2017.11.4. アンカラ・シェラトンホテル, トルコ.
6. 青山和輝「トルコ語・アゼルバイジャン語の複数接辞のバリエーション」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24. 首都大学東京.
7. 青山和輝「アゼルバイジャン語・トルコ語と可能表現」, 日本言語学会第 155 回大会, 2018.11.25. 立命館大学衣笠キャンパス.
8. 江畑冬生「トゥバ語の再帰」, 日本言語学会第 154 回大会, 57125.4.16. 首都大学東京.
9. 江畑冬生「サハ語の連体修飾節—内容補充節での補文標識挿入に関する日本語との対照—」, Prosody and Grammar Festa 2, 2018.02.17. 国立国語研究所.
10. 江畑冬生「トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dir の用法」, 2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2018.03.29. 京都大学ユーラシア文化研究センター.
11. 大崎紀子「キルギス語の名詞修飾: 分詞節と動名詞節」, 国立国語研究所文法研究班「名詞修飾表現」平成 29 年度第 1 回研究発表会, 2017.7.29. 大阪大学豊中キャンパス.
12. アクマタリエワ・ジャクシルク「キルギス語の補助動詞 tašta-の予備的考察—先行する動詞の意味的な特徴を中心に—」, 2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究最新の報告」, 2018.3.29. 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館).
13. 菱山湧人「タタール語のモーダル述語を主要部とする名詞節における主語人称標示」, 2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2018.3.29. 羽田記念館.
14. 菅沼健太郎, 藤家洋昭, アクバイ・オカン・ハルク「エスキシエヒル・カラチャイ語の有声唇歯摩擦音」, 日本言語学会 第 154 回大会, 2017. 6. 24. 首都大学東京.
15. Sukanuma, Kentaro, "Reinterpretation of the Modern Uyghur umlaut", The 13th Seoul International Altaistic Conference, 2017. 7. 15. National University of Mongolia.
16. 菅沼健太郎, 藤家洋昭, アクバイ・オカン・ハルク「エスキシエヒル・カラチャイ語のアクセント—チュルク諸語のアクセント類型論を視野に入れて—」, 日本言語学会 第 155 回大会, 2017. 11. 25. 立命館大学.

[図書]計 2 件

1. 櫻間瑛・中村瑞希・菱山湧人『タタールスタンファンブック:ロシア最大のチュルク系ムスリム少数民族とその民族共和国(連邦制マニアックス)』, パブリブ, 2017. 全 224 頁.
2. 菅沼健太郎『トルコ語と現代ウイグル語の音韻レキシコン』, 九州大学出版会, 2017. 全 226 頁.

[その他]計 1 件

1. 児倉徳和・風間伸次郎「チュルク諸語対照基礎語彙(データベース)」, チュルク諸語の基礎語彙の音声付データベース. 12 言語 27 変種が利用可能(方言・文字リソース含む). <https://turkbv.aaken.jp/turkbv2017/> (2014 年度作成, 現在まで継続して更新中)

文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性

研究期間: 2017–2019 (代表: 中山俊秀 / 所員 3, 共同研究員 16)

所員: 中山俊秀, 峰岸真琴, 呉人徳司

共同研究員: 青井隼人, 大谷直輝, 加藤昌彦, 加藤重広, 呉唯, 下地理則, 鈴木亮子, 高梨博子, 高橋康徳, 中山久美子, 浜田啓志, 堀内ふみ野, 柳村裕, 山下里香, 吉岡乾, Tsuyoshi ONO

研究会等の内容

第1回研究会

日時: 平成29年10月7日(土曜日)午後1時より午後6時; 10月8日(日曜日)午前10時より午後2時

場所: AA 研 405 号室

【プログラム】

10月7日

1. プロジェクト趣旨説明: 中山俊秀 (AA 研所員)
2. 「多重文法 (Multiple Grammar) モデル概説とその理論的意義」: 青井隼人 (AA 研共同研究員, AA 研特任研究員・国立国語研究所)
3. 「日本語の日常会話から見る文法の多重性」: 堀内ふみ野 (AA 研共同研究員, 慶應義塾大学大学院)
4. 言語パターンのジャンル差・スタイル差の実例の発表 (1)
 - ・高梨博子 (AA 研共同研究員, 日本女子大学)
 - ・堀内ふみ野 (AA 研共同研究員, 慶應義塾大学大学院)
 - ・加藤昌彦 (AA 研共同研究員, 慶應義塾大学言語文化研究所)
 - ・大谷直輝 (AA 研共同研究員, 東京外国語大学)
5. オープンディスカッション: 文法の多重性が提起する問題

10月8日

1. 言語パターンのジャンル差・スタイル差の実例の発表 (2)
2. オープンディスカッション: 文法の多重性を踏まえた文法研究を考える

第2回研究会

日時: 平成30年2月11日(日曜日)午前10:30より午後6時

場所: AA 研 304

【プログラム】

1. 「文法知識どのような知識で構成されるか: テーマの概要説明」: 中山俊秀 (AA 研所員)
2. 「文法概念の最適化が妥当な記述と説明を与える」: 黒田航 (杏林大学医学部)
3. 「『幻想』の文法論」: 吉川正人 (慶應義塾大学)
4. オープンディスカッション

研究成果一覧

[学術論文] 計 21 件

1. Toshihide Nakayama, Polysynthesis in Nuuchahnulth, A Wakashan Language, *The Oxford Handbook of Polysynthesis*, 603–622, Oxford University Press, 2017.

2. 中山俊秀「言語知識はどのような形をしているのか」, 『日本認知言語学会論文集』18, 2017.
3. 大野剛・中山俊秀「文法システム再考:話しことばに基づく文法研究に向けて」, 『話しことばへのアプローチ:創発的・学際的談話研究への新たななる挑戦』, 5-34, ひつじ書房, 2017.
4. 高梨博子「インバウンド・コミュニケーションにおけるスタンステーキングの分析ーバフチンの対話原理の視点からー」, 『第40回社会言語科学会研究大会発表論文集』, 72-75, 2017.
5. Kato, Atsuhiko, "Entailed and intended results in Japanese and Burmese accomplishment verbs.", *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, 173-192, Mouton de Gruyter, 2018. (査読有)
6. Kato, Atsuhiko, Burmese, *Levels in Clause Linkage: A Crosslinguistic Survey*, 571-613, Mouton de Gruyter, 2018. (査読有)
7. 堀内ふみ野「響鳴からみる子供の前置詞の使用 -CHILDES を用いた観察から-」, 『日本認知言語学会論文集』17, 339-351, 2017.
8. 大谷直輝「前置詞か副詞辞かを動機づける認知的な要因について」, 『日本認知言語学会論文集』17, 352-364, 2017.
9. 大谷直輝「コーパスと認知言語学」, 『英語コーパス研究シリーズ(7) コーパスと多様な関連領域』7, 51-76, ひつじ書房, 2017.
10. Ono, Tsuyoshi and Ryoko Suzuki, "The use of frequent verbs as reactive tokens in Japanese everyday talk: Formulaicity, florescence, and grammaticization", *Journal of Pragmatics*. 123, 209-219, 2017. (査読有)
11. Ono, Tsuyoshi and Sandra Thompson, "Negative scope, temporality, and clause structure in Japanese and English conversation", *Studies in Language*. 41(3), 543-576, 2017. (査読有)
12. 鈴木亮子「話しことばに見る言語変化」, 『話しことばへのアプローチ:創発的・学際的談話研究への新たななる挑戦』, 39-64, ひつじ書房, 2017.
13. 大野剛・鈴木亮子「話しことばの言語学」理論編イントロダクション, 『話しことばへのアプローチ:創発的・学際的談話研究への新たななる挑戦』, 3, ひつじ書房, 2017.
14. 高橋康徳「「甬」の弱化と出現頻度 -自然発話音声に基づく分析-」, 『国際文化学研究』49, 67-82, 2017.
15. 加藤重広「日本語の構文推意:推意解釈から構文機能への拡張」, 『構文と意味の拡がり』, 119-140, くろしお出版, 2017. (査読有)
16. 加藤重広「日本語副助詞の統語語用論的分析」, 『日本語語用論フォーラム』2, 1-46, ひつじ書房, 2017. (査読有)
17. 加藤重広「北奥方言における行為要求表現」, 『北海道大学文学研究科紀要』151, 49-59, 北海道大学文学研究科, 2017.
18. 加藤重広「文脈の科学としての語用論 -演繹的文脈と線条性」, 『語用論研究』18, 78-101, 開拓社・日本語用論学会, 2017.
19. 峰岸真琴「形態論的類型論とその発展:日本語・韓国語の膠着語性の観点から」, 『韓国語教育論講座 第3巻』, 21-39, くろしお出版, 2018.
20. Bussaba, Banchongmanee and Makoto Minegishi, "On developing Thai spoken corpus for analyzing discourse cohesion", *Proceeding of the National conference "Humanities: realities and power of dreams"*, Chiangmai University, 334-354, Chiangmai University, 2017. (査読有)

21. Yamashita, Rika, "Problems in Explaining Use of desu/masu Forms: Evidence from a Small Community Classroom", 『東京大学言語学論集』 39, 365–380, 2018. (査読有)

[口頭発表等]計 33 件

1. Horiuchi, Fumino and Toshihide Nakayama, "Systematicity in variation within a grammar: A look into 'broken' structure and 'deviant' semantics in Japanese conversation", 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.21. Belfast, Northern Ireland.
2. Nakayama, Toshihide, "Fluctuating robustness of nominal phrases in Nuuchahnulth", 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.20. Belfast, Northern Ireland.
3. 中山俊秀「言語知識はどのような形をしているのか」, 日本認知言語学会第 18 回全国大会, 2017.9.16. 大阪大学.
4. 堀内ふみ野・中山俊秀「会話から見る文法体系の多重性: 日本語の日常会話を例にして」, 第6回動的語用論研究会, 2017.10.1. 京都工芸繊維大学.
5. 中山俊秀「会話に見られる言語表現の文法的特異性」, 日本英語学会第 35 回大会, 2017.11.18. 東北大学.
6. Iwasaki, Shoichi, Yoshiko Matsumoto and Toshihide Nakayama, "Multiplicity in grammar: Modes, genres and speaker's knowledge", 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.21. Belfast, Northern Ireland.
7. Takanashi, Hiroko, "Multiplicity of playful stance markers in Japanese: A dialogic syntax approach", The 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.21. Belfast, Northern Ireland.
8. 高梨博子「インバウンド・コミュニケーションにおけるスタンステーキングの分析—バフチンの対話原理の視点から—」, 第 40 回社会言語科学会研究大会, 2017.9.16. 関西大学.
9. 高梨博子「話しことばが新たに拓く文法の多重性—理論と実践—」, 日本英語学会第 35 回大会, 2017.11.18. 東北大学.
10. 高梨博子「対話統語論からみた遊び表現の文法化現象」, 日本英語学会第 35 回大会, 2017.11.18. 東北大学.
11. Takanashi, Hiroko, "The Dialogic Grounds for the Innovative Use of Japanese Play Stance Markers: Its Diversity, Multiplicity, and Complexity", 科学研究費助成事業「日常の相互行為における定型性: 話しことばを基盤とした言語構造モデルの構築」(研究代表者: 鈴木亮子)研究会合, 2017.11.23. 慶應義塾大学.
12. 加藤昌彦「隣接言語との関係から見たカレン語の語順と借用語」, メコン川中流域を中心とした諸言語の言語実態と変容プロセスの研究, 2017.6.3. 神戸市外国語大学.
13. 加藤昌彦「ビルマ語の mermaid construction」, 東南アジア諸言語研究会, 2017.6.10. 慶應義塾大学.
14. Kato, Atsuhiko, "How did Haudricourt reconstruct Proto-Karen tones?", International Seminar on Languages and Linguistics in Middle Mekong Region, 2018.1.6. 神戸市外国語大学.
15. 堀内ふみ野「英語の親子会話に見られる定型性と「語」の習得」, 第 14 回話しことばの言語学ワークショップ, 2018.2. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
16. 堀内ふみ野「親子の会話における前置詞と副詞辞 —響鳴のパターンに基づく分析—」, 京都言語学コロキウム, 2017.10. 京都大学吉田南キャンパス.

17. 堀内ふみ野「前置詞を含むパターンの習得における発話連鎖の役割」, 藝文学会研究発表会, 2017.6. 慶應義塾大学三田キャンパス.
18. 大谷直輝・中山俊秀・佐治伸郎・吉川正人「用法基盤モデルの観点から言語知識について考える」, 日本認知言語学会第 18 回全国大会, 2017.9.16. 大阪大学.
19. Suzuki, Ryoko, "Predicate-centered view of NPs: A case study in Japanese conversation", 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.20. Belfast, Northern Ireland.
20. Ono, Tsuyoshi and Sandra A. Thompson, "What can Japanese conversation tell us about 'NP'?", 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.20. Belfast, Northern Ireland.
21. Ono, Tsuyoshi and Sandra A. Thompson, "The Pragmatics of the 'Noun Phrase' across Languages: an Emergent Unit in Interaction", 15th International Pragmatics Conference, 2017.7.20. Belfast, Northern Ireland.
22. 鈴木亮子「ぎざじゅうアピール: 言語の定形性と創造性」, 第 6 回人文学研究科言語学分野公開講演会, 2018.3.4. 名古屋大学.
23. 高橋康徳「定量的な観点から見た上海語の変調域」, 日本言語学会第 155 回大会, 2017.11.25. 立命館大学.
24. 加藤重広「日本語の語用選好と統語特性」, 成蹊大学公開シンポジウム『語用論と認知言語学の接点を求めて』, 2017.8.29. 成蹊大学.
25. 峰岸真琴「タイ語の情報構造に関わる諸表現: 「逸脱」による際立たせを巡って」, 東南アジア諸言語研究会, 2017.10.28. 慶應義塾大学.
26. 峰岸真琴「タイ語・カンボジア語の数詞句」, 言語の類型特徴をとらえるための対照研究会, 2017.8.12. 大阪府立大学.
27. Yamashita, Rika, "Emerging use of 'Nanodesu' by fictional characters and girl idols on SNS", Methods in Dialectology 16, 2017.8.8. 国立国語研究所.
28. Kurebito, Tokusu, "On the importance of Mongolian dialects research", 5th International Conference 'Past and Present of the Mongolic Peoples', 2017.8. 24. Mongolian Academy of Sciences, Ulaanbaatar.
29. Kurebito, Tokusu, "On the Chukchi traditional word play", 6th 3E International Conference-- "Enjoyment, Elderly, Edutainment", 2017.10.22. National Taitung University, Taiwan.
30. 呉人徳司「チチハル市梅リスダグル区におけるダグル語の実態調査から見えること」, 第六回 日中国際ワークショップ 「現代中国における言語政策と言語継承 少数言語について考える」, 2017.11.25. 東京外国語大学本郷サテライト.
31. 柳村裕「敬語の習得時期とその話者属性差: 岡崎敬語調査資料の分析」, 日本言語学会第 154 回大会, 2017.6.24. 首都大学東京.
32. 柳村裕「日本語の敬語の機能の変化—愛知県岡崎市における尊敬語・謙譲語使用の減少の事例一」, 日本語学会, 2017.11.11. 金沢大学.
33. 呉人徳司「チュクチ語動詞における自他動詞の派生関係」, 第 24 回対照日本語部門研究会, 2018.3.3. 東京外国語大学.

[図書]計 2 件

1. 鈴木亮子・秦かおり・横森大輔(編)『話しことばへのアプローチ: 創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』, ひつじ書房, 2017. 全 268 頁.

2. Kurebito, Tokusu, *Chukchi Animal Folk Tales with Grammatical Analysis*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. 92 pp.

青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に

基づいて～

研究期間: 2017–2019 (代表: 星泉 / 所員 1, 共同研究員 8)

所員: 星泉

共同研究員: 岩田啓介, 海老原志穂, ジャブ(扎布), ジュ・カザン(居格桑), 津曲真一, ナムタルジャ(南太加), 平田昌弘, 別所裕介

研究会等の内容

第1回研究会(通算第1回目)

2017年5月13日(土)13:30–17:00, 2017年5月14日(日)9:00–17:00

場所:AA 研小会議室(302)

共催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 科学研究費(基盤 B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者: 星泉(AA 研所員), 課題番号:15H03203)

5月13日(土)

(1)岩田啓介(AA 研共同研究員, 日本学術振興会/東京外国語大学)

「清朝支配下のアムド牧畜社会の変容に関する研究の展望」

コメンテーター:別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学)

(2)小川龍之介(帯広畜産大学大学院生)

「屠畜・肉分類と肉利用から観るアムド系チベット遊牧民の価値体系 ~青海省東部の遊牧世帯における家畜の屠殺・解体の事例を通じて~」

コメンテーター:山口哲由(チベット研究家)

5月14日(日)

全員「データベースと辞典編纂に関する打ち合わせ」

第2回研究会(通算第2回目)

2017年10月7日(土)13:30–19:00, 2017年10月8日(日)9:00–15:00

場所:AA 研マルチメディアセミナー室(306)

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

第2回研究会(通算第1回目)

2017年10月7日(土)13:30–19:00, 2017年10月8日(日)9:00–15:00

場所:AA 研マルチメディアセミナー室(306)

10月7日(土)

(1)別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学)

「2017年度夏季調査における宗教語彙収集およびその他調査項目の進捗報告」

(2)星泉(AA 研所員)

「2017年度夏季調査における語彙収集およびその他調査項目の進捗報告」

(3)平田昌弘(AA 研共同研究員, 帯広畜産大学)

「ネパール中央部丘陵地帯におけるタマン族の乳加工体系」, 「ネパール中央部丘陵地帯におけるタマン族の屠殺感・生活感」

(4)山口哲由(研究協力者)

「ラダック・ドムカル村ガイドブックの執筆と出版」

10月8日(日)

全員「辞典編纂に関する検討会」

第3回研究会(通算第3回目)『チベット牧畜文化辞典』パイロット版公開記念ワークショップ「『チベット牧畜文化辞典』の未来を語る」

3月28日(水)

場所:AA 研マルチメディア会議室(304), チベットレストラン タシデレ(曙橋)

使用言語:日本語

共催:共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 科学研究費(基盤B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者:星泉(AA 研所員) 課題番号:15H03203)

(1) 星泉(AA 研所員)

「現地調査と辞典編纂:4年間の軌跡」

(2) 平田昌弘(AA 研共同研究員, 帯広畜産大学)

「辞典への新たな視点:事典をも内包した新しい文化辞典の試み—アムド系チベット牧畜民の乳文化の事例から」

(3) 小野田俊蔵(佛教大学)

「辞典への新たな視点:チベットの食文化と屠畜」

(4) 海老原志穂(AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー)

「辞典の研究への応用:チベット料理のレシピ・アーカイブ」

(5) 山越康裕(AA 研所員)・児倉徳和(AA 研所員)

「研究の現地還元:アプリ開発—音声再生スマホアプリ"LingDyTalk"」

(6) 別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学)

「研究の現地還元:アプリに触れた現地の方々への所感から」

(7) 留学生との対話

(8) パネル・ディスカッション

ディスカッサント:町田和彦(東京外国語大学名誉教授), 加納和雄(駒澤大学), 津曲真一(AA 研共同研究員, 東京理科大学)

研究成果一覧

[学術論文]計11件

1. 小川龍之介・平田昌弘・Nantaijia「屠畜・肉分類と肉利用から観るアムド系チベット遊牧民の価値体系—青海省東部の遊牧世帯における家畜の屠殺・解体の事例を通じて—」, 『北海道民族学』14, 17-31, 2018. (査読有)
 2. 平田昌弘「乳の利用と歴史」, 『乳肉卵の機能と科学』, アイ・ケイコーポレーション, 2018. (査読有)
 3. Ebihara, Shiho, "Evidentiality of the Tibetan verb snang", *Evidential Systems of Tibetan Languages*, 41-60, Mouton de Gruyter, 2017. (査読有)
 4. Ebihara, Shiho, "Amdo Tibetan", *Levels in Clause Linkage*, 451-484, Mouton de Gruyter, 2018. (査読有)
 5. Iwasa, Kazue, Hiroyuki Suzuki, Keita Kurabe, Shiho Ebihara, Satoko Shirai and Ikuko Matsuse, "Tone and accent in Tibeto-Burman", *Studies in Asian Geolinguistics*. 7, 13-19, ILCAA, Tokyo University Foreign Studies, 2017.
 6. 海老原志穂「アムド・チベット語におけるヤクの呼び分け—青海省ツェコ県の事例を中心に—」, 『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』, 379-398, 京都大学人文科学研究所, 2018. (査読有)
 7. ナムタルジャ「アムド(チベット)における家畜に対する宗教儀礼とその変容」, 『チベット文化研究会報』41(1), 21-17, 2017. (査読有)
 8. ナムタルジャ「青海チベットにおける牧畜社会の変容に関する文化人類学的研究」(滋賀県立大学, 博士論文)2017.
 9. 別所裕介「聖地を切り売りする人々—現代チベットの経済開発と民衆的信仰空間の特性」, 『宗教研究』91(2), 201-228, 2017. (査読有)
 10. 別所裕介「混交を内側から切り分ける—チベット高原東縁部の多民族村における宗教実践をめぐって」, 『駒澤・文化』36, 27-55, 2018. (査読有)
 11. 岩田啓介「青海ホシュート部のアムド支配の確立と清朝」, 池田巧・岩尾一史(編)『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』, 65-84, 京都大学人文科学研究所, 2018. (査読有)
- [口頭発表等]計 13 件
1. 星泉「チベットのことばと物語世界」, チベットの文化に触れてみる, 2018.1.27. 鶴見大学会館メインホール.
 2. 星泉「チベット文化講座 映画から読み解くチベットの人びとの暮らしと信仰」, ぎふアジア映画祭, 2017.10.14. 岐阜市文化センター.
 3. 星泉「『チベット牧畜民の一日』解説付き上映」, キキソ チベットまつり, 2017.10.13. 小諸エコビレッジ.
 4. 星泉「ヤクとチベット人」, 上映 and トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険」, 2017.6.17. チベットレストラン タシデレ.
 5. 星泉・大川謙作・三浦順子・岩田啓介「チベット文学ナイト 黒狐の夜」2017.6.2. サロンド富山房 Folio.
 6. 星泉「チベット文学に草原の香りを感じて」, 上映 and トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険」, 2017.5.14. キチム.
 7. 三浦順子・星泉・武井みゆき「東北チベットの暮らしとソントタルジャの世界」, 『草原の河』公開記念 TUFS Cinema チベット映画特集 ～ソントタルジャとの出会い～, 2017.4.22. 東京外国語大学プロメテウス・

ホール.

8. 海老原志穂「ヤクとともにあるチベット人の暮らし」, チベットの文化に触れてみる, 2018.1.27. 鶴見大学会館メインホール.

9. 海老原志穂「チベット人のヤクの見わけ方」, 上映 and トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険」, 2017.5.13. キチム.

10. 岩田啓介「清朝雍正乾隆年間青海蒙古牧地的画定和調整」, 清朝政治発展変遷研究国際学術研討会, 2017.6.18. 復旦大学歴史地理研究中心.

11. Iwata, Keisuke, "The Structure of the Qinghai Khoshut's Rule over the Tibetans", The First International Symposium on Tibetan and Himalayan Studies, 2017.11.25. 陝西師範大学国外蔵学研究中心.

12. 別所裕介「チベット高原の自然と宗教信仰」, チベットの文化に触れてみる, 2018.1.27. 鶴見大学会館メインホール.

13. 別所裕介「宗教儀礼から見たチベット人の自然観—牧畜社会の事例から」, 上映 and トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険」, 2017.5.13. キチム.

[図書]計1件

1. チベット文学研究会 (星泉, 海老原志穂他) (編)『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 vol. 5, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018. 全 208 頁.

[社会に向けた成果発表]計6件

1. 星泉「ひり出せ糞!」, 『月刊みんぱく』Feb-42, 20, 国立民族学博物館, 2018.

2. 星泉「【研究を現地に還元する】チベット牧畜語彙の収集と辞典編纂」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』5, 188–195, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

3. 星泉「【牧畜民の社会進出】木製電動攪乳機の開発—元牧畜民のローカル・イノベーション」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』5, 139–146, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

4. 星泉「文法は生き物。変化し続ける:言葉のダイナミクスを解明する」, 未踏の領野に挑む, 知の開拓者たち vol.43, 国立大学附置研究所・センター長会議 (URL: http://shochoukaigi.org/interview/interview_43/)

5. 海老原志穂「【牧畜民の社会進出】持続可能なコミュニティを目指して—若きチベット人活動家の挑戦」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』5, 147–154, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

6. 別所裕介「【牧畜民の社会進出】牧畜×ベンチャー×イノベーション—現代チベットにおける牧畜の衰退と新たな挑戦」, 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』5, 130–138, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

[その他]計5件

1. 星泉(主編)「チベット牧畜文化辞典オンライン版」, 4年間かけて収集した3,500件に上る牧畜語彙を辞書の形にまとめ, 『チベット牧畜文化辞典』のパイロット版としてオンラインで公開したもの. <https://nomadic.aa-ken.jp/search/> (2018年3月公開)

2. 星泉(主編)「チベット牧畜文化辞典 iOS版」, 『チベット牧畜文化辞典』のパイロット版をiPhoneやiPadでも利用できる形で公開したもの. <https://itunes.apple.com/jp/app/nomadic/id1315312197?mt=8> (2018年3月公開)

3. 星泉(主編)「チベット牧畜文化辞典 PDF 版」,『チベット牧畜文化辞典』のパイロット版を冊子体に編集したもの. http://nomadic.aa-ken.jp/search/pdf/NomaDic_wFig_1_0_20180326.pdf(2018年3月公開)
4. 星泉「ヤクとミルクと女たち展」, AA 研において2017年2月13日から3月11日にかけて実施した「チベット牧畜民の仕事展」の巡回展を各地で開催した. キチム(吉祥寺, 2017年5月10日-21日), チベットレストラン タシデレ(曙橋, 2017年6月8日-7月2日), キキソ チベットまつり(小諸, 2017年10月13日-15日)
5. 星泉「チベット牧畜民の仕事展」, 企画展の内容をブログ形式で紹介するサイト. <http://tibetanpastoralists.blogspot.jp/>

人類社会の進化史的基盤研究(4)

研究期間: 2015-2017 (代表: 河合香吏 / 所員 3, 共同研究員 19)

所員: 河合香吏, 床呂郁哉, 西井涼子

共同研究員: 足立薫, 伊藤詞子, 内堀基光, 大村敬一, 春日直樹, 北村光二, 黒田末寿, 杉山祐子, 曾我亨, 竹ノ下祐二, 田中雅一, 寺嶋秀明, 中川尚史, 中村美知夫, 西江仁徳, 花村俊吉, 船曳建夫, 山越言, David S. SPRAGUE

研究会等の内容

第1回研究会(2017.7.22-23, 於 AA 研):

杉山祐子「食性の変化と調理加工の共同:食が社会にひらかれるとき」

西江仁徳「社会の極限としての孤独性:野生チンパンジーが孤独になるとき」

山越言「チンパンジーは雑草種か?:西アフリカの農業景観における人との共存」

船曳建夫「人間仕掛けのロボット:日本古典芸能における二足直立と歩行の極限化」

第2回研究会(2017.11.11-12, 於 京都大学):

竹ノ下祐二「人新世という極限」

西井涼子「生きる世界の極:死者と精霊そして放射能を手がかりに」

床呂郁哉「ハザード状況下における環境と生存に関する試論:フィリピン南部の紛争と福島原発事故・放射能災害の事例から」

花村俊吉「チンパンジー社会における共在の極限:新入りメスのふるまいに着目して」

第3回研究会(2018.3.17-18, 於 AA 研):

全員「成果論集の出版に関する編集会議」

研究成果一覧

[学術論文]計 28 件

1. Uchibori, Motomitsu, "Introduction for the Special Issue", *Ngingit*. 9, 1-6, 2017.
2. Uchibori, Motomitsu, "Not After the Deluge: A Note on Discourses on the Local Flood Experiences in the Upper Skrang", *Ngingit*. 9, 7-17, 2017.
3. 内堀基光「書評・斎藤綾子・竹沢泰子(編)『人種神話を解体する 1:可視性と不可視性のはざままで』, 『文化人類学』82(3), 411-413, 2018.(査読有)

4. 大村敬一「絶滅の人類学:イヌイトの「大地」の限界条件から「アンソロポシオン」時代の人類学を考える」,『現代思想』45 (4), 228–247, 青土社, 2017.
5. 大村敬一「人類でなくなる朝にむかって:能動的な受動性が拓くおぞましくも美しい地平」,『現代思想』45 (14), 194–215, 青土社, 2017.
6. 大村敬一「宇宙をかき乱す世界の肥やし:カナダ・イヌイトの先住民運動から考えるアンソロポシオン状況での人類の未来」,『現代思想』45 (22), 180–205, 青土社, 2017.
7. Kasuga, Naoki, "Between two truths: Time in Physics and Fiji.", *Social Analysis*. 61(2), 31–46, 2017. (査読有)
8. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, "Introduction: Why the Anthropology of Mono (Things)?", *An Anthropology of Things*, 18–34, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
9. Kawai, Kaori, "The Cicadas Drizzle of the Chamus", *An Anthropology of Things*, 258–271, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
10. Kuroda, Suehisa, "'Things' and Their Emergent Sociality in the Primates' World", *An Anthropology of Things*, 222–240, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
11. Sugiyama, Yuko, "Grassroots innovation in "Natural Society"", *Proceedings of 7th International Workshop on African Moral Economy, Peasant Economy in Comparative and Historical Perspectives*, Kindai University, 2018.
12. Sugiyama, Yuko, "Moral Economy and Social Stratification in Rural Africa: Are We Moving towards a New Platform?", *Proceedings of 8th International Workshop on African Moral Economy, Peasant Economy in Comparative and Historical Perspectives*, Kindai University, 2018.
13. Tsuruta, Tadasu and Yuko Sugiyama, "Coping Njaa(Food Shortage):Food Insecurity and Household Strategies among Agro-Pastoralists in Central Tanzania", 『近畿大学農学部紀要』, 近畿大学農学部, 2018.
14. 杉山祐子「地方農村にみる現金獲得活動と「小規模」の可能性—青森県津軽地域の農産物直売所の事例から—」,『グローバル化するアフリカ農村と「現金の社会化」をめぐる人類学的研究 成果論集』, 112–131, 弘前大学人文社会学部, 2018.
15. 曾我亨「これからの「地域学」」,『地理』62, 29–37, 2017. (査読有)
16. 竹ノ下祐二「人類社会における「教育」の進化—協同的实践としての教育」,『総合人間学 11 (人間にとって学び・教育とはなにか 未曾有の教育危機に直面して)』, 35–38, ハーベスト社, 2017.
17. 竹ノ下祐二「実践共同体としてのヒト社会 (特集「非定型」の視座から発達進化研究のフレームワークを再考する)」,『発達心理学研究』28(4), 176–184, 2017. (査読有)
18. 竹ノ下祐二「「里」と自然体験——ガボンのムカラバ国立公園で」,『子どもたちの生きるアフリカ: 伝統と開発がせめぎあう大地で』, 146–161, 昭和堂, 2017.
19. 田中雅一「侵犯する身体と切断するまなざし」,『フェティシズム研究 3 侵犯する身体』, 3–45, 京都大学学術出版会, 2017.
20. 田中雅一「ランジェリー幻想——官能小説と盗撮, 格子写真」,『フェティシズム研究 3 侵犯する身体』, 309–334, 京都大学学術出版会, 2017.
21. 田中雅一「ナンバリングとカウンティング——ポスト=アウシュヴィッツ時代の人類学にむけて」,『異貌の同時代——人類・学・の外へ』, 97–137, 以文社, 2017.

22. 寺嶋秀明「掛合誠の生態人類学, そのまぶしくもやさしい肖像(解題)」, 『掛谷誠著作集 第 1 巻』, 517-535, 京都大学学術出版会, 2017.
23. 中川尚史『『霊長類研究』の研究(新版)」, 『霊長類研究』33, 59-67, 2017.(査読有)
24. 中川尚史「書評『サルってさいこう!』(オーウェン・デイビー作, 越智典子訳)」, 『霊長類研究』33, 106-107, 2017.(査読有)
25. Nishie H, and M. Nakamura, "A newborn infant chimpanzee snatched and cannibalized immediately after birth: Implications for "maternity leave" in wild chimpanzees", *American Journal of Physical Anthropology*. 165, 194-199, 2018.(査読有)
26. Nakamura M, N. Nakazawa, BR. Nyundo and N. Itoh, "Tongwe names of mammals: Special reference to mammals inhabiting the Kasoje Area, Mahale Mountains, western Tanzania", *African Study Monographs*. 38, 221-242, 2017.(査読有)
27. 山越言「地域研究とヒトと動物の関係学」, 『ヒトと動物の関係学会誌』47, 6-7, 2017.
28. Yamakoshi, Gen, "The Origin of Tool-using Behavior and Human Evolution", *An Anthropology of Things*, 207-221, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018.(査読有)

[口頭発表等]計 30 件

1. 足立薫「香港のマカク属サルと人間の関係」, ヒトと動物の関係学会第 24 回学術大会, 2018.3.4. 慶応大学.
2. Uchibori, Motomitsu, "Was the Iban Longhouse a Community of Care?", Association of Anthropology, Gerontology and the Life Course, 10th Conference, 2017.6.8. Oxford Brookes University.
3. Omura, Keichi, "Opening Remarks", Osaka University - University of Toronto Joint Workshop Infrastructure, Environment, Politics of Knowledge, 2017.5.8. University of Toronto, St. George Campus, Anthropology Building Board Room.
4. 大村敬一「多重地球の生態政治学に向けて:イヌイトの未来からアンソロポシーンを問う」, 日本文化人類学会第 51 回研究大会分科会 C(1)「人新世(anthropocene)を問う:日本の人類学からの応答可能性の探求」, 2017.5.27. 神戸大学 C 会場(B201).
5. Omura, Keichi, "The Earth Multiple: Toward Sympoietic Development of Multiple Worlds in Post-Anthropocene", International Symposium on Environment, Development and International Relations in the Arctic. Session 3: Arctic Societies in Anthropocene, 2017.12.12. Centennial Hall, Hokkaido University.
6. 春日直樹「可視なもの, 不可視なもの:パプアニューギニア民族誌からの考察」, 日本英文学会, 2017.5.20. 静岡大学.
7. 春日直樹「非対称にして双方向の思考様式を考える」, 教育哲学会, 2017.10.14. 大阪大学.
8. 春日直樹「みえるもの, みえないもの:お馴染み「霊」について」, 「臨床と人文社会科学の架橋に向けて」, 2017.11.23. 慶應大学.
9. 春日直樹「記号・視覚・論理:パプアニューギニア民族誌からの考察」, 一橋セミナー, 2018.2.22. 一橋大学.
10. 杉山祐子「植林プロジェクトの「その後」と在来化する技術ータンザニア緑の推進協力プロジェクトの事例を中心に」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.21. 信州大学.
11. 曾我亨「リスク否認をどのように理解するか」, サントリー文化財団プロジェクト「21 世紀の「他者」理解」

- 研究会, 2017.7.1. 北海道大学.
12. 藤田志歩・Chimene NZE NKOGUE・井上英治・竹ノ下祐二「野生ニシローランドゴリラの生活史に伴う糞便中コルチゾール濃度の変化」, 第 33 回日本霊長類学会大会, 2017.7.19. コラッセふくしま.
 13. 坪川桂子・藤田志歩・Etienne F. AKOMO-OKOUE・Yannick P. BITOME-ESSONO・Patrice MAKOULOUTOU・Ghislain W. EBANG-ELLA・竹ノ下祐二「ニシローランドゴリラの群れにおけるシルバーバック消失後の社会的変動」, 第 33 回日本霊長類学会大会, 2017.7.19. コラッセふくしま.
 14. 田中雅一「日本文化人類学会学会賞受賞記念講演「格子と波とナショナリズム <巨大な遺体安置所> で Love Trip を聴きながら考えたことなど」, 日本文化人類学会研究大会, 2017.5.28. 神戸大学.
 15. 田中雅一「アウシュビッツ博物館のガイドの可能性と戦争経験の継承に関する比較考察」, 日本オーラル・ヒストリー学会大会, 2017.9.3. 大阪大学.
 16. 田中雅一「女神とゾンビ——「サイボーグ宣言」の前夜とくその後>から考える」, 一橋大学社会学研究科先端課題研究 Human / Non-Human Interface ワークショップ「アフター・サイボーグ」, 2018.2.3. 一橋大学.
 17. 中川尚史『『霊長類研究』の研究(第 2 版)』, 日本霊長類学会第 33 回大会, 2017.7.16. コラッセふくしま.
 18. 井上英治・小島梨紗・山田一憲・大西賢治・中川尚史・村山美穂「ニホンザルの COMT 遺伝子の地域差と寛容性との関連」, 日本動物行動関連学会・研究会合同大会, 2017.8.30. 東京都目黒区.
 19. 川本芳・中川尚史ほか, 「和歌山タイワンザルワーキンググループ. 和歌山で野生化したタイワンザルの群れの根絶」, 第 62 回プリマーテス研究会, 2018.1. 27. 愛知県犬山市.
 20. 中川尚史・山越言・中田兼介「私はこうして研究者になった. 動物研究の魅力と意義」, 京都大学生協同組合トークイベント, 2017.5.23. 京都大学.
 21. 中川尚史「野生霊長類の研究から人類の起源と進化を探る」, 京都大学平成 29 年度 ELCAS 基盤コース前期講義, 2017.10.21. 京都大学.
 22. 中川尚史「ヒトの知性の基盤としての寛容性—サル学からのアプローチ」, 滋賀県立膳所高等学校平成 29 年度スーパーサイエンスハイスクール『Shiga Science Project 2017』, 2017.12.2. 滋賀県立膳所高等学校.
 23. 中村美知夫「チンパンジーの『日常』から言語について考える」, 第 47 回ホミニゼーション研究会「言語の生物学と進化」, 2017.12.20. 京都大学霊長類研究所.
 24. 中村美知夫・坂坂和彦・伊藤詞子・松本卓也・松阪崇久・仲澤伸子・西江仁徳・島田将喜・高畑由起夫・山上昌紘・座馬耕一郎「野生チンパンジーの対時的屍肉食同所的肉食動物との関係に着目して」, 第 71 回日本人類学会大会, 2017.11.5. 東京大学 .
 25. 中村美知夫・山上昌紘「チンパンジーがヒョウから獲物を奪う」, 第 33 回日本霊長類学会大会, 2017.7.17. コラッセふくしま.
 26. 中村美知夫「チンパンジーの道具利用(+装飾の起源?)」, 「世界のビーズをめぐる人類学的研究」研究会, 2017.4.23. 国立民族学博物館.
 27. 西江仁徳・花村俊吉・坂坂和彦・井上英治・伊藤詞子・清野未恵子・郡山尚紀・中村美知夫・坂巻哲也・座馬耕一郎「タンザニア・マハレの野生チンパンジー社会におけるオスの単独生活の新事例」, 第 71 回日本人類学会大会, 2017.11.5. 東京大学.
 28. Nishie, Hitonaru, "Gestural communication among wild chimpanzees at Mahale, Tanzania: In the case

- of leaf-clipping behavior", Behaviour 2017, 2017.8.2. Estoril Congress Center, Estoril, Portugal
29. 花村俊吉「これまでの議論の整理と今後の方向性: 挨拶・出会い研究で何をを目指すか」, 第7回出合いと挨拶研究会, 2017.5.29. 京都大学.
 30. Yamakoshi, Gen, "Importance of oil-palm based landscape in Tropical West Africa: A case from Guinea", International Workshop "Forest Ecological Resources Security for Next Generation: Development and Routine Utilization of Forest Ecological Resources and their Domestication", 2018.1.15. Kyoto University.

[図書]計5件

1. 京都大学霊長類研究所編(足立薫・中川尚史他, 分担執筆)『世界で一番美しいサル』, エクスナレッジ, 2017. 全223頁.
2. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, (eds.), *An Anthropology of Things*, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. 406 pp.
3. 田中雅一編『フェティシズム研究3 侵犯する身体』, 京都大学学術出版会, 2017. 全493頁.
4. 辻大和・中川尚史(編)『日本のサル—哺乳類学としてのニホンザル研究』, 東京大学出版会, 2017. 全328頁.
5. 中川尚史(監修)『サルってさいこう!』(オーウェン・デイビー作, 越智典子訳), 偕成社, 2017. 全35頁.

[社会に向けた成果発表]計3件

1. 杉山祐子・日比野愛子・曾我亨ほか「地域の持続性に向けた共創手法の探求」プロジェクト, 『平成29年度弘前大学地域未来創生センタージャーナル』, 41-44, 弘前大学特定プロジェクト教育研究センター地域未来創生センター, 2018.
2. 杉山祐子ドキュメンタリー映画「女を修理する男」上映会, 『平成29年度弘前大学地域未来創生センタージャーナル』, 127, 弘前大学特定プロジェクト教育研究センター 地域未来創生センター, 2018.
3. 西江仁徳「野生チンパンジーのメスの『産休』: 出産直後の子殺しリスクへの対抗戦略の可能性」, *Academist Journal*.

[その他]計3件

1. 曾我亨「私のモノは、誰のモノ—アフリカ牧畜社会から考える」, アフリカセミナー. 2017年6月15日, 於仙台国際センター
2. 中村美知夫「マハレのきのこ: 第10回 ヒョウタンツギのモデル! ?—ヒメツチグリの仲間」, 『マハレ珍聞』29, 6-7.
3. 中村美知夫「マハレのきのこ: 第11回 地面から生える手?—カエンタケの近縁種」, 『マハレ珍聞』30, 6-7.

『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために

研究期間: 2015-2017 (代表: 中村隆之 / 所員 1, 共同研究員 8)

所員: 佐久間寛

共同研究員: 中村隆之, 栗飯原文子, 小川了, 佐々木祐, 砂野幸稔, 星埜守之, 真島一郎, 吉田裕

研究会等の内容

第1回研究会(通算第6回目, 2017年6月17日開催)

佐久間寛(AA 研所員)「国際シンポジウムの準備報告」ほか

第2回研究会「国際シンポジウム『プレザンス・アフリケーヌ』研究——超域的黒人文化運動の歴史, 記憶, 現在」(通算第7回目, 2017年8月22~24日開催)

ロミュアルド・フォンクア(パリ第4大学, 『プレザンス・アフリケーヌ』誌編集長)「『プレザンス・アフリケーヌ』: 理念の歴史, 行動する思想」ほか

第3回研究会(通算第8回目, 2018年3月18~19日開催)

廣田郷士(パリ第8大学)「ネグリチュードへのもう一つの文学的アプローチのために? —ネグリチュードにまつわる言説をめぐって—」

林裕哲(一橋大学)「第5回パン・アフリカ会議とくアフリカ」の解放—パン・アフリカニズムからみた戦後世界」ほか

研究成果一覧

[学術論文]計7件

1. 小川了「外からの同化と内なる同化 西アフリカ, セネガルのナショナル・アイデンティティとその葛藤」, 『ナショナル・アイデンティティを問い直す』, 127-146, 山川出版社, 2017.
2. 中村隆之「エドゥアール・グリッサンとアコマ(2)」, 『立命館 言語文化研究』, 2017.(査読有)
3. 中村隆之「アリウン・ジョップ「ニヤーム・ングーラあるいは『プレザンス・アフリケーヌ』の存在理由」(翻訳と解説)」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』94, 365-382, 2017.(査読有)
4. Sakuma, Yutaka, "Who Owns This Land?: A Polyphonic Approach to the Agrarian Regime in Songhai Society (Western Niger)", *Japanese Review of Cultural Anthropology*. 17-Feb, 5-23, 2017.(査読有)
5. Sakuma, Yutaka, "Surrogate of Fear: An Ethnographic Study of Hippopotamus Hunting in the River Niger", *Journal of African Studies*. 91, 17-28, 2017.(査読有)
6. 佐久間寛「自由と負債: カール・ポランニー2.0の経済人類学」, 『哲学』140, 1-33, 2018.(査読有)
7. 栗飯原文子「移動をめぐるアフリカの物語」, 『思想』1120, 60-85, 2017.

[口頭発表等]計8件

1. 小川了「Hosties Noires に至る道 ブレーズ・ジャーニューから L. セダール・サンゴールへ」, 日本アフリカ学会第54回学術大会フォーラム: アフリカ独立期における文化の政治『プレザンス・アフリケーヌ』研究, 2017.5.21. 信州大学.
2. 中村隆之「「国民詩」論争とは何だったのか? 1950年代フランス領アフリカ・カリブの文化の政治」, 日本アフリカ学会第54回学術大会フォーラム: アフリカ独立期における文化の政治『プレザンス・アフリケーヌ』研究, 2017.5.21. 信州大学.
3. Nakamura, Takayuki, "Les animaux dans le monde romanesque de Glissant: une lecture de La Case du commandeur", 31e Congrès mondiale du Conseil International d'Études Francophones, 2017.6.30. Université des Antilles.
4. 佐久間寛【フォーラム】アフリカ独立期における文化の政治: 『プレザンス・アフリケーヌ』研究—趣旨説明—, 日本アフリカ学会第54回学術大会, 2017.5.21. 信州大学.
5. 佐久間寛「オーラルからモーラルへ: ニジェール西部の人と土地をめぐる社会関係」, 白山人類学研究会 2017年度第1回定例研究会, 2017.4.17. 東洋大学.

6. Sakuma, Yutaka, "Introduction: Art, affect et action", Colloque internationale Art et affect en Afrique, Projet noyau par ILCAA "The Potential Value of Indigenous Knowledge in Managing Hazards in Asia and Africa: The Anthropological Explorations into the Linkage of Micro-Macro Perspectives 2", 2017.8.19. ILCAA.
7. 佐久間寛「戦場としての大河, 劇場としての大河:J.ルーシュ「大河での戦い」をめぐる一注釈」, 日本文化人類学会関東地区研究懇談会, 2017.9.23. 東京大学駒場キャンパス.
8. Sakuma, Yutaka, "Bataille dans le fleuve, bataille en dehors du fleuve: Une étude ethnographique de la chasse à l'hippopotame sur le Niger", Conférence d'ethnologie par l'Association d'ethnologie de Strasbourg, 2018.2.14. Université de Strasbourg.

[図書]計2件

1. Sakuma, Yutaka, *Index de Présence Africaine par auteurs (1947-2016)*, Présence Africaine, 近刊. 440 pp.
2. 栗飯原文子(翻訳), チゴズイエ・オビオマ『ぼくらが漁師だったころ』, 早川書房, 2017. 全378頁.

[社会に向けた成果発表]計19件

1. 中村隆之「PA 編集長フォンクア氏に聞く」, 『ふらんす』12, 15, 白水社, 2017.
2. 中村隆之「『プレゼンス・アフリケーヌ』とフランスの知識人」, 『ふらんす』12, 19-20, 白水社, 2017.
3. 中村隆之(翻訳・構成), ロミュアルド・フォンクア「『プレゼンス・アフリケーヌ』:理念の歴史, 行動する思想」, 『ふらんす』12, 12-14, 白水社, 2017.
4. 中村隆之「マニュエル・ノルヴァ「詩が意味するもの」」, 『立命館言語文化研究』2018.
5. Sakuma, Yutaka, "Moral Economy and Land Tenure in Sahel (Western Niger)", *Proceedings of 7th International Workshop on African Moral Economy with Professor Goran Hyden: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives (9th to 12th December 2016, Kyoto, Japan)*, 55-57, Kindai University, 2017.
6. 佐久間寛・中村隆之・星柵守之「鼎談 「文化」をどう政治的に考えるか:国際シンポジウム「『プレゼンス・アフリケーヌ』研究」(@東京外国語大学)を振り返る」, 『図書新聞』3326, 6-7, 2017.
7. 佐久間寛「亀裂の上に世界を作る:国際シンポジウム「『プレゼンス・アフリケーヌ』研究」」, 『ふらんす』Dec-92, 16-18, 白水社, 2017.
8. 星柵守之「もうひとつのニューカレドニア (1):「天国にいちばん近い島」との出会い」, 『ふらんす』Apr-92, 80-81, 白水社, 2017.
9. 星柵守之「もうひとつのニューカレドニア (2):カナック!カナック!」, 『ふらんす』May-92, 50-51, 白水社, 2017.
10. 星柵守之「もうひとつのニューカレドニア (3):カニバル(食人種)」, 『ふらんす』Jun-92, 50-51, 白水社, 2017.
11. 星柵守之「もうひとつのニューカレドニア (4):アタイの帰還」, 『ふらんす』Jul-92, 50-51, 白水社, 2017.
12. 星柵守之「もうひとつのニューカレドニア (5):ニューカレドニアの日本人」, 『ふらんす』Aug-92, 50-51, 白水社, 2017.
13. 星柵守之「もうひとつのニューカレドニア (6):ド・カモ まことのひと」, 『ふらんす』Sep-92, 52-53, 白水社, 2017.

14. 星埜守之「もうひとつのニューカレドニア (7):1917 年の戦争」,『ふらんす』Oct-92, 52-53, 白水社, 2017.
15. 星埜守之「もうひとつのニューカレドニア (8):日系人の記憶の継承 マリ・ジョゼ・タカムネ・ミシェルさんに聞く」,『ふらんす』Nov-92, 52-53, 白水社, 2017.
16. 星埜守之「もうひとつのニューカレドニア (9):ジャン＝マリー・チバウ 止むことなき再定式化」,『ふらんす』Dec-92, 50-51, 白水社, 2017.
17. 星埜守之「もうひとつのニューカレドニア (10):ニューカレドニアの文学(1)」,『ふらんす』Jan-93, 52-53, 白水社, 2018.
18. 星埜守之「もうひとつのニューカレドニア (11):ニューカレドニアの文学(2)」,『ふらんす』Feb-93, 52-53, 白水社, 2018.
19. 星埜守之「もうひとつのニューカレドニア〈最終回〉:ヌメア合意「後」へ」,『ふらんす』Mar-93, 52-53, 白水社, 2018.

東・東南アジアの越境する子どもたち：トランスナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会

研究期間： 2016-2018 (代表：石井香世子 / 所員 2 , 共同研究員 8)

所員： 床呂郁哉, 錦田愛子

共同研究員： 石井香世子, 岩井美佐紀, 萩巣崇世, 工藤正子, 酒井千絵, 陳天璽, 横田祥子, Hsiao-Chuan HSIA

研究会等の内容

2017年5月20日(土)第3回 シンポジウム

International Symposium: Transnational Class and Citizenship

Keynote Speaker: Professor Nicole Constable, Pittsburg University

2017年7月7日(金)特別講演会

The evolution of Thainess and the use of Thainess in luxury chain hotels in Phuket, Thailand

Speaker: Professor Ploysri Porananond, Director, Center for Asian Tourism Research, Chiang Mai University, Thailand

2017年11月25日(土)国際会議

International Conference: Children of Migration in Asia: Child Migrants, Border-Crossing Children, Border-Blurred Children

Keynote Speaker: Professor Rhacel Parrenas, The University of Southern California, and Professor Nicola Piper, Director, Sydney Asia Pacific Migration Center, The University of Sydney

Speaker: Johanna Waters (Oxford University), Catherine Allerton (LSE) 等 12 名.

国際会議の詳細は下記 URL を参照。

<http://childmigration.aa-ken.jp/index.php/25-november-2017-international-conference-2/>

研究成果一覧

[学術論文]計1件

1. Ponpongrat, Kannapa and Kayoko Ishii, "Social Vulnerability of Marginalized People in Times of Disaster: A Case Study of The Great East Japan Earthquake and Tsunami", *International Journal of Disaster Risk Reduction (UK)*. 27, 133–141, 2018. (査読有)

[口頭発表等]計2件

1. Iwai, Misaki, "Citizenship of 'Children without a Homeland' in Vietnam: From the Case of the Mekong Delta Region", International Conference: Children of Migration: Child Migrants, Border-Crossing Children, Border-Blurred Children, 2017.11.25. 立教大学.
2. Hsia, Hsiao-Chuan, "From 'New Ta': A Political and Economic Analysis of the Shifting Gaze on the Children of Southeast Asian Marriage Migrants in Taiwan", International Conference: Children of Migration: Child Migrants, Border-Crossing Children, Border-Blurred Children, 2017.11.25. 立教大学.

[図書]計1件

1. Masako Kudo, *Williams, Duncan Ryuken ed., Hapa Japan: Identities and Representations*, USC Shinso Ito Center for Japanese Religions and Culture/ Kaya Press, 2017. 444 pp.

「わざ」の人類学的研究—技術, 身体, 環境(「もの」の人類学的研究(3))

研究期間: 2017–2019 (代表: 床呂郁哉 / 所員 4, 共同研究員 13)

所員: 床呂郁哉, 河合香吏, 西井涼子, 吉田ゆか子

共同研究員: 卯田宗平, 内堀基光, 大村敬一, 奥野克巳, 金子守恵, 木村周平, 久保明教, 黒田末寿, 祖田亮次, 田中雅一, 丹羽朋子, 檜垣立哉, 森下翔

研究会等の内容

日時: 2017年7月9日(土)13:00–18:00

場所: AA 研マルチメディアセミナー室 (306)

床呂郁哉(AA 研所員)

趣旨説明

檜垣立哉(AA 研共同研究員, 大阪大学)

「「わざ」を巡る哲学的な素材紹介 ——ドゥルーズ＝ガタリの技術論を中心に——」

黒田末寿(AA 研共同研究員, 滋賀県立大学)

「ものが生まれ出ずる制作の現場——鉄と道具と私の共同作業——」

(2)2017年度第2回研究会(通算第2回目)

日時: 2017年12月16日(土)13:00–18:00

場所: AA 研マルチメディア会議室 (304)

金子守恵(AA 研共同研究員, 京都大学)

「「わざ」の人類学的研究にむけて: 多元的な技術観の可能性」

小松かおり(北海学園大学)

「遺伝子組み換えバナナをめぐる農の技術の受け入れ」

祖田亮次(AA 研共同研究員, 大阪市立大学)

研究成果一覧

[学術論文]計 26 件

1. Tokoro, Ikuya and Hisao Tomizawa, "Introduction- Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 1–13, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
2. Tokoro, Ikuya, "The Mindanao Conflict and Peace Process from Aquino to Duterte Presidency: A Perspective from the Sulu Moro Community", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 245–261, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
3. 床呂郁哉「ものの人類学」, 『Lexicon 現代人類学』, 116–119, 以文社, 2018.
4. 床呂郁哉「生命」, 『Lexicon 現代人類学』, 92–94, 以文社, 2018.
5. 床呂郁哉「もの研究の新たな視座」, 『詳論 文化人類学』, ミネルヴァ書房, 2018.
6. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, "Introduction: Why the Anthropology of Mono (Things)?"", *An Anthropology of Things*, 18–34, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
7. Tokoro, Ikuya, "Mono beyond control: A New Perspective on Cultured Pearls", *An Anthropology of Things*, 81–95, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
8. 大村敬一「絶滅の人類学: イヌイトの「大地」の限界条件から「アンソロポシオン」時代の人類学を考える」, 『現代思想』45 (4), 228–247, 青土社, 2017.
9. Omura, Keiichi, "The Ontology of Feeling: The Evolutionary Basis of 'Natural Institutions.'", *Institutions: The Evolution of Human Societies*, 327–348, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2017.
10. Uchibori, Motomitsu, "Introduction for the Special Issue", *Ngingit*. 9, 1–6, 2017.
11. Uchibori, Motomitsu, "Not After the Deluge: A Note on Discourses on the Local Flood Experiences in the Upper Skrang", *Ngingit*. 9, 7–17, 2017.
12. 久保明教「強い (かわいい) とは何か——将棋ソフトからみる加藤一二三と「ひふみん」の狭 間」, 『ユリイカ』704, 182–190, 青土社, 2017.
13. 卯田宗平「なぜ宇治川の鵜飼においてウミウは産卵したのか : ウミウの捕獲作業および飼育方法をめぐる地域間比較研究」, 『国立民族学博物館研究報告』42(2), 1–87, 国立民族学博物館, 2017. (査読有)
14. 卯田宗平・澤木万理子・松坂善勝・江崎洋子「宇治川の鵜飼におけるウミウの繁殖・飼育技術の特徴—中国における鵜飼の事例比較」, 『日本民俗学』292, 1–26, 日本民俗学会, 2017. (査読有)
15. 卯田宗平「人・動物関係におけるリバランスという視座—中国と日本の鵜飼でみられるウ類への働きかけの事例から」, 『環境社会学研究』23, 20–33, 環境社会学会, 2017. (査読有)
16. 卯田宗平「生業技術の内在的な展開—中国・大興安嶺森林地帯におけるトナカイ飼育技術の事例報告」, 『パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究(人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築)』, 16–19, 科学省科学研究費補助金新学術領域研究, 2017.

17. 奥野克巳「イヌはいか人間の言うことを理解するのか—マルチスピーシーズ民族誌の可能性」, 『環境人文学 II 他者としての自然』, 35–53, 勉誠出版, 2017.
18. 奥野克巳「明るい人新世, 暗い人新世—マルチスピーシーズ民族誌から眺める」, 『現代思想』45(22), 76–87, 青土社, 2017.
19. Kaneko, Morie, "Learning Pottery Making: Transmission of Body Techniques", *An Anthropology of Things*, 115–135, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
20. 檜垣立哉「ヴィヴェイロス・デ・カストロにおけるドゥルーズ=ガタリ」, 『思想』1124, 6–14, 岩波書店, 2017.
21. 檜垣立哉「後期資本主義のなかの哲学 中野幹隆とその時代 (1)」, 『多様体』1, 321–331, 月曜社, 2018.
22. 檜垣立哉「食べることと生」, 『食べる』, 大阪大学出版会, 2018.
23. 檜垣立哉「過去は何故そのまま保存されるのか——『物質と記憶』の記述の多層性について」, 『ベルクソン『物質と記憶』を診断する』, 99–111, 水声社, 2017.
24. Kawai, Kaori, "The Cicadas Drizzle of the Chamus", *An Anthropology of Things*, 258–271, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
25. Kuroda, Suehisa, "'Things' and Their Emergent Sociality in the Primates' World", *An Anthropology of Things*, 222–240, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
26. Uchibori, Motomitsu, "Epilogue: Stonehood: Agency as Inagency", *An Anthropology of Things*, 273–280, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)

[口頭発表等]計 30 件

1. 床呂郁哉「東南アジア島嶼部における森林・水産資源の利用と環境問題に関する試論—ボルネオ島の事例を中心に」, アジアの環境問題勉強会, 2018.1.20. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」, キックオフ・シンポジウム「科研新学術領域・顔身体学の構築」, 2017.9.10. 関西学院大学.
3. 大村敬一「生き方としてのフィールドワーク: 人類学者に負わされる「責め」(Responsabilité)について考える」, フィールドサイエンス・コロキウム連続ワークショップ第3回「データと論文の間: フィールドサイエンスにおける論証とは」, 2017.02.12. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. Omura, Keiichi, "Opening Remarks", Osaka University - University of Toronto Joint Workshop Infrastructure, Environment, Politics of Knowledge, 2017.5.8. University of Toronto, St. George Campus, Anthropology Building Board Room.
5. Omura, Keichi, "The Earth Multiple: Toward Sympoietic Development of Multiple Worlds in Post-Anthropocene", International Symposium on Environment, Development and International Relations in the Arctic. Session 3: Arctic Societies in Anthropocene, 2017.12.12. Centennial Hall, Hokkaido University.
6. 大村敬一「イヌイトの「野生の科学」: 人類の未来への問い」, Handai-Asahi 中之島塾, 2017.2.4. 大阪大学中之島センター.
7. Uchibori, Motomitsu, "Was the Iban Longhouse a Community of Care?", Association of Anthropology, Gerontology and the Life Course 10th Conference, 2017.6.8. Oxford Brookes University.

8. 田中雅一「女神とゾンビ——「サイボーグ宣言」の前夜とくその後>から考える」, 一橋大学社会学研究科先端課題研究 Human / Non-Human Interface ワークショップ「アフター・サイボーグ」, 2018.2.3. 一橋大学.
9. 田中雅一「アウシュヴィッツにてホロコーストの生存者に会おうということ」, 日本オーラル・ヒストリー学会第 15 回大会, 2017.9.3. 近畿大学東大阪キャンパス.
10. 丹羽朋子「ポスト 3.11 の『日常世界』を映す『セルフドキュメンタリー』のカー市民の映像実践を通じた, 災害経験の共有と『当事者性』の醸成」, トヨタ財団研究助成プログラム オープンワークショップ , 2017.5.21. 九州大学西新プラザ.
11. 丹羽朋子「3.11 以後の映像記録の語りなおし—記録・展示・アーカイブ化の連環の先へ」, 第 51 回日本文化人類学会研究大会, 2017.5.28. 神戸大学.
12. 丹羽朋子「フィールドサイエンスの映像アーカイブをひらく—「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」の創造的活用を事例として」, 北海道大学低温科学研究所 共同研究集会「フィールド研究におけるデータ, メディアアーカイブの分野横断的な共有と情報発信」, 2017.10.27. 北海道大学.
13. 卯田宗平「ウミウからみた鳥と人とのかかわり—鶺鴒の事例から」, 『みんなく映画会・公開セミナー「渡り鳥と人とのかかわり—北東アジアから考える」』, 2018.2.11. 国立民族学博物館講堂.
14. 卯田宗平「これまでの研究会を踏まえて—ドメスティケーションのレベル」, 『もうひとつのドメスティケーション—家畜化と栽培化に関する人類学的研究』共同研究会, 2018.2.3. 国立民族学博物館大演習室.
15. 卯田宗平「トナカイの角—中国大興安嶺森林地帯のエヴェンキ族とトナカイ飼育」, 『国立民族学博物館ウィークエンド・サロン』, 2018.1.14. 国立民族学博物館第 4 セミナー室.
16. 卯田宗平「鶺鴒技術の共通性と相違性—中国における鶺鴒とその背後にある文化」, 『連続講座みんなく×ナレッジキャピタル—フィールドワークを語る—』, 2017.12.20. グランフロント大阪 1 階 The CAFE The lab.
17. 卯田宗平「中国雲南省雲洱海の鶺鴒」, 平成 29 年度長良・小瀬鶺鴒習俗総合調査合同委員会, 2017.11.2. 岐阜市役所西別館 2 階第 1・2 研修室.
18. 卯田宗平「これまでの研究会を踏まえて①—二つの方向性から考えるドメスティケーション」, 『もうひとつのドメスティケーション—家畜化と栽培化に関する人類学的研究』共同研究会, 2017.10.7. 国立民族学博物館大演習室.
19. 卯田宗平「鶺鴒を文化としてとらえる」, 国立民族学博物館友の会第 75 回国内体験セミナー「三次の鶺鴒漁見学と広島県の民俗芸能に出会う」, 2017.7.22. 広島県立みよし風土記の丘・広島県立歴史民俗資料館講義室.
20. 卯田宗平「鶺鴒文化とは何か」, サンケイトラベル「長良川鶺鴒漁見学」レクチャー, 2017.7.11. 岐阜市長良川鶺鴒伝承館長良川うかいミュージアム会議室.
21. 卯田宗平「なぜ鶺鴒のウミウは産卵したのか」, 第 15 回生き物文化誌学会, 2017.6.24. 国立民族学博物館第 5 セミナー室.
22. 卯田宗平「北東アジア地域における生業活動の男女差と集団接触の諸相」, 『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020: パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』, 2017.5.14. 国立民族学博物館第 5 セミナー.
23. 奥野克巳「ヤマアラシと人とものをめぐるコンタクト・ゾーン—サラワクにおける複数種のランドスケ

- プ」, 第 51 回日本文化人類学会研究大会 分科会「他種『とともに生きる』ことの民族誌—マルチスピー—シーズ人類学の展望と課題」, 2017.5.27. 神戸大学.
24. Morishita, Sho, "Making Factual Visibilities of the Earth's Interior: Dichotomies and Components of Geophysical Practice", Osaka University and University of Toronto Anthropology Workshop, 2017.5.8. University of Toronto.
 25. 森下翔「宇宙測地技術の発展と研究者の「生活形式」の変容」, JpGU-AGU Joint Meeting 2017, 2017.5.21. 幕張メッセ.
 26. 森下翔「「普遍主義と相対主義」:「主観主義」と「客観主義」の問題として」, 神戸人類学研究会, 2017.6.9. 神戸大学.
 27. 森下翔「観測・実験抜き「モデルの哲学」は可能なのか:「逆問題の現場」の観察から」, 「シミュレーションの科学論」研究会, 2017.11.11. 国立科学博物館.
 28. 森下翔「地球科学者と地球の関係, 文化人類学者と文化の関係」, フィールドサイエンス・コロキウム, 2018.2. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 29. Kaneko, Morie, "Is this Waste?: the Materiality of Waste and Value in Southwestern Ethiopia", African Studies Center: 1st meeting CRG (Collaborative Research Group) Politics, Governance and Law in Africa., 2018.03.19. Leiden University.
 30. Kaneko, Morie, "Pottery making as local knowledge in southwestern Ethiopia with special reference to finger movement patterns", The 7th HK (Humanities Korea) International Conference, 2017.10.17-18. Hankuk University of Foreign Studies.

[図書]計 4 件

1. Tokoro, Ikuya and Hisao Tomizawa (eds.), *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. 341 pp.
2. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, *An Anthropology of Things*, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. 406 pp.
3. 奥野克巳・石倉敏明(編)『Lexicon 現代人類学』, 以文社, 2018. 全 223 頁.
4. ジル・ドゥルーズ 檜垣立哉・小林卓也訳『ベルクソニズム』, 法政大学出版局, 2017. 全 159 頁.

[社会に向けた成果発表]計 12 件

1. 久保明教「計算機科学的還元の前後をめぐって—将棋電王戦の人類学的考察」, 第三回情報系セミナー(北陸先端科学技術大学院大学)
2. 久保明教「機械への生成: 人類にとって AI・ロボットとはなんでありうるか?」, 九経調未来セミナー 第 9 回(九州経済調査協会)
3. 田中雅一「格子と波とナショナリズム—Love Trip を聴きながら巨大な遺体安置所で考えたこと」, 第 51 回日本文化人類学会研究大会(神戸大学)学会賞記念講演 2017.5.28.
4. 卯田宗平「なぜウミウは産卵したのか—謎解きはフィールドワークのあとで」, 『FIELDPLUS』18, 24-25, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017.
5. 卯田宗平「新世紀ミュージアム—滋賀県立琵琶湖博物館」, 『月刊みんぱく』41(12), 16-17, 国立民族学博物館, 2017.
6. 卯田宗平「手段としての動物と人とのかわり—共通した動物利用の論理を探る」, 『民博通信』158,

- 14-15, 国立民族学博物館, 2017.
7. 奥野克巳『書評 菅原和孝著『動物の境界』』、『図書新聞』3300, 4, 2017.
 8. 野田研一・奥野克巳「「世界とのコミュニケーション」へ」、『週刊 読書人』3194, 8, 2017.
 9. 長谷川新・森下翔・古川不可知「ポスト関係論的人类学／アート」、『アーギュメント』, 2, 2-23, 2018.
 10. 金子守恵「7. 安全に調査するために」、『アフリカで安全にフィールドワークをするために—エチオピア編—』, 京都大学アフリカ地域研究資料センター.
 11. 金子守恵「6. 土器つくりの手」、『手の事典』, 422-427, 朝倉書店, 2017.
 12. 金子守恵「26. インターフェイスとしての手」、『手の事典』, 525-528, 朝倉書店, 2017.

[その他]計4件

1. 丹羽朋子「福島県相馬高校放送局 作品上映会—自らを見つめ、震災と"核災"の経験を伝える—」, 東日本大震災後より記録映像や演劇制作を通じて被災地の高校生のおかれている現状や思いをつたえる活動を続けている相馬高校放送局の元顧問の教員や作り手を招き, 作品を鑑賞して対話する上映会を企画運営した(於: 本と工房の家, 2017年4月9日).
<https://hontokoubou.tumblr.com/post/158306737081/fieldtalk03>
2. 丹羽朋子・中下菜穂・宮下美穂「『映像のフィールドワーク』:映像を観察し,手で考え身体で感じる学びの実験」, 特別ワークショップ「世界を変える教育〜フィールド教育・アート教育・変人教育〜」における実践報告(NPO 法人東京学芸大こども未来研究所ほか主催, 於: 小金井市 codolabo studio, 2017年6月18日). <http://henjinruigaku-labo.org/news001.php>
3. 丹羽朋子・中下菜穂「映像のフィールドワーク・ラボ 第1回ひもをうむ」, 学術映像アーカイブ「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」の活用プロジェクトの一環として, 同アーカイブの民族学映像を用いた体験型上映ワークショップを実施(せたがや文化財団主催, 於: 生活工房ギャラリー, 2017年7月1-15日). <http://www.setagaya-ldc.net/program/374/>
4. 丹羽朋子「福島県相馬高校放送局 作品上映会 vol.2—声を重ねる, 声で伝える—」, 東日本大震災後より記録映像や演劇制作を通じて被災地の高校生のおかれている現状や思いをつたえる活動を続けている相馬高校放送局の元顧問の教員や作り手を招き, 作品を鑑賞して対話する上映会を企画運営した(於: 本と工房の家, 2017年7月23日).
<https://hontokoubou.tumblr.com/post/163124828531/20170723>

東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)—紛争と

共存のダイナミクス

研究期間: 2017-2019 (代表: 富沢寿勇 / 所員 7, 共同研究員 20)

所員: 床呂郁哉 飯塚正人 黒木英充 外川昌彦 西井涼子 錦田愛子 吉田ゆか子

共同研究員: 富沢寿勇, 新井和広, 今泉慎也, 岡本正明, 小河久志, 奥島美夏, 金子奈央, 川端隆史, 黒田景子, 菅原由美, 鈴木伸隆, 辰巳頼子, 坪井祐司, 福島康博, 見市建, 森正美, Shamsul Amri BAHARUDDIN, Ahmad Najib BURHANI, Azizah Binti KASSIM, Omar Farouk SHEIKH AHMAD

研究会等の内容

(1) 2017 年度第 1 回研究会

日時: 2017 年 7 月 15 日 (土) 13:00–17:30

場所: AA 研マルチメディアセミナー室(306)

主催: 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学における
ミクローマクロ系の連関 2」

床呂郁哉(AA 研所員)「プロジェクト趣旨説明」床呂郁哉(AA 研所員)「シリア化」するフィリピン南部？
—ドゥテルテ政権下のミンダナオ紛争に関する試論」錦田愛子(AA 研所員)「パレスチナ・シリアをめ
ぐる紛争と共存—— 難民受け入れ地域としての中東」

(2) 2017 年度第 2 回研究会 (東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する国際ワークショップ)

日時: 2017 年 9 月 24 日 (日) 14:30–20:00

場所: Hotel Meridien Kota Kinabalu (Jalan Tun Fuad Stephens, Kota Kinabalu, Malaysia)

使用言語: 英語

共催: 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学における
ミクローマクロ系の連関 2」, AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス

14:30–14:40 Ikuya TOKORO (ILCAA) Opening Remarks 14:40–15:20 Ryoko NISHII (ILCAA) "Converts
and Death: Muslim-Buddhist Relations in a Southern Thai Village" 15:20–16:00 Ahmad Najib Burhani
(ILCAA Joint Researcher, Indonesian Institute of Science) "Force and Discourse: Justifying and
Performing Violence towards Ahmadiyah in Indonesia" 16:10–16:50 Shamsul A. B. (ILCAA Joint
Researcher, Universiti Kebangsaan Malaysia) "'Islamisation of Malaysia' or 'Modernisation of Islam in
Malaysia': Conflict and Coexistence, an Exploratory Reflection based on the Case of Al-Arqam" 16:50–
17:55 All members' Discussion 17:55–18:00 Hisao TOMIZAWA (ILCAA Joint Researcher, University of
Shizuoka) Closing Remarks 18:00–20:00 Reception Meeting

(3) 2017 年度第 3 回研究会

日時: 2017 年 12 月 17 日 (日) 13:30–18:30

場所: AA 研マルチメディア会議室(304)

共催: AA 研(KKLO 枠共同研究課題)

河野毅(東洋英和女学院)「イスラム過激派と穏健派の政治的駆け引きについて: インドネシアの事例をも
とに考える」黒田景子(AA 研共同研究員, 鹿児島大学)「仏教国」タイと「イスラーム」マレーシアを分
断する歴史意識: コタ・ムンクアンの主は誰か?」Omar Farouk(AA 研共同研究員, 広島市立大学)
"Islam and Religious Pluralism in Contemporary Thailand and Malaysia"

研究成果一覧

[学術論文] 計 23 件

1. Tokoro, Ikuya and Hisao Tomizawa, "Introduction- Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 1–13, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
2. Tokoro, Ikuya, "The Mindanao Conflict and Peace Process from Aquino to Duterte Presidency: A Perspective from the Sulu Moro Community", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2):*

- Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 245–261, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
3. Ogawa, Hisashi, "From refusal to acceptance: Dynamics between Muslims and Christians in southern Thailand through NGO aid activities", *Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 295–308, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
 4. 鈴木伸隆「米国帝国下のフィリピン・ミンダナオ島開発とフィリピン人エリート 一九二〇年代のゴム農園計画を中心にー」, 『帝国とナショナリズムの言説空間(神奈川大学人文学研究叢書 40) 国際比較と相互連携』, 175–192, 御茶の水書房, 2018.
 5. Suzuki, Nobutaka, "Mindanao's Agricultural Colony Project and Muslim Integration in the Colonial Philippines, 1913–1920", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia.*, 215–244, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
 6. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, "Introduction: Why the Anthropology of Mono (Things)?"', *An Anthropology of Things*, 18–34, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
 7. Tokoro, Ikuya, "Mono beyond control: A New Perspective on Cultured Pearls", *An Anthropology of Things*, 81–95, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
 8. 錦田愛子「なぜ中東から移民／難民が生まれるのかーシリア・イラク・パレスチナ難民をめぐる移動の変容と意識」, 『移民・ディアスポラ研究』6, 84–102, 2017.
 9. 錦田愛子「ヨルダン王政の安定性——国王の権威を支える諸要素」, 『アラブ君主制国家の存立基盤』, 131–147, アジア経済研究所, 2017.
 10. 岡本正明「インドネシアにおける暴力をめぐる公私のポリティクス」, 『多元多層の共存空間ー「環太平洋パラダイム」の可能性』, 195–220, 京都大学学術出版会, 2017. (査読有)
 11. 岡本正明「セキュリティ民営化とインフォーマルな国家統制」, 『転換期のミャンマーを生きる:「統制」と公共性的人类学』, 風響社, 2018.
 12. 岡本正明「解題: 東南アジアにおける地方政治と政治王国論」, 報告書『東南アジア自治体サーベイ』, ジェトロ・アジア経済研究所, 2018.
 13. Okamoto, Masaaki, "Politik Waria dan Tanda Demokratisasi Tahap Kedua di Indonesia: Relawan Waria untuk Jokowi-JK pada Pilpres 2014", *Perubahan karakter gerakan sosial di Indonesia dalam partisipasi politik pilpres 2014*, 217–241, Abdurrahman Wahid Center-University of Indonesia, 2018.
 14. Baharuddin, Shamsul A., "Islam and Cultural Diversity in Malaysia as a Mirror for Southeast Asia", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 91–114, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
 15. Shioya, Momo, "Increasing Interest in Islamic Clothes and "Correctness" in Indonesia", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 59–76, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
 16. Farouk, Omar, "Muslims in the Lower Mekong: Ideas and Practices of Cleanliness", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 309–336, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)

17. Nishii, Ryoko, "The Da'wa Movement and the Diversity of Muslim Communities in Thailand", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia.*, 285–294, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018.(査読有)
18. Yoshida, Yukako, "Balinese Dances in Multi-religious Jakarta: A Preliminary Study of Muslim Learners and Hindu Instructors", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 77–90, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018.(査読有)
19. Kaneko, Nao, "Formation of Independent Education System in Sabah", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 171–182, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018.(査読有)
20. Kuroda, Keiko, "How Songkhla's Samrong Bridge Inscriptions show the Diversity of Southern Thailand Society", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia.*, 263–284, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018.(査読有)
21. Kuroki, Hidemitsu, "Neither "Western" nor "Orthodox": Establishing Greek Catholic Identity in the Ottoman Empire and Beyond", *Religious Interactions in Europe and the Mediterranean World: Coexistence and Dialogue from the Twelfth to the Twentieth Centuries*, 287–298, London: Routledge, 2017.(査読有)
22. 黒木英充「イスラームと地域論」, 『第4次 現代歴史学の成果と課題』2, 48–63, 績文堂出版, 2017.
23. 菅原由美「出版とオランダ領東インドのイスラーム化ーインドネシア近代史叙述とイスラーム・アイデンティティ」, 『歴史の生成』, 京都大学学術出版会, 2018.(査読有)

〔口頭発表等〕計 18 件

1. 床呂郁哉「東南アジア島嶼部における森林・水産資源の利用と環境問題に関する試論—ボルネオ島の事例を中心に」, アジアの環境問題勉強会, 2018.1.20. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」, キックオフ・シンポジウム「科研新学術領域・顔身体学の構築」, 2017.9.10. 関西学院大学.
3. 床呂郁哉「フィリピン南部ミンダナオ紛争と和平プロセスをめぐる情勢—マラウィ市占拠事件を中心に」, KKLO 企画実務者会合, 2017.7.20. 在マニラ JICA オフィス.
4. 床呂郁哉「フィリピンのイスラームとムスリム社会を知る」, KKLO 主催邦人向け講演会, 2017.9.2. 在マニラ JICA オフィス.
5. Tokoro, Ikuya, "Brief introduction of Multi-disciplinary Study on Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia", 「穏健主義育成に関するアジア地域関係者ワークショップ」, 2017.7.14. 外務省.
6. 床呂郁哉「フィリピン南部におけるミンダナオ紛争とムスリム武装組織の動向—ドゥテルテ政権発足以降の状況を中心に」, 外務省分析研究会, 2017.7.12. 外務省.
7. 小河久志「宗教 NGO の支援活動が生み出す新たな関係性—タイ南部インド洋津波被災地の事例から—」, 日本文化人類学会第 51 回研究大会, 2017.5.27. 神戸大学.
8. Arai, Kazuhiro, "Saint veneration in Indonesia and the emergence of Hadrami sada: shaping historical perception by using the current situation?", International Symposium, "Islamic Studies and the Study of

- Sufism in Academia: Rethinking Methodologies", 2017.5.21. 京都大学.
9. Nishikida, Aiko, "Syrian refugees in Sweden Their struggle for adaptation", International Symposium "The Global Refugee Crisis: Mobile people under state protection or exploitation", 2018.1.5. Middle East Institute, National University of Singapore.
 10. 錦田愛子「ヨーロッパをめざす中東難民——レバノン・シリアのパレスチナ難民の足取りを追って」, 地域研究コンソーシアム 研究交流会, 2018.1.26. 京都大学稲森財団記念館.
 11. 錦田愛子「グローバルな移民／難民とシティズンシップの再考可能性」, 新学術領域研究「グローバル関係学」2017年度第二回全体研究会, 2017.6.10. 東京外国語大学本郷サテライト.
 12. 森正美「フィリピン・ムスリムの生活文化に触れる」, KKLO 主催邦人向け講演会, 2017.9.2. 在マニラ JICA オフィス.
 13. Mori, Masami, "Legal and Political Struggle on the Laws of Muslims in the Philippines Making process of Bangsamoro Basic Laws under the Martial law", Asian Symposium on Legal Pluralism, Commission on Legal Pluralism, IUAES, 2018.3.29. University of Indonesia.
 14. 黒木英充「シリア内戦 最古の都市文明の地から見る人類の近未来」, 日本中東学会公開講演会「中東の戦争と平和 ヒロシマから考える」, 2017.9.30. 広島国際会議場.
 15. 黒木英充「シリア内戦, 対テロ戦争, イスラーム」, 第213回広島大学平和科学研究センター研究会, 2017.10.31. 国際情勢研究所(東京都港区).
 16. 黒木英充「シリア情勢の現状と今後の展望」, 国際情勢研究所講演会, 2017.9.26. 国際情勢研究所(東京都港区).
 17. Tsuboi, Yuji, "Contestation of Visions for the Malayan Decolonisation in the Malay Media Space", 4th International Conference of the International Council for Historical and Cultural Co-operation-Southeast Asia, 2017.9.15. De La Salle University, Manila, the Philippines.
 18. Tsuboi, Yuji, "Singapore as a centre of the Malay media space during the colonial period", Lecture at National Library of Singapore, 2018.3.8. National Library of Singapore.

[図書]計7件

1. Tokoro, Ikuya and Hisao Tomizawa (eds.), *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. 341 pp.
2. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, *An Anthropology of Things*, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. 406 pp.
3. 富沢寿勇『日本におけるハラール産業の可能性と課題』, 静岡県立大学グローバル地域センター, 2017. 全124頁.
4. 外川昌彦(編)『ダッカのテロ事件とバングラデシュの若者たち—その背景とこれからを考える』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・基幹研究人類学班, 2018. 全103頁.
5. 坪井祐司・山本博之(編)『「カラム」の時代 IX:マレー・ムスリムの越境するネットワーク 2』, 京都大学東南アジア地域研究研究所, 2018.
6. Sugahara, Yumi and Willem van der Molen eds., *Transformation of religions as reflected in Javanese texts*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. 182 pp.
7. 外山文子・見市建他(編)『21世紀東南アジアの強権政治—「ストロングマン」時代の到来』, 明石書

店, 2018. 全 261 頁.

[社会に向けた成果発表]計 7 件

1. 床呂郁哉「ミンダナオと平和へ正念場—バンサモロ基本法成立急げ」, まにら新聞 2018 年 1 月 9 日号, 3. まにら新聞社, 2018.
2. 床呂郁哉「フィリピン南部は IS(イスラーム国)の拠点になるか? — マラウィ市占拠事件の深層」, 『NAVI・MANILA』Vol.34(2017 年 7 月 6 日), 7, まにら新聞社, 2017.
3. 栗田禎子・長沢栄治・黒木英充・高橋和夫・臼杵陽「座談会 中東の地殻変動をどう見るか」, 『世界』905, 132–147, 岩波書店, 2018.
4. 黒木英充「日本におけるイスラームとの共生」, 『世界史のしおり』2017 年度 3 学期号, 6–7, 帝国書院, 2018.
5. 飯塚正人「どうしてイスラーム教はわかりにくいのか? 危険だと誤解を招く 4 つの理由 宗教学者・飯塚正人さん」, (URL: <http://toshin-sekai.com/interview/17/>)
6. 見市建「貿易風(毎月連載)」, じゃかるた新聞毎月連載.
7. 見市建「インドネシア・イスラーム『保守化』の真相」, 『外交』44, 82–85, 2017.

ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合

研究期間: 2017–2019 (代表: 西井 涼子 / 所員 5, 共同研究員 12)

所員: 西井涼子, 河合香吏, 佐久間寛, 床呂郁哉, 吉田ゆか子

共同研究員: 岩谷彩子, 春日直樹, 久保明教, 黒田末寿, 郡司ペギオ幸夫, 近藤和敬, 佐藤知久, 塩谷賢, 高木光太郎, 中村恭子, 名和克郎, 箭内匡

研究会等の内容

第 1 回研究会(2017 年 6 月 11 日)

「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」を始めるにあたって
西井涼子(人類学)

「脳の中の酋長」

郡司ペギオ幸夫(理論生命科学)

「動態を捉える／に捉えられるには？」

塩谷 賢(科学哲学)

第 2 回研究会(2017 年 9 月 16 日)

「ドゥルーズの著作群における内在概念の考古学的探査」

近藤和敬(現代哲学)

「創造的アーカイブについて: 芸術資源の記録と利用」

佐藤知久(文化人類学)

第 3 回研究会(2018 年 3 月 25 日)

「怖がらない機械——現代将棋における定跡と情動」

久保明教(テクノロジーの人類学)

「情動の社会的回路の進化」

黒田末寿(霊長類学・生態人類学)

「精神医学的観点からみた情動と知性」

内海健(精神医学)

研究成果一覧

[学術論文]計 27 件

1. 岩谷彩子「序 グローバリゼーションと公共空間の変容」, 『文化人類学』82(2), 151–162, 2017. (査読有)
2. 岩谷彩子「古着のフローが生み出す公共空間—インド, アフマダーバードの都市開発の事例より」, 『文化人類学』82(2), 213–232, 2017. (査読有)
3. Iwatani, Ayako, "Streets as Space of Social Inclusion and Exclusion: the Case of Street Vendors in Ahmadabad", *Rethinking Social Exclusion in India: Castes, Communities and the State*, 30–52, Routledge, 2017.
4. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, "Introduction: Why the Anthropology of Mono (Things)?" , *An Anthropology of Things*, 18–34, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
5. Kawai, Kaori, "The Cicadas Drizzle of the Chamus", *An Anthropology of Things*, 258–271, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
6. Kuroda, Suehisa, "Things and Their Emergent Sociality in The Primates World", *An Anthropology of Things*, 222–240, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
7. Gunji, Y.P., S. Shinohara, T. Haruna and V. Basios, "Inverse Bayesian inference as a key of consciousness featuring a macroscopic quantum logic structure", *BioSystems*. 152, 44–63, 2017.
8. Sakiyama, T. and Y.P. Gunji, "Modulation effect with global ambiguity in 2-dimensional random walk", *International Journal of Parallel, Emergent and Distributed Systems*. 32(2), 159–165, 2017.
9. Sasai, K., Y.P. Gunji and T. Kinoshita, "Extremely localized interaction in a market model", *Artificial Life and Robotics*. 22, 125–129, 2017.
10. Gunji, Y.P., M. Minoura, K. Kojima and Y. Horry, "Free will in Bayesian and inverse Bayesian inference-driven endo-consciousness", *Prog.Biop.Mol.Bio*. 131, 312–324, 2017.
11. Basios, V. and Y.P. Gunji, "Chaotic dynamics in biological information processing: revisiting and revealing its logic", *Opera Medica et Physiologica*. 3(1), 1–13, 2017.
12. Castro, O., R. Mayne, M. Talanov, M. Levin, F. Baluska and Y.P. Gunji, "Slime mould: The fundamental mechanisms of biological cognition", *BioSystems*. 165, 57–70, 2017.
13. Dussutour, A., H. Zenil and A. Adaamtzky, "Modeling of decision-making process for moving straight using inverse Bayesian inference", *Biosystems*. 163, 70–81, 2017.
14. Sakiyama, T. and Y.P. Gunji, "Uncertain Density Balance Triggers Scale-Free Evolution in Game of Life", *Complex Systems*. 26(1), 31–38, 2017.
15. 近藤和敬「金森修の科学思想史と哲学研究についての科学思想史の役割」, 『人文学科論集』, 85, 99–112, 2017.
16. Sakuma, Yutaka, "Who Owns This Land?: A Polyphonic Approach to the Agrarian Regime in Songhai Society (Western Niger)", *Japanese Review of Cultural Anthropology*. 17-Feb, 5–23, 2017. (査読有)
17. Sakuma, Yutaka, "Surrogate of Fear: An Ethnographic Study of Hippopotamus Hunting in the River

- Niger", *Journal of African Studies*. 91, 17–28, 2017. (査読有)
18. 佐久間寛「自由と負債: カール・ポランニー2.0の経済人類学」, 『哲学』140, 1–33, 2018. (査読有)
 19. Tokoro, Ikuya and Hisao Tomizawa, "Introduction- Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 1–13, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
 20. Tokoro, Ikuya, "The Mindanao Conflict and Peace Process from Aquino to Duterte Presidency: A Perspective from the Sulu Moro Community", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 245–261, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. (査読有)
 21. 床呂郁哉「ものの人類学」, 『Lexicon 現代人類学』, 116–119, 以文社, 2018.
 22. 床呂郁哉「生命」, 『Lexicon 現代人類学』, 92–94, 以文社, 2018.
 23. 床呂郁哉「もの研究の新たな視座」, 『詳論 文化人類学』, ミネルヴァ書房, 2018.
 24. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, "Introduction: Why the Anthropology of Mono (Things)?", *An Anthropology of Things*, 18–34, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
 25. Tokoro, Ikuya, "Mono beyond control: A New Perspective on Cultured Pearls", *An Anthropology of Things*, 81–95, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. (査読有)
 26. Nawa, Katsuo, "Effects of Translation on the Invisible Power Wielded by Language in the Legal Sphere: The Case of Nepal", *Meaning and Power in the Language of Law*, 95–117, Cambridge University Press, 2018.
 27. Nishii, Ryoko, "Was the Old Woman's Death a Suicide? A Discussion on the Basis of Institutions", *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, 372–390, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018.

[口頭発表等]計 40 件

1. 岩谷彩子「饒舌さと沈黙のはざまで—ルーマニアのロマの音楽と家屋にみる共同体の記憶」, 京都人類学研究会季節例会「共同体を記憶する—ユダヤ／『ジプシー』の文化構築と記憶の媒体」, 2017.7.22. 京都大学.
2. 岩谷彩子「ルーマニアのロマの家屋にやどる歴史—異なる移動の痕跡としての住居」, 第 23 回ロマ学研究会, 2017.12.10. 大阪産業大学梅田サテライトキャンパス.
3. Iwatani, Ayako, "The Rise of 'World Dance' and Kalbelia Dance in India", International Workshop "Globalization of Indian Performing Arts in New Media Situation: Dynamics of Cultural Gyre", 2018.1.21. 京都大学.
4. Iwatani, Ayako, "Living on the Surface: Romani Palaces enfolding Unspoken Past and Displayed Present in Romania", The Skills of Feeling with the World-Third Workshop "Embodied Memories and Affective Imagination Skills", 2018.2.4. 立命館大学.
5. 岩谷彩子「布のフローがひらく公共空間—インド, アフマダーバードの古着の流通から見えてくるもの」, 2017 年度 MINDAS「布班」第 2 回研究会, 2018.2.13. 国立民族学博物館.
6. 岩谷彩子「復讐と名誉—ギリシャのロマ社会におけるジェンダーと暴力」, <ジェンダーに基づく暴力複合>の文化人類学的研究研究会, 2018.2.17. 京都大学.

7. Kondo, Kazunori, "Comment from epistemological view point", 新しい実在論ワークショップ: Hypertime: an inquiry into time in itself, 2017.4.29. 法政大学市ヶ谷キャンパス.
8. 近藤和敬「金森修の科学思想史と哲学研究にとつての科学思想史の役割」, 『日仏哲学会前日提案型ワークショップ 金森修の科学思想史とエピステモロジーのこれから』, 2017.9.1. 明治大学駿河台キャンパス.
9. 近藤和敬「1890年代における「スピノザの道徳」という主題設定について——デルボス, ブランシュヴィック, ウォルムス」, 二つのスピノザ・ルネッサンスの狭間—十九世紀フランス哲学におけるスピノザの影第一回研究会, 2017.9.23. 大阪大学豊中キャンパス.
10. 近藤和敬「スピノザにおける内在の哲学と数学的知識」, 第1回共創学会年次大会「スキマをつくる・スキマにはいる」, 2017.12.9. 早稲田大学早稲田キャンパス.
11. 近藤和敬「虚構と逆アイデア」, 「不可知性をめぐる哲学的／人類方法論の探求」, 2018.3.3. 大阪大学吹田キャンパス.
12. 近藤和敬「デルボス『百科全書』項目「哲学」にみる実証主義に対する合理性の応答——20世紀初頭における自然科学と形而上学をとりまく文脈状況の探査——」, 二つのスピノザ・ルネッサンスの狭間—十九世紀フランス哲学におけるスピノザの影第三回研究会, 2018.3.17. 鹿児島大学.
13. 佐久間寛「【フォーラム】アフリカ独立期における文化の政治:『プレゼンス・アフリケース』研究—趣旨説明—」, 日本アフリカ学会第54回学術大会, 2017.5.21. 信州大学教育学部.
14. 佐久間寛「オーラルからモーラルへ:ニジェール西部の人と土地をめぐる社会関係」, 白山人類学研究会 2017年度第1回定例研究会, 2017.4.17. 東洋大学.
15. Sakuma, Yutaka, "Introduction: Art, affect et action, Colloque internationale Art et affect en Afrique", Projet noyau par ILCAA "The Potential Value of Indigenous Knowledge in Managing Hazards in Asia and Africa: The Anthropological Explorations into the Linkage of Micro-Macro Perspectives 2", 2017.8.19. ILCAA.
16. 佐久間寛「戦場としての大河, 劇場としての大河:J.ルーシュ「大河での戦い」をめぐる一注釈」, 日本文化人類学会関東地区研究懇談会, 2017.9.23. 東京大学駒場キャンパス.
17. Sakuma, Yutaka, "Bataille dans le fleuve, bataille en dehors du fleuve: Une étude ethnographique de la chasse à l'hippopotame sur le Niger", Conférence d'ethnologie par l'Association d'ethnologie de Strasbourg, 2018.2.14. Université de Strasbourg.
18. 佐藤知久「アジール・フロタンと"戦間期"」, 「アジール・フロタン再生展 -浮かぶ避難所 ル・コルビュジエが見た争乱・難民・抵抗-」主催:遠藤秀平建築研究所, 2017.8.4. 東京国際フォーラム.
19. 佐藤知久「Weekend Cafe と Social Kitchen:90年代と10年代の京都オルタナティブ空間」, シンポジウム「都市のインフォーマリティが生み出すオルタナティブ」主催:ミサワホーム近畿株式会社, 2017.10.15. UNDER THE BRIDGE[北公園 ポートアイランド].
20. 佐藤知久「アーカイブと歴史的創造力」, 柳原銀行記念資料館 20周年記念特別展及び記念シンポジウム「我ら, 山水河原者の末裔なり～芸大移転に寄せて～」主催:京都市, NPO 法人崇仁まちづくりの会, 2017.10.28. 崇仁船鉾保管庫.
21. 佐藤知久(シンポジウム登壇者として議論), シンポジウム「そもそも下町ってなんやらか」主催:新長田アートコモンズ実行委員会, 2017.11.12. ArtTheater dB KOBE.
22. 佐藤知久「土着の魂・旅人の目～カセットテープとインターネット～」モデレーター, 草アーカイブ会

- 議 2 「コミュニティ・アーカイブってなに？」主催：せんだいメディアテーク, 2017.12.24. せんだいメディアテーク.
23. 佐藤知久「DIY」, 裸の DIY シンポジウム 2days「ツクレ, 死ね, 甦れ！」主催: カサルーデンス (南区 DIY 研究室), 2018.3.4. 京都みなみ会館 1 階特設会場.
 24. 床呂郁哉「東南アジア島嶼部における森林・水産資源の利用と環境問題に関する試論—ボルネオ島の事例を中心に」, アジアの環境問題勉強会, 2018.1.20. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 25. 床呂郁哉「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」, キックオフ・シンポジウム「科研新学術領域・顔身体学の構築」, 2017.9.10. 関西学院大学.
 26. 床呂郁哉「フィリピン南部ミンダナオ紛争と和平プロセスをめぐる情勢—マラウィ市占拠事件を中心に」, KKLO 企画実務者会合, 2017.7.20. 在マニラ JICA オフィス.
 27. 床呂郁哉「「シリア化」するフィリピン南部？—ドゥテルテ政権下のミンダナオ紛争に関する 試論的考察。マラウィ市占拠事件を中心に」, AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性(第三期)」第 1 回研究会, 2017.7.15. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 28. Tokoro, Ikuya, "Brief introduction of Multi-disciplinary Study on Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia", 「穏健主義育成に関するアジア地域関係者ワークショップ」, 2017.7.14. 外務省.
 29. 床呂郁哉「フィリピン南部におけるミンダナオ紛争とムスリム武装組織の動向—ドゥテルテ政権発足以降の状況を中心に」, 外務省分析研究会, 2017.7.12. 外務省
 30. Nakamura, Kyoko and Yukio Pegio Gunji, "Entanglement of 'art coefficient', or creativity", Worlds of Entanglement, 2017.9.30. the Free University of Brussels, Belgium.
 31. Gunji, Yukio Pegio and Kyoko Nakamura, "Entangled Consciousness", Worlds of Entanglement, 2017.9.30. the Free University of Brussels, Belgium.
 32. 中村恭子「首を擡げるアルシブラ」, シヤルル・フーリエ研究集会, 2018.3.24. 一橋大学.
 33. Nawa, Katsuo, "Migration and the Changing nature of multilingualism among the people of Byans, Far Western Nepal and adjacent regions", CASCA/IUAES2017 Conference in Ottawa: Mo(u)vement, 2017.5.4. University of Ottawa.
 34. 名和克郎「ネパールのランにおける毛織物をめぐる実践と表象の展開—「伝統服」と絨毯を例として」, 日本文化人類学会第 51 回研究大会, 2017.5.27. 神戸大学鶴甲第一キャンパス.
 35. 名和克郎「極西部ネパール, チャングルの村人に対する学校教育の影響 c. 1925~2015」, 南アジア研究センター設立記念シンポジウム「南アジアの社会経済発展の基盤-教育・市場・国家」, 2017.6.4. 東京大学駒場キャンパス.
 36. Nawa, Katsuo, "'There Are No Servants among Us': Livelihood, Work, and Being Independent among Rangs from Byans, Far Western Nepal.", International Conference "Work, Identity and Livelihood in Nepal: Theoretical challenges and contemporary practices for South Asia", 2017.7.22. South Asian University, Akbar Bhawan, New Delhi.
 37. Nawa, Katsuo, "On the 'Drum Music' in Byans and Adjacent Regions: Performances, Aesthetics, and Boundaries", 5th ANHS Himalayan Studies Conference, 2017.9.2. University of Colorado Boulder.
 38. Nawa, Katsuo, "'Citizenship', 'Religion', Patrilineality, and Imagined Communities in Contemporary Nepal: Comparing the Early Panchayat and Post-'Conflict' Periods", Critical Nationalism Studies

Workshop: National Imaginaries and Beyond, 2017.9.4. Durham University.

39. Nishii, Ryoko, "The Da'wa movement in Pai town-how to continue its passion, the panel ' Religious Experience and Religious Connectivity", 13th International conference on Thai Studies, 2017.7.15–18. Chiang Mai University.
40. Yoshida, Yukako, "Imperfect Bodies and Comedy in Balinese Theater", 国際シンポジウム Art and Disability: The cases from Africa and Asia, 2017.7.13. ILCAA.

[図書]計4件

1. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, *An Anthropology of Things*, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. 406 pp.
2. Sakuma, Yutaka, *Index de Présence Africaine par auteurs (1947-2016)*, Présence Africaine, 近刊. 440 pp.
3. 佐藤知久・甲斐賢治・北野央『コミュニティ・アーカイブをつくろう！ せんだいメディアテーク「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」奮闘記』, 晶文社, 2018. 全 370 頁.
4. Tokoro, Ikuya and Hisao Tomizawa (eds.), *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. 341 pp.

[社会に向けた成果発表]計11件

1. 岩谷彩子「廃品回収」, 『インド文化事典』, 672–673, 丸善出版, 2018.
2. 岩谷彩子「露店」, 『インド文化事典』, 662–663, 丸善出版, 2018.
3. 岩谷彩子「クリミナル・トライブの誕生」, 『インド文化事典』, 50–51, 丸善出版, 2018.
4. 岩谷彩子「民間信仰と医療」, 『インド文化事典』, 453–453, 丸善出版, 2018.
5. Sakuma, Yutaka, "Moral Economy and Land Tenure in Sahel (Western Niger)", *Proceedings of 7th International Workshop on African Moral Economy with Professor Goran Hyden: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives (9th to 12th December 2016, Kyoto, Japan)*, 55–57, Kindai University, 2017.
6. 佐久間寛・中村隆之・星埜守之「鼎談 「文化」をどう政治的に考えるか: 国際シンポジウム『プレゼンス・アフリケーヌ』研究』(@東京外国語大学) を振り返る」, 『図書新聞』3326, 6–7, 2017.
7. 佐久間寛「亀裂の上に世界を作る: 国際シンポジウム『プレゼンス・アフリケーヌ』研究」, 『ふらんす』Dec-92, 16–18, 白水社, 2017.
8. 塩谷賢オープニング対談「主体的・対話的で深い学びにつなぐ」, 平成 29 年度長野県総合教育センター研究発表会 ～多様化する教育現場の課題解決に取り組む教職員を支援する調査研究～.
9. 床呂郁哉「ミンダナオ和平へ正念場—バンサモロ基本法成立急げ」, まにら新聞 2018 年 1 月 9 日号, 3, まにら新聞社, 2018.
10. 床呂郁哉「フィリピン南部は IS(イスラーム国)の拠点になるか? — マラウィ市占拠事件の深層」, 『NAVI・MANILA』, 34(2017 年 7 月 6 日), 7, まにら新聞社, 2017.
11. 名和克郎「ネパールの国民・民族・言語」, 『インド文化事典』, 155–155, 丸善出版, 2018.

[その他]計3件

1. 中村恭子「ウラジーミル・ナボコフ「アード」」, 装画に作品《百刻みの刑》が採用された.
2. 中村恭子「酒と文学展」, 作品《皿鉢絵》を出品した. 高知県立文学館.

3. 中村恭子「シンビズム展」, 作品《百刻みの刑》, 《風景を漁る者》, 《かものはす—急上昇—》, 《蝸工図》, 《冴截図—たった一つの冴えたやり方—》, 《かわうそだま》, 《熊奏図》, 《皿鉢絵》を出品した。諏訪市美術館。

中国雲南におけるテキスト研究の新展開

研究期間: 2015–2017 (代表: 山田敦士 / 所員 2, 共同研究員 18)

所員: 澤田英夫, 星泉

共同研究員: 山田敦士, 飯島明子, 伊藤悟, 稲村務, 川野明正, 黒澤直道, 立石謙次, 清水享, 新谷忠彦, 富田愛佳, 中見立夫, 奈良雅史, 西川和孝, 野本敬, 長谷千代子, 堀江未央, 山田勅之, 吉野晃

研究会等の内容

第1回研究会(通算第6回目, 日時:2017年7月2日(日))

吉野晃(AA 研共同研究員, 東京学芸大学)「タイ北部ミエンの歌謡テキストと歌謡言語」

梶丸岳(京都大学)「吉野報告に対するコメント」

川野明正(AA 研共同研究員, 明治大学), 菅野賢治(東京理科大学)「蕭傑一著『茨中天主教簡史』と雲南西北部のカトリック布教史」

全体討論

第2回研究会(通算第7回目, 日時:2017年12月2日(土))

伊藤悟(AA 研共同研究員, 京都文教大学/日本学術振興会)「徳宏タイ仏教文書『リークヤート』をめぐる実践の現状」

清水享(AA 研共同研究員, 日本大学)「彝文辞典(字典)について」

全体討論

第3回研究会(通算第8回目, 日時:2018年3月18日(日))

稲村務(AA 研共同研究員, 琉球大学)「フォークロア概念の終焉:雲南ハニ族の伝承/伝統的知識と柳田国男」

澤田英夫(AA 研)「東南アジアインド系文字の視点からみた雲南および隣接地域の文字」

全体討論

研究成果一覧

[学術論文]計9件

1. 黒澤直道「情死の調ベ—ナシ族の「ユプ」—」, 『万葉集と東アジア』, 501–534, 竹林舎, 2017.
2. 清水享「関與中央研究院所蔵彝文文献及其来歴的田野調査」, 『人類学視野下的歴史, 文化與博物館』特集号(*Senri Ethnological Studies* 97), 351–368, 国立民族学博物館, 2018.(査読有)
3. 奈良雅史「『宗教』をはみ出す:雲南のムスリムのなかでのフィールドワーク」, 『フィールドワーク—中国という現場, 人類学という実践』, 117–136, 風響社, 2017.
4. 西川和孝「清末雲南産アヘンの輸出ルートに関する一考察」, 『淑徳大学人文学部研究論集』2, 43–54, 2017.(査読有)
5. 山田敦士「滄源ワ族自治県の碑文テキスト(3)」, 『北海道民族学会』14, 109–115, 2018.(査読有)

6. 山田勅之「トンバ文字によって記されたナシ族非宗教テキスト」, 『大阪成蹊短期大学研究紀要』15, 213-217, 2018.
7. 吉野晃「タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語(2):『後生娘子歌』発音と注釈」, 『東京学芸大学紀要人文社会科学系 II』68, 47-58, 2017.
8. 吉野晃「タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語(3)—「過山榜圖」発音と注釈—」, 『東京学芸大学紀要人文社会科学系 II』69, 73-84, 2018.
9. 吉野晃「ミエン(ヤオ)の歴史資源化に関する覚え書き—中国とタイの場合—」, 『中国における歴史の資源化の現状と課題』(国立民族学博物館調査報告 No.142), 309-322, 国立民族学博物館, 2017.

[口頭発表等]計 14 件

1. 伊藤悟「タイ王国チェンマイ県の歌師チャンソーの取り組み—即興歌謡ソーの学習と教授方法を中心に」, 『東洋音楽学会西日本支部例会』, 2017.11.18. 大阪大学.
2. 伊藤悟「徳宏タイ仏教文書『リークヤート』をめぐる実践の現状」, 『中国雲南におけるテキスト研究の新展開』, 2017.12.2. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. Kurosawa, Naomichi, "Publishing and Using of Naxi Language Texts", East Asian Anthropological Association Conference 2017, 2017.10.15. The Chinese University of Hong Kong.
4. 清水享「閩興彝族與彝語以及彝文文献—彝文文献情況初探」, 香港科技大学人文学部学術報告, 2017.9.1. 香港科技大学.
5. Tateishi, Kenji, "Study on the Texts of the Bai People in Dali, Yunnan Province, China: Status and Issues", East Asian Anthropological Association Conference 2017, 2017.10.15. The Chinese University of Hong Kong.
6. 奈良雅史「中国における宗教管理とイスラーム的『風紀』の生成:雲南省におけるアルコール排斥運動の事例から」, 「現代ムスリム社会における風紀・暴力・統治についての多角的分析」研究会, 2018.1.20. 早稲田大学.
7. 奈良雅史「コスモポリタニズムとイスラーム復興—浙江省義烏市の事例から」, 科学研究費補助金基盤研究(B)「中国の一带一路構想の系譜とエスニシティのネットワークを介した対外文化戦略の研究」2017年度第2回研究会, 2017.12.23. 新潟県立大学.
8. 奈良雅史「動く回族とイスラーム復興—雲南省における宣教活動の事例から」, 公開シンポジウム「移動と流行:現代中国のコンタクト・ゾーン」, 2017.12.2. 南山大学.
9. Nara, Masashi, "Relationships between Religiosity and Ethnicity of Hui Muslims: A Change in Textbooks of Islamic Education in Yunnan Province, China", East Asian Anthropological Association Conference 2017, 2017.10.15. The Chinese University of Hong Kong.
10. 野本敬「『資源化される歴史』に関するメモ」, 科研「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」・共同研究「資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から」合同研究会, 2017.10.28. 国立民族学博物館.
11. Yamada, Atsushi, "Collaborative Activities Using Documented Texts in the Wa Community", East Asian Anthropological Association Conference 2017, 2017.10.15. The Chinese University of Hong Kong.
12. 吉野晃「<廟>における女性シャマンの儀礼と組織の変化—タイ北部, ユーミエン(ヤオ)社会に」における新たな宗教現象に関する中間報告 4—」, 日本文化人類学会第 51 回研究大会, 2017.5.27.

神戸大学鶴甲第一キャンパス.

13. 吉野晃「タイ北部におけるミエン(ヤオ)の歌謡と歌謡言語と儀礼」, 日本タイ学会第 19 回研究大会, 2017.7.8. 法政大学市ヶ谷キャンパス.
14. 吉野晃「相補展開:タイ北部ミエン(ヤオ)における新しい宗教現象の伝承的基盤」, 日本道教学会第 68 回研究大会, 2017.11.11. 國學院大学.

[図書]計 9 件

1. 伊藤悟『カーム・ソンコーカオ—徳宏タイ上座仏教社会におけるシャーマンの送霊うた』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全 432 頁.
2. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.111 The Gokhu Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. xxii+267 pp.
3. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.112 The Blimaw Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. xxiii+267 pp.
4. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.113 The Khwingsang Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. xxiii+267 pp.
5. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.114 The Khrangkhu Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. xxiii+267 pp.
6. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.115 The Yingtalay Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. xxiii+267 pp.
7. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area No.116 The Thaidai Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. xxiii+268 pp.
8. 川野明正(編)『ミャンマー・ヤンゴン雲南墓園墓誌集成』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018. 全 137 頁.
9. 蕭傑一(著)川野明正・菅野賢治(編・訳)『雲南北西部カトリック簡史—茨中天主堂を中心に—』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018. 全 135 頁.

[社会に向けた成果発表]計 9 件

1. 伊藤悟「ソー・ランナー～北タイの意気を歌に掛け合う(前編)」, 『ちゃ～お CHAO』353, 1-3, Bridge International Foundation, 2017.
2. 伊藤悟「ソー・ランナー～北タイの意気を歌に掛け合う(後編)」, 『ちゃ～お CHAO』354, 1-3, Bridge International Foundation, 2018.
3. 伊藤悟「タイ族のことばと文字」, 『世界はことばでできている』, 駿河台出版社(URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/rensai04>)
4. 伊藤悟「多様なタイ族」, 『世界はことばでできている』, 駿河台出版社(URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/rensai04>)
5. 伊藤悟「タイ族のうたと音の文化」, 『世界はことばでできている』, 駿河台出版社(URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/rensai04>)
6. 伊藤悟「タイ族文化の現状と継承への取り組み」, 『世界はことばでできている』, 駿河台出版社(URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/rensai04>)
7. 清水享「1. 東アジア 中華人民共和国(イ族)」, 『世界の暦文化事典』, 54-57, 丸善出版, 2017.
8. 奈良雅史「現代中国における回族の民族誌」, 『国際宗教研究所ニュースレター』86, 11-13, 2017.

9. 奈良雅史「〈書評〉稲村務著『祖先と資源の民族誌—中国雲南省を中心とするハニ＝アカ族の人類学』めこん, 2016年」, 『コンタクト・ゾーン』9, 409–415, 2017.

近世南アジアの文化と社会: 文学・宗教テキストの通言語的比較分析

研究期間: 2016–2018 (代表: 太田信宏 / 所員 4, 共同研究員 13)

所員: 太田信宏, 高島淳, 小倉智史, 近藤信彰

共同研究員: 石田友梨, 井田克征, 小川道大, 置田清和, 小磯千尋, 榊和良, 長崎広子, 二宮文子, 橋本泰元, 真下裕之, 水野善文, 三田昌彦, 和田郁子

研究会等の内容

第1回研究会(平成29年10月14日土曜日, 東京外国語大学本郷サテライト8階会議室)

井田克征「14世紀マハーラーシュトラ北部におけるマハーヌバーヴ教団について」

小倉智史「カシミール・リシ伝記群とその宗派性」

石田友梨「シャー・ワリーウッラー『Tafhīmāt Ilāhīya』に描かれるイブン・アラビーの思想」

第2回研究会(平成30年3月26日月曜日, 東京外国語大学本郷サテライト8階会議室)

小磯千尋「ラームダースの説く『マハーラーシュトラ・ダルマ』とは？」

近藤信彰「南アジアにおけるペルシア語語り物文学の受容, 翻案, 翻訳: ハムザ物語を中心に」

共同研究後半と成果とりまとめに向けた打ち合わせ(出席共同研究員全員)

研究成果一覧

[学術論文]計8件

1. Okita, Kiyokazu, "Salvation through Colorful Emotions: Aesthetics, Colorimetry, and Theology in Early Modern South Asia", *Historicizing Emotions: Practices and Objects in India, China, and Japan.*, 100–112, Brill, 2017. (査読有)
2. 高島淳「インドにおける終焉期の仏教—南インドを中心に—」, 『宗教研究』91(別冊), 307–308, 2018.
3. 長崎広子「ヒンディー詩における音韻的リズム」, 『南アジア言語文化』9, 56–76, 2018. (査読有)
4. 長崎広子「ムガル皇帝アクバルとふたりのスールダース: 聖者伝文学の記述をとおして」, 『印度民俗研究』17, 43–63, 2018.
5. Nagasaki, Hiroko, "Duality in the Language and Literary Style of Raskhan's Poetry", *Text and Tradition in Early Modern North India*, 159–173, Oxford University Press, 2018.
6. 真下裕之(監修・訳注)・二宮文子・和田郁子(訳注)「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注(6)」, 『神戸大学文学部紀要』45, 1–44, 2018.
7. 真下裕之「クトゥブ・シャーヒー朝の起源に関する諸説とその周辺: インド洋西部海域における人的移動の諸相」, 『西南アジア研究』43, 112–135, 2017. (査読有)
8. 和田郁子「植民地港市」ナーガパッティナムの形成——近世コロマンデル海岸と南インド内陸社会」, 『海と陸の織りなす世界史: 港市と内陸の一体化と分化』, 2018.

[口頭発表等]計18件

1. 井田克征「中世バクティ教団における出家者: マハーヌバーヴ派の聖者伝から」, 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム: 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」研究

- 会, 2017.9.1. 京都大学人文科学研究所.
2. 井田克征「聖者と社会: 群衆に向かって開かれること」, 現代アジアにおける聖者崇拜の諸相研究会, 2017.9.9. 東洋大学白山キャンパス.
 3. 井田克征「中世マハーラーシュトラのバクティ教団における出家者の実像」, 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム: 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第 3 回シンポジウム「古代・中世インドの神話, 説話, 表象」, 2017.10.15. 京都大学人文科学研究所.
 4. 太田信宏「ムガル朝と南インドの文化的接触について」, AA 研有志研究会「南アジアのフロンティアを再考する」, 2017.6.28. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 5. Okita, Kiyokazu, "A Match Made in Heaven? The Early Modern Views on Kṛṣṇa's Relationship with the Gopīs of Vṛndāvana", The Building of Vṛndāvana, Oxford Center for Hindu Studies Workshop 2017, 2017.9.2. Oxford Center for Hindu Studies.
 6. 小倉智史「『ラージャタランギーニ』ペルシア語訳における翻訳ストラテジー」, AA 研フォーラム, 2017.6.15. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 7. 小倉智史「16 世紀カシミールのサンスクリット文献におけるモグール/ムガル」, AA 研有志研究会「南アジアのフロンティアを再考する」, 2017.6.28. 東京外国語大学 AA 研.
 8. Ogura, Satoshi, "Kaśmīr and the Mongols: Who invaded the valley in 1320?", Deutscher Orientalistentag 33, 2017.9.20. Friedrich-Schiller-Universität Jena, Germany.
 9. Ogura, Satoshi, "Kalhaṇa's 'victory' over Rashīd al-Dīn: contesting pre-Islamic histories of Kashmir during the Jahāngīr period", International Workshop on Pre-modern Kashmir 2018, 2018.3.6. 京都大学ユーラシア文化研究センター.
 10. Ogura, Satoshi, "Political Legitimacies and Their Perceptions in the Multilingual Society of Sultanate and Early Mughal Kashmir", Eighth Biannual Convention of the Association for the Study of Persianate Societies, 2018.3.16. Ilia State University, Tbilisi, Georgia.
 11. 近藤信彰「ハムザ物語研究序説」, AA 研有志研究会「南アジアのフロンティアを再考する」, 2017.6.28. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 12. 榊和良「死の超克: 翻訳されたインドの予兆学と冥界説話」, 日本宗教学会第 76 回学術大会, 2017.9.16. 東京大学.
 13. Sakaki, Kazuyo, "Tantric Elements in Persian translated works on astrology", The fifth Perso-Indica Conference, 2018.2.1. University of Bonn, Germany.
 14. 高島淳「アッパヤ ディークシタとシヴァ教」, AA 研有志研究会「南アジアのフロンティアを再考する」, 2017.6.28. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 15. 高島淳「インドにおける終焉期の仏教: 南インドを中心に」, 日本宗教学会第 76 回学術大会, 2017.9.17-18. 東京大学.
 16. 高島淳「カンナダ語 英語 日本語 3 言語電子辞書の構築について」, 情報資源利用研究センター「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て, 活かす」, 2017.12.9. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 17. 三田昌彦「関係性の中の国家: インド中世の非領域的国家システム」, 2017 年度 KINDAS 研究グループ 1-A「南アジアの長期発展径路」第 2 回研究会, 2018.1.27. 京都大学.
 18. 和田郁子「オランダ東インド会社史料と南部アフリカ」, 「移動と接触の社会史」共同研究グループ第

一回例会, 2017.11.11. 岡山大学文学部.

[図書]計1件

1. Takashima, Jun, *Kannada-English Etymological Dictionary*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. 942pp.

[社会に向けた成果発表]計16件

1. 井田克征「マーフルへ, 神々の力をもとめて」, 『インド通信』466, 1-3, インド文化交流センター, 2017.
2. 井田克征「神秘思想」, 『インド文化事典』, 180-181, 丸善出版, 2018.
3. 井田克征「現代のスピリチュアリズム」, 『インド文化事典』, 186-187, 丸善出版, 2018.
4. 井田克征「第六章リード文」, 『インド文化事典』, 199-199, 丸善出版, 2018.
5. 井田克征「ラーマーヤナ」, 『インド文化事典』, 214-215, 丸善出版, 2018.
6. 井田克征「アヴァターラ思想」, 『インド文化事典』, 218-219, 丸善出版, 2018.
7. 井田克征「問われる伝統」, 『インド文化事典』, 238-238, 丸善出版, 2018.
8. 太田信宏「近世南インドの宮廷文学」, 『インド文化事典』, 124-125, 丸善出版, 2018.
9. 太田信宏「デリー・スルタン朝時代の南インドの情勢」, 『インド文化事典』, 252-253, 丸善出版, 2018.
10. 太田信宏「ムガル期の南インドの情勢」, 『インド文化事典』, 256-257, 丸善出版, 2018.
11. 置田清和「ヴィヴェーカーナンダ」, 『インド文化事典』, 226-227, 丸善出版, 2018..
12. 小倉智史「私蔵写本を求めて」, 『FIELDPLUS』19, 20-21, 東京外国語大学出版会, 2018.
13. 真下裕之「ムスリムの到来とデリー・スルタン朝」, 『インド文化事典』, 250-251, 丸善出版, 2018.
14. 真下裕之「ムガル帝国の興隆と衰退」, 『インド文化事典』, 254-255, 丸善出版, 2018.
15. 真下裕之「アーグラ」, 『インド文化事典』, 730-730, 丸善出版, 2018.
16. 三田昌彦「中世初期インド(600-1200年)」, 『インド文化事典』, 248-249, 丸善出版, 2018.

中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究

研究期間: 2016-2018 (代表: 近藤洋平 / 所員 2, 共同研究員 9)

所員: 黒木英充, 錦田愛子

共同研究員: 近藤洋平, 高橋英海, 辻明日香, 吉村貴之, 若松大樹, Antranig DAKESSIAN, Guita HOURANI, Ray MOUAWAD, Souad SLIM

研究会等の内容

2017年度第1回研究会(通算第3回)

Survival Strategies of Minority Groups in the Middle East (2)

日時:2017年9月7日(木)10:00-14:00, 2017年9月8日(金)10:00-14:00

場所:Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut (JaCMES)

使用言語:英語

主催:基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」

9月7日

Yohei KONDO (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate)

Survival Strategies of Minority Groups in Oman

Takayuki YOSHIMURA (ILCAA Joint Researcher, Waseda University)

Survival Strategies of Armenians

Aiko NISHIKIDA (ILCAA)

Survival Strategies of Palestinians in Lebanon

All members

Discussion on the Guideline/Format of the Contribution

9月8日

Asuka TSUJI (ILCAA Joint Researcher, Kawamura Gakuen Woman's University)

Survival Strategies of Copts in Egypt

Hidemi TAKAHASHI (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo)

Survival Strategies of Syriac Christians

Hidemitsu KUROKI (ILCAA)

Survival Strategies of Minority Groups in Sham

All members

About Next Meeting/Symposium at USJ in March 2018

2017年度第2回研究会(通算第4回)

日時:2018年3月16日(金)15:00-19:00, 2018年3月17日(土)9:30-13:00

場所:Saint Joseph University

使用言語:英語

3月16日

Tom SICKING S.J. (USJ)

Keynote speech

Hidemitsu KUROKI (ILCAA)

"Middle Eastern Studies in Japan: Its Short History and Potential"

Souad SLIM (ILCAA Joint Researcher, University of Balamand)

"An Example of Christian Muslim Relations in the Ottoman Period"

Guita HOURANI (ILCAA Joint Researcher, Notre Dame University)

"Survival Strategies in an Ethnic Minority Group: The Kurds of Lebanon"

Hiroki WAKAMATSU (ILCAA Joint Researcher, Toros University)

"Social Organization Process of Alevis in Turkey: An Anthropological Approach for Survival Strategy"

Aiko NISHIKIDA (ILCAA)

"The Palestinians in Lebanon"

3月17日

Roula TALHOUK (USJ)

Keynote speech "Kurds/Daesh or Chiites/Maronites in Sayda"

Ray J. MOUAWAD (ILCAA Joint Researcher, USJ)

"Jews in Tripoli - Lebanon"

Antranik DAKESSIAN (ILCAA Joint Researcher, Haigazian University)

"100 Years of Reconstructing Identity: The Tiny Armenian Community of Jounieh."

Hidemi TAKAHASHI (ILCAA Joint Researcher, University of Tokyo)

"Survival of Syriac Christianity in China: Remarks on Some Recent Discoveries"

Asuka TSUJI (ILCAA Joint Researcher, Kawamura Gakuen Women's University)

"The Relationships of the Coptic Church in the Fifteenth Century"

研究成果一覧

[学術論文]計 11 件

1. 近藤洋平「オマーンにおける宗教:多宗教の共存をめざして、『オマーンを知る 55 章』, 200-203, 明石書店, 2018.
2. Tsuji, Asuka, "Wearing the Blue Turban Again: Christian Reconversions in Mamluk Egypt", *Religious Interactions in Europe and the Mediterranean World: Coexistence and Dialogue from the Twelfth to the Twentieth Centuries*, 209-220, Routledge, 2017.
3. 吉村貴之「アルメニア使徒教会について」, 『東方キリスト教諸教会:研究案内と基礎データ』, 346-348, 明石書店, 2017.
4. 吉村貴之「アルメニア教会基礎データ」, 『東方キリスト教諸教会:研究案内と基礎データ』, 550-552, 明石書店, 2017.
5. 吉村貴之「カフカスの革命」, 『越境する革命と民族』(『ロシア革命とソ連の世紀』第 5 巻), 153-178, 岩波書店, 2017.(査読有)
6. 吉村貴之「近現代アルメニア人社会が包摂する「境界」」, 『歴史学研究』963, 19-27, 績文堂出版, 2017.
7. Kuroki, Hidemitsu, "Neither "Western" nor "Orthodox": Establishing Greek Catholic Identity in the Ottoman Empire and Beyond", *Religious Interactions in Europe and the Mediterranean World*, 287-298, Routledge, 2017.(査読有)
8. 黒木英充「イスラームと地域論」, 『第 4 次 現代歴史学の成果と課題』2, 48-63, 績文堂出版, 2017.
9. Slim, Souad, "L'influence du siecle des lumieres Grec sur le Patriarcat d'Antioche", *Volume en l'honneur de Pere Samir Khalil*.
10. Slim, Souad, "Une polemique Islamo-Chretienne de Yuhanna Issa Uwaysat (XVII eme siecle)", *Paroles de l'Orient Kaslik*.
11. Slim, Souad, "The Manuscript Muluk al Rum" between legend and History" , *ARAM periodical Oxford*.

[口頭発表等]計 7 件

1. 辻明日香「十字軍と中東のキリスト教徒」, 歴史学会第 42 会大会[シンポジウム:宗教的「他者」化と共存のポリティクス], 1905.7.9. 明治大学
2. 吉村貴之「近現代アルメニア人社会が包摂する「境界」」, 歴史学研究会 2017 年度大会, 2017.5.27. 学習院大学
3. Kuroki, Hidemitsu, "Aleppo in the Syrian History", Saving the Syrian Cultural Heritage for the Next Generation, 2017.7.13. 奈良春日野国際フォーラム.
4. 黒木英充「シリア内戦 最古の都市文明の地から見る人類の近未来」, 日本中東学会公開講演会

- 中東の戦争と平和 ヒロシマから考える, 2017.9.30. 広島国際会議場.
5. 黒木英充「シリア内戦, 対テロ戦争, イスラーム」, 第213回広島大学平和科学研究センター研究会, 2017.10.31. 広島大学総合科学部.
 6. 黒木英充「シリア情勢の現状と今後の展望」, 国際情勢研究所講演会, 2017.9.26. 国際情勢研究所 (東京都港区).
 7. Slim, Souad, "Resistance to Civil war in Lebanon", 2017.1. University of Halle.
- [社会に向けた成果発表]計12件
1. 吉村貴之「映画『THE PROMISE／君への誓い』とアルメニア人虐殺・追放問題」, 『THE PROMISE／君への誓い』プログラム, 7-8, 博報堂 DY ミュージック and ピクチャーズ, 2018.
 2. 黒木英充「トランプ大統領エルサレムの思惑！中東情勢の行方と日本！」, NHK テレビ総合日曜討論
 3. 栗田禎子・長沢栄治・黒木英充・高橋和夫・臼杵陽「座談会 中東の地殻変動をどう見るか」, 『世界』905, 132-147, 岩波書店, 2018.
 4. 黒木英充「日本におけるイスラームとの共生」, 『世界史のしおり』2017 年度 3 学期号, 6-7, 帝国書院, 2018.
 5. Hourani, Guita, "About the project", *Al Khatt Al Moubashar Program on Lubnan el Horr Radio*.
 6. Slim, Souad, "Uwaysat", *the Dictionnary of Chistan Muslim Relation*.
 7. Slim, Souad, "Hassoun", *the Dictionnary of Chistan Muslim Relation*.
 8. Slim, Souad, "ABDo", *the Dictionnary of Chistan Muslim Relation*.
 9. 近藤洋平「オマーン—「寛容」の精神のもとで暮らす」, 『FIELDPLUS』19, 4-5, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018.
 10. 黒木英充「ダマスカスのウマイヤ・モスク」, 『FIELDPLUS』19, 6-7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018.
 11. 若松大樹「現代トルコのアレヴィー——少数派として生き抜く」, 『FIELDPLUS』19, 8-9, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018.
 12. 辻明日香「エジプト・ナイル川中流域のキリスト教社会」, 『FIELDPLUS』19, 10-11, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018.
- [その他]計1件
1. 黒木英充, "Multilayered Basemap System for Middle Eastern Cities", 中東諸都市・地域の古地図と Google Maps の重ね合わせと研究情報の共有システム. <http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>

ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容 (2) ジャワのイスラーム化再考

研究期間: 2016-2018 (代表: 菅原由美 / 所員 2, 共同研究員 9)

所員: 塩原朝子, 澤田英夫

共同研究員: 菅原由美, 青山亨, 東長靖, 深見純生, 宮崎恒二, 山崎美保, 山根聡, Oman FATHURAHMAN, Willem van der MOLEN

研究会等の内容

第1回研究会(通算第5回目)

2017年6月10日(土)10:00-16:30(公開), 16:30-19:00(非公開)

大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室(豊中市待兼山町1-15)

共催: 科研費基盤研究(B)「ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考」(研究代表者: 菅原由美(大阪大学) #16H05662)

・ジャワ語文献 Babad Tanah Jawi (Balai pustaka 版) 講読

・青山亨(AA 研共同研究員, 東京外国語大学)

「東南アジアにおけるイスラーム受容をめぐる現地認識」

・深見純生(AA 研共同研究員)

「イスラーム化初期の史跡——マジャパヒトからマタラムへ」

・今年度現地調査計画策定

第2回研究会(通算第6回目)

2017年11月25日(土)13:15-18:15

大阪大学豊中キャンパス スチューデント・コモンズ(セミナー室C)

科研費基盤研究(B)「ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考」(研究代表者: 菅原由美(大阪大学) #16H05662)

・深見純生(AA 研共同研究員)「ゴボッグ・コインについて」

・菅原由美(AA 研共同研究員, 大阪大学)「科研調査概要・科研調査成果報告」

・青山亨(AA 研共同研究員, 東京外国語大学)「科研調査成果報告」

・山崎美保(AA 研共同研究員, 東京外国語大学大学院生)「科研調査成果報告」

・ウィルム・ファン・デル・モーレン(AA 研共同研究員, KITLV)「科研調査成果報告」

・東長靖(AA 研共同研究員, 京都大学)「科研調査成果報告」

・山根聡(AA 研共同研究員, 大阪大学)「科研調査成果報告」

第3回研究会(通算第7回目)

2018年3月27日(火)10:00-17:30

AA 研マルチメディアセミナー室(306)

・ジャワ語文献 Babad Tanah Jawi (Balai pustaka 版) 講読

・菅原由美(AA 研共同研究員, 大阪大学)「スナン・ボナンの教え」

・東長靖(AA 研共同研究員, 京都大学)「近現代のスーフィーズムの4象限説」

・山根聡(AA 研共同研究員, 大阪大学)「南アジア・スーフィーズムの諸相」

・青山亨(AA 研共同研究員, 東京外国語大学)

「スルック(ジャワ語スーフィー詩)に見られる船の比喩)」

研究成果一覧

[学術論文]計14件

1. 深見純生「『ババッド・タナ・ジャウイ』におけるムラピ山——精霊と火砕流——」, 『桃山学院大学総合研究所紀要』43(1), 101-115, 2017.
2. モケット著・向正樹訳補論・深見純生監訳「モケット著『ジャワ最古のイスラーム碑文』翻訳と補論——イスラーム碑銘学・海域史の視点から」, 『アラブ・イスラーム研究』15, 45-71, 2017.
3. 菅原由美「出版とオランダ領東インドのイスラーム化——インドネシア近代史叙述とイスラーム・アイデン

- ティティ』,『歴史の生成』, 223–252, 京都大学出版会, 2018.(査読有)
4. Sugahara, Yumi, "Islam and the National History of Indonesia", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.2) : Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*, 223–252, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018.(査読有)
 5. Aoyama, Toru, "Social Integration in Majapahit as Seen in an Old Javanese Court Narrative. State Formation and Social Integration," *Pre-modern South and Southeast Asia: A Comparative Study of Asian Society*, 165–177, The Toyo Bunko, 2017.(査読有)
 6. Nishino, Noriko, Toru Aoyama, Jun Kimura, Takenori Nogami and Le Thi Lien, "Nishimura Masanari's Study of the Earliest Known Shipwreck Found in Vietnam.", *Asian Review of World Histories*. 5(2), 106–122, 2017.(査読有)
 7. 青山亨・増井美佳共訳「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(4)」,『東京外大東南アジア学』23, 108–162, 2018.
 8. Aoyama, Toru, "The significance of mokṣa in the Rāmāyaṇa reliefs in the light of Old Javanese texts", *Transformation of religions as reflected in Javanese texts*, 16–30, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018.(査読有)
 9. Miyazaki, Koji, "Javanese calendar and myth: Wuku and story of Watu Gunung", *Transformation of religions as reflected in Javanese texts*, 54–76, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018.(査読有)
 10. Yamasaki, Miho, "Religious change reflected in Old Javanese inscriptions from the ninth and tenth centuries: Analysis of imprecations from inscriptions", *Transformation of religions as reflected in Javanese texts*, 31–53, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018.(査読有)
 11. 山崎美保「中部ジャワ時代の社会と王—9世紀から10世紀初めの古ジャワ語刻文からの考察—」(東京外国語大学大学院博士論文), 2017.
 12. 山根聡「パキスタン・第3次シャリーフ政権の課題—対印関係をめぐる軍との関係—」,『紀要 国際情勢』87, 99–104, 2017.
 13. 山根聡「2017年のパキスタン情勢—首相辞任と中国の南アジア域内政治への関与—」,『紀要 国際情勢』88, 101–111, 2018.
 14. Tonaga, Yasushi, "'Ambiguity in Context' according to Islamic Thought: Bridging Theory and Actuality in Relating to Saints in Islam", *Pilgrimage and Ambiguity Sharing the Sacred*, 69–84, Sean Kingston Publishing, 2017.
- [口頭発表等]計10件
1. Yamane, So, "Dual Trends of Sufi Poetry Qawwali in South Asia", *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies*, 2017.5.21. 京都大学稲盛記念会館.
 2. 山根聡「南アジア・イスラーム研究の動向と将来—『加賀谷寛著作集』を通して—」, 一般社団法人日本オリエント学会第317回公開講演会, 2017.5.27. 天理ホール(東京).
 3. 山根聡「パキスタンにおける国家の正統性と宗教」, 2017年度 MINDAS 合同研究会, 2017.9.2. 国立民族学博物館.
 4. 山根聡「パキスタンの現状 2017—首相辞任と中パ関係にみる新たな展開」, 中東情勢研究会, 2017.10.20. 世界情勢調査会(東京都, 千代田区).

5. 山根聡「現代パキスタン社会の動員にみる政治と宗教」, 2017年 RINDAS 第2回研究会・KIAS「中道派」研究会, 2017.12.20. 龍谷大学大宮キャンパス.
6. Tonaga, Yasushi, "Three-Axis Framework of Sufism: Toward the Interdisciplinary Approach," The First International Symposium of Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University: "Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies", 2017.5.20. Inamori Memorial Foundation Building, Kyoto University.
7. Tonaga, Yasushi, "General Trend of Islamic and Sufi Studies in Japan," The First International Symposium of Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University: "Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies", 2017.5.20. Inamori Memorial Foundation Building, Kyoto University.
8. Tonaga, Yasushi, "Potentiality of Sufism in the Contemporary Period," 2017 KAMES International Conference, "Seeking Harmony and Prosperity for the Middle East in the Era of Uncertainty," 2017.9.22-24. Hankuk University of Foreign Studies and President Hotel, Seoul.
9. 東長靖「イスラームのとらえ方ー穏健イスラームに注目してー」, 立命館西園寺塾・梅原文明コース, 2018.1.20. 立命館東京キャンパス.
10. 東長靖「スーフィズムの三極構造再考」, 科研:基盤 A「イスラーム神秘主義の構造的ー理解ースーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象の解明」研究会, 2017.12.23. 京都大学.

[図書]計4件

1. Sugahara, Yumi and Willem van der Molen eds., *Transformation of religions as reflected in Javanese texts*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2018. 182 pp.
2. 菅原由美・Yosephin Apriastuti Rahayu, 『平成29年度言語研修ジャワ語初級テキスト ジャワ語の基礎』, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 全116頁.
3. Tonaga, Yasushi ed., *The Bridge of Cultures: Potentiality of Sufism*, Kenan Rifai Center for Sufi Studies, 2017, 105 pp.
4. van der Molen, Willem and Din Choo Ming eds., *Traces of the Ramayana and Mahabharata in Javanese and Malay literature*, ISEAS Yusof Ishak Institute, 2018. 229 pp.

[社会に向けた成果発表]計7件

1. 山根聡「植民地時代における言語の政治化」, 『インド文化事典』, 138-139, 丸善, 2018.
2. 山根聡「イスラームとナショナリズム」, 『インド文化事典』, 192-193, 丸善, 2018.
3. 山根聡「近代イスラーム思想」, 『インド文化事典』, 224-225, 丸善, 2018.
4. 山根聡「パキスタンのファッション」, 『インド文化事典』, 352-353, 丸善, 2018.
5. 山根聡「イスラームと食」, 『インド文化事典』, 370-371, 丸善, 2018.
6. 山根聡「果実の王様 マンゴー」, 『インド文化事典』, 387, 丸善, 2018.
7. 山根聡「パキスタン」, 『NHK データブック世界の放送2018』, 72-75, NHK出版, 2018.

アフリカ農業・農村社会史の再構築: 在来農業革命の視点から

研究期間: 2016-2018 (代表: 鶴田格 / 所員 2, 共同研究員 17)

所員: 石川博樹, 深澤秀夫

共同研究員： 鶴田格, 安溪貴子, 池上甲一, 石山俊, 大山修一, 小松かおり, 坂梨健太, 佐藤千鶴子, 佐藤靖明, 末原達郎, 杉村和彦, 杉山祐子, 田中利和, 藤岡悠一郎, 藤本武, 松田正彦, 村尾るみこ

研究会等の内容

2017年度は以下の3回の研究会を開催した。発表者と報告タイトルは以下の通り。

第1回(2017年7月8日, 7月9日, 東京外国語大学本郷サテライト 4F セミナールーム)

報告1. 寺内良平(京都大学)「ギニアヤムの多様性と起源の解明に向けて」

報告2. 小谷真吾(千葉大学)「サツマイモの導入は農業革命だったのか:ニューギニア在来農耕の歴史と分布からの分析」

報告3. 藤本武(AA 研共同研究員, 富山大学)「エチオピア西南部のエンセーテの栽培利用にみられるイノベーション」

第2回(2017年12月2日, 12月3日, 東京外国語大学本郷サテライト 4F セミナールーム)

報告1. 藤岡悠一郎(AA 研共同研究員, 九州大学)「アフリカ農牧複合論の再検討:ナミビア農牧社会の視点から」

報告2. 石本雄大(青森公立大学)「西アフリカ, サヘル地域農牧民の生業活動とその変容 —ブルキナファソ北東部の事例—」

報告3. 泉直亮(兵庫県立大学)「農牧民スクマの『大富豪』を維持・形成する社会的なしくみ」

コメント:鶴田格(AA 研共同研究員, 近畿大学)「自然社会としてのアフリカ農牧社会を理解するための理論的枠組み」

第3回(2018年3月19日, 京都大学農学部・生物資源経済学第1会議室, 3月20日, キャンパスプラザ京都・龍谷大学サテライト教室)

報告1. 藤原辰史(京都大学)「農業技術史研究の射程:トラクターを中心に」

報告2. 田中利和(AA 研共同研究員, 東北大学)「現代エチオピア中央高原の犁農耕文化複合:畜力による耕作と有機物輸送の実践に着目して」

コメント:鶴田格(AA 研共同研究員, 近畿大学)

報告3. 坂梨健太(AA 研共同研究員, 龍谷大学)「熱帯アフリカにおけるカカオの導入と焼畑農耕社会の変容」

報告4. 安藤和雄(京都大学)「在地の技術の考えとその事例:在来技術との違いと農村開発での意義に着目して」

研究成果一覧

[学術論文]計19件

1. Tsuruta, Tadasu and Yuko Sugiyama, "Coping with Njaa (Food Shortage): Food Insecurity and Household Strategies among Agro-Pastoralists in Central Tanzania", 『近畿大学農学部紀要』51, 11–22, 2018. (査読有)
2. Tsuruta, Tadasu, "Uncaptured Peasantry in Africa from Historical and Comparative Perspectives", *Proceedings of 7th International Workshop on Africa Moral Economy with Professor Goran Hyden: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives*, 13–19, 近畿大学農学部, 2017.

3. Tsuruta, Tadasu, "The Economy of Affection Revisited", *Proceedings of 8th International Workshop on Africa Moral Economy with Professor Goran Hyden: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives*, 47–54, 近畿大学農学部, 2017.
4. Sugiyama, Yuko, "Grassroots innovation in Natural Society", *Proceedings of 8th International Workshop on Africa Moral Economy with Professor Goran Hyden: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives*, 20–31, 近畿大学農学部, 2017.
5. Sugiyama, Yuko, "Moral Economy and Social Stratification in Rural Africa: Are We Moving towards a New Platform?", *Proceedings of 9th International Workshop on Africa Moral Economy with Professor Goran Hyden: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives*, 58–65, 近畿大学農学部, 2017.
6. 杉山祐子「地方農村にみる現金獲得活動と「小規模」の可能性—青森県津軽地域の農産物直売所の事例から—」, 『グローバル化するアフリカ農村と「現金の社会化」をめぐる人類学的研究 成果論集』, 113–132, 弘前大学人文社会学部, 2018.
7. 池上甲一「バイオ経済・生命操作技術と農民的主体性」, 『農業と経済』83(2), 165–177, 2017.
8. 坂梨健太「カカオとチョコレートの生産・流通・消費をめぐる現状と課題」, 『食品加工技術』37(3), 122–131, 2017.
9. 大山修一「ザンビアの土地政策と慣習地におけるチーフの土地行政」, 『現代アフリカの土地と権力』, 71–105, アジア経済研究所, 2017.(査読有)
10. 大山修一「アフリカ農村における自給生活の崩壊と貧困, テロリズム」, 『地誌トピック 2. ローカリゼーション—地域へのこだわり』, 123–131, 朝倉書店, 2018.
11. 大山修一「アフリカ農村社会の自給生活とその将来」, 『地誌トピック 2. ローカリゼーション—地域へのこだわり』, 131, 朝倉書店, 2018.
12. Sato, Yasuaki, Kaori Komatsu, Koichi Kitanishi, Kagari Shikata-Yasuoka and Shingo Odani, "Banana Farming, Cultivars, Uses, and Marketing of Nkore in Southwestern Uganda", *Tropical Agriculture and Development*.(査読有)
13. 佐藤千鶴子「南アフリカにおける慣習的土地保有権改革をめぐる争点と課題」, 『現代アフリカの土地と権力』, 139–171, アジア経済研究所, 2017.(査読有)
14. Sato, Chizuko, "Khoisan Revivalism and Land Question in Post-Apartheid South Africa", *Land Reform Revisited: Democracy, State Making and Agrarian Transformation in Post-Apartheid South Africa*, 199–220, Brill, 2018.(査読有)
15. 藤本武「NGO の活動地域にみられる中心・周辺構造」, 『国家支配と民衆の力: エチオピアにおける国家・NGO・草の根社会』, 190–196, 大阪公立大学共同出版会, 2018.
16. 石山俊「ドイツの名産地—サハラのアアシス都市ビスクラ—」, 『フィールドで出会う風と人と土 3』, 29–33, 総合地球環境学研究所, 2018.
17. 村尾るみこ「アフリカの難民問題を再検討する—難民が故地での生活をはじめれば問題はなくなるのか?」, 『社会問題と出会う』, 29–44, 古今書院, 2017.
18. 村尾るみこ「ザンビアにおける元難民の社会統合の現状」, 『21 世紀社会デザイン研究』15, 79–86, 立教大学 21 世紀社会デザイン研究所, 2017.
19. 村尾るみこ「紛争後の農業再構築—アンゴラの農耕民がとった新生活戦略」, 『地域研究からみた人

道支援—アフリカ遊牧民の現場から問い直す』地域研究ライブラリ 3, 213–232, 昭和堂, 218.

〔口頭発表等〕計 29 件

1. Tsuruta, Tadasu, "Cultural Uniqueness of Moral Economy in Africa", 7th European Conference on African Studies, 2017.7.1. University of Basel.
2. 杉山祐子「植林プロジェクトの「その後」と在来化する技術—タンザニア緑の推進協力プロジェクトの事例を中心に」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.21. 信州大学
3. Matsuda, Masahiko, "Cheroots in Myanmar: Rural Development behind the National Policy", The International Workshop on Exploring Desirable Paths of Agriculture and Rural Development in Asia: Changing Livelihoods, International Collaborations and Trans-disciplinary Challenges, 2018.2.21. Royal University of Agriculture, Phnom Penh, Cambodia.
4. 松田正彦「民主化のなかのミャンマー農山村」, 東南アジア学会・第 97 回研究大会, 2017.6.4. 広島大学.
5. 松田正彦「中央乾燥平原の農村生業—ミャンマーで最も雨の少ない村」, ビルマ研究会・2017 年度大会, 2017.4.15. 大東文化大学.
6. Ikegami, Koichi, "How to integrate Fair Trade, Land Reform, and small scale producers' cooperative", Seminar and Workshop: Agrarian Reform and Sustainable Development of Small-Scale Farmers in South Africa, 2017.3.2. The Centre for Japanese Studies, University of Pretoria.
7. Ikegami, Koichi, "Ensuring Rural Sustainability in the Unequal Worlds", Social and Sustainability Science ASEAN 2018, 2018.1.24. Chulalongkorn University
8. Ikegami, Koichi, "Rural sustainability and contemporary social science approaches", MOST school, 2018.1.26. Chulalongkorn University
9. Sakanashi, Kenta, "The relationship between living food and agroforestry -A case study of southern Cameroon", Workshop: Living Food: foodways, heritage, health and environment, 2018.2.23. L'EHESS, France.
10. 石川博樹「ポルトガル植民地期 PALOP における南米原産作物栽培:アンゴラとモザンビークを中心に」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20. 信州大学教育学部.
11. Oyama, S., "Autonomy and authority of chiefs regarding administration of customary land in Zambia"., 60th annual meeting of African Studies Association., 2017.11.18. Marriott Hotel Downtown Magnificent Mile, Chicago, Illinois, USA.
12. 大山修一「逆転の発想による荒廃地の環境修復と紛争予防—ニジェール・ニアメ首都圏における有機ゴミの収集と緑化活動」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20. 信州大学.
13. 大山修一「西アフリカ・サヘルにおける都市の生ゴミを利用した環境修復とその社会貢献」, 日本沙漠学会 2017 年第 28 回学術大会, 2017.5.28. 千葉工業大学 東京スカイツリータウンキャンパス.
14. 大山修一「西アフリカ・ニジェールにおけるテロと紛争, その予防に対する取り組み」, 東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障プログラム」, 2018.1.16. 東京大学駒場キャンパス 18 号館コーポレーションルーム 1.
15. 大山修一「社会変化のなかでの潜在力:アフリカで忠誠心を考える」, 平成 29 年度 京都大学アフリカ地域研究資料センター公開講座 シリーズ アフリカ潜在力. , 2018.1.20. 京都大学稲盛記念館.
16. 四方篝・佐藤靖明・小谷真吾・北西功一・小松かおり「東アフリカ高地におけるバナナ栽培の現代的

- 展開:ウガンダ南西部・農牧民アンコーレの事例」, 日本熱帯農業学会, 2017.6.17. 奄美市立奄美博物館.
17. 末原達郎「21 世紀の食料と農業」, 近畿東海農業大学校学生研究交流会, 2018.1.17. 龍谷大学農学部.
 18. Sato, Yasuaki, "Social aspects of the maintenance of banana landrace diversity in central Uganda", 40th Annual Conference of the Society of Ethnobiology, 2017.5.12. Montreal, Canada.
 19. Sato, Yasuaki, "Flexibility of agricultural society based on bananas in central Uganda", JSPS Uganda-Japan Bilateral Joint Research Project: Diversification and Reorganization of 'Family' in Uganda, 2017.9.5. Makerere University, Kampala, Uganda.
 20. 四方籐・小谷真吾・小松かおり・佐藤靖明・北西功一「パプアニューギニア低地におけるバナナ栽培の現代的展開:モロベ州マーカム・バレー地域の事例」, 日本熱帯農業学会第 122 回講演会, 2017.10.21. 香川大学.
 21. 四方籐・藤澤奈都穂・佐々木綾子・佐藤靖明「アグロフォレストリーの生態人類学に向けて—茶・コーヒー・カカオ栽培の事例より」, 第 23 回生態人類学会研究大会, 2017.3.24-25. 沖縄県南城市.
 22. 藤本武「シェアリングの諸相:エチオピアの農耕民マロの作物共有をめぐる」, 日本アフリカ学会第 54 回学術大会, 2017.5.20. 信州大学教育学部.
 23. Fujimoto, Takeshi, "Plant Use Intensification: The Case of Enset (*Ensete ventricosum*) in Southwestern Ethiopia", 58th Annual Meeting of the Society for Economic Botany, 2017.6.5. Escola Superior Agrária de Bragança (ESAB), Portugal.
 24. 藤本武「エチオピアにおける食と農の展開」, 第 1 回食と農の歴史研究会, 2017.7.24. 筑波大学東京キャンパス.
 25. 藤本武「エチオピアにおけるテンナンショウ属植物の利用について」, 第 237 回富山民俗の会, 2017.12.16. 富山市民俗民芸村管理センター.
 26. 藤本武「アフリカにおける食と農の展開:エチオピアの事例分析」, 日本農業史学会 2018 年研究報告会, 2018.3.29(予定). 京都大学農学部.
 27. 深澤秀夫「特別報告 北西部地方における2017年旱魃」, 在マダガスカル邦人会主催文化講演会, 2017.09.30. 在マダガスカル・日本大使館.
 28. 深澤秀夫「美味いぜ! マダガスカル料理 —食事と料理を通して見るマダガスカルの人びとの生活と文化—」, 在マダガスカル邦人会主催文化講演会, 2018.02.24. 在マダガスカル・日本大使館.
 29. Murao, Rumiko, "The daily Life Strategies of Small-Scale Farmers under Post-conflict Situation", International Congress: Angola: the legacies of the past, the challenges of the present, 2017.11.14-15. University of Lisbon.

[図書]計 1 件

1. 田中利和『牛とともに耕す:エチオピアにおける在来犁農耕の未来可能性』, 松香堂, 2018. 全 153 頁.

[社会に向けた成果発表]計 18 件

1. 杉山祐子・日比野愛子・曾我亨ほか「「地域の持続性に向けた共創手法の探求」プロジェクト」, 『平成 29 年度弘前大学地域未来創生センタージャーナル』, 41-44, 弘前大学特定プロジェクト教育研究センター・地域未来創生センター, 2018.

2. 杉山祐子「「わかる」と「できる」をつなぐプロジェクト～在来知をともにつくる試み～」、『やま・かわ・うみの知をつなぐ』, 東海大学出版部.
3. 杉山祐子「佐藤奈穂著『カンボジア農村に暮らすメマリーー貧困に陥らない社会の仕組み』書評」, 『アジア経済研究』, アジア経済研究所
4. 石川博樹「アフリカ史から歴史と世界について考える」, 『GLOBE Voice(グローブ ヴォイス)』12, 7. 東京外国語大学, 2017.
5. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:トレンディーか, 破壊なのか ニアメ市の再開発」, 『JICA ニジェール支所便り』6月号, 5-8, 2017. (URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201706.pdf>)
6. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:ニジェールで『晴耕雨読』を考える」, 『JICA ニジェール支所便り』9月号, 7-10, 2017. (URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201709.pdf>)
7. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:都市のゴミから生育する植物 その1」, 『JICA ニジェール支所便り 10月号』, 7-10, 2017. (URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201710.pdf>)
8. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:都市のゴミから生育する植物たち その2」, 『JICA ニジェール支所便り』11月号, 6-10, 2017. (URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201711.pdf>)
9. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人:都市のゴミから生育する植物 その3」, 『JICA ニジェール支所便り』12月号, 6-11, 2017. (URL: <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201712.pdf>)
10. 小松かおり「バナナは絶滅するのか」, 北海道新聞.
11. 末原達郎「アフリカの小さな村から食と命を考える」, 『ひかりのかたち』130, 115-141, 龍谷大学宗教部, 2017.
12. 末原達郎「農学から和食文化学へのアプローチ」, 『和食文化研究』創刊準備号, 102-109, 和食文化学会設立発起人会, 2018.
13. 佐藤千鶴子「南アフリカにおける犯罪動向の推移と治安対策」, 『アジ研ワールド・トレンド』261, 16-19, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2017.
14. 佐藤千鶴子「南アフリカノムムシ・マイマネー躍進続ける若き野党党首」, 『アジ研ワールド・トレンド』262, 23, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2017.
15. 佐藤千鶴子「看護師の国際移動—アフリカの事例から」, 『アジ研ワールド・トレンド』264, 22-25, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2017.
16. 佐藤千鶴子「アジ研におけるアフリカ研究の特徴と変遷—研究双書を題材に」, 『アジ研ワールド・トレンド』269, 38-39, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2018.
17. 佐藤靖明「アフリカと日本のアグロフォレストリー—人と自然のかかわりを考える」, 『環境サイエンス入門 一人と自然の持続可能な関係を考える』, 96-122, 学術研究出版/ブックウェイ, 2017.
18. 村尾るみこ「元難民の社会統合にむけた険しい道のり」, シノドス(SYNODOS), シノドス(URL: <https://synodos.jp/international/19913>)

イスラームに基づく経済活動・行為(第二期)

研究期間: 2016–2018 (代表: 福島康博 / 所員 2, 共同研究員 13)

所員: 床呂郁哉, 黒木英充

共同研究員: 赤堀雅幸, 今堀恵美, 大川真由子, 上山一, 川端隆史, 小牧幸代, 砂井紫里, 佐竹弘靖, 塩谷もも, 藤原達也, 舛谷鋭, 安田慎

研究会等の内容

2017年度第1回研究会

・日時: 2018年2月17日(土) 14:00~18:00

・会場: AA 研マルチメディアセミナー室(306)

・報告(1): 市岡卓(法政大学大学院)「シンガポールにおけるヒジャブに対する規制と差別」

・報告(2): 舛谷鋭(共同研究員、立教大学)「マレーシア華人のイスラーム観: 馬華文学作品分析」

研究成果一覧

[学術論文]計18件

1. Shioya, Momo, "Increasing Interest in Islamic Clothes and 'Correctness' in Indonesia." *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*. ICLAA, 59–76. 2017.
2. 小牧幸代「インドにおけるテーマパーク産業の発展と課題: アドラブズ・イマジカのアトラクションに関する人類学的考察」『産業研究』53, 61–75. 高崎経済大学, 2018.
3. 赤堀雅幸「時間と空間を区切る」高倉浩樹編『総合人類学としてのヒト学』143–158. 放送大学教育振興会, 2018.
4. 赤堀雅幸「支配の仕組み」高倉浩樹編『総合人類学としてのヒト学』191–204. 放送大学教育振興会, 2018.
5. 赤堀雅幸「近代世界の成立と国民国家の形成」高倉浩樹編『総合人類学としてのヒト学』205–217. 放送大学教育振興会, 2018.
6. 赤堀雅幸「暴力のイデオロムとしての名誉—エジプト西部砂漠ベドウィンの血讐と名誉殺人を事例に」『文化人類学』82(3), 367–385, 2017.
7. Akahori, Masayuki, "Relationship between God and People in the Three-Axis Framework of Sufism: A Comparison to Japan's Traditional Religion, Shintō." Tonaga, Yasushi (ed.) *The Bridge of Cultures: Potentiality of Sufism*. 31–40. Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, 2017.
8. Fujiwara, Tatsuya and Risyawati binti Mohamed Ismail, "Issues of Japan halal industry: An exploration of potential obstacles to Japanese SMEs' export development", *International Journal of Supply Chain Management*. 6(2), 209–214, 2017.
9. Fujiwara, Tatsuya "Supplier management in halal food supply chain: A preliminary case study", *Pertanika Journal of Social Sciences and Humanities*. 25(S), 25–38, 2017.
10. Fujiwara, Tatsuya and Risyawati binti Mohamed Ismail, "Comparison of Supplier Management in Halal Food Supply Chain", *World Journal of Islamic History and Civilization*. 7(4), 64–70, 2017.
11. 藤原達也「ケーススタディによるハラール調達の成熟度モデルの検討 ハラール食品におけるサプラ

イヤー管理の理論構築に向けて』『麗澤学際ジャーナル』26, 83–98, 2018.

12. Kuroki, Hidemitsu, "Neither "Western" nor "Orthodox": Establishing Greek Catholic Identity in the Ottoman Empire and Beyond", Fukasawa, Katsumi, Benjamin J. Kaplan, and Pierre-Yves Beaurepaire (eds.), *Religious Interactions in Europe and the Mediterranean World*. London: Routledge, 287–298, 2017
13. 黒木英充「イスラームと地域論」『第 4 次 現代歴史学の成果と課題』2, 48–63, 歴史学研究会, 績文堂出版, 2017.
14. Sai, Yukari, Muslim Friendly Restaurant in Taiwan: Certification and practice, *Proceedings of the International Workshop on Halal Food Consumption in East and West (Research Paper Series)*, 5, 23–34, Institute for Asian Muslim Studies Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University, 2018.
15. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai, "Why the Anthropology of Mono(Things)?" Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai (eds.), *An Anthropology of Things*. Kyoto University Press and Trans Pacific Press. 18–34, 2018.
16. Tokoro, Ikuya, "Mono beyond control: A New Perspective on Cultured Pearls", Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai (eds.), *An Anthropology of Things*. Kyoto University Press and Trans Pacific Press. 81–95, 2018.
17. Tokoro, Ikuya and Hisao Tomizawa, "Introduction", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.2): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*. ILCAA, TUFS, 1–13, 2018.
18. Tokoro, Ikuya, "The Mindanao Conflict and Peace Process from the Aquino to the Duterte Presidency: A Perspective from the Sulu Moro Community", *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.3): Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*. ILCAA, TUFS, 245–261, 2018

[口頭発表等]計 5 件

1. 塩谷もも「ジャワの暮らしと人々のつながり」島根県立大学出雲キャンパス公開講座: いずも健康市民講座第 4 回, 2017.6.1, 島根県立大学出雲サテライトキャンパス.
2. 塩谷もも「インドネシアのムスリムファッションの現状」島根県立大学松江キャンパス公開講座: 総合文化講座第 7 回, 2017.10.11, 島根県立大学松江キャンパス.
3. 塩谷もも「儀礼と料理にみるジャワの人々のつながり」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所講演会: 現代インドネシアのイスラームを知る, 2018.3.17, 国際交流基金ジャカルタ日本文化センター.
4. 赤堀雅幸「グローバル化するイスラーム」千葉県立木更津高等学校平成 29 年度グローバル人材プロジェクト講演会, 2018.2.7, 千葉県立木更津高等学校.
5. 赤堀雅幸「イスラームとは何か—信と行の基本」学校法人のしろ文化学園主催市民文化講演会, 2017.12.9, 秋田しらかみ看護学院.
6. Akahori, Masayuki, "Past, Present, and Future of Our Studies on Sufism and Saint Veneration", 1st International Symposium of Kenan Rifai Center for Sufis Studies, Kyoto University "Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies", 2017.5.20, 京都大学稲盛財団記念館.
7. Kuroki, Hidemitsu, "Aleppo in the Syrian History", Saving the Syrian Cultural Heritage for the Next Generation, 2017.7.13, 奈良春日野国際フォーラム.
8. 黒木英充, 「シリア内戦 最古の都市文明の地から見る人類の近未来」日本中東学会公開講演会 中

- 東の戦争と平和 ヒロシマから考える, 2017.9.30, 広島国際会議場.
9. 黒木英充「シリア内戦, 対テロ戦争, イスラーム」第 213 回広島大学平和科学研究センター研究会, 2017.10.31, 広島大学総合科学部.
 10. 黒木英充「シリア情勢の現状と今後の展望」国際情勢研究所講演会, 2017.9.26, 国際情勢研究所.
 11. 福島康博「2017 年のマレーシアの主要な出来事 –マレーシア日本語メディアの分析から–」日本マレーシア学会関東地区研究会, 2018.2.24, 立教大学池袋キャンパス.
 12. Sai, Yukari, "Eat Well, Drink Together: A Case Study of Commensality in South Fujian, Chin", International Conference on Pleasure, Providence and Purity: An International Conference on Food and Drink in Islamic Societies and Cultures, 2017.4.28, Chinese University of Hong Kong.
 13. Sai, Yukari, "Engagement and Collaboration: A case study of making halal options at a university in Japan", East Asia Anthropology Association (EAAA) Annual Meeting 2017, 2017.10.15, Chinese University of Hong Kong.
 14. Sai, Yukari, "Current Status and Issues on Halal Food in Japan", International Conference and Expo on Halal Industry and Science (ICEHIS) 2017, 2017.10.18, Universitas Brawijaya.
 15. Sai, Yukari, "Halal and Muslim-friendly Service in Taiwan: Muslim-friendly certification and its practice", International Workshop on Halal Food Consumption among Muslim Minorities in East and West, 2018.2.26, Waseda University.
 16. Kamiyama, Hajime and Haruka Usuki, "Customers' Criteria for Using Financial Products and Determinants of Customer Retention in Jordanian Islamic Banks", The 16th Middle East Economic Association, 2017.5.19, TDU University, Ankara, Turkey.
 17. Kamiyama, Hajime, "The Effects of Religiosity on Customers' Purchase Intentions toward Islamic Banks – Evidence from Jordan –", The 14th Tunisian-Japan Symposium on Sciences, Society and Technology, 2017.11.25, Hotel El Mouradi Gammarth, Tunisia.
 18. 床呂郁哉「東南アジア島嶼部における森林・水産資源の利用と環境問題に関する試論—ボルネオ島の事例を中心に—」アジアの環境問題勉強会, 2018.1.20, 東京外国語大学 AA 研.
- [図書]計 2 件
1. 床呂郁哉(編)『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築(第2回)シンポジウム報告書』東京, 東京外国語大学 AA 研, 2018. 全 101 頁.
 2. Tokoro, Ikuya and Kaori Kawai (eds.) *An Anthropology of Things*. Kyoto: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2018. 406pp.
- [社会に向けた成果発表]計 15 件
1. 小牧幸代「あるムスリム寡婦の経験:北インドの名家の事例から」『インド・ジェンダー研究ハンドブック』163–167. 東京外国語大学出版会, 2018.
 2. 小牧幸代「ムスリムとカースト」「人生儀礼(ムスリム)」「ムスリムの祭り」「女性アスリートへのまなざし」「テーマパーク・観光」『インド文化事典』丸善, 2018.
 3. 赤堀雅幸「風薫る」『わたしの「もったいない語」辞典』78-79. 中央公論新社, 2018.
 4. 赤堀雅幸「エジプト」中牧弘允(編)『世界の暦文化事典』214–215. 丸善出版, 2017.
 5. 黒木英充「トランプ大統領エルサレムの思惑! 中東情勢の行方と日本!」NHK テレビ総合日曜討論, 2017.

6. 栗田禎子, 長沢栄治, 黒木英充, 高橋和夫, 白杵陽「座談会 中東の地殻変動をどう見るか」『世界』905, 132-147. 岩波書店, 2018.
 7. 黒木英充「日本におけるイスラームとの共生」『世界史のしおり』2017 年度 3 学期号, 6-7. 帝国書院, 2018.
 8. 黒木英充「ダマスクスのウマイヤ・モスク」『FIELD PLUS』19, 6-7, AA 研, 2018.
 9. 砂井紫里「暮らしのなかのハラール: ムスリムから学ぶ大切なこと」 Waseda Online (Yomiuri, Online), 2017.
 10. 砂井紫里「ビジネス Q&A ハラール、形式先行の日本: ムスリム市場開拓、認証より習慣理解」(インタビューを再構成)『日経産業新聞』20, 2017.
 11. 上山一「リビア経済と石油部門の動向」『季刊アラブ』161, 33-34. 日本アラブ協会, 2017.
 12. 大川真由子「東アフリカへの遷都」ほか全 12 章およびコラム担当, 松尾昌樹(編)『オマーンを知るための 55 章』明石書店, 2018.
 13. 床呂郁哉「ミンダナオ和平へ正念場—バンサモロ基本法成立急げ」『まにら新聞』2018 年 1 月 9 日号, 2018.
 14. 床呂郁哉「ものの人類学」『Lexicon 現代人類学』116-119. 以文社, 2018.
 15. 床呂郁哉「生命」『Lexicon 現代人類学』92-94. 以文社, 2018.
- [その他]計 1 件
1. 黒木英充, Multilayered Basemap System for Middle Eastern Cities (中東諸都市・地域の古地図と Google Maps の重ね合わせと研究情報の共有システム) <http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>

エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集研究

研究期間: 2017-2018 (代表: 石川博樹 / 所員 2, 共同研究員 5)

所員: 石川博樹, 荻谷康太

共同研究員: 新谷崇, 石原美奈子, 馬場多聞, 吉田早悠里, 若狭基道

研究会等の内容

2017 年度第 1 回研究会

代表による趣旨説明(石川博樹)

石原美奈子「エチオピアにおけるイスラームの歴史: ジンマ王国を中心に」

成果出版および企画展示に関する討議

2017 年度第 2 回研究会

荻谷康太「エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集の内容について」

成果出版および企画展示に関する討議

研究成果一覧

[学術論文]計 9 件

1. 石川博樹「第 3 章 エチオピア正教会 1 エチオピア正教会について」, 『東方キリスト教諸教会: 研究案内と基礎データ』, 148-153, 明石書店, 2017.
2. 石川博樹「第 3 章 エチオピア正教会 2 ソロモン朝エチオピア王国史研究とエチオピアのキリスト

- 教」,『東方キリスト教諸教会:研究案内と基礎データ』,154-160,明石書店,2017.
3. 石原美奈子「第3章 エチオピア正教会 3 国家を支える宗教」,『東方キリスト教諸教会:研究案内と基礎データ』,161-172,明石書店,2017.
 4. Minako Ishihara, "Change in the Significance of Affiliation to Ṭarīqa The Case of Tiḡāniyya in and around Ġimma", *AETHIOPICA, International Journal of Ethiopian and Eritrean Studies*. 19, 149-164, 2017.(査読有)
 5. 苅谷康太「十七世紀の西アフリカにおける奴隷化の論理:アフマド・バーバー『階梯』の分析」,『史林』101(1), 83-115, 2018.(査読有)
 6. 苅谷康太「初期ソコト・カリフ国における背教規定」,『アジア・アフリカ言語文化研究』94, 137-177, 2017.(査読有)
 7. Kariya, Kota, "A Revolt in the Early Sokoto Caliphate: Muḥammad Bello's Sard al-Kalām", *Journal of Asian and African Studies*. 95, 221-303, 2018.(査読有)
 8. 馬場多聞「中世イスラーム世界における乳香」,『嗜好品文化研究』2, 109-115, 2017.
 9. 若狭基道「アムハラ語とウォライタ語の普通名詞の対応」,『東京大学言語学論集』39, 343-364, 2018.
〔口頭発表等〕計5件
 1. 苅谷康太「17世紀の西アフリカ・ムスリム社会における奴隷売買の基準:アフマド・バーバー『階梯』の分析」,日本アフリカ学会第54回学術大会,2017.5.20.信州大学教育学部.
 2. 苅谷康太「引用・解釈・操作:ムハンマド・アル=マギーリーとウスマーン・ブン・フーディーの知的関連」,国立民族学博物館・共同研究「個-世界論:中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」(代表:齋藤剛・神戸大学准教授)2017年度第2回研究会,2017.12.9.国立民族学博物館.
 3. 吉田早悠里「20世紀初頭エチオピア民族誌的資料のアーカイヴス構築」,日本アフリカ学会第54回学術大会,2017.5.20.信州大学.
 4. Yoshida, Sayuri, "Archiving Viennese Resources on the History of Ethiopian Peoples", *International Symposium about Archives as Cultural Heritage: Cases from Japan, Africa and Europe*, 2017.6.2. Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens, Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
 5. 吉田早悠里「無文字社会における歴史の再構築と外国人研究者の関与:エチオピア南西部カファ地方の事例から」,中部人類学談話会242回例会,2017.12.9.名古屋大学.
〔社会に向けた成果発表〕計1件
 6. 吉田早悠里「アーカイヴズを通じた出会い」,『南山アーカイヴズニュース』10, 6-7, 南山アーカイヴズ, 2017.

簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究

究(3)

研究期間: 2017-2019 (代表: 陶安あんど / 所員 1, 共同研究員 12)

所員: 陶安あんど

共同研究員: 青木俊介, 飯田祥子, 石原遼平, 片野竜太郎, 鈴木直美, 角谷常子, 高村武幸, 村上陽子, 目黒杏子, 靱山明, 鷺尾祐子, 渡邊英幸

研究会等の内容

16 回研究会を開催し、史料講読もしくは研究報告・討論を行った。具体的な内容はプロジェクトサイト (<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp237>) の通り。

研究成果一覧

[学術論文]計 16 件

1. 青木俊介「里耶秦簡 J1⑧1590 の綴合に関する疑義」, [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note24\(Aoki\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note24(Aoki).html), 2017.
2. 青木俊介「漢代肩水地区 A32 所在機関とその業務関係—肩水金関と肩水東部を中心に—」, 『周縁領域からみた秦漢帝国』, 65–111, 六一書房, 2017.(査読有)
3. 飯田祥子「公孫述政権の興亡—両漢交替期地域政権の一事例—」, 『周縁領域からみた秦漢帝国』, 173–195, 六一書房, 2017.(査読有)
4. 飯田祥子「長沙五一広場東漢簡牘郡太守府発信文書訳注稿」, 『龍谷大学論集』490, 92–141, 2017.
5. 石原遼平「漢代更卒輪番労役の各県における不均一と均一化」, 『日本秦漢史研究』18, 2017.(査読有)
6. 石原遼平「中国簡牘学の現在」, 『歴史学研究』964, 58–67, 2017.
7. 片野竜太郎「書評『周縁領域からみた秦漢帝国』(高村武幸編)」, 『六一考古通信』79, 37–38, 2017.
8. 陶安「里耶秦簡綴合商榷」, 『出土文献研究』16, 106–139, 2017.(査読有)
9. 陶安あんど「嶽麓秦簡司法文書集成『爲獄等狀四種』譯注稿—事案四—」, 『法史学研究会会報』20, 105–124, 2017.
10. 陶安あんど「里耶秦簡 J1 ⑧ 1519 に関する覚書」, [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note21\(Hafner\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note21(Hafner).html), 2018.
11. 鈴木直美「漢代フロンティア形成者のプロフィール—居延漢簡・肩水金関漢簡にみる卒の年齢に着目して」, 『周縁領域からみた秦漢帝国』, 157–172, 六一書房, 2017.(査読有)
12. 鈴木直美「秦簡にみえる働く未成年—世帯内部の多様性と社会的流動性理解への一助として—」, 『法史学研究会会報』21, 2018.
13. 目黒杏子「秦代県下の「廟」—里耶秦簡と岳麓書院藏秦簡「秦律令」にみえる諸廟の考察—」, 『周縁領域からみた秦漢帝国』, 25–42, 六一書房, 2017.(査読有)
14. 鷺尾祐子「終の棲家—女性の帰属に関する試論」, 『周縁領域からみた秦漢帝国』, 197–223, 六一書房, 2017.(査読有)
15. 鷺尾祐子「嘉禾四年至六年吏民簿所見夫妻齡差」, 『長沙簡帛研究国際学術研討会論文集』, 中西書局, 2017.
16. 渡邊英幸「戦国秦の国境を越えた人びと—岳麓秦簡『爲獄等狀』の「邦亡」と「帰義」を中心に—」, 『周縁領域からみた秦漢帝国』, 3–24, 六一書房, 2017.(査読有)

[口頭発表等]計 4 件

1. 陶安あんど「文書簡牘の様式論的特徴からみた所謂「記」の問題」, 出土資料学会 2017 年度第 2 回大会, 2017.12.03. 帝京大学八王子キャンパス.
2. 陶安「里耶秦簡綴合商榷」, 国際シンポジウム「中國簡牘國際學術研討會」, 2017.09.25. 山東省博物館.
3. 初山明「场景中刻石の刻文」, 古代中国文化工作坊「文本, 遺物, 場景」, 2017.12.13. 香港浸会大

学.

4. 渡邊英幸「战国秦的内史与郡县制」, 第六屆出土文獻青年學者論壇, 2017.8.8. 中国人民大学.

[図書]計1件

1. 鷺尾祐子『資料集:三世紀の長沙における吏民の世帯—走馬楼呉簡吏民簿の戸の復原—』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全129頁.

[社会に向けた成果発表]計3件

1. 鈴木直美「年齢を記憶すること, 記録すること」, 『東天紅』54, 1, 2018.

2. 鷺尾祐子「呉簡吏民簿と家族・女性」, 『アジア遊学 魏晋南北朝史のいま』213, 勉誠出版, 2017.

3. 鷺尾祐子「中国古代の戸籍と家族」, 『中国ジェンダー史研究入門』, 365–382, 京都大学出版会, 2018.

オスマン文書史料の基礎的研究

研究期間: 2017–2019 (代表: 高松洋一 / 所員 3, 共同研究員 12)

所員: 高松洋一, 黒木英充 近藤信彰

共同研究員: 秋葉淳, 阿部尚史, 磯貝健一, 岩本佳子, 大河原知樹, 木村暁, 熊倉和歌子, 齋藤久美子, 澤井一彰, 清水保尚, 多田守, 守田まどか

研究会等の内容

第1回研究会

発表者: 高松洋一

発表タイトル: 「オスマン文書史料研究の現状と課題」

コメンテーター: 近藤信彰, 岩本圭子

コメント1: 「イラン史研究の視点から」(近藤信彰)

コメント2: 「オスマン史研究の視点から」(岩本圭子)

第2回研究会 兼 第10回オスマン文書セミナー

発表者: 高松洋一

発表タイトル: 「オスマン朝の帳簿とスィヤーカト書体」

研究成果一覧

[学術論文]計10件

1. 高松洋一「一八世紀オスマン帝国における紅海交易の一断面 — 問答集『ジッダ港の統治の秩序のために準備された諸留意点』」, 『商業と異文化の接触: 中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開』, 719–749, 吉田書店, 2017.

2. 黒木英充「イスラームと地域論」, 『第4次 現代歴史学の成果と課題』2, 48–63, 績文堂出版, 2017.

3. Abe, Naofumi, "Politics of Poetics in Early Qajar Iran", *Journal of Persianate Studies*. 10, 129–157, 2017. (査読有)

4. 岩本佳子「「スルタン」から「パーディシャー」へ: オスマン朝公文書における君主呼称の変遷をめぐると一考察」, 『イスラム世界』88, 29–56, 2017. (査読有)

5. Okawara, Tomoki, "Searching for the origins of an Ottoman notable family: The Case of the 'Azms'", *Archivum Ottomanicum*, 34, 39–47, 2018. (査読有)

6. Kumakura, Wakako, "A Research Note for the Topography of Medieval Buheira", *Sophia Journal of*

Asian, African, and Middle Eastern Studies. 35, 1–19, 2018.

7. Kumakura, Wakako, "Mamluk Land Records Being Updated and Distributed: A Study of Al-Tuhfa al-Saniya bi-Asma al-Bilad al-Misriya", *Journal of Islamic Area Studies*. 10, 2018.
8. 澤井一彰「1660年のイスタンブール大火とユダヤ教徒コミュニティ」, 『桜文論叢』96, 271–296, 2018. (査読有)
9. 澤井一彰「ヴェネツィアによる 1656年のダーダネルス海峡封鎖とオスマン朝—女人政治の時代からキョプリュリュ家の時代へ—」, 『小田淑子先生退職記念論文集』, 75–97, 2018.
10. 澤井一彰「1586年のアマスラ近海の大津波と黒海における商業活動」, 『商業と異文化の接触: 中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開』, 663–688, 吉田書店, 2017.

[口頭発表等]計 26 件

1. Kuroki, Hidemitsu, "Aleppo in the Syrian History", Saving the Syrian Cultural Heritage for the Next Generation, 2017.7.13. 奈良春日野国際フォーラム.
2. 黒木英充「シリア内戦 最古の都市文明の地から見る人類の近未来」, 日本中東学会公開講演会 中東の戦争と平和 ヒロシマから考える, 2017.9.30. 広島国際会議場.
3. 黒木英充「シリア内戦, 対テロ戦争, イスラーム」, 第 213 回広島大学平和科学研究センター研究会, 2017.10.31. 広島大学総合科学部.
4. 黒木英充「シリア情勢の現状と今後の展望」, 国際情勢研究所講演会, 2017.9.26. 国際情勢研究所 (東京都港区).
5. Kondo, Nobuaki, "Islamic Law and Society in Iran: A Social History of Qajar Tehran", Royal Asiatic Society: Book Launch, 2017.5.8. Royal Asiatic Society.
6. 近藤信彰「サファヴィー朝イラン法廷制度再考」, 日本中東学会第 33 回年次大会, 2017.5.14. 九州大学箱崎キャンパス.
7. Kondo, Nobuaki, "Islamic Law and Qajar Society", Iranian Studies Initiative at NYU, 2017.12.7. Hagop Kebrokian Center for Near East Studies, New York University.
8. Kondo, Nobuaki, "Persian Document Workshop", Iranian Studies Initiative at NYU, 2017.12.8. Hagop Kebrokian Center for Near East Studies, New York University
9. Kondo, Nobuaki, "The Early Qajar Form of Political Authority", 8th Biennial Convention, The Association for the Study of Persianate Societies., 2018.3.16. Ilya State University, Tbilisi.
10. Akiba, Jun, "A Historian by Vocation, a Naib by Occupation: The Life and Career of Şemdanizade Süleyman Efendi (d. 1780)", The 14th International Congress of Ottoman Social and Economic History, 2017.7.26. University of Sofia, Bulgaria.
11. Akiba, Jun, "Ottoman Venality, or Tax Farming of Judicial Offices in the Ottoman Empire, c.1700–1839", Sharī'a Workshop, 2018.1.26. Columbia University, USA.
12. Abe, Naofumi, "Indigenous Armenian under Safavid and Qajar sovereignty", Association for Persianate studies, 2018.3.17. Ilya State University.
13. Iwamoto, Keiko, "From Tax-Exempt to Tax-Payer: Yörüks and Müsellems in the Post-Classical Ottoman Empire", 14th International Congress of Ottoman Social and Economic History (ICOSEH), 2017.7.25. Sofia University, Sofia, Bulgaria.
14. 岩本佳子「参照資料としての租税台帳: オスマン朝行政における 16 世紀以降の租税台帳の活用」

- 関する考察」, 日本中東学会第 33 回年次大会, 2017.5.14. 慶應義塾大学三田キャンパス.
15. Okawara, Tomoki, "Impact of Mecelle on post-Ottoman Middle Eastern Countries", International Mecelle Symposium (Codification, Practice and Contemporary Effects), 2017.9.25. Grand Swiss-Belhotel Çelik Palas Hotel, Bursa, Turkey.
 16. 大河原知樹「シャリーアと近代法のあいだ —オスマン民法典(メジェッレ)の事例—」, 東北大学イスラム圏研究会「イスラーム学際研究の試み —中東イスラームの視点から—」, 2017.10.14. 東北大学.
 17. Okawara, Tomoki, "Brief history of the Majalla, Making of Modern Islamic Law: The Majalla and Middle Eastern Movement of Codification", 2017.11.4. Tohoku University.
 18. 木村暁「マンギト朝における君主号の変容:ハンからアミールへ」, 史学会第 115 回大会, 2017.11.12. 東京大学本郷キャンパス法文 1 号館.
 19. 木村暁「聖なるブハラ」の創成:近世中央アジアの政治権力と都市」, 第 40 回中央ユーラシア研究会, 2017.9.30. 東京外国語大学本郷サテライト.
 20. Kumakura, Wakako, "From Beneficiaries to Landowners: Patterns of Landholding and Women's Investment", The 4th Conference of the School of Mamluk Studies, 2017. 5. 12. American University of Beirut.
 21. Sawai, Kazuaki, "16. Yüzyılın İkinci Yarısında İstanbul'a Yapılan Hububat Nakliyatı ve Sistemi", Uluslararası IX. Türk Deniz Ticareti Tarihi Sempozyumu, 2017.5.5. İstanbul Üniversitesi.
 22. 澤井一彰「オスマン帝国支配下のイスタンブル史の立場から」, 中近世の東地中海世界における諸民族の混交(東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会), 2017.12.9. 東北学院大学.
 23. Morita, Madoka, "Ordinary People out of the Ordinary? Approaching Neighborhood Communities in Early Modern Istanbul", ANAMED Fellows' Spring Workshop "Efrâd-ı Nâs: Humble Makers of History", 2017.4.29. Research Center for Anatolian Civilizations.
 24. Morita, Madoka, Neighborhoods toward Consolidation: Marriage Contract, Religious Communities, and Local Leadership in Eighteenth-Century Istanbul", International Workshop "Transformation of Ottoman Society during the Eighteenth Century", 2017.7.9. The Toyo Bunko.
 25. Morita, Madoka, "Whose Peace and Security? Neighborhoods and the Politics of Collective Testimony in Istanbul (1730–1754)", 2017 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (no. 11), 2017.11.29. Japan Center for Middle Eastern Studies.
 26. 守田まどか「18 世紀イスタンブルにおける社会変容と街区共同体」, 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「周縁的社会集団と近代—日本と欧米におけるアジア史研究の架橋」Kick Off ミーティング(第 2 回 国内個別セミナー), 2017.12.21. 大阪市立大学.

[図書]計 1 件

1. Kondo, Nobuaki, *Islamic Law and Society in Iran: A Social History of Qajar Tehran*, Routledge, 2017. 210 pp.

[社会に向けた成果発表]計 10 件

1. 黒木英充「トランプ大統領エルサレムの思惑! 中東情勢の行方と日本!」, NHK テレビ総合日曜討論
2. 栗田禎子・長沢栄治・黒木英充・高橋和夫・臼杵陽「座談会 中東の地殻変動をどう見るか」, 『世界』905, 132–147, 岩波書店, 2018.

3. 黒木英充「日本におけるイスラームとの共生」,『世界史のしおり』2017 年度 3 学期号, 6-7, 帝国書院, 2018.
 4. 黒木英充「ダマスカスのウマイヤ・モスク」,『FIELDPLUS』19, 6-7, AA 研, 2018.
 5. 秋葉淳「エゴドキュメント／自己語り史料」, 東洋文庫研究部イスラーム地域研究資料室 HP (URL: <http://tbias.jp/ottomansources/ego-documents>)
 6. 岩本佳子「「スルタン」から「パーディシャー」へ: オスマン朝公文書における君主呼称の変遷をめぐる一考察」,『イスラム世界』88, 29-56, 2017. (査読有)
 7. 熊倉和歌子「井筒俊彦『イスラーム哲学の原像』」,『多元主義を理解するための 30 冊』, BA コンソーシアム, 2017. 322-333. (URL: <http://www.bibalex.jp/>)
 8. 齋藤久美子「セリム一世」,『悪の歴史 西洋編(上)・中東篇』, 300-309, 清水書院, 2017.
 9. 齋藤久美子「シャー・イスマール」,『悪の歴史 西洋編(上)・中東篇』, 312-322, 清水書院, 2017.
 10. 澤井一彰「ボスフォラス・ダーダネルス両海峡問題について教えてください」,『歴史と地理 世界史の研究 252』706, 46-48, 山川出版社, 2017.
- [その他]計 2 件
11. 高松洋一「アラビア文字紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラム」, アラビア文字によるクロノグラムによる年代表記を計算し, 対応する西暦を表示する. http://coe.aa.tufs.ac.jp/abjad/JP/?page_id=23
 12. 黒木英充, "Multilayered Basemap System for Middle Eastern Cities", 中東諸都市・地域の古地図と Google Maps の重ね合わせと研究情報の共有システム. <http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>

II-3.2.2 共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)実施状況

カラホト出土西夏文『三代属明言集』の研究

研究期間: 2017-2018 (代表: 孫 伯君 / 所員: 荒川 慎太郎)

研究成果一覧

[学術論文]計 3 件

1. 孫伯君, 「藏传佛教“大手印”法在西夏的流传」,『西夏学』2017 年第 1 期, 2017. 141-152.
2. 孫伯君, 「西夏语牙音和舌头音的腭化音变」,『语言研究』2018 年第 1 期, 2018. 124-126.
3. 孫伯君, 「西夏文相马、医马法<育骏方>考释」,『北方民族大学学报』2018 年第 2 期, 2018. 11-20.

[口頭発表等]計 1 件

1. 孫伯君, 西夏文字, 公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の文字学」, 2018.2.17. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

長沙馬王堆漢墓帛書字詞研究—以《相馬經》為中心

研究期間： 2017–2018（代表：劉釗 / 所員：陶安あんど）

研究成果一覧

[学術論文]計3件

1. 劉釗「談出土文獻中有關祭祀山川的資料」,『古文字與古代史』5, 台灣中央研究院歷史語言研究所, 2017.(査読有)
2. 劉釗「讀馬王堆漢墓帛書札記一則」,『源遠流長:漢字國際學術研討會暨 AEARU 第三屆漢字文化研討會論文集』, 北京大學出版社, 2017.
3. 劉釗「“集”字的形音義」,『中國語文』Jan-18, 2018.(査読有)

[口頭発表等]計2件

1. 劉釗「中国古文字書跡の鑑賞及び古文字の裝飾化と美化」, 岩手大学人文社会科学部書道研究室・同平泉文化研究所招待講演会, 2017.12.21. 岩手大学
2. 劉釗「馬王堆漢墓帛書相馬經」, 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」2017年度第14回研究会, 2018.2.25. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

[社会に向けた成果発表]計1件

1. 劉釗「甲骨文研究的春天來了」,『人民日報』, 2018. 22–22.

II-3.3 外部資金による研究の詳細

II-3.3.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連

携研究体制の構築」

異分野間連携の国内合同研究集会

日時: 2018年1月18日(木) 14:00–16:30

会場: AA 研マルチメディア会議室(304)

14:00–14:05 飯塚正人(AA 研所長) 趣旨説明

【各分野報告】14:05–15:35

14:05–14:35 山越康裕(AA 研所員) 「話者コミュニティに何をどう還すか」

14:35–15:05 外川昌彦(AA 研所員) 「バングラデシュの独立戦争とセキュラリズム憲法の成立」

15:05–15:35 近藤信彰(AA 研所員) 「中東における言語/民族集団と分極化—イラン史研究の視点から」

15:35–15:50 休憩

15:50–16:30 質疑応答・討論

「多言語・多文化共生社会に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

【研究集会・ワークショップ】

以下の言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する研究集会およびワークショップを開催した。

<国際>

- Documentary Linguistics - Asian Perspectives 2 (DLAP 2)(香港大学)(2017年5月25日～27日)
- サバ州の言語に関する共同研究ワークショップ(Joint-Research Workshop on languages spoken in Sabah state, Malaysia)(Beaufort and Kota Kinabalu, Malaysia)(2017年8月11日～17日)
- 言語ドキュメンテーションセミナー(Language Documentation Seminar)(North-Eastern Federal University, Yakutsk, Russia)(2017年9月18日～22日)
- 国際セミナー「言語ドキュメンテーションのために知っておくべきこと」(International Seminar: Language Documentation: What do we need to know?)(Artha Wacana Christian University, Indonesia)(2017年10月4日)
- 国際ワークショップ「インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーション」(International Workshop: Documenting Languages of Nusa Tenggara Timur)(Kupang, Indonesia)(2017年10月5日～6日)
- AA 研フィールド言語学ワークショップ: 第13回文法研究ワークショップ: 会話データに基づく文法研究(2018年2月13日～14日)
- リンディフォーラム: Questions under Discussion in Austronesian corpus data(2017年5月27日)
- リンディフォーラム: 北方言語研究講演会(2017年10月24日)
- リンディフォーラム: Talk on Turkish Sign Language(2018年3月9日)
- リンディフォーラム: オーストロネシア諸語とパプア諸語のドキュメンテーションと分析(2018年3月26日)
- 第六回 日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承—少数言語(ダグル語)を中心に」(2017年11月25日)
- SCOPIC ワークショップ(SCOPIC workshop)(2018年3月19日～23日)
- 国際ワークショップ “Varieties of Malayic Languages”/AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第3回研究会(2017年12月19日～21日)
- 国際シンポジウム “Current Topics in Turkic Linguistics”/AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 —音韻・形態統語・意味の統合的研究—」第3回研究会(2018年3月3日～4日)

<国内>

- AA 研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」第7回研究会(2017年6月11日), 第8回研究会(2017年12月3日)
- AA 研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」第6回研究会(2017年10月28日～29日)
- AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第4回研究会(2017年7月15日), 第5回研究会(2018年3月6日～7日)
- AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」第4回研究会(2017年7月23日), 第5回研究会(2017年12月23日)
- AA 研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」

- 第1回臨時研究集会(2017年5月20日), 第2回臨時研究集会(2017年7月15日), 第2回研究会(2017年11月10日)
- AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」第4回研究会(2017年7月22日), 第5回研究会(2017年12月10日), 第6回研究会(2018年3月24日)
 - AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学的手法に基づいて〜」第1回研究会(2017年5月13日〜14日), 第2回研究会(2017年10月7日〜8日), 第3回研究会(2018年3月27日〜28日)
 - AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第1回研究会(2017年4月23日), 第2回研究会(2017年10月15日)
 - AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 ―音韻・形態統語・意味の統合的研究―」第1回研究会(2017年7月22日), 第2回研究会(2017年10月7日)
 - AA 研共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性」第1回研究会(2017年10月7日〜8日), 第2回研究会(2018年2月11日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「アノテーションソフト ELAN の基礎」(2017年7月5日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「フィールドノート(1): 調査目的に応じたノートの工夫」(2017年12月6日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「フィールドノート(1): 調査目的に応じたノートの工夫②」(2018年3月16日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ: 第12回文法研究ワークショップ: 「場所」を項とする動詞(2018年1月25日)
 - 田中二郎写真展「1970年代までの伝統的狩猟採集生活を送るブッシュマン」(2017年7月6日〜28日)
 - リンディフォーラム: 特任研究員研究発表会(2017年7月18日)
 - 木曾川方言調査事前ワークショップ(2017年8月26日〜27日)
 - 第4回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」(2017年12月17日〜23日)
 - 『草原の河』公開記念 TUFS Cinema チベット映画特集 ～ソントルジャとの出会い～(2017年4月15日)
 - 『草原の河』公開記念 TUFS Cinema チベット映画特集 ～ソントルジャとの出会い～(2017年4月22日)
 - 『草原の河』公開記念 チベット映画傑作選 ～ソントルジャとの出会い～(大阪第七藝術劇場)(2017年5月6日〜12日)
 - 企画展「ヤクとミルクと女たち——チベット牧畜民の暮らし」(吉祥寺キチム)(2017年5月10日〜14日, 17日〜21日)
 - 上映&トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険」(吉祥寺キチム)(2017年5月13日〜14日)
 - チベット文学ナイト 黒狐の夜(サロンド富山房 Folio)(2017年6月2日)
 - 企画展「ヤクとミルクと女たち——チベット牧畜民の暮らし」(タシデレ)(2017年6月8日〜7月2日)
 - 上映&トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険@タシデレ」(タシデレ)(2017年6月17日〜18日)

- ・ 第3回 キキソ チベットまつり(小諸エコビレッジ(長野))(2017年10月13日～15日)
- ・ 情報資源利用研究センター(IRC)設立20周年記念ワークショップ「アーカイブズ学の現状—研究資料の保全と利活用を目指して—」(2017年11月7日)
- ・ チベット牧畜辞典編集会議(2017年12月17日～22日)
- ・ 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)リリース記念イベント(昼の部・AA研)(2018年3月27日)
- ・ 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)リリース記念イベント(夜の部・タシデレ)(2018年3月27日)
- ・ 『チベット牧畜文化辞典』パイロット版公開記念ワークショップ「『チベット牧畜文化辞典』の未来を語る」(2018年3月28日)

【オンライン研究交流環境】

- ・ アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開(IRCプロジェクトの成果として公開)
- ・ オンライン・スライアモン語テキスト集(IRCプロジェクトの成果として公開)
- ・ チュルク諸語対照基礎語彙(IRCプロジェクトの成果として公開)
- ・ インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター(IRCプロジェクトの成果として公開)
- ・ 故湯川恭敏所員の調査テープに残された言語データの電子化およびメタデータ公開(IRCプロジェクトの成果として公開)
- ・ iOS/Android アプリ “LingDyTalk” (音声再生アプリ)
- ・ チベット牧畜文化辞典(パイロット版)(IRCプロジェクトの成果として公開)
- ・ モンゴル諸語対照基本語彙データベース(IRCプロジェクトの成果として公開)
- ・ バガン碑文コンコーダンス構築
- ・ ビルマ文字テキスト変換プログラム

【研究連携】

<海外視察・関係構築>

連携事業をより活発に展開するために以下の海外研究機関を訪問し、研究交流関係の構築を行った。

- ・ SOAS, University of London(イギリス)
- ・ Artha Wacana Christian University(インドネシア)
- ・ the University of Melbourne(オーストラリア)
- ・ Nanyang Technological University(シンガポール)
- ・ First Royal Factory at Fang Museum(タイ)
- ・ Mahidol University(タイ)
- ・ National Taitung University(台湾)
- ・ 国立故宫博物院(台湾)
- ・ 国立政治大学(台湾)
- ・ 中央研究院歴史語言研究所(台湾)
- ・ University of Dar es Salaam(タンザニア)
- ・ 東北師範大学(中国)
- ・ 香港大学(中国)
- ・ ハノイ国家大学附属ベトナム学開発学院(ベトナム)
- ・ マレーシア国民大学(マレーシア)

- ・ マレーシア国立サバ大学(マレーシア)
- ・ Bagan Archaeological Museum(ミャンマー)
- ・ National University of Mongolia(モンゴル)
- ・ 北東連邦大学(ロシア)

<研究交流>

国際シンポジウム, 国際ワークショップ開催に合わせて, 以下の海外研究機関から研究者を招き, 研究交流を行った。

- ・ University of Maryland(アメリカ)
- ・ University of Naples "L'Orientale"(イタリア)
- ・ Artha Wacana Christian University(インドネシア)
- ・ Atma Jaya Catholic University of Indonesia(インドネシア)
- ・ SD NEGERI OLY, KECAMATAN NDAO NUSE (OLY 小学校(NDAO NUSE 郡))(インドネシア)
- ・ Sekolah Tinggi Bahasa Asing (STIBA) Saraswati Denpasar (College of Foreign Languages Saraswati Denpasar)(インドネシア)
- ・ SMPN SATU ATAP BATULAI, ROTE (The first middle school of Atap Batulai, Rote)(アタップ・バトゥライ第一中学校)(インドネシア)
- ・ STIBA Cakrawala Nusantara Kupang(インドネシア)
- ・ Udayana University(インドネシア)
- ・ University of Indonesia(インドネシア)
- ・ ジャヤプラ第4高校(インドネシア)
- ・ Australian National University(オーストラリア)
- ・ The University of Melbourne(オーストラリア)
- ・ University of Alberta(カナダ)
- ・ Hankuk University of Foreign Studies(韓国)
- ・ Uppsala University(スウェーデン)
- ・ 青海民族大学(中国)
- ・ チチハル市民族高校, チチハル市ダグル学会(中国)
- ・ チチハル市梅リスダグル族区文化体育局(中国)
- ・ Free University of Berlin(ドイツ)
- ・ Heinrich Heine University Dusseldorf(ドイツ)
- ・ University of Cologne(ドイツ)
- ・ University of Mainz(ドイツ)
- ・ Ankara University(トルコ)
- ・ Boğaziçi University(トルコ)
- ・ Çanakkale Onsekiz Mart University(トルコ)
- ・ Buryat State University(ロシア)
- ・ Russian Academy of Sciences(ロシア)

【現地コミュニティへのアウトリーチ】

危機・少数言語コミュニティーへの支援・共同研究活動展開に向け関係構築と予備調査・企画を行った。

- ・ 中山俊秀 国際会議企画運営協力(中国) 期間: 5/24-5/28/2017
- ・ 塩原朝子 ワークショップ企画運営(インドネシア), 研究打ち合わせ(台湾) 期間: 8/5-8/19/2017
- ・ 青井隼人 ワークショップ企画運営・講師(愛知) 期間: 8/26-8/30/2017
- ・ 塩原朝子 ワークショップ企画運営・講師(愛知) 期間: 8/26-8/27/2017
- ・ 呉人徳司 ワークショップ企画運営・講師(ロシア) 期間: 9/16-9/24/2017
- ・ Jargal Badagarov ワークショップ企画運営協力・講師(ロシア) 期間: 9/16-9/24/2017
- ・ 塩原朝子 ワークショップ企画運営・講師(インドネシア) 期間: 10/2-10/9/2017
- ・ Antonia Soriente ワークショップ企画運営協力・講師, および研究打ち合わせ(インドネシア) 期間: 10/2-10/10/2017
- ・ Elsijon Marjesi Thine ワークショップ運営協力・コンサルタント(インドネシア) 期間: 10/3-10/7/2017
- ・ Jermy Balukh ワークショップ運営協力・講師(インドネシア) 期間: 10/4, 10/6/2017
- ・ Nazarudin ワークショップ企画運営協力・講師, および研究打ち合わせ(インドネシア) 期間: 10/4-10/8/2017
- ・ Yanti ワークショップ企画運営協力・講師, および研究打ち合わせ(インドネシア) 期間: 10/3-10/10/2017
- ・ Yusuf Agnesius Nomensen Lusi ワークショップ運営協力・コンサルタント(インドネシア) 期間: 10/2-10/8/2017
- ・ 大野剛 ワークショップ企画運営協力・講師(宮古島) 期間: 12/15-12/25/2017
- ・ 中山俊秀 ワークショップ企画運営・講師(宮古島) 期間: 12/16-2/23/2017
- ・ 塩原朝子 交換講演会運営協力・講演(マレーシア) 期間: 2月上旬/2018

研究未開発言語の調査・研究のために以下の通り研究者を派遣した。

- ・ 塩原朝子 ヘロン語の調査(インドネシア) 期間: 7/20-7/28/2017
- ・ 呉人徳司 チュクチ語の調査(ロシア) 期間: 7/25-8/12/2017
- ・ 中山俊秀 ヌートカ語の調査(カナダ) 期間: 7/25-8/17/2017
- ・ 渡辺己 スライアモン語の調査(カナダ) 期間: 7/26-9/1/2017
- ・ 児倉徳和 満州語口語調査(中国) 期間: 8/12, 8/13/2017
- ・ 呉人徳司 モンゴル語オイラド方言の調査(モンゴル) 期間: 8/18-8/25/2017
- ・ 安達真弓 ベトナム語の調査(ベトナム) 期間: 8/19-9/16/2017
- ・ 呉人徳司 土族語の調査(中国) 期間: 8/27-9/2/2017
- ・ 児倉徳和 シベ語の調査(中国) 期間: 12/10-12/20/2017
- ・ 児倉徳和 台湾で話されるシベ語の調査(台湾) 期間: 1/3-1/7/2018
- ・ 中山俊秀 宮古語池間方言の調査(沖縄) 期間: 2/17-2/22/18
- ・ 安達真弓 ベトナム語の調査(ベトナム) 期間: 2/23-3/15/18

【若手研究者養成】

- (1) 特任研究員 3 名を雇用し, 特に若手研究者を対象とした言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する共同研究の展開において指導的な役割を負う機会を与えた。
- (2) 若手研究者にむけて以下のワークショップを開催した。

- ・ サバ州の言語に関する共同研究ワークショップ (Joint-Research Workshop on languages spoken in Sabah state, Malaysia) (Beaufort and Kota Kinabalu, Malaysia) (2017年8月11日～17日)
- ・ 言語ドキュメンテーションセミナー (Language Documentation Seminar) (North-Eastern Federal University, Yakutsk, Russia) (2017年9月18日～22日)
- ・ 国際セミナー「言語ドキュメンテーションのために知っておくべきこと」 (International Seminar: Language Documentation: What do we need to know?) (Artha Wacana Christian University, Indonesia) (2017年10月4日)
- ・ 国際ワークショップ「インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーション」 (International Workshop: Documenting Languages of Nusa Tenggara Timur) (Kupang, Indonesia) (2017年10月5日～6日)
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「アノテーションソフト ELAN の基礎」 (2017年7月5日)
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「フィールドノート(1): 調査目的に応じたノートの工夫」 (2017年12月6日)
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「フィールドノート(1): 調査目的に応じたノートの工夫②」 (2018年3月16日)
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ: 第12回文法研究ワークショップ: 「場所」を項とする動詞 (2018年1月25日)
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ: 第13回文法研究ワークショップ: 会話データに基づく文法研究 (2018年2月13日～14日)
- ・ 木曾川方言調査事前ワークショップ (2017年8月26日～27日)
- ・ 第4回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」 (2017年12月17日～23日)

【成果公開・還元】

<学会発表・講演>

以下の通り学会・研究集会等で学術成果の発表を行った。

- ・ 星泉 『草原の河』公開記念 TUFS Cinema チベット映画特集 ～ソントラルジャとの出会い～ (東京) (2017年4月15日)
- ・ 児倉徳和 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会第4回公開発表会・兼「数詞句の構文的性格」を考える国際シンポジウム (大阪) (2017年4月15日, 16日)
- ・ 澤田英夫 第41回チベット＝ビルマ言語学研究会 (京都) (2017年4月22日)
- ・ 星泉 『草原の河』公開記念 TUFS Cinema チベット映画特集 ～ソントラルジャとの出会い～ (東京) (2017年4月22日)
- ・ 塩原朝子 AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第1回研究会 (東京) (2017年4月23日)
- ・ 星泉 『草原の河』公開記念 TUFS Cinema チベット映画特集 ～ソントラルジャとの出会い～ (大阪) (2017年5月6日, 7日)
- ・ 星泉 上映&トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険」 (東京) (2017年5月14日)
- ・ 品川大輔 日本アフリカ学会第54回学術大会 (長野) (2017年5月20日)
- ・ Yanti 2nd International Conference on Documentary Linguistics - Asian Perspectives (DLAP-2) (香

- 港) (2017年5月26日)
- ・ 星泉 トークイベント「チベット文学ナイト 黒狐の夜」(東京) (2017年6月2日)
 - ・ 星泉 上映&トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険@タシデレ」(東京) (2017年6月17日)
 - ・ 塩原朝子 日本言語学会第154回大会(東京) (2017年6月24日)
 - ・ 品川大輔 日本言語学会第154回大会(東京) (2017年6月25日)
 - ・ 山越康裕 The 13th Seoul International Altaistic Conference(モンゴル) (2017年7月13日~16日)
 - ・ 児倉徳和 The 13th Seoul International Altaistic Conference(モンゴル) (2017年7月13日~16日)
 - ・ 澤田英夫 「シナ・チベットの会」/AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第4回研究会(東京) (2017年7月15日)
 - ・ 安達真弓 IPrA 15th International Pragmatics Conference(イギリス) (2017年7月17日)
 - ・ 青井隼人 リンディフォーラム: 特任研究員研究発表会(東京) (2017年7月18日)
 - ・ 小林美紀 リンディフォーラム: 特任研究員研究発表会(東京) (2017年7月18日)
 - ・ 中山俊秀 IPrA 15th International Pragmatics Conference(イギリス) (2017年7月20日, 21日)
 - ・ 品川大輔 AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」第4回研究会(東京) (2017年7月22日)
 - ・ 品川大輔 AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」第4回研究会(東京) (2017年7月23日)
 - ・ 澤田英夫 Linguistic Seminar(オーストラリア) (2017年8月)
 - ・ 中山俊秀 日本認知言語学会第18回全国大会(大阪) (2017年9月16日)
 - ・ 中山俊秀 第6回動的語用論研究会(京都) (2017年10月1日)
 - ・ 澤田英夫 Workshop on Grammaticalization and Language Contact in Asia and Beyond(シンガポール) (2017年10月4日)
 - ・ 青井隼人 AA 研共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性」第1回研究会(東京) (2017年10月7日)
 - ・ 星泉 AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」第2回研究会(東京) (2017年10月7日)
 - ・ 澤田英夫 Workshop 'Language in Early Burma'(イギリス) (2017年10月10日)
 - ・ 星泉 第3回 キキソソ チベットまつり(長野) (2017年10月13日)
 - ・ 星泉 第39回ぎふアジア映画祭(岐阜) (2017年10月14日)
 - ・ 呉人徳司 6th 3-E International Conference "Enjoyment, Elderly, Edutainment"(台湾) (2017年10月20日~23日)
 - ・ 品川大輔 Project meeting of "Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, Contact and Change"(イギリス) (2017年10月25日)
 - ・ 品川大輔 Linguistics Departmental Seminar Series, SOAS, University of London(イギリス) (2017年10月31日)
 - ・ 中山俊秀 日本英語学会第35回大会(宮城) (2017年11月18日)
 - ・ 呉人徳司 第六回 日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承—少数言語(ダグル語)を中心に」(東京) (2017年11月25日)
 - ・ 児倉徳和 第六回 日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承—少数言語(ダ

- グル語)を中心に」(東京)(2017年11月25日)
- ・ 澤田英夫 The 50th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL 50) (中国)(2017年11月26日)
 - ・ 山越康裕 AA 研共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」第8回研究会(東京)(2017年12月3日)
 - ・ 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」第8回研究会(東京)(2017年12月3日)
 - ・ 児倉徳和 フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「フィールドノート(1): 調査目的に応じたノートの工夫」(東京)(2017年12月6日)
 - ・ 児倉徳和 情報資源利用研究センター(IRC)設立20周年記念シンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て、活かす」(東京)(2017年12月9日)
 - ・ 山越康裕 「外国語と日本語との対照言語学的研究」第23回研究会(東京)(2017年12月9日)
 - ・ 塩原朝子 国際ワークショップ “Varieties of Malayic Languages” / AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第3回研究会(東京)(2017年12月19日)
 - ・ 塩原朝子 国際ワークショップ “Varieties of Malayic Languages” / AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第3回研究会(東京)(2017年12月21日)
 - ・ 澤田英夫 Japan-Myanmar Collaboration on Conservation and Preservation of Cultural Heritages in Myanmar Symposium(ミャンマー)(2017年)
 - ・ 児倉徳和 満語・錫伯語の語言與歴史: 回顧與展望(台湾)(2018年1月5日)
 - ・ 山越康裕 全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」第2回合同研究集会(東京)(2018年1月18日)
 - ・ 星泉 『汗と涙と煩惱のチベット・ネパール・インド絵日記』刊行記念トークイベント(東京)(2018年1月20日)
 - ・ 星泉 文化講演「チベットの文化に触れてみる」(神奈川)(2018年1月27日)
 - ・ 塩原朝子 コタキナバル・リエゾンオフィス企画による交換講演会(マレーシア)(2018年2月5日)
 - ・ 中山俊秀 東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」(東京)(2018年2月7日)
 - ・ 児倉徳和 言語研修シベ語フォローアップミーティング / 第7回シベ語研究会(東京)(2018年2月11日)
 - ・ 中山俊秀 AA 研共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性」第2回研究会(東京)(2018年2月11日)
 - ・ 澤田英夫 東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」(東京)(2018年2月14日)
 - ・ 澤田英夫 公開ワークショップ「チベット・ビルマ系言語の文字学」 / AA 研共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1: 文字学に関する用語・概念の研究」第3回研究会(東京)(2018年2月17日)
 - ・ 安達真弓 「第19回東京移民言語フォーラム: 学校から社会へ」(東京)(2018年2月21日)
 - ・ 山越康裕 東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」(東京)(2018年2月21日)

- ・ 中山俊秀 文法と言語使用における定型表現の位置づけ(東京)2018年2月24日
- ・ 青井隼人 東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」(東京)(2018年2月28日)
- ・ 呉人徳司「外国語と日本語との対照言語学的研究」第24回研究会(東京)(2018年3月3日)
- ・ 渡辺己 AA研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第5回研究会(東京)(2018年3月6日)
- ・ 澤田英夫 言語処理学会第24回年次大会(NLP2018)(岡山)(2018年3月12日)
- ・ 児倉徳和 満族・錫伯族語言历史文化国際研讨会(中国)(2018年3月17日,18日)
- ・ 澤田英夫 AA研共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」第8回研究会(東京)(2018年3月18日)
- ・ 塩原朝子 Social Cognition Parallax Interview Corpus (SCOPIC) TUFWS Workshop 2018(東京)(2018年3月20日)
- ・ 児倉徳和 アジアンライブラリーカフェ no.003 アジアの言語を語ろう(東京)(2018年3月24日)
- ・ 品川大輔 Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, contact and change(イギリス)(2018年3月27日)
- ・ 星泉 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)リリース記念トークイベント/AA研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」第3回研究会(東京)(2018年3月27日)
- ・ 星泉 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)リリース記念ワークショップ『チベット牧畜文化辞典』の未来を語る/AA研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」第3回研究会(東京)(2018年3月28日)
- ・ 山越康裕・児倉徳和 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)リリース記念ワークショップ『チベット牧畜文化辞典』の未来を語る/AA研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」第3回研究会(東京)(2018年3月28日)
- ・ 児倉徳和 (十六科研等合同研究会)2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(京都)(2018年3月29日)
- ・ 澤田英夫 (十六科研等合同研究会)2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(京都)(2018年3月29日)
- ・ 山越康裕 (十六科研等合同研究会)2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(京都)(2018年3月29日)

<出版物刊行>

以下の出版物を刊行した。

- ・ アジア・アフリカの言語と言語学編集担当(編)『アジア・アフリカの言語と言語学 12』(160pp.)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2018.03.31(オンラインジャーナル)
- ・ 下地理則(著)『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』(368pp.)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2018.03.26
- ・ チベット文学研究会(星泉,海老原志穂,岩田啓介,大川謙作,三浦順子)(編)『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』Vol. 5(208pp.)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2018.03.25
- ・ 呉人徳司(編) *Chukchi Animal Folk Tales with Grammatical Analysis* (90pp.)東京外国語大学アジ

ア・アフリカ言語文化研究所 2018.03.29

- ・ 児倉徳和(著)『シベ語のモダリティの研究』(480pp.) 勉誠出版 2018.03.30
- ・ 林徹・安達真弓・新井保裕(編)『『東京大学言語学論集』別冊 2 学校を通して見る移民コミュニティ—多言語使用と言語意識に関する報告—』(110pp.) 東京大学大学院人文社会系研究科言語学研究室 2018.03

【調査・研究成果の資源化】

以下の研究未開発言語に関する調査資料, 研究成果の分析, 電子化, 資源化を進めた:

- ・ アイヌ語
- ・ スライアモン語
- ・ トルコ語方言
- ・ 満州語
- ・ チュルク諸語
- ・ ルワ語
- ・ メエ語
- ・ ヘロン語
- ・ モンゴル諸語
- ・ バスク語
- ・ エスキモー語
- ・ シベ語
- ・ チャガ系諸語

【言語ダイナミクス科学研究推進環境の整備】

言語ダイナミクス科学研究推進に必要な文献資料の整備をはかった。

【共同研究の推進】

<外国人研究員の受入>

言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する研究を専門とする以下の外国人研究員を受入, 共同研究にあたった。

- ・ Michael Carter Ewing
- ・ Suraratdecha Sumittra

<AA 研共同利用・共同研究課題>

以下の共同利用・共同研究課題を組織し, 共同研究を推進した。

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学的手法に基づいて〜」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」

- AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 – 音韻・形態統語・意味の統合的研究 –」
- AA 研共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性」
- AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」

<外国人研究者の短期招へい>

国際シンポジウム, ワークショップ開催のため, 次の外国人研究者を招へいし, 短期共同研究を行った。

- Anja Latrouite (Heinrich Heine University Dusseldorf)
- Antoia Soriente (University of Naples "L'Orientale")
- Arzhaana Syuryun (Russian Academy of Sciences, Saint-Petersburg)
- Aydin Özbek (Çanakkale Onsekiz Mart University)
- Ayşe Nur Tekmen (Ankara University)
- A. Sumru Özsoy (Boğaziçi University)
- Dance Nawipa (ジャヤプラ第4高校)
- Danielle Barth (Australian National University)
- Dominikus Tauk (Udayana University / Artha Wacana Christian University)
- Eka Pratiwi (Sekolah Tinggi Bahasa Asing (STIBA) Saraswati Denpasar (College of Foreign Languages Saraswati Denpasar))
- Elisabetta Ragagnin (Free University of Berlin)
- Elsjon Marjesi Thine (SMPN SATU ATAP BATULAI, ROTE (The first middle school of Atap Batulai, Rote)(アタップ・バトゥライ第一中学校))
- Éva Á. Csató Johanson (Uppsala University)
- I Wayan Arka (Australian National University)
- Jargal Badagarov (Buryat State University)
- Jermy Imanuel Balukh (STIBA Cakrawala Nusantara Kupang)
- Lars Johanson (University of Mainz)
- Nantaijia (青海民族大学)
- Nazarudin (University of Indonesia)
- Nicholas Evans (Australian National University)
- Petrus Degei (所属なし)
- Seongha Rhee (Hankuk University of Foreign Studies)
- Sonja Riesberg (University of Cologne / Australian National University)
- Stefan Schnell (The University of Melbourne)
- Thomas J. Connors (University of Maryland)
- Yanti (Atma Jaya Catholic University of Indonesia)
- Yusuf Agnesius Nomensen Lusi (SD NEGERI OLY, KECAMATAN NDAO NUSE (OLY 小学校 (NDAO NUSE 郡))
- 高春梅(チチハル市民族高校／チチハル市ダグル学会)
- 多文忠(チチハル市梅リスダグル族区文化体育局)

中東研究日本センター(JaCMES – Japan Center for Middle Eastern Studies)

- ・ 2017年8月27日(日)～30日(水) ベイルート・オリエント研究所(ドイツ)主催(会場)のオスマン文書研究講読サマースクールに若手研究者2名を派遣し、共催した。
- ・ 2017年9月7日(木)～8日(金) JaCMESにて共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico–Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第3回研究会を実施した。
- ・ 2017年11月27日(月) JaCMESにてラウンドテーブル “Imagining Resecularization in Iran and Turkey: A Comparative–Historical and Theoretical Inquiry” を実施した。本ラウンドテーブルは科研費・新学術領域研究「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて: 関係性中心の融合型人文社会科学の確立」(計画研究 A01「国家と制度: 固定化された関係性」代表・松永泰行)との共催で開催され、11月26日(日)には JaCMESにて本科研費の国際ワークショップが開催された。
- ・ 2017年11月29日(水) JaCMESにて第11回ベイルート若手研究者報告会を開催した。
- ・ 2017年3月16日(金)～17日(土) ベイルートのサン・ジョセフ大学(Saint Joseph University)にて共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico–Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第4回研究会を実施した。本研究会は国際シンポジウム “Minorities in the Middle East” としても公開実施され、開催校であるサン・ジョセフ大学側からも特別報告者が参加した。
- ・ JaCMES を会場(協力組織)に以下の国際会議が開催された。
 - (1) 2017年8月19日(土) シリア考古学関係者会合(シリア考古総局, レバノン考古総局, 奈良県立橿原考古学研究所, 筑波大学関係者ら)の間での打ち合わせ)
 - (2) 2017年9月1日(金)～2日(土) 科研費・新学術領域研究「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて: 関係性中心の融合型人文社会科学の確立」(B02「越境的非国家ネットワーク: 国家破綻と紛争」代表・末近浩太)主催での Syrian Opinion Center for Polls and Studies(SOCPs) 研究グループによるシリア世論調査実施に向けた研究会合
 - (3) 2018年2月13日(火)～14日(水) シリア考古学関係者会合 “Three Days' Workshop: Syrian Archaeology and History for Next Generation”(筑波大学関係者らの主催で, シリア人難民学校の教員を対象とするセミナー)を開催

コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO – Kota Kinabaru Liaison Office)

- ・ 2017年7月15日(土)に AA 研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」枠により同年度の第1回ワークショップを実施した。
- ・ 2017年7月20日(木) JICA フィリピン事務所においてフィリピン南部情勢に関する実務者・専門家会合を実施した。
- ・ 2017年8月11日(火)～17日(土)にマレーシア・サバ大学においてサバ州の言語に関するワークショップを実施した。
- ・ 2017年9月2日(土) JICA フィリピン事務所において邦人向け公開講演会を実施した。
- ・ 2017年9月24日(日)にコタキナバル市内のホテル会場において、共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」枠により東南アジアの文化多様性に関する第2回ワークショップを開催し、日本、インドネシア、マレーシアから研究者などが参加した。
- ・ 2017年12月17日(日) AA 研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)」枠により同年度の第3回ワークショップを実施した。
- ・ 2018年1月27日(土)にコタキナバル日本人学校において邦人向け講演会を開催した。

- ・ 2018年2月5日(月)にコタキナバルのマレーシア・サバ大学(UMS)においてアジアの文化と社会に関する現地講演会を開催し、日本側から2名、マレーシア側から1名による講演を実施した。
- ・ 2018年2月4日(土)に国際交流基金ジャカルタ日本文化センター(インドネシア)において邦人向け講演会を開催し、吉田ゆか子(AA研)がバリの芸能に関する講演を実施した。
- ・ 2018年3月17日(土)国際交流基金ジャカルタ文化センターでインドネシアのイスラームに関する公開講演会を実施した。

II-3.3.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

SCOPIIC ワークショップ

2018年3月19日(月)～23日(金)

- ・ スピーカー: Nicholas EVANS(オーストラリア国立大学), Danielle BARTH(オーストラリア国立大学), I Wayan ARKA(オーストラリア国立大学), Stefan SCHNELL(メルボルン大学), Eka PRATIWI(College of Foreign Languages (STIBA) Saraswati Denpasar)
- ・ 参加者: Seongha RHEE(韓国外国語大学校), Yanti(AA研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia), Heiko NARROG(東北大学), 長田俊樹(総合地球環境学研究所), 大野仁美(麗澤大学), 木本幸憲(名古屋大学), 横山晶子(国立国語研究所), 倉部慶太(AA研ジュニア・フェロー, メルボルン大学), 塩原朝子(AA研所員), 児倉徳和(AA研所員)

内容: SCOPIIC プロジェクトの成果発表とアノテーション実習を含むワークショップ

使用言語: 英語

基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」との共催

リンディフォーラム: オーストロネシア諸語とパプア諸語のドキュメンテーションと分析

2018年3月26日(月)

プログラム

- ・ Dwi Noverini DJENAR (The University of Sydney), Michael C. EWING (University of Melbourne) and Howard MANNS (University of Monash) “Interactional particles and perspective management in Indonesian”
- ・ I Wayan ARKA (Australian National University, Udayana University) “Prohibitives and Information structure in the Austronesian languages of Indonesia”
- ・ Sonja RIESBERG (ILCAA Joint Researcher, University of Cologne) “The language archive at CELD, West Papua – a collaborative undertaking”
- ・ Stefan SCHNELL (University of Melbourne) “GIVE and other 3-participant events in Vera’a.”

使用言語: 英語

II-3.3.3 科学研究費等によるその他の研究活動

所員等が代表者の科学研究費補助金課題一覧(分担者中、下線が AA 研所員等)

基盤研究(A)

研究代表者: 芝野 耕司

課題番号: 26240051

課題名: 大規模会話コーパスに基づくラーニングマイニングの深化とテーラーメイド日本語教育

研究種目: 基盤研究(A)一般

研究分担者: 藤村知子, 大津友美, 佐野洋, 藤森弘子, 望月源, 鈴木美加

期間(年度): 2014(H26)~2017(H29)

研究代表者: 近藤 信彰

課題番号: 15H01895

課題名: イスラーム国家の王権と正統性ー近世帝国を視座として

研究種目: 基盤研究(A)一般

研究分担者: 高松洋一, 秋葉淳, 小笠原弘幸, 二宮文子, 清水和裕, 真下裕之, 後藤裕加子

期間(年度): 2015(H27)~2019(H31)

研究代表者: 西井 凉子

課題番号: 17H00948

課題名: 人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に

研究種目: 基盤研究(A)一般

研究分担者: 吉田ゆか子, 深澤秀夫, 箭内匡, 高木光太郎, 河合香吏, 佐久間寛

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

研究代表者: 西井 凉子

課題番号: 17H01648

課題名: グローバル化における権力編成の変動と新たなコミュニティ運動ー東南アジア大陸部から

研究種目: 基盤研究(A)海外学術

研究分担者: 田辺繁治, 久保忠行, 斎藤紋子, 古谷伸子, 中田友子, 高城玲, 土佐桂子, 阿部利洋

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

基盤研究(B)

研究代表者: 星 泉

課題番号: 15H03203

課題名: チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者： 平田昌弘, 海老原志穂, 別所裕介

期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 新谷 忠彦

課題番号： 15H05154

課題名： 言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明

研究種目： 基盤研究(B)海外学術

研究分担者： 山田敦士

期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 呉人 徳司

課題番号： 15H05155

課題名： 北東ユーラシア諸言語の語形成に関する地域類型的研究

研究種目： 基盤研究(B)海外学術

研究分担者： 風間伸次郎, 江畑冬生

期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者： 荒川 慎太郎

課題番号： 16H03414

課題名： 「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相

研究種目： 基盤研究(B)一般

研究分担者： 白井聡子, 倉部慶太

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 中見 立夫

課題番号： 16H03462

課題名： “帝国”周縁部における国勢調査・人口調査の比較研究

研究種目： 基盤研究(B)一般

研究分担者： 野田仁, 青木雅浩

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 陶安 あんど

課題番号： 16H03487

課題名： 最新史料に見る秦・漢法制の変革と帝制中国の成立

研究種目： 基盤研究(B)一般

期間(年度)： 2016(H28)～2020(H32)

研究代表者： 小田 淳一

課題番号： 16H05671

課題名： インド洋フランス語系クレオール民話の口演の研究
研究種目： 基盤研究(B)海外学術
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 渡辺 己
課題番号： 16H05672
課題名： 語の統合度と文の相関関係に関する研究－形態法の異なる言語の比較対照をとおして－
研究種目： 基盤研究(B)海外学術
研究分担者： 児倉徳和, 山越康裕, 沈力, 清澤香
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 峰岸 真琴
課題番号： 17H02331
課題名： 形態統語論と音声学からみた東南アジア諸語における情報構造の類型論
研究種目： 基盤研究(B)一般
研究分担者： 長屋尚典, 鈴木玲子, 降幡正志, 上田広美, 岡野賢二, ホワンヒョンギン, 高橋康徳
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

研究代表者： 高松 洋一
課題番号： 17H02398
課題名： イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的的研究
研究種目： 基盤研究(B)一般
研究分担者： 近藤信彰
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

研究代表者： 錦田 愛子
課題番号： 17H04504
課題名： 中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民／難民の移動に関する研究
研究種目： 基盤研究(B)海外学術
研究分担者： 森井裕一, 高岡豊, 今井宏平
期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

研究代表者： 倉部 慶太
課題番号： 17H04523
課題名： ビルマの危機言語に関する緊急調査研究
研究種目： 基盤研究(B)海外学術
研究分担者： 新谷忠彦, 澤田英夫, 加藤昌彦, 大塚行誠
期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

基盤研究(C)

研究代表者： 床呂 郁哉

課題番号： 25370936

課題名： スルー海域世界を中心とする真珠のグローバリゼーションに関する文化人類学的研究

研究種目： 基盤研究(C)

期間(年度)： 2013(H25)～2017(H29)

研究代表者： 伊藤 智ゆき

課題番号： 26370442

課題名： 韓国語慶尚道方言のアクセント研究

研究種目： 基盤研究(C)

期間(年度) 2014(H26)～2017(H29)

研究代表者： 栗原 浩英

課題番号： 15K01865

課題名： ベトナム・中国間境域における協力／対立と国家関係の連動性に関する研究

研究種目： 基盤研究(C)

期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 細谷 幸子

課題番号： 15K01892

課題名： イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶：障害者の生きる権利をめぐる

研究種目： 基盤研究(C)

期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 塩原 朝子

課題番号： 15K02472

課題名： Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究

研究種目： 基盤研究(C)

期間(年度)： 2015(H27)～2019(H30)

研究代表者： 中山 俊秀

課題番号： 15K02473

課題名： スートカ語における統語構造の特性一節と節結合の連関の中で

研究種目： 基盤研究(C)

期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 中山 久美子

課題番号： 15K02509

課題名: スートカ語アハウザット方言の統合テキストデータベースの構築
研究種目: 基盤研究(C)
研究分担者: 中山俊秀
期間(年度): 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者: 石川 博樹
課題番号: 15K02888
課題名: 植民地期 PALOP における主食用作物栽培とその社会的影響に関する研究
研究種目: 基盤研究(C)
期間(年度): 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者: 野田 仁
課題番号: 15K02914
課題名: 露清帝国の西方境界における紛争と秩序形成
研究種目: 基盤研究(C)
期間(年度): 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者: 河合 香吏
課題番号: 15K03034
課題名: 共鳴する「五感」: 東アフリカ牧畜民における知覚の共同性に関する人類学的研究
研究種目: 基盤研究(C)
期間(年度): 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者: 福島 康博
課題番号: 16K01974
課題名: イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究: 東南アジアの例
研究種目: 基盤研究(C)
期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 勝畑 冬実
課題番号: 16K02177
課題名: エジプト映画における「イスラーム」表象の変遷とその分析
研究種目: 基盤研究(C)
期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 外川 昌彦
課題番号: 16K02602
課題名: 岡倉天心とタゴールの反響するアジアへのまなざしー植民地主義をめぐる日印の比較研究

研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 品川 大輔
課題番号： 16K02630
課題名： 言語ドキュメンテーションに基づくバントゥ諸語のミクロな類型的多様性の探究
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 渡辺 己
課題番号： 16K02660
課題名： スライアモン・セイリッシュ語の焦点構文に関する研究
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 太田 信宏
課題番号： 16K03075
課題名： 植民地インドのマイスール藩王国における文芸と王権
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2016(H28)～2019(H31)

研究代表者： 椎野 若菜
課題番号： 17K02002
課題名： 東アフリカ都市におけるエリート・シングルとハウスガールの「同居家族」の研究
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

研究代表者： 高島 淳
課題番号： 17K02215
課題名： インドにおける仏教の終焉の解明
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

研究代表者： 伊藤 智ゆき
課題番号： 17K02675
課題名： 朝鮮語諸方言における複合語・派生語のアクセント研究
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

研究代表者： 山越 康裕
課題番号： 17K02714
課題名： シネヘン・ブリヤート語をはじめとしたモンゴル諸語の「文」の完結性に関する研究
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2017(H29)～2021(H33)

研究代表者： 吉村 貴之
課題番号： 17K03044
課題名： ソヴィエト体制を変容させた二つのアルメニア・ナショナリズム
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2017(H29)～2021(H33)

研究代表者： 鈴木 直美
課題番号： 17K03126
課題名： 中国古代における 家族と「移動」の多角的研究—静態的家族観からの脱却をめざして—
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

研究代表者： 吉田 ゆか子
課題番号： 17K03277
課題名： ジャカルタにおけるバリ芸能の民族誌—宗教間・民族間の交渉と相互理解を焦点に
研究種目： 基盤研究(C)
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

研究活動スタート支援

研究代表者： 細田 和江
課題番号： 16H06783
課題名： イスラエル／パレスチナにおけるアラブ性の探求—包括的な現代文化研究の基盤形成
研究種目： 研究活動スタート支援
期間(年度)： 2016(H28)～2017(H29)

研究代表者： 平田 秀
課題番号： 16H06784
課題名： 紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言のアクセント研究
研究種目： 研究活動スタート支援
期間(年度)： 2016(H28)～2017(H29)

研究代表者： 青井 隼人
課題番号： 17H06666
課題名： 声門化子音の音響特性の記述と音韻論的解釈：北琉球沖縄語伊江方言の事例研究

研究種目： 研究活動スタート支援
期間(年度)： 2017(H29)～2018(H30)

研究成果公開促進費

研究代表者： 床呂 郁哉
課題番号： 16HP6005
課題名： An Anthropology of Things
研究種目： 研究成果公開促進費
期間(年度)： 2016(H28)～2017(H29)

研究代表者： 烏云高娃
課題番号： 17HP5108
課題名： 1930年代のモンゴル・ナショナリズムの諸相
研究種目： 研究成果公開促進費
期間(年度)： 2017(H29)

研究代表者： 河合 香吏
課題番号： 17HP5110
課題名： Others: The Evolution of Human Sociality
研究種目： 研究成果公開促進費
期間(年度)： 2017(H31)

研究代表者： 池田 昭光
課題番号： 17HP5125
課題名： 流れをよそおう—レバノンにおける相互行為の人類学
研究種目： 研究成果公開促進費
期間(年度)： 2017(H29)

国際共同研究加速基金

研究代表者： 伊藤 智ゆき
課題番号： 15KK0041
課題名： 韓国語慶尚道方言のアクセント研究(国際共同研究強化)
研究種目： 国際共同研究加速基金
期間(年度)： 2015(H28)～2017(H30)

研究代表者： 錦田 愛子
課題番号： 16KK0050
課題名： ドイツのアラブ系移民／難民の移動と受け入れに関する学際的研究(国際共同研究強化)
研究種目： 国際共同研究加速基金
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H31)

若手研究(A)

研究代表者： 佐久間 寛

課題番号： 15H05385

課題名： サハラ南縁地域をめぐるモラル・エコノミー論的土地制度研究を通じた所有概念の再構築

研究種目： 若手研究(A)

期間(年度)：2015(H27)～2017(H29)

若手研究(B)

研究代表者： 海老原 志穂

課題番号： 26770137

課題名： 東西方言から見たチベット語の基層の研究

研究種目： 若手研究(B)

期間(年度)： 2014(H26)～2018(H30)

研究代表者： 近藤 洋平

課題番号： 26870123

課題名： 婚姻法の法制史的考察によるイバード派イスラーム法学派の形成と展開の研究

研究種目： 若手研究(B)

期間(年度)： 2014(H26)～2017(H29)

研究代表者： 苅谷 康太

課題番号： 15K16578

課題名： 18－19世紀の西アフリカ・ハウサランドにおけるムスリムと非ムスリムの境界

研究種目： 若手研究(B)

期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者： 吉村 大樹

課題番号： 15K16740

課題名： アゼルバイジャン語における疑間接語の生起位置と生起条件に関する研究

研究種目： 若手研究(B)

期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 池田 昭光

課題番号： 15K16895

課題名： レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者

研究種目： 若手研究(B)

期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者： 三代川 寛子

課題番号： 17K13293

課題名： エジプトのナショナリズムにおける民族概念と宗教的アイデンティティ
研究種目： 若手研究(B)
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H30)

研究代表者： 岡田 一祐

課題番号： 17K13462

課題名： 平仮名字体データベースと 19 世紀教科書平仮名字体コーパスの連携による平仮名史研究

研究種目： 若手研究(B)

期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

研究代表者： 岩本 佳子

課題番号： 17K13547

課題名： オスマン朝とクルド、テュルク系遊牧民の交流と対立の史的研究

研究種目： 若手研究(B)

期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

新学術領域研究(研究領域提案型)

研究代表者： 床呂 郁哉

課題番号： 17H06341

課題名： 顔と身体表現の文化フィールドワーク研究

研究種目： 新学術領域研究(研究領域提案型)

研究分担者： 吉田ゆか子, 塩谷もも, 田中みわ子, 西井凉子

期間(年度)： 2017(H29)～2021(H33)

挑戦的研究

研究代表者： 佐久間 寛

課題番号： 17K18480

課題名： 人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレゼンス・アフリケーヌ』の複合的研究

研究種目： 挑戦的研究(萌芽)

研究分担者： 中村隆之

期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

挑戦的萌芽研究

研究代表者： 小田 淳一

課題番号： 15K12831

課題名： 映像表現と古典的修辞技法との対応関係の情報学的分析

研究種目： 挑戦的萌芽研究

研究分担者： 石井満

期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

特別研究員奨励費

研究代表者： 岩本 佳子

課題番号： 15J03916

課題名： オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 伊藤 雄馬

課題番号： 16J00729

課題名： 少数言語ムラブリ語に起きた方言分岐の諸相の解明

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 高尾 賢一郎

課題番号： 16J01130

課題名： イスラームと社会統治に関する研究:ヒスバ制度を事例に

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 杉江 あい

課題番号： 16J05363

課題名： イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者： 岩田 啓介

課題番号： 17J01093

課題名： 清朝のアムド支配からみたチベット仏教世界再編

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

研究代表者： 竹村 和朗

課題番号： 17J02475

課題名： 現代エジプトのワクフに関する人類学的研究

研究種目： 特別研究員奨励費

期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

研究代表者： 大竹 昌巳

課題番号： 17J04094

課題名： 契丹語文法の記述的研究
研究種目： 特別研究員奨励費
期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

東京外国語大学の AA 研以外の部局所属研究代表者の科学研究費補助金について、AA 研所員等が研究分担者となっている課題一覧(分担者中、下線が AA 研所員等)

基盤研究(B)

研究代表者： 望月 源 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授
課題番号： 15H02794
課題名： 大規模会話コーパスの FS2vec 処理による CEFR Can-do 言語教材の開発
研究種目： 基盤研究(B)一般
研究分担者： 芝野耕司, 佐野洋, 藤村知子
期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者： 青山 弘之 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
課題番号： 15H03132
課題名： 「アラブの春」後の中東における非国家主体と政治構造
研究種目： 基盤研究(B)一般
研究分担者： 錦田愛子, 末近浩太, 山尾大
期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 風間 伸次郎 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
課題番号： 15H05153
課題名： アルタイ諸言語の語彙の総合的集成
研究種目： 基盤研究(B)海外学術
研究分担者： 児倉徳和, 山越康裕
期間(年度)： 2015(H27)～2019(H31)

研究代表者： 水野 善文 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
課題番号： 16H03410
課題名： 南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承
研究種目： 基盤研究(B)一般
研究分担者： 太田信宏, 藤井守男, 萩田博, 丹羽京子
期間(年度)： 2016(H28)～2019(H31)

研究代表者： 藤村 知子 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授
課題番号： 16H03432

課題名： 大規模字幕コーパスを利用した Can-do リスト対応型 e ラーニング教材の研究
研究種目： 基盤研究(B)一般
研究分担者： 芝野耕司, 望月源, 佐野 洋, 藤森 弘子
期間(年度)： 2016(H28)～2019(H31)

研究代表者： 今井 昭夫 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
課題番号： 17H02229
課題名： 近現代ベトナムにおける中国プレゼンスの諸相ー連環人文学的ベトナム地域研究
研究種目： 基盤研究(B)一般
研究分担者： 今村宣勝, 栗原浩英, 村上雄太郎, 野平宗弘
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

基盤研究(C)

研究代表者： 益子 幸江 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
課題番号： 17K02676
課題名： 声調言語と非声調言語のリズムに関する研究
研究種目： 基盤研究(C)
研究分担者： 峰岸真琴, 鈴木玲子, 降幡正志
期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

他大学の研究代表者の科学研究費補助金について、AA 研所員等が研究分担者となっている課題一覧
(分担者中、下線が AA 研所員等)

基盤研究(S)

研究代表者： 松田 素二 京都大学文学研究科 教授
課題番号： 16H06318
課題名： 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究
研究種目： 基盤研究(S)
研究分担者： 椎野若菜, 品川大輔, 武内進一, 阿部利洋, 太田至, 大山修一, 落合雄彦, 平野美佐,
宮地歌織, 遠藤貢, 重田眞義, 高橋基樹, 竹村景, 永原陽子, 峯陽一, 目黒紀夫, 山越
言, 山田肖子
期間(年度)： 2016(H28)～2020(H32)

基盤研究(A)

研究代表者： 森 雅秀 金沢大学人間科学系 教授
課題番号： 25257007
課題名： 国際標準となるチベット美術の情報プラットフォームの構築と公開
研究種目： 基盤研究(A)海外学術
研究分担者： 高島淳, 乾仁志, 高田良宏, 高本康子
期間(年度)： 2013(H25)～2017(H29)

研究代表者： 長澤 榮治 東京大学東洋文化研究所 教授
課題番号： 16H01899
課題名： イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究
研究種目： 基盤研究(A)一般
研究分担者： 黒木英充, 村上薫, 松永典子, 後藤絵美, 岩崎えり奈, 服部美奈, 岡真理, 白杵陽, 山岸智子, 嶺崎寛子
期間(年度)： 2016(H28)～2019(H31)

研究代表者： 石井 香世子 立教大学社会学部 准教授
課題番号： 16H02737
課題名： アジアの越境する子どもたちとトランスナショナル階層社会の出現に関する実証研究
研究種目： 基盤研究(A)海外学術
研究分担者： 床呂郁哉, 荻巣崇世, 酒井千絵, 陳天璽, 岩井美佐紀, 横田祥子, 工藤正子
期間(年度)： 2016(H28)～2019(H31)

基盤研究(B)

研究代表者： 鶴戸 聡 鹿児島大学法文教育学域法文学系 准教授
課題番号： 26300021
課題名： アラブ=ベルベル文学の比較地域文化的研究体制の構築
研究種目： 基盤研究(B)海外学術
研究分担者： 二村淳子, 石川清子, 酒井佑輔, 青柳悦子, 武内句子, 細田和江, 柳谷あゆみ, 茨木博史
期間(年度)： 2014(H26)～2017(H29)

研究代表者： 松井 太 大阪大学大学院文学研究科 准教授
課題番号： 26300023
課題名： 多言語資料の比較分析による敦煌・トゥルファン文献研究の再構築と統合
研究種目： 基盤研究(B)海外学術
研究分担者： 岩本篤, 荒川慎太郎, 橘堂晃一, 佐藤貴保, 赤木崇敏, 岩尾一史, 山本明志, 坂尻彰宏
期間(年度)： 2014(H26)～2017(H29)

研究代表者： 福嶋 伸洋 共立女子大学文芸学部 教授
課題番号： 15H03200
課題名： ポスト世界文学に向けた比較詩学的共同研究の基盤構築
研究種目： 基盤研究(B)一般
研究分担者： 中村隆之, 中丸禎子, 鶴戸聡, 三枝大修, 細田和江, 奥彩子, 古川哲
期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)

研究代表者： 山中 弘 筑波大学人文社会系 教授

課題番号: 16H03329
課題名: ツーリズムにおける「スピリチュアル・マーケット」の展開の比較研究
研究種目: 基盤研究(B)一般
研究分担者: 外川昌彦, 岡本亮輔, 別所裕介, 安田慎, 鈴木涼太郎, 門田岳久
期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

研究代表者: 藤代 節 神戸市看護大学看護学部 教授
課題番号: 16H03417
課題名: 「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語一言語接触と言語形成の類型を探る—
研究種目: 基盤研究(B)一般
研究分担者: 澤田英夫, 片山修, 岸田文隆, 岸田泰浩, 菅原睦, 早津恵美子
期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

研究代表者: 桑原 尚子 早稲田大学比較法研究所 准教授
課題番号: 16H03538
課題名: イスラーム圏における法現象の分析枠組構築に関する学際的研究
研究種目: 基盤研究(B)一般
研究分担者: 飯塚正人, 佐藤やよひ, 大河内美紀, 青柳かおる, 吉川 孝, 辻上 奈美江
期間(年度): 2016(H27)~2018(H30)

研究代表者: 菅原 由美 大阪大学言語文化研究科 准教授
課題番号: 16H05662
課題名: ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考
研究種目: 基盤研究(B)海外学術
研究分担者: 宮崎恒二, 青山亨
期間(年度): 2016(H28)~2018(H31)

研究代表者: 川本 正知 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 特任教授
課題番号: 16H05681
課題名: ラシード・ウッディーン『歴史集成』写本のミニアチュールの総合的研究
研究種目: 基盤研究(B)海外学術
研究分担者: 大塚修, 杉山雅樹, 榎屋友子, 小倉智史, 松田孝一
期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

研究代表者: 櫻井 義秀 北海道大学文学研究科 教授
課題番号: 16H05712
課題名: アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究
研究種目: 基盤研究(B)海外学術
研究分担者: 外川昌彦, 川田進, 矢野秀武, 藤野陽平, 高橋沙奈美, 滝澤克彦, 塚田穂高

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

研究代表者: 高橋 英海 東京大学大学院総合文化研究科 教授

課題番号: 17H02228

課題名: 中東地域を中心とするイスラーム圏の宗教・民族・社会的多様性に関する総合的研究

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者: 桑原尚子, 阿部尚史, 近藤洋平, 辻上奈美江, 菊地達也, 山口昭彦, 辻明日香

期間(年度): 2017(H29)~2019(H30)

研究代表者: 星埜 守之 東京大学大学院総合文化研究科 教授

課題番号: 17H02328

課題名: 世界文化(資本)空間の史的編成をめぐる総合的研究:アフリカ・カリブの文学を中心に

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者: 真島一郎, 中村隆之, 吉田裕, 小川了, 久野量一, 森本庸介, 佐久間寛, 佐々木祐

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

研究代表者: 西尾 哲夫 国立民族学博物館グローバル現象研究部 教授

課題番号: 17H02330

課題名: シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者: 小田淳一, 岡本尚子

期間(年度): 2017(H29)~2021(H33)

研究代表者: 奥田 統己 札幌学院大学人文学部 教授

課題番号: 17H02336

課題名: アイヌ語現地調査資料の整理・分析および研究者アーカイブズの構築

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者: 中川裕, 山越康裕

期間(年度): 2017(H29)~2021(H33)

研究代表者: 三浦 徹 公益財団法人東洋文庫研究部 研究員

課題番号: 17H02381

課題名: 寄進とワクフの国際共同比較研究:アジアから

研究種目: 基盤研究(B)一般

研究分担者: 林佳世子, 磯貝健一, 大河原知樹, 大月康弘, 岸本美緒, 高橋一樹, 近藤信彰, 五十嵐大介

期間(年度): 2017(H29)~2020(H32)

研究代表者： 包 聯群 大分大学経済学部 准教授
課題番号： 17H04524
課題名： 消滅危機に瀕する満洲語の記録保護・教育と継承・再活性化への取り組み及び実態の解明
研究種目： 基盤研究(B)海外学術
研究分担者： 原聖, 児倉徳和
期間(年度)： 2017(H29)～2021(H33)

研究代表者： 杉田 映理 東洋大学国際学部 教授
課題番号： 17H04539
課題名： グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究
研究種目： 基盤研究(B)海外学術
研究分担者： 新本万里子, 小國和子, 菅野美佐子, 佐藤峰, 椎野若菜
期間(年度)： 2017(H29)～2019(H32)

研究代表者： 鈴木 亮子 慶應義塾大学経済学部 教授
課題番号： 17KT0061
課題名： 日常の相互行為における定型性:話し言葉を基盤とした言語構造モデルの構築
研究種目： 基盤研究(B)特設分野
研究分担者： 遠藤智子, 中山俊秀, 横森大輔, 土屋智行, 柴崎礼士郎
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

基盤研究(C)

研究代表者： 中谷 哲弥 奈良県立大学 教授
課題番号： 15K01958
課題名： 南アジア地域の持続可能な観光とコミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する比較研究
研究種目： 基盤研究(C)
研究分担者： 外川昌彦
期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 佐藤 貴保 盛岡大学文学部 准教授
課題番号： 15K02906
課題名： 西夏王国の人名に関する研究—多民族国家における文化交流・融合の視点から—
研究種目： 基盤研究(C)
研究分担者： 荒川慎太郎
期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)

研究代表者： 包 聯群 大分大学経済学部 准教授
課題番号： 16K02686
課題名： 中国黒龍江省における危機に瀕するダグル語の社会言語学的研究

研究種目： 基盤研究(C)
研究分担者： 呉人徳司
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

新学術領域研究(研究領域提案型)

研究代表者： 吉田 憲司 国立民族学博物館文化資源研究センター 教授
課題番号： 16H06281
課題名： 地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化
研究種目： 新学術領域研究(研究領域提案型)
研究分担者： 中山俊秀, 園田直子, 丸川雄三, 高野明彦, 西尾哲夫, 野林篤志, 飯田卓, 卯田宗平,
寺村裕史, 平?隆郎, 柳澤雅之
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)

挑戦的研究

研究代表者： 久保 智之 九州大学人文科学研究院 教授
課題番号： 17H06182
課題名： 満洲語の歴史社会言語学的研究一言語学と歴史学からの解明一
研究種目： 挑戦的研究(開拓)
研究分担者： 承志, 児倉徳和
期間(年度)： 2017(H29)～2021(H33)

研究代表者： 大沼 保昭 東京大学大学院法学政治学研究科 名誉教授
課題番号： 17H06187
課題名： 世界遺産の法・政治・歴史・建築学の視点からの解明:新たな学際研究への挑戦
研究種目： 挑戦的研究(開拓)
研究分担者： 赤松加寿江, 伊藤毅, 稲葉信子, 金恵京, 西海真樹, 小野寺純子, 川村陶子, 近藤信彰
期間(年度)： 2017(H29)～2020(H32)

研究代表者： 郡司 幸夫 早稲田大学理工学術院 教授
課題番号： 17K18465
課題名： 芸術に基盤を求める創造性志向型意識理論の構築
研究種目： 挑戦的研究(萌芽)
研究分担者： 中村恭子
期間(年度)： 2017(H29)～2019(H31)

挑戦的萌芽研究

研究代表者： 中谷 英明 関西外国語大学外国語学部 教授
課題番号： 16K12544
課題名： インド古典のフレーズインデックス付き統合アーカイブ構築とフレーズ分析
研究種目： 挑戦的萌芽研究
研究分担者： 芝野耕司

期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

研究代表者: 野口 靖 東京工芸大学芸術学部 准教授

課題番号: 16K13128

課題名: ケニア都市部における人々の移動史と居住環境に関する民族誌デジタルアーカイブ研究

研究種目: 挑戦的萌芽研究

研究分担者: 椎野若菜

期間(年度): 2016(H28)～2018(H30)

II-4 研究者コミュニティと一般社会に関わられた研究プラットフォームの構築

II-4.1 若手研究者養成プログラム

II-4.1.1 言語研修の実施状況

ジャワ語研修

期間: 2017年8月1日(火)～2017年8月25日(金)

時間数: 102時間

講師: 菅原由美・RAHAYU, Yosephin Apriastuti(ラハユ, ヨセフィン アプリアストゥティ)

場所: AA 研

受講者: 12(1)

修了者: 11(1)

ハンガリー語研修

期間: 2017年8月17日(木)～2017年8月30日(水)

時間数: 70時間

講師: 大島一, BILIK Éva(ビリック, エバ)

場所: AA 研

受講者: 9(4)

修了者: 8(3)

【特別企画】史料講読研修「中国古代文書簡牘」

期間: 2017年9月6日(水)～2017年9月10日(日)

時間数: 30時間

講師: 陶安あんど, 目黒杏子, 角谷常子, 靱山明, 鈴木直美, 高村武幸

場所: 大学セミナーハウス(公益財団法人大学セミナーハウス)

受講者: 11(1)

修了者: 11(1)

※受講者・修了者の () 内の数字は東京外国語大学学部・大学院履修生の数

II-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ実施状況

1. 文法研究ワークショップ(2件)

第12回 「場所」を項とする動詞

日時: 2018年1月25日(木)13:30~17:30

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所304号室

発表者: 阿部優子(東京女子大学)・岡本進(東京外国語大学大学院博士後期課程)・小林美紀(国立アイヌ民族博物館設立準備室)

第13回 会話データに基づく文法研究

日時: 2018年2月13日(火)~2018年2月14日(水)10:30~15:30

講師: Michael C. Ewing(AA 研客員教授,メルボルン大学)・中山俊秀(AA 研所員)

2. テクニカル・ワークショップ(3件)

アノテーションソフトELANの基礎

日時: 2017年7月5日(水)13:00~16:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所306号室

講師: 塩原朝子(AA 研所員)

フィールドノート(1): 調査目的に応じたノートの工夫

日時: 2017年12月6日(水)13:00~16:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所306号室

企画・進行: 青井隼人(AA 研特任研究員)

話題提供者: 白田理人(AA 研共同研究員,日本学術振興会特別研究員・琉球大学)・児倉徳和(AA 研所員)

フィールドノート(1): 調査目的に応じたノートの工夫②

日時: 2018年3月16日(金)13:00~16:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所304号室

企画・進行: 青井隼人(AA 研特任研究員)

話題提供者: 中川奈津子(AA 研共同研究員,日本学術振興会特別研究員・千葉大学)

3. 言語フィールド調査ワークショップ@宮古島

日時: 2017年12月17日(日)~23日(土)

場所: 沖縄県宮古島市池間地域

講師: 中山俊秀(AA 研所員)・大野剛(アルバータ大学)

II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況

中東☆イスラーム研究セミナー

期間: 2017年12月16日～17日

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA 研)マルチメディアセミナー室(306)

内容: 博士論文執筆予定者を対象として, 受講者による研究発表とそれを受けた議論を通して, 研究のいっそうの深化と討論スキルの向上をはかる

主催: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA 研)

協賛: 地域研究コンソーシアム

下記の日程で実施した。(受講生4名)

12月16日(土)

10:30-11:00 所長挨拶 事務連絡 日程説明 受講生自己紹介

11:15-13:15 太田(塚田)絵里奈(慶應義塾大学文学部)

「マムルーク朝末期社会と有力官僚— 同時代ウラマーの描くザイン・アッ=ディーン・イブン・ムズヒル像」

司会: 高松 洋一

14:30-16:30 Marilene Karam(東京外国語大学大学院)

"19th century Ottoman and Japanese Constitutionalism: a Global Approach"

司会: 黒木 英充

17:00-19:00 懇談会 [会場: 大学会館2階 特別食堂]

12月17日(日)

10:30-12:30 後藤 真実(エクセター大学大学院)

「フェイスマスクの意義と役割における地域比較とその変遷 — アラブ首長国連邦とイランのゲシュム島の事例から(中間報告)」

司会: 近藤 信彰

13:30-15:30 小林 周(日本エネルギー経済研究所 中東研究センター)

「内戦後のリビアにおける国家建設の停滞 — 対立構造と諸アクターの分析」

司会: 錦田 愛子

15:45-16:45 岩本 佳子(日本学術振興会特別研究員)

「私の博士論文」

司会: 野田 仁

17:00-18:00 感想・評価 修了証授与

中東☆イスラーム教育セミナー

期間: 2017年9月14日～17日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA 研)マルチメディア会議室(304)

内容：大学院生を対象に、中東・イスラーム研究に関する講義などにより知識の幅を広げる

主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA 研)

協賛：地域研究コンソーシアム

下記の日程で実施した。(講師 6 名, 受講生 16 名, オブザーバ学生 2 名)

9 月 14 日(木)

13:00-14:10 所長挨拶 趣旨説明 日程説明 事務連絡 自己紹介

司会:近藤 信彰

14:20-15:30 <受講生発表 1> 本岡 篤也 (東京外国語大学大学院)

「トルコ共和国の朝鮮戦争派兵とその国内要因」

司会:高松 洋一

15:45-17:45 [セミナー1] 松尾 昌樹 (宇都宮大学)

「地域研究と社会科学—湾岸産油国研究の経験から」

司会:錦田 愛子

18:00-20:00 懇談会 [会場:大学会館 2 階 特別食堂]

9 月 15 日(金)

10:00-11:10 <受講生発表 2> 澤口 右樹 (東京大学大学院)

「イスラエル国防軍の女性兵士:国家、宗教、セクシュアリティ」

司会:錦田 愛子

11:20-12:30 <受講生発表 3> Alena KOROBOCHKINA (新潟大学大学院)

「中央アジア安全保障と上海協力機構の枠組みにおける反テロ活動」

司会:野田 仁

13:30-15:30 [セミナー2] 野田 仁 (AA 研)

「カザフスタン史への東西からのアプローチ」

司会:高松 洋一

15:45-17:45 [セミナー3] 外川 昌彦 (AA 研)

「南アジアの聖者廟から宗教的共存を考える — ヒンドゥー教とイスラーム」

司会:荻谷 康太

9 月 16 日(土)

10:00-11:10 <受講生発表 4> 田中 みなみ (九州大学大学院)

「ムスタファ・ケマル・アタチュルクによる日本への言及」

司会:高松 洋一

11:20-12:30 <受講生発表 5> 柳井 孝太 (明治大学大学院)

「イラン・イスラーム共和国における高等教育 — ジェンダー平等の観点から」

司会:近藤 信彰

13:30-15:30 [セミナー4] 小牧 昌平 (上智大学)

「イラン近代史研究の45年間」

司会:近藤 信彰

15:45-17:45 [セミナー5] 松本 奈穂子 (東海大学)

「音楽・舞踊研究 — トルコを事例として」

司会:高松 洋一

9月17日(日)

10:50-12:00 <受講生発表6> 櫻井 幸男 (日本大学大学院研究生)

「トルコ共和国の憲法改正について」

司会:黒木 英充

13:00-14:10 <受講生発表7> 出川 英里 (千葉大学大学院)

「19世紀後半のエジプトにおけるギリシャ系集団と在地の人々の関係性について— 混合裁判所での係争を分析対象として」

司会:飯塚 正人

14:25-16:25 [セミナー6] 三浦 徹 (お茶の水女子大学)

「都市研究と比較史 — サーリヒーヤ街区の歴史から」

司会:黒木 英充

16:35-17:35 感想・評価 修了証授与

ベイルート若手研究者報告会

期間: 2017年11月29日

場所: Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut, Lebanon

内容: 博士論文執筆予定の大学院生, ポスドク研究者を中心として若手研究者を対象に, 中東・イスラームに関する研究を英語で発表し, レバノン及び周辺国の専門研究者からのコメントを受けて討論する

主催: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)

下記のとおり実施した。(派遣報告者4名, コメンテータ4名)

10:00-10:10 Welcome Address by Aiko Nishikida (Head, JaCMES / ILCAA)

Chair: Hidemitsu Kuroki (ILCAA)

10:10-10:55 Ryo Mizukami (Ph.D. Candidate, The University of Tokyo)

"Shi'i Ulama's Writing Strategy on Imams' Faḍā'il in 12-14th Century Iraq"

10:55-11:40 Madoka Morita (Ph.D. Candidate, The University of Tokyo)

"Whose Peace and Security? Neighborhood and the Politics of Collective Testimony in Istanbul (1730-54)"

11:40-11:50 Coffee Break

11:50-12:35 Woohyang Sim (Ph.D. Candidate, Waseda University, Tokyo)

"What is Higher Education for? : Women and Educational Attainment in the GCC"

12:35-13:20 Ayaka Kuroda (Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science, Ritsumeikan University, Kyoto)

"Religious Tradition and Modernity in the Forefront of Political Theory: The Case of Islamist Intellectuals in

Contemporary Egypt"

Commentators:

Maher Jarrar (American University of Beirut, Department of Arabic and Near Eastern Languages)

Astrid Meier (Orient Institute-Beirut)

Pierre Mouganie (American University of Beirut, Department of Economics)

Ahmad Moussalli (American University of Beirut, Department of Political Studies and Public Administration)

Observers:

Massoud Daher (Lebanese University)

Gianluca Parolin (Aga Khan University)

Hideaki Hayakawa (Lebanese University)

ILCAA staffs:

Yohei Kondo

Hidemitsu Kuroki

Aiko Nishikida

オスマン文書セミナー

期間:2018年1月20日～21日

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)大会議室(303)

内容: オスマン朝の公文書のうち、帳簿文書を用いた演習形式によるセミナー

主催: 基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」

共催: 共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」、科研費基盤 B「イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的的研究」(代表者:高松洋一(AA研所員), 課題番号:17H02398)

下記の日程で実施した。(講師 高松洋一, 参加者 35名)

1月20日(土)

14:00-14:15 趣旨説明 講師・自己紹介

14:20-16:00 オスマン朝の帳簿とスィヤークト書体の解説

16:20-18:00 帳簿の講読1

1月21日(日)

13:00-14:40 帳簿の講読2

15:00-16:40 帳簿の講読3

17:00-18:00 総合討論

II-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー実施状況

文化／社会人類学研究セミナー

日時: 2017年11月26日(日)12:30～19:00

会場: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)304・302・306室

共催: 2017年度日本文化人類学会次世代育成セミナー

プログラム

第1部 挨拶・ワークショップ(12:30～13:45)

開会の挨拶 河合香吏(AA研)

若手支援ワークショップ

学会「若手支援ワーキンググループ」主催のワークショップ。以下の3つのテーマでグループに分かれ、若手研究者に役立つノウハウや情報の共有と意見交換を行った。

- 1) 論文投稿や博論出版等について^[1]
- 2) 研究継続について (助成金や非常勤等の状況)
- 3) ライフイベントと研究のバランスについて

第2部 発表(14:00～19:00)

学会からの挨拶と説明 小田亮(首都大学東京)

発表1 白石奈津子(京都大学大学院)

「共存/共生の技法—フィリピン・ミンドロ島, 落穂拾いの実践からの考察」

コメント 風間計博(京都大学)

質疑応答

発表2 于晶(東北大学大学院)

「中国における新しい葬制の特徴—樹木葬と海洋葬を中心に」

コメント 山田慎也(国立歴史民俗博物館)

質疑応答

発表3 酒井貴広(早稲田大学文学学術院)

「災害の『予感』に関する実践人類学的研究—南海トラフ地震に備える高知市沿岸部の事例から」

コメント 木村周平(筑波大学)

質疑応答

講評: 深澤秀夫(AA研), 小田亮(首都大学東京)

II-4.1.5 大学院教育の現在

2008年度までは原則として東京外国語大学大学院の1研究科1専攻体制のもと、博士後期課程にのみAA研コースが学内措置として認められ、AA研所員はそのコース内で大学院教育に関与してきた。しかしながら、2009年度の東京外国語大学大学院重点化により、総合国際学研究科が発足し、2専攻(言語文化専攻・国際社会専攻)体制へと移行すると同時に、大学院博士後期課程を兼担するAA研所員はどちらかの

専攻に所属することとなった。

この改組にともない、大学院博士後期課程を兼担する AA 研所員は、院生を指導するほか、総合国際学
研究科教授会に出席し、教務の一部に参加することとなったが、博士後期課程の在学者あるいは志願者で、
AA 研所員を主指導教員に希望する者はきわめて少ないのが現状である。AA 研所員の大学院教育に対す
る関与のあり方としては、個別の院生指導を行うだけでなく、本学大学院の教育のあり方と併せて、AA 研が
これまで実施してきた下記の若手研究者育成事業の総体として考えてきた。

- ・ 言語研修
- ・ フィールド言語学ワークショップ: 研修事業の一環として基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」が主催する文法研究ワークショップ, テクニカル・ワークショップ, 言語フィールド調査ワークショップ@宮古島
- ・ 中東・イスラーム関連セミナー: 中東☆イスラーム研究セミナー, 中東☆イスラーム教育セミナー, ベイルート若手研究者報告会, オスマン文書セミナーなど
- ・ 文化／社会人類学研究セミナー

さらに学内外の要請を受けて、平成 28 年度より本学大学院の博士前期課程にアジア・アフリカフィールド
サイエンスプログラムを設けた。なお、本プログラムの内容を紹介するための学部生向けリレー講義「アジア・
アフリカ・フィールドサイエンス研究基礎」も平成 28 年度より開講している。

II-4.1.6 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員

特任研究員

青井 隼人（あおい はやと）

「多言語・多文化共生に向けた循環型言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3)

任期: 2017(H29).4.1～2019(H30).3.31

研究主題: 琉球語学, 音声学, 音韻論

安達 真弓（あだち まゆみ）

「多言語・多文化共生に向けた循環型言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3)

任期: 2016(H28).12.1～2019(H30).3.31

研究主題: ベトナム語, 語用論

岡田 一祐（おかだ かずひろ）

情報資源利用研究センター

任期: 2015(H27).9.1～2017(H29).9.30

研究主題: 日本語史, 文字史

小林 美紀（こばやし みき）

「多言語・多文化共生に向けた循環型言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3)

任期: 2017(H29).4.1～2017(H29).9.30

研究主題:アイヌ語, 形態論

近藤 洋平 (こんどう ようへい)

基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」

中東研究日本センター (Japan Center for Middle Eastern Studies, JaCMES)

任期: 2015(H27).4.1~2018(H30).9.30

研究主題:宗教学, イスラム学, イバード派

高橋 洋成 (たかはし よな)

情報資源利用研究センター

任期: 2018(H30).2.1~2021(H33).1.31

研究主題:ヘブライ語, セム諸語, アフロ・アジア諸語の言語学

中村 恭子 (なかむら きょうこ)

任期: 2014(H26).4.1~2018(H30).9.30

研究主題:美術(日本画)

平田 秀 (ひらた しゅう)

情報資源利用研究センター

任期: 2016(H28).3.1~2018(H30).3.31

研究主題:日本語の音声・音韻、日本語アクセント論

研究機関研究員

池田 昭光 (いけだ あきみつ)

任期: 2017(H29).7.1~2018(H30).3.31

研究主題:人類学, 中東地域研究(特にレバノン)

坪井 祐司 (つぼい ゆうじ)

任期: 2014(H26).5.1~2017(H29).4.30

研究主題:マレーシアにおけるエスニシティ形成に関する近代史

吉田 優貴 (よしだ ゆたか)

任期: 2017(H29).12.1~2018(H30).3.31

研究主題:身体群の共振, 手話, ヴィジュアル・メソッド, ケニア

日本学術振興会特別研究員

伊藤 雄馬 (いとう ゆうま)

研究課題名:少数言語ムラブリ語に起きた方言分岐の諸相の解明

受入期間:2016.4.1~2019.3.31

受入教員:峰岸 真琴

岩田 啓介 (いわた けいすけ)

研究課題名:清朝のアムド支配からみたチベット仏教世界再編

受入期間:2017.4.1～2020.3.31

受入教員:星 泉

岩本 佳子 (いわもと けいこ)

研究課題名:オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

受入期間:2015.4.1～2018.3.31

受入教員:高松 洋一

大竹 昌巳 (おおたけ まさみ)

研究課題名:契丹語文法の記述的研究

受入期間:2017.4.1～2020.3.31

受入教員:山越 康裕

杉江 あい (すぎえ あい)

研究課題名:イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

受入期間:2016.4.1～2019.3.31

受入教員:外川 昌彦

高尾 賢一郎 (たかお けんいちろう)

研究課題名:イスラームと社会統治に関する研究:ヒスバ制度を事例に

受入期間:2016.4.1～2019.3.31

受入教員:飯塚 正人

竹村 和朗 (たけむら かずあき)

研究課題名:現代エジプトのワクフに関する人類学的研究

受入期間:2017.4.1～2020.3.31

受入教員:近藤 信彰

II-4.2 国内連携研究活動

II-4.2.1 地域研究コンソーシアム

地域研究コンソーシアム(JCAS)との共催により、2018年2月17日にJCAS次世代ワークショップ「交歓と境界:東ユーラシア,モンゴルとテュルクにおける宴会・酒・ことばをめぐって」を開催したほか、コンソーシアム幹事組織として運営に関わり、先導的な役割を果たした。

II-4.2.2 国内研究者の受け入れ(フェロー等)

フェロー

梅川 通久(うめかわ みちひさ)

研究主題: 定量的手法による東南アジア大陸部における社会的多階層構造の総合的分析法の確立

研究期間: 2015.9.1～2018.8.31

受入教員: 中山 俊秀

研究成果:

1. 講演: 「博士人材データベースの最新動向: 今後の戦略と方向性」, リサーチアドミニストレータ協議会 第3回年次大会, 2017.8.29, 徳島県郷土文化会館/徳島大学.

岡崎 彰(おかざき あきら)

研究主題: アフリカを中心とするポピュラー・アートの社会人類学的研究

研究期間: 2015.4.1～2018.3.31

受入教員: 深澤 秀夫

研究成果:

1. 論文: 「難民キャンプと故郷のダンス: スーダン青ナイル州からのある難民コミュニティの場合」, 『難民問題と人権理念の危機: 国民国家体制の矛盾』(人見泰弘編), 108-128, 2017.5.
2. コメンテーター: Art et Affect en Afrique, Art et Affect en Afrique: Symposium international, 2017.8.19, ILCAA.

奥田 統己(おくだ おさみ)

研究主題: アイヌ語資料のアーカイブス化準備およびアイヌ語の記述的研究

研究期間: 2016.4.1～2019.3.31

受入教員: 山越 康裕

研究成果:

1. 著書: 『広がる北方研究の地平線 中川裕先生還暦記念論文集』(中川裕先生還暦記念論文集刊行委員会編), 2017.6, サッポロ堂書店, 197 pp.
2. 講演: 「アイヌ語音声資料公開」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター (IRC) 設立20周年記念シンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て、活かす」, 2017.12.9, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 口頭発表: 「アイヌ語動詞の項の増減と派生の方向」, 科研費基盤研究 (C) 「通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり」2017年度研究会, 2018.2.25, 立命館大学.

押川 文子(おしかわ ふみこ)

研究主題:現代インドの社会変化

研究期間:2015.4.1~2018.3.31

受入教員:太田 信宏

研究成果 :

1. 論文:「家族」,『ジェンダー研究ハンドブック』(栗屋利江・井上貴子編), 113-131, 2018.3.
2. 論文:「巻頭エッセイ(焦点:台頭するインドの挑戦)」,『国際問題』2018年3月号(No.669), 1-4, 2018.3.

川上 泰徳(かわかみ やすのり)

研究主題:バイルートのパレスチナ難民の政治社会意識の変遷

研究期間:2015.1.1~2017.12.31

受入教員:飯塚 正人

研究成果 :

1. 論文:「市民をジャーナリストに育てる パレスチナ難民キャンプの試み」,『月刊 Journalism』(岡田力編), 2017年12, 104-111, 2017.12.
2. 論文:「連携してシリアの戦争報道を担う 市民ジャーナリストと人権組織」,『月刊 Journalism』(岡田力編), 2017年8, 112-120, 2017.8.
3. 論文:「中東はトランプをどう受け止めるか メディアの報道にみる建前と本音」,『月刊 Journalism』(岡田力編), 2017年4, 110-117, 2017.4.
4. 書評:「独立直後のイスラエルが行ったパレスチナ人の「民族浄化」を告発する(イラン・パペ著『パレスチナの民族浄化』)」,『ニューズウィーク日本版』, 2018.2.7.
5. 講演:「中東ジャーナリストから見た現状と安定化への展望」, ジェトロ・アジア経済研究所・世界銀行・朝日新聞社国際シンポジウム「不安定な中東と再建・再生への道」, 2017.12, 国連大学 ウ・タント国際会議場.
6. 報道:「<安倍トランプ蜜月の先にある中東の3つの課題>」(ニューズウィーク日本版), 2017.2.17.
7. 報道:「<シリア攻撃 トランプ政権の危険なミタリズム>」(ニューズウィーク日本版), 2017.4.8.
8. 報道:「<まだ終わっていない——ラッカ陥落で始まる「沈黙の内戦」>」(ニューズウィーク日本版), 2017.11.8.
9. 報道:「<エジプトのモスク襲撃テロの背景にある「スンニ派同士」の対立>」(ニューズウィーク日本版) 2017.11.30.
10. 報道:「<台頭するイランとシーア派>」(集英社新書 WEB) 2017.4.21.
11. 報道:「<モスル陥落後の「イスラム国」はどうか>」(集英社新書 WEB) , 2017.7.21.
12. 報道:「<ムスリム同胞団と米国>」(集英社新書 WEB) , 2017.9.1.
13. 報道:「<ラッカ陥落後の中東の不安>」(集英社新書 WEB) , 2017.11.2.
14. 報道:「<聖地エルサレムに生きる人びと>」(集英社新書 WEB) , 2018.2.9.

木俣 美樹男(きまた みきお)

研究主題:信仰環境とエコロジズムに関する比較研究

研究期間:2014.4.1～2020.3.31

受入教員:太田 信宏

研究成果:

1. 著書(監修):『こどもかんきょう絵じてん』, 2017, 三省堂, 160 pp.
2. 口頭発表:「インドにおけるカリフ農耕文化の構成要素である雑穀の栽培化過程と伝播」, 南アジア学会第30回全国大会, 2017.9.24.
3. 講演:「焼畑の作物、特に雑穀の栽培方法と現代的価値」, 椎葉焼畑研究会, 2017.12.15.
4. 講演:「タネは誰が守るの? 種子法の廃止を受けて、では何が出来るか」, 日本パーマカルチャー・センター: パーマカルチャー・フェスティバル, 2017.8.6.
5. 報道:「雑穀街道」(毎日新聞), 2017.9.

古谷 伸子(こや のぶこ)

研究主題:タイにおける民間治療の社会的役割と潜在力に関する人類学的研究

研究期間:2014.5.1～2020.4.30

受入教員:西井 涼子

研究成果:

1. 口頭発表: “Cultural Revival Among People Living in the Phu Phan Forest in Northeast Thailand”, 13th International Conference on Thai Studies “Globalized Thailand? Connectivity, Conflict and Conundrums of Thai Studies”, 2017.7.15–18, Chiang Mai International Exhibition and Convention Center.

佐藤 久美子(さとう くみこ)

研究主題:トルコ語と日本語諸方言のイントネーション研究—意味論・統語論との相互作用の仕組みの解明に向けて

研究期間:2016.4.1～2017.4.30

受入教員:児倉 徳和

研究成果:

1. 講演:「諸方言の文末イントネーション—日本語諸方言コーパスから—」, 国立情報学研究所(国立国語研究所との共催)音声資源活用シンポジウム, 2017.9.7, 国立国語研究所.

清水 昭俊(しみず あきとし)

研究主題:人類学、人種学、民族学、民族研究、文化人類学:日本の人類学の歴史的展開

研究期間:2015.11.5～2018.11.4

受入教員:西井 涼子

研究成果:

1. 論文:「先住民、先住の民、民(ピープルズ)の平等の完成形:先住民の権利に関する国連宣言を読み解く」,『先住民からみる現代世界:わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』(深山直子・丸山淳子・木村真希子編), 21-43, 2018.2.
2. 論文:“What Was Ethnic Research (Minzoku Kenkyū)? Masao Oka and the Wartime Turn of Ethnology in Japan: a Commentary on the Papers”, *Japanese Review of Cultural Anthropology*, 18(2), 29-62, 2018.3.

新谷 忠彦(しんたに ただひこ)

研究主題:言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明

研究期間:2016.4.1~2018.3.31

受入教員:澤田 英夫

研究成果:

1. 書籍:*The Gokhu Language*. (Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.111.), 2017.6, ILCAA, TUFS, xxii+267 pp.
2. 書籍:*The Blimaw Language*. (Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.112.), 2017.6, ILCAA, TUFS, xxiii+267 pp.
3. 書籍:*The Khwingsang Language*. (Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.113.), 2018.1, ILCAA, TUFS, xxiii+267 pp.
4. 書籍:*The Khrangkhu Language*. (Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.114.), 2018.1, ILCAA, TUFS, xxiii+267 pp.
5. 書籍:*The Yingtalay Language*. (Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.115.), 2018.1, ILCAA, TUFS, xxiii+267 pp.
6. 書籍:*The Thaidai Language*. (Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.116.), 2018.1, ILCAA, TUFS, xxiii+268 pp.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 新谷 忠彦

期間(年度): 2015~2017

研究種目: 基盤研究(B)海外学術調査

研究課題名: 言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明

中見 立夫(なかみ たつお)

研究主題:清朝およびロシア帝国による内陸アジアにおける人口調査事業の研究

研究期間:2017.4.1~2020.3.31

受入教員:野田 仁

研究成果:

1. 著書(編著):*Shih-lu / Sillok / Thực Lục / Jitsuroku in Modern East Asia*(中見立夫編), 2018.2, 財団法人東方学会, 93 pp.

2. 口頭発表:“The Japanese Search for the Mongolian Kanjur in the Early 20th century: A Forgotten Mongolian Kanjur at the Tokyo Imperial University”, *The Buddha’s Words: International Conference on the Study of the Mongolian Kanjur*, 2017.7.20–21, Central Cultural Palace, G corpus, 3rd floor conference hall, Ulaanbaatar.
3. 口頭発表:「日本所蔵与蒙古相关文献资料概述」, 中央民族大学蒙古语言文学系第二届蒙古文文献国际学术研讨会, 2017.11.4-5, 中央民族大学文华楼 1446 会议室.
4. 講演: パネルディスカッション「モリソン文庫の魅力を語り尽くす」, 東洋文庫モリソン文庫渡来 100 周年記念国際シンポジウム「碩学が語る東洋学の至宝のすべて」, 2017, 東洋文庫 2 階講演室.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 中見 立夫

期間(年度): 2016～2018

研究種目: 基盤研究(B)

研究課題名: "帝国" 周縁部における国勢調査・人口調査の比較研究

福島 康博(ふくしま やすひろ)

研究主題: イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究

研究期間: 2014.5.1～2020.4.30

受入教員: 床呂 郁哉

研究成果:

1. 口頭発表:「2017 年のマレーシアの主要な出来事 :マレーシア日本語メディアの分析から」, 日本マレーシア学会関東地区研究会 2017 年度第 11 回研究会, 2018.2.24, 立教大学池袋キャンパス.
2. 報道: <イスラム・パートナー 新たな連携の可能性を探る>「中東への『ゲートウェイ』を生かせ」(国際開発ジャーナル), 2017.8.1.
3. 報道: <知識探訪 多民族社会の横顔を読む>「イスラムと母乳」(The Daily NNA マレーシア版), 2017.9.26.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 福島 康博

期間(年度): 2016～2018

研究種目: 基盤研究(C)

研究課題名: イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究: 東南アジアの例

細谷 幸子(ほそや さちこ)

研究主題: イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶: 障害者の生きる権利をめぐる

研究期間: 2016.4.1～2019.3.31

受入教員: 飯塚 正人

研究成果：

1. 論文:「イランにおける遺伝性疾患と家族—結婚とリプロダクションの選択に焦点をあてて—」, 『不妊治療の時代の中東—家族をつくる、家族を生きる』(村上薫編), 157–194, 2018.3.(査読有)
2. 論文:「イラン 養子縁組制度の新展開」, 『不妊治療の時代の中東—家族をつくる、家族を生きる』(村上薫編), 195–202, 2018.3.(査読有)
3. 論文:「巻末付録」(中東の生殖医療に関する情報), 『不妊治療の時代の中東—家族をつくる、家族を生きる』(村上薫編), 211–254, 2018.3.(査読有)
4. 論文:「イランにおける重症型サラセミア患者の結婚とリプロダクションへの看護支援を考える」, 『日本遺伝看護学会誌』 16(1), 59–69, 2017.9.(査読有)
5. 論文:「イランの治療的人工妊娠中絶法」をめぐる議論, 『生命倫理』 27(1), 72–78, 2017.9.(査読有)
6. 論文:“Report on the Visit to Kagoshima of the President of Isfahan University of Medical Sciences”, 『鹿児島大学医学部保健学科紀要』 28(1), 55–60, 2018.3.(査読有)
7. 論文:“Changes in Attitudes towards Marriage and Reproduction among People with a Genetic Illness: A study of Patients with Thalassemia in Iran”, *Anthropology of the Middle East*, 12(2), 28–45, 2017.11.(査読有)
8. 講演:「イランの生殖補助医療」, 東洋哲学研究所「宗教と生命倫理」, 2017.7.21, TKP 信濃町ビジネスセンター.
9. 口頭発表:“Supporting Negotiation with God: Examples of Spiritual Care for End-Stage Cancer Patients and Their Families in Isfahan”, The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Annual Meeting of Commission on the Middle East, 2017.8.10, Jagiellonian University, Krakow.
10. ポスター発表:“Questionnaire Survey on the Opinions in Marriage and Reproductive Choices of People with Transfusion Dependent Thalassemia in Iran”, Thalassemia International Federation Annual conference, 2017.11.18, Grand Palace Hotel, Thessaloniki.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 細谷 幸子

期間(年度): 2015～2017

研究種目: 基盤研究(C)

研究課題名: イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶:障害者の生きる権利をめぐる

宮崎 恒二(みやざき こうじ)

研究主題: Javanese Recognition of Time and Space -An Analysis of Calendar and Myth-

研究期間: 2017.4.1～2020.3.31

受入教員: 床呂 郁哉

研究成果：

1. 著書: *Transformation of religions as reflected in Javanese texts*, 2018, Tokyo: ILCAA, TUFUS.
2. 著書: 『世界の暦文化事典』(宮崎恒二・中牧弘允編), 2017, 東京: 丸善出版, 460 pp.

ジュニア・フェロー

麻生 玲子(あそう れいこ)

研究主題:琉球諸島八重山語波照間方言の記述研究 ;大量のデータに対し情報技術を活用した新たな言語研究手法の開発

研究期間:2017.4.1～2018.3.31

受入教員:中山 俊秀

研究成果 :

1. 口頭発表:「南琉球八重山語波照間方言の引用助詞=te に見られる文法化」, 日本言語学会 154 回大会, 2017.6.24, 首都大学東京.

受賞

日本言語学会論文賞(2017.11.26)

新谷 崇(あらや たかし)

研究主題:イタリア領東アフリカにおける植民地統治と宗教の問題 (1935～1941 年)

研究期間:2017.4.1～2018.3.31

受入教員:石川 博樹

研究成果 :

1. 論文:「ファシズムとカトリック教会」『教養のイタリア近現代史』(土肥秀行・山手昌樹編), 219-233, 2017.5.10, ミネルヴァ書房.
2. 論文:“ Il reinserimento degli ecclesiastici nella sfera pubblica italiana attraverso la partecipazione alla Battaglia del grano”, *Un mestiere paziente: Gli allievi pisani per Daniele Menozzi*, 7-21, 2017.5, Pisa: ETS Edizioni.
3. 論文:“ Il più grande evento dopo la Conciliazione: Scenari e retroscena della fedeltà dell’ episcopato italiano al fascismo”, *Annali della Scuola Normale Superiore di Pisa*, 10, 2018. (査読有)

生駒 美樹(いこま みき)

研究主題:負債の民族誌—茶をめぐる生産者間の関係

研究期間:2017.4.1～2018.3.31

受入教員:西井 涼子

海老原 志穂(えびはら しほ)

研究主題:現代方言と文献を用いたチベット語の比較研究

研究期間:2016.4.1～2018.3.31

受入教員:星 泉

研究成果 :

1. 著書(共編著):『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』, 5(チベット文学研究会編), 2018, 東京

- 外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 208pp.
2. 著書(共訳書):『闘うチベット文学 黒狐の谷』, 2017, 勉誠出版, 412pp.
 3. 論文: “Evidentiality of the Tibetan Verb *snang*”, *Evidential Systems of Tibetan Languages* (ed. by Nathan W. Hill and Lauren Gawne), 41–60, 2017.5. (査読有)
 4. 論文: “Amdo Tibetan”, *Levels in Clause Linkage* (ed. by Tasaku Tsunoda), 451–484, 2018.2. (査読有)
 5. 論文: “Tone and Accent in Tibeto-Burman”, *Studies in Asian Geolinguistics* (ed. by Mitsuaki Endo), 7, 13–19, 2017.
 6. 論文: 「アムド・チベット語におけるヤクの呼び分け—青海省ツェコ県の事例を中心に—」, 『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』(池田巧・岩尾一史編), 381–400, 2018.3. (査読有)
 7. 講演: 「ヤクとともにあるチベット人の暮らし」, 鶴見大学「チベットの文化に触れてみる」, 2018.1.27, 鶴見大学会館メインホール.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 海老原 志穂

期間(年度): 2014~2018

研究種目: 若手研究(B)

研究課題名: 東西方言から見たチベット語の基層の研究

大島 一(おおしま はじめ)

研究主題: ハンガリー周辺地域のハンガリー語方言における言語接触

研究期間: 2015.4.1~2018.3.31

受入教員: 塩原 朝子

研究成果:

1. 著書:『ハンガリー語のしくみ《新版》』, 2017.10, 白水社, 146 pp.
2. 論文: “The Possessive Plural Marker in the Burgenland Dialect of Hungarian in Austria”, *Studia Uralo-altaica* (ed. by Sándor Szeverényi and Bayarma Khabtagaeva), 51, 131–147, 2017.7. (査読有)
3. 口頭発表: 「日本語の「ら」における複数性について: ハンガリー語との対照」, NINJAL サロン, 2018.3.20, 国立国語研究所.
4. 口頭発表: “Plural Forms in Yoron-Ryukyuan”, The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference, 2017.10.13, University of Hawaii at Manoa.
5. 口頭発表: “Innovative Possessive Marker in the Burgenland Dialect of Hungarian in Austria”, *Methods in Dialectology XVI*, 2017.8.7, 国立国語研究所.

勝畑 冬実(かつはた ふゆみ)

研究主題: エジプト映画におけるイスラーム表象の変遷

研究期間: 2014.4.1~2018.3.31

受入教員: 飯塚 正人

研究成果:

1. 著書(共著):『映画で旅するイスラーム 知られざる世界へ』, 2018, 論創社, 192 pp.
2. 講演:「アフマド・アブダッラー監督「敷物と掛布」解説」, 2017 年度第 1 回現代中東研究会, 2017.8.3, JSPS カイロ研究連絡センター.
3. 講演:「エジプト映画「マイクロフォン」解説」, 歴らば, 2017.11.24, 甲南大学.
4. 口頭発表:「エジプト映画における「イスラーム主義」の表象をめぐって(1990 年代を中心に)」, NIHU 現代中東地域研究京都大学拠点共同研究課題「アラブ世界における近代的メディアとイスラーム」, 2018.2.28, 京都大学.
5. トークセッション:「ラー・ムアーハザ〜エジプト映画のなかの学校と宗教」, イスラーム映画祭 3: トークセッション 2, 2018.3.17, ユーロススペース.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 勝畑 冬実

期間(年度): 2016~2018

研究種目: 基盤研究(C)

研究課題名: エジプト映画における「イスラーム」表象の変遷とその分析

加藤(山内) 珠比(かとう(やまうち) たまひ)

研究主題: サブサハラアフリカの農業投入財補助金政策の歴史的変遷—タンザニアを例に

研究期間: 2017.4.1~2018.3.31

受入教員: 石川 博樹

研究成果:

1. 書評:「はじめてのジェンダーと開発」, *Africa Now*, 110, 17-19, 2018.3.
2. ポスター発表: “Did Agricultural Input Subsidies Increase the Diversity of Food Consumption?: The Case of Tanzania”, *3rd International Conference on Global Food Security*, 2017.12.5, International Convention Center, Cape Town.
3. 口頭発表:「サブサハラアフリカにおける農業投入財補助金:タンザニアを例に」, 第 67 回地域農林経済学会大会, 2017.10.25, 高知大学.
4. 口頭発表: “Did Agricultural Input Subsidies Increase the Diversity of Food Consumption?: The Case of Tanzania”, 第 18 回国際開発学会春季大会, 2017.6.3, 関西学院大学.
5. 口頭発表: “Were Female-headed Households Prioritized in Receiving Agricultural Input Subsidies?: The Case of Tanzania”, 第 54 回日本アフリカ学会大会, 2017.5.20, 信州大学

倉部 慶太(くらべ けいた)

研究主題: ジンポー語のアーカイビングとコーパス構築およびそれらを利用した研究

研究期間: 2017.4.1~2018.3.31

受入教員: 澤田 英夫

研究成果:

1. 論文: “Deaspiration and the Laryngeal Specification of Fricatives in Jinghpaw”, *Gengo Kenkyu*, 153,

- 2018.3.(査読有)
2. 論文:「ミャンマーの「こぶ取り爺さん」: ジンポー語による民話テキスト」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』, 95, 181–200, 2018.3.(査読有)
 3. 論文: “A Classified Lexicon of Jinghpaw Loanwords in Kachin Languages”, *Asian and African Languages and Linguistics*, 12, 99–131, 2018.3.(査読有)
 4. 論文: “The GRAID–annotated Jinghpaw Corpus: Annotations and Initial Findings”, *Asian and African Languages and Linguistics*, 12, 37–73, 2018.3.(査読有)
 5. 論文: “The Loss of the Proto–velar Finals in Standard Jinghpaw”, *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society*, 11(1), 1–12, 2018.2.(査読有)
 6. 論文: “Tone and Syllable Weight: The Tonotactic Asymmetry in Jinghpaw”, *Journal of the Phonetic Society of Japan*, 21(3), 15–21, 2017.12.(査読有)
 7. 論文: “Repetition and Reduplication in Jinghpaw”, *Kyoto University Linguistic Research*, 36, 1–19, 2017.12.(査読有)
 8. 論文: 「ジンポー語民話資料: 蟬の鳴き声の由来」, 『言語記述論集』, 9, 9–21, 2017.4.
 9. 論文: “Wind: Tibeto–Burman”, *Studies in Asian Geolinguistics 4* (ed. by Yoshio Saito & Mitsuaki Endo (eds.)), 10–13, 2018.
 10. 論文: “Iron in Tibeto–Burman”, *Studies in Asian Geolinguistics 5* (ed. by Yoshihisa Taguchi & Mitsuaki Endo (eds.)), 9–12, 2018.
 11. 論文: “Means to count nouns in Tibeto–Burman”, *Studies in Asian Geolinguistics 6* (ed. by Keita Kurabe and Mitsuaki Endo (eds.)), 11–14, 2018.
 12. 口頭発表: 「東・東南アジアにおける地域的 calque としての「食」」, 2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会」, 2018.3, 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
 13. 口頭発表: 「ティディム・チン語とジンポー語における方向接辞の対照」, 日本言語学会第 155 回大会, 2017.11, 立命館大学.
 14. 口頭発表: “The Laryngeal Specification of Fricatives in Jinghpaw”, La Trobe Sino–Tibetan day, 2017, La Trobe University.
 15. 口頭発表: “Eclipse as an Areal Calque in East and Southeast Asia”, LAL–seminars, 2017, The University of Melbourne.
 16. 口頭発表: “What Eats the Sun and Moon? Eclipse as an Areal Calque in East and Southeast Asia”, CRLD Research Seminar, 2017, La Trobe University.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 倉部 慶太

期間(年度): 2017~2019

研究種目: 基盤研究(B)海外学術調査

研究課題名: ビルマの危機言語に関する緊急調査研究

小池 まり子(こいけ まりこ)

研究主題: 現代バリの社会・宗教改革運動—バリヒンドゥー教徒の親族集団組織を事例として—

研究期間:2016.4.1～2018.3.31

受入教員:西井 涼子

研究成果:

1. 論文:「フィールドワーカーのおみやげ」, 『FIELDPLUS』 18, 34, 2017.7.

東風谷 太一(こちや たいち)

研究主題:1840年代のバイエルン王国ミュンヘンで発生したビールをめぐる騒擾を都市の営業体制・権利概念・ビールと醸造業の視点から考察すること

研究期間:2017.4.1～2018.3.31

受入教員:佐久間 寛

研究成果:

1. 論文:「ビール騒擾と営業権限——19世紀前半ミュンヘンにおける都市・営業・民衆——」, 東京外国語大学2017年度博士学位申請論文, 2018.2, 348pp.
2. 口頭発表:「ビールに憑かれた人びと——19世紀前半ミュンヘンにおける都市・ビール・騒擾」, 第67回日本西洋史学会大会, 2017.5.20-21, 一橋大学.

小森 真樹(こもり まさき)

研究主題:現代アメリカ合衆国における科学館の再定義:博物館展覧会の利用実態の分析から

研究期間:2017.4.1～2018.3.31

受入教員:椎野 若菜

研究成果:

1. 論文:“Conceptualization and/or Globalization? A Historiographical Analysis of Writing History after ‘Cultural Turn’”, *Global Histories*, 4(1), Forthcoming. (査読有)
2. 論文:「デジタル・ミュージアム・研究——デジタル時代のミュージアムとモノと場所」, 『立教アメリカン・スタディーズ』, 40, 2018.
3. 論文:「ミュージアム研究における『展示の政治学』論の系譜——受容論的転回と展示の詩学」, 『ムゼイオン』, 63, 2017.
4. 論文:“Dead Bodies on Display: Museum Ethics in the History of the Mutter Museum”, *The Journal of American and Canadian Studies*, 35, 2017. (査読有)
5. 総説・解説:「フィールドごはん:dive bar と bottle shop」, 『FENICS メルマガ』 Vol.37, 2017.8.25, メールマガジン.
6. 総説・解説:「レポート:共同研究集会 2017年10月26日・27日「子育て、ライフイベントとフィールドワーク」, 「フィールド研究におけるデータ、メディアアーカイブの分野横断的な共有と情報発信」」, 『FENICS ウェブサイト』, 2017.11, ウェブサイト.
7. 書評:「新刊紹介 土屋正臣『市民参加型調査が文化を変える——野尻湖発掘の文化資源学的考察』」, 『REPRE』 31, 2017.9, ウェブサイト.
8. 口頭発表:「撮影される「民族誌的現在」、再演される「博物館的現在」——ロバート・フラハティの『極北のナヌーク』とアメリカ文化人類学」, 日本文化人類学会第51回研究大会(パネル「人類学的映像

- 展示がひらく可能性—身体・再現・含蓄／連累」代表・丹羽朋子), 2017.5.28, 神戸大学.
9. 通訳・解説:「Lisa McGirr 講演会「新保守主義の起源と現代アメリカ」, 立教大学アメリカ研究所 Lisa McGirr 氏(ハーヴァード大学歴史学部)連続講演, 2017.5.30, 立教大学.
 10. 口頭発表:「新しい宗教保守とクリスチャン文化産業—福音派左派、ベネディクト選択派、オルト・ライト」, 日本アメリカ学会第 51 回研究大会(文化・芸術史分科会), 2017.6.5, 早稲田大学.
 11. 口頭発表:「デジタルヒューマニティーズによる領域横断性:ミュージアムにおけるフィールドワーク調査」, FENICS 及び北海道大学低温文化研究所 2017 年度共同研究集会:フィールド研究におけるデータ、メディアアーカイブの分野横断的な共有と情報発信, 2017.10.26-27, 北海道大学低温文化研究所.
 12. 口頭発表:「フィールドワーク:記録・痕跡・記憶」, Project Intersection ワークショップ, 2018.2.3, 大阪港湾地域.
 13. 口頭発表:「ワークショップ:Intersection I:地域・歴史・アートの狭間で」, Project Intersection ワークショップ」, 2018.2.3, クリエイティブセンター大阪(名村造船所跡地)内 Black Chamber.

四條 真也(しじょう まさや)

研究主題:島嶼地域における伝統の再解釈—米国制度下のハワイにおける伝統的養取慣行に関する社会人類学的研究

研究期間:2016.4.1～2018.3.31

受入教員:深澤 秀夫

研究成果:

1. 講演:「ハワイ人の『血』と『プライド』の諸相」, 上智大学アメリカ・カナダ研究所 SOPHIA AMERICAN STUDIES COLLOQUIUM, 2017.12.7, 上智大学.
2. 報道:「ヨーゼフ・クライナー氏と奄美」(『南海日日新聞』月刊奄美), 2017.6.1.

澁谷 俊樹(しぶや としき)

研究主題:ベンガルの民衆文化をめぐる地域研究

研究期間:2016.4.1～2018.3.31

受入教員:外川 昌彦

研究成果:

1. 論文:「生活世界としての路上と市場—インド・コルカタから」, 『FIELDPLUS』19, 22-23, 2018.1.
2. 講演:「写真アーカイブと南アジア民俗学の可能性」, 第 1 回日本ベンガルフォーラム「小西正捷先生の南アジア民俗写真アーカイブを囲んで」, 2017.5.20, 東京外国語大学府中キャンパス.
3. 口頭発表:「ベンガルのガジョン祭祀の変容と民衆文化論」, 2017 年度第 1 回 FINDAS 研究会「ベンガル民衆文化の歴史と祝祭空間」, 2017.6.24, 東京外国語大学本郷サテライト.

西川 和孝(にしかわ かずたか)

研究主題:西南中国における漢族移民と経済活動の歴史について

研究期間:2017.4.1～2018.3.31

受入教員:澤田 英夫

研究成果 :

1. 論文:「明清期雲南における寺院建設の進展と社会背景」,『淑徳大学人文学部研究論集』3, 121-132, 2018.3.(査読有)

三代川 寛子(みよかわ ひろこ)

研究主題:近代エジプトにおけるコプトのファラオ主義と人種主義

研究期間:2017.4.1~2018.3.31

受入教員:飯塚 正人

研究成果 :

1. 著書(編著):『東方キリスト教諸教会—研究案内と基礎データ』(三代川寛子編), 2017.8, 明石書店, 608 pp.
2. 論文:「悠久の過去を操る—古代エジプトをめぐる歴史観の変遷」,『中東・イスラーム世界の歴史・宗教・政治』(高岡豊・白谷望・溝渕正季編), 明石書店, 92-104, 2018.2.
3. 書評:書評「辻明日香『コプト聖人伝にみる十四世紀エジプト社会』山川出版社 2016年 196+63頁」,『イスラーム世界研究』11, 280-283, 2018.3.
4. 口頭発表:“The Copts and Nation-Building in Modern Egypt”, *Association for the Study of Nationalities 22nd World Convention*, 2017.5.4, Columbia University.
5. 口頭発表:“Sectarianism and Nationalism: Coptic Cultural Revival in Colonial Egypt”, *Eastern Christianity and Islam Lecture Seminar Series*, 2017.5.23, Pembroke College, Oxford University.
6. 口頭発表:“Coptiness, Egyptianness, and Arabness in Modern Coptic Historiography”, *OXFORD-CAMBRIDGE MIDDLE EAST HISTORY GRADUATE AND EARLY CAREER RESEARCHERS' WORK-IN-PROGRESS WORKSHOP*, 2017.6.20, St Antony's College, Oxford University.
7. 口頭発表:「コプト・キリスト教徒の文化ナショナリズム:エジプトのナイルーズ祭を事例に」, 日本学術振興会カイロ研究連絡センター2017年度第3回定例懇話会, 2017.9.14, JSPS カイロ研究連絡センター.
8. 口頭発表:“Id al-Nayruz al-Misri: Nashat-hu, al-Ihtifal bih, wa Ihya'-hu”, *Societe d'Archaeologie Copte: seminar series*, 2017.9.22, Societe d'Archaeologie Copte, Cairo.
9. 口頭発表:“The Rediscovery of St. Menas the Miracle Maker”, “In partibus fidelium” *Missions du Levant et connaissance de l'Orient chrétien (XIXe-XXIe siècles)*, 2017.11.28, ÉCOLE FRANÇAISE DE ROME.
10. 口頭発表:“Coptic Historiography in Colonial Egypt: From the History of Patriarchs to the History of Coptic Nation”, *Rethinking Nationalism, Sectarianism and EthnoReligious Mobilisation in the Middle East*, 2018.1.28, Pembroke College, Oxford University.
11. 口頭発表:“The Coptic Church and the revival of veneration of St Menas in Egypt”, *Eastern Christianity Historical, Theological, & Cultural Heritage Lecture Seminar Series*, 2018.2.20, Pembroke College, Oxford University.
12. 口頭発表:“The Emergence of Coptic Modern Historiography: The Case of 'The History of the Coptic

Nation“, Modern Coptic Studies: a Symposium, 2018.3.2, University of Pennsylvania.
13. 報道:「コプト正教会を知る(6) 聖マルコの聖遺物」(クリスチャン・トゥデイ), 2017.8.25.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 三代川 寛子

期間(年度): 2017~2020

研究種目: 若手研究(B)

研究課題名: エジプトのナショナリズムにおける民族概念と宗教的アイデンティティ

II-4.2.3 海外学術調査総括班の活動

I-3.2.4 海外調査専門委員会を参照

II-4.2.4 四大学連合附置研究所長懇談会

2017年度 実施

四大学連合附置研究所長懇談会(第33回)

日時: 2017年6月15日(木)16:30-17:30

会場: 東京工業大学北1号館1階会議室

懇談事項: ①第12回四大学連合文化講演会について

②次回以降の四大学連合文化講演会について

四大学連合文化講演会(第12回)

日時: 2017年11月24日(金)13:00-16:30

会場: 一橋講堂 学術総合センター内(東京都千代田区一ツ橋2-1-2)

主催: 四大学連合(東京医科歯科大学, 東京外国語大学, 東京工業大学, 一橋大学)

企画: 四大学連合附置研究所

後援: お茶の水会, 東京外語会, 蔵前工業会, 如水会

【プログラム】

12:20 開場

13:00-13:10 開会挨拶 東京外国語大学 学長

13:10-13:20 来賓挨拶 文部科学省 学術機関課長(代理)

13:20-14:00 「地震に対し安全・安心な建物構造技術の研究」

東京工業大学 未来産業技術研究所 特任教授 笠井和彦

14:00-14:40 「Precision Medicine を目指した心血管ゲノム研究」

東京医科歯科大学 難治疾患研究所 教授 古川哲史

14:40-15:00 休憩

15:00-15:40 「不動産市場と経済・バブル」

一橋大学 経済研究所 教授 植杉威一郎

15:40-16:20 「現代アフリカの紛争と平和構築」

東京外国語大学 現代アフリカ地域研究センター センター長 武内進一

16:20-16:30 閉会挨拶 東京工業大学 学長

四大学連合附置研究所長懇談会(第34回)

日時: 2017年12月21日(木)16:30-17:30

会場: 東京医科歯科大学生物材料工学研究所(22号館1階 第2会議室)

懇談事項: ①第12回四大学連合文化講演会について

②次回以降の四大学連合文化講演会について

(第13回四大学連合文化講演会について, 次回当番機関について)

II-4.2.5 シンポジウム等

2017年

4月15日(土)

『草原の河』公開記念 TUFSS Cinema チベット映画特集 ～ソントルジャとの出会い～

12:30-. 『ティメー・クンデンを探して』(監督:ペマ・ツェテン, 撮影:ソントルジャ)

14:30-. トーク「チベット映画人のリーダー:ペマ・ツェテンとソントルジャ」市山尚三(映画プロデューサー
/東京フィルメックス・プログラムディレクター)×星泉(東京外国語大学アジア・アフリカ言
語文化研究所)

司会:武井みゆき(映画配給会社ムヴィオラ代表)

15:30-. 『オールド・ドッグ』(監督:ペマ・ツェテン, 撮影:ソントルジャ)

使用言語:トークイベントは日本語

アゴラ・グローバル プロメテウス・ホール

共催:AA 研, ムヴィオラ

協力:Director Sonthar Gyal/Director Pema Tsenden/Director Khashem Gyal/東京フィルメックス/福岡
市総合図書館

4月22日(土)

『草原の河』公開記念 TUFSS Cinema チベット映画特集 ～ソントルジャとの出会い～

12:30-. 『チベット牧畜民の一日』(撮影:カシヤムジャ)

14:15-. トーク「東北チベットの暮らしとソントルジャの世界」三浦順子(翻訳家)×星泉

司会:武井みゆき(映画配給会社ムヴィオラ代表)

15:30-. 『陽に灼けた道』(監督:ソントルジャ)

使用言語:トークイベントは日本語

アゴラ・グローバル プロメテウス・ホール

共催:AA 研, ムヴィオラ

協力:Director Sonthar Gyal / Director Pema Tsenden / Director Khashem Gyal / 東京フィルメックス / 福岡市総合図書館

5月6日(土)~12日(金)

『草原の河』公開記念 チベット映画傑作選 ~ソントルジャとの出会い~

5月6日(土)

12:00(終了時間は13:29). 『陽に灼けた道』(監督:ソントルジャ)

上映終了後, トークショー(30分)

星泉(AA 研所員) × 武井みゆき(ムヴィオラ代表)

5月7日(日)

12:00(終了時間は13:35). 『チベット牧畜民の一日』(撮影:カシャムジャ)

上映終了後, トークショー(25分)

星泉(AA 研所員) × 武井みゆき(ムヴィオラ代表)

5月8日(月)

12:00(終了時間は13:15). 『英雄の谷』(監督:カシャムジャ) + 『草原』(監督:ペマ・ツェテン)

5月9日(火)

12:00(終了時間は13:52). 『ティメー・クンデンを探して』(監督:ペマ・ツェテン, 撮影:ソントルジャ)

5月10日(水)

12:00(終了時間は13:42). 『静かなるマニ石』(監督:ペマ・ツェテン)

5月11日(木)

12:00(終了時間は13:52). 『ティメー・クンデンを探して』(監督:ペマ・ツェテン, 撮影:ソントルジャ)

5月12日(金)

12:00(終了時間は13:58). 『ラサへの歩き方~祈りの2400Km』(監督:チャン・ヤン)

使用言語:トークイベントは日本語

第七藝術劇場(大阪)

共催:ムヴィオラ, AA 研, 第七藝術劇場

協力:Director Sonthar Gyal / Director Pema Tsenden / Director Khashem Gyal / 福岡市総合図書館

5月10日(水)~14日(日), 17日(水)~21日(日)

企画展「ヤクとミルクと女たち——チベット牧畜民の暮らし」

※本展は2月13日から3月11日に開催した「チベット牧畜民の仕事展」の巡回展です。

使用言語:日本語

Event Space & Café キチム

共催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 一般社団法人チーズスクール協会, 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とそ

の変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」, 科学研究費(基盤 B)「チベット
牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者:星泉
(AA 研所員), 課題番号:15H03203)

5月13日(土)～14日(日)

上映&トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険」

5月13日(土)

18:00-. 開場

18:30-. 開会 チベット料理の軽食

19:00-. トーク①海老原志穂(AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー)「チベット人のヤクの見わけ
方」

19:30-. 「チベット牧畜民の一日」解説付き上映

21:00-. トーク② (21:30 終了)平田昌弘(AA 研共同研究員, 帯広畜産大学)「チーズ・バター・ヨーグル
ト---ミルクに彩られたチベット人の食卓」

5月14日(日)

18:00-. 開場

18:30-. 開会 チベット料理の軽食

19:00-. トーク①別所裕介(AA 研共同研究員, 駒沢大学)「宗教儀礼からみたチベット人の自然観」

19:30-. 「チベット牧畜民の一日」解説付き上映

21:00-. トーク② (21:30 終了)星泉(AA 研所員)「チベット文学に草原の香りを感じて」

使用言語:日本語

Event Space & Café キチム

共催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 一般社団法人
チーズスクール協会, 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とそ
の変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」, 科学研究費(基盤 B)「チベット
牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者:星泉
(AA 研所員), 課題番号:15H03203)

5月20日(土)

IRC20 周年記念シンポジウムー小西正捷先生の南アジア民俗写真アーカイブを囲んで【公開】

1. 粟屋利江(東京外国語大学) 開会の挨拶
2. 小西正捷(立教大学名誉教授) 南アジア民俗写真アーカイブに寄せて
3. 臼田雅之(東海大学名誉教授) 写真アーカイブとインド史研究の可能性
4. 澁谷俊樹(AA 研ジュニア・フェロー) 写真アーカイブと南アジア民俗学の可能性
5. 上杉彰紀(金沢大学) 写真アーカイブと南アジア考古学の可能性
6. 小西公大(東京学芸大学) 写真アーカイブとフィールド・フォトグラフィーの可能性(ビデオ報告)
7. 高島淳(AA 研所員) 閉会の挨拶

司会 外川昌彦(AA 研所員)

使用言語:日本語

東京外国語大学研究講義棟(115)

共催:AA 研 IRC20 周年記念事業, FINDAS 写真アーカイブ事業, ベンガル・フォーラム実行委員会,
ISBS-Japan Chapter

6月2日(金)

チベット文学ナイト 黒狐の夜

出演:海老原志穂(AA 研ジュニア・フェロー), 大川謙作(日本大学), 星泉(AA 研所員), 三浦順子(翻訳家)

進行:星泉(AA 研所員)

使用言語:日本語

サロンド富山房 Folio

共催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 星泉(AA 研所員)研究室

6月8日(木)~7月2日(日)

企画展「ヤクとミルクと女たち——チベット牧畜民の暮らし」

※本展は2月13日から3月11日に開催した「チベット牧畜民の仕事展」の巡回展です。

使用言語:日本語

タシデレ チベットレストラン&カフェ

共催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, タシデレ チベットレストラン&カフェ, 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」, 科学研究費(基盤 B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者:星泉(AA 研所員), 課題番号:15H03203)

6月11日(日)

パレスチナ／イスラエル研究会

山本健介(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

「ユダヤ・イスラームの聖なる都市をめぐる紛争とパレスチナ人の抵抗:オスロ合意以降のエルサレム／グドゥスとヘブロン／ハリールを事例に」

戸澤典子(東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程)

「1977年～1983年イスラエル・リクード政権下におけるヨルダン川西岸地区入植政策変換を Yesha Council (The Council of the Settlements of Judea, Samaria, and Gaza)から考察する」

使用言語:日本語

東京大学本郷キャンパス 東洋文化研究所 3階大会議室

主催:中東イスラーム研究拠点

6月17日(土)~18日(日)

上映&トークイベント「ヤクとミルクをめぐる冒険@タシデレ」

6月17日(土)

13:30. 開場

14:00. 開会

14:10. 「チベット牧畜民の一日」解説付き上映

16:00. トーク 星泉(AA 研所員)「ヤクとチベット人」

6月18日(日)

13:30. 開場

14:00. 開会

14:10. 「チベット牧畜民の一日」解説付き上映

16:00. トーク 別所裕介(AA 研共同研究員, 駒沢大学)「チベットの宗教信仰と自然観—映像をより深く理解するために」

使用言語:日本語

タシデレ チベットレストラン&カフェ

共催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, タシデレ チベットレストラン&カフェ, 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学的手法に基づいて〜」, 科学研究費(基盤 B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者:星泉(AA 研所員), 課題番号:15H03203)

7月1日(土)

海外学術調査フォーラム【公開】

10:30-12:30 海外学術調査ワークショップ「フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション—あつめる・はかる・かぞえる—」

1. 関谷雄一(東京大学大学院総合文化研究科/文化人類学)「福島原発事故被災当事者との協働研究—その創造性と課題—」

2. 塩見こずえ(国立極地研究所/動物行動学)「野生動物の動きをはかるバイオロギング」

12:30-12:35. 海外学術調査フェスタ展示内容の案内

12:35-14:00. —昼食・休憩—

14:00-15:50. 地域別分科会

16:00-17:00. 全体会議

17:30-19:30. 情報交換会

使用言語:日本語

AA 研 303

主催:AA 研

7 月 5 日(水)

フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「アノテーションソフト ELAN の基礎」

講師:塩原朝子(AA 研所員)

内容:言語の音声・ビデオなどの一次データに転写・翻訳・文法情報などのアノテーションをつけるためのソフトウェア ELAN の使用について実習を行った。

使用言語:日本語

AA 研 306

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

7 月 15 日(土)

FIELDPLUS トークイベント「砂漠の狩人の半世紀:ブッシュマンの伝統と変容」【公開】

◎出演:中川裕(東京外国語大学), 田中二郎(京都大学名誉教授)

◎進行:高松洋一(AA 研, 『FIELDPLUS』編集長)

◎プログラム:

1. 高松洋一(AA 研所員)「ごあいさつ」
2. 中川裕(東京外国語大学)「ブッシュマンの道具を言語学的に見る」
3. 田中二郎(京都大学名誉教授)「ブッシュマンの伝統的遊動生活」
4. 田中二郎(京都大学名誉教授)「ブッシュマンの変容と近代化」
5. 質疑応答

使用言語:日本語

AA 研 303

共催:『FIELDPLUS』編集部, 科研費基盤研究(B)「コエ・クワディ語族カラハリ・コエ語派の言語学的ドキュメンテーション」(研究代表者:中川 裕(東京外国語大学)), 科研費基盤研究(A)「稀少特徴と言語地域の音韻類型論:コイサン音韻論の貢献」(研究代表者:中川裕(東京外国語大学), 課題番号:16H01925)

7 月 18 日(火)

リンディフォーラム:特任研究員研究発表会

13:00-14:10. 青井隼人(AA 研特任研究員, 国立国語研究所)「南琉球宮古語音声学・音韻論の論点」

14:20-15:30. 小林美紀(AA 研特任研究員)「アイヌ語の自他交替」

15:30-16:00. 総合討論

使用言語:日本語

AA 研 304

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

8月4日(金)

AA 研フォーラム:言語研修(ジャワ語)文化講演「ジャワ語文学の歴史の概要」【公開】

青山亨(東京外国語大学)「ジャワ語文学の歴史の概要」

使用言語:日本語

AA 研 304

共催:AA 研, 東京外国語大学社会・国際貢献情報センター

8月26日(土)

AA 研フォーラム:言語研修(ジャワ語)文化講演「ジャワの暦と占い」

宮崎恒二(東京外国語大学名誉教授/AA 研フェロー)「ジャワの暦と占い」【公開】

使用言語:日本語

AA 研 304

共催:AA 研, 東京外国語大学社会・国際貢献情報センター

8月26日(土)

AA 研フォーラム:言語研修(ハンガリー語)文化講演「ハンガリー民族舞踊」【公開】

神谷潤子, 神谷孝(ハンガリー舞踊研究家)「ハンガリー民族舞踊」

使用言語:日本語

AA 研 306

共催:AA 研, 東京外国語大学社会・国際貢献情報センター

8月26日(土)~27日(日)

木曾川方言調査事前ワークショップ

8月26日(土)14:00-18:00

木部暢子(国立国語研究所) 調査の概要

平子達也(駒澤大学)・山口昭雄(元木曾川町長) 木曾川方言概説

青井隼人(国立国語研究所, AA 研特任研究員)・塩原朝子(AA 研所員) 調査技法実習

8月27日(日)9:00-12:00;13:00-15:00 実習

使用言語:日本語

さかえビル(名古屋)

共催:国立国語研究所 (NINJAL), 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

10月13日(金)~15日(日)

第3回 キキソソ チベットまつり

10月13日(金)

19:30-22:00. 星泉(AA 研所員)ドキュメンタリー『チベット牧畜民の一日』上映&トーク

開催期間中、『チベット牧畜民の仕事展』を展示

使用言語:日本語

小諸エコビレッジ(長野)

主催:キキソソ チベットまつり

協力:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

10月27日(金)

フィールドサイエンス・コロキウム 2017 年度第1回ワークショップ「リスク・ハザード・レジリエンス」

15:00-15:50 <発表1> 湖中 真哉(静岡県立大学教授)【報告】

「当事者間の問題点共有接近法による新たなフィールド・サイエンス・ケニア・マサイマラと静岡県中山間地域を接続する esp プロジェクトの事例から」

16:00-16:50 <発表2> 櫻井 雄志(NPO ふるさと理事)【報告】

「福島放射線災害からのレジリエンス(復興力, 折れない心):被災者の証言」

17:00-18:30 全体討論

使用言語:日本語

AA 研 304

主催:アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センター(FSC)

共催:AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求ー人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」

10月28日(土)

IRC 設立 20 周年・ウィキペディア日本語版始動 15 周年記念ワークショップ「世界の知識を翻訳しよう」

【公開】

13:30-14:30

第1部 ウィキペディアと翻訳

(1) 渡辺智暁(慶應義塾大学)「コミュニティの形成という観点から」

(2) 太田尚志「グローバルコミュニティとのかかわりから」

(3) 松田朝彦(物質・材料研究機構)「コンテンツの発展という観点から」

15:00-17:30

第2部 翻訳実践

北村紗衣(武蔵大学)「翻訳ワークショップ」

使用言語:日本語

東京外国語大学附属図書館 4 階@ラボ

主催:情報資源利用研究センター(IRC)

協力:東京外国語大学附属図書館

11月7日(火)

IRC設立20周年記念ワークショップ「アーカイブズ学の現状 —研究資料の保全と利活用を目指して—」

【公開】

14:00-17:00

講師:西村慎太郎(人間文化研究機構 国文学研究資料館准教授)

タイトル:「アーカイブズ学の現状 —研究資料の保全と利活用を目指して—」

使用言語:日本語

AA 研 304

共催:情報資源利用研究センター(IRC), 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)

11月11日(土)

パレスチナ／イスラエル研究会

武田祥英(千葉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程単位取得退学)

「バルフォア宣言の成立と政策化のプロセス」

赤川尚平(慶應義塾大学法学研究科政治学専攻博士後期課程)

「イギリスのイスラーム政策からの再検討」

臼杵陽(日本女子大学文学部史学科教授)

「現地パレスチナでどう受けとめられたか」

使用言語:日本語

東京大学本郷キャンパス 東洋文化研究所 3階大会議室

主催:中東イスラーム研究拠点

共催:東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」

11月18日(土)～19日(日)

言語研修ジャワ語フォローアップミーティング 【公開】

11月18日

1. 10:00-12:00, 13:00-15:00. ウィルム・ファン・デル・モーレン(KITLV, オランダ)・菅原由美(大阪大学)
ジャワ文字基礎・読解

2. 15:15-16:30. 青山亨(東京外国語大学) 講義「ジャワ文字の変遷」

11月19日

3. 10:00-12:00, 13:00-15:00. ウィルム・ファン・デル・モーレン(KITLV, オランダ)・菅原由美(大阪大学)
ジャワ文字基礎・読解

4. 15:15–16:30. ウィルム・ファン・デル・モーレン (KITLV, オランダ) 講義「印刷されたジャワ文字」

使用言語: 英語

AA 研 301

共催: AA 研, 科研費基盤研究 (B) 「ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考」(研究代表者: 菅原由美(大阪大学)), 東京外国語大学社会・国際貢献情報センター

11 月 26 日(日)

2017 年度日本文化人類学会次世代育成セミナー／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」文化/社会人類学研究セミナー【公開】

開会の挨拶 西井凉子(AA 研)

12:30–13:45 若手支援ワークショップ

1. 論文投稿や博論出版などについて
2. 研究継続について(助成金や非常勤などの状況)
3. ライフイベントと研究のバランスについて

14:00–学会からの挨拶と説明

14:05–15:35 発表 白石奈津子(京都大学大学院)

「共存／共生の技法—フィリピン・ミンドロ島, 落穂拾いの実践からの考察」

コメント 風間計博(京都大学)

質疑応答

15:40–17:10 発表 于 晶(東北大学大学院)

「中国における新しい葬制の特徴—樹木葬と海洋葬を中心に」

コメント 山田慎也(国立歴史民俗博物館)

質疑応答

17:15–18:45 発表 酒井貴広(早稲田大学文学学術院)

「災害の『予感』に関する実践人類学的研究—南海トラフ地震に備える高知市沿岸部の事例から」

コメント 木村周平(筑波大学)

質疑応答

18:45–19:00 講評 深澤秀夫(AA 研), 小田亮(首都大学東京)

閉会の挨拶 西井凉子(AA 研)

使用言語: 日本語

AA 研 302, 304, 306

共催: 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」, 日本文化人類学会次世代育成セミナー

12 月 2 日(土)

公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」【公開】

14:00–14:15. 床呂郁哉(AA 研所員) 趣旨説明

- 14:15-14:25. 山口真美(中央大学)「多文化をつなぐ顔と身体表現」
- 14:25-14:55. 渡邊克巳(早稲田大学)「潜在的な顔身体コミュニケーションと個人差」
- 14:55-15:25. 高橋康介(中京大学)・島田将喜(帝京科学大学)・大石高典(東京外国語大学)・錢琨(九州大学持続可能な社会のための決断科学センター)「続・顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」
- 15:40-16:10. 田中みわ子(東日本国際大学)「身体表現にみる眼差しのダイナミクスー障害をめぐる文化的差異に着目して」
- 16:10-16:40. 小手川正二郎(國學院)・國領佳樹(立教大学)「顔身体の現象学ー概要と展望」
- 16:55-18:00. 総合討議

使用言語: 日本語

AA 研 303

共催: 新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築ー多文化をつなぐ顔と身体表現」, 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究ー人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」

12月6日(水)

フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ「フィールドノート(1): 調査目的に応じたノートの工夫」

主な内容: 今回「調査目的に応じたフィールドノートの工夫」をテーマにワークショップをおこなった。参加者のみなさんとフィールドノートのアイデアや悩みを共有し、それぞれにとってよりよいノート術を見つける場を作ることを目指した。

企画・進行: 青井隼人(AA 研特任研究員)

話題提供者: 白田理人(AA 研共同研究員, 日本学術振興会特別研究員・琉球大学), 児倉徳和(AA 研所員)

使用言語: 日本語

AA 研 304

主催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

12月9日(土)

情報資源利用研究センター (IRC) 設立 20 周年記念シンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング情報を育て、活かす」【公開】

13:30 飯塚正人(AA 研所長)「開会のことば」

13:45 基調講演: 高島淳(AA 研)「カナダ語・英語・日本語3言語電子辞書の構築について」

14:15 「事例紹介ライトニングトーク」

- (1) 阿部優子(東京女子大)「ベンデ語の語学教材のマルチメディア版」
- (2) 小田淳一(AA 研)「インド洋民話のデータベース化」
- (3) 児倉徳和(AA 研)「チュルク諸語対照基礎語彙」

(4) 江川ひかり(明治大学)・高松洋一 (AA 研所員)「オスマン朝演劇ポスター」

15:05 「資源化する側と活用する側の対話」

(1) 岩尾一史 (龍谷大学)・西田愛 (神戸市外国語大学)「古チベット語文献オンライン」

(2) 高松洋一 (AA 研)・岩本佳子 (日本学術振興会特別研究員/AA 研)「アラビア文字紀年銘クロノグラム」

(3) 奥田統己 (札幌学院大学)・小林美紀(国立アイヌ文化博物館設立準備室)・深澤美香(国立アイヌ文化博物館設立準備室)「アイヌ語音声資料公開」

(4) パネルディスカッション「資源化と活用の未来に向けて」

18:15 星泉(AA 研)「閉会のことば」

使用言語: 日本語

AA 研 304

主催: 情報資源利用研究センター (IRC)

12 月 10 日(日)

パレスチナ／イスラエル研究会「インティファダから 30 年: 現在から考えるパレスチナ」

鈴木啓之(日本学術振興会特別研究員 PD[日本女子大学])

「長い導火線: 蜂起の系譜からインティファダを問い直す」

南部真喜子(東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程)

コメント 立山良司(防衛大学名誉教授)

使用言語: 日本語

東京大学本郷キャンパス 東洋文化研究所 3 階大会議室

主催: 中東イスラーム研究拠点

共催: 東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」

12 月 16 日(土)

中東イスラーム研究拠点「政治変動研究会」【公開】

村上拓哉(中東調査会)

「湾岸地域における「アラブの春」後の民主化運動の挫折: オマーンの事例を中心に」

コメンテーター 堀抜功二(日本エネルギー経済研究所中東研究センター)

使用言語: 日本語

AA 研 301

主催: 中東イスラーム研究拠点

共催: 東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」

12 月 17 日(日)～22 日(金)

チベット牧畜辞典編集会議

全日編集会議

参加者:星泉(AA 研所員), ナムタルジャ(AA 研共同研究員, 青海民族大学), 海老原志穂(AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー), 別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学)ほか

使用言語:日本語

AA 研 501

共催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 科学研究費(基盤 B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者:星泉(AA 研所員)課題番号:15H03203), 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」

12月17日(日)~23日(土)

第4回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」

本ワークショップは, 消滅の危機に瀕する少数言語の包括的記録を目的とした言語ドキュメンテーション研究を活性化するために, 危機言語の調査・記録研究に関心がありこれから研究テーマとして長期的に携わっていく意志のある大学生, 大学院生を対象にフィールド調査の実地研修を行うものである。約1週間にわたるワークショップでは, 沖縄県宮古島の池間地域において, 主として宮古・池間方言を対象として, 話者コミュニティの中で実際に聞き取り調査を行なった。具体的活動は以下の通り。

- ・話者やコミュニティとの関係構築のストラテジー
- ・多様な言語資料の収集
- ・言語資料の処理と整理
- ・社会的・文化的情報の収集
- ・コミュニティのニーズに応えるプロジェクトの開発

使用言語:日本語

沖縄県宮古島市池間島・池間公民館ほか

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

2018年

1月18日(木)

全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」第2回
合同研究集会【公開】

14:00-14:05. 飯塚正人(AA 研所員) 趣旨説明

14:05-15:35. 【各分野報告】

14:05-14:35. 山越康裕(AA 研所員) 「話者コミュニティに何をどう還すか」

14:35-15:05. 外川昌彦(AA 研所員) 「バングラデシュの独立戦争とセキュラリズム憲法の成立」

15:05-15:35. 近藤信彰(AA 研所員) 「中東における言語／民族集団と分極化—イラン史研究の視点から」

15:50-16:30. 【質疑応答・討論】

使用言語: 日本語

AA 研 304

主催: AA 研

1月20日(土)

フィールドネット・ラウンジ「草の根から地域住民が生み出す「食」と「農」の空間 – どうやって見つけ、調べるか？」

プログラム

13:00–13:05. 開会の辞: 吉田 ゆか子 (AA 研)

13:05–13:10. 挨拶, 趣旨説明: 新保 奈穂美 (筑波大学生命環境系)

13:10–13:40. 話題提供1「アジアで土地と食の関係性をひもとく」

土屋 一彬 (東京大学大学院農学生命科学研究科)

13:40–14:10. 話題提供2「計画と邂逅—隙間や境界域の探検から学んだ教訓」

ルプレヒトクリストフ (総合地球環境学研究所・FEAST プロジェクト)

14:10–14:30. コーヒーブレイク

14:30–15:00. 話題提供3「被災地発信の〈生きがいとしての農業〉—『復興支援』から地域社会へ」

望月 美希 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)

15:00–15:30. 話題提供4「都市における新しい『食』空間のカタチ」

飯田 晶子 (東京大学大学院工学系研究科)

15:30–15:50. コーヒーブレイク

15:50–16:50. 大学院生・実務者ディスカッション

<ファシリテーター> 太田 和彦 (総合地球環境学研究所)

<参加者>

坂本 優紀 (筑波大学大学院生命環境科学研究科)

別所 あかね (東京大学大学院サステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム)

岡根 谷実里 (クックパッド株式会社)

16:50–17:00. コメント・まとめ・閉会挨拶: 新保 奈穂美

使用言語: 日本語

AA 研 304

主催: アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センター(FSC)

1月20日(土)~21日(日)

第10回オスマン文書セミナー【公開】

1月20日

14:00–14:15. 趣旨説明 講師・自己紹介

14:20–16:00. オスマン朝の帳簿とスィヤーカト書体の解説

16:20–18:00. 帳簿の講読1

1月21日

13:00-14:40. 帳簿の講読2

15:00-16:40. 帳簿の講読3

17:00-18:00. 総合討論

使用言語: 日本語

AA 研 303

共催: AA 研, 基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」, AA 研共同
利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」, 科研費基盤 B「イスラーム圏に
おける簿記史料の通時的・共時的的研究」(代表者: 高松洋一(AA 研所員), 課題番号:
17H02398)

1月25日(木)

フィールド言語学ワークショップ: 第12回文法研究ワークショップ: 「場所」を項とする動詞

13:30-14:30. 阿部優子(AA 研共同研究員, 東京女子大学) 「場所を項とするスワヒリ語動詞」

14:30-15:30. 岡本進(東京外国語大学大学院博士後期課程) 「フィジー語の他動詞目的語に現れる名
詞句の意味役割: 「場所」を中心に」

15:50-16:50. 小林美紀(国立アイヌ民族博物館設立準備室) 「場所を項とするアイヌ語動詞」

16:50-17:30. 全体討論

使用言語: 日本語

AA 研 304

主催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

2月2日(金)~4日(日)

言語研修チャム語フォローアップミーティング【公開】

2月2日

1. 09:00-10:30. サカヤー(ベトナム・ホーチミンシティー国家大学人文社会科学大学), 新江利彦(静岡大
学) 「文法総復習」

2. 10:45-12:15. Ikuyo YOSHIDA(言語研修受講生) 「古伝承テキスト (1)」

3. 13:30-15:00. サカヤー, 新江利彦 「チャムの歌と踊り (1)」

4. 15:45-17:15. サカヤー, 新江利彦 「ジャウイー文字 (1)」

2月3日

1. 09:00-10:30. サカヤー, 新江利彦 「古伝承テキスト (2)」

2. 10:45-12:15. プーティーフン(チャム語ネイティブ講師), 新江利彦 「男言葉, 女言葉 (1)」

3. 13:30-15:00. プーティーフン, サカヤー 「チャムの歌と踊り (2)」

4. 15:45-17:15. 新江利彦 「ジャウイー文字 (2)」

2月4日

1. 09:00-10:30. サカヤー, 新江利彦 「古伝承テキスト (3)」

2. 10:45–12:15. プーティーフォン, 新江利彦「男言葉, 女言葉 (2)」
3. 13:30–15:00. プーティーフォン, サカヤ「チャムの歌と踊り (3)」
4. 15:45–17:15. 新江利彦「ジャウィー文字 (3)」

使用言語: 日本語

AA 研 304

主催: AA 研

2月15日(木)

IRC 設立 20 周年記念セミナー「人文情報学の現在」【公開】

14:00–15:30 永崎研宣(人文情報学研究所)

「デジタル化文化資料共有の基盤としての TEI」

15:40–17:10 北本朝展(人文学オープンデータ共同利用センター/国立情報学研究所)

「情報学と人文学の出会い～デジタル・シルクロードから人文学オープンデータ共同利用センターへ～」

17:20–18:00 人文情報学クリニック

使用言語: 日本語

AA 研 304

主催: 情報資源利用研究センター (IRC)

2月16日(金)

フィールドサイエンス・コロキウム 2017 年度第 2 回ワークショップ「フィールドワークをフィールドワークする」

15:00–15:50 <報告者 1> 松浦 直毅(静岡県立大学国際関係学部)【要旨】

「長期研究プロジェクトにおける／に関する／を通じた研究と実践

ーアフリカの類人猿調査地における人類学的フィールドワーク」

16:00–16:50 <報告者 2> 森下 翔(日本学術振興会特別研究員 (PD) / 大阪大学人間科学研究科)

【要旨】

「地球科学者と地球の関係, 文化人類学者と文化の関係」

17:00–17:10 <コメント> 木村 大治(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)

17:10–18:00 全体討論

主催 アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センター(FSC)

共催 AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求ー人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」

使用言語: 日本語

AA 研 306

主催: アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センター(FSC)

共催: AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求ー人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関 2」

2月17日(土)

交歓と境界——東ユーラシア, モンゴルとテュルクにおける宴会・酒・ことばをめぐって【公開】

12:50. 寺尾萌(首都大学東京大学院) 趣旨説明

13:00. セッション1 現代モンゴル・テュルクの宴

寺尾萌(首都大学東京大学院) 「モンゴルの宴と交歓:婚姻儀礼における両家訪問を事例に」

吉田世津子(四国学院大学) 「『新しい時代』の宴:クルグズスタン・結婚披露宴に見る世代と変化」

14:10. セッション2 宴にみえる文化的境界

伊賀上菜穂(中央大学) 「ブリヤート共和国ロシア人古儀式派教徒の追善供養と酒」

阿部朋恒(首都大学東京大学院) 「中国雲南省のハニ族における儀礼と食の変容」

15:20. セッション3 会話と境界

中村瑞希(筑波大学大学院) 「日常と非日常をへだてる言語:ウズベク人社会における二言語使用を事例に」

堀田あゆみ(日本学術振興会特別研究員) 「“歓待”の舞台装置としてのゲル:モンゴル遊牧社会における他家訪問の事例から」

16:30. 風戸真理(北星学園大学短期大学部), 桜間瑛(日本学術振興会特別研究員), 三浦哲也(育英短期大学) コメント

17:30. 総合討論

18:30. 閉会の辞

使用言語:日本語

AA 研 303

共催:AA 研, 地域研究コンソーシアム

2月24日(土)

文法と言語使用における定型表現の位置づけ【公開】

13:30-13:50. 土屋智行(九州大学) 「定型表現の記憶と産出, 再考:話しことばデータを例に」

13:50-14:10. 柴崎礼士郎(明治大学) 「述部から創発する独立型表現に関する予備的研究—近現代日本語の「道理で」を事例として—」

14:10-14:30. 横森大輔(九州大学) 「名詞修飾節中断構文による相互行為プラクティス」

14:30-15:30. ディスカッション1

15:30-15:50. 堀内ふみ野(慶應義塾大学大学院) 「英語の親子会話に見られる定型性と「語」の習得」

15:50-16:10. 大野剛(アルバータ大学)・鈴木亮子(慶應義塾大学) 「インターネット電話での日程調整のやりとりに見られる定型表現」

16:10-16:30. 中山俊秀(AA 研所員) 「形式と意味の動的結びつきの場としての定型表現」

16:30-17:30. ディスカッション2

17:30-18:00. ディスカッサント高梨博子(日本女子大学) 全体討論

使用言語:日本語

AA 研 304

主催:科学研究費(基盤 B)「日常の相互行為における定型性:話し言葉を基盤とした言語構造モデルの構築」(代表者:鈴木亮子(慶応義塾大学), 課題番号:17KT0061)

3月8日(木)

AA 研フォーラム【公開】

退職所員記念講演

14:00-16:00. 陶安あんど(AA 研所員)「文書(もんじょ)行政」と「文書(ぶんじょ)行政」——中国古代文書簡牘研究を通じてみた日本古文書学の文化的特異性について」

16:15-18:15. 芝野耕司(AA 研所員)「文法害毒論」

使用言語:日本語

AA 研 304

主催:AA 研

3月10日(土)

日本文化人類学会関東地区研究懇談会「『日本人を演じる』の衝撃—美術家の問い, 人類学者の応答」【公開】

14:00-14:15. 田沼幸子(首都大学東京)「趣旨説明」

14:15-15:45. 藤井光(美術家・映画監督)「人種神話と映像表象—『日本人を演じる』の試みから」

16:00-16:40. 西井涼子(AA 研所員)・小田亮(首都大学東京) コメント

16:40-17:30. 質疑応答

使用言語:日本語

AA 研 304

共催:日本文化人類学会関東地区研究懇談会, 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるミクロー・マクロ系の連関2」

3月16日(金)

フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「フィールドノート(1):調査目的に応じたノートの工夫②」

主な内容:今回「調査目的に応じたフィールドノートの工夫」をテーマにワークショップをおこなった。参加者とフィールドノートのアイデアや悩みを共有し, それぞれにとってよりよいノート術を見つける場を作ることを目指した。

企画・進行:青井隼人(AA 研特任研究員)

話題提供者:中川奈津子(AA 研共同研究員, 日本学術振興会特別研究員・千葉大学)

使用言語:日本語

AA 研 304

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

3月25日(日)

シンポジウム「情動と知性」【公開】

10:10-10:20. 挨拶

10:20-11:50. 久保明教(一橋大学)「怖がらない機械——現代将棋における定跡と情動」

13:00-14:30. 黒田末寿(滋賀県立大学)「情動の社会的回路の進化」

14:40-16:10. 内海健(東京藝術大学)「精神医学からみた情動と知性」

16:20-16:40. 小田亮(名古屋工業大学)

16:40-17:00. 箭内匡(東京大学)

17:00-18:30. ディスカッション

使用言語:日本語

北海道大学学術交流会館第三会議室

共催:科学研究費補助金(基盤 A)「人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に」(代表者:西井 凉子(AA 研所員)課題番号:17H00948),「メディアと社会のエスノグラフィ—メディア人類学の基盤研究」(平成29年度 メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金), 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関 2」

3月27日(火)

『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)リリース記念イベント(昼の部・AA 研)

15:00-15:10. 星泉(AA 研所員) 開会挨拶

15:10-15:20. 別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学) プロジェクト紹介

15:20-15:30. 海老原志穂(AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー) 調査地紹介

15:30-15:50. 星泉(AA 研所員) 辞典紹介(iOS 版・オンライン版・PDF 版)とiOS 版デモ

15:50-16:20. 平田昌弘(AA 研共同研究員, 帯広畜産大学), 海老原志穂(AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー), 別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学), 小川龍之介(研究協力者, 帯広畜産大学), 岩田啓介(AA 研共同研究員, 日本学術振興会), 山口哲由(研究協力者)「私の好きな辞典項目」

16:20-16:30. Q&A

使用言語:日本語

AA 研 304

共催:共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 科学研究費(基盤 B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者:星泉(AA 研所員)課題番号:15H03203)

3月27日(火)

『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)リリース記念イベント(夜の部・タシデレ)

19:00-19:10. 星泉(AA 研所員) 開会挨拶

19:10-19:20. 別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学) プロジェクト紹介

19:20-19:30. 海老原志穂(AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー) 調査地紹介

19:30-19:50. 星泉(AA 研所員) 辞典紹介(iOS版・オンライン版・PDF版)とiOS版デモ

19:50-20:20. 平田昌弘(AA 研共同研究員, 帯広畜産大学), 海老原志穂(AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー), 別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学), 小川龍之介(研究協力者, 帯広畜産大学), 岩田啓介(AA 研共同研究員, 日本学術振興会), 山口哲由(研究協力者)「私の好きな辞典項目」

20:20-20:30. Q&A

使用言語: 日本語

タシデレ チベットレストラン&カフェ

共催: 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 科学研究費(基盤 B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者: 星泉(AA 研所員) 課題番号: 15H03203

3月27日(火)・28日(水)

『チベット牧畜文化辞典』パイロット版公開記念ワークショップ「『チベット牧畜文化辞典』の未来を語る」/ 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」第3回研究会

3月27日(火)

13:00-14:30. (非公開) 全員 打ち合わせ

15:00-16:30. (公開) 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版) リリース記念イベント(上記参照)

19:00-20:30. (公開) 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版) リリース記念イベント(上記参照)

3月28日(水)

10:00-12:00. (非公開) 全員 打ち合わせ

13:00-17:00. (公開)

『チベット牧畜文化辞典』パイロット版公開記念ワークショップ「『チベット牧畜文化辞典』の未来を語る」

13:00-13:10. 開会挨拶

星泉(AA 研所員)

13:10-14:20. 辞典への新たな視点

13:10-13:30. 別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学)

13:30-13:50. 平田昌弘(AA 研共同研究員, 帯広畜産大学)

13:50-14:20. 小野田俊蔵(佛教大学)

14:20-14:40. 辞典の研究への応用

海老原志穂(AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー)

15:00-16:00. 研究の現地還元

山越康裕(AA 研所員)・児倉徳和(AA 研所員)アプリ開発

司会:星泉(AA 研所員)チベット人留学生との対話

16:00-17:00. パネル・ディスカッション「辞典をより豊かなものにするために〜」

司会:別所裕介(AA 研共同研究員, 駒澤大学)

ゲスト:町田和彦(AA 研共同研究員, 東京外国語大学名誉教授)

コメンテーター:加納和雄(駒澤大学), 岩田啓介(AA 研共同研究員, 日本学術振興会/東京外国語大学), 津曲真一(AA 研共同研究員, 東京理科大学), 小川龍之介(研究協力者, 帯広畜産大学)

使用言語:日本語

AA 研 304

共催:AA 研共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容〜ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて〜」, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 科学研究費(基盤 B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者:星泉(AA 研所員), 課題番号:15H03203)

3月29日(木)

「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」研究員発表会【公開】

竹村和朗(日本学術振興会特別研究員(PD))「現代ワクフ研究における司法について:『終了した家族ワクフ』をめぐる家族争議に関するエジプト最高憲法裁判所の判決から」

岩本佳子(日本学術振興会特別研究員(PD))「『定住化』再考:近世オスマン朝における遊牧民と国家」

使用言語:日本語

AA 研 306

主催:基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」

II-4.3 国際連携研究活動

II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧

4月4日(火)

ジョセフ・ケシェシアン氏公開講演会「ドナルド・トランプと中東」

プログラム

ジョセフ・ケシェシアン氏(Dr. Joseph A. Kéchichian)

(ファイサル国王研究センター/ The King Faisal Center for Research and Islamic Studies)

「ドナルド・トランプと中東 (Donald Trump and the Middle East)」

司会

保坂修司氏 (日本エネルギー経済研究所研究理事)

使用言語: 英語 日本語同時通訳

一橋講堂中会議室 4

共催: 一般財団法人日本エネルギー経済研究所中東研究センター, 中東イスラーム研究拠点

5月25日(木)~27日(土)

Documentary Linguistics – Asian Perspectives 2 (DLAP 2) 【公開】

May 25 (THU) DAY 1 : DLAP-2 WORKSHOPS

Workshop 1: Sustainable revitalisation

Michel DeGraff (Massachusetts Institute of Technology) “The sustainable (re)vitalization of local languages is indispensable for education, development and social justice: The MIT-Haiti Initiative as case study”

Workshop 2: Doing ethnography

Peter Austin (SOAS/HKU) & Kara Fleming (HKU) “Doing ethnography”

Workshop 3: Documenting children’s language

Evan Kidd (Australian National University) “Widening the contexts of language acquisition”

May 26 (FRI) DAY 2: DLAP-2 CONFERENCE

Keynote lecture

Stefanie Pillai (University of Malaya) “Engaging communities in language documentation and revitalisation efforts”

Documentary linguistics in the Indonesian archipelago

Anthony Jukes (La Trobe University), Asako Shiohara (AA 研所員) and Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia) “Training for documenting minority languages in and around Indonesia”

Timothy Brickell (Melbourne University) “Documentary linguistics in the Minahasa region of North Sulawesi”

Jozina Vander Klok (University of British Columbia) “Through the lens of documentary linguistics: Perspectives on endangerment in an East Java village”

Technology and documentation

Nala H Lee and Miguel Escobar (National University of Singapore) “Transforming documentation in the Contemporary Wayang Archive”

Gregory DS Anderson and Bikram Jora (Living Tongues Institute for Endangered Languages) “Talking dictionaries for ‘tribal’ languages of Arunachal Pradesh, Jharkhand and Odisha”

Pedro Lok (Tung Wah College) and Nick Wong (HK University of Science and Technology) “‘Like our page, you have say’. Documentation of Hong Kong English through an online news page”

Structural dimensions in documentation

Wilkinson DW Gonzales (National University of Singapore) “Hokaglish: A post-colonial Philippine mixed

language”

Wichamdinbo Mataina (Sikkim University) “Devising Liangmai orthography”

Candide Simard (SOAS, University of London) “Prosody: Broadening perspectives”

May 27 (SAT) DAY 3: DLAP-2 CONFERENCE (cont’d)

Challenges in documentation

Silvio Sousa (University of Graz) “The troubles and tribulations of language documentation and preservation”

Jozsef Szakos (HK Polytechnic University) “Mens sana in corpore sano: Metaphors language documentation lives by”

Yutaka Tomioka (Nanyang Technological University) “Language attitudes as a result of the interplay between linguists and the community”

Community in documentation

Jargal Badagarov and Dugevma Vasilyeva (Buryat State University) “Documentation of the Buryat dialect and its community value”

Vijay D’Souza (Oxford University) “Communities, texts and contexts: Maximising impact through culturally-aware language documentation”

Akiko Yokoyama (Hitotsubashi University) and Masahiro Yamada (National Institute for Japanese Languages and Linguistics) “Cyclic impacts between documentary linguistics and language community: A case study of Erabumuni (Okinoerabu-Ryukyuan) revitalization”

Documentation and revitalization

Moira Saltzman (University of Michigan) “South Korean language policy and Jejueo revitalization”

Yang Huang (Southwest Jiaotong University) “Keeping the nDrapa language alive: Documentation and revitalization”

Kevin M Wong (National University of Singapore) “Palabra di Pasadu: The impact of documentation on the revitalisation of Kristang in Singapore”

使用言語: 英語

香港大学

主催: 香港大学 (Department of Linguistics) (中国)

共催: 香港大学 (School of English) (中国), 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, マヒドン大学 RILCA (タイ), ロンドン大学 SOAS HKU (イギリス), Childhood Bilingualism Research Centre (中国), The Chinese University of Hong Kong-Peking University-University System of Taiwan Joint Research Centre for Language and Human Complexity (JRCLHC) (中国)

5月27日(土)

リンディフォーラム: Questions under Discussion in Austronesian corpus data【一部公開】

Arndt RIESTER (AA 研外国人研究員, University of Stuttgart) “Analyzing the question structure of discourse”, “What QUDs can tell us about the information structure of Sumbawa”

Anja LATROUITE (AA 研共同研究員, Heinrich Heine University Dusseldorf) “Implicit questions under

discussion in the analysis of corpus data”

Hands-on session for QUD annotation

使用言語: 英語

AA 研 301

主催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

6 月 25 日(日)

国際シンポジウム「芸術と障害: アフリカとアジアの事例をめぐって」【公開】

13:00–13:10. Opening

13:10–13:50. Kojiro HIROSE (National Museum of Ethnology) HANDS OF A GOZE (blind female musician): the Tactile Culture of Visually-impaired People in Modern Japan.

13:50–14:00. Q&A

14:10–14:50. Yukako YOSHIDA (ILCAA) Imperfect Bodies and Comedy in Balinese Theater.

14:50–15:00. Q&A

15:10–15:50. Aggée Celestin Lomo Myazhiom (ILCAA Visiting Professor) 7th Art and Disability in Sub-Saharan Africa: Staging of Altered Bodies and Process of Normalization.

15:50–16:00. Q&A

16:10–16:30. Mikako TODA (National Museum of Ethnology) Comments

16:30–17:30. Discussion

使用言語: 英語

AA 研 304

共催: 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」, 科学研究費補助金(基盤 A)「人類学的フィールドワークを通じた情報研究の新展開: 危機を中心に」(研究代表者: 西井涼子(AA 研所員) 課題番号: 17H00948)

7 月 2 日(日)

NIHU「パレスチナ占領 50 年」企画連続国際シンポジウム<東京>「第三次中東戦争から 50 年——占領がもたらした影響」【公開】

プログラム:

講演 1 アヴィ・シュライム(Dr. Avi Shlaim)(オックスフォード大学名誉教授, イギリス学士院フェロー (FBA))

「イスラエルにとってのパレスチナ占領——1967 年から 2017 年の変化」

講演 2 ハリール・ナハレ(Dr. Khalil Nakhleh)「パレスチナにとって占領されることの意味」

使用言語: 英語

東京大学本郷キャンパス福武ラーニングシアター

主催: 中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業)

7月5日(水)

NIHU「パレスチナ占領 50 年」企画連続国際シンポジウム<大阪>「「中東和平」は何処へ?——パレスチナ社会の再建に向けて」【公開】

プログラム

18:30-21:20

ハリール・ナハレ氏(Dr. Khalil Nakhleh)

「中東和平」は何処へ?——パレスチナ社会の再建に向けて」

使用言語:英語 日本語同時通訳

大阪ドーンセンター4階 大会議室1

主催:パレスチナの平和を考える会

共催:パレスチナの平和を考える会, 中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業), 関西パレスチナ研究会

7月6日(木)

NIHU「パレスチナ占領 50 年」企画連続国際シンポジウム<京都>「パレスチナ占領はイスラエル社会に何をもたらしたか」【公開】

プログラム

18:30-21:00

アヴィ・シュライム氏(Dr. Avi Shlaim)

「パレスチナ占領はイスラエル社会に何をもたらしたか」

使用言語:英語 日本語同時通訳

京都大学吉田南キャンパス総合館 南棟地下 共南01教室

主催:京都大学大学院 人間・環境学研究科 岡真理研究室

共催:京都大学大学院 人間・環境学研究科 岡真理研究室, 中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業)

7月9日(木)

NIHU「パレスチナ占領 50 年」企画連続国際シンポジウム<広島>「2017 年[バルフォア宣言 100 年, 占領 50 年]に, パレスチナ/イスラエルの過去と現在を考える」【公開】

講演 1 『英国とパレスチナ:バルフォア宣言から現在まで』

("Britain and Palestine: From Balfour to the Present")

アヴィ・シュライム氏(Dr. Avi Shlaim)

講演 2 『個人目線から語る占領:進行する土地支配』

("My Personal Narrative of Occupation: The Ongoing Control of the Land")

ハリール・ナハレ氏(Dr. Khalil Nakhleh)

使用言語:英語 日本語同時通訳

広島市 「ひと・まちプラザ」マルチメディアスタジオ

主催:中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業)

共催:広島-中東ネットワーク, 科学研究費(基盤 B)「中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民/難民の移動に関する研究」(代表者:錦田愛子(AA 研所員), 課題番号:17H04504)

8月11日(金)~8月17日(木)

サバ州の言語に関する共同研究ワークショップ【公開】

サバ州で話されている言語(ドゥスン及びマレー語変種)を調査し, 成果を共有するためのワークショップで日本とマレーシアから言語学者が集まり, 現地者の協力を得て行われた。

参加者:

塩原朝子(AA 研所員)

野元裕樹(東京外国語大学)

三宅良美(秋田大学)

Kartini Abd. Wahab(マレーシア国民大学)

母語話者コンサルタント:

Mohd Izzuddin Fitri Bin Abd Aziz(ブルネイ・マレー語)

Reo Richie H Bating(ドゥスン語)

使用言語:英語, マレー語

サンセット & シービュー バケーション コンド シティセンター, 調査協力者宅

共催:基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」, 科学研究費(若手 B)「数の仕組みとその文法・情報構造との関連の通言語的研究」(代表者:野元裕樹(東京外国語大学), 課題番号:26770135), 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

8月19日(土)

国際シンポジウム「アフリカにおける芸術と情動」【公開】

0. 佐久間寛(AA 研所員) 趣旨説明

1. 個別発表

ロジェ・ソメ(ストラスブール大学) 「アフリカにおける作品の創造, 情動, 受容 (Création, émotion et réception des œuvres en Afrique)」

柳沢史明(東京大学) 「『情動的感性性』—ロジャー・フライのフォーマリズムからサンゴールのヒューマニズムへ(«Sensibilité émotive»: Du formalisme de Fry au Humanisme de Senghor)」

ブルース・クラーク(画家, 写真家) 「亡霊との闘い:アフリカにおける視覚芸術と現代史 (Se battre contre les fantômes: arts visuels et histoire contemporaine en Afrique)」

2. コメント

岡崎彰(AA 研フェロー)

中谷和人(京都大学)

3. 全体討議

使用言語:フランス語(日本語への逐次通訳あり),日本語,英語

AA 研 301

共催:基幹研究人類学「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」,科学研究費補助金(基盤 A)「人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開:危機を中心に」(研究代表者:西井涼子(AA 研所員)課題番号:17H00948),科学研究費補助金(基盤 B)「世界文化(資本)空間の史的編成をめぐる総合的研究:アフリカ・カリブの文学を中心に」(研究代表者:星埜守之(東京大学)課題番号:17H02328)

8月22日(火)~8月24日(木)

国際シンポジウム『プレザンス・アフリケーヌ』研究——超域的黒人文化運動の歴史,記憶,現在/共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」第7回研究会【公開】

・8月22日 10:30-17:00

開会の辞と基調講演

1. ロミュアルド・フォンクア(パリ第4大学,『プレザンス・アフリケーヌ』誌編集長)「『プレザンス・アフリケーヌ』:理念の歴史,行動する思想」

第1部:群像

2. 立花英裕(早稲田大学)「アリウヌ・ディオップとエメ・セゼール」

3. ファティマ・ドゥムビア(フェリックス・ウフェ・ボワニ大学)「クワメ・ンクルマ:いまなお現前する一個のアフリカ」

4. シェイク・チャム(オハイオ州立大学)「アフリカ中心的ネグリチュード:21世紀において近代性に対するサンゴールとグリッサンの対抗文化論を再考する」

5. ジョルジュ・ベルトラン(独立研究者,フランス)「マルセル・グリオール,曖昧なアフリカ性:20世紀を生きる1人の男の思考の変遷」

6. モニカ・ブロドニカ(オハイオ州立大学)「アマドゥ・ハンパテ・バと在来形而上学への呼びかけ」

7. 懇親会(事前予約者のみ 18:00~)

・8月23日 10:00-17:30

第2部:言語と文学

1. 中村隆之(AA 研共同研究員,大東文化大学)「文学,言語,政治:『国民詩』論争をめぐる争点」

2. 廣田郷士(パリ第8大学博士課程)「脱植民地化への未完の対話:『プレザンス・アフリケーヌ』におけるエメ・セゼール/エドゥアール・グリッサン」

3. サリー・ステニエ(アンティエユ大学博士課程)「Lang a pep-la kont lang a met-la?:教育表象におけるグアドループ的言語問題の反響」

4. ジョサナ・ナラシマン(ムンバイ大学博士課程)「『プレザンス・アフリケーヌ』における女性の著述:ファトゥ・ジョムの思想革命」

5. 松井裕史(金城学院大学)「私とはわれわれという他者である:ジョゼフ・ズベル『黒人小屋通り』」

第3部:芸術,メディア,受容

6. ロジェ・ソメ(ストラスブール大学)「『プレザンス・アフリケーヌ』における黒人芸術 vs アフリカ芸術」
7. ブアタ・マレラ (マヨット大学)「雑誌空間における『プレザンス・アフリケーヌ』」
8. オベッド・ンクンズィマナ(ニュー・ブランズウィック大学)「古傷を再考／治療(ルボンセ)する:映画『アダンガマン』と『アフランス』における奴隷制と植民地化のポスト植民地的再読」
9. ウジェーヌ・タヴァレス(アッサン・セック大学)「『プレザンス・アフリケーヌ』とポルトガル語圏アフリカにおける意識覚醒のプロセス:カーボヴェルデの場合」
10. フランソワーズ・ノディオン(コンコルディア大学)「アフリカの現前(プレザンス)か不在(アブザンス)か:1958年から1980年にかけてのル・モンド・ディプロマティークにおける『プレザンス・アフリケーヌ』誌の受容」

・8月24日 10:00-17:00

第4部:政治思想

1. 小川了(AA 研共同研究員, 東京外国語大学名誉教授)「Hosties Noires に至る道:B. ジャーニュ, W.E.B. デュボイス から L. セダール・サンゴール へ」
2. 中尾沙季子(EHESS 博士課程)「パン・アフリカニズムかナショナリズムか:脱植民地期における文化政策形成の場としての『プレザンス・アフリケーヌ』」
3. ジョナス・ラノ(ロレーヌ大学)「クレオリチュードとイデオロギー的奴隷逃亡:レオン・ゴントラン・ダマスをめぐる」
4. アンヌ・ピリウ(アフリカ-世界学際ネットワーク会員)「1950年代フランス語圏における民族主義的知識人形成の回顧:場, 時, 人」
5. イブラヒム・ヤハヤ(アブドゥ・ムムニ大学)「『プレザンス・アフリケーヌ』:継続する闘争」
6. 総合討論と閉会の辞

使用言語:フランス語, 英語, 日本語

東京外国語大学アゴラ・グローバル, プロメテウス・ホール

共催:AA 研共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究——新たな政治=文化学のために」, 科研費基盤研究(B)「世界文化(資本)空間の史的編成をめぐる総合的研究:アフリカ・カリブの文学を中心に」(研究代表者:星埜守之(東京大学), 課題番号:17H02328), 挑戦的研究(萌芽)「人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレザンス・アフリケーヌ』の複合的研究」(研究代表者:佐久間寛, 課題番号:17K18480), AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」

後援:(株)サイマル・インターナショナル 東京外国語大学アゴラ・グローバル, プロメテウス・ホール

9月2日(土)

邦人向け公開講演会「フィリピンのイスラームを知る—歴史的背景からミンダナオ紛争の現状, 生活文化まで」【公開】

15:00-17:30. 司会:鈴木伸隆(筑波大学)

講演 1. 床呂郁哉(AA 研所員)「フィリピンのイスラームとムスリム社会を知る:その歴史からミンダナオ紛争まで」

講演 2. 森正美(京都文教大学)「フィリピン・ムスリムの生活文化に触れる」

使用言語:英語

JICA フィリピン事務所オーデトリウム

主催:AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)

協力:JICA フィリピン事務所, まにら新聞, PRA 日本人倶楽部

9月18日(月)~22日(金)

言語ドキュメンテーションセミナー(Language Documentation Seminar)

言語ドキュメンテーションに関するセミナーの開催(講義, 録音, 録画, ソフトウェアの実習, フィールド調査の実習)

講師:呉人徳司(AA 研所員), Zhargal Badagarov(ブリヤート国立大学)(ロシア)

コーディネーター:Lyudmila Sofronovna(北東連邦大学)

使用言語:ロシア語, 英語

北東連邦大学(ロシア)

共催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 北東連邦大学(ロシア)

9月24日(日)

東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する国際ワークショップ／共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)―紛争と共存のダイナミクス」第2回研究会

1. 14:30-14:40. Ikuya TOKORO (ILCAA) Opening Remarks
2. 14:40-15:20. Ryoko NISHII (ILCAA) “Converts and death: Muslim-Buddhist relations in a southern Thai village”
3. 15:20-16:00. Ahmad Najib Burhani (ILCAA Joint Researcher, Indonesian Institute of Science) “Force and Discourse: Justifying and Performing Violence towards Ahmadiyah in Indonesia”
4. 16:10-16:50. Shamsul A. B. (ILCAA Joint Researcher, Universiti Kebangsaan Malaysia) “‘Islamisation of Malaysia’ or ‘Modernisation of Islam in Malaysia’: Conflict and Coexistence, an exploratory reflection based on the case of Al-Arqam”
5. 16:50-17:55. Discussion
6. 17:55-18:00. Hisao TOMIZAWA (ILCAA Joint Researcher, University of Shizuoka) Closing Remarks
7. 18:00-20:00. Reception Meeting

使用言語:英語

Hotel Meridien Kota Kinabalu (Jalan Tun Fuad Stephens, Kota Kinabalu, Malaysia)

共催:基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究―人類学におけるミクローマクロ系の連関2」, AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス

10月4日(水)

国際セミナー「言語ドキュメンテーションのために知っておくべきこと」(International Seminar: Language Documentation: What do we need to know?)【公開】

June Jacob (Artha Wacana Christian University, Kupang) “What is Language documentation?”

Antonia Soriente (AA 研共同研究員, University of Naples “L’ Orientale”) “Data Collection: What and How?”

Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia) “Ethics in Language Documentation”

Jermy Balukh (STIBA Cakrawala Nusantara Kupang) “Orthography”

Nazarudin (University of Indonesia) “Making Recordings”

使用言語: 英語, インドネシア語

クーパン アーサ ワチャナ カトリック大学(インドネシア)

共催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, Atma Jaya Catholic University of Indonesia, クーパン アーサ ワチャナ カトリック大学(インドネシア)

10月5日(木)~6日(金)

国際ワークショップ「インドネシア NTT 州の言語のドキュメンテーション」(International Workshop: Documenting Languages of Nusa Tenggara Timur)【公開】

10月5日(木)

Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia), 塩原朝子(AA 研所員) “Managing data”

Nazarudin (University of Indonesia), Antonia Soriente (AA 研共同研究員, University of Naples “L’ Orientale”) “Practice (1): Making recordings and Producing Metadata”

Nazarudin (University of Indonesia), Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia) “Evaluation of Practice (1)”

Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia) “Software and tools”

Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia) “Installing software”

Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia), 塩原朝子(AA 研所員) “Practice (2): ELAN: Part 1”

10月6日(金)

Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia), 塩原朝子(AA 研所員) “Evaluation of Practice (2)”

Jermy Balukh (STIBA Cakrawala Nusantara Kupang) “Toolbox and Practice (3): Toolbox”

Nazarudin (University of Indonesia) “Flex and Practice (4): Flex”

Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia), 塩原朝子(AA 研所員) “Closing and reflection”

使用言語: 英語, インドネシア語

Restoran Palapa, Kupang (インドネシア)

共催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, Atma Jaya

10月7日(土)

日印関係における仏教【公開】

Workshop Buddhism in shaping India-Japan Relations

Speaker1. Madhumita Chattopadhyay (Professor of Jadvpur University, Kolkata, India) Revival of Buddhism:
The Ramakrishna Order: Japan

Speaker2. Kuniko HIRANO (Visiting Fellow, Institute of Asian Cultures, Sophia University, Japan)
Vivekananda and Japanese Buddhists

Discussant. Ryojyun SATO (Emeritus Professor of Taisho University, Japan)

Chair. Masahiko TOGAWA (ILCAA)

使用言語: 英語

東京外国語大学研究講義棟 104 号室

主催: AA 研・日本学術振興会 二国間交流事業(インド ICHR)

10月24日(火)

リンディフォーラム: 北方言語研究講演会【公開】

Ekaterina Gruzdeva (University of Helsinki, General Linguistics) “An interplay of lexical and grammatical
aspect in Nivkh”

Juha Janhunen (University of Helsinki, Altaic Studies) “Internal reconstruction as a tool for understanding
the prehistory of the Ainu language”

使用言語: 英語

AA 研 304

基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

11月4日(土)～5日(日)

急速に発展／変化をとげるアジア・アフリカ諸社会における経済格差, 都市化, そして紛争経験後に直
面する家族の変容【公開】

11月4日(土)

13:00 開会

13:05-13:35 大平和希子(日本学術振興会／東京大学大学院博士課程)「ブニョロの石油開発と世帯レ
ベルへの影響: 土地をめぐる争いの増加と土地ガバナンスの重要性」

13:40-14:10 村橋勲(日本学術振興会/京都大学)「南スーダン難民における『家族』の再編と生計の多様
化—ウガンダのキリヤンドンゴ難民居住地の事例から」

14:20-14:50 休憩

14:50-15:20 橋本栄莉(高千穂大学)「脆弱な『血』に対処する方法: ウガンダにおけるヌエル人難民の家

族と結婚をめぐるジレンマ」

15:30-16:00 クリス・オペセン(マケレレ大学)「『ポコットの男は国境の両側に一人か二人の妻をもつ』:ケニア・ウガンダ国境におけるポコット人の一夫多妻家族にかんする民族誌的言説」

16:10-16:40 白石壮一郎(弘前大学)「移住, 教育, 家族関係/ギャップ:家族の断片:1960年代~1990年代のウガンダとケニアの国境地帯の歴史」

16:50-17:20 波佐間逸博(長崎大学)「祖母との生活—ドス社会の世代間関係」

17:30-18:00 ディスカッション

コメント:

ンデグワ・ムンディア(デダン・キマティ技術大学)

カルシガリラ イアン(東京外国語大学大学院博士課程)

11月5日(日) アフリカ都市、アジアにおける変化する居住環境と「家族」の暮らし

9:30-10:00 ンデグワ・ムンディア(デダン・キマティ技術大学)「経済格差、都市化に直面したナイロビの開発に関する分析」

10:10-10:40 井本佐保里(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻・復興デザイン研究体)「ナイロビスラムにおけるノンフォーマルスクールの空間生成プロセス」

10:40-10:50 休憩

10:50-11:20 イマヌエル カマラ ゴンベ(東京情報大学, 地球・自然環境コース, M2), ユニス ンドゥアティ(千葉大学理学部地球科学科, D2)「ダルエスサラームにおける都市化の動向と影響に関する GIS とリモートセンシング評価」

11:30-12:00 ユニス ンドゥアティ(千葉大学理学部地球科学科, D2)「日本の作付制度のマッピングとモニタリングに GIS とリモートセンシングを応用した提示位置からみえること」

13:10-13:40 楊非凡(東京農工大学大学院), 聶海松(東京農工大学)「中国の人口問題:1900人の社会学的調査に基いて」

13:50-14:20 ディック・オランゴ(AOAD<ATELIER OLANGO ARCHITECTURE/DESIGN>)「ナイロビスラムにおけるトイレの状況、衛生と進行中のイノベーション」

14:50-15:20 野口靖(東京工芸大学)「ナイロビ・スラム住民の居住環境と生き方:コンパクト・ハウス・プロジェクトを通して」

15:30-16:00 椎野若菜(東京外国語大学 AA 研)「ナイロビのハウスガールが支える『家族』事情」

16:10-16:30 質疑応答, ディスカッション

コメント:クリス・オペセン(マケレレ大学)

16:30 閉会

使用言語:英語

AA 研 304

主催:平成 29 年度ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)「女性研究者による国際共同研究」

協力:現代アフリカ地域研究センター, 後援:AA 研

11月17日(金)

IRC 設立 20 周年記念国際ワークショップ「インド洋レユニオン島の音楽と民話」【公開】

14:00-17:00

- (1) 小田淳一(AA 研)「ワークショップの説明と演者の紹介」
- (2) イザベル・シヨン(語り手) & ジャン＝ピエール・アカパンディエ(語り手・音楽家)「レユニオン音楽「マロヤ」の解説と演奏」
- (3) ジャン＝ピエール・アカパンディエ「マロヤの誕生」(語り)
- (4) イザベル・シヨン「チジャンとおばけカボチャ」(語り)
- (5) 質疑応答

使用言語: 日本語, 英語, レユニオン・クレオール語, フランス語

日本語通訳: 税所萌葉(レユニオン大学大学院博士課程)

AA 研 304

主催: 情報資源利用研究センター (IRC)

共催: 科研費(基盤 B)「インド洋フランス語系クレオール民話の口演の研究」(代表者: 小田淳一(AA 研所員), 課題番号: 16H05671)

11 月 21 日(火)

IRC 設立 20 周年記念国際ワークショップ「話芸の競演: インド洋レユニオン島の民話 VS 古典落語」【公開】

18:30-21:30(18:00 開場)

- (1) 星泉(AA 研)「開会の辞」
- (2) 小田淳一(AA 研)「ワークショップの説明と演者の紹介」
- (3) イザベル・シヨン(語り手) & ジャン＝ピエール・アカパンディエ(語り手・音楽家)「レユニオン音楽「マロヤ」の解説と演奏」
- (4) ジャン＝ピエール・アカパンディエ「マロヤの誕生」(語り)
- (5) 古今亭文菊「親子酒」(落語)
- (6) イザベル・シヨン氏の語り: 「チジャンとおばけカボチャ」(語り)
- (7) 質疑応答

使用言語: 日本語, 英語, レユニオン・クレオール語, フランス語

日本語通訳: 税所萌葉氏(レユニオン大学大学院博士課程)

まめ蔵(吉祥寺)

主催: 情報資源利用研究センター (IRC)

共催: 科研費(基盤 B)「インド洋フランス語系クレオール民話の口演の研究」(代表者: 小田淳一(AA 研所員), 課題番号: 16H05671)

11 月 25 日(土)

第六回日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承—少数言語(ダグル語)を中心に」

包聯群(大分大学)「開会:中国におけるダグル人及び梅リスダグル語の実態」
丁石慶(中国・中央民族大学)「中国におけるダグル語の実態及びその言語保護・継承活動について」
高春梅(中国・チチハル市民族高校, チチハル市ダグル学会会長)「黒龍江省チチハル市におけるダグル人の言語・文化継承に関する近年の活動とその動向について」
多文忠(中国・チチハル市梅リスダグル族区文化体育局)「黒龍江省チチハル市梅リスダグル区におけるダグル人の家庭言語使用現状—特に個人の経験を踏まえてその実態を語る」
栗林均(東北大学名誉教授)「内モンゴル自治区モリンダワ旗のダグル語の特徴」
白音門徳(中国・内蒙古大学)「内モンゴル自治区フフホト市におけるダグル語の使用状況について」
胡艷霞(中国・大連民族大学)「遼寧省大連市における満洲語の継承活動について」
呉人徳司(AA 研所員)「チチハル市梅リスダグル区におけるダグル語の実態調査から見えること」
李林静(成蹊大学)「黒龍江省におけるホジェン語及びその保護・継承実態」
児倉徳和(AA 研所員)「新疆ウイグル自治区におけるシベ語の保護・継承実態」
張鵬(中国・中南財経政法大学)「日本語の屈折形態産出に関する心的メカニズム」
総合討論
使用言語:日本語, 中国語
本郷サテライト
共催:科学研究費補助金・基盤研究(C)「中国黒龍江省における危機に瀕するダグル語の社会言語学的研究」(16K02686・研究代表者:包聯群), 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

11月27日(月)

JaCMES Roundtable "Imagining Resecularization in Iran and Turkey: A Comparative, Historical and Theoretical Inquiry" 【公開】

Aiko Nishikida (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies) "Opening Remarks"

Yasuyuki Matsunaga (Tokyo University of Foreign Studies) "Resecularization in the context of Iran and Turkey: A Conceptual Discussion"

Umut Azak (Okan University) "Resecularization as a Project: A Case of Post-Gezi Turkey"

General Discussion I: Discussant: Gianluca Parolin (Aga Khan University)

Sevgi Adak (Aga Khan University) "Desecularization in a Secular State? Diyanet and the Expansion of the Religious Sphere in Turkey"

Ceren Lord (University of Oxford) "The Evolution of the Ulema and the Prospects for Turkish Secularism"

Naser Ghobadzadeh (Australian Catholic University) "Resecularization in Iran: A Shi'ism Perspective"

General Discussion II by All Panelists

Aiko Nishikida (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies) "Closing Remarks"

使用言語:英語

Japan Center for Middle Eastern Studies (Beirut)

共催:基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」, 新学術領域研究「グローバル関係学」

11月27日(月)

国際ワークショップ “Health and Peace of Palestinians”

プログラム

開催趣旨(13:30-13:40)

講演(13:40-14:10)リタ・ジアカマン(Rita Giacaman), ビルゼイト大学, パレスチナ(Birzeit University, Palestine)

質疑応答(14:10-14:45)

休憩(14:45-15:00)

総合討論(15:00-16:30)

使用言語:英語・通訳なし

東京大学本郷キャンパス東洋文化研究所3階大会議室

主催「慢性紛争下における栄養問題の二重負担:克服の鍵としてのヘルスリテラシー」研究班 JSPS 科研費 16KT0039

共催:中東イスラーム研究拠点, 東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」

11月29日(水)

第11回 日本における中東・イスラーム研究の最前線(※:ベイルート若手研究者報告会)

使用言語:英語

JaCMES (Beirut, Lebanon)

主催:基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」

12月10日(日)

ジョナサン・ブラウン氏公開講演会「預言者の伝承とムスリムの実践」

プログラム

ジョナサン・ブラウン氏(Dr. Jonathan A.C. Brown)

(ジョージタウン大学外交学院准教授・ワリード・ビン・タラール王子ムスリム-キリスト教徒理解センター長
/Associate Professor, Walsh School of Foreign Service/Director, Prince Alwaleed bin Talal
Center for Muslim-Christian Understanding, Georgetown University)

「預言者の伝承とムスリムの実践(Prophetic Traditions and Muslim Practices)」

司会:森山央朗(同志社大学神学部准教授)

使用言語:英語(通訳なし)

同志社大学今出川校地至誠館 S24 教室

共催:中東イスラーム研究拠点, 京都大学イスラーム地域研究センター, 同志社大学神学部

12月17日(日)

国際ワークショップ Utilizing the Prophetic Legacy: Questions of Justice and Authority in the Muslim Societies (預言者の遺産の活用: ムスリム諸社会における正義と権威の諸問題)

プログラム

10:30-10:45 Opening

10:45-11:25 Presentation 1 “Staging the Authenticity: How Medieval Ḥadīth Scholars Used Ḥadīths in Their Literature”

Dr. MORIYAMA Teruaki (Associate Prof., School of Theology, Doshisha University)

11:25-11:45 Q&A

11:45-13:15 Lunch Break

13:15-13:55 Presentation 2 “Campaign against Conjugal Bid‘as in Northern Morocco of the Sixteenth Century”

Dr. SHINODA Tomoaki (JSPS Research Fellow (PD); The University of Tokyo)

13:55-14:15 Q&A

14:15-14:30 Coffee Break

14:30-15:10 Presentation 3 “Dealing with the Tension between Justice and the Sharī‘a”

Dr. Jonathan A. C. Brown (Associate Prof., Walsh School of Foreign Service/Director, Prince Alwaleed bin Talal Center for Muslim-Christian Understanding, Georgetown University)

15:10-15:30 Q&A

15:30-15:50 Coffee Break

15:50-17:00 Discussion

17:00-17:15 Closing Remarks

司会

森山央朗(同志社大学神学部・准教授)

使用言語: 英語(通訳なし)

同志社大学今出川校地弘風館 K47 教室

共催: 東京外国大学アジア・アフリカ言語文化研究所中東イスラーム研究拠点, 京都大学イスラーム地域研究センター, JSPS 科研費 26370840「ハディースの徒」の社会史的研究」

12月19日(火)~21日(木)

国際ワークショップ “Varieties of Malayic Languages” / AA 研共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第3回研究会【公開】

12月19日(火)

塩原朝子(AA 研所員) “How to record (semi-)spontaneous utterance”

内海敦子(AA 研共同研究員, 明星大学) “Malayic Variety project: purposes and discussion on Questionnaires”

Thomas J. Connors (University of Maryland) “Langscape: Documentation applications of a language mapping tool and resource”

DISCUSSION: developing Malay varieties maps: pronunciation and words

12月20日(水)

Antonia Soriente(AA 研共同研究員, University of Naples 'L' Orientale) "The Indonesian language of intercommunication in the province of Kaltara in Kalimantan"

野元裕樹(AA 研共同研究員, 東京外国語大学) "Pun and discourse structure"

Michael C. Ewing(AA 研客員教授, University of Melbourne) "Interpersonal and expository grammatical organisation in Indonesian conversation"

Thomas J. Connors (University of Maryland) "The Emergence of Indonesian Electronic Communication as a Distinct Linguistic Variety"

三宅良美(AA 研共同研究員, 秋田大学) "A preliminary report on Belitung Malay"

12月21日(木)

Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia) "A general syntactic and phonological description of ablaut in some varieties of Sumatra Malayic"

塩原朝子(AA 研所員) "Referential strategies in some Malay varieties"

DISCUSSION: developing maps on Malayic varieties: technical issues

使用言語: 英語

AA 研 306

主催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

12月21日(木)

国際ワークショップ Islamic Thoughts and 'Ulamā' s Activities in the Medieval Muslim Society (中世ムスリム社会におけるイスラーム思想とウラマーの活動)

プログラム

13:55-14:00 Opening Remarks

14:00-15:00 Presentation 1 "Writing the Faḍā'il of Twelve Imams Strategically: Iraqi Shi'i 'Ulama' and the Spread of Reverence for the Twelve Imams in the 13th-14th Centuries"

MIZUKAMI Ryo (Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo)

15:00-15:20 Coffee Break

15:20-16:20 Presentation 2 "The Originality of the Exoteric Doctrines of the Imāmiyya during the Minor Occultation: The Special Position of Imāms within Imāmī Law"

HIRANO Takahiro (Ph.D. Candidate, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo)

16:20-17:30 Comment and Discussion

Commentator: Dr. Jonathan A. C. Brown (Associate Professor, Walsh School of Foreign Service/Director, Prince Alwaleed bin Talal Center for Muslim-Christian Understanding, Georgetown University)

17:30-17:45 Closing Remarks

司会: 森本一夫(東京大学東洋文化研究所・准教授)

使用言語: 英語(通訳なし)

東京大学本郷キャンパス 東洋文化研究所

共催: 中東イスラーム研究拠点, 東京大学東洋文化研究所, JSPS 科研費 17K18492「**「聖典」・「経典」**解釈における**「先入観」**についての分野横断的古典文学研究」

12月23日(土)

ジョナサン・ブラウン氏公開講演会「現代世界におけるハディース研究の意義」

プログラム 15:00-17:30

ジョナサン・ブラウン氏 (Dr. Jonathan A.C. Brown)

(ジョージタウン大学外交学院准教授・ワリード・ビン・タラール王子ムスリム-キリスト教徒理解センター長)

「現代世界におけるハディース研究の意義 (Meaning of the Hadith Studies in the Contemporary World)」

(英語・通訳なし)

使用言語: 英語 (通訳なし)

東京外国語大学本郷サテライト 301 号室

主催: 中東イスラーム研究拠点

12月23日(土)

二国間交流事業シンポジウム「日印交流における仏教」【公開】

11:00-12:10. 公開講演会 (日本語)

小島裕子 (国際仏教学大学院大学) 大仏を開眼した菩提僊那 (ボーディ・セーナ) — 日本文化の中に構築された「インド」—

13:00-18:45. Academic Session (English)

13:00-13:25. 蓑輪顕量 (東京大学) Longing for India: Japanese Buddhist and India

13:25-13:50. 嵩満也 (龍谷大学) Japanese Buddhists Views of India Seen in the Magazine Bukkyokaigaijijo (1888-1893)

13:50-14:15. 奥山直司 (高野山大学) Japanese Buddhists in the Recovery Movement of the Bodh Gaya Temple after 1891: The role of Shaku Kozen and the Shingon Sect

14:15-14:40. トマス・ニューホール (東京大学) From “bongaku” 梵学 to “indo tetsugaku” 印度哲学: The Development of Indology at Japanese Universities

14:50-15:15. 能仁正顕 (龍谷大学) Otani Kozui and India: Seeking the Origin of the Eastward Spread of Buddhism

15:15-15:40. ランジャナ・ムコパディヤーヤ (デリー大学) Proselytizing in the “Western Paradise”: India in the making of Fujii Nichidatsu and Nipponzan Myohoji

15:40-16:05. 岡本佳子 (国際基督教大学アジア文化研究所) A Dream of an Asian Religious Conference: Japan-India Cultural Interaction behind the Journey of Okakura Kakuzo, Oda Tokuno and Hori Shitoku to India

16:05-16:30. 別所裕介 (駒澤大学) Buddhist Heritages Development Assistance as Present-day India-Japan Friendship: By Comparison to JICA, APECF and FPMT

16:40-17:05. 佐藤良純 (大正大学) Indian Deities of Buddhism and Hinduism in Japan

17:05–17:30. 舟橋健太(龍谷大学) Development of Buddhist Conversion Movements in Contemporary India: The View from Local and Global

17:30–17:55. 外川昌彦(AA 研所員) Living with Gandhi: Fujii Gurji and India-Japan Relations in the 1930s

使用言語: 日本語, 英語

龍谷大学・大宮キャンパス・西翼(せいこう)2階・大会議室

共催: AA 研, 日本学術振興会 二国間交流事業 (JSPS-ICHR), 龍谷大学南アジア研究センター (RINDAS), 龍谷大学世界仏教文化研究センター(RCWBC), 龍谷大学アジア仏教文化研究センター(BARC), 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関2」, Samutthan Foundation, New Delhi

1月26日(金)

第5回国際ベンガル学会・企画シンポジウム「50年後に回想される村落—故原忠彦教授の民族誌再訪」

【公開】

9:00–9:30. Keynote Address:

Abhijit Dasgupta (Delhi University) Village, Kinship and the Wider World: Prof. Tadahiko Hara's Contributions to Sociology in South Asia

Part-1 Rethinking Peasantry Society

9:30–9:50. Ranjan Saha Partha (Jahangirnagar University) Reconceptualizing Peasantry in the Changing Village Structure of Bangladesh.

9:50–10:10. Ai SUGIE (Tokyo University of Foreign Studies) Individualism in Rural Bangladesh: Towards a Comprehensive and Dynamic Understanding of Rural Society through Micro-level Studies

10:10–10:30. Atrayee Saha (Muralidhar Girls' College) Village as an Economic and Cultural Unit Tadahiko Hara's study of Paribar and Kinship

Part-2 Transformation of Regional Society

10:45–11:05. Fatema Bashar (Jagannath University) Changing Nature of Social Organisation in Rural Bangladesh since the Sixties

11:05–11:25. Mujibul Anam (Jahangirnagar University) The relevance of 'Paribar and Kinship in a Moslem Village in East Pakistan' in contemporary Bangladesh Study

11:25–11:45. Kazuyo MINAMIDE (St. Andrew's University) What was disappeared and What is remained in the Life Stages in Bangladesh?: Responding Prof. Hara's Fieldwork after 50 years

11:50–12:30. General Discussion

Discussant: Shinkichi TANIGUCHI (Tokyo University of Foreign Studies)

Chair: Masahiko TOGAWA (Tokyo University of Foreign Studies)

使用言語: 英語

Jahangirnagar University, Savar, Dhaka, Bangladesh

共催: 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学における

1月27日(土)

第5回国際ベンガル学会・パネル・シンポジウム「バウルにおける宗教とモダニティ—グローバル化とベンガルの民俗音楽の変貌」【公開】

Keith Edward Cantu (University of California at Santa Barbara) Buddhist Tantric Elements in the Bengali Baul Songs of Lalan Fakir

Md. Intaj Ali (University of Hyderabad) Reimagining Baul Tradition of Bengal: Beyond Tradition & Modernity

Mriganka Mukhopadhyay (PhD Candidate, University of Amsterdam) Baul in the West: A Transnational Migration of Bengali Folk Music and Indigenous Occultism

Saymon Zakariya (Bangla Academy) Baul in Bangladesh and the Era of Globalization

Discussants: Carola Erika Lorea (Sapienza University of Rome) / Manosh Chowdhury (Jahangirnagar University) / Mahabub Alam (Independent University)

Chairs: Shamsuzzaman Khan (Director General of Bangla Academy), Masahiko TOGAWA

使用言語: 英語

Jahangirnagar University, Savar, Dhaka, Bangladesh

共催: 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関2」, 科学研究費(基盤 C)「岡倉天心とタゴールの反響するアジアへのまなざし—植民地主義をめぐる日印の比較研究」(代表者: 外川 昌彦(AA 研所員), 課題番号: 16K02602)

1月27日(土)

コタキナバル・リエゾンオフィス邦人向け講演会 【公開】

プログラム

15:00-15:05. 床呂郁哉(AA 研所員) 開会挨拶

15:05-16:15. 祖田亮次(大阪市立大学) 「マレーシア・サラワク州における人——自然関係の変化: 災害, プランテーション, 保全林」

16:15-17:00. 質疑応答

使用言語: 日本語

コタキナバル日本人学校

共催: コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO), コタキナバル日本人会

1月30日(火)

2017年度第6回 パレスチナ／イスラエル研究会・国際ワークショップ “Jews and the Center/Margin of the Contemporary Society” 【公開】

14:00-15:30. ◆報告 1: シーナ・アーノルド(フンボルト大学移民統合研究所研究員) 報告タイトル:

Between Antisemitism and Racism: Syrian Refugees' attitudes towards Jews, the Holocaust and the Middle East Conflict in Germany. (反セム主義と人種主義の間:ドイツにおけるシリア難民とそのユダヤ人, ホロコースト, 中東紛争に対する関わり)

15:45–17:00. ◆報告 2: 澤口右樹 (東京大学大学院 総合文化研究科地域文化研究専攻「人間の安全保障」プログラム修士課程) 報告タイトル: Women and the Military in Contemporary Israel: Through Narratives of Women's Military Experiences (現代イスラエルにおける女性と軍隊: 女性の軍隊経験の語りから)

17:00–18:30. 総合討論

18:30–19:00. 研究打ち合わせ

使用言語: 英語

東京大学東洋文化研究所 3 階第一会議室

共催: 科研費国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)「ドイツのアラブ系移民/難民の移動と受け入れに関する学際的研究 (国際共同研究強化)」(代表者: 錦田愛子 (AA 研所員), 課題番号: 16KK0050), 中東イスラーム研究拠点 (人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業), 東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」

2 月 3 日 (土)

研究会 After the “Refugee Crisis” in Europe: The case of Germany

プログラム 14:00～17:00

報告:

Germany as a “postmigrant” society: Contemporary Challenges and Controversies.

(「ポスト移民」社会としてのドイツ: 現代の課題と議論)

報告者: シーナ・アーノルド (Sina Arnold) フンボルト大学移民統合研究所研究員

使用言語: (英語・通訳なし)

東京大学駒場キャンパス 18 号館 4 階, コラボレーションルーム4

主催: 科研費国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化) 課題番号 16KK0050 (研究代表者: 錦田愛子)

共催: 中東イスラーム研究拠点, 東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」

2 月 4 日 (日)

国際ワークショップ Early Photography in Iran

プログラム

Prof. Bettina Gockel

(チューリッヒ大学/University of Zurich)

Persia: Places of Longing as Landscapes of the Soul.

Photography, the Literature and Poetry of Romanticism and Expressionism, and the Travels of Swiss

Photographer and Writer Annemarie Schwarzenbach

Prof. Markus Ritter

(ウィーン大学/University of Vienna)

Book Presentation: Photography in Qajar Iran and the notion of an 'Indigenous lens'

映画上映

Memories on Glass/Khaterât ruy-e shisheh (Mehrddad Zahedian, 30min. Tehran 2004) (ペルシア語・英語字幕)

使用言語: 英語(通訳なし)

東京外国語大学本郷サテライト 301 号室

共催: 中東イスラーム研究拠点, 国立民族学博物館現代中東地域研究拠点

2月5日(月)

コタキナバル・リエゾンオフィス企画による交換講演会【公開】

Program:

14:00–14:10. Prof. Dr. Ismail Ibrahim (UMS) Opening Address

14:10–14:15. Ikuya TOKORO (ILCAA) Opening Address

14:15–14:55. Akimitsu IKEDA (ILCAA) "Sectarianism in the Field?: Reconsideration from an Ethnographic Perspective in Lebanon"

14:55–15:35. Asako SHIOHARA (ILCAA) "Documentary linguistics in and around Indonesia"

15:45–16:25. Jacqueline Pugh-Kitingan (UMS) "Rivers as Roads: Cultural Contacts and Musical Diffusion between Maritime and Interior Peoples of Sabah."

使用言語: 日本語

Meeting Room, Faculty of Humanities, Arts and Heritage, Universiti Malaysia Sabah, Kota Kinabalu

共催: AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス, School of Social Science, Universiti Malaysia Sabah, Kota Kinabalu

2月13日(火)～14日(水)

AA 研フィールド言語学ワークショップ: 第13回文法研究ワークショップ: 会話データに基づく文法研究【公開】

講師: Michael C. Ewing (AA 研客員教授, メルボルン大学), 中山俊秀 (AA 研所員)

2月13日(火)

Theme: Grammar in conversation -- We will examine how grammatical structures and patterns observed in conversation are different from those found in elicited sentences

lecture 1: Clauses in Indonesian conversation (Ewing)

lecture 2: Unexpected syntax in Japanese conversation (Nakayama)

Data session -- Examining language in conversation

2月14日(水)

Theme: Cross-genre variation; Conversational data collection and transcription

lecture 3: How language use and patterns differ across genres?

lecture 4: Introduction to discourse transcription

Practical training: recording & transcribing a conversation

使用言語: 英語

AA 研 304

主催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

3月2日(金)~4日(日)

国際ワークショップ「トランスカルチャー状況下における顔・身体学」

・3月2日(金)ミニ・エクスカージョン

15:00-20:00 (Area: Sanur, Batubulan)

美術館見学/バリ芸能見学および芸能家との意見交換

A visit to an art museum/ watching Balinese performing arts and discussion with the performers.

・3月3日(土)10:00-18:00

国際ワークショップ「トランスカルチャー状況下における顔・身体学」

10:00-10:15 開会の辞 Opening Remarks

10:15-11:05 吉田ゆか子+イ・クトゥット・コディ「仮面と踊るー演者イ・クトゥット・コディ氏を迎えて」

Yukako YOSHIDA and I Ketut Kodi “Performing with a Mask: A master of topeng theater I Ketut Kodi and his experience”

11:05-11:55 ユスティナ・デヴィ・アルディアニ「サヒタのパフォーマンスー風刺劇の舞台における女性たちのボディランゲージ」

Yustina Devi Ardhiani “Sahita’s Performance: Female satirical body language on stage”

11:55-12:15 休憩 Coffee Break

12:15-13:15 バリ舞踊ワークショップ Balinese performing arts Workshop

13:15-14:20 昼食 Lunch Break

14:20-15:10 高橋康介「フィールド実験チュートリアル」

Kohsuke TAKAHASHI “Introductory Tutorial of Field Experiment”

15:10-16:00 吉田優貴「一緒に踊るといふ経験:ケニアの聾の子供を事例に」

Yutaka YOSHIDA “The Experience of Dancing with Someone: A case study of Kenyan deaf children”

16:00-16:20 休憩 Coffee Break

16:20-17:00 赤阪辰太郎「〈顔〉と〈わたし〉の現象学」

Shintaro AKASAKA “A Phenomenological Study of the Relationship between Face and Self”

17:00-17:40 菊竹智之「知的障害者たちのダンスにおける顔の働き」

Tomoyuki KIKUTAKE “How does the face work in a dance for people with disabilities?”

17:40-18:30 ディスカッション General Discussion

・3月4日(日)エクスカージョン(9:00-18:00) (Areas: Mas and Pejeng)

仮面と人形の博物館見学/フィールド実験/ヒンドゥ寺院訪問/仮面工房訪問

A visit to a museum of mask and puppets/ field experiments/ a visit to a Hindu temple/ a visit to mask maker’s studio.

使用言語: 日本語, インドネシア語

インドネシア, バリ島

共催: 科学研究費(新学術領域)「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」(代表者: 床呂郁哉(AA 研
所員), 課題番号: 17H06341), 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する
『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関2」

3月3日(土)~4日(日)

国際シンポジウム “Current Topics in Turkic Linguistics” / AA 研共同利用・共同研究課題「チュルク
諸語における膠着性の諸相 —音韻・形態統語・意味の統合的研究—」第3回研究会【公開】

3月3日(土)

Lars JOHANSON (University of Mainz) “A Half Century of Turkic Linguistics”

Elisabetta RAGAGNIN (Free University of Berlin) “The Puzzling Uygar-Uriankhay of Northern Mongolia”

Arzhaana SYURYUN (AA 研共同研究員, Russian Academy of Sciences, Saint-Petersburg), 江畑冬生
(AA 研共同研究員, 新潟大学) “The So-called Evidential Suffix -dir in Tyvan”

大崎紀子(AA 研共同研究員, 京都大学), Jakshylyk AKMATALIEVA (AA 研共同研究員, 東京外国語
大学) “Volitionality and the Auxiliary Verbs in Kyrgyz: The Case of kör- and jiber-”

日高晋介(AA 研共同研究員, 東京外国語大学大学院) “The Syntactic Functions of Participles and Verbal
Nouns in Uzbek: A Focus on the Attributive Function”

新田志穂(AA 研共同研究員) “Syntactic Structure and Prosody in Modern Uyghur”

菱山湧人(AA 研共同研究員, 東京外国語大学大学院) “On the Suffix -IEK in Tatar Noun Clauses”

林徹(AA 研共同研究員, 東京大学) “Ten Years in Kreuzberg: Change in Language Use and Awareness
among Turkish-German Bilingual Students”

3月4日(日)

A. Sumru ÖZSOY (Boğaziçi University) “Specificity, Case and Reference in Turkish”

栗林裕(AA 研共同研究員, 岡山大学) “Topic and Related Constructions in Turkic”

Ayşe Nur TEKMEK (AA 研共同研究員, Ankara University) “Focusing on Broad Tense “-Ar” in Turkish”

Aydin ÖZBEK (AA 研共同研究員, Çanakkale Onsekiz Mart University) “Are We Witnessing
Grammaticalization? —Perception of Turkish Native Speakers of et- or yap- Verbs in Light
Verb Constructions—”

青山和輝(AA 研共同研究員, 東京大学大学院) “Purposive Clauses and the Possibility Marker in Turkish”

菅沼健太郎(AA 研共同研究員, 九州大学) “The Morphological Approach for Phonological Differences
in Turkish Vowel Harmony”

吉村大樹(AA 研共同研究員, Ankara University) “Morpho-syntactic Behaviour of the Azerbaijani
Copular Clitic”

江畑冬生(AA 研共同研究員, 新潟大学) “From Turkic Locative to Sakha Partitive: A Contrasting
Analysis with Tyvan, Tofa, Dolgan and Evenki”

Éva Á. CSATÓ JOHANSON (Uppsala University) “Transeurasian Postverbal Constructions”

使用言語: 英語

AA 研 304

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

3月3日(土)

国際ワークショップ「中央アジアから中東への移民:1940-50年代の新疆難民の事例から」

プログラム

1. Abdulvahap Kara (Mimar Sinan Fine Arts University, Turkey)

The Reasons and Results of the Migration of Kazakhs from East Turkestan to Turkey in Between 1930-1950's

2. 野田仁(東京外国語大学 AA 研)

Kazakh migrants and the Soviet-Chinese relations during 1940s: as a background of the Xinjiang refugees towards Middle East

3. Ömer Kul (Istanbul University, Turkey)

Uighurs that immigrated from East Turkestan to Turkey between 1949-1954

4. 小野亮介(早稲田大学人間科学学術院)

American Aids for Xinjiang Kazakh Refugees in Kashmir: Missionaries, anthropologist and the Escapee Program

5. Justin Jacobs (American University, USA)

An Examination of the Fate of Xinjiang Refugees during the Cold War

6. Tekin Tuncer (Nevşehir Hacı Bektaş Veli University, Turkey)

The Emigration from East Turkestan to Turkey in 1964

コメンテーター:松長昭(現代イスラム研究センター)

使用言語:英語(通訳なし)

AA 研 303

共催:中東イスラーム研究拠点, JSPS 科研費(17H07174, 研究代表者:小野亮介)

3月6日(火)

研究講演会「トルコにおける新疆移民」

プログラム

1. Abdulvahap Kara (Mimar Sinan Fine Arts University, Turkey)

“Relations of Kazakhs In Turkey with Their Homelands of Xinjiang And Kazakhstan”

2. Justin Jacobs (American University, USA)

“How Chinese Governors Responded to Ottoman Influence in Xinjiang”

3. Ömer Kul (Istanbul University, Turkey)

“1949 Göçü Sonrası Türkiye’de Uygurların Sosyo-Ekonomik Durumları”

(1949年移住後のトルコにおけるウイグル人の社会・経済状況)

4. Tekin Tuncer (Nevşehir Hacı Bektaş Veli University, Turkey)

“1949 Göçü Sonrası Türkiye’de Uygurların Açtığı Sivil Tolum Örgütleri ve Bunların Faaliyetleri”

(1949年移住後にトルコにおいてウイグル人が結成した市民社会組織とその活動)

使用言語:英語・トルコ語

同志社大学今出川校地 弘風館 K32 教室

共催:中東イスラーム研究拠点, JSPS 科研費(17H07174, 研究代表者:小野亮介)

3月7日(水)

マルタ報道写真家写真展「エクソダスー地中海を渡る脱出ー」

12:00-13:30 Darrin Zammit Lupi 氏 Gallery Talk

使用言語:英語・日本語通訳付

AA 研 1 階資料展示室

主催:フィールドサイエンス研究企画センター

主催:中東イスラーム研究拠点

共催:科研費 国際共同研究加速化基金(錦田愛子 16KK0050)

3月9日(金)

マルタ報道写真家写真展「エクソダスー地中海を渡る脱出ー」

12:00-13:30 Darrin Zammit Lupi 氏 Gallery Talk

17:30- 開会挨拶(近藤 信彰・AA 研教授/人間文化研究機構 NIHU「現代中東地域研究」事業・AA 研
拠点代表)

17:35- 企画の背景説明・講演者紹介(錦田 愛子・AA 研准教授)

17:45- ダリン・ザミット・ルピ氏の講演(逐次通訳付き)

18:55- 質疑応答

19:25- 閉会挨拶(飯塚正人所長)

使用言語:英語・日本語

AA 研 303

共催:フィールドサイエンス研究企画センター, 中東イスラーム研究拠点, 科研費 国際共同研究加速化
基金(錦田愛子 16KK0050)

3月9日(金)

リンディフォーラム:Talk on Turkish Sign Language【公開】

A. Sumru ÖZSOY (Boğaziçi University) “How to Compare in Turkish Sign Language”

使用言語:英語

AA 研 304

主催:基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」

3月16日(金)

“Minorities in the Middle East”

Chair: Ray J. Mouawad (Saint Joseph University)

Tom Sicking s.j. (Saint Joseph University) “Two Fears and Two Desires of Minorities”

Hidemitsu Kuroki (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies) “Middle Eastern Studies in Japan: Its Short History and Potential”

Souad Slim (University of Balamand) “An Example of Christian Muslim Relations in the Ottoman Period”

Chair: Tom Sicking s.j. (Saint Joseph University)

Hiroki Wakamatsu (Toros University) “Social Organization Process of Alevis in Turkey: An Anthropological Approach for Survival Strategy”

Guita Hourani (Notre Dame University) “Survival Strategies in an Ethnic Minority Group: The Kurds of Lebanon”

Aiko Nishikida (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies) “The Palestinians in Lebanon”

3月17日(土)

Chair: Souad Slim (University of Balamand)

Roula Talhouk (Saint Joseph University) “Chiites/Maronites in Beirut’s Suburbs”

Hidemi Takahashi (The University of Tokyo) “Survival of Syriac Christianity in China: Remarks on Some Recent Discoveries”

Chair: Roula Talhouk (Saint Joseph University)

Antranik Dakessian (Haigazian University) “100 years of Reconstructing Identity: The Tiny Armenian Community of Jounieh”

Ray J. Mouawad (Saint Joseph University) “Jews in Tripoli – Lebanon”

Asuka Tsuji (Kawamura Gakuen Women’s University) “The relationships of the Coptic Church in the 15th century”

使用言語: 英語

Saint Joseph University

主催: 基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」

3月17日(土)

邦人向け公開講演会『現代インドネシアのイスラームを知る』【公開】

13:30–13:35. ご挨拶

13:35–14:25. 見市建(早稲田大学) 「イスラームと政治: アホック抗議デモとは何だったのか」

14:30–15:20. 塩谷もも(島根県立大学) 「儀礼と料理にみるジャワの人々のつながり: 女性に焦点をあてて」

15:30–15:50. Q&A

15:50–16:10. 東南アジア・ムスリム青年との対話 Talk with Muslims series (TAMU) の紹介と Q&A

使用言語: 日本語

国際交流基金ジャカルタ日本文化センター

共催: AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス, 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来

3月19日(月)~23日(金)

SCOPIIC ワークショップ【一部公開】

19 March (Mon.)

Nicholas EVANS (オーストラリア国立大学) “Social Cognition (OPEN)”

Danielle BARTH (オーストラリア国立大学) “Corpus principles of SCOPIIC (OPEN)”

Nicholas EVANS (オーストラリア国立大学) and Danielle BARTH (オーストラリア国立大学) “Human Referents through a lens of social cognition & SCOPIIC coding schema”

ELAN set up & annotation in groups

ELAN set up & annotation by individuals & groups

20 March (Tue.)

I Wayan ARKA (オーストラリア国立大学) “Human Referents and Social Meaning in Balinese: Some Evidence from the SCOPIIC data”

Eka PRATIWI (College of Foreign Languages (STIBA) Saraswati Denpasar), I Wayan ARKA (オーストラリア国立大学), and Asako SHIOHARA (AA 研 所 員) “Benefactives and affectedness in Balinese: from morpho-syntax to social cognition”

Annotation of Human Referents by workshop participants

Round-table discussion of human referent issues of interest

21 March (Wed.)

Nicholas EVANS (オーストラリア国立大学) “Social Cognition in Dalabon: a language portrait”

Annotation of Human Referents by workshop participants

Nicholas EVANS (オーストラリア国立大学) and Danielle BARTH (オーストラリア国立大学) “Reported Speech, thought and emotion through a lens of social cognition & SCOPIIC coding schema”

Annotation of Reported Speech, Thought & Emotion by workshop participants in groups

Annotation of Reported Speech, Thought & Emotion by individuals & groups

22 March (Thu.)

Stefan SCHNELL (メルボルン大学) “Social Cognition in Vera’ a: a language portrait”

Annotation of Reported Speech, Thought & Emotion by workshop participants

23 March (Fri.)

Danielle BARTH (オーストラリア国立大学) “Reported Speech, Thought & Emotion in Matukar Panau”

Annotation of Reported Speech, Thought & Emotion by workshop participants

Round-table discussion of Reported Speech, Thought & Emotion issues of interest

Final Discussion

使用言語: 英語

AA 研 304

共催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 頭脳循環を

加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム危機言語・少数言語を中心とする
循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築

3月26日(月)

リンディフォーラム: オーストロネシア諸語とパプア諸語のドキュメンテーションと分析【公開】

Dwi Noverini DJENAR (The University of Sydney), Michael C. EWING (University of Melbourne) and
Howard MANNS (University of Monash) “Interactional particles and perspective
management in Indonesian”

I Wayan ARKA (Australian National University, Udayana University) “Prohibitives and Information structure
in the Austronesian languages of Indonesia”

Sonja RIESBERG (ILCAA Joint Researcher, University of Cologne) “The language archive at CELD, West
Papua - a collaborative undertaking”

Stefan SCHNELL (University of Melbourne) “GIVE and other 3-participant events in Vera’a.”

使用言語: 英語

AA 研 306

共催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」, 頭脳循環を
加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム危機言語・少数言語を中心とする
循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築

II-4.3.2 外国人研究員招聘

[I-4.3.3 外国人研究員招聘](#)を参照。

また、2017年度中に招聘期間を終えた外国人研究員の業績は [I-2.6.2 所員の研究業績一覧 外国人研究員の項](#)を参照。

なお、このうち共同利用・共同研究課題(外国人客員共同研究型)の詳細については [I-2.3.3](#), 業績は [II-3.2.2](#)の項をそれぞれ参照。

II-4.3.3 外国からの研究者受け入れ(フェロー等)

フェロー

杜山那里・阿不都拉西木(デュセンアイル・アブディラシム)

研究主題: カザフ・ハン国文書に関する研究

研究期間: 2016.12.27~2017.12.27

受入教員: 野田 仁

研究成果:

1. 論文:「乾隆皇帝頒給哈萨克王杭霍卓敕諭(1787)研究」,『新疆社会科学(哈文版)』, 3, 54-64, 2017.9.
2. 論文:「乾隆皇帝頒給哈萨克王杭霍卓敕諭(1790)研究」,『新疆大学学报(哈文版)』, 3, 45-55, 2017.9.
3. 講演:「「国境」を超越する遊牧民:中国第一档案馆所蔵史料から見るカザフと清朝」,早稲田大学文化構想学部多元文化系:多元文化論系講演会,2017.7.24,早稲田大学.
4. 講演:「カザフ・ハン国史研究におけるいくつかの問題点をめぐって:文語カザフ語文書を中心に」,第40回中央ユーラシア研究会,2017.9.30,東京外国語大学.
5. 講演:「18—19世紀カザフ遊牧民の歴史と言語:文語カザフ語文書を中心に」,東北学院大学アジア流域文化研究所公開講演会「シルクロードの遊牧民・カザフ人の歴史と文化」,2017.12.13,東北学院大学.
6. 報道:“Qytaidyng no.1 muraghatynda Qazaq eline qatysty 3000 quzhat saqtalghan” (*Egemen Qazaqstan*), 2017.3.24.

ジュニア・フェロー

周 太 加(ジュクトルジャ)

研究主題:青海近代史

研究期間:2015.4.1~2018.3.31

受入教員:星 泉

研究成果:

1. 論文:「青海省成立の経緯とその意味—「チベット」の分断と「中国化」への変遷を中心に—」, 博士論文, 東京外国語大学, 2018.

乌云高娃(ウユンゴワ)

研究主題:近代内モンゴル知識人の文化活動

研究期間:2016.4.1~2018.3.31

受入教員:山越 康裕

研究成果:

1. 著書:『1930年代のモンゴル・ナショナリズムの諸相』, 2018, 晃洋書房, 346 pp.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 乌云高娃

期間(年度): 2017

研究種目: 研究成果公開促進費

研究課題名: 1930年代のモンゴル・ナショナリズムの諸相

II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業

2017年度招聘者一覧

言語研修のための資料収集を目的とした招聘

Dance Nawipa (ジャヤプラ第一高校教諭)・Petrus Degei (所属なし)

目的: 2018(平成30)年度言語研修『メエ語(エカリ語)』実施のための準備作業

招聘先: 当研究所

期間: 2018年3月3日～2016年9月15日

II-4.4 研究成果と資料の公開

II-4.4.1 出版

2017年度にAA研から刊行された出版物は下記の通りである。なお、電子出版物については「5. 電子出版物」を参照のこと。

逐次刊行物

『アジア・アフリカ言語文化研究』Journal of Asian and African Studies

No.94 (2017.9)

No.95 (2018.3)

編集:アジア・アフリカ言語文化研究所編集委員会(委員長:床呂郁哉)

年に2回発行 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/jaas/back-issue>

所外の研究者をふくむ編集専門委員会によって運営され、毎号、査読を経た水準の高い言語学・歴史学・文化人類学に関する論文を掲載。海外からの投稿も多数あり、国内外から高い評価を得ている。

『FIELDPLUS(フィールドプラス)』 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/field-plus/back-issue>

No.18 (2017.7) 巻頭特集 カラハリ狩猟採集民の言語民族誌的な辞書を編む 責任編集/中川裕

No.19 (2018.1) 巻頭特集 一なる神、多様な社会——少数派から読み解く中東地域 責任編集/近藤洋平

多様な研究分野の垣根を超えて、世界のあらゆる地域をフィールドとする研究者たちの取り組みや経験を紹介する雑誌。年2回(1月・7月)刊行。高校生以上の若い世代をふくむ多くの読者を対象として、豊富なカラー写真や図を使い、フィールド研究の面白さを伝えていく。

『アジア・アフリカの言語と言語学』Asian and African Languages and Linguistics/AALL

ISSN: 2188-0840 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/aall>

Vol.12(2018.3) Special Feature: GRAID.

編集:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『アジア・アフリカの言語と言語学』編集部

《No.8 より、オンラインジャーナル化》 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/aall/back-issue/>

フィールドワークに基づく記述的言語研究の成果を発信するために 2006(平成 18)年に創刊された学術雑誌。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の言語学分野の研究者が編集。本誌は、アジア・アフリカの言語を主な対象とし、一次データに基盤を置いた記述的研究の成果を共有することで、(i) 言語システムの実現形である個別言語の包括的な理解を深め、(ii) 人間言語の構造的多様性を明らかにし、(iii)言語記述・理論研究にも貢献することを目的としている。

言語研修テキスト

言語研修テキストは、2016 年度版から、著作権に関する許諾を得られたものを電子出版物として公開されている。 <https://publication.aa-ken.jp/>

ハンガリー語

B277『平成 29 年度言語研修ハンガリー語研修テキスト ハンガリー語の会話と文法』大島一・ビリック エヴァ ILCAA Intensive Language Course 2017: Hungarian Conversation and Grammar: Magyar kis nyelvkönyv. Oshima, Hajime, and Bilik, Éva. 2017. ISBN 978-4-86337-277-1

ジャワ語

B278『平成 29 年度言語研修ジャワ語初級テキスト:ジャワ語の基礎』菅原由美・ラハユ, ヨセフィン アプリアストゥティ ILCAA Intensive Language Course 2017: An Introduction to Javanese 1. Sugahara, Yumi, and Yosephin Apriastuti Rahayu. 2017. ISBN 978-4-86337-278-8

アジア・アフリカ基礎語彙集

1. Kannada-English Etymological Dictionary (2nd edition). Učida, Norihiko, and Rajapurohit, B. B. Takashima, Jun (ed.). 2018. ISBN 978-4-86337-281-8

地域・文化研究

1. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko L. A. *Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.111 The Gokhu Language*. 2017.6.30.
2. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko L. A. *Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.112 The Blimaw Language*. 2017.6.30.
3. 松井太・荒川慎太郎『敦煌石窟多言語資料集成』 *Multilingual Source Materials of Dunhuang Grottoes*. 2017.7.31.
4. 伊藤悟 Ito, Satoru.『カーム・ソンコーカオ - 徳宏タイ上座仏教社会におけるシャーマンの送霊うた』 *Khaam Song Khokhau : Shamanic Ritual Song in Dehong Tai Buddhist Communities*. 2017.11.30.
5. 川野明正(編)『ミャンマー・ヤンゴン雲南墓園墓誌集成』 *Primary Sources of Epitaph of Yunnan Chinese Cemetery of Yangon, Myanmar*. 2018.3.31.
6. 堀内里香(訳)中野暁雄『モロッコのベルベル語による民族誌的語り』 *Ethnographical Text in Moroccan Berber. Japanese*. 2017.10.31.
7. Sugahara, Yumi, and Willem van der Molen (eds.) *Transformation of Religions as Reflected in Javanese Texts*. 2018
8. Tokoro, Ikuya, and Tomizawa Hisao (eds.) *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.2) : Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia*. 2018.3.19.
9. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko L. A. *Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.113 The Khwingsang*

- Language*. 2018.1.12.
10. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko L. A. *Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.114 The Khrangkhu Language*. 2018.1.12.
 11. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko L. A. *Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.115 The Yingtalay Language*. 2018.1.12.
 12. 新谷忠彦 Shintani, Tadahiko L. A. *Linguistic Survey of Tay Cultural Area N.116 The Thaidai Language*. 2018.1.12.
 13. 蕭傑一(著) 川野明正・菅野賢治(編・訳)『雲南北西部カトリック簡史 一茨中天主堂を中心に』*Histoire abrégée de la mission catholique dans le Nord-Ouest du Yunnan (autour de l' église de CiZhong)*. 2018.3.31.
 14. Antonina A. Kemetwali (narrated.), and Kurebito, Tokusu (ed.). *Chukchi Animal Folk Tales with Grammatical Analysis*. 2018.3.29.
 15. 星泉・海老原志穂・岩田啓介・大川謙作・三浦順子(編) *SERNYA-5* 『チベット文学と映画制作の現在』 2018.3.20.
 16. 下地理則 Shimoji, Michinori.『南琉球宮古語伊良部島方言』 *The Irabu Dialect of Miyako Ryukyuan*. 2018.3.26
 17. 児倉徳和 Kogura, Norikazu "『シベ語のモダリティの研究』 *A Study on the Modality System in Sibe*. 2018.3.30.
 18. Shiino, Wakana, Shiraishi Soichiro, and Christine M. Mpyangu (eds.) *Diversification and Reorganization of 'Family' in Uganda and Kenya: A Cross-cultural Analysis*. 2018

電子出版物

著作権者からの許諾を得て 2017 年度に公開した電子出版物は下記の通りである。<https://publication.aaken.jp/>

1. 鷲尾祐子, 『資料集: 三世紀の長沙における吏民の世帯一走馬樓吳簡吏民簿の戸の復原一』
2. RAZAFIARIVONY Michel et al. (eds) 『マダガスカルのみ話 II, 第 2 版』 (*Folktales among the Malagasy Peoples II, 2nd edition*)
3. Takashima, Jun (ed.), B.B. Rajapurohit & N. Učida, *Kannada-English Etymological Dictionary* (2nd Edition)
4. Saito, Yoshio and M. Endo (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics IV*
5. Taguchi, Yoshihisa and M. Endo (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics V*
6. Kurabe, Keita & M. Endo (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics VI*
7. Endo, Mitsuaki (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics VII*
8. Endo, Mitsuaki (ed.), *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics*
9. Suzuki, Hiroyuki and M. Endo (ed.), *Proceedings of the Workshop "Geolinguistic Method and Southeast Asian Linguistics"*

上記の他, 「2. 言語研修テキスト」に挙げたテキストも電子出版物として公開されている。

II-4.4.2 オンライン研究資源構築・公開状況一覧

2017年度にAA研で新規に構築・公開された各種オンライン研究資源は8件(【新規】と表示), 継続して発展させたものは8件(【継続】と表示)である。その他のオンライン研究資源も継続して運用ないし維持しており, これまでに120件を公開している。なお, ここでいうオンライン研究資源とは, 電子出版を除く, オンラインで公開されている辞書・語彙集, 言語資料, 歴史資料, 文化資料, 地図, 言語学習・語学教材, 研究ツール, 企画展アーカイブなどを指す。

2017年度のアクセス件数が1万件を超えるものについては具体的な件数を示した。

1. 辞書・語彙集

- (1) 【新規】チベット牧畜文化辞典(パイロット版)(星泉, 海老原志穂, 南太加, 別所裕介ほか)

<https://nomadic.aa-ken.jp/>

- (2) 【継続】チュルク諸語対照基礎語彙(児倉徳和, 風間伸次郎)

<https://turkbv.aa-ken.jp/>

- (3) 【継続】現代チベット語動詞辞典(星泉)

<https://star.aa-ken.jp/vdic/>

- (4) サンスクリット電子辞書(高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/sktdic/index.html> [29,622 件/年]

- (5) 日本語マラヤーラム語電子辞書(高島淳, 峰岸真琴, K. P. P. Nambiar)

<https://www.aa-ken.jp/edic/jmd/>

- (6) カンナダ語英語日本語電子辞書(高島淳, 内田紀彦, B. B. Rajapurohit, 町田和彦, 峰岸真琴)

- (7) ヒンディー語電子辞典(町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/mrd/mrd_top_j.htm

- (8) ウルドゥー語・古典ヒンディー語辞書(町田和彦)

http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/_09.html

- (9) ゾンカ語・英語辞書電子化(町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2011/Dzongkha2011.htm>

- (10) ハウサ語, ヨルバ語電子辞書の作成と公開(塩田勝彦, 町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2013/Hausa_Yoruba/Hausa_Yoruba_dic.html

- (11) サンタル語辞書・検索(峰岸真琴)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/india/india-j.htm>

- (12) 近現代中東人名辞典(飯塚正人)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~masato/biotable.htm>

2. 言語資料

2.1 少数言語・危機言語資料のアーカイブ化

- (1) 【新規】モンゴル諸語対照基本語彙データベース(山越康裕)

<https://mongolicbv.aa-ken.jp/index.htm>

- (2) 【新規】インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター: ヘロン語単語ウェブサイト構築(塩原朝子)

<https://helong-bolok.aa-ken.jp/helong-bolok.html>

- (3) 【新規】アイヌ語音声資料の文字化テキスト全文検索(奥田統己, 山越康裕)

<http://ainugo.mond.jp/>

- (4) 【継続】アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開(奥田統己, 山越康裕)

<https://ainugo.aa-ken.jp/index.html> [12,390 件/年]

- (5) 【継続】故湯川恭敏所員の調査テープに残された言語データの電子化およびメタデータ公開(塩原朝子, 品川大輔)

https://aflang-res.aa-ken.jp/?page_id=178

- (6) Center for Language resource and information of indigenous languages in and around Indonesia(塩原朝子, 内海敦子, 稲垣和也)

<https://id-lang-rc.aa-ken.jp/> [21,868 件/年]

- (7) Language resource and information of indigenous languages in the Nusa Tenggara Timur Province in Indonesia (塩原朝子, 内海敦子, 稲垣和也)

<https://ntt-lang.aa-ken.jp/>

- (8) オンライン・スライアモン語テキスト集(渡辺己)

<https://sliamontexts.aa-ken.jp/>

- (9) ツングース諸語の言語データデジタル化およびオンライン公開(風間伸次郎, 渡辺己)

<http://coe.aa.tufs.ac.jp/tungus/home.html>

- (10) 北東ユーラシアの言語文化(呉人徳司)

<http://hokuto-asia.aa-ken.jp/>

- (11) インド洋民話の DB 化(小田淳一)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/contes_ocean_indien.html

- (12) ソンガイ語テキスト集の電子化と公開(佐久間寛)

<http://songhay.aa-ken.jp/>

- (13) インドネシアの民話データベース(塩原朝子)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~asako/cerita/index.htm>

- (14) アクセントの研究と尾鷲弁(平田秀)
<https://kishu.aa-ken.jp/>
- (15) Grammar of Shina Language and Vocabulary (Based on the dialect spoken around Dras) (B. B. Rajapurohit)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/shina/shina_j.html
- (16) 浅井タケ昔話全集 I, II(峰岸真琴)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html

2.2 諸文献の電子テキスト公開

- (1) Saiva Scriptures(高島淳)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/saiva/>
- (2) ヒンディー語テキストコーパス(町田和彦)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/txtsrchj.htm>
- (3) Premchand 2011(町田和彦)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/premchand/mansarovar/mansarovar.htm>
- (4) モンゴル語文献資料の電子化利用の研究(栗林均, 町田和彦)
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/project.html>

2.3 文字データベース

- (1) 『和翰名苑』仮名字体データベース(岡田一祐)
<https://kana.aa-ken.jp/wakan/> [13,942 件/年]

3. 歴史資料

3.1 貴重書のデジタル公開

- (1) 【新規】Matsya Project ヴィンチュヌ教関連マイクロフィルムのデジタル化(小倉智史)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ogura/project/matsya/>
- (2) トムソン写真集(吉澤誠一郎)
<http://irc.aa.tufs.ac.jp/thomson/> [26,742 件/年]
- (3) 「モッラー・ナスレディーン」修復デジタル化プロジェクト(近藤信彰)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/index.html
- (4) パレスチナ／イスラエルにおける共存を求める運動の記録(岩崎稔, 錦田愛子, 武田祥英)
<https://otherisrael.aa-ken.jp/>
- (5) 『エジプト週報』のデジタル化と公開(小田淳一)
<http://irc.aa.tufs.ac.jp/egypt/semaine/>
- (6) 20 世紀前半のインドネシア華人関連資料コレクション(津田浩司)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~tsuda/IRC/arsip_tionghoa/
- (7) ムラユ語-外来語辞典 “Kitab VORTARO”(津田浩司)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tsuda/IRC/vortaro/>
- (8) 『マウリティウス・アウグストゥス・ドウ・ベニョフスキーの回想と旅行記』のデジタル化(深澤秀夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/materials/book1/index.html>

- (9) ダヴィッド・ジョーンズ『英語—マダガスカル語辞典・マダガスカル語—英語辞典』のデジタル化(深澤秀夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/materials/book2/index.html>
- (10) 『305 条法典』(1881 年)のデジタル化(深澤秀夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/materials/book3/index.html>
- (11) 『Sikidy 占い解読方法手稿』のデジタル化(深澤秀夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/materials/book6/index.html>
- (12) 「小児錦」文字資料コーパス構築へむけた資料集とデジタル化(菅原純)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/xiaoerjin/index.htm>

3.2 文献・碑文の画像および電子化テキスト公開

- (1) 【継続】Old Tibetan Documents Online(星泉, 岩尾一史ほか)
<https://otdo.aa-ken.jp/> [590,042 件/年]
- (2) Javanese Documents Online(菅原由美, 青山亨ほか)
<https://jvdo.aa-ken.jp/>
- (3) インド・歴史書文献の電子データ化(高島淳)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/rajatarangini_p.html
- (4) インド聖典データベース(高島淳)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/gicas/ind_scripture.html
- (5) インド演劇論根本教典の電子データ化(高島淳)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/engekiron.html>
- (6) ホイアンの碑文(三尾裕子, 澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/DAMCSR/insctop.html>
- (7) 「ホイアン歴史民族誌」構築・公開プロジェクト(三尾裕子, 澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/DAMCSR/hoian-ethn.html>
- (8) チャム碑文検索(高島淳)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/khmercham/cham_insc.html
- (9) チャム碑文画像データベース(澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/chaminsc/chaminscindex.html>
- (10) チャムの碑文(澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/chaminsc.html>
- (11) Bagan Concordance(澤田英夫)
<https://burminsc-conc.aa-ken.jp/>
- (12) ビルマ文字の碑文・墨文(画像+転写)(澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/burminsc.html>
- (13) Sinai Rock Inscription(小田淳一)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/arbscript/arbimg.html>

3.3 地名データベース

- (1) 中部ベトナム地名対応表(現在⇔『同慶地輿志』所収)(澤田英夫)

- <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/gnames-viet.html>
- (2) カチン州地名データベース(試験公開)(澤田英夫・梅川通久)
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/gnames-kachin.html>

4. 文化資料

4.1 画像資料のデジタル公開

- (1) 【新規】オスマン演劇ポスター・音楽データベース(松本菜穂子)
- <http://osmanlitiyatro-musik.aa-ken.jp/>
- (2) 【継続】オスマン演劇ポスター画像公開(江川ひかり)
- <http://osmanlitiyatro.aa-ken.jp/>
- (3) オスマン演劇ポスターに関する情報の精度化(江川ひかり)
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/osman/>
- (4) ヒンドゥーの神々の画像様相(高島淳)
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/indspace/dcsidx.html>
- (5) ヒンドゥー教の神々(町田和彦)
- http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindu_gods/gods_top_j.htm

4.2 写真資料のデジタル公開

- (1) 【新規】南アジア民俗写真データベース(外川昌彦)
- <https://southasianfolklore.aa-ken.jp/>
- (2) 環インド洋におけるマダガスカル歴史・文化・生業についての画像資料(深澤秀夫)
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/slideimages/>
- (3) マダガスカル写真館～ツィミヘティ族の人びとの暮らし～(深澤秀夫)
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/gallery/index.html>
- (4) Asian Photograph Selection(澤田英夫)
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/asianphoto/>
- (5) 福建系漢民族の民間信仰データベース(福建編)(三尾裕子)
- http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/cafe/hokkien/data_f.html

4.3 レコード音源のデジタル公開

- (1) スース地方(モロッコ)の吟遊詩人による 20 世紀前半の音源のデジタル化(小田淳一, 堀内正樹)
- http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/chants_berberes.html

4.4 情報集積データベース

- (1) Center for Asian and African Sign Languages (AASL)(星泉, 亀井伸孝)
- <http://aasl.aacore.jp/wiki/>
- (2) リアルタイムフィールドワーク報告システムの構築(梅川通久)
- <https://rfr.aa-ken.jp/>

5. 地図

- (1) 多層ベースマップ(黒木英充)
<http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>
- (2) オスマン古地図(jpeg データ)(黒木英充)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/map/frameM.html>
- (3) オスマン古地図(Zooma データ)(黒木英充)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/gis/ottomanmaps/index.html>
- (4) フィールド 3D マッピングプロジェクト: 歴史と文化の時空間表現(椎野若菜)
<http://aacore.cloc.jp/mosaic/>

6. 言語学習・語学教材

- (1) ベンデ語の語学教材("Tusahule Sibhende" (2015))のマルチメディア(Web)版の作成(阿部優子)
<https://bendeproject.aa-ken.jp/> [30,814 件/年]
- (2) ビルマ語学習のためのテキスト(澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/oldtexts-sjis.html>
- (3) ビルマ文字のローマ字転写方式(澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman.pdf>
- (4) デーヴァナーガリー文字の発音と書き順(町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/grammatology/devanagari/dvngtr_top_j.htm
- (5) ヒンディー語の文字転写規則(町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/dv_trans/dv_tr_j.htm
- (6) こうすれば話せる CD ヒンディー語(町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/asahi/as_top_j.htm
- (7) エキスプレスヒンディー語(町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/express_hindi/ex_top_j.htm
- (8) ヒンディー語オノマトペ(擬態語・擬声語)(町田和彦)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/onoma.htm>
- (9) ヒンディー語: 動物の名前とその鳴き声(町田和彦)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/onoma.htm>
- (10) チベット語会話(星泉)
<https://star.aa-ken.jp/kaiwa/>

7. 研究ツール

- (1) 【継続】アラビア文字紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラムの公開(高松洋一)
<http://coe.aa.tufs.ac.jp/abjad/JP/> [19,172 件/年]
- (2) アラビア文字紀年銘変換プログラム(高松洋一)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/tarih.html>
- (3) 全文検索システム(町田和彦)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/server/fts.htm>

- (4) 多重置換システムの構築(町田和彦)
http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_02.html
- (5) ヒンディー語・ウルドゥー語の形態素自動解析(町田和彦, 萩田博, 萬宮健策)
http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_08.html
http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/_09.html
- (6) ヒンディー語・ウルドゥー語の語彙属性自動解析(町田和彦, 萩田博, 萬宮健策)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/etym_hirdu/2016.htm
- (7) 「AjaxIME」(多言語・多文字文字入力システム)(町田和彦)
http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/AjaxIME/AjaxIME_09.html
- (8) 多言語入力用インプットメソッド(IME) AAA+(町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/gicas/ASTI/AAA/info/info_j.htm
- (9) Workbench for Indic Scripts(町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/gicas/ASTI/workbnch/cl_dn_pt.htm
- (10) AA 研辞書データベースの WebAPI 提供への試み(松田訓典)
<https://ircdict.aa-ken.jp/>
- (11) 言語調査票のデジタル化(町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA_2000.html
- (12) タミル語 2000 語(町田和彦)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA_2000.html
- (13) 言語調査票(峰岸真琴)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm
- (14) Myanmar Text Converter(澤田英夫)
<http://myanmarconv.aa-ken.jp/myanmarconv/>
- (15) ビルマ文字のローマ字転写方式(澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman.pdf>
- (16) GIS を用いた認知地図の解析の試み(河合香吏)
http://irc.aa.tufs.ac.jp/gis/gis_project.html

8. 研究者情報

- (1) 【継続】フィールドネット(フィールドサイエンス企画研究センター)
<https://fieldnet.aa-ken.jp> [152,458 件/年]
- (2) 国際学術研究調査関係研究者データベース(海外学術調査総括班)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gistr/drosrp.html>

9. 企画展アーカイブ

- (1) 【新規】祈りにつながるイスラーム: エチオピア西部の信仰とその歴史
<http://www.aa.tufs.ac.jp/islam.ethiopia/index.html>
- (2) チベット牧畜民の仕事展(星泉ほか)
<http://tibetanpastoralists.blogspot.jp/>

- (3) アジア諸文字のタイプライター展(荒川慎太郎)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/asiatypewriter2015/>
- (4) カイロの肖像・19世紀(黒木英充)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/kairo/>
- (5) 中東古地図遊覧(黒木英充)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/mapex2013/index.html>
- (6) 静謐なる聖地(黒木英充)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/paleb2014/>
- (7) スタジオ・フォトグラフィ・アズ・ア・ドリームマシン 夢を創る機械としてのスタジオ写真 ケニアのスタジオ写真家たち 1912-2001(椎野若菜, 石川博樹)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/dream-machine/>
- (8) 豊穰なる埃及絵画展 エジプト学者プリス・ダヴェンヌが描いたナイル流域の人びと(高松洋一, 飯塚正人)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/egypt/>
- (9) 中国古文字 図版にみる先秦漢字の芸術と歴史(陶安あんど)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/komonji/>
- (10) 鮮烈なる阿富汗 一八四八 石版画にみるアフガニスタンの風俗と習慣(近藤信彰)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/afghan/>
- (11) 好奇字展 漢字と東アジアの文字周遊(荒川慎太郎)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/kanji/>
- (12) 写真展「古都バガン あまたなる仏塔の郷へ」(澤田英夫)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/oldbagan/>
- (13) 臺灣資料: テキスト・音・映像で見る台湾 ～一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として(三尾裕子ほか)
<http://www.gicas.jp/taiwan/>
- (14) アラビア文字の旅(町田和彦)
<http://www.gicas.jp/a-moji/index.html>
- (15) アサバスカンリバイバル(呉人徳司, 中山俊秀ほか)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/athabaskan/>
- (16) アジア文字曼陀羅～インド系文字の旅(町田和彦ほか)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/I-moji/>

II-4.4.3 公開講座の実施, 外部公開講座への講師派遣

講演: 「コミュニケーションと仕事の仕方としての英語」
講師: 中山俊秀

- 開催日: 2017.4.
会場等: 布池外語専門学校
- 講演: 「チベット映画人のリーダー:ペマ・ツェテンとソントルジャ」
講師: 星泉
開催日: 2017.4.15.
会場等: 『『草原の河』公開記念 TUFs Cinema チベット映画特集 ～ソントルジャとの出会い～』
- 講演: 「東北チベットの暮らしとソントルジャの世界」
講師: 星泉
開催日: 2017.4.22.
会場等: 『『草原の河』公開記念 TUFs Cinema チベット映画特集 ～ソントルジャとの出会い～』
- 講演: 「ヤクとミルクをめぐる冒険:「チベット牧畜民の一日」上映とトーク」
講師: 星泉
開催日: 2017.5.13-14.
会場等: 吉祥寺キチム
- 講演: 「チベット文学に草原の香りを感じて」
講師: 星泉
開催日: 2017.5.14.
会場等: 「ヤクとミルクをめぐる冒険」, 吉祥寺キチム
- 講演: 「ベビーを連れてアフリカへ」
講師: 椎野若菜
開催日: 2017.5.20.
会場等: FENICS サロン@信州大学「フィールドワーカーとライフイベント:アフリカ編」
- 講演: 「子どもの成長とともに flexible にフィールドを変える?!」
講師: 椎野若菜
開催日: 2017.5.27.
会場等: フィールドワーカー (FENICS) サロン
- 講演: 「イスラム情勢」
講師: 飯塚正人
開催日: 2017.6.
会場等: 警部任用科本課程第 49 期研修
- 講演: 「「研究者」というキャリアとこれからのキャリア作り」

講師: 中山俊秀
開催日: 2017.6.
会場等: キャリアガイダンス

講演: 「ヤクとミルクをめぐる冒険:「チベット牧畜民の一日」上映とトーク」
講師: 星泉
開催日: 2017.6.17-18.
会場等: 曙橋タンデレ

講演: 「世界の子育てから文化を考えるーアフリカとアジアに焦点をあててー第3弾 子連れフィードワーカーが見た世界の子育て」
講師: 椎野若菜
開催日: 2017.6.18.
会場等: 第13回 まちのカルチャーカフェ, シャトー小金井 Codolabo Studio.

講演: 「ツェラン・トンドゥブ邦訳作品集『闘うチベット文学 黒狐の谷』をめぐる」
講師: 星泉
開催日: 2017.6.2.
会場等: 「チベット文学ナイト 黒狐の夜」, 神保町サロンド富山房 Folio.

講演: 「イスラム世界を理解する」
講師: 飯塚正人
開催日: 2017.7.
会場等: 第52回法務省入国管理局関係職員特別科(難民調査官)研修

講演: “Iranshenasi dar zhapon: Tahqiqat-e tarikh va jame`e-shenasi”
講師: 近藤信彰
開催日: 2017.7.14.
会場等: Bozorgdasht-e shastmin salgard-e emza-ye movafeqatname-e farhangi beyn-e iran va zhapon: seminar-e takhassosi-e iranshenasi, Embassy of the Islamic Republic of Iran

講演: 「ん!？」
講師: 青井隼人
開催日: 2017.7.15.
会場等: ニホンゴ探検 2017「ことばのミニ講義」

講演: 「イスラーム教徒の考え方と思いを知るために」
講師: 飯塚正人
開催日: 2017.8.

- 会場等: 東進ハイスクール「大学・学部研究会」
- 講演: 「イスラム情勢」
 講師: 飯塚正人
 開催日: 2017.9.
 会場等: 警部任用科本課程第 50 期研修
- 講演: 「日本中東学会第 23 回公開講演会 中東の戦争と平和 ヒロシマから考える」
 講師: 黒木英充
 開催日: 2017.9.
 会場等: 日本中東学会
- 講演: 「マダガスカル人はどのようにしてマダガスカル人となるのか? —通過儀礼から見たマダガスカル人の一生—」
 講師: 深澤秀夫
 開催日: 2017.9.
 会場等: 文化講演会
- 講演: 「ヤクとミルクをめぐる冒険:「チベット牧畜民の一日」上映とトーク」
 講師: 星泉
 開催日: 2017.10.13.
 会場等: 小諸エコビレッジ キキソソチベットまつり
- 講演: 「チベット文化講座:映画から読み解くチベットの人びとの暮らしと信仰」
 講師: 星泉
 開催日: 2017.10.14.
 会場等: ぎふアジア映画祭
- 講演: 「現代エジプトにおける結婚の手続き」
 講師: 竹村和朗
 開催日: 2017.10.22.
 会場等: 「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的・総合的研究」公開セミナー「イスラーム世界の結婚最前線」, 北九州男女共同参画センター
- 講演: “On Some Typological Characteristics and Their Group-Internal Variation in Kilimanjaro Bantu Languages”
 講師: 品川大輔
 開催日: 2017.10.31.
 会場等: Department of Linguistics, SOAS: Linguistics Departmental Seminar Series, SOAS, University

of London

講演: 「イスラム世界を理解する」

講師: 飯塚正人

開催日: 2017.11.

会場等: 第25回法務省入国管理局関係職員高等科研修

講演: 「マダガスカルから見えてくるもの マダガスカルで考えたこと」

講師: 深澤秀夫

開催日: 2017.11.

会場等: めぐるシティカレッジ

講演: 「イスラム情勢」

講師: 飯塚正人

開催日: 2017.12.

会場等: 警部任用科本課程第51期研修

講演: “Nhin lai chuyen di tham Trung Quoc va Lien Xo cua Chu tich Ho Chi Minh vao dau nam 1950”

講師: 栗原浩英

開催日: 2017.12.16.

会場等: Vietnam Japan University

講演: 「サルをみる、ヒトをみる(ヒトとサル、親と子、そしてベッド)」

講師: 椎野若菜

開催日: 2017.12.3.

会場等: エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ連続上映, ポレポレ東中野

講演: “Islamic Law and Qajar Society”

講師: 近藤信彰

開催日: 2017.12.7.

会場等: Iranian Studies Initiative at NYU. Hagop Kebrokian Center for Near East Studies, New York University

講演: 「エルサレム大使館移転問題とパレスチナ・イスラエル情勢」

講師: 錦田愛子

開催日: 2017.

会場等: 中東情勢研究会, 国際情勢研究所

講演: 「パレスチナの今を考える」

- 講師: 錦田愛子
開催日: 2017.
会場等: パレスチナカフェ 2017 in 小金井「パレスチナの今を映画とトークで」
- 講演: 「子育てフィールドワーカーのロールモデルを探る: 椎野の場合」
講師: 椎野若菜
開催日: 2018.1.20.
会場等: FENICS サロン「子育てフィールドワーカーのロールモデルを探る」
- 講演: 「チベットのことばと物語世界」
講師: 星泉
開催日: 2018.1.27.
会場等: 「チベットの文化に触れてみる」講演会
- 講演: 「世界を揺るがす中東の今」
講師: 飯塚正人
開催日: 2018.2.
会場等: 茨城県民大学講座
- 講演: 「イスラム世界を理解する」
講師: 飯塚正人
開催日: 2018.2.
会場等: 第15回法務省入国管理局関係職員専攻科研修
- 講演: 「中東からヨーロッパへ——移民／難民の現状」
講師: 錦田愛子
開催日: 2018.2.
会場等: 府中市「国際理解を深めるリレー講義～中東の現在～」
- 講演: 「美味しいぜ！マダガスカル料理 食事と料理を通して見るマダガスカルの人びとの生活と文化」
講師: 深澤秀夫
開催日: 2018.2.
会場等: 文化講演会
- 講演: 「世界のことばの多様性と北米先住民のことば」
講師: 中山俊秀
開催日: 2018.2.7.
会場等: 東京都府中市教養セミナー・東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フ

「ワールド言語調査覚え書き」

講演: 「ミャンマー・カチン州のことば」

講師: 澤田英夫

開催日: 2018.2.14.

会場等: 東京都府中市教養セミナー・東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—ワールド言語調査覚え書き—」

講演: 「中国東北部でことばを調べる—中国語以外のことば」

講師: 山越康裕

開催日: 2018.2.21.

会場等: 東京都府中市教養セミナー・東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—ワールド言語調査覚え書き—」

講演: 「日本にもある知らない言語—琉球列島のことば—」

講師: 青井隼人

開催日: 2018.2.28.

会場等: 東京都府中市教養セミナー・東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—ワールド言語調査覚え書き—」

講演: 「イスラム情勢」

講師: 飯塚正人

開催日: 2018.3.

会場等: 警部任用科本課程第 52 期研修

講演: 「シリア内戦と今後の中東」

講師: 黒木英充

開催日: 2018.3.

会場等: 調布市北公民館 平和講演会

講演: 「ロヒンギャ難民の現状と支援—私たちにできることは」

講師: 杉江愛

開催日: 2018.3.4.

会場等: ロヒンギャ難民問題講演会, カトリック膳棚教会

講演: “Singapore as a Centre of the Malay Media Space during the Colonial Period”

講師: 坪井祐司

開催日: 2018.3.8.

会場等: National Library of Singapore

II-4.5 公共的利用

II-4.5.1 共同利用スペース等の稼働状況

セミナー室(301)

【共同利用・共同研究課題研究会】

2017/04/21(金)～22(土)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第1回研究会
2017/06/09(金)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第2回研究会
2017/06/23(金)～24(土)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第3回研究会
2017/07/14(金)～16(日)	2017年度史料講読研修プレミートイグ/ 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第4回研究会
2017/10/06(金)～07(土)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第5回研究会
2017/10/20(金)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第6回研究会
2017/11/10(金)～11(土)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第7回研究会
2017/11/24(金)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第8回研究会
2017/12/08(金)～10(日)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第9回研究会
2017/12/10(日)	共同利用・共同研究課題「バントウ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」第5回研究会
2017/12/22(金)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第10回研究会
2018/01/12(金)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第11回研究会
2018/01/26(金)～27(土)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第12回研究会
2018/02/02(金)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第13回研究会
2018/02/23(金)～25(日)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究(3)」第14回研究会
2018/03/16(金)～17(土)	共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中

- 2018/03/23(金) 国古代簡牘の横断領域的研究(3)第15回研究会
 共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国
 国古代簡牘の横断領域的研究(3)第16回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2017/05/27(土) リンディフォーラム “Questions under Discussion in Austronesian corpus data”
 2017/07/30(日) 「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」後継プロジェクトのためのプレミーティング
 2017/08/19(土) 国際シンポジウム「アフリカにおける芸術と情動」
 2017/11/18(土)～19(日) 言語研修ジャワ語フォローアップミーティング
 2017/12/16(土) 中東イスラーム研究拠点「政治変動研究会」

小会議室(302)

【共同利用・共同研究課題研究会】

- 2017/05/13(土)～05/14(日) 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」第1回研究会
 2017/07/22(土) 共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」第4回研究会
 2017/07/23(日) 共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」第4回研究会
 2017/10/01(日) 共同利用・共同研究課題「エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集研究」第1回研究会
 2017/10/07(土) 共同利用・共同研究課題「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」第6回研究会
 2017/12/23(土) 共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」第5回研究会
 2018/03/24(土) 共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」第6回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2017/06/28(水) 南アジアのフロンティアを再考する
 2017/11/26(日) 2017年度文化/社会人類学セミナー

大会議室(303)

【共同利用・共同研究課題研究会】

- 2017/08/05(土)～06(日) 共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」第6回研究会
 2017/10/07(土) 共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 —音韻・形態統語・意味の統合的研究—」第2回研究会
 2017/11/25(土) 共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」第1回研究会

- 2017/12/16(土)～17(日) 共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」第7回研究会
 2018/01/20(土)～21(日) 第10回オスマン文書セミナー／共同利用・共同研究課題「オスマン文書史料の基礎的研究」第2回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2017/07/01(土) 海外学術調査フォーラム
 2017/07/15(土) FIELDPLUSトークイベント「砂漠の狩人の半世紀:ブッシュマンの伝統と変容」
 2017/09/14(木) 中東☆イスラーム教育セミナー
 2017/12/01(金) 科研「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」第一回領域会議
 2017/12/02(土) 公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」
 2018/02/17(土) 交歓と境界——東ユーラシア, モンゴルとテュルクにおける宴会・酒・ことばをめぐって
 2018/03/03(土) 中東イスラーム研究拠点国際ワークショップ「中央アジアから中東への移民:1940-50年代の新疆難民の事例から」
 2018/03/09(金) 講演会:マルタ報道写真家写真展「エクソダス—地中海を渡る脱出—」

マルチメディア会議室(304)

【共同利用・共同研究課題研究会】

- 2017/06/03(土)～04(日) 共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究」第1回研究会
 2017/06/11(日) 共同利用・共同研究課題「[アルタイ型]言語に関する類型的研究」第7回研究会
 2017/06/17(土) 共同利用・共同研究課題「『プレゼンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」第6回研究会
 2017/07/02(日) 共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」第6回研究会
 2017/07/15(土) 共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第4回研究会
 2017/07/22(土) 共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相—音韻・形態統語・意味の統合的研究—」第1回研究会
 2017/10/07(土)～08(日) 共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究」第2回研究会
 2017/12/02(土) 共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」第7回研究会
 2017/12/03(日) 共同利用・共同研究課題「[アルタイ型]言語に関する類型的研究」第8回研究会
 2017/12/16(土) 共同利用・共同研究課題「「わざ」の人類学的研究—技術, 身体, 環境(「もの」の人類学的研究(3))」第2回研究会
 2017/12/17(日) 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)—紛争と共存のダイナミクス」第3回研究会

- 2018/02/11(日) 共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る (1):文法の多重性と分散性」第2回研究会
- 2018/02/17(土)～18(日) 共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1:文字学に関する用語・概念の研究」第3回研究会
- 2018/03/03(土)～04(日) 国際シンポジウム“Current Topics in Turkic Linguistics” / 共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 —音韻・形態統語・意味の統合的研究—」第3回研究会
- 2018/03/06(火)～07(水) 共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第5回研究会
- 2018/03/18(日) 共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」第8回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2017/06/15(木) AA 研フォーラム
- 2017/06/25(日) 国際シンポジウム「芸術と障害:アフリカとアジアの事例をめぐって」
- 2017/07/18(火) リンディフォーラム:特任研究員研究発表会
- 2017/08/04(金) AA 研フォーラム:言語研修(ジャワ語)文化講演「ジャワ語文学の歴史の概要」
- 2017/08/22(火) AA 研フォーラム:言語研修(ジャワ語)文化講演「ジャワの暦と占い」
- 2017/10/24(火) リンディフォーラム:北方言語研究講演会
- 2017/10/27(金) フィールドサイエンス・コロキウム 2017 年度第1回ワークショップ「リスク・ハザード・レジリエンス」
- 2017/11/02(木) 平成29年度ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)「女性研究者による国際共同研究」/「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服:人類の未来を展望する総合的地域研究, ジェンダー・セクシュアリティ班 第五回 研究会
- 2017/11/04(土)～05(日) 急速に発展/変化をとげるアジア・アフリカ諸社会における経済格差, 都市化, そして紛争経験後に直面する家族の変容
- 2017/11/07(火) 情報資源利用研究センター(IRC)設立20周年記念ワークショップ「アーカイブズ学の現状 —研究資料の保全と利活用を目指して—」
- 2017/11/17(金) 情報資源利用研究センター(IRC)設立20周年記念国際ワークショップ「インド洋レユニオン島の音楽と民話」
- 2017/11/26(日) 2017年度文化/社会人類学セミナー
- 2017/12/06(水) フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「フィールドノート(1):調査目的に応じたノートの工夫」
- 2017/12/09(土) 情報資源利用研究センター(IRC)設立20周年記念シンポジウム「人文知の資源化とアーカイビング 情報を育て, 活かす」
- 2018/01/18(木) 全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」第2回合同研究集会
- 2018/01/20(土) 2017年度フィールドネット・ラウンジ企画セミナー 草の根から地域住民が生

- み出す「食」と「農」の空間 ーどうやって見つけ、調べるか？
- 2018/01/25(木) フィールド言語学ワークショップ:第 12 回文法研究ワークショップ:「場所」を項とする動詞
- 2018/02/02(金)～04(日) 言語研修チャム語フォローアップミーティング
- 2018/02/13(火)～14(水) フィールド言語学ワークショップ:第 13 回文法研究ワークショップ:会話データに基づく文法研究
- 2018/02/15(木) 情報資源利用研究センター(IRC)設立 20 周年記念セミナー「人文情報学の現在」
- 2018/02/24(土) 文法と言語使用における定型表現の位置づけ
- 2018/03/08(木) AA 研フォーラム
- 2018/03/09(金) リンディフォーラム: Talk on Turkish Sign Language
- 2018/03/10(土) 日本文化人類学会関東地区研究懇談会「『日本人を演じる』の衝撃ー美術家の問い, 人類学者の応答」
- 2018/03/16(金) フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「フィールドノート(1):調査目的に応じたノートの工夫②」
- 2018/03/19(月)～23(金) SCOPIC ワークショップ
- 2018/03/27(火) 『チベット牧畜文化辞典』(パイロット版)リリース記念イベント
- 2018/03/27(火)～28(水) 『チベット牧畜文化辞典』パイロット版公開記念ワークショップ「『チベット牧畜文化辞典』の未来を語る」/共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容へドキュメンタリー言語学の手法に基づいて～」第 3 回研究会

マルチメディアセミナー室(306)

【共同利用・共同研究課題研究会】

- 2017/06/09(金) 共同利用・共同研究課題「「もの」の人類学的研究(2)人間/非人間のダイナミクス」成果とりまとめ
- 2017/06/10(土) 【成果取りまとめ】共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」成果とりまとめ
- 2017/06/11(日) 共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生ー情動・思考・アートの方法論的接合」第 1 回研究会
- 2017/07/09(日) 共同利用・共同研究課題「「わざ」の人類学的研究ー技術, 身体, 環境(「もの」の人類学的研究(3))」第 1 回研究会
- 2017/07/15(土) 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第三期)ー紛争と共存のダイナミクス」第 1 回研究会
- 2017/07/16(日) 共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加 ー移民/難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究ー」成果取りまとめ
- 2017/07/22(土)～23(日) 共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究(4)」第 6 回研究会
- 2017/09/16(土) 共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生ー情動・思考・アートの方

- 法論的接合」第2回研究会
- 2017/10/07(土)～08(日) 共同利用・共同研究課題「青海チベット牧畜民の伝統文化とその変容～ドキュメンタリー言語学的手法に基づいて～」第2回研究会
- 2017/10/28(土)～29(日) 共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」第6回研究会
- 2017/12/19(火)～21(木) 国際ワークショップ “Varieties of Malayic Languages” / 共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第3回研究会
- 2018/02/17(土) 共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為(第二期)」第3回研究会
- 2018/03/17(土)～18(日) 共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究(4)」第8回研究会
- 2018/03/27(火) 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2)ジャワのイスラーム化再考」第7回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2017/07/05(水) フィールド言語学ワークショップ:テクニカル・ワークショップ「アノテーションソフト ELAN の基礎」
- 2017/08/26(土) AA 研フォーラム:言語研修(ハンガリー語)文化講演「ハンガリー民族舞踊」
- 2017/11/26(日) 2017年度文化/社会人類学セミナー
- 2017/12/16(土)～17(日) 中東☆イスラーム研究セミナー
- 2018/02/16(金) 2017年度第2回 フィールドサイエンス・コロキウム「フィールドワークをフィールドワークする」
- 2018/03/26(月) リンディフォーラム:オーストロネシア諸語とパプア諸語のドキュメンテーションと分析
- 2018/03/29(木) 「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」研究員発表会

研修室(405)

【共同利用・共同研究課題研究会】

- 2017/04/23(日) 共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第1回研究会
- 2017/10/07(土)～08(日) 共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る(1):文法の多重性と分散性」第1回研究会
- 2017/10/15(日) 共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」第2回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2018/03/25(日)～29(木) メエ語調査

本郷サテライト

【共同利用・共同研究課題研究会】

- 2017/07/08(土)～09(日) 共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築: 在来農業革命の視点から」第4回研究会
- 2017/10/14(土) 共同利用・共同研究課題「近世南アジアの文化と社会: 文学・宗教テキストの通言語的比較分析」第2回研究会
- 2017/12/02(土)～03(日) 共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築: 在来農業革命の視点から」第5回研究会
- 2018/03/26(月) 共同利用・共同研究課題「近世南アジアの文化と社会: 文学・宗教テキストの通言語的比較分析」第3回研究会
- 2018/03/28(水) 共同利用・共同研究課題「エチオピア・ジンマ王国伝来イスラーム祈禱集研究」第2回研究会

【シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他】

- 2017/11/25(土) 第六回 日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承—少数言語(ダグル語)を中心に」
- 2017/12/23(土) 中東イスラーム研究拠点 ジョナサン・ブラウン氏公開講演会「現代世界におけるハディース研究の意義」
- 2018/02/04(日) 国際ワークショップ Early Photography in Iran
- 2018/02/11(日) 言語研修シベ語フォローアップミーティング／第7回シベ語研究会

II-4.5.2 文献資料室の利用状況

2017年度 来館数(単位: 人)

4月 196	7月 236	10月 234	1月 265	
5月 151	8月 226	11月 180	2月 165	
6月 299	9月 156	12月 242	3月 119	総計 2,268

アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題
2017 年度年次報告書

2019 年 3 月 7 日発行
発行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
